

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 6

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書 6

— 松本市内 その3 —

下 神 遺 跡

本 文 編

1 9 9 0

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書 6

— 松本市内 その3 —

下 神 遺 跡

本 文 編

1 9 9 0

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター



遺跡遠景



南部Ⅲ地区全景



北部Ⅰ地区全景

序

松本平の中央部を北進する中央自動車道長野線は、明科町から進路を東に向け筑摩山地を抜けて善光寺平へ入っていきます。この間塩尻北インターチェンジから梓川サービスエリアまでの約10kmが松本市内にかかり、11の遺跡が発掘調査されました。そのなかの1遺跡である下神遺跡からは、遺構、遺物が多数検出され、貴重な出土品も数多く発見されております。

調査成果の概要については、現地説明会・出土遺物展示会・(財)長野県埋蔵文化財センター年報・埋文ニュース等によって公開してまいりましたが、その後の整理によって松本平の沖積地に広範に亘って立地した古代集落の一つであることが明らかにされました。

本遺跡は、松本市を東西に分けて北流する奈良井川が鎖川と合流する地点の南に位置し、8世紀初めから9世紀後半にかけて短期間居住域として利用された遺跡として注目されます。特に、本遺跡が最盛期となります9世紀初め、方形に巡る二重の堀に囲まれた中に一辺10mをこす大型の竪穴住居址と、付属する竪穴住居址・掘立柱建物址が立つ地区の様子は、有力な集団により占地されていたことを物語っており、下神遺跡の性格を示すうえで貴重な事実が提示されました。また、県下では例を見ないほど多量の墨書土器が出土しており、同じ文字をもつ集団が集落を営んでいたことも分かってきております。

「草茂」と書かれた墨書土器の発見は、これまで『多武峰略記』でその存在が知られるだけでした信濃の初期荘園である「草茂庄」の存在を実際のものとして位置付けた第1級の資料といえましょう。また、漆紙文書や萬年通寶・神功開寶等の銭貨、緑釉陶器等多くの遺物からも下神遺跡の性格を知ることができます。

最後になりましたが、調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深いご理解とご協力をいただきました、日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、長野県高速道局、同松本高速道事務所、松本市、同教育委員会、松本平農業協同組合、地区被買収(者)組合等の関係諸機関、発掘現場や記録整理作業に従事された多くの皆さん、直接のご指導・ご助言を賜った、長野県教育委員会文化課、発掘調査を実施した(財)長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成2年3月20日

(財)長野県埋蔵文化財センター

理事長 樋口 太郎

例 言

- 1 本書は中央道長野線建設工事にかかわる、松本市内・豊科町内12遺跡のうち、^{しもかん}下神遺跡(ESK)の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、松本市内にかかる遺跡を、古代から中・近世にかけての一連の遺跡群としてとらえ発掘調査を実施した関係から全遺跡にかかわる内容と考察編を1冊に、各遺跡編を6冊に分けて編集し、以下の構成をとる。松本市内その1－総論、松本市内その2－神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡、松本市内その3－下神遺跡(本書)、松本市内その4－南栗遺跡、松本市内その5－北栗遺跡、松本市内その6－三の宮遺跡、松本市内その7・豊科町内－南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡。
- 3 本書で使用した航空写真は、建設省国土地理院の許可を得て複製したものである。
- 4 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央道長野線平面図(1:1000)、松本市発行の松本市都市計画図(1:2500)をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の2万5千分の1、5万分の1の地形図を複製した。
- 5 本書及び松本市内・豊科町内遺跡に掲載した、実測図の縮尺・表現方法、時代・時期区分、遺構写真、遺構・遺物の分類は基準等は全冊統一してあり、その要点は凡例に示してある。
- 6 本書および松本市内・豊科町内遺跡報告書では以下の遺構記号を使用している。竪穴住居址－S B、掘立柱建物址－S T、柵址－S A、溝址－S D、土坑－S K、井戸址－S E、鍛冶址－S I、水田址－S L、畑・畠址－S N、自然流路－N R、不明遺構－S X。
- 7 本書で報告する内容については既に、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』『(財)長野県埋蔵文化財センター年報』2～4に調査概要を報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。
- 8 松本市教育委員会の調査した『松本市下神・町神遺跡』(1984)からの引用については調査地点名南田尻地籍(SKMT)、熊坂地籍(SKKS)、中道地籍(SKNM)、笹賀地籍(SKS)の記号を用いた。
- 9 発掘調査、報告書の作成に当たり、次の項目について、各氏に終始ご指導いただいた。
古代集落関係－小笠原好彦、中世集落関係－石井 進、竪穴住居址・掘立柱建物址－宮本長二郎、プラントオパール分析－藤原宏志、水田土壌－梅村 弘、古代集落・土器－吉岡康暢・桐原 健、人骨・獣骨鑑定－西沢寿晃、地形形成－小林 旬、炭化材鑑定・同定－中島豊志、須恵器・灰釉陶器－斉藤孝正、美濃須衛窯産須恵器－渡辺博人、条里遺構－井原今朝男・小穴芳実・小穴喜一、輸入陶磁器－森田 勉、古瀬戸系陶器－藤沢良祐、近世陶器－仲野泰裕、文字関係資料－平川 南、赤色顔料・漆の分析－永嶋正春、協力機関－松本市教育委員会・長野県遺跡指導委員会(順不同、敬称略)
特に平川 南氏には玉稿を賜り、付編として掲載させていただいた。
- 10 発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は巻末に一括して掲載してある。
- 11 註は欄外に、参考文献は巻末に一括した。
- 12 本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は(財)長野県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1) 遺構実測図

本文挿図 竪穴住居址・掘立柱建物址 1:60 住居址内施設・墓址・土坑 1:40

図 版 遺構図 1:120

(2) 遺物実測図等

土器・陶磁器 1:4 (大型品 1:4~1:8) 文字関係資料 1:3 墨書文字 1:2

土器拓影 1:3 金属製品 1:2 石器・石製品 1:6~2:3 銭貨拓影 2:3

(3) 遺物写真

土器・陶磁器 2:5 内耳鍋・常滑系甕 1:4 中世土器・陶磁器破片 1:2

鉄製品 1:2 銅製品・銭貨 1:1 石器・石製品 1:6~2:3

2 遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

(1) 縄文・弥生土器、石器……1から通し番号

(4) 文字関係資料……1から通し番号

(2) 古代土器……各遺構毎の通し番号

(5) 金属製品……1から通し番号

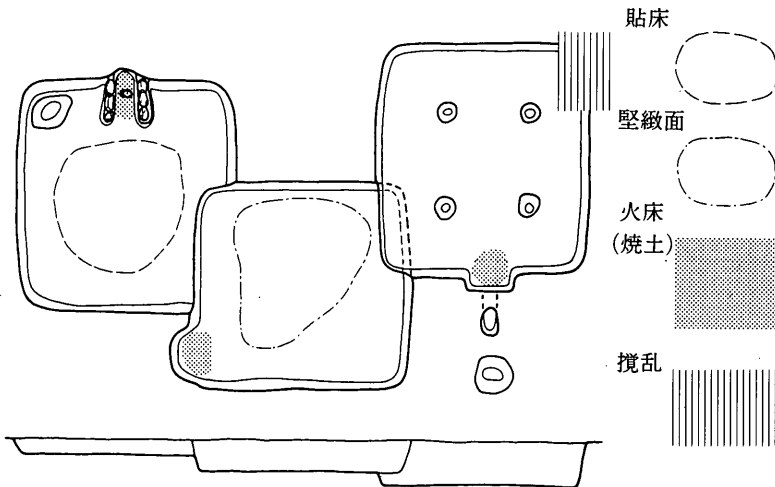
(3) 中・近世土器・陶磁器……1から通し番号

(6) 古代以降の石製品……1から通し番号

3 実測図中のスクリントーン等は以下の事項を表わしている。

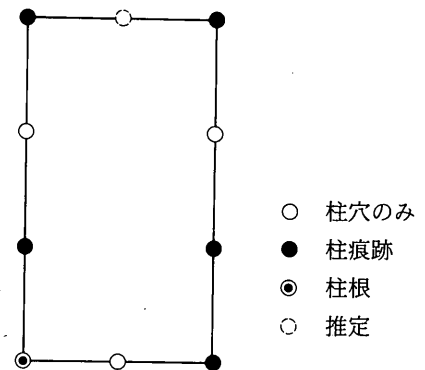
(1) 遺構

ア 竪穴住居址



イ 掘立柱建物址

本文中の模式図は、約1:200で以下の事項を表わしている。



(2) 遺物

ア 古代土器

① 実測図の断面は、黒色土器・赤彩土器を含む土師器—白抜き、須恵器・施釉陶器—黒塗り、輸入陶磁器—スクリントーンによって区別した。黒色処理・赤彩を施したものはその処理された器面の範囲に、漆・炭化物の付着については以下のスクリントーンにより表現してある。



② 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

イ 中・近世土器・陶磁器

① 実測図の断面は、土器—白抜き、陶器—黒塗り、輸入陶磁器—スクリントーンにより区別してある。

② 国産陶磁器の釉の種類は以下のスクリントーンにより区別してある。但し、灰釉は白抜きにした。




③ 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

ウ 金属製品

- ① 金属製品の形状はX線等の観察にもとづいており、錆・付着物によるふくらみは線の太さを落して表現してある。
- ② 断面図は、平面形状観察にさしわりのない範囲で平面図に組み入れてある。
- ③ 鉄製品、銅製品の断面図と、漆・炭化物の付着および木質部を以下のスクリーンパターンで表現してある。



エ 石器・石製品

① 打製石斧・磨石等の磨耗範囲は  で示し、砥石の使用面は、断面図に |← →| で示した。

オ 土製品

① 羽口のタール付着・ガラス状発泡範囲を 、被熱により変色した範囲を  で示した。

4 本書を含む松本市内・豊科町内遺跡報告書における遺構・遺物の分類、時期区分の要点は以下のように統一しており、ここで扱っていないものについては、各報文中で説明してある。詳細は「松本市内その1」第3章に記述してある。

(1) 時代・時期区分

時代区分は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、近・現代とし、古代を1～15期、中世を1～2期に時期区分した。

(2) 遺構

ア 竪穴住居址

- ① 主軸は、カマドの中心を通る竪穴住居址の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。ただし、住居址の隅にカマドを有するものや、カマドの見られない住居址については、東西方向の中軸線を主軸とした。住居址の規模は主軸と直交軸方向での床面の差渡しで測り、床面積はその二者の積をあてた。
- ② 平面形は「方形」「隅丸方形」「長方形1」「隅丸長方形1」「長方形2」「隅丸長方形2」および「不整形」に分けた。(隅丸)方形は主軸と直交軸方向の長さの差が10パーセント未満のもの、その差が10パーセント以上15パーセント未満のものを(隅丸)長方形1、15パーセント以上15パーセント以上のものを(隅丸)長方形2とした。
- ③ 古代住居址の規模については、時期別に、一辺の長さで以下のような6つの種類に分けた。

時期 \ 型	小型	中型1	中型2	大型1	大型2	超大型
1～4期	3 m強	4 m強	5 m位	6 m位	7 m位	8 m以上
5～15期	3 m以下	3 m～4 m弱	4 m～5 m弱	5 m強	6 m位	7 m～8 m以上

イ 掘立柱建物址

- ① 棟方向は、南北棟、東西棟と記してあるが、不明なものについては南北棟として記入した。
- ② 規模は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。
- ③ 柱間寸法は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を求め、最大と最小値について表示した。
- ④ 掘り方では、平面形については方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者の混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

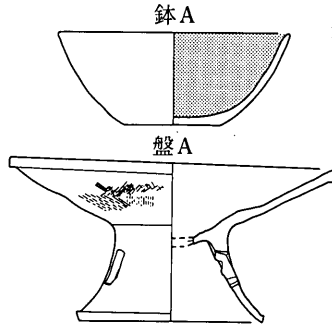
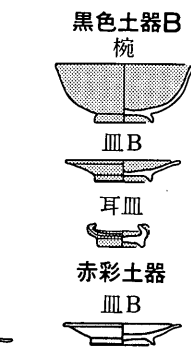
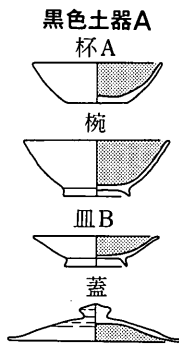
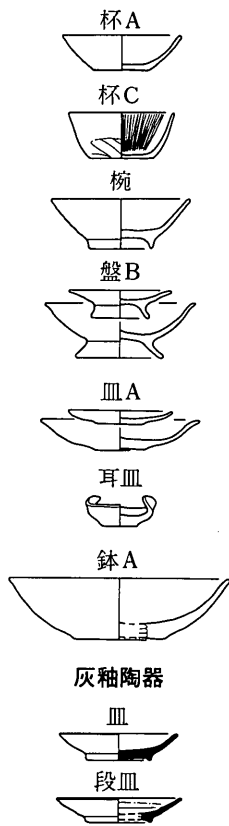
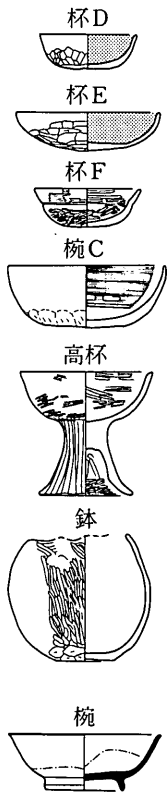
(3) 遺物

ア 古代土器の器種分類について

- ① 次ページに示す古代土器器種分類表は、本報告書における土器の器種の呼称を示したものである。報告をおこなう土器のうち、土器の器種分類に当たって出土例が少なく、将来、周辺遺跡の資料をも含め、資料の増加を待って細別名を決定すべきと判断したものについては、ここではあえて細別を行わず、通例の呼称に従っている。
- ② 器種分類の詳細、器種内の法量等による細別については、総論編で明らかにしている。

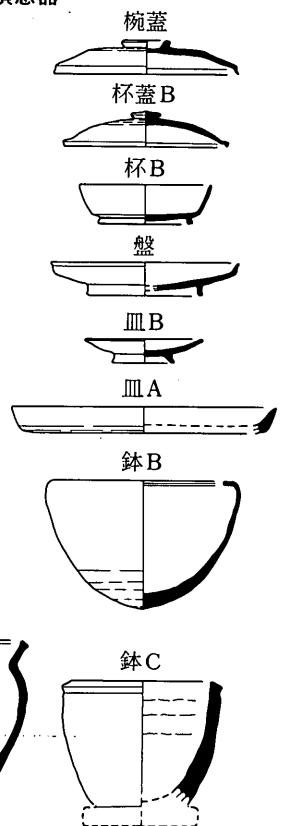
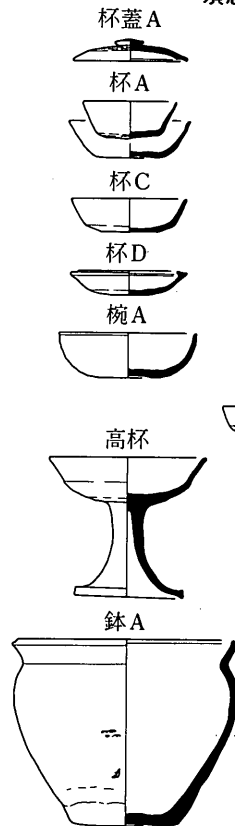
食器

土師器



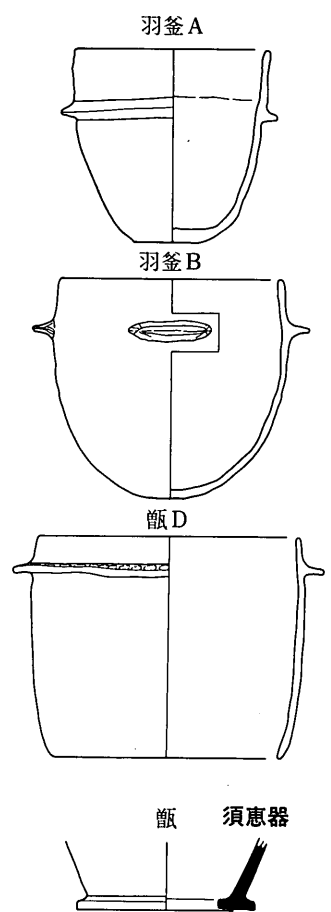
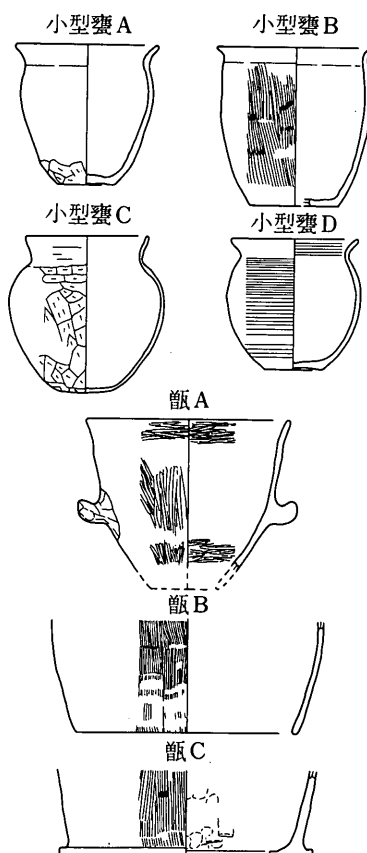
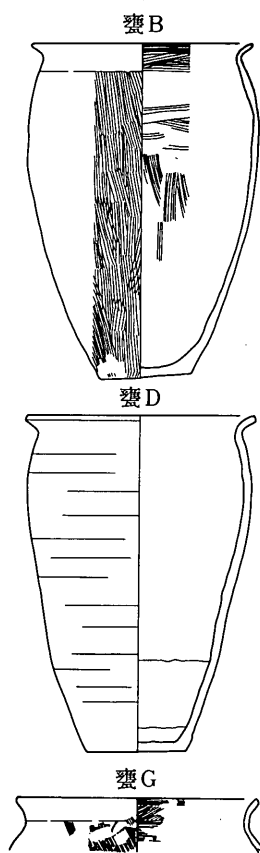
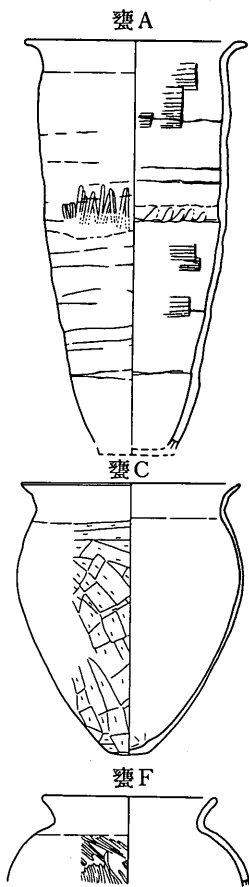
軟質須恵器
杯A

須恵器



煮炊具

土師器

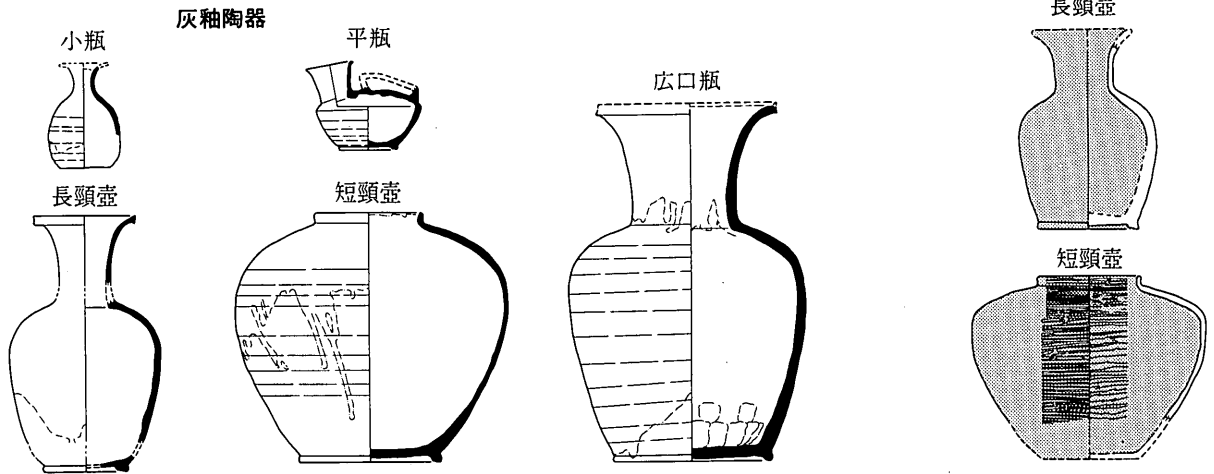
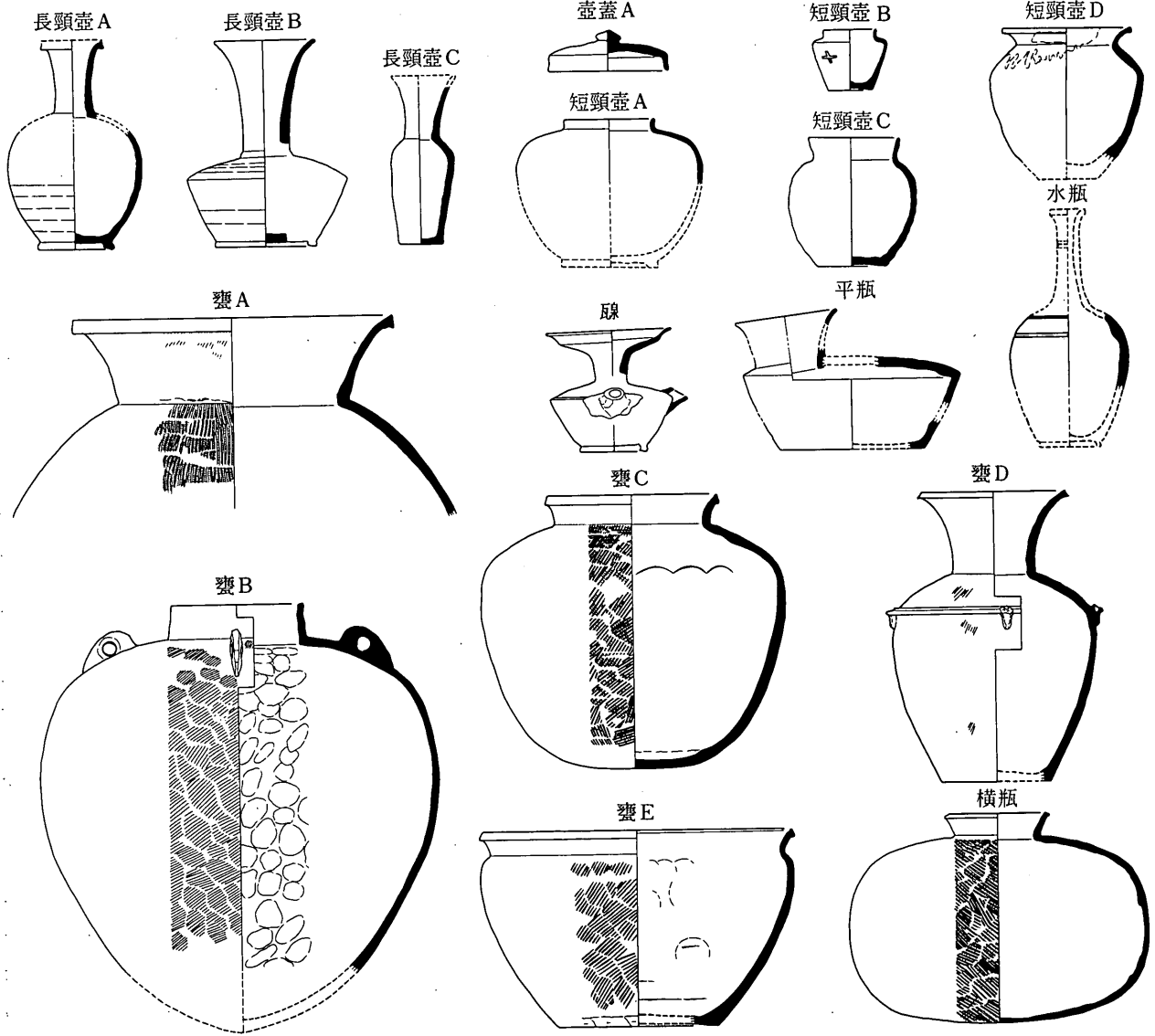


0 40cm

古代土器の器種分類(1)食器・煮炊具

貯 蔵 具

須恵器



0 40 cm

古代土器の器種分類(2)貯蔵具

期	土 師 器		須 恵 器		黒色土器A	土 師 器	下神遺跡の 代表的遺構	
	杯 F	杯D・E	杯 A	杯 A	杯 A	杯 A		
700	1							
	2						SB21	
	3							SB85
	4							SB84
800	5						SB126	
	6						SB92	
	7						SB97	
	8							
900	9							
	10							
	11							
	12							
1000	13							
	14							
	15							
	備考	非ロクロ調整 有稜杯	非ロクロ調整	ロクロ調整 回転ヘラ切り	ロクロ調整 回転糸切り	ロクロ調整 回転糸切り	ロクロ調整 回転糸切り	縮尺 1 : 10

古代土器時期区分の大略

イ 中世土器・陶磁器の分類

神戸遺跡から上手木戸遺跡を通して、出土した土器・陶磁器の主な器種内の分類と消長表を以下に示した。詳細は総論編で明らかにしている。

① 土師器皿

<手捏ね成形＝I類>

I A 1－口径約12.5cm以上、器高約2.5～3.5cmのもの。

2－口径約11.0～12.5cm未満、器高約2.0～3.5cmのもの。

3－口径約10.0～11.0cm未満、器高約2.5～3.5cmのもの。

B 1－口径約9.0～11.0cm、器高約1.5～2.5cm未満のもの。

2－口径約9.0cm以下、器高約1.0～2.0cmのもの。

<ロクロ成形＝II類>

II A－法量が口径約10.0～12.0cm、器高約2.0cm以上のもの。

B－法量が口径約7.0～10.0cm未満、器高約1.0～2.5cmのもの。

② 内耳鍋

I－口縁部を強く「く」状に外反させるもの。

II A－口縁部内面に明瞭な1条の工具痕を残すもの。

II B－口縁部内面に明瞭な2条の工具痕を残すもの。

II C－口縁部内面に明瞭な3条の工具痕を残すもの。

III－口縁部の断面がクランク状に外へ張り出すもの。

③ 常滑系の壺・甕類

I－頸部を緩く「く」状に反らせ、口縁端部を丸くおさめるもの。

II－口縁部断面が「L」状の受口状を呈するもの。

III－口縁部断面を「L」状あるいは「N」状をなし、縁帯が頸部に接着しないもの。

IV－口縁部断面を「N」状をなし、縁帯を頸部に接着させようとしているもの。

V－口縁部断面を「N」状をなし、縁帯を頸部に完全に接着させているもの。

④ 捏鉢

I－口縁端部をやや細く挽き出し、端部を面取りするもの。

II－器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部外面を面取りして尖らせるもの。

III－器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部を隅丸方形及び丸くまとめるもの。

IV－口縁端部から1～4cmくらい下をナデで器壁を薄くし、端部は丸くおさめているもの。

V－口縁端部から1～4cmくらい下をナデで器壁を薄くし、端部を角状にして端部中央に浅い溝を入れるもの。

VI－口縁端部から1～4cmくらい下を強くナデで器壁を薄くし、端部を丸くおさめて中央に溝を入れるもの。

⑤ 輸入陶磁器

横田賢次郎・森田勉氏の成果(1978)に負うところが大きく、特に青磁碗についてはそれに従って以下のように分類した。

A－同安窯系碗I類。 G－龍泉窯系碗I－6 a・b類。

B－同安窯系碗II類。 H－龍泉窯系碗III－2類。

C－龍泉窯系碗I－1・2・3類。 I－龍泉窯系碗I－1およびIII－1類。

D－龍泉窯系碗I－4類。 J－明代の所産で、外面上半に雷文施文のもの。

E－龍泉窯系碗I－5 a類。 K－明代の所産で、外面に片切彫りによる細蓮弁文施文のもの。

F－龍泉窯系碗I－5 b・c類。 L－明代の所産で、外面に線刻によって細蓮弁文を施すもの。

⑥ 古瀬戸系陶器と大窯製品の分類は、藤澤良祐氏(1982・1984、1986)に従い、山茶碗の分類は、斎藤孝正氏(1988)・田口昭二氏(1983)による。

各形態 消長表

	古代	中 世 1 期			中 世 2 期		近世
年 代	12C	13C	14C	15C	16C	17C	
土 師 器 皿	I A1・2? --- I B1? --- I B2-----	I A 3-----	II A --- II B ---		-----? -----?		
内 耳 鍋			I-----	II C----- II B-----	III-----		
捏 鉢	I-----	II----- III---	IV----- V----- VI---				
常 滑 系 甕	I----- II-----	III-----	IV-----	V-----			

本文目次

巻頭図版	1 遺跡遠景
	2 航空写真（北部Ⅰ地区）、航空写真（南部Ⅲ地区）

序
例言
凡例

第1章 遺跡の概観と調査の概要	1
第1節 遺跡の概観.....	1
第2節 調査の概要.....	1
1 調査の概要.....	1
2 調査の方法.....	2
3 調査の経過.....	2
第3節 基本層序と微地形.....	4
1 基本層序.....	4
2 遺構切り込み面の微地形.....	6
第2章 遺構	8
第1節 縄文時代の遺構.....	8
1 土坑.....	8
第2節 古代の遺構.....	9
1 竪穴住居址.....	9
2 掘立柱建物址.....	74
3 柵址.....	91
4 溝址.....	92
(1) 区画溝 (2) 溝址 (3) 溝址群	
5 土坑.....	112
6 不明遺構.....	119
第3節 中世以降の遺構.....	121
1 畠址.....	121
第3章 遺物	123
第1節 縄文時代の遺物.....	123
1 土器.....	123
2 石器.....	123
第2節 古代の遺物.....	124
1 古代の土器.....	124
(1) 古代の土器の概観 (2) 遺構出土の土器 (3) その他の土器	
2 文字関係資料.....	164
(1) 墨書土器 (2) 刻書土器 (3) 陶硯類	
3 金属製品.....	174
(1) 鉄製品・鉄滓 (2) 銅製品・銭貨	
4 石製品.....	177
5 土製品.....	177

第3節 中世以降の遺物	178
1 土器・陶磁器	178
2 金属製品	181
(1) 鉄製品 (2) 銭貨	
第4章 遺構・遺物の分析	182
第1節 遺構の分析	182
1 竪穴住居址	182
(1) 概観 (2) 規模 (3) カマド方向と軸規制 (4) カマド (5) 居住の空間利用と入口の推定	
(6) 遺物出土状況	
2 掘立柱建物址	196
(1) 概観 (2) 規模 (3) 軸規制 (4) まとめ	
3 区画	201
第2節 遺物の分析	202
1 下神遺跡における6・7期の土器様相	202
(1) 下神遺跡における各期・各地区の土器の構成	
(2) 北部I・II地区の6・7期の土器様相	
2 文字関係資料	209
(1) 墨書される土器と墨書部位 (2) 文字分類 (3) 墨書土器の時期別変遷	
(4) 墨書土器の分布 (5) 墨書土器と硯 (6) まとめ	
3 金属製品	217
(1) 鉄製品 (2) 銅製品	
4 生産関連の遺構と遺物	220
(1) 農業関連の遺構と遺物 (2) 鍛冶関連の遺構と遺物 (3) 漆関連の遺物	
第3節 集落の構造と変遷	224
1 古代遺構のグルーピングと概観	224
2 各群の関係	234
3 各群の変遷と消長	235
第4節 下神遺跡の諸問題	238
1 文献にみる「草茂庄」	238
2 SB97と下神遺跡をめぐる諸問題	239
第5章 結 語	242

参考文献一覧表

発掘調査及び執筆者の分担一覧

付表

付編1 平川 南 「下神遺跡出土の漆紙文書について」	(1)
2 平川 南 「下神遺跡出土の墨書土器について」	(3)

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|---------------------|------|----------------------|
| 第1図 | グリッド配置図 | 第45図 | SB111カマド実測図及び遺物出土状況図 |
| 第2図 | 土層分布図 | 第46図 | SB115カマド実測図 |
| 第3図 | SK415実測図 | 第47図 | SB116カマド実測図 |
| 第4図 | SB4実測図 | 第48図 | SB121実測図 |
| 第5図 | SB7・9実測図及びカマド実測図 | 第49図 | SB126実測図 |
| 第6図 | SB12カマド実測図 | 第50図 | SB130実測図 |
| 第7図 | SB13実測図 | 第51図 | SB136カマド実測図 |
| 第8図 | SB14遺物出土状況図 | 第52図 | SB136遺物出土状況図 |
| 第9図 | SB14カマド実測図 | 第53図 | SB140実測図 |
| 第10図 | SB20カマド実測図 | 第54図 | SB142カマド実測図 |
| 第11図 | SB24実測図 | 第55図 | SB143実測図及び遺物出土状況図 |
| 第12図 | SB26遺物出土状況図 | 第56図 | SB144カマド実測図 |
| 第13図 | SB29実測図 | 第57図 | SB145カマド実測図 |
| 第14図 | SB34実測図 | 第58図 | SB148遺物出土状況図 |
| 第15図 | SB38カマド実測図 | 第59図 | SB152礎出土状況図 |
| 第16図 | SB39実測図 | 第60図 | ST3・128実測図 |
| 第17図 | SB44カマド実測図 | 第61図 | ST5実測図 |
| 第18図 | SB50礎出土状況図 | 第62図 | ST6・8実測図 |
| 第19図 | SB52カマド実測図 | 第63図 | ST11実測図 |
| 第20図 | SB58実測図 | 第64図 | ST30実測図 |
| 第21図 | SB64実測図 | 第65図 | ST101実測図 |
| 第22図 | SB65実測図 | 第66図 | ST107実測図 |
| 第23図 | SB72遺物出土状況図 | 第67図 | ST108実測図 |
| 第24図 | SB76カマド遺物出土状況図 | 第68図 | ST111実測図及び須恵器甕A出土状況図 |
| 第25図 | SB74～78実測図 | 第69図 | ST121実測図 |
| 第26図 | SB78柱配置模式図 | 第70図 | ST123実測図 |
| 第27図 | SB82カマド実測図 | 第71図 | 区画溝土層図及び遺物出土状況図 |
| 第28図 | SB84遺物出土状況図 | 第72図 | 区画溝柵址模式図・区画溝遺物出土状況図 |
| 第29図 | SB85実測図 | 第73図 | SD7土層図 |
| 第30図 | SB88カマド実測図及び遺物出土状況図 | 第74図 | SD18土層図 |
| 第31図 | SB89実測図及び接合関係図 | 第75図 | SD18・36・42配置図 |
| 第32図 | SB92実測図及び遺物出土状況図 | 第76図 | SD45土層図 |
| 第33図 | SB93実測図 | 第77図 | SD100・104土層図 |
| 第34図 | SB96カマド実測図 | 第78図 | SD106土層実測図 |
| 第35図 | SB97石敷き施設遺物出土状況図 | 第79図 | SD108 1区土層模式図 |
| 第36図 | SB97鍛冶施設及び柱配置模式図 | 第80図 | SD108 1区礎出土状況 |
| 第37図 | SB97遺物出土状況図 | 第81図 | SD108 1区出土礎構成図 |
| 第38図 | SB97実測図（古段階） | 第82図 | SD108 3区遺物出土状況図 |
| 第39図 | SB97実測図（新段階） | 第83図 | SD108遺物出土状況図 |
| 第40図 | SB99遺物出土状況図 | 第84図 | SD108墨書土器分布図 |
| 第41図 | SB101カマド実測図 | 第85図 | SD109土層図 |
| 第42図 | SB107実測図 | 第86図 | SD137遺物出土状況図 |
| 第43図 | SB108カマド実測図 | 第87図 | 溝址群I配置図 |
| 第44図 | SB111実測図 | 第88図 | 溝址群II実測図 |

- 第 89図 溝址群III実測図
 第 90図 古代土坑法量分布図
 第 91図 I 群土坑実測図
 第 92図 II 群土坑実測図
 第 93図 III群土坑実測図
 第 94図 SX30遺物出土状況及び土器構成図
 第 95図 SX30実測図
 第 96図 SB 4 出土土器法量分布図
 第 97図 SB 6 出土土器法量分布図
 第 98図 SB21出土土器法量分布図
 第 99図 SB26出土土器法量分布図
 第100図 SB29出土土器法量分布図
 第101図 SB72出土土器法量分布図
 第102図 SB76出土土器法量分布図
 第103図 SB89出土土器法量分布図
 第104図 SB92出土土器法量分布図
 第105図 SB97上層出土土器法量分布図
 第106図 SB97下層出土土器法量分布図
 第107図 SB99出土土器法量分布図
 第108図 SB111出土土器法量分布図
 第109図 SB121出土土器法量分布図
 第110図 SB124出土土器法量分布図
 第111図 SB126出土土器法量分布図
 第112図 SB136出土土器法量分布図
 第113図 SB143出土土器法量分布図
 第114図 SB148出土土器法量分布図
 第115図 SB149出土土器法量分布図
 第116図 区画溝 I (南北溝) 1 層出土土器法量分布図
 第117図 区画溝 I (南北溝) 3 層出土土器法量分布図
 第118図 区画溝 I (東西溝) 1 層出土土器法量分布図
 第119図 SD108 1 区 2 層出土土器法量分布図
 第120図 SD108 1 区 3 層出土土器法量分布図
 第121図 SD108 3 区 2 層一括出土土器法量分布図
 第122図 SD108 3 区出土土器法量分布図
 第123図 SD117出土土器法量分布図
 第124図 SD137出土土器法量分布図
 第125図 SX30 1 区出土土器法量分布図
 第126図 墨書土器出土文字割合
 第127図 『甗』墨書土器筆順
 第128図 墨書土器文字集成 1
 第129図 墨書土器文字集成 2
 第130図 墨書土器文字集成 3
 第131図 墨書土器文字集成 4
 第132図 墨書土器文字集成 5
 第133図 墨書土器文字集成 6
 第134図 石錘長幅比及び重量分布
 第135図 中・近世の土器・陶磁器
 第136図 中・近世の鉄製品・銭貨
 第137図 時期別の竪穴住居址規模分布図
 第138図 時期別の竪穴住居址主軸方向分布図
 第139図 函形カマド焼土化部分と煙道位置
 第140図 函形カマド集成図
 第141図 石組カマド集成図
 第142図 時期別カマド位置分布図
 第143図 入口部想定住居址
 第144図 遺物出土状況図
 第145図 住居内礫出土状況図
 第146図 接合関係模式図
 第147図 北部地区土器出土量及び食器構成図
 第148図 掘立柱建物址分布図
 第149図 掘立柱建物址の平面形態
 第150図 掘立柱建物址主軸方向
 第151図 掘立柱建物址規模別集成図
 第152図 区画溝吉田川西遺跡・鋳物師屋遺跡
 第153図 竪穴住居址出土土器の量と構成
 第154図 6・7期の遺構と土器
 第155図 北部 I・II地区の6期の食器
 第156図 北部 I・II地区の7期の食器
 第157図 墨書土器の種類
 第158図 墨書土器器種構成割合
 第159図 墨書土器墨書位置割合
 第160図 墨書土器分布
 第161図 墨書土器分布図 (北部地区)
 第162図 陶硯類分布図
 第163図 鉄製品出土構成割合
 第164図 鉄製品出土住居址分布図
 第165図 地形復原図
 第166図 羽口・鉄滓分布図
 第167図 遺構群分布図
 第168図 A・B群変遷図
 第169図 C群変遷図
 第170図 D群変遷図
 第171図 E群変遷図
 第172図 G群変遷図
 第173図 H・I群変遷図
 第174図 J・K群変遷図
 第175図 各群の消長図
 第176図 集落変遷図 1
 第177図 集落変遷図 2

挿 表 目 次

第1表	古代土坑分類表	第17表	SB124出土土器の構成
第2表	SB4出土土器の構成	第18表	SB126出土土器の構成
第3表	SB6出土土器の構成	第19表	SB130出土土器の構成
第4表	SB14出土土器の構成	第20表	SB136出土土器の構成
第5表	SB21出土土器の構成	第21表	SB143出土土器の構成
第6表	SB72出土土器の構成	第22表	SB148出土土器の構成
第7表	SB76出土土器の構成	第23表	SB152出土土器の構成
第8表	SB84出土土器の構成	第24表	錢貨一覧表
第9表	SB85出土土器の構成	第25表	砥石一覧表
第10表	SB89出土土器の構成	第26表	羽口一覧表
第11表	SB92出土土器の構成	第27表	近世土器・陶磁器器種構成表
第12表	SB96出土土器の構成	第28表	地区別時期別竪穴住居址検出数
第13表	SB99出土土器の構成	第29表	遺構間の遺物接合一覧表
第14表	SB100出土土器の構成	第30表	地区別掘立柱建物址検出数
第15表	SB111出土土器の構成	第31表	掘立柱建物址規模別棟数
第16表	SB121出土土器の構成	第32表	墨書率一覧表

付 表 目 次

付表1	竪穴住居址一覧表	付表6	刻書土器一覧表
付表2	掘立柱建物址一覧表	付表7	陶硯類出土一覧表
付表3	遺構別古代土器一覧表	付表8	鉄製品・鉄滓出土遺構一覧表
付表4	遺構別墨書土器出土一覧表	付表9	鉄製品・鉄滓時期別出土一覧表
付表5	墨書土器一覧表		

第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 遺跡の概観

下神遺跡は松本市大字神林字大畑3,876を中心とする一帯に所在する。西側から北側にかけて鎖川が、東側に奈良井川が北流する。両河川の合流点にほど近く、鎖川の堆積によって形成された扇状地の扇端部に位置し、北東方向に緩やかに傾斜している。奈良井川との比高差は3～5m、鎖川とは0～5mを測り、標高は610m前後である。北東に松本市街地、西に北アルプスを眺望することができる。調査区の周囲には水田が広がっており現集落は遺跡の西側に広がる。

遺跡の範囲は南北約800m、東西1000m以上で、遺跡の中央部分を市道神林中央道線が横断しており、地形的に見ても自然流路が流れるなど大きな変換点が見られる。周囲は昭和58年にほ場整備事業にともない松本市教育委員会(以下松本市教委と略す)により緊急発掘調査が行なわれ市道の北側を下神遺跡、南側を町神遺跡として報告(松本市教委 1984)している。特に北側の下神遺跡部分では多大の成果を収めている。調査は5地点、南田尻、熊坂、中道、笹賀、町神の20,000㎡について行なわれ、奈良・平安時代の竪穴住居址78軒、掘立柱建物址35棟が検出されている。笹賀、熊坂の両調査区は中央自動車道長野線(以下「中央道長野線」と略す)調査区に接している(図版2)。主な遺物に三彩小壺、銅製巡方、佐波理鏡などの特筆すべき遺物がある。また、昭和64年には中央道調査区の西500mの地点が調査され平安時代の竪穴住居1軒と中世の土坑が検出されている(松本市教委 1989)。かつて『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』(同郷土資料編纂会 1957)において「古墳時代以降の遺跡は笹賀地区に比較して質量ともにはなはだ貧弱といわねばならない」と述べられているが、松本市教委の調査はこの認識を改め、今回の調査の成果を予想させるのに十分であった。

本遺跡の周辺には南に中二子遺跡、東に下二子遺跡、西に南荒井遺跡、鎖川を挟んだ北に南栗遺跡、梶海渡遺跡、西側に三間沢川左岸遺跡の奈良・平安時代の遺跡が分布する(図版1)。特に中二子遺跡、南栗遺跡、三間沢川左岸遺跡では調査が行なわれており大規模な集落が検出されている。

第2節 調査の概要

1 調査の概要

中央道長野線は遺跡の東側部分を南北に縦断する。調査対象面積は当初13,800㎡であったが、松本市教委調査区となりあう部分が除外されていたり、本県教育委員会文化課による範囲確認調査によってその面積は当初の3倍の39,400㎡にわたり、再契約を結び調査に入った。

発掘調査は昭和60年4月から翌61年8月までの2年度にわたって行なわれた。昭和60年度の調査は層序と遺構の分布状況把握のためのトレンチ調査とボックスカルバート、側道部分と一部本線部分の調査を行なった。トレンチ調査の結果全面に遺構が分布することが確認された。また、わずかではあるが縄文時代の遺物も確認された。昭和61年度は残りの本線部分の調査を行なった。担当した調査研究員は若干の異動はあったが主に10名があたった。

調査に当たって特に初年度は調査区が細かく分かれ、全体像を把握するのに苦慮したが、遺構の遺存状

況は比較的良好であり多大の成果を得ることができた。各年度の成果の概要は(財)長野県埋蔵文化財センター年報2・3に報告してある。なお若干本報告と異なる部分があるが、本報告をもって最終報告とする。最終的に検出された遺構は縄文時代の土坑4基、古代の竪穴住居址142軒、掘立柱建物址58棟、柵址3本、区画施設1、溝址78本、溝址群3、土坑約1500基、近世の畠址1面である。

整理作業は発掘調査の終了した昭和61年度中に遺物の水洗、注記、図面整理、調査所見の整理等を行った。昭和62年度に遺物の接合・実測など報告書に向けた本格的な整理に入り、遺構・遺物の検討を経て本報告書の刊行に至った。

2 調査の方法

地区の割り付けは埋蔵文化財センターの方針に従い、調査区全域を50mの大地区に区切り、さらに8mの中地区、2mの小地区に分けた。測量基準点、レベル原点は日本道路公団の工事用杭S T A 210+60(X=21748.8309、Y=-50523.7341)を使用し、この地点をNS=0、EW=0として50mの大地区を設定した。さらに長い調査区に対応するようにN=100以北をI、N=100からS=400の間をII、S=400以南をIIIとする大々地区を設定した。大地区及び一部グリッドを測量専門業者に委託して設定した。遺構測量は簡易遣り方によったが遺構分布図及び一部遺構図を業者に委託して写真実測を用いた。

発掘調査は作業は人力を基本としたが表土、及び耕作土の除去には重機を使用した。遺物の取り上げについては、遺構内遺物は層位ごとに取り上げ、基本的にはできるかぎり図化することに心掛けた。SD108などの大型の遺構については層位を重視し2mグリッドごとに取り上げた。

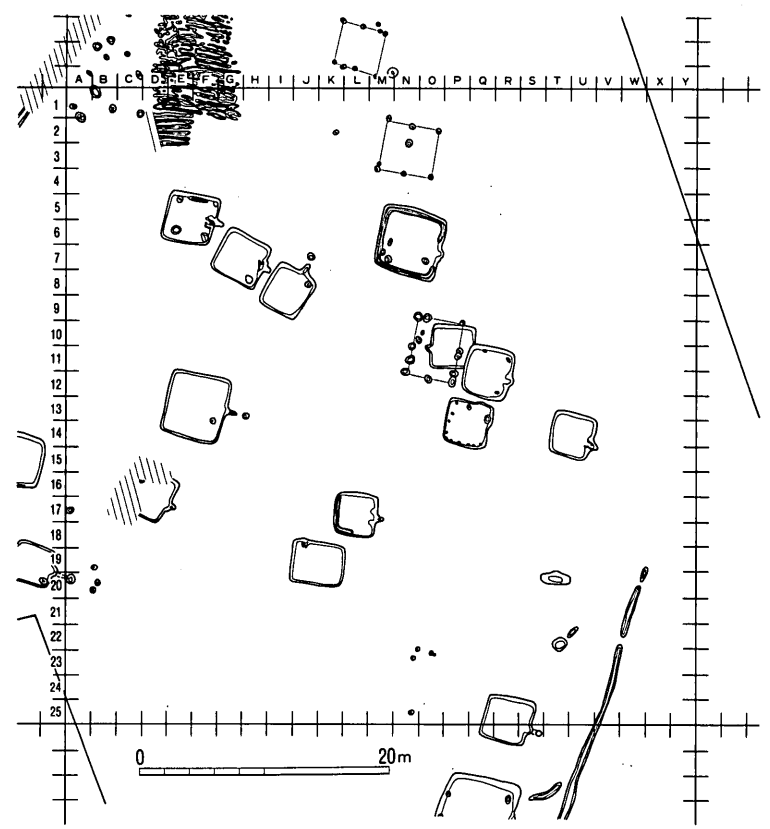
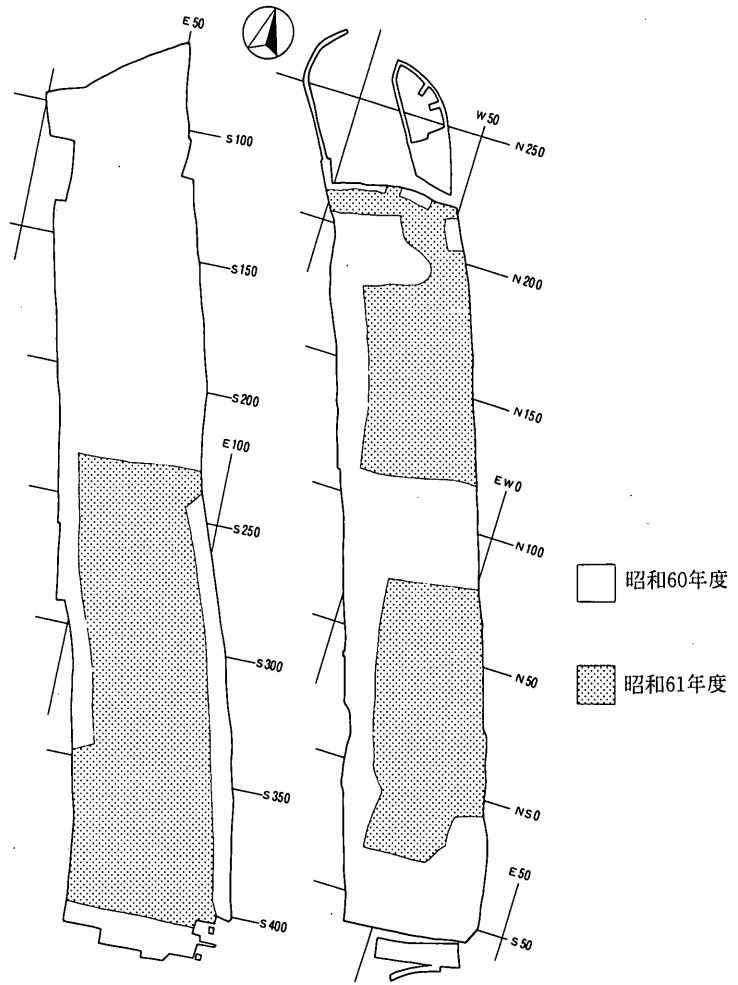
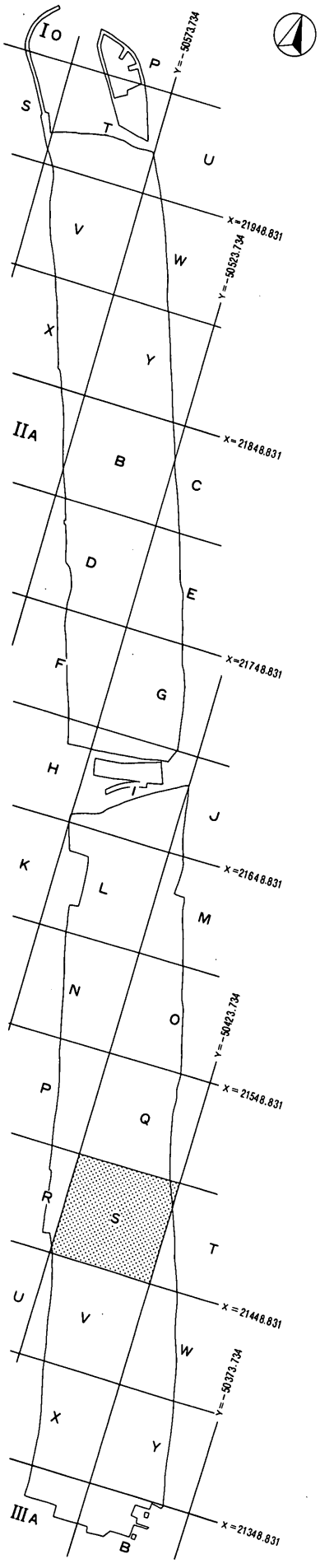
遺構の番号については検出順に付けたが同時に進行する地区があり桁を変えて付けたところもある。土坑については整理段階で遺構名、番号を変更した。

遺構の位置などを概略的に説明するために、平面的に捉えられた遺構のまとまりによって調査区を6地区に分け第2図のように統一した。南北の2地区に大きく分け、さらにそれぞれ3地区に分けた。南から南部I地区・II地区・III地区、北部I地区・II地区・III地区と呼称することにする。本文中で述べる地区呼称は大々地区のI・II・IIIとは全く関連しないことを断わっておく。

3 調査の経過

昭和60年度

- | | | | |
|-------|--|--------|--|
| 4月22日 | 松本市教育委員会と打ち合せ。市教委から神沢昌二郎、直井雅尚両氏参加する。 | 9月8日 | 現地説明会南部III地区を中心に公開を行ない350人の参加を得る。 |
| 4月23日 | トレンチの杭打ちをおこなう。 | 9月12日 | 211+60C-BOX部分の遺構精査精査に入る。SD108の掘り下げでは多量の遺物特に墨書土器が出土する。 |
| 4月24日 | トレンチ杭打ち・全景写真など現状の記録をする。 | 9月20日 | 南地区III地区縄文時代確認調査、縄文の遺構は確認できない。南部III地区の調査を終了する。 |
| 4月30日 | 発掘開始式。トレンチ調査をはじめ、南部地区では遺構がまばらであることを確認する。 | 9月25日 | 中央ボックス遺構精査区画溝の南側部分を調査し円面硯などが出土する。北部III地区東側側道部分の検出を開始する。 |
| 5月10日 | 梅村弘氏に土壌についての指導を受ける。 | 10月3日 | 中央ボックス縄文確認調査。期待された縄文後期の包含層を中心に精査するが遺構は確認することができなかった。 |
| 5月21日 | 南部III地区重機による表土剥ぎと検出に入る。 | 10月7日 | 南部I地区側道部分の調査を行なう。北部III地区西側道部分調査(18日から掘り下げ)211+60C-BOX部分写真測量(~8日)。朝日新聞社、信濃毎日新聞社SD108の墨書出土状況の取材を行なう(8日)。 |
| 5月30日 | トレンチ調査によって確認されたST111内出土須恵器大甕を取り上げる。 | 10月12日 | 南部II・III地区西側道の検出をおこなう。 |
| 6月1日 | 南部I地区南端部分重機による表土剥ぎ、検出。 | | |
| 6月27日 | 南部I地区調査を終了する。 | | |
| 7月8日 | 南部地区遺構精査。 | | |
| 7月17日 | 毛涯副知事、酒井教育次長他視察。 | | |
| 8月28日 | 北部II・III地区(210+60ボックスカルバート)部分の検出に入る。 | | |
| 9月2日 | 北部I地区南半(中央ボックス)検出に入る。 | | |
| 9月6日 | 南部III地区航空測量をおこなう。 | | |



第1図 グリッド配置図

第1章 遺跡の概観と調査の概要

- | | | | |
|--------|---|-------|---|
| 10月23日 | 南部地区東側道航空測量をおこなう。 | | |
| 10月24日 | 北部地区西側道遺構精査に入る(I・II)。SB126から漆入の杯が出土する。 | 6月5日 | 南部I・II地区の調査を終了する。 |
| 10月25日 | 南部地区東側道部分の調査を終了する。 | 6月9日 | 開智小6年見学。体験発掘を行なう。 |
| 10月29日 | 南部地区西側道遺構精査(11月11日まで)。 | 6月11日 | 北部I・II遺構精査重要な遺構が集中しSX30などからは漆紙が出土する。墨書土器も多く多量の遺物を得ることができた。SB97の掘り下げでは多量の覆土の除去に苦勞する。 |
| 10月30日 | 南部地区西側道の調査を終了する。 | 6月27日 | 北部III地区調査終了する。 |
| 11月13日 | 北部III西側道の航空測量をおこなう。 | 7月2日 | 開明小6年見学。 |
| 11月19日 | 北部III西側道終了。国学院大吉田恵二氏見学。 | 7月20日 | 現地説明会。北部I地区を中心として公開をする。250名の参加を得る。 |
| 11月20日 | ST111検出(12月3日まで)。 | 7月31日 | SX30の完掘をもってすべての発掘調査を終了する。 |
| 12月6日 | 62年度の調査を終了する。 | 8月1日 | 現場にて土器洗浄・図面整理。 |
| 1月～3月 | 整理作業。 | 8月8日 | 発掘調査終了式。すべての作業を終了する。 |
| 1月23日 | 神林中央線立ち合い調査。区画溝の南限を確認のため調査するが大部分は攪乱を受けており区画溝の一部を確認するに留まる。 | 8月～ | 事務所にて土器洗浄・注記・図面整理。 |
| 3月11日 | 南部I・II地区にトレンチを設定する。 | | |
| 3月13日 | 南部I・II地区の検出に入る。 | | |

昭和61年度

- 4月11日 北部III地区にトレンチ設定する。北部地区検出、最北端に位置するSB111検出(～30日まで調査を行なう)。
- 4月14日 南部I・II地区遺構精査をおこなう。
- 5月6日 北部III地区遺構精査SB78などの大型住居址などの調査を行なう。
- 5月13日 北部I・II地区の検出をおこなう。SB97などの大型住居址や区画溝を確認する。
- 5月14日 梅村弘氏に土壌指導をうける。
- 5月15日 滋賀大小笠原好彦氏に現地指導をうける。
- 5月21日 宮崎大藤原宏氏南部地区の畠址のプラントオパ

昭和62年度

報告書にむけて本格的な整理に入る。遺物接合、計測、実測を行なう。遺構図版のレイアウトを行なう。

昭和63年度

遺物図版、写真図版のレイアウト、原稿執筆を行なう。

平成元年度

原稿執筆、編集をおこなう。

第3節 基本層序と微地形

1 基本層序

IA上層部(IA1層)：オリーブ褐色含礫泥層。本遺跡に見られる土層の最上位にあり、上限付近は全面にわたって耕土化されているか盛土におおわれている。小礫・小風化礫を塊状に含み、シルトの基質から成る。層厚は25～40cmで、全面に分布する。

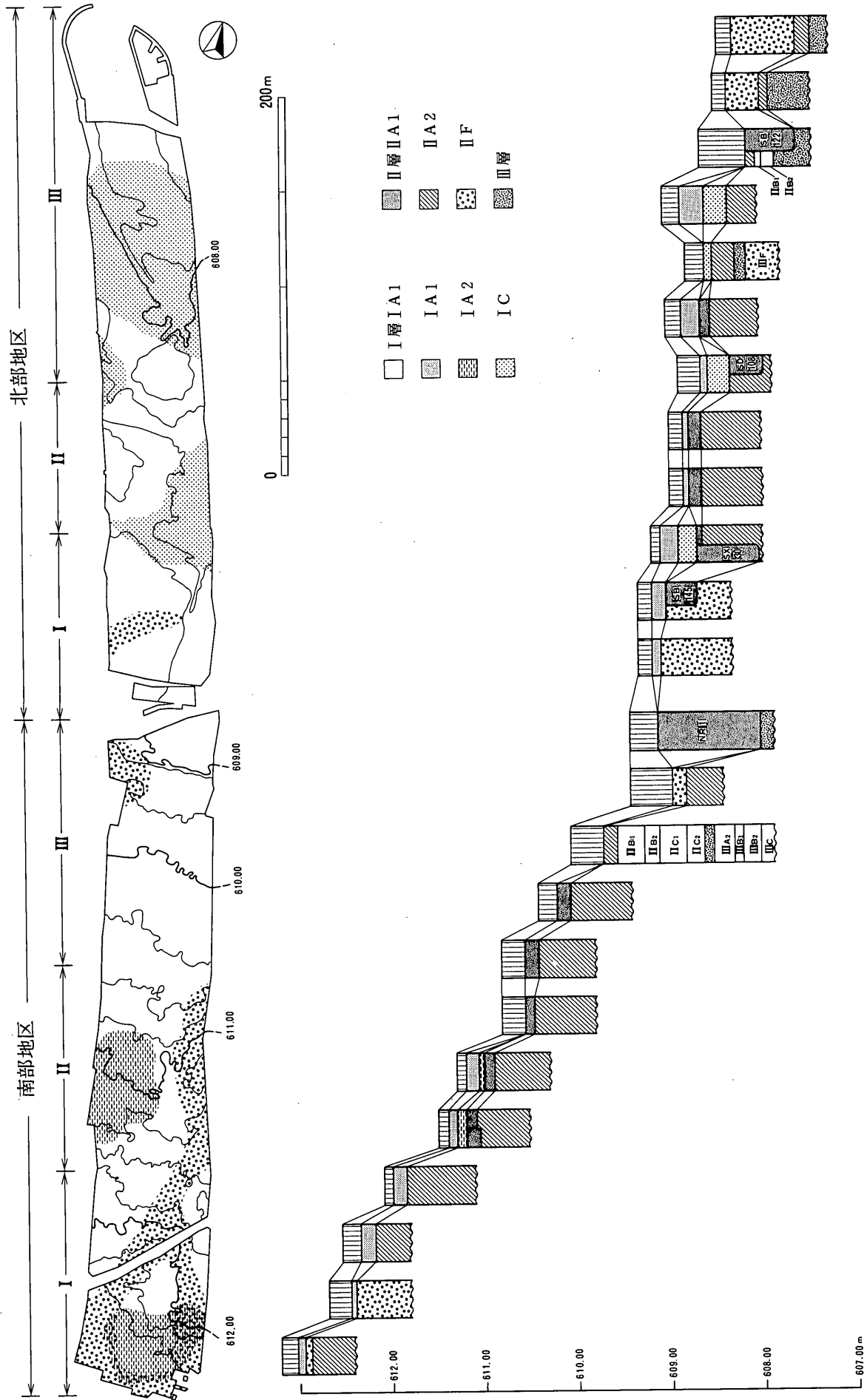
IA層下部層(IA2層)：暗褐色含礫泥層。IIA層上面の凹地を埋積し、IA上層部におおわれる。基質はシルトで小礫・風化礫を塊状に含む。層厚は10～20cm南部地区に点々と小分布する

最大の特徴は小礫大の風化礫を密に含むことであり、この特徴は隣接する中二子遺跡のIA層に共通する。両遺跡間にあった帯状の微低地を同一の流体が流下・堆積した可能性が高い。

IC層：暗灰黄色含礫泥層。IIA層上面の凹地を埋積し、IA上層部におおわれる。基質はシルトで、小礫を塊状にごく少量含む。層厚は5～30cmで、北部地区の低地に分布する。

粘土分析の結果では本遺跡のIC層の値(中央値4.8、平均値4.7、分級値2.2、歪度-0.05、尖度0.21)と南栗遺跡のIC層の値(中央値4.8、平均値4.7、分級値2.2、歪度-0.05、尖度0.22)がきわめて良く一致し、かつ層序学的にも矛盾がないことから、両層を明確に対比できると考える。

基質が緻密でしばしば薄くマンガンが集積し、柱状構造を持つ。構造による孔峠には上位から粘土が侵入し、褐色土と灰色粘土がモザイク状に入り込むような外観を呈する。層厚は鎖川に向かって厚くなる傾向があり、南栗遺跡にも分布することを考え合わせると、鎖川に沿って流下した堆積物と推測される。



第2図 土層分布図

II A層：にぶい黄褐色シルト層。II B層またはIII層をおおい、部分的にI C層・I A下部層におおわれ、多くをI A上部層におおわれる。礫を含まない淘汰良好のシルト層で、全面に分布する。層厚は30～90cmである。上部の腐植土部分をII A 1層、下部をII A 2層とする。

上面の地形はNNE方向に傾斜する南部地区とENE方向に緩傾斜する北部地区に大別され、ほぼ全面を腐植土層がおおう。南部地区南半では下部に風化礫を含む中礫から成る礫層(II F層)を挟み、これがNNE-SSW方向に軸をもつ頂部格を形成している。II F層(II層中の挟在層)付近の本層は細砂などを混じえて全体に粗くなるが、この傾向は下位のII B層・II C層についても同様である。

北部地区の南・北縁では、本層中に位置すると思われるII F層が厚いところで60cm以上とかなり発達する。南縁は、本遺跡中央を北東流する鎖川の分流の左岸で、北側の微高地より30～40cm高い小凸地を形成し、上位にはII A層をのせていない。北縁は鎖川の右岸に当たり、II A層と同質の基質からなるII F層が厚く挟まれる。ここではI C層が船底状に堆積し、II A層やII F層が深部まで侵食を受けていて旧地形が明らかでないが、II A層上面の地形は平坦下きわめて微弱な高まりがあったと推定される。

II B層：黄色シルト層。II C層の低所をおおい、II A層におおわれる。南部地区北半に小分布し、層厚は10～25cmである。

上限付近は薄く腐植化しており、II A層の腐植層とはほぼ平行する。また、しばしば下部に礫層を挟在し、全地形が低かったと推定される地点ではII B層の全てが礫層に移行することがある。

II C層：黄色シルト層。III層およびIII層下をおおい、II B層・II A層におおわれる。南部地区北半に分布し、層厚は10～55cmである。

上限付近は腐植化し、時折小～中礫や川原砂をレンズ状に挟在する。上面は東方へ急傾斜し、II A層上面が形成する地形とは明らかに調和しない。

III層：オリーブ色または褐色シルト層。IV層をおおい、II C層・II A層におおわれるオリーブ色と褐色のシルト層の互層で、層厚は約200cmである。

褐色部とオリーブ色部のセットは3回認められ、それぞれの境界は比較的シャープである。褐色部はやや粗粒のシルトから成り、しばしば小礫や極粗砂を混入する。また、最上位のものは赤味を帯びて赤色になっており、分層の際の指標として扱った。オリーブ色部は粗細の変化が若干見られるものの良く安定し、淘汰良好である。

III層の係わる本遺跡での特徴は、南部地区中央や北部地区北縁で厚い中礫層(III F層と呼ぶ)が挟在することがある。III F層は風化礫を特徴的に含み、特に南部地区中央で西方からIII層シルト層との指交関係が観察された。III層シルト層は神戸遺跡より連続的に分布が認められるのに対し、III F層は不連続であり、合流扇状地に見られる堆積物の傾向(藤原 1967)から判断すると、III層シルト層は中央道長野線と平行な流線をもつ扇状地(奈良井川)の構成物であり、風化礫を含むIII F層はこれとほぼ直交する流線をもつ扇状地(鎖川)の構成物であると解釈され、本遺跡は両扇状地の縫合部に当たる。

IV層：礫層。本遺跡の基底部を構成し、地表下4mの深部に出現する。硬砂岩・砂岩・チャートを主とする中～大礫からなり、風化礫は観察されない。上面の地形について詳細は不明である。

2 遺構切り込み面の微地形

遺構切り込み面は、検出所見からII A層上面が縄文時代晩期～平安時代中頃とされている。またIII層最上部の礫質部(直上はII A層)より縄文時代中期～後期の土器片や、I A層中より近世陶器片が出土している。したがって本遺跡周辺は縄文時代晩期から約1000年近くII A層上面の地形環境が続き、この間の堆積量はほぼ0に近い値であろうことを暗示している。

調査区内におけるII A層上面の地形は既に述べた。現在の地形は、等高線がE-W方向に走る南側の町神地区と等高線がNW-SE方向に走る北西側の下神地区の境界は、等高線が連続的に折れ曲がり、谷状の地形を形成し、農業用水路が流れている。谷状部は本遺跡の南・北部地区を画する地形変換点に位置し、断面観察から、少なくともIII層堆積以降連続的に流路内にあったと推定される。また、町神一帯には南北方向に長軸をもつ楕円形微高地が、下神一帯には東西方向に長軸をもつ微高地が判読できる。凸部、凹部の侵食と埋積、大型河川による側刻などを勘案するとII A層上面には現在より大起伏の地形がほぼ同じ位置に展開していた可能性が高い。つまり、2000年ほど前に奈良井川と鎖川にそれぞれ平行する細長い微高地と、その間を流れる鎖川の分流による地形が形成され、以後約2000年にわたって同じ地形環境が続いたと理解される。中央道長野線は南側微高地の北端と北西側微高地の東部を通過するため、調査区の南部地区南半中央にはN-S方向の小規模な頂部が、北部地区南縁付近にはE-W方向と思われる小凸地が観察される。古代の住居址群は、南部地区では小凸地の頂部となる北西側の平坦面にひとまとまりが立地し、北部地区では小凸地北側に鎖川の分流が東流するが、小凸地から小分流にかけての一带に高密度で集中するひとまとまりの住居址群が立地する。

第2章 遺 構

第1節 縄文時代の遺構

本遺跡から出土した縄文時代の土器は前期、中期、後期、晩期とほとんどの時期にわたり、量的には後期・晩期のものが多い。ほとんどのものは古代の遺構に混入したものであるが、晩期の土器がII A層中に、中期、後期の土器がIII層中に検出された。遺構が確認されたのは晩期のみで、その他の遺物は摩滅の激しいもの、あるいは単独で検出されるもので居住域からは離れていた結果と考えられる。ただ北部I地区において後期の土器片を伴う層より鉄平石2片が検出され、敷石住居址が存在する可能性も考えられ、周囲を広げて確認調査を行なったが遺構の確認はできなかった。晩期の遺構は南部地区に集中しており、4基の土坑を検出した。覆土はII A 1層が落ち込んでおり、古代の遺構と顕著な差異は認められなかった。

1 土坑

SK158 位置：南部II 図版22

検出：II A 2層上面の非常に砂質な部分において、SK159に切られるように検出された。規模・形状：長軸が95cm、短軸が85cmとほぼ円形に近く、掘り方の中央がやや凹んでおり周囲が高くなる。10cmと浅く皿状の断面形を呈す。埋没：覆土はオリーブ褐色土の単層であるが非常に砂質である。遺物出土状況：晩期末葉の甕破片が数点坑底から出土している。

SK169 位置：南部II 図版22

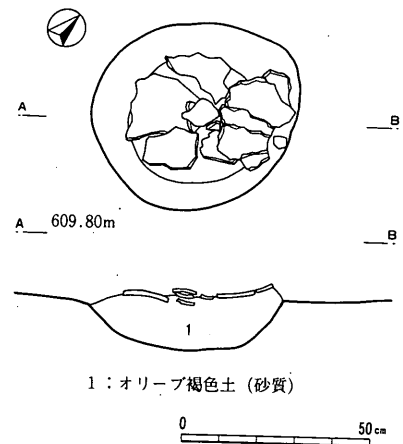
検出：SK158の北約18mのところの位置する。II A 2層中において検出され、SK170に切られることから晩期の遺構と捉えたが、本址及びSK170は部分的に攪乱を受けており確実に晩期の遺構とは言い切れないが、その可能性は高い。規模・形状：長軸170cm、短軸100cmの紡錘形を呈し、深さ5～10cmの皿状の断面形を呈す。埋没：覆土は青紫色の入る黒褐色土にオリーブ褐色土のブロック・砂粒・焼土粒が入る。遺物出土状況：遺物は全く出土していない。切り合い関係から晩期の遺構とした。

SK170 位置：南部II 図版23

検出：SK169と同様に検出された。規模・形状：平面形は長軸150cm、短軸100cm、深さ15cmで不整形な楕円を呈す。埋没：上層に褐色土、下層に焼土層、暗褐色土層が続く。火を焚いたあとに褐色土で埋め戻した状況である。遺物出土状況：上面から比較的まとまって晩期末葉の甕片が出土している。

SK415 位置：南部III 図版44、第3図

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長軸、短軸ともにほぼ同じで55cmを測る。深さは5cmですり鉢状の断面形を呈す。埋没：覆土はオリーブ褐色土の単層である。遺物出土状況：土坑上面で晩期甕の口縁部から体部にかけての破片(図版81-1)が16点出土している。内面を上にして敷き詰めるような状態で出土した。



第3図 SK415実測図

第2節 古代の遺構

1 竪穴住居址

SB1 位置：南部Ⅲ 図版46

検出：ⅡA 2層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出されたが、東側3分の2は調査区域外となる。SK431を切る。カマドは東カマドの可能性が高いが確認できない。床：貼床等は観察されず、薄い炭化物焼土の面をもって床面とした。その他の施設は確認されなかった。埋没：覆土は2層に分層したが基本的にはⅡA 1層を基調とした同一母材からなる単一層と考えられ、ブロック等なく自然埋没と考えられる。遺物出土状況：すべて覆土中の遺物であり、量も多くない。黒色土器A杯A(1)、灰釉陶器碗(2)、土師器甕B(3)などが出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB2 位置：南部Ⅲ 図版45

検出：ⅡA 2層、一部ⅡF層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出したが、南・西壁が不明確であった。カマド：北カマドで西による。燃焼部は完全に破壊されて残存しないが、石組等の痕跡もないことから粘土カマドであったと考えられる。煙道部分は緩やかに延び、煙道先の煙出しピットは削平されてない。床：部分的に貼床が認められた。西壁南寄りに花崗岩の人頭大の礫2個がある。埋没：礫を含む黒褐色土で自然埋没と考えられる。遺物出土状況：ほとんどが覆土中の出土である。特に黒色土器A皿(9)は東壁際から逆位の状態で出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

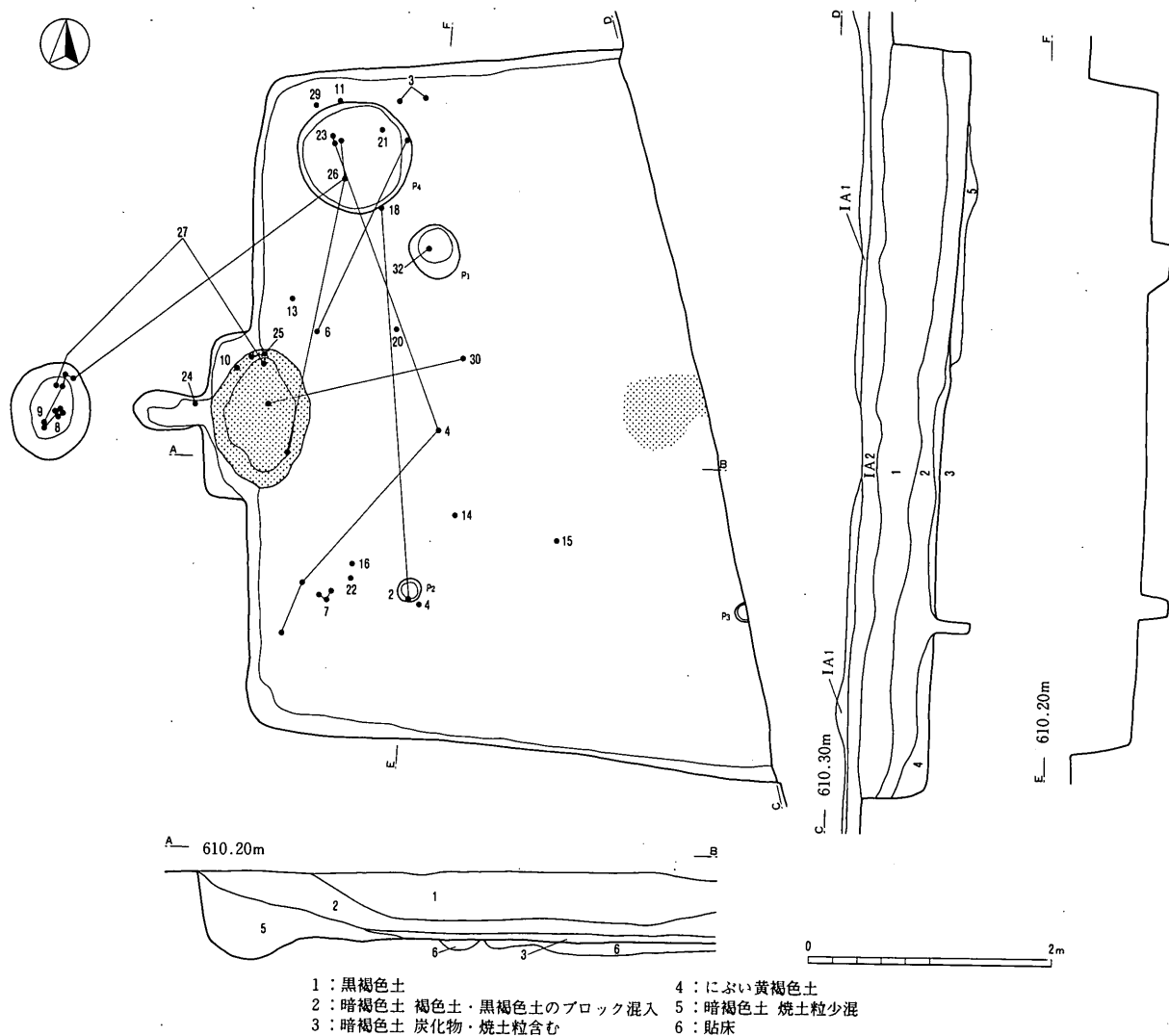
SB3 位置：南部Ⅲ 図版45

検出：ⅡA 2層、ⅡF層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。プランは隅丸方形を呈すると思われるが、西側部分は削平されており全体像は知りえない。カマド：東・北壁にカマドはなく南壁にカマドをもつ竪穴住居址は存在しないため西カマドと考えられる。床：貼床等はなく不安定な床で、礫層をそのまま床面としている。西側部分でやや安定した床を確認した。その他の施設はない。埋没：覆土は暗褐色土に中礫を多量に取り込んでいる単層である。遺物出土状況：カマドの南と考えられる床面から土師器甕Bが出土している。遺物の量は多くないが、黒色土器杯A(1)、皿(2)、須恵器鉢A(6)などが出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB4 位置：南部Ⅲ 図版43・44、第4区

検出：ⅡA 2層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出された。単独の住居址で東半部分は調査区域外に延びる。プランは東壁にむかってやや開く。カマド：函形カマドで石組などはみられず粘土により構築される。天井部は完全に崩落しており支脚等も確認されなかった。火床部には顕著に焼土が認められる。煙道部は緩やかに立ち上がり、その先端に煙道先ピットがある。床：北壁に向かって緩やかに傾斜しており、部分的に貼床が見られる。中央やや東側に焼土・炭化物の広がりが見られる。カマド北側に浅い掘り込みがある。柱穴：基本的には4本柱と考えられ、3基確認され残り1基は調査区域外に入る。柱間は等間隔に配置される。柱掘り方は比較的小さく検出したのが柱痕部分の可能性もある。埋没：覆土は3層から成る。基本的にはⅡA 1層を基調とするものであり、3層から1層へと漸移的に変化する。遺物出土状況：床面遺物が多くカマドを中心としてその両脇に集中して見られる。煙道先ピットからも出土している。食器の割合が高く、そのほとんどが須恵器である。土師器甕B・Cはカマドに集中する。P1から土師器蓋(32)が、1層中より墨書土器(図版166-1)が出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB5 位置：南部Ⅲ 図版43

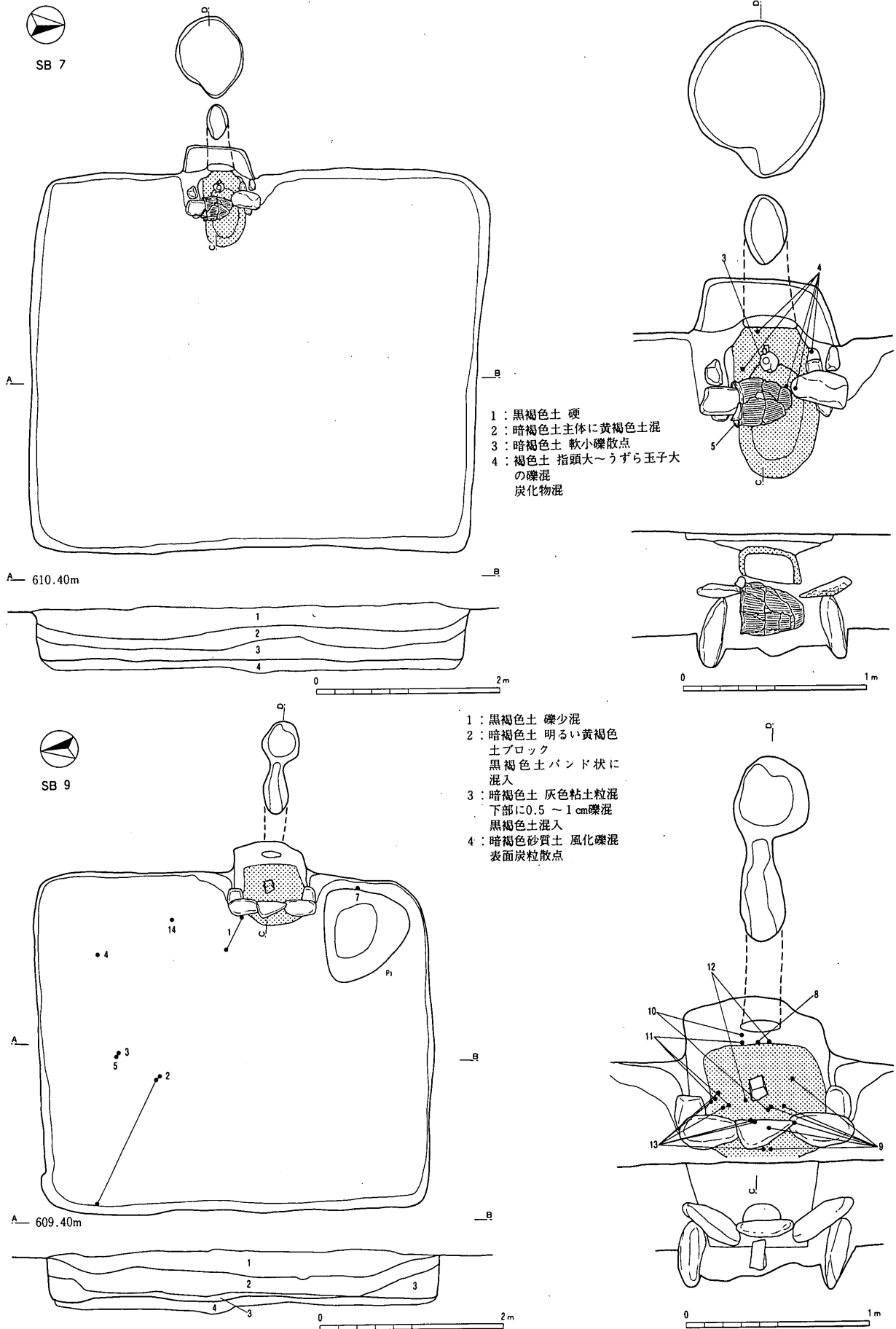


第4図 SB4実測図

検出：II A 2層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。ST18を切り、SK394に切られる。カマド：北壁中央にある粘土カマドである。煙道部は40cm程しか存在せず急に立ち上がる。燃焼部の袖は存在せず、火床部分のみを検出した。奥壁寄りに比較的大きな石製支脚がある。カマドの周囲に焼土が広がっている。床：貼床はなく掘り方をそのまま床として使用している。カマド右北東隅に小ピットがある。埋没：東壁下に褐色土の堆積があるがほぼ黒褐色土の単一層である。自然埋没と考えられ、埋没過程で焼けた花崗岩の人头大の礫4個の投げ込みが見られる。遺物出土状況：覆土からの出土はほとんど無く、カマド及び床面からの出土である。遺物の量自体は少ない。『而』の墨書のある黒色土器杯A(1)は南東隅から出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB6 位置：南部III 図版43

検出：II A 2層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SD7に北壁部分を切られる。プランの確認は困難であった。カマド：煙道部はごくわずかで急激に立ち上がる。燃焼部はほぼ原形を保っており、ある程度埋没した後に崩れたと考えられる。わずかに壁外に掘り込む函形カマドで、黄褐色砂質粘土を使い天井部に河川礫(砂岩)を入れている。火床部分の焼土は顕著ではない。床：地山をそのまま床としており、ほぼ平坦な床面となる。埋没：暗褐色土の単一層で小礫を含む。自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土からは小破片、床及びカマドからは比較的大きなものが出土している。遺物の分布はカマドに集中して



第5図 SB7・9実測図及びカマド実測図

いるが、南西隅、北壁寄りにもまとまりが見られる。黒色土器碗(4)、杯A(1・2)、皿(5)、軟質須恵器杯A(8~10)などが出土している。『全』の墨書土器(図版166-3)はカマド北、北東隅付近の床面から出土している。鉄製品(図版189-17)、軽石(図版192-6)なども覆土から出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB7 位置：南部III 図版42、第5図、PL10

検出：II A 2層上面で単独で黒褐色土の落ち込みを確認した住居址である。カマド：石組カマドで天井部に土師器甕Bの完形品を石材の代わりに使用している。使用石材はすべて硬砂岩からなる。カマドの構築は焚口部の両側に河川礫を配し、その上に平石をのせその間に土師器甕Bを組み込み焚口の天井部を形成している。焚口を作り、袖部を粘土で充填しその上に中礫をのせている。火床部には焼土が厚く堆積しており、中央に小型甕Bが逆位の状態で出土しており支脚に転用されたと考えられる。煙道口は矩形の掘り方をもち緩やかに立ち上がる。煙道内部の壁はよく焼けて、焼土化している。床：荒掘り後10cmほど埋め戻して平坦な床面を作り出している。埋没：覆土は3層から成る。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土を主体とし、褐色土のブロックが入る。3層は褐色土に小礫が混在する。いずれも人為的埋没を示す。遺物出土状況：カマドを中心として出土しているが、カマド構築材(3・5)とカマド火床内出土(2・4・6)に分けられ、煮炊具の出土が多い。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB8 位置：南部III 図版42

検出：II A 2層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。北壁部分でSD7に切られる。カマド：粘土カマドと考えられるが、完全に破壊されており火床と煙道部のみの検出となった。煙道部は急激に立ち上がり、その先端に煙道先ピットがある。床：褐色土を埋め戻しているが、堅緻な面は認められなかった。ほぼ平坦な床である。埋没：覆土は暗褐色土の単層で、自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド火床、カマド周辺からの出土が多く、黒色土器A皿(4)が出土している。床面から、円筒形土器(7・8)が出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB9 位置：南部III 図版42、第5図、PL10

検出：II A 2層上面で単独の住居址として確認した。カマド：天井部は崩落しているが、袖部、焚口部ともに残存状況は良好である。函形カマドであるが焚口部に石を配し、SB7のカマドの形態に近似する。燃焼部は先ず函形に掘り方を掘り、次に焚口部分の両袖に石を埋め、そのうえに平石をのせ中央に石を組み入れて焚口をつくっている。石質はすべて花崗岩から成る。支脚は石製支脚を使用し、住居址の壁を結ぶライン上に位置する。火床は支脚前面に広がる。煙道はやや急に立ち上がった後水平になり、煙出しへと続く。床：III層を掘り込み、いくつかの深みをもつ荒掘りで、掘りあげた土を再度入れて床面としている。平坦で、部分的に堅緻な面がある。カマド左、南東隅に灰溜めピットがある。埋没：覆土は3層から成る。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土に褐色土ブロックが入る。3層は暗褐色土である。2層は人為埋没と考えられる。遺物出土状況：床面遺物は少なく、覆土からの出土(土師器杯C1・2、須恵器杯A4・5、杯B6、黒色土器A杯A3)が多く、カマドからは土師器甕(7・8)、小型甕B(10~13)の出土が多い。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB10 位置：南部III 図版41

検出：II A 2層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認されたが、覆土に細~中礫を含むため容易に確認された。ST18・SB37を切っていると判断したが切り合い関係が逆転する可能性が強い。カマド：東壁やや南に位置する。掘り方は円形に壁外に掘り込むタイプであり、粘土カマドと考えられるが、破壊が激しく火床と煙道のみを検出に終わった。床：全面に堅緻な貼床が認められる。諸施設：ピットが5基検出された。これらピットの覆土はすべて焼土を含むが、特にカマド脇にあるピットに焼土・炭化物が顕著であり、灰

溜め施設と考えられる。埋没：覆土は3層に分層したが、II A 1層の暗褐色土に風化礫を取り込んでいる。3層から1層まで漸移的に変化し自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド(須恵器杯A 2)及び住居址南半(須恵器甕E 9・10)からの出土が多いが、出土量自体は多くない。なお11はカマド覆土と床面出土のものと接合している。時期：遺物の様相から4期の所産と考えられる。

SB11 位置：南部III 図版41

検出：II A 2層上面で検出した。当初SB12・SB37を切ると考え掘り下げたが、その過程でSB15のカマドを検出した。この結果SB12・15・37に切られることが判明した。カマド：煙道および袖の一部を検出した。両袖に河川礫(いずれも花崗岩)を配している。煙道は緩やかに立ち上がり、その先端に煙出しのピットがある。床：SB15に北西部分の3分の2を切られ残存部分は少ないが堅緻な貼床が部分的に認められる。小ピットが2基みられ支柱穴と考えられる。埋没：覆土は3層に分けられいずれもII A 1層を主体とし、自然埋没土と考えられる。遺物出土状況：遺物量は少なく、カマドから土師器甕B、小型甕Dなどが出土している。遺物にSB15との混乱がある。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

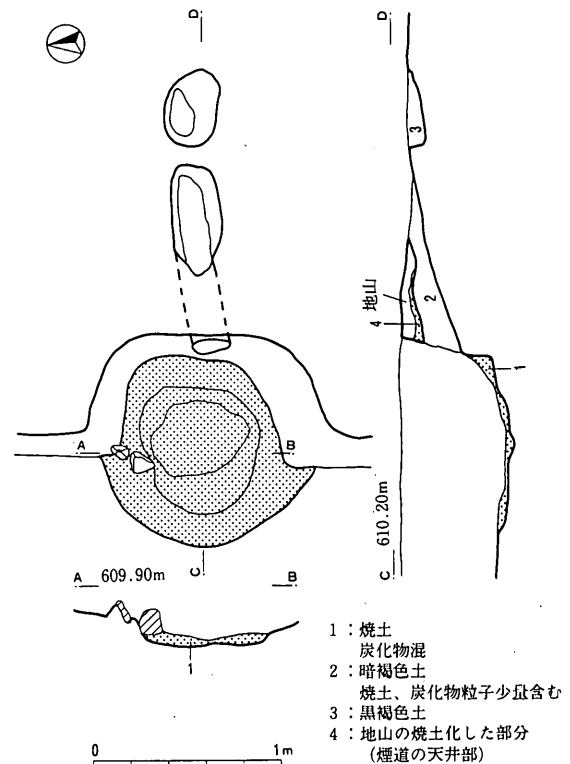
SB12 位置：南部III 図版41、第6図、PL33

検出：II A 2層上面で検出した。SB11を切る。カマド：函形粘土カマドで、西壁やや南に位置する。左袖付け根に花崗岩の角礫がある。天井部は崩落している。煙道部はやや急に立ち上がりその先に煙出しがある。床：壁際の1mを除き中央は堅緻な床面となっているが、貼床は認められない。埋没：覆土は3層から成り、いずれもII A 1層の黒褐色土を主体としており、自然堆積と考えられる。遺物出土状況：カマドを中心として出土している。覆土1層から『甗』の墨書土器(図版166-4)、3層から鉄製品が出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB13 位置：南部III 図版39・41、第7図

検出：II A 2層上面で検出した。煙出しのピットの一部が調査区域外に延びる。カマド：函形粘土カマドで、天井部・袖部は崩れており火床のみの検出となった。袖部分の残存として硬砂岩の中礫がみられる。住居址の壁を結ぶライン上に硬砂岩の河川礫を半割した石製支脚があり、その前面に火床が広がる。焼土の堆積が激しくよく使用されている。煙道は急に立ち上がり、やや離れて煙出しがある。床：貼床は認められず地山をそのまま床として使用している。柱穴：4本柱穴で柱間間隔は主軸方向で250cm直交軸方向で150~160cmを測る。柱穴は長方形に配置され、西壁側に寄る。3基の柱穴から柱痕跡が確認されている。そのほかにピットが2基ある。埋没：覆土は3層に分層される。1層は暗褐色土、2層は黒褐色土に暗褐色土がバンド状に入る。3層は黄褐色土からなり、北東隅付近に焼土・炭化物の集中が見られた。部分的な埋め戻しの後の自然堆積と考えられる。遺物出土状況：1・2層からの出土は少なく、3層・床・カマドにまとまりが見られるが小片である。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB14 位置：南部III 図版41、第8・9図、PL11



第6図 SB12カマド実測図

検出：II A 2層上面でSK349・359を切るように黒褐色土の落ち込みを確認した。カマド：石組カマドで残存状況は非常に良好であった。石材はほとんど硬砂岩を使用しているが、一部花崗岩、閃緑岩の扁平な河川礫を使用している。両袖ともに2個の扁平な河川礫を芯材とし、その上にやや小さな河川礫を並べている。焚口部分にはこれらの石組よりも一段低く河川礫の割石を埋め込み、巨大な天井石を乗せている。支脚石は柱状に加工され、住居址の壁を結ぶラインよりもかなり内側に位置している。カマド内からは逆位でしかも破片の状態で土師器甕Bが出土しており、カマド構築の補強材として使われた可能性がある。床：堅緻であるが貼床は認められない。床下に190cm×120cmの土坑がみられる。

埋没：覆土は2層から成り、1層

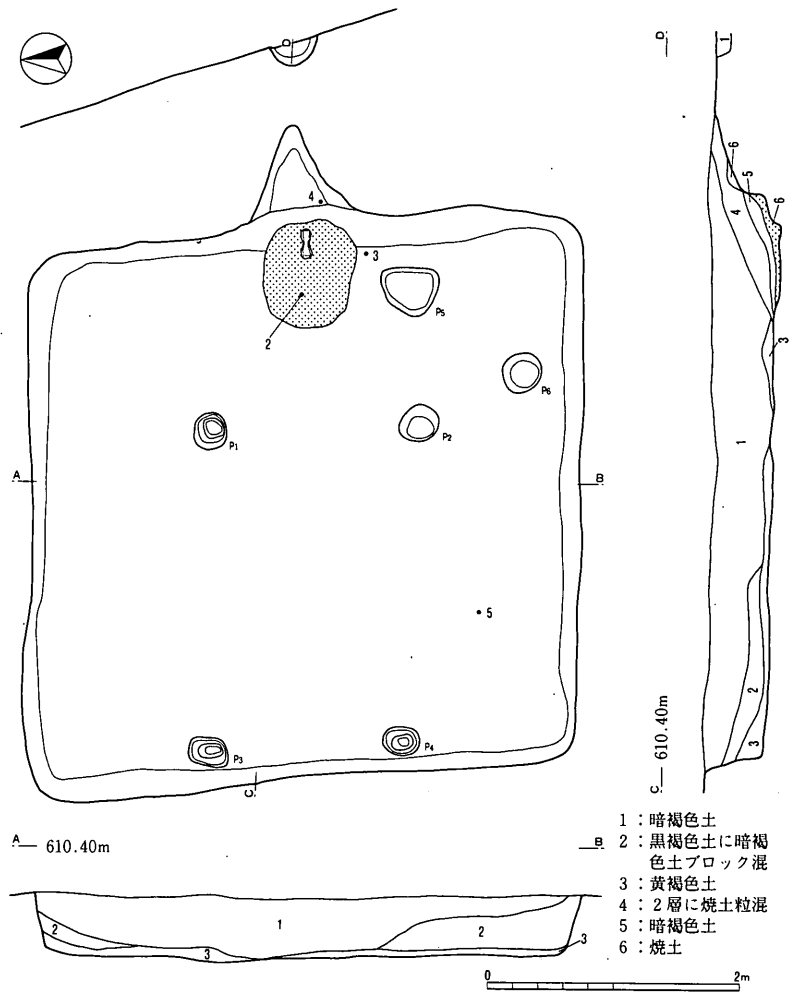
は暗褐色土、2層は黒褐色土である。2層上面でカマド石の投棄が見られる。遺物出土状況：2層上面及びカマド、床面からまとまって出土している。覆土からは黒色土器A杯A(1~3)、椀(4・5)、鉢B(18)、灰釉陶器椀(9・10)などが出土しており、特に土師器甕B(15)は2層上面からまとまって出土している。カマドからは土師器甕類(13・14・16)が数多く出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB15 位置：南部III 図版41

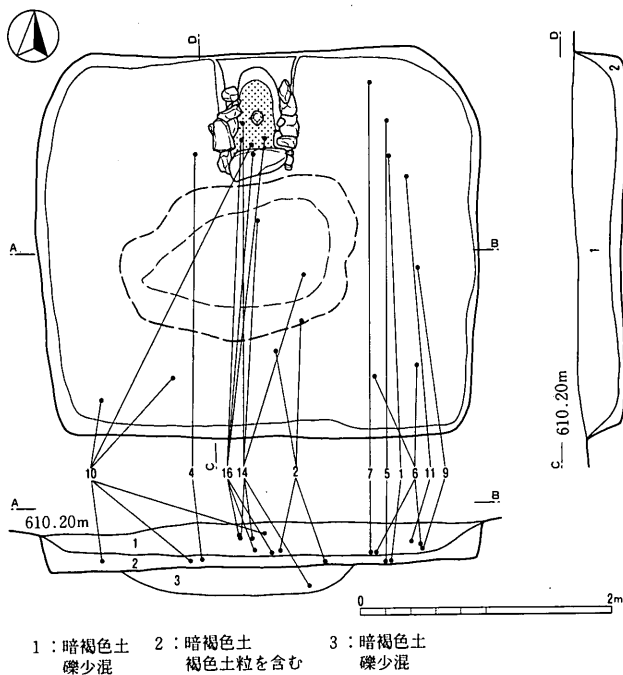
検出：SB11の精査中に検出した。カマド：煙道と火床、袖の痕跡を検出した。煙道は急激に立ち上がり、煙出しのピットは既に失われている。煙道は筒形の掘り方をもち、内部は焼けて固くなっている。火床は円形の掘り方をもち、焼土が厚く堆積している。右袖に花崗岩の河川礫が埋め込まれている。床：II F層に切り込んでおり部分的に黄褐色土の貼床が認められる。ピットが4基あり内3基は住居址のそれぞれの隅に寄る。埋没：覆土は3層から成り、SB11に近似する。いずれもII A 1層を基調とし、土層は漸移的に変化しており自然埋没と考えられる。遺物出土状況：下層からの出土が多い。カマドからは土師器甕Bの細片が出土している。須恵器杯A(4~6)、杯B(7)、黒色土器杯A(1・2)、皿(3)、灰釉陶器小椀(8)などが出土している。『夙』の墨書土器(図版166-5)、鉄製品などいずれも覆土からの出土である。時期：SB11の土器が混入しているため出土遺物に幅があるが、最も新しい様相である7期と考えたい。

SB16 位置：南部III 図版40

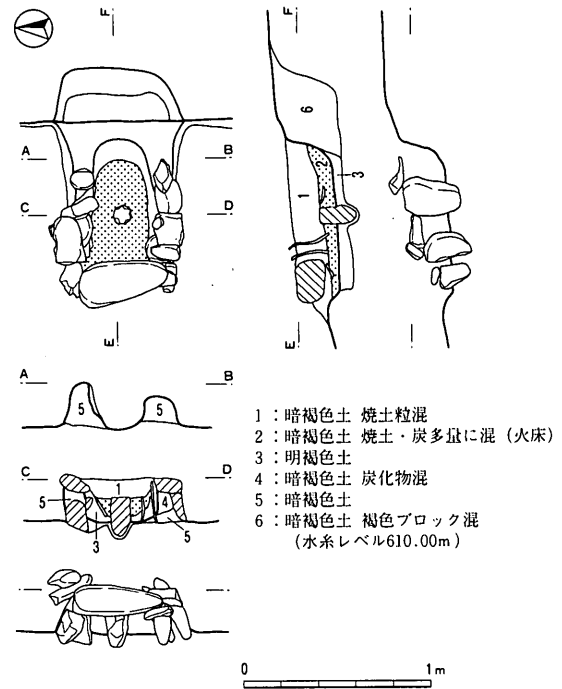
検出：II A 2層上面でSB17に切られるように確認された。切り合い関係の確認は非常に難しく平面での確認はできず、断面観察での確認となった。カマド：東壁中央にあり、わずかに壁外に掘り込むタイプで、煙道はほぼ水平に延びその先端に煙出しがある。火床部分には焼土の堆積がなくほとんど使用された形跡



第7図 SB13実測図



第8図 SB14遺物出土状況図



第9図 SB14カマド実測図

が認められない。床：SB17の貼床下に本址の貼床が認められた。小ピットが2基ある。埋没：覆土は2層に分層されるがいずれもII A 1層を基調とする自然埋没土と考えられる。遺物出土状況：カマドから土師器甕Bの細片が出土している。時期：遺物の出土がほとんど無く、SB17との切り合いから4期と判断した。

SB17 位置：南部III 図版40

検出：II A 2層上面においてSB16を切るように検出された。カマド：西壁中央に位置する粘土カマドである。煙道はやや急に立ち上がった後水平になりその先端に煙出しピットがみられる。煙道口は長方形で、煙道内部の上面は焼土化している。燃焼部は既に崩落しており、袖もほとんど残存しないが、残存する袖の内側はよく焼けている。火床部は厚く焼土が堆積しておりよく使用された状態がうかがえる。床：褐色土の貼床がほぼ全面にみられ、非常に堅緻である。諸施設：カマド左側に灰溜めと思われるピットがあり、焼土粒を含んでいる。その他小ピット1基がある。埋没：覆土は3層から成るが、1・2層が大部分を占める。いずれもII A 1層を基調とする淘汰の良い土である。遺物出土状況：1・2層からは小破片が多く、床面からは須恵器杯A(2)、などが出土している。カマドからは小型甕B(5・6)が出土している。時期：出土遺物から5期と判断した。4期の様相を色濃く残しており5期でも古い様相であろう。

SB18 位置：南部III 図版39

検出：II A 2層の上面で検出したが、3分の2は調査区域外にかかる。カマド：西壁中央に位置する粘土カマドである。煙道は比較的短く立ち上がり、先端の煙出しは既に失われている。煙道内部の上面は良く焼けている。煙道は良く残存しており、くり抜きの掘り方ではなく、煙道下部まで掘り抜いた後煙道部分を残して埋め戻している。燃焼部は既に崩れて袖の一部しか検出できなかった。右側袖基部には花崗岩の河川礫が埋め込まれている。床：貼床は認められない。南西隅付近がやや軟弱で低く凹んでいる。埋没：覆土は3層から成り、1層は暗褐色土、2層は黄褐色土に1層がブロック状に混入する。3層は部分的である。1層は自然埋没、2・3層はブロックの混入から人為埋没と考えられる。遺物出土状況：全体的に

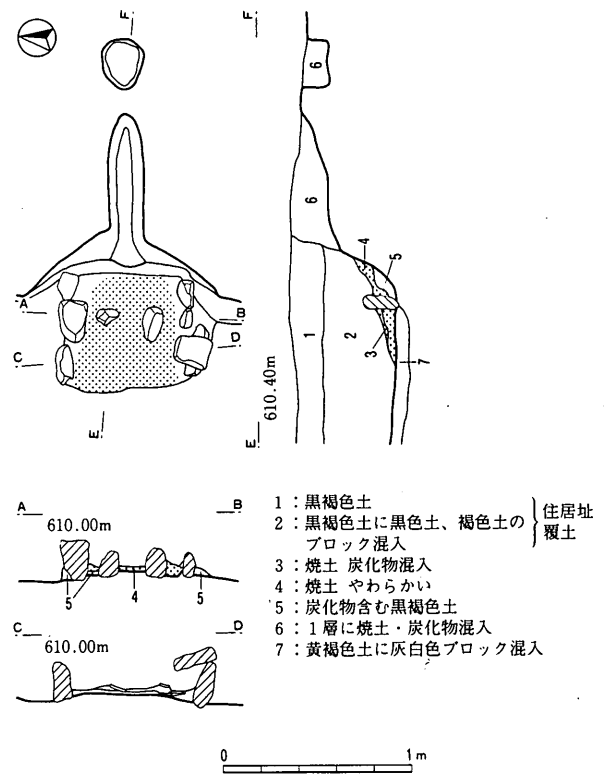
遺物の量は少ないが、比較的カマドからの出土が多く、土師器甕B(5)、甕C(6)などが出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB19 位置：南部III 図版37、PL12

検出：II A 2層上面において単独で検出した。北東隅と煙道の一部が調査区域外にかかる。カマド：函形カマドで粘土袖をもつと考えられるが、袖部分は既に崩落している。火床部には焼土が厚く堆積している。煙道はやや急に立ち上がると考えられる。床：部分的に貼床が認められる。柱穴内部に堅緻な床面が認められるが、その北側は軟弱であった。カマド右側、南東隅に灰溜めピットがある。柱穴：4基の支柱穴をもち、柱間間隔は主軸方向270cm、直交軸方向250cmで、わずかに矩形に配している。掘り方は円～楕円形を呈し、20～45cmの深さをもつ。埋没：覆土は3層に分層され、1層は暗褐色土に小礫の混入がみられる。2層は暗褐色土、褐色土のブロックで構成される。3層は褐色土である。1層は自然、2・3層は人為埋没と考えられ、SB18の覆土に近似する。遺物出土状況：カマド及び灰溜めピットからの出土が多い。2層から砥石(図版193-11)が出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB20 位置：南部III 図版37・39、第10図、PL12

検出：II A 2層上面において単独で検出した。カマド：石組カマドと函形カマドの中間的形態を示し、方形の掘り方で、壁外に掘り込んでいる。天井部は崩落しており石組が袖状に残存している。両袖ともに3個ずつ河川礫を配列している。使用した石材は花崗岩、硬砂岩から成る。石製支脚が住居址の壁を結ぶ線上に位置し、その前面の火床には焼土が広がっている。煙道は比較的急に立ち上がり、離れて煙出しのピットがある。床：全面に貼床が認められた。荒掘り後10cm程埋め戻し叩き締めている。南東隅に70cm大の楕円形の浅いピットがある。埋没：覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土で淘汰が良く自然埋没と考えられ、2層は黒褐色土に黄褐色土のブロックを多量に含む人為的埋没土である。遺物出土状況：カマドからの出土が多く、須恵器や土師器甕類(6～8)の破片や墨書土器(図版166-6)などが火床上面から出土している。特に須恵器甕A(8)は破片の状態で投げ込まれたような出土状況である。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。



第10図 SB20カマド実測図

SB21 位置：南部III 図版45

検出：II A 2層上面で検出したが削平が激しく焼土のみの確認であり、住居址とするには難があったが、焼土をカマド火床と考えて住居址とした。プランその他は全く不明であるが東カマドのプランが想定される。遺物出土状況：焼土内より須恵器杯A(1～4)が積み重なりまとまって出土した。複数の字句が記された墨書土器(図版166-7)もこの中から出土している。時期：遺物の様相から2期の所産と考えられる。

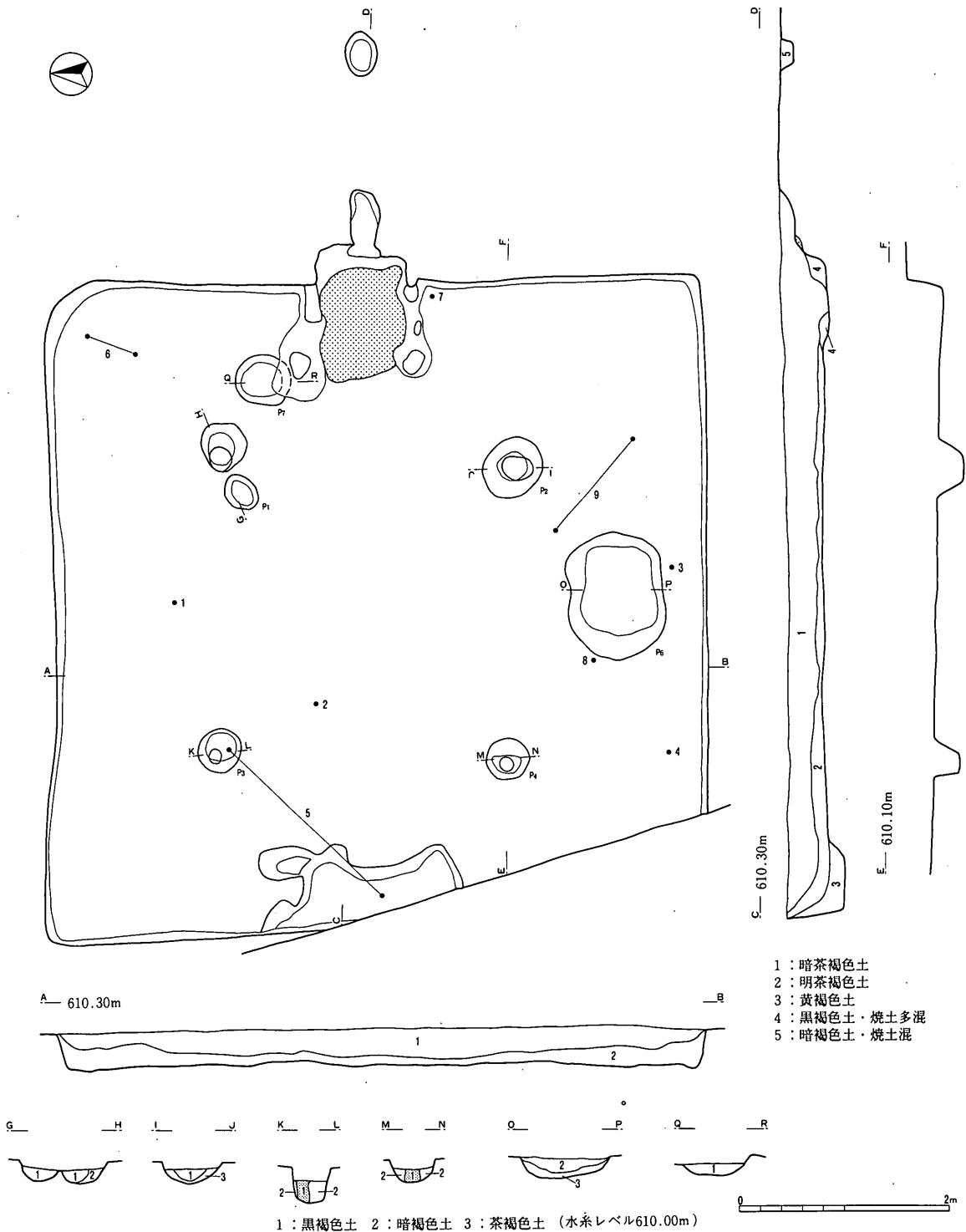
SB22 位置：南部III 図版37

検出：II A 2層上面において暗褐色土の落ち込みとして単独で検出した。プランは方形であるが、やや不整となる。カマド：粘土カマドと考えられるが燃焼部・煙道部共に崩落しており、燃焼部は火床のみの検

出となった。火床には焼土が厚く堆積していた。煙道は急に立ち上がり、やや離れて煙出しのピットがある。床：床面の認定は困難であり、堅緻な面はなかったが、荒掘り後10cmほど埋め戻しがみられ、カマド部分では埋め戻しが50cmにも及んでいた。床面はほぼ平坦である。埋没：覆土は3層から成り、1層は暗褐色土の自然埋没と考えられ、2・3層は部分的に認められるだけである。遺物出土状況：覆土からの出土がほとんどである。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB23 位置：南部III 図版44

検出：II A 2層上面でSD7に切られて検出された。西側の2分の1が調査区域外にかかる。カマド：カマ



第11図 SB24実測図

ド掘り方を円形に壁外に掘り込むタイプである。煙道は短く立ち上がり、煙道口に花崗岩の中礫がある。燃焼部と天井部は既に潰れている。右袖部には花崗岩の河川礫が1個埋め込まれている。左袖にも本来は存在し抜き取られたと考えられるが、抜き取り痕は検出できなかった。火床中央やや南に石製支脚がある。床：II F層を切り込んでおり、細礫を敷き詰めている。埋没：覆土は3層に分層され、1層は茶褐色土、2層は黒褐色土、3層は黄褐色土から成り、いずれも小礫を含む自然埋没土と考えられる。遺物出土状況：2層及びカマドからの出土が多い。カマドからは土師器甕B(7~11)、甕C(12)、灰釉陶器椀(6)、段皿(4)、軟質須恵器杯A(3)などが出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

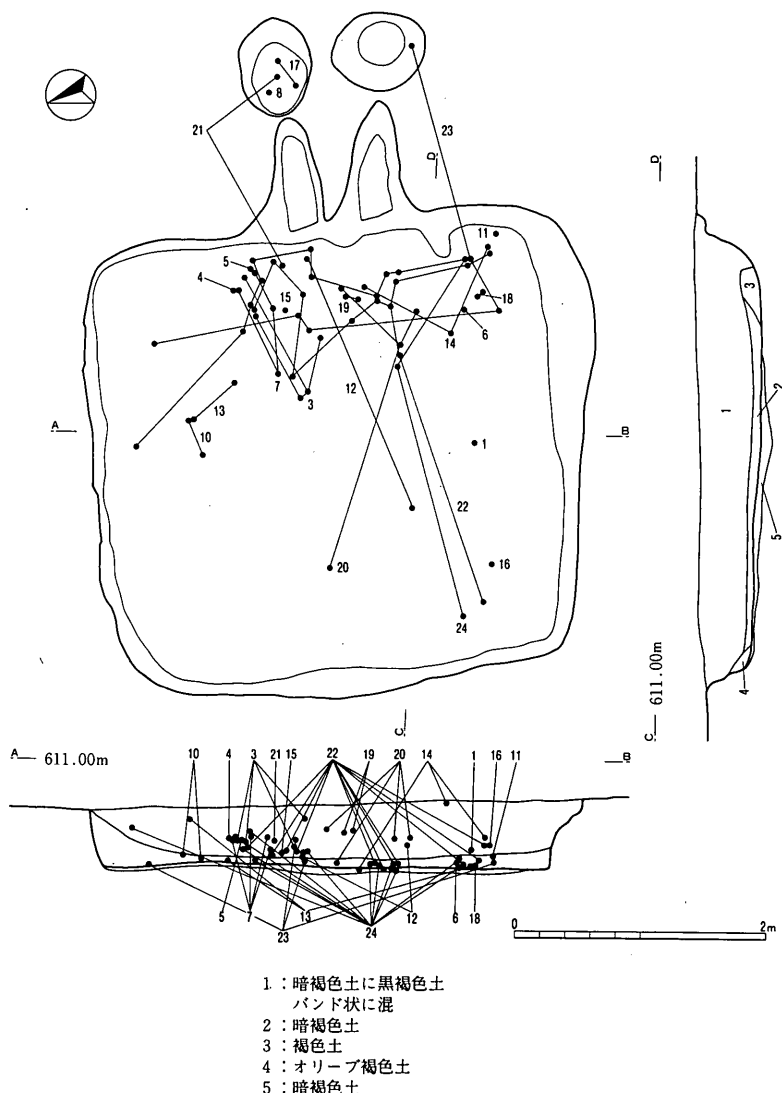
SB24 位置：南部III 図版38、第11図、PL12

検出：II A 2層上面で暗茶褐色土の落ち込みを単独で確認した。比較的大型で方形プランをもつ。カマド：東壁のほぼ中央に位置する。函形カマドで袖石等はまったく無く、粘土袖が確認された。燃焼部奥壁は赤変しており、火床にも焼土が厚く堆積していた。煙道は比較的急に立ち上がり、その1m先に煙出しがある。床：ほぼ平坦な床面である。貼床は認められないが堅緻である。西壁と南壁下中央に比較的大きなピットがある。柱穴：4基の支柱穴が検出され、柱間間隔はいずれも280cmと等間隔で方形に配される。柱掘り方は円形で40~55cm、深さ20~35cmを測る。すべての柱穴に柱痕跡を確認した。埋没：覆土は2層に分層され、1層は暗茶褐色土、2層は暗茶褐色土に褐色土粒が入り自然埋没を示す。遺物出土状況：須恵器を中心として出土しているが遺物量は多くない。P4の柱痕跡から鉄製品、また、P5から土師器甕Bが破片の状態であるがまとまって出土している。時期：遺物の様相から4期の所産と考えられる。

SB25 位置：南部III

図版38

検出：II A 2層上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。プランは南壁がわずかに張り出す。カマド：火床及び煙道のみを検出であり、袖・支脚などはない。煙道は比較的緩やかに立ち上がり、煙出しピットにつながる。煙道口はV字状の掘り方もち、天井部は潰れている。火床には焼土が厚く堆積しており、その下は赤変している。床：中央部分に堅緻な叩きの床がみられ、その周囲は軟弱である。軟弱な部分には周溝状の掘り方が巡っている。北西隅には花崗岩の扁平な河川礫が据え付けられている。また、南東隅寄には灰溜めピットと考えられる不整なピットがある。埋没：覆土は3層に分



第12図 SB26遺物出土状況図

層され、1～3層とも暗褐色土を主体としており、漸移的に変化する自然埋没と考えられる。なお2層は部分的にしか存在しない。遺物出土状況：黒色土器Aを中心として3層及びカマド周辺からの出土が多い。主な床面遺物としては黒色土器杯A(1・2・5・6)、皿(9)、カマドからは土師器甕B(14)などが出土している。特記すべき遺物としては銅製帯金具巡方(図版91-49)が北東隅付近の床面から出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB26 位置：南部Ⅲ 図版35、第12図、PL13

検出：II A 2層上面においてST12を切るように検出した。当初カマドが2基あり2軒の切り合いとして捉えたが、掘り下げの結果、土層に変化がみられないことなどから切り合い関係として捉えるよりも建替えと判断した。カマド：煙道のみを検出した。煙道は緩やかに立ち上がりその先端に煙出しのピットがある。煙出しピットの部分には須恵器甕(21)や土師器甕B(17)が入れられ、その上に石が入れられている。火床は既がない。建替え：プラン、土層及びカマド構造の類似性などから時間的連続性のあるものと考えられる。これは遺物の面からも裏付けられ、煙道先のピット出土の須恵器甕が覆土のものと接合している。プラン及び構造はそのまま、カマドのみを南に移している。カマド：古いカマドのすぐ南につくられており南東隅に寄る。形態は古いカマドと同様であるが、煙道はやや急に立ち上がる。粘土カマドと考えられ、袖基部にその痕跡がある。火床はわずかに凹み、焼土が堆積している。床：全面に貼床が認められ、特に中央部分が堅緻である。南東隅に焼土の分布が見られ、ごく浅い落ち込みが見られた。埋没：覆土は2層に分層される。1・2層ともII A 1層を基調とする暗褐色土であり、一連の堆積と考えられる。遺物出土状況：覆土及びカマド周辺からの出土が多い。黒色土器杯A、須恵器杯A、杯B、土師器甕B、須恵器甕Dなどが出土している。須恵器甕D(22～24)はいずれも胴部から底部にかけて残存しており、口縁部を欠くもので破片の状態出土している。これらはいずれも広い範囲にわたって接合しており、まとめて投棄された状況である。墨書土器(図版166-8)は覆土・カマド・灰溜めピット出土のものと接合している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

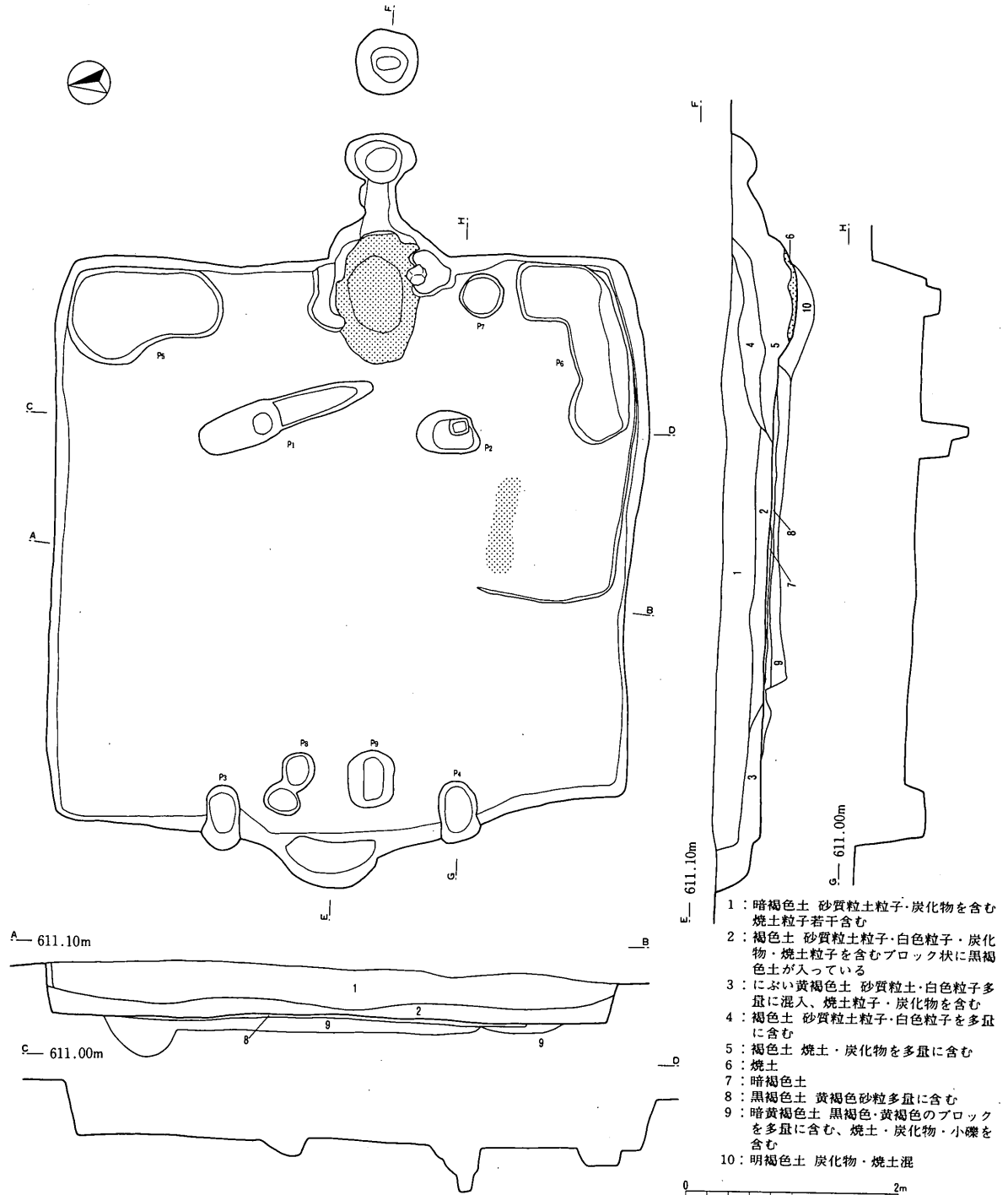
SB27 位置：南部Ⅲ 図版33・35

検出：II A 2層上面において黒褐色土の落ち込みを確認したが、プランが不整形でありカマドも2基確認され、2軒の切り合いと判断したが、掘り下げの結果建替えと判断した。カマド：東壁やや南に位置し、煙道と火床のみを検出した。火床は新床面の下に発見された。建替え：当初切り合い関係として捉えたが、遺物などから連続的な建替えと判断した。カマドの移動にもなって南壁を南に拡張している。東西方向はやや縮小されている。土層等から不連続は確認されず、北壁は古段階のものを使用したと考えられる。SB26に先行すると考えられ、建替えの方法など若干の違いをみせている。カマド：古段階のカマドの南、東壁やや南に位置している。煙道及び本体は完全に崩れている。函形カマドで粘土で構築する。煙道は比較的急激に立ち上がり、その先端に煙出しピットがある。燃焼部には厚く焼土が覆い、その上面を黒褐色土に黄褐色土粘土混じりの土が覆っている。床：部分的に貼床が認められ、中央やや北側に特に堅緻な部分が認められる。諸施設：南壁中央部分に張り出しがあり、出入口施設の可能性がある。カマド右側、南東隅に灰溜めピットが見られ不整形な楕円で浅い。その他小ピットが3基みられる。埋没：覆土は3層に分層される。2・3層は黒褐色土に黄褐色土ブロックの混じる人為埋没土であり、1層は自然埋没土で部分的である。遺物出土状況：遺物量は比較的多く、床面及び3層からの出土が多い。南壁付近の床面に須恵器蓋(8～13)が集中してみられる。また墨書土器(1・8)も灰溜めピット上面から出土しており、1はほぼ完形である。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB29 位置：南部Ⅲ 図版32・33、第13図、PL13

検出：II A 2層上面で暗褐色土の落ち込みを確認したが、西・南壁がやや不明瞭な状態であった。カマド：

東壁中央に位置する函形カマドであるが、掘り方はやや丸みを帯びる。煙道、燃焼部共に崩落している。燃焼部には崩落した粘土の残りがみられ、この粘土を取り除くと厚く焼土が堆積しており、火床は赤変している。右袖基部に硬砂岩製の袖石が残存する。煙道部は比較的急に立ち上りその先端部で一旦凹み、やや離れて煙出しのピットがある。床：ほぼ全面に貼床が認められたが、南東部分でやや低くなり、焼土も検出されており、また、住居址プランも南壁で崩れることなどから、本址に先行する住居址が存在した可能性があるが、一応1軒と判断した。柱穴：主柱穴は4基で柱間間隔は主軸方向に長く270cm、直交軸方向で185cmを測り、矩形に配され、P3・4は西壁につく。なおP1は覆土中から検出され、頭骨が発見された。これは住居廃絶後にP1に重複して作られた墓墳と考えられる。頭骨の残存状況は非常に悪く、年令・性別



第13図 SB29実測図

等は観察することができなかった。諸施設：P3、P4間が張り出し、ステップ状になっており、出入口施設の可能性がある。カマドの両側に焼土を含む不整形な落ち込みがあり、灰溜め施設と考えられる。その他小ピットが7基ある。埋没：覆土は3分層される。1層は暗褐色土、2層は褐色土に黒褐色土ブロックが入り、いずれも細礫が入り、3層は西壁部分に分布する。2層を埋め戻した後は自然埋没したものと考えられる。遺物出土状況：黒色土器を中心として、2層、カマド及びその周辺に集中して出土する。鉄製品が床面、カマド上部より出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB31 位置：南部III 図版32・33

検出：II A 2層上面で黒褐色土の落ち込みを検出したが、カマドが2基あり、また覆土中の礫の量の差がみられSB32に切られると判断した。上面は厚く風化礫に覆われており、II A 1層はほとんど無い。カマド：東壁中央に位置する函形カマドであるが崩れており、煙道部はその名残があるだけで削平されている。燃焼部は破壊されており、特に左袖は完全に破壊されているが、右袖は硬砂岩を埋め込み短い袖を作り、そのうえに天井石を2個載せている。床：SB32に破壊されほとんど残存しないが、地山をそのまま床として使用している。床面は砂礫層で不安定である。埋没：覆土は2分層される。1・2層とも黒褐色土で小礫を含む自然埋没土である。遺物出土状況：遺物量は少ないが、カマドからまとまって出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。SB32に先行するが5期の中に収まる。

SB32 位置：南部III 図版32

検出：SB31同様II A 2層上面においてSB31を切るように検出された。カマド：北壁西寄りに位置し、函形カマドである。燃焼部は黒褐色土(礫をほとんど含まない)で覆われているが、崩れ落ちている。袖及び支脚はない。上半部が削平されている煙道部は急に立ち上がり、わずかに離れて煙出しピットがある。煙出しのピットには中～大礫が5個入れられている。カマド右脇に白色粘土が集積されていた。床：全面に貼床が認められる。褐色土を含む黒褐色土を埋め戻し、さらにその上に薄く砂質土を貼っている。埋没：覆土は2層に分層される。1・2層とも黒褐色土で小礫を多量に含む自然埋没土である。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。SB31と共にほとんど時期差が認められず、連続して構築されたものと考えられる。

SB33 位置：南部II 図版31

検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：東壁やや北寄りに位置する函形カマドである。煙道部は既に削平されて存在しない。燃焼部も残存状況は非常に悪く袖や支脚等は認められない。火床の焼土は少なく、赤変するような火床はない。床：埋め戻し等は観察されず、地山の褐色砂質土をそのまま床面として使用している。小ピット3基が穿たれている。また南壁中央にピット状の張り出しが1対あり、出入口部を想像させる。埋没：覆土は単層で暗オリーブ褐色土に褐色土ブロックが入り人為埋没土の様相を示す。遺物出土状況：比較的遺物は少なく、カマドと南壁下に広がる。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB34 位置：北部III 図版68・70、第14図

検出：II A 2層上面で長方形の落ち込みを確認した。SK1023・1086に切られ、ST115を切るように検出したが、ST115はその後の検討により切り合い関係が逆転した。カマド：カマド上部は既に削平されて失われている。燃焼部の掘り方は不整な楕円形に張り出す。わずかに基部が残存する袖部は地山の土に黄褐色粘土の混入した土を使用し、その内面は焼土化している。煙道部は火床からそのまま緩やかに立ち上がり、1m程離れて煙出しのピットがある。床：中央部分に堅緻な貼床が認められる。中央やや北寄りに焼土を含む浅い落ち込みが見られる。諸施設：カマド右、南東隅に不整楕円の比較的大きな落ち込み(P1)があり、灰溜め施設と考えられる。西壁と北壁直下に比較的短い周溝が巡る。また西壁下に小ピットが対をな

すようにあり、出入口部に関連する可能性がある。埋没：覆土は2層に分層され、1層は暗褐色土で覆土のほとんどを占め、2層は西壁下に部分的に存在するのみである。遺物出土状況：カマド及びその周辺に集中するが全体量は多くない。灰溜ピットからは須恵器杯A(1)、蓋(3)の他に石製の紡錘車(図版192-2)が出土している。時期：遺物の様相から3期の所産と考えられる。

SB35 位置：南部III
図版42

検出：II A 2層上面で検出したがそのほとんどをSD7に破壊されている。カマド：火床のみで、煙道、袖等は

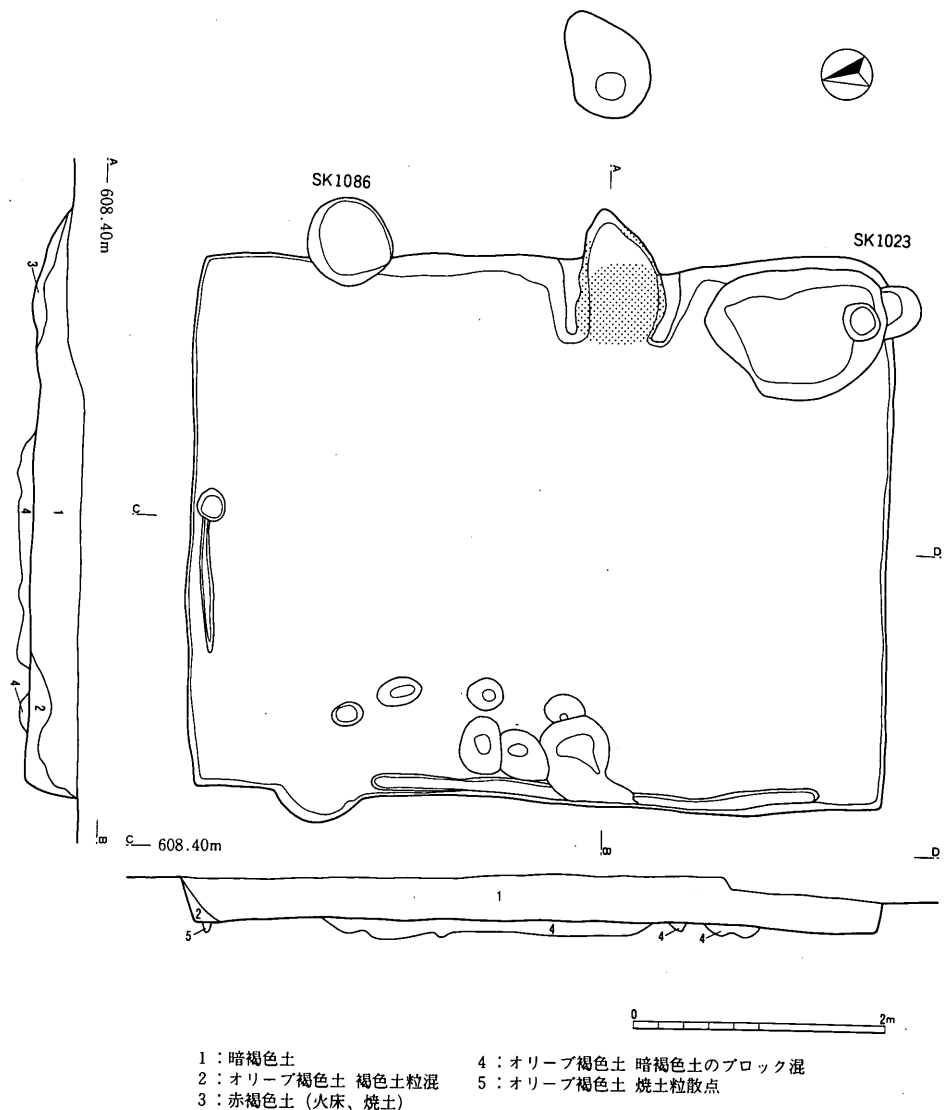
SD7に破壊されている。焼土の分布から壁外にかなり張り出すタイプと考えられる。床：床面は堅緻な部分もなく確認に苦労した。地山をそのまま床面として使用するタイプである。埋没：覆土は単層で、暗褐色土に褐色ブロックが入り、人為埋没の可能性がある。遺物出土状況：覆土から数片の土器片と鉄製品が出土しているのみである。時期：遺物からの決定は難しく、直線的に並ぶSB6・8・23などの住居址の配置から7期の所産と考える。

SB36 位置：北部III 図版70

検出：II A 2層上面においてオリブ褐色土の落ち込みを確認した。掘り方は非常に浅く上面はかなり削平されている。カマド：西壁中央に位置する壁外に張り出す函形カマドで、掘り方はやや丸みをもつ。袖部分の残りは非常に悪く、その痕跡を確認したにすぎない。煙道、煙出しのピットは既に失われている。床：床面には堅緻な面はみられず検出には苦労したが、カマド火床より床面を決めた。カマド左に焼土を含む浅い落ち込みがある。埋没：覆土はオリブ褐色土の単層で、自然埋没と考えられる。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。覆土から鉄製品が出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB37 位置：南部III 図版41・42

検出：SB15に切られSB11を切る。煙道、カマド火床のみ検出したがプランその他は不明である。また煙出

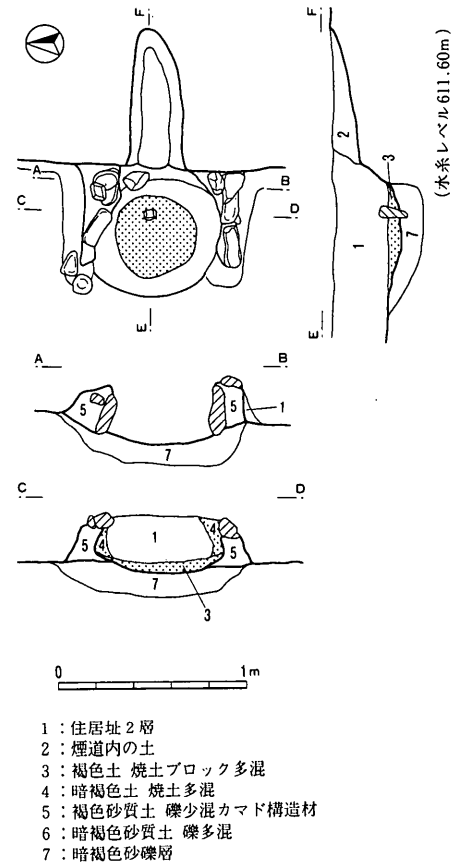


第14図 SB34実測図

しピットはSB10に接している。カマド：煙道は比較的緩やかに立ち上がりその先端に煙出しのピットがある。煙道内は良く焼け、途中で陥没のあとがみられる。火床にはまとまった焼土がみられ、良く使用されている。遺物出土状況：火床より土師器甕Bの細片が出土しているだけである。時期：5期のSB11を切ること、土師器甕Bの形態から6期と判断した。

SB38 位置：南部 I 図版21・22、第15図、PL14

検出：II A 2層上面で単独で検出した。煙出しのピットは調査区域外に入る。カマド：残存状況は非常に良好である。構築は粘土と小ぶりの河川礫から成る。まず、荒掘り時に火床部分を深く円形に掘り凹め、埋め戻した後、袖部を形成している。袖部は奥壁に柱状の河川礫を埋め込み、細礫混じりの褐色砂質土で、成形した後上面に拳大の礫を9個載せている。火床中央やや奥壁よりに硬砂岩質の支脚が位置する。煙道は比較的緩やかに立ち上がる。床：貼床は認められないが、南壁下を除き堅緻である。諸施設：灰溜めと思われるピットがカマドの両側にある。右側のピットは不整形な落ち込みで硬砂岩の柱状の河川礫が9個検出された。左側のピットはほぼ円形の落ち込みでここからも硬砂岩の河川礫が検出されている。いずれのピットにも焼土、炭化物層が存在する。このほかに小ピットが1基ある。やや幅広の周溝が南壁下の一部に存在し、西壁下の周溝内の中央部分に對のピット状の落ち込みがある。埋没：覆土は2層に分層される。2層は暗褐色土に褐色ブロックが入り人為埋没の可能性が高く、1層はそれを覆うようなレンズ状の堆積を示す。遺物出土状況：カマド及びピットからの出土が多い。須恵器甕(9)はSB40出土のものと同焼成、形態が近似し同一個体と判断した。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。



第15図 SB38カマド実測図

SB39 位置：南部 I 図版21、第16図、PL14

検出：II A 2層上面で単独で検出した。カマド：北壁やや北西隅寄りに位置する函形カマドである。天井部は崩落しており、袖部も残存状況は悪い。煙道は比較的急激に立ち上がり、やや離れて煙出しのピットがある。床：貼床は検出されなかったが、堅緻で良好な床面である。カマド部分を除き幅40~80cmのやや幅広の掘り方がある。カマド左脇に小ピットがある。埋没：覆土は3層に分層された。1・2層とも暗褐色土で、3層は暗褐色土に褐色ブロックを含む。3層が人為的に埋め戻された後、1・2層がレンズ状に堆積している。遺物出土状況：土師器甕類(3・4・6~8)を中心にカマドとその周辺に集中している。西壁下中央やや南寄りの床面よりほぼ完形の小型甕D(3)が、カマド正面の床面より須恵器甕B(9)が出土している。時期：遺物の様相から6~7期にかけての所産と考えられる。

SB40 位置：南部 I 図版18

検出：II A 2層上面において検出したが、3分の2は調査区域外にかかる。カマド：西壁中央に位置する。煙道部は既に失われており燃焼部のみの検出になった。燃焼部は崩落しており、固く締まった褐色土が上面を覆っていた。袖、支脚等はない。カマド南にカマド状の石組の施設があるが焼土等は全く検出することができなかった。この施設は花崗岩の人頭大の礫4個から成るが、袖に見られるような粘土は検出され

ていない。カマドの作り替えの途中で放棄された可能性もあるが、用途は不明である。床：II F層に掘り方が及び、褐色土を貼床し、堅緻な床面を形成している。埋没：覆土は4層に分層される。1層は黒褐色土に細礫を含み、2層は暗褐色砂質土に褐色土ブロックを含む。3・4層は床面近くに部分的に分布する。2～4層を人為的に埋め戻したあとに1層がレンズ状に堆積している。遺物出土状況：カマドに集中する。墨書土器(図版166-12)は石組施設内と床面のものが接合している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB42 位置：南部III

図版32

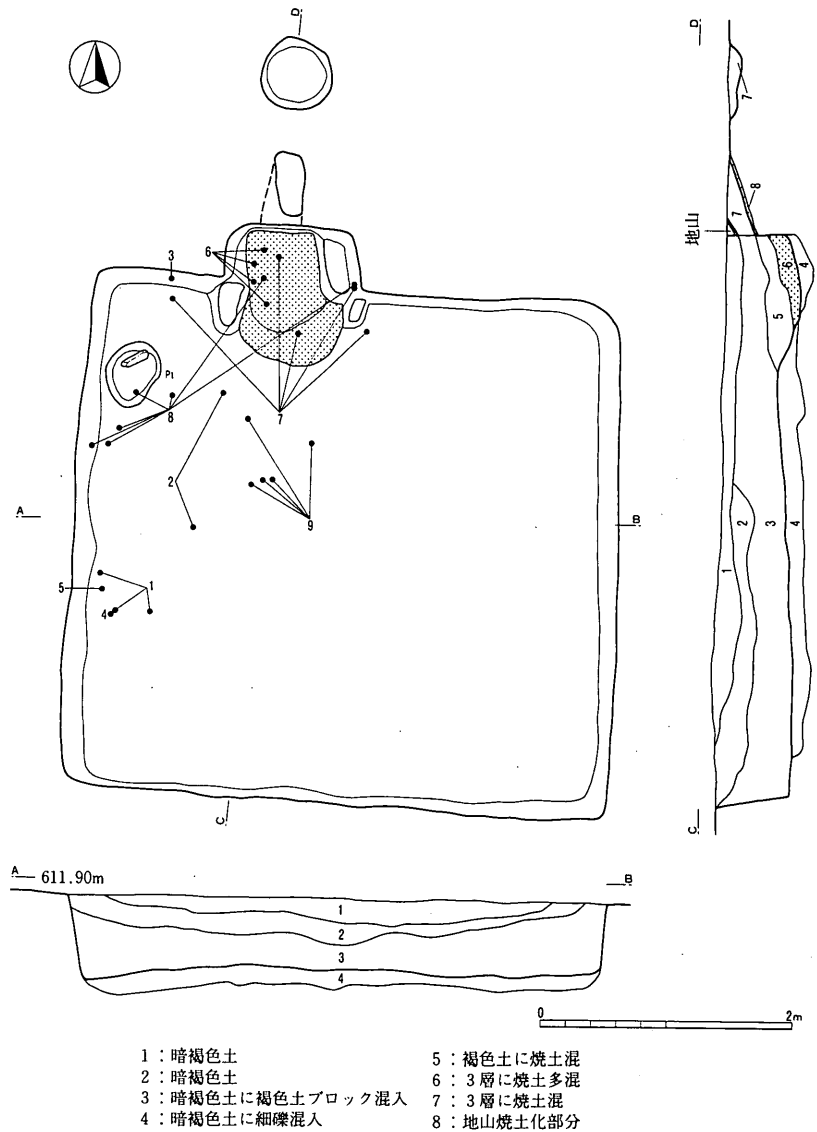
検出：II A 2層上面で検出したが2分の1は調査区域外にかかる。

カマド：東壁ほぼ中央に位置する函形カマドであるが、東壁全体がやや張り出しているため壁外にさほど張り出していない。煙道は比

較的急に立ち上がり、その先に煙出しのピットがある。燃烧部の残りは悪く、袖の一部分と火床を検出したのみである。火床には焼土が顕著に認められ、奥壁や袖内面は焼けて硬化している。火床中央には支脚抜取りの痕跡と思われる落ち込みが存在する。床：II A 2層に切り込み、地山をそのまま床面として使用している。埋没：覆土は2層からなり、下層は暗褐色土に褐色ブロックが入り、人為埋没を示す。遺物出土状況：図示したものはすべてカマド火床のものである。カマド袖より鉄製品が出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB43 位置：南部II 図版26

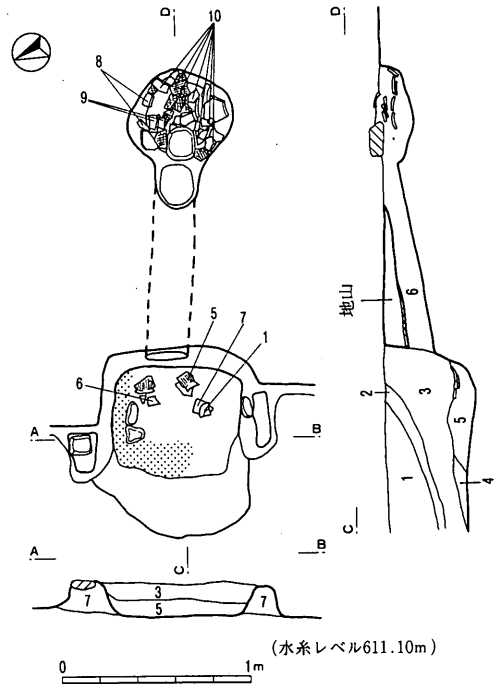
検出：II A 2層上面で単独で検出された。カマド：西壁中央に位置する粘土カマドである。残存状況はきわめて悪く、煙道及び火床を検出したにすぎない。煙道は急に立ち上がり、煙出しのピットは存在しない。煙道内部は焼けて硬化している。火床部上面には崩れたカマドの粘土が焼土ブロックを含みながら覆っている。カマドの粘土には黒褐色土に褐色土ブロックを含む地山の土を使用している。床：全面にわたって貼床が認められる。埋没：覆土は2層に分層され、1・2層とも風化礫を含むII A 1層を基調とする暗褐色土で漸移的に変化する自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド及びその周辺に集中して検出された。土師器壺類(6~10)の出土が多く、カマドを中心に広範囲にわたって接合している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。



第16図 SB39実測図

SB44 位置：南部II 図版26、第17図

検出：II A 2層上面で単独で検出された。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに長く延びその先端で煙出しのピットとつながる。煙出しのピットには須恵器甕D (10) 1個体分が潰れた形で検出され、その上面に硬砂岩の平石が置かれていた。燃烧部の天井部は既に崩れ、袖基部と火床を検出したにすぎない。燃烧部は袖の一部と火床が検出された。火床は住居址の壁を結ぶ線上から内側にかけて検出され奥壁にも焼土化し硬化した面が確認された。袖は褐色砂質土を用い、硬砂岩の拳大の礫を含んでいる。床：貼床が認められ、ほぼ全面にわたって平坦で堅緻な床面である。カマド左脇に円形の落ち込みがあり、覆土に炭化物を含み灰溜めと考えられる。埋没：覆土は4層に分層したが、いずれも暗褐色土に褐色ブロックを含み、ブロックの多少により分層した。ブロックの混入から人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：覆土及び床面からの遺物の出土は僅少であり、カマド及び煙出しのピットに集中する。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。



- (水糸レベル611.10m)
- 0 1m
- 1：暗褐色土 褐色土ブロック混入
 - 2：暗褐色土 褐色土ブロック混入 (1層より少)
 - 3：暗褐色土 焼土粒混入
 - 4：黒褐色土 焼土ブロック混入
 - 5：黒褐色土 焼土ブロック混入
 - 6：黒褐色土 褐色土ブロック混入
 - 7：褐色砂質土

第17図 SB44カマド実測図

SB45 位置：南部I 図版14

検出：遺跡の南限確認調査において検出された遺構である。II F層上面において確認し、プランが非常に小さく住居址と認定するにはやや難があったが、カマドも検出されたことから住居址として認定した。カマド：北壁やや東寄りに位置するが、一部をトレンチにより破壊されている。火床のみを確認した。煙道は火床から急激に立ち上がりほとんど残存しない。袖は確認されなかったが、暗褐色の砂質土の崩落した土を検出した。床：部分的に貼床が残存するが非常に薄く、一部II F層の礫が露出している。本来は川砂を全面に貼床したと推定される。埋没：覆土は2層に分層したが、いずれも中礫を多量に含む暗褐色土で自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土からの出土がほとんどで量も少ない。須恵器壺A (SB46-6) はSB46と接合がみられた。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB46 位置：南部I 図版14・15

検出：II A 2層上面において検出した。SK 4に切られ、SB49を切ると判断したが、調査が2年度に亘ったためプランの確定にやや難があり、遺物にも混乱があると思われる。カマド：西壁北西隅に寄る粘土カマドである。煙道は緩く長く延び、その先端に煙出しのピットがある。燃烧部は袖の芯材と、火床の検出となった。袖は比較的小さい扁平な硬砂岩の河川礫を縦に並べて芯材とし、砂質の褐色土を粘土材として使用している。床：掘り方はII F層に達し、砂質土の貼床が部分的に認められるが、全体としては軟弱である。埋没：覆土は2層に分層したが、いずれも黒褐色土を主体とし黄褐色土粒の量により区別される一連の自然堆積と考えられる。遺物出土状況：覆土とカマドに集中する。須恵器杯A (1) が床面から完形で出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB47 位置：南部I 図版14

検出：水道管の付け替え工事により破壊されたことにより、カマドの一部が検出され遺構の存在が確認された。遺跡最南端に位置する。カマド：西壁中央に位置するが、本体は破壊され存在しない。左袖付近に

粘土のまとまりが見られた。床：荒掘り後砂利を埋め戻し、さらにその上に黄褐色粘質土を貼床して叩き締めている。南西隅に円形のピットがあり焼土・炭化物を含んでおり灰溜めのピットと考えられる。埋没：覆土は3層に分層される。1層は暗褐色土で小礫を含み、2・3層が黄褐色土であり、特に2層は黒褐色土のバンドを含んでいる。2・3層を人為的に埋め戻した後、1層が自然に堆積したものと考えられる。遺物出土状況：全体として出土は少なくカマド周辺にわずかにまとまる。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB48 位置：南部Ⅰ 図版16

検出：ⅡF層上面で検出したが、東壁は側道工事によって破壊されている。SK60を切り、SK11・59に切られる。カマド：東壁に位置すると考えられるが工事によって破壊されている。床面の焼土が南東隅に寄っているためカマドも中央よりやや南に寄っていると思われる。床：北側が高く中央から南側が低くなっている。この低い部分に貼床が存在する。床面上に焼土の分布が見られる。柱穴本来は4本柱穴と考えられるが3基の柱穴しか検出されなかった。いずれも円形の掘り方で17cm前後の深さをもつ。埋没：覆土は3層に分層された。1～3層とも小～大礫を含むが土質に若干の違いが見られ、また、層間に薄く焼土が堆積することなどから区分される。いずれも自然堆積と考えられるが、連続的な堆積ではない。遺物出土状況：覆土上層からの出土が多くなっている。床面からは須恵器杯A(6)、長頸壺A(17)などが出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB49 位置：南部Ⅰ 図版14・15

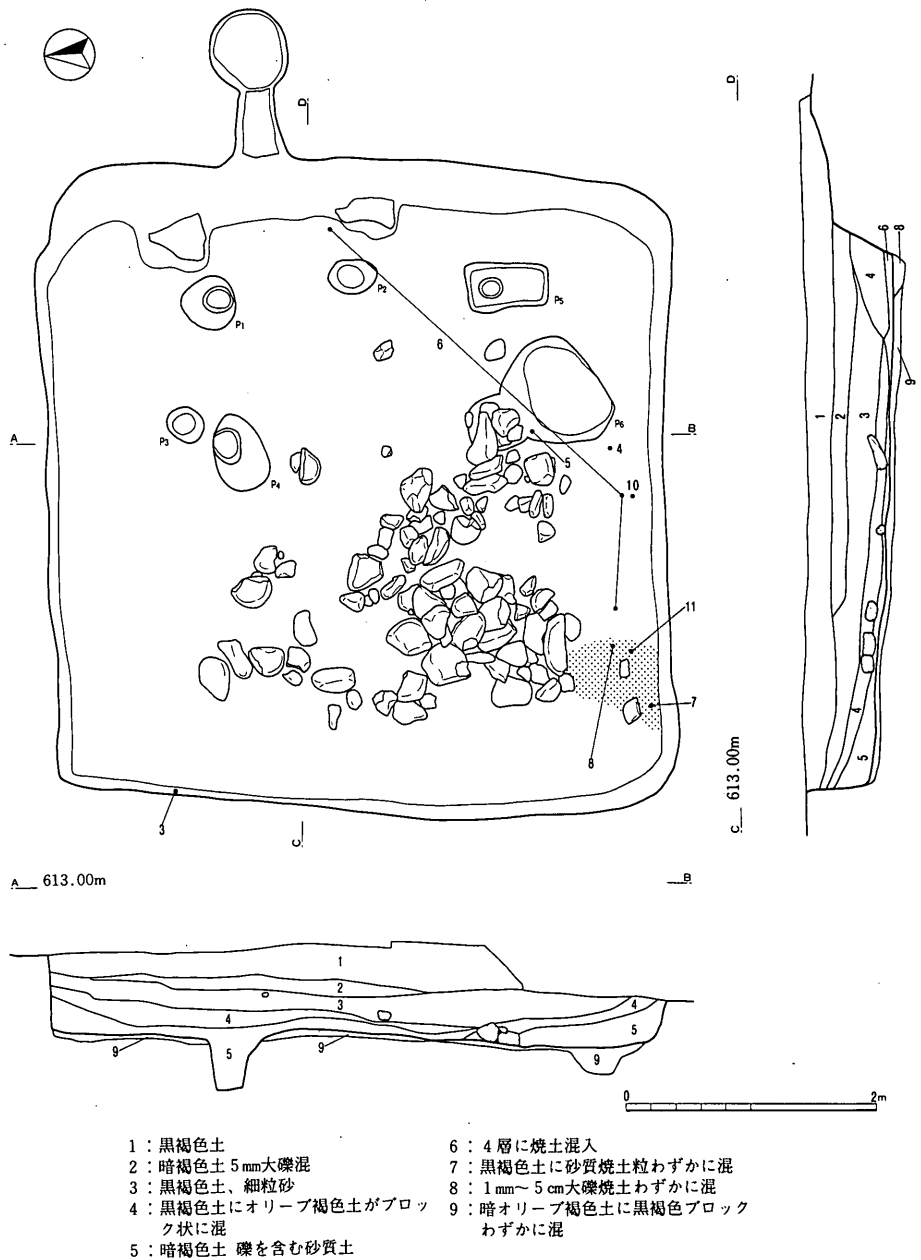
検出：ⅡA2層上面で南半SB46に切られるように検出された。カマド：西壁に位置する函形カマドである。ただしSB46に一部破壊されて完全な函形ではない。煙道は緩く長く立ち上がり、煙出しピットと連結する。燃焼部は火床のみ検出した。当初袖として残した褐色土はカマド粘土の崩れたものであった。カマド左脇に見られるピットはSB46に付く可能性がある。床：床面の認定には苦慮したが、カマドの火床などから確定をした。貼床は認められず軟弱である。埋没：覆土は2分層されるが1・2層とも黒褐色土を基調とする自然埋没土と考えられる。遺物出土状況：本址に付くのは3のみで、その他はSB46につく可能性が高い。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB50 位置：南部Ⅰ 図版15・17、第18図

検出：ⅡA2層上面において単独で検出された。カマド：西壁やや南に寄って検出された。燃焼部は完全に破壊されておりカマド石の抜取りの小ピットが検出されている。また、火床部に焼土はほとんど存在せず、使用された様子がみられない。煙道部は急に立ち上がり、煙出しと連結する。煙出しのピットには花崗岩の河川礫が4個入れられており、内1個は煙道との連結部分をふさぐように立てられていた。このほかに北東隅よりの床面から壁にかけて焼土の堆積が見られた。煙道などはなくカマドとしての施設を何も持たないが、西カマドを作り替えた可能性がある。これは遺物、特に土師器甕類が集中することからも可能性が高い。床：住居址周辺を除いて堅緻な貼床が認められる。住居址の周囲には周溝状のやや幅広の掘り方がある。柱穴：支柱穴は2基検出された。貼床が全面に施されているためほかの柱穴の存在は考えられない。その他小ピットが5基ある。埋没：覆土は5層に分層された。1・2層が暗褐色土に細礫を含み、3層は淘汰の良い細粒砂で、4層は黒褐色土に暗オリーブ褐色土のブロックが入る。5層は暗褐色土でほとんど遺物を含まない。5層が自然に堆積した後、4層を人為的に埋め戻し、さらに1～3層が自然に堆積している。特に4層埋没時に住居址の北東から中央部分にかけてカマド石の投棄が見られる。投棄された石は花崗岩の河川礫がほとんどで100個ほどに及んでおり、いずれも火を受けた跡が観察される。遺物出土状況：北東隅寄りの焼土部分に集中する(4・8・11)。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB51 位置：南部Ⅱ 図版31

検出：II A 2層上面において単独で検出された。プランは長方形でかなり長くなっている。当初プラン・カマドの確認に手間取り住居址として認定できなかった。カマド：東壁やや北寄りに位置するが、カマドの施設として検出されたのは火床と考えられる焼土のみでその他の施設はなく、カマドとして認定できるか疑問である。床：地山を直接床面としており、北側に向って緩やかに傾斜している。全体的に軟弱な床面である。柱穴：主柱穴は4基と考えられ各隅に寄る配置を見せる。柱間間隔は主軸方向で360cm直交軸方向で220cmを測る。南西隅の柱穴には硬砂岩の根石が入れられ、南東隅の柱穴は柱痕部分と考えられるところが一段低くなっている。その他小ピットが1基ある。埋没：覆土は単層でオリブ褐色土に褐色ブ

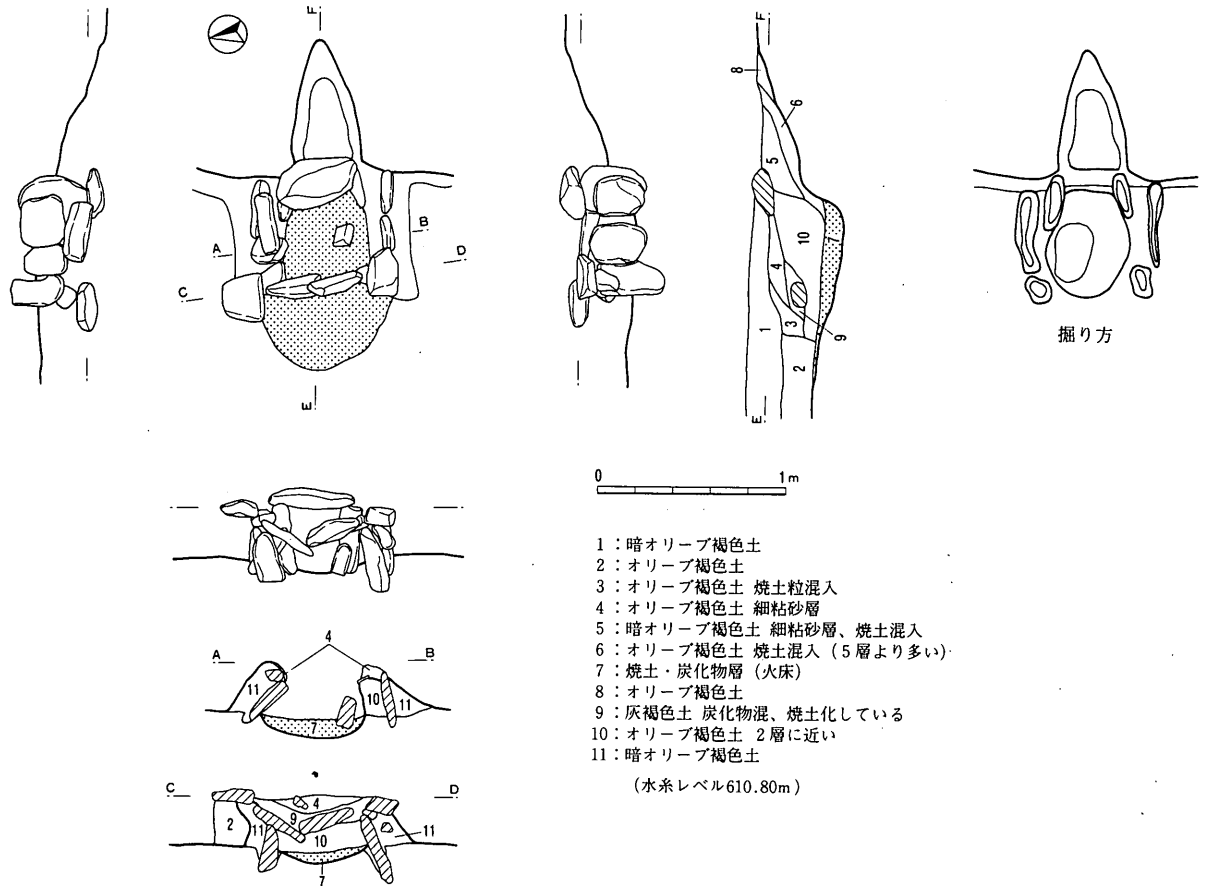


第18図 SB50礫出土状況図

ロックを含み人為的に埋められたものと考えられる。遺物出土状況：カマド周辺の床面付近に集中する。灰釉陶器碗(4)がほぼ完形で壁際から出土している。墨書土器図版166-14はカマド上層、図版166-13は南東隅の柱穴付近の床面から出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB52 位置：南部II 図版28・29、第19図、PL15

検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：東壁中央に位置する石組カマドで、ほぼ完全な形で残る。使用される石材は花崗岩と硬砂岩がほとんどで天井石の一部に閃緑岩が使われている。石組はまず煙道口の両側の奥壁に1対埋め込み、天井石を載せて煙道口を強化している。さらにその両側に3個ずつ石を埋め込み袖の芯材とし、焚口の天井に2個の石を組み合わせる天井としている。石組を充填する粘土には暗オリブ褐色土の粘質土を用いている。石製支脚が使われ、中心よりややずれている。煙道は比較的急に立ち上がり短い。床：全面にわたって埋め戻しが施されており、中央部分が堅緻である。諸施設：



第19図 SB52カマド実測図

ピットが4基ある。これらはややくずれた矩形の配列をもち、ピット間は250~300cmの間隔をもつもので柱穴の可能性もある。北壁下にやや幅広の周溝がある。埋没：覆土は3層に分層したが、いずれもII A 1層を基調とする土でII A 2層粒子の含有量に差が見られる。レンズ状に堆積しており自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド及びその周辺に集中する。墨書土器図版166-15・16が南隅の柱穴より、図版166-17がカマド脇周辺から出土している。また、砥石(図版194-14)が周溝西端から出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB53 位置：南部II 図版28・29、PL15

検出：II A 2層上面で単独で検出された。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は短かく上半は削平され、煙出しのピットはない。燃焼部は方形の掘り方で短い袖が残存する。両袖基部には硬砂岩が埋め込まれている。カマド前面に広がる散乱する石はカマドの天井石の可能性もある。カマド掘り方は荒掘り時にかなり深く掘り込んだ後、埋め戻されてカマド本体が構築されている。床：荒掘り後に全面にわたって埋め戻され、その上面が叩き締められている。カマド右側、南東隅に円形のピットがあり、遺物が多量に入れられており灰溜めピットと考えられる。埋没：覆土は2層に分層され、2層はオリーブ褐色土に褐色土ブロックが入る人為埋没土で、さらにその上を覆うのが暗オリーブ褐色土の自然埋没土である。遺物出土状況：カマド及び灰溜めピットからの出土が多い。墨書土器が2点出土しているが図版166-18は2層下部から、図版167-19は床面から出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB54 位置：南部II 図版28・29

検出：II A 2層上面で単独で検出された。カマド：北東中央やや南に位置する。函形カマドの範疇に入る

が掘り方は丸みを帯びて上面が崩れる。煙道は緩やかに短く立ち上がり、わずかに離れて煙出しのピットがある。煙出しのピットには拳大の礫が2個入る。燃烧部は天井部・袖部共に崩れている。床：ほぼ全面にわたって埋め戻しが行なわれており、その上面は固く叩き締められている。荒掘りはかなり凸凹がみられる。カマド右脇に灰溜めのピットがある。埋没：覆土は2層から成る。1層は黒褐色土、2層は褐色土に黒褐色土ブロックが入り、床面から2層にかけて拳大～人頭大の礫の投棄がみられる。住居廃絶後に、カマド石の投棄とともに2層が人為的に埋められ、1層が自然に堆積したと考えられる。遺物出土状況：出土量は少なく、カマド付近に集中する。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB55 位置：南部II 図版29

検出：II A 2層上面で単独で検出した。検出段階では不鮮明なプランでしかつかめなかった。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。残存状況は極めて悪く、煙道等はなく本体も崩れている。燃烧部掘り方は壁への掘り込みが浅い。火床は円形に浅く凹み、その上面に天井部の崩落した粘土が覆っていた。床：全面にわたって埋め戻しが確認され、平坦で良く叩き締められている。諸施設：周溝がカマド部分とカマド対辺中央を除き全周する。小ピットが5基ある。埋没：覆土は3層に分層され、1層が黒褐色土で、2・3層がオリブ褐色土に褐色ブロックが入る。2・3層を人為的に埋め戻した後、1層が自然に堆積したと考えられる。遺物出土状況：カマド周辺に集中している。1層より墨書土器(図版187-489)が出土し、鉄製品(図版190-31)は北壁中央の壁際から出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB56 位置：南部II 図版27・28

検出：II A 2層上面でSB57・ST28に切られるように検出された。いずれも黒褐色土の落ち込みであるが色調に差がみられ本址が一番古いことが確認された。カマド：西壁やや南に位置する函形カマドである。上面はかなり削平を受けており煙道はほとんど残存しない。燃烧部は火床のみの検出となり、その他の施設及び構築材等は検出されていない。床：荒掘り後の埋め戻しを確認したが全面軟弱な床となっている。埋没：覆土は3層に分層され、1・2層ともII A 1層を基調とし、3層はII A 2層を基調とし、部分的に分布する。いずれも自然埋没と考えられる。遺物出土状況：土師器甕類を中心としてカマド及び南西隅に集中する。南西隅に集中することから所謂貯蔵施設があった可能性がある。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB57 位置：南部II 図版27

検出：II A 2層上面においてSB56を切るように検出された。カマド：東壁やや南に位置する函形カマドである。煙道部は完全に失われている。燃烧部の施設もほとんど残存していないが、わずかに袖の一部が残存する。石製支脚は火床中央をはずれ奥壁近くに位置する。床：荒掘り後の埋め戻しが観察されたが、南半で深くなっている。小ピットが3基ある。埋没：覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土、2層はにぶい黄褐色土で連続的な自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマドに集中している(1・3・4・7~9)。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

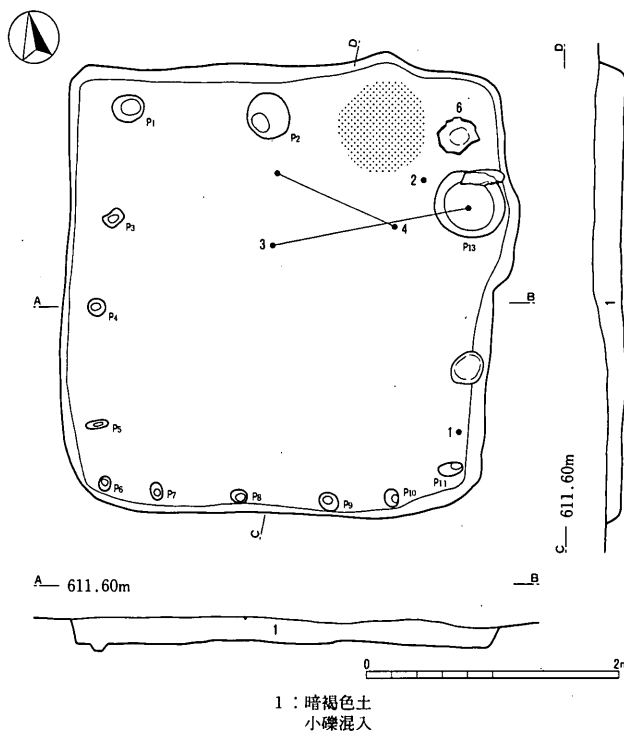
SB58 位置：南部II 図版27、第20図

検出：II A 2層上面において単独で検出されたが、かなり削平を受けて浅い。カマド：北壁北東隅に寄る。当初東カマドとして調査をしたが焼土等は確認されず、北壁に火床を検出した。煙道は既に失われ火床のみ検出した。床：地山をそのまま床面とし、ほぼ平坦であるが堅緻な面はない。柱穴：主柱となるようなピットはないが、西壁と南壁に小ピットが巡っている。西壁に4基、南壁に6基あり、柱間は40~90cmで、やや不規則に配列する。埋没：覆土は暗褐色で砂質土の単層である。遺物出土状況：カマド右脇に集中して出土している。特に須恵器甕D(6)は上半が失われているが、据え付けられた状態を保っている。また、墨書土器(図版167-20)はピット内と覆土のものが接合している。時期：遺物の様相から5期の所産と考え

られる。

SB59 位置：南部II 図版27

検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：東壁やや南に位置する石組カマドと考えられる。カマドは破壊されており、焚口部分の袖石は抜取られ、抜取り痕が検出された。側壁には当初それぞれ3個の花崗岩の河川礫が使用されたと考えられるが、焚口部分は抜取られ、左袖石も倒れている。掘り方は方形に張り出して掘られ、袖石を組みながら埋め戻している。床：地山をそのまま床面として使用している。北西隅と南東隅に人頭大の礫の投棄がみられる。埋没：覆土は3層から成り、1層は黒褐色土、2・3層は褐色土でいずれも小礫を含む自然埋没と考えられる。遺物出土状況：土師器甕を中心としてカマドから出土している。土師器甕B(6)は小破片、5は大破片でカマド内から出土しているが、いずれも破壊されて投げ込まれているようではな状態で出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。



第20図 SB58実測図

SB60 位置：南部II 図版26

検出：トレンチ調査において存在が確認された住居址で、II A 2層上面において単独で検出された。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。住居址の大きさに対してやや小さい。煙道は短く立ち上がり、離れて煙出しのピットがみられ、ピット内には角礫が入れられる。燃焼部は台形の掘り方をもちやや崩れた形をしている。袖等は検出されなかったが、中央に支脚抜取り痕があり、その前面に赤化した火床面が広がっている。床：叩き締められた床面で、中央から南側にかけて堅緻な部分が広がっている。ピットが1基ある。埋没：覆土は2層に分層され、1層は暗褐色土、2層はオリブ褐色土に褐色ブロックが入る。人為的に埋め戻した後に自然埋没したと考えられる。遺物出土状況：遺物量は非常に少ない。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB61 位置：南部II 図版26

検出：II A 2層上面において検出したが、西側半分、北側が側道工事により破壊を受けている。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は短く立ち上がり煙出しのピットはない。掘り方はやや崩れ円形に近い。煙道や奥壁は良く焼けて硬化している。袖や支脚等の施設はない。床：荒掘り後埋め戻されており、その上面は良く叩き締められて堅緻な床面となっている。住居址北西部分にピット1基がある。埋没：覆土は単層で暗オリブ褐色土に褐色土のブロックを含有する人為埋没土と考えられる。遺物出土状況：ピット内より須恵器杯A(2)、土師器甕B(4)などがまとまって出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB62 位置：南部II 図版25・27

検出：II A 2層上面において単独で検出した。カマド：東壁中央に位置する函形カマドであるが、掘り方は丸く崩れている。煙道上面は削平により失われ、緩やかに短く立ち上がる。燃焼部の天井は崩落しており、黄褐色土に暗褐色ブロックの混入した土が覆い、その下に火床が検出された。両袖ともに基部のみが残存するが、かなり崩れている。左袖部に抜取り痕が検出された。床：暗オリブ褐色土を埋め戻してお

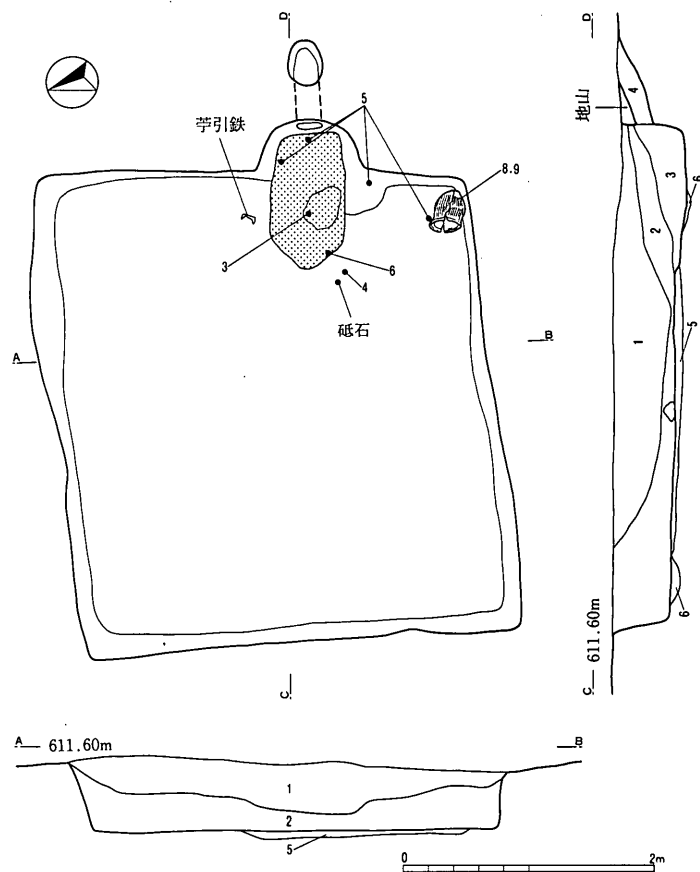
り床面の周囲を除いて良好な床である。周溝：南壁中央から西壁にかけてやや幅広の周溝がL字状に巡る。埋没：覆土は2層から成り、1層はオリブ褐色土、2層はオリブ褐色土にII A 1層のブロックが入る。2層は人為的埋没の可能性もあるが、1・2層とも自然埋没と考えておきたい。遺物出土状況：全体的に出土量は少ない。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB63 位置：南部II 図版25・26

検出：II A 2層上面において単独で検出したが削平が激しい。カマド：北壁北西隅に寄る石組カマドである。煙道は削平により無い。燃烧部も上半が削平を受け袖基部のみが残存している。右袖のみにカマド石が残存する。火床部に石製支脚がある。床：地山をそのまま床面として使用している。埋没：覆土は2層に分層され、1層は暗オリブ褐色土、2層はオリブ褐色土でいずれも自然埋没土と考えられる。遺物出土状況：カマドと住居址南東部に集中し、床面出土がほとんどである。カマドからは土師器甕B(6)が1個体分出土し、住居址南東部からは須恵器杯類(2・3・5)がまとまって出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB64 位置：南部II 図版25、第21図、PL16

検出：II A 2層上面において単独で検出された。東壁やや南に位置する函形カマドである。煙道は急に立ち上がり煙出しのピットは既にない。燃烧部は函形の掘り方をもち、深く壁外に掘り込まれる。構築材の粘土は覆土に近く識別されなかった。床：北側の一部を除き貼床が認められ、北側では礫層が露出している部分がある。埋没：覆土は2層に分層されるが、1・2層ともII A 1層を基調とする暗褐色土であり、自然堆積土と考えられる。遺物出土状況：南東隅に土師器甕B(8)がほぼ完形で据えられた状態のまま出土し、その内部より台付の土師器甕C(6)が出土した。カマド内より墨書土器(図版167-21)が、そのほかカマド周辺の床面から砥石(図版194-16)、苧引鉄(図版190-36)などが出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

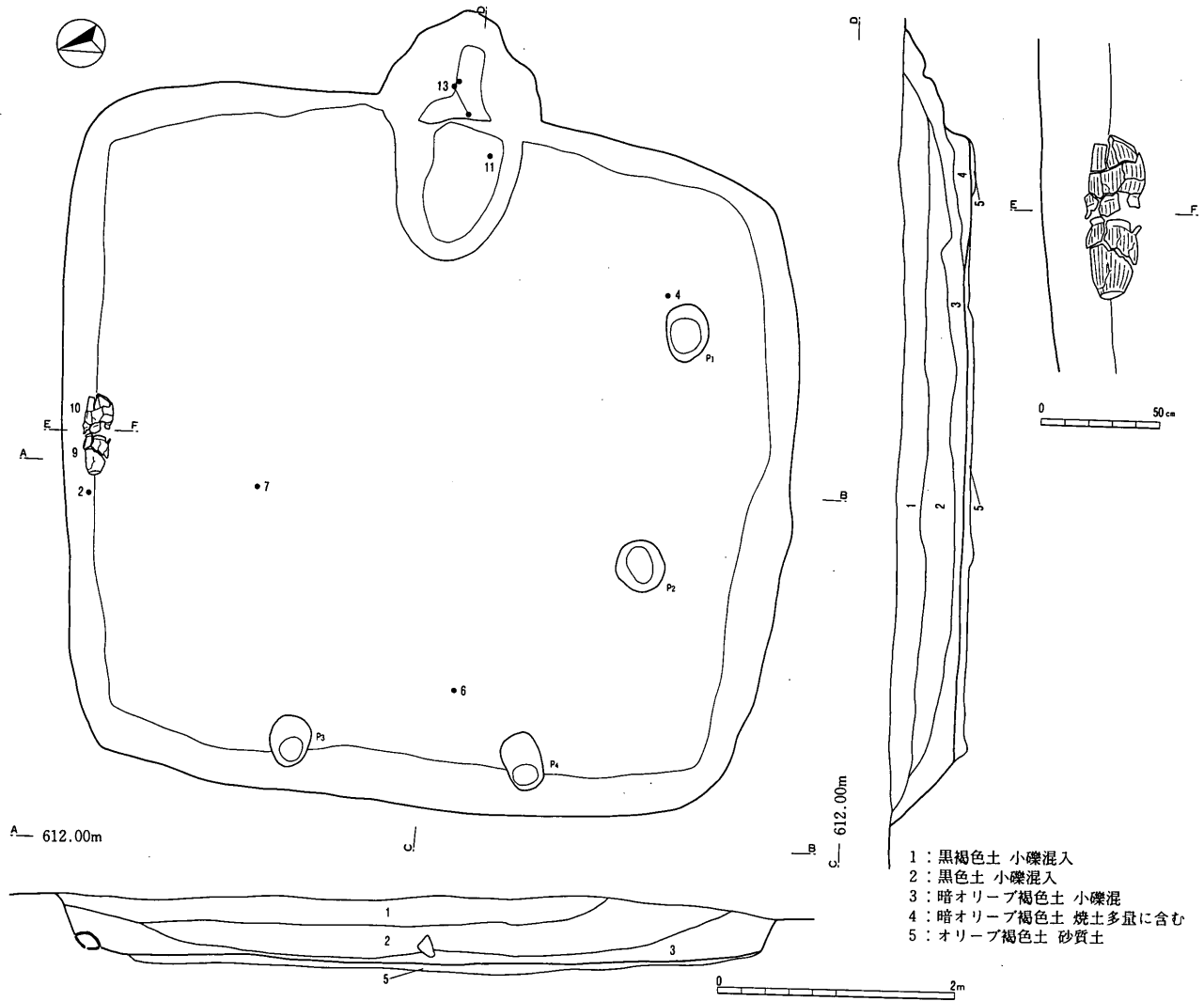


- | | |
|----------------|--------------------|
| 1：暗褐色土 細粒砂・小礫混 | 4：暗褐色土 炭化物・下部に粘土あり |
| 2：暗オリブ褐 小礫混 | 5：オリブ褐色土に褐色土ブロック混 |
| 3：暗オリブ褐 | 6：暗オリブ褐色土 |

第21図 SB64実測図

SB65 位置：南部II 図版23、第22図、PL16

検出：礫を多く含む砂質のII A 2層上面においてSD49を切るように検出した。壁部分が不安定であり、やや不整形を呈す。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。煙道は崩れ、短く急に立ち上がる。燃烧部は火床のみの検出となり、その他の施設は確認できなかった。床：部分的に貼床が認められた。柱穴：西壁中央壁に接して1対、南壁下に2基の柱穴が検出されている。いずれも円形の掘り方である。北壁付近にもある可能性があるが検出されなかった。埋没：覆土は3層に分層される。1～3層ともII A 1層を基調とする暗褐色土であるが、1・2



第22図 SB65実測図

層は泥質、3層は細粒砂でいずれも自然埋没と考えられる。遺物出土状況：遺物は比較的多く、覆土下層及びカマドからまとまって出土している。北壁下中央に土師器甕B(9・10)が合せ口の状態で出土した。カマド煙道からは須恵器壺(13)が出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB66 位置：北部III 図版70・71

検出：II A 2層上面においてSB67・SK1242を切るように検出された。SB67との切り合いは、両者ともにII A 1層を基調とするが、SB67の方に褐色ブロックを含むことから本址が新しいと判断した。また、SK1242は煙道焼土により本址が切っていることが明らかであった。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに立ち上がり、煙出しピットはない。燃焼部は完全に崩落しており、カマド周辺に構築材の粘土が残っている。火床部には焼土が堆積し、中央に支脚抜き取り痕が検出された。床：SB67覆土上に貼床が延びている。カマド前面に小ピットが1基ある。埋没：覆土は3層に分層されるが、2・3層は部分的に分布し、1層がほとんどを占める。1層は暗褐色土で自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド周辺からの出土が多くなっている。土師器甕B(8)はカマド及びその周辺のものとして広く接合している。カマド脇の床面から鉄製品が出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB67 位置：北部III 図版70・71

検出：II A 2層上面でSB66に切られるように検出された。カマド：東壁やや南に位置する函形カマドであ

るが、SB66に上半を切られ、煙道もなく破壊が著しい。火床及びその掘り方を検出したのみである。床：全面に埋め戻しが確認され、カマド周辺が堅緻であった。埋没：覆土は単層で、オリーブ褐色土に褐色土ブロックをかなり含み人為埋没の様相が強い。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。墨書土器(図版167-23)がカマドから出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB68 位置：北部III 図版71・73、PL17

検出：II A 2層上面で西壁から南壁にかけてSD100・104に切られるように検出された。南東隅部分が本線工事により破壊されている。カマド：北壁中央に位置する粘土カマドである。煙道は緩やかに短く立ち上がる。燃烧部は完全に崩れ去り火床のみの検出となった。火床中央に支脚抜き取り痕がある。床：全面に埋め戻しが確認され、住居址中央部分が叩き締められ堅緻である。諸施設：ピットが4基確認された。西壁下と南西隅の落ち込みは不整形で比較的大型である。埋没：覆土は暗褐色土の単層で、II A 1層を基調とする。遺物出土状況：カマド及びその周辺からの出土が多い。特に、西壁下の落ち込みからは破片であるが土師器甕Bなどがまとまっている。黒色土器杯A(1)は完形の状態でカマド右脇より出土している。西壁際の落ち込みからは砥石(図版193-9)が出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB69 位置：北部III 図版70・72

検出：II A 2層上面においてオリーブ褐色土の落ち込みを検出したが、カマドの焼土などは確認できなかった。住居址として認定するには難があったがプランなどから住居址として掘り下げた。SK1238・1239・1240に切られる。カマド：掘り下げの結果カマドは存在しなかった。床：地山をそのまま床面としており堅緻な面はみられない。埋没：覆土は2層に分層され、いずれもオリーブ褐色土であるが、1層は灰黄色土粒をモザイク状に含む。自然埋没と考えられる。遺物出土状況：非常に少ない。鉄斧(図版190-26)が出土している。時期：遺物が少なく時期決定が難しいが、4～5期の可能性が高い。

SB70 位置：北部III 図版75

検出：II A 2層上面においてSB73に切られるように検出された。東側の2分の1が調査区域外になり、北側はSB73に切られている。この結果カマドは東側または北側に付くことが予想される。SB73とは土色及び包含する礫の量によって区別できる。床：薄い貼床が確認され、平坦で堅緻な床面である。埋没：覆土は4層に分層され、1～3層はいずれもオリーブ褐色土で、3層を除き礫を含む。4層は暗灰黄シルト質の土である。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。時期：遺物が少なく時期の決定が困難であるが出土した遺物の様相から6期の所産と考えられる。

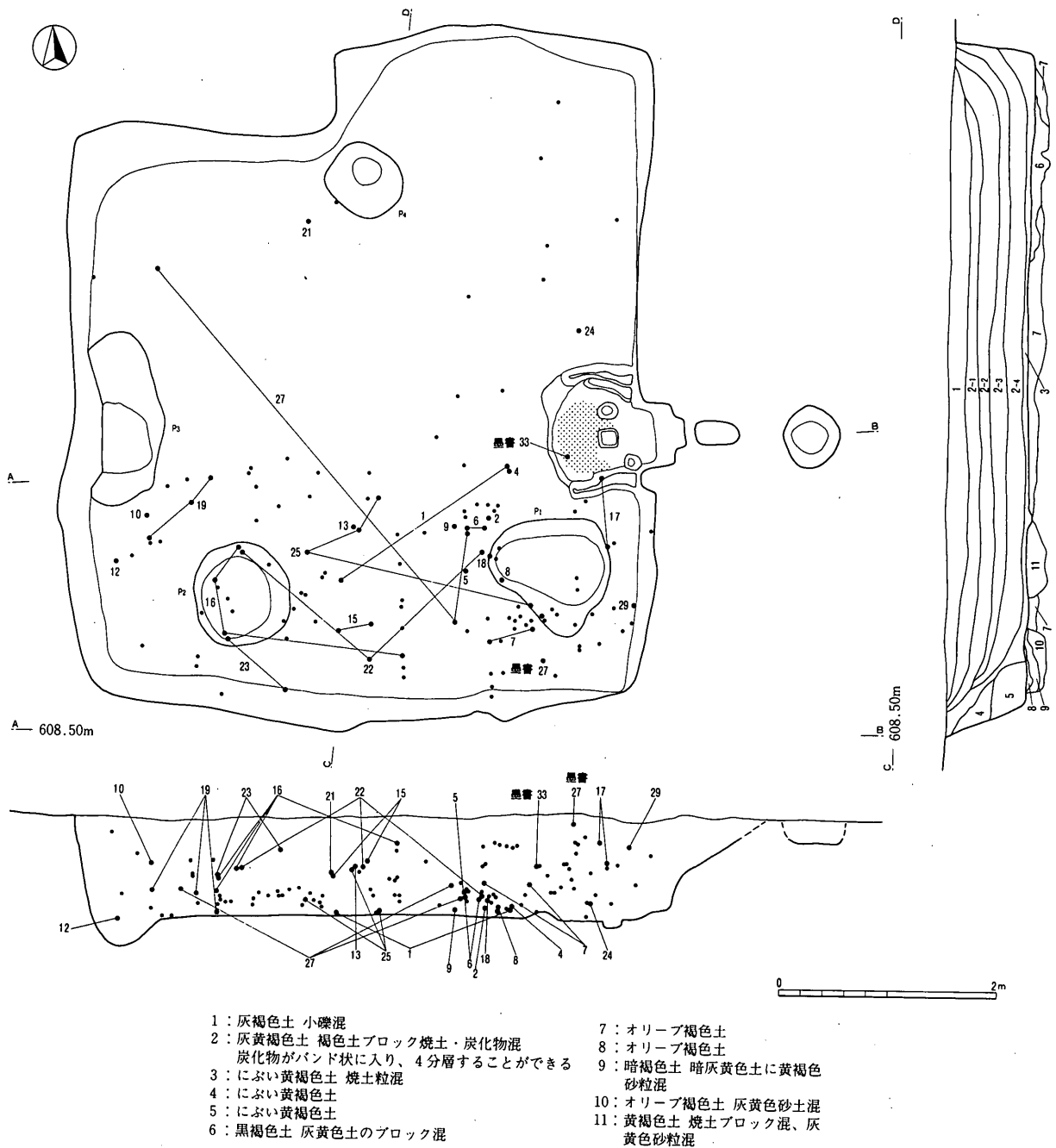
SB71 位置：北部III 図版77

検出：II A 2層上面において検出したが、そのほとんどが調査区域外にかかる。カマド：西壁に位置する函形カマドである。煙道は急に立ち上がりやや離れて煙出しのピットがある。燃烧部は天井部が崩落して焼土ブロックを含む暗褐色土が覆っている。床：調査できた部分では堅緻な床は確認できない。埋没：覆土は2層で、いずれもII A 1層を基調とする自然埋没土と考えられる。遺物出土状況：図示した遺物はカマド及び煙出しのピットから出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB72 位置：北部III 図版77、第23図、PL17

検出：トレンチ調査の段階でその一部が確認され、II A 1層中において単独で検出されたが、北側に張り出しをもつため、当初2軒の切り合いと考えた。土層観察の結果1軒と確認して掘り下げた。プラン：隅丸方形であるが、北側に80cm×265cmの張り出しをもっている。カマド：西壁やや南に位置する函形カマドで煙道口は高く大型のカマドである。煙道は急に短く立ち上がり、やや離れて煙出しピットがある。燃烧部掘り方は函形で、壁への掘り込みは浅い。天井部は崩落しており、天井部の焼土と煙道との間に断層ができていいる。天井部の構築材として黄褐色土粘土が使用され、何層にも塗り固められている。両袖ともに

基部が残存している。火床部中央に支脚抜き取り痕と考えられる小ピットがある。床：ほぼ全面に貼床が認められ、張り出し部分にも及んでいる。ほぼ平坦で、中央部分で特に堅緻である。諸施設：カマド右脇にP4があり、灰溜めピットと考えられる。P1は西壁中央に位置し、貼床が切れ、不整形に落ち込んでいる。埋没：覆土は大きく3層から成る。1・2層黄褐色土に小礫が入る。3層は灰黄色土に褐色ブロックが入る。なお3層は3層に細分され、それぞれの層理面には焼土、炭化物の入る灰黄褐色土にオリブ灰色の小ブロックが入るバンドが入る。1・2層は自然埋没、3層は人為的に埋め戻されたと考えられるが、短い時間差を含んでいる。遺物出土状況：須恵器杯、甕を中心として大量に出土しているが、ほとんどが3層からの出土であり、住居址南半に集中している。これは本址が北端に位置する住居址であり、南から投



第23図 SB72遺物出土状況図

棄されたことを示している。これは墨書土器の内容からも肯定されよう。墨書土器は8点出土しており、『井』が2点、『人』が2点、不明が4点となっている。図版167-27(1層)、29(床)を除き3層から出土している。カマド左脇の床面から砥石(図版193-8)が出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB73 位置：北部III 図版75

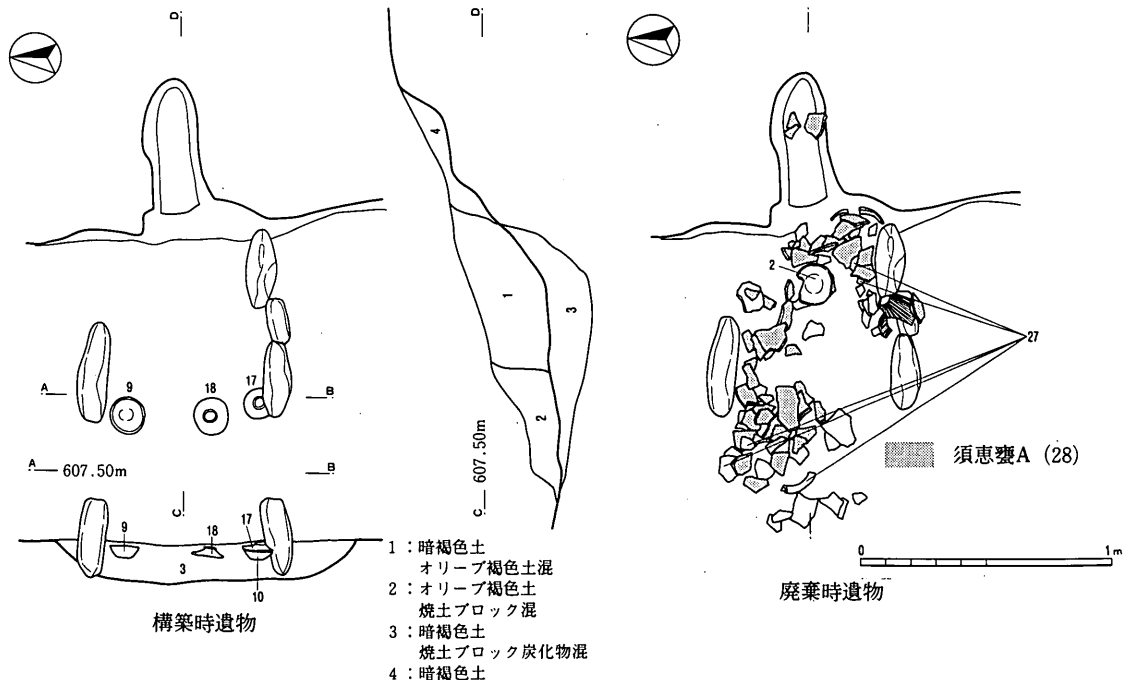
検出：II A 2層上面においてSB70を切るように検出した。住居址の3分の2以上が調査区域外にかかる。床：地山をそのまま床面としており、周辺部を除き堅緻である。埋没：いずれもII A 1層を基調とする自然埋没土である。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。時期：出土したわずかな遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB74 位置：北部III 図版71・73、第25図、PL18

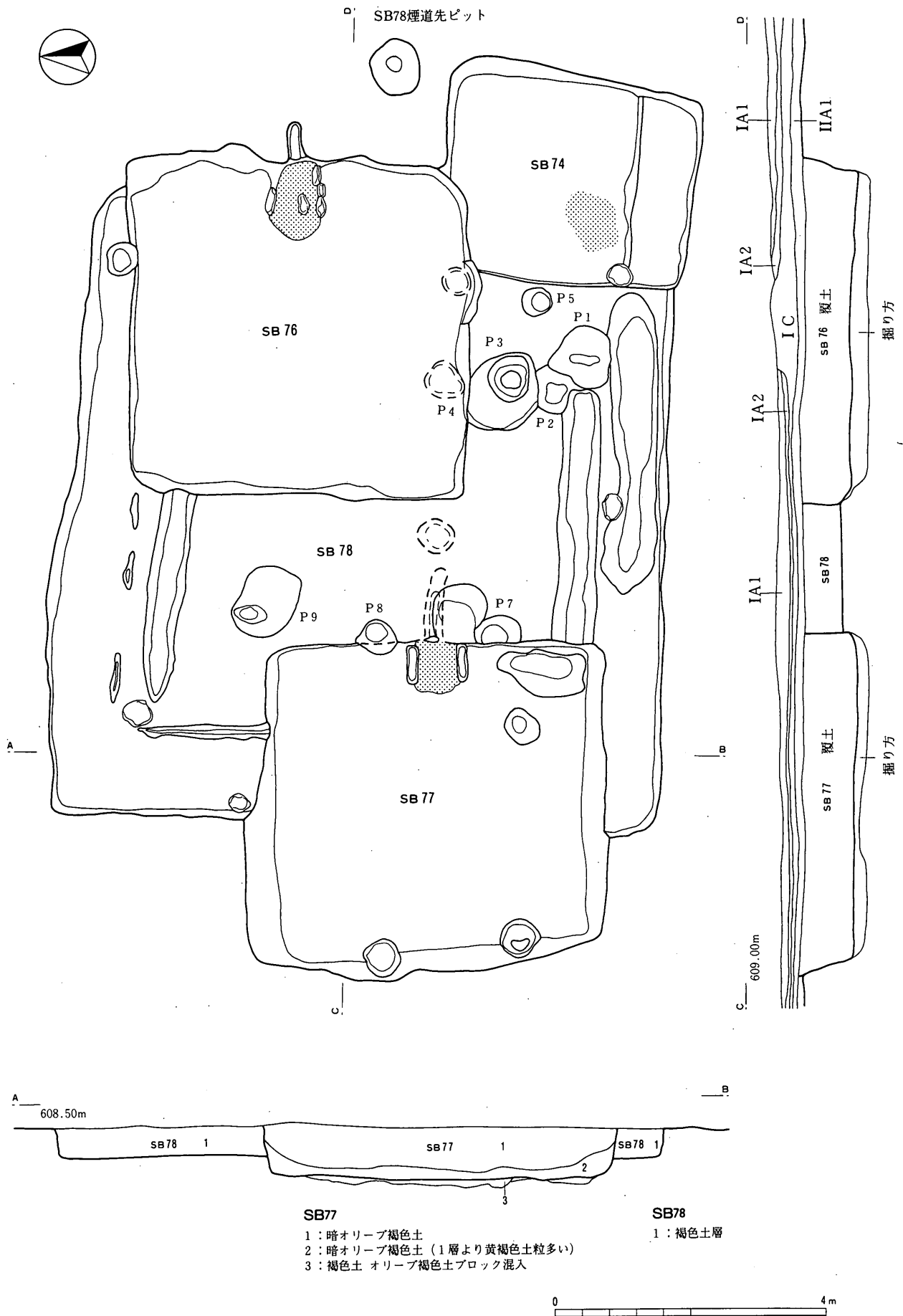
検出：II A 2層上面において検出された。SB76に切られるが、SB78との切り合い関係には問題が残る。本址は不整形でプランもおかしく、カマドの施設もみられない。SB72やSKS第18号住居址などと同様に張り出しをもつ住居址でSB78の一部の可能性も高いが、一応一軒の住居址として捉えた。床：南側部分でテラス状に高くなる。貼床は認められず、地山をそのまま床面として使用している。中央やや南に焼土の集中する部分があり、やや高いところから焼土が認められたことから本址全体がSB78の灰溜め施設として機能していた可能性がある。埋没：オリーブ褐色土に焼土粒を含む単層である。遺物出土状況：覆土下層及び床面に比較的まとまっている。墨書土器は3点出土しており、図版168-37を除き覆土からの出土である。遺物の状況もSB78に共通する墨書土器の出土や、土器の様相が一致しSB78の一部である可能性が高い。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB76 位置：北部III 図版71・73、第24・25図、PL18

検出：II A 2層上面においてSB74・78を切るように検出された。いずれの住居址も覆土が褐色土で淘汰の良い土であり、マンガンの沈着を受けているため平面での検出が困難であり、土層観察により含有する灰褐色粘土の量などにより判断した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は短く急に立ち上がる。燃焼部はある程度原形を留めているが、天井部は崩落している。カマド掘り方は先ず荒掘り段階



第24図 SB76カマド遺物出土状況図



第25図 SB74~SB78実測図

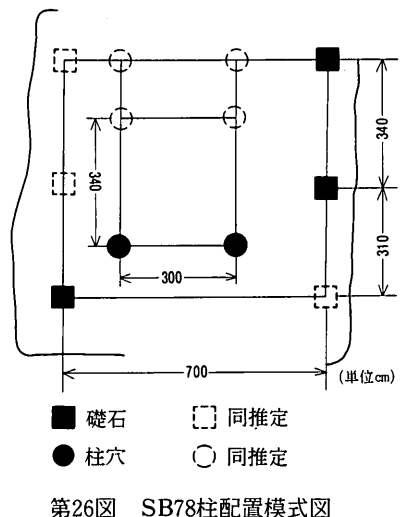
に深く円形に掘り凹めた後、ある程度埋め戻し、扁平な河川礫を埋め込み袖部分を形成している。袖は右袖に3個、左に1個の石を使用している。袖石の内面は赤変したり、煤の付着がみられ袖石の内面が露出していたことがわかる。床：全面に埋め戻しが確認でき、中央部分は良く叩き締められている。中央から西壁にかけての床面上にカマド石と考えられる焼けた河川礫が散乱している。埋没：覆土は2層に分層され、1層は褐色土、2層はオリーブ褐色土である。いずれも非常に淘汰の良い同一母材の土と考えられ、自然埋没を示すものとみられる。遺物出土状況：非常に大量の遺物が出土している。特にカマドに集中しており、黒色土器A(9・10・17・18)は原位置を保った状態で掘り方から出土しており、杯A(10)を身に、皿(17)を蓋の代わりとして使用しているようである。これらは構築時あるいは使用時に何らかのカマド祭祀に関連して遺棄されたものと考えられる。須恵器甕A(27)は細片になってカマド内に廃棄されており、広範に接合している。カマド内より鉄製品が出土している。墨書土器は2点出土しているが構築時の混入と考えられ、本址に伴う可能性は低い。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB77 位置：北部Ⅲ 図版70・71・73、第24図、PL18

検出：II A 2層上面において検出し、当初3軒の切り合い関係を予想したが、最終的にはSB78との2軒の切り合いと判断した。SB78との前後関係は、SB78の土層観察において本址の煙道が検出されたことによりSB78を切ることが明らかになった。カマド：東壁中央に位置する石組カマドと考えられるが、袖石は既に抜取られている。煙道は比較的急に立ち上がり、その先に煙出しピットがある。燃焼部は既に破壊されており火床及び掘り方を検出した。火床の両側には抜取り痕があり、中央やや奥壁寄りに石製支脚がある。床：中央から南側にかけて堅緻な面が広がり、北側部分でやや軟弱である。荒掘り後の埋め戻しがほぼ全面にわたって観察され、西壁下で掘り方が深くなっている。住居址中央やや南カマド寄りの床面にカマド石と考えられる礫が2個みられる。柱穴：西壁に2基、南東隅寄りに1基、計3基の柱穴が検出された。本来は4基の柱穴と考えられる。カマド右、南東隅寄りに不整形で浅い落ち込みがみられる。覆土に焼土・炭化物を含み灰溜め施設と考えられる。埋没：覆土は3層に分層され、1・2層とも暗オリーブ褐色土に灰色粘土を含むII A 1層を基調とし一連の堆積と考えられる。3層は部分的である。遺物出土状況：比較的量は多いが、覆土からの出土が多い。墨書土器が2点出土しており、覆土からの出土で、SB76同様混入と考えられる。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB78 位置：北部Ⅲ 図版70・71・73、第25・26図、PL18

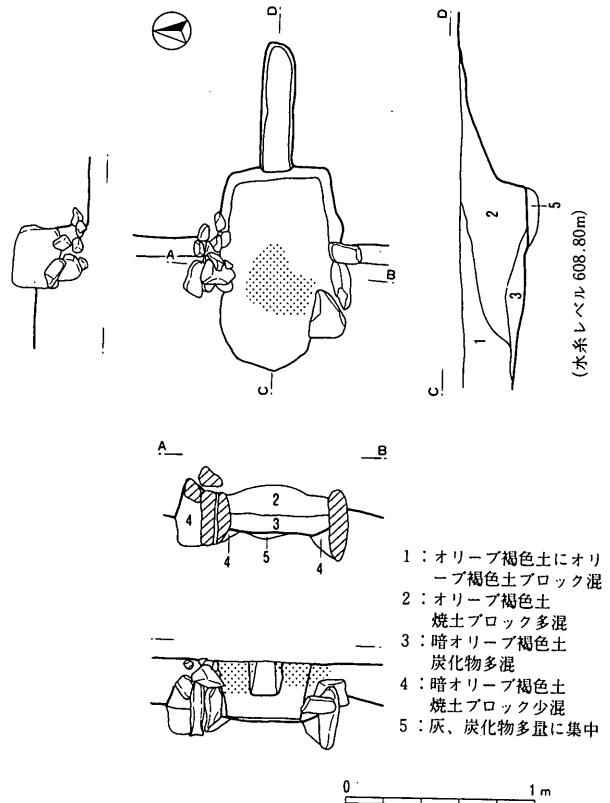
検出：大型の竪穴住居址で当初複数の住居址を想定したが、最終的に一軒の住居址として認定した。SB76・77に切られる。カマド：本体はSB76に完全に破壊されて残存しない。本来は東壁中央に位置すると考えられ、離れて煙出しのピットのみが残存する。ピット上面には須恵器甕D(10)が破片で投げ込まれた状態で検出され、その上に花崗岩の石がのっていた。床：周溝内は堅緻な面が認められるが、貼床は無い。柱穴：支柱穴は4基と考えられ、P4、P7、P9が検出されている。なお、P6は支柱穴あるいはカマド脇の支柱穴と考えられる。柱間間隔は主軸方向で350cm(500cm)、直交軸方向で300cmを測る。支柱穴はないが、礎石と考えられる花崗岩の平石が3個検出されている。礎石の間隔は170~180cmでほぼ等間隔に配列される。なおカマド側の中央は礎石に代わり柱穴が穿たれたと考えられる。諸施設：周溝が壁から120~140cm程離れて巡り特に北壁と南壁では二重に巡る。小ピットが7基ほどある。埋没：覆土は褐色土の細粒砂で均質な単層で一応自然埋没と考えられる。遺物出土状況：住居址規



模に比べて出土量は多くない。墨書土器が4点出土している。1点を除き覆土からの出土である。図版168-43はP1から出土している。鉄製品が覆土から出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB82 位置：北部I 図版55、第27図、PL33

検出：II A 2層上面においてSB143に切られるように検出された。SB143は覆土に小礫、焼土・炭化物などを多量に含み本址とは明瞭に区別され、本址を切っていることが分かる。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに立ち上がる。燃烧部の掘り方は函形で比較的深く壁に掘り込まれている。袖は短く、石組されている。基本的には1個の花崗岩の人頭大の礫を埋め込みその周りを補強している。特に左袖の上端は丁寧に中礫を並べている。火床中央南に花崗岩礫がみられ支脚の動いたものか、天井部の礫の転落したものと考えられる。燃烧部奥壁の上面は良く焼け赤変して硬化している。床：中央部分にわずかに埋め戻したあとがうかがわれ、固く締まっている。埋没：覆土は2層に分層されるが1層がほとんどを占め、暗オリーブ褐色土にオリーブ褐色土のブロックが入り人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：遺物は比較的少なく、カマド付近にまとまる。鉄製品は床面からである。時期：遺物の様相により5期の所産と考えられる。



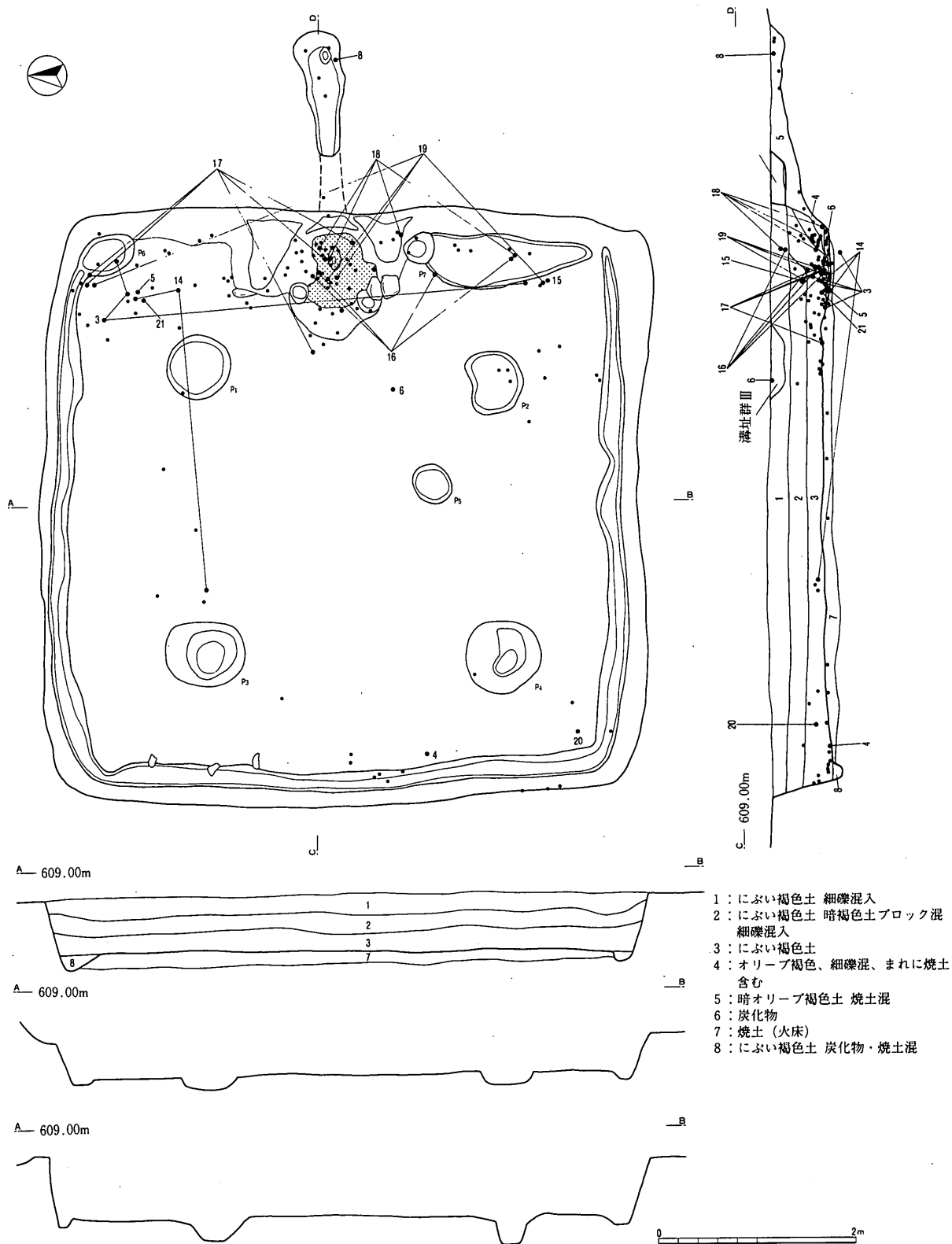
第27図 SB82カマド実測図

SB83 位置：北部II 図版63、PL18

検出：トレンチ調査の段階でその存在をつかみ平面的に広げた。II A 2層上面で溝址群IIIに接するように検出されたが、プランも方形で住居址のコーナー部分もしっかりしていた。カマド：西壁中央に位置する函形カマドである。煙道は急に立ち上がり、やや離れて煙出しピットがある。燃烧部は完全に崩落しており、火床のみが検出された。火床上面にはオリーブ褐色土に焼土ブロックを含む構築土が堆積している。床：全面に埋め戻しが確認され、カマド部分が深くなっている。カマド前面に堅緻な面が広がっている。北東隅部分に小礫の分布がみられた。埋没：覆土は2層からなり、いずれもブロックを含む土で人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。時期：カマドの形態、遺物の様相により5期の所産と考えられる。

SB84 位置：北部II 図版60、第28図、PL19

検出：II A 2層上面において溝址群IIIに切られるように検出された。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。煙道は緩やかに立ち上がり長く延びる。そのまま先端がやや肥大し、わずかに凹み立ち上がる。燃烧部の天井は崩れ袖基部が残存するのみである。火床中央に支脚拔取り痕がみられる。床：全面に貼床が認められ柱穴に囲まれた内部が堅緻な床面であった。柱穴：主柱穴は4基で柱間間隔は両軸方向とも300cmを測り、方形に配列する。P1、P2には柱痕跡が認められ、いずれも円形の掘り方をもつ。諸施設：周溝がカマドとその周辺を除いて全周する。カマド右脇に長楕円の浅いピットがあり、焼土が出土し

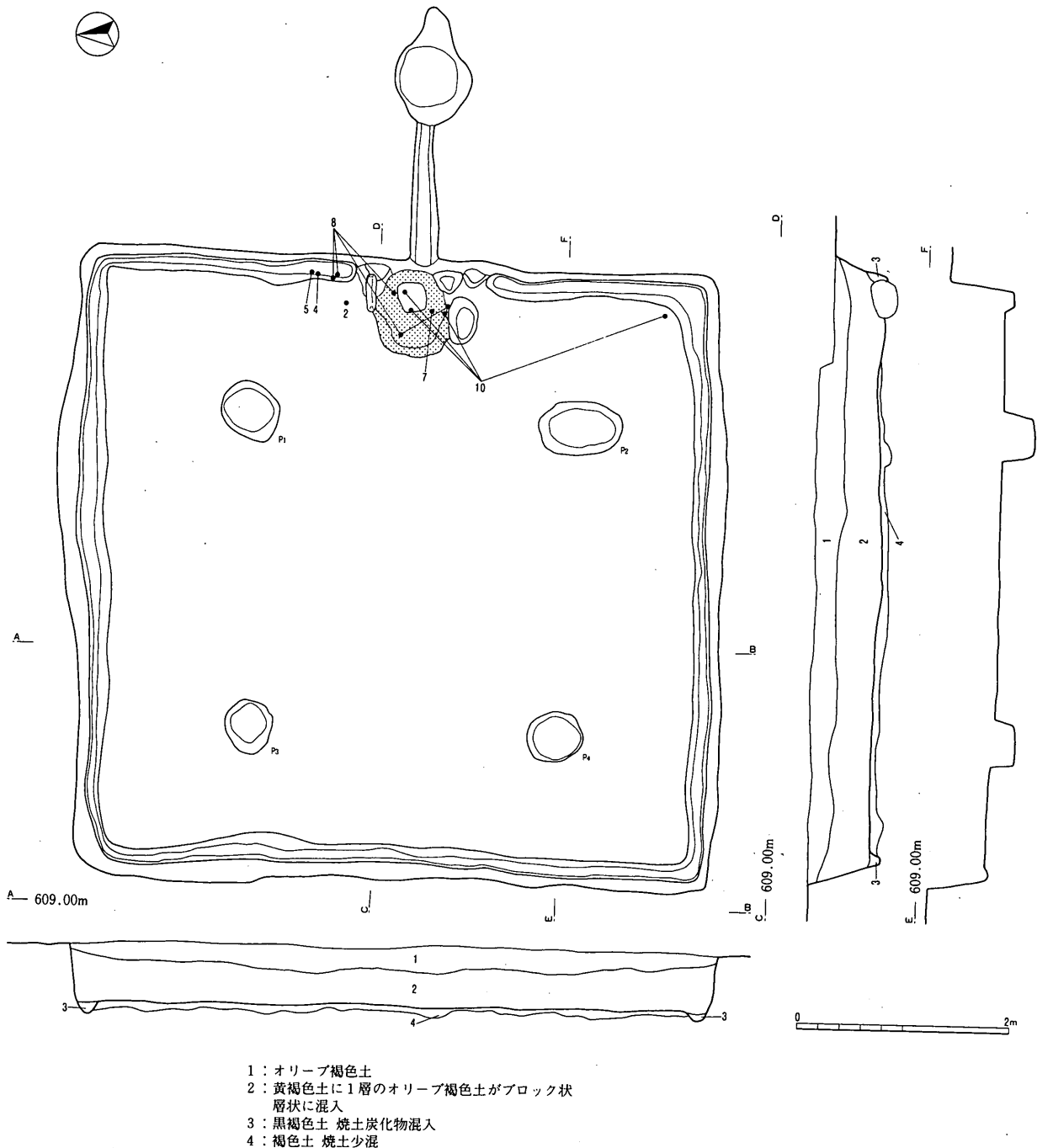


第28図 SB84遺物出土状況図

ている。このほか小ピットが2基ある。埋没：覆土は3層に分層され、いずれもIIA 1層を基調としており、自然埋没と考えられるが、2・3層は人為埋没の可能性もないわけではない。遺物出土状況：カマド及び北東隅に集中している。カマド内には土師器甕Bの破片が数個体分捨てられており、16はほぼ完形に復元できた。北東隅の床面では横瓶(21)が出土している。時期：遺物の様相により4期の所産と考えられる。

SB85 位置：北部II 図版61、第29図、PL19

検出：II A 2層上面において検出した。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドと考えられる。煙道は水平に長く伸び、その先端がピット状に深く凹み、底よりやや浮いた状態で土師器甕B片が敷き詰められた状態で出土している。燃烧部はすでに破壊されており、左袖に花崗岩の河川礫が埋め込まれているのみで、そのほかの袖石は抜取られている。床：全面に埋め戻しを確認し、叩き締められた非常に良好な床を検出した。柱穴：主柱穴は4基確認され、柱間隔は両軸ともに290~300cmで方形に配される。柱掘り方は円形で、25~30cmの深さをもつ。諸施設：周溝がカマドを除き全周する。深さ5cmでU字状の掘り込みで周壁に接している。埋没：覆土は2層に分層され1層はオリーブ褐色土の自然埋没土で、2層は褐色土に1層をブロック状に取り込み、黒褐色土がバンド状に入るところもみられる。2層は人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：カマドに集中する。南東隅に土師器甕B(10)の大破片がみられる。時期：遺



第29図 SB85実測図

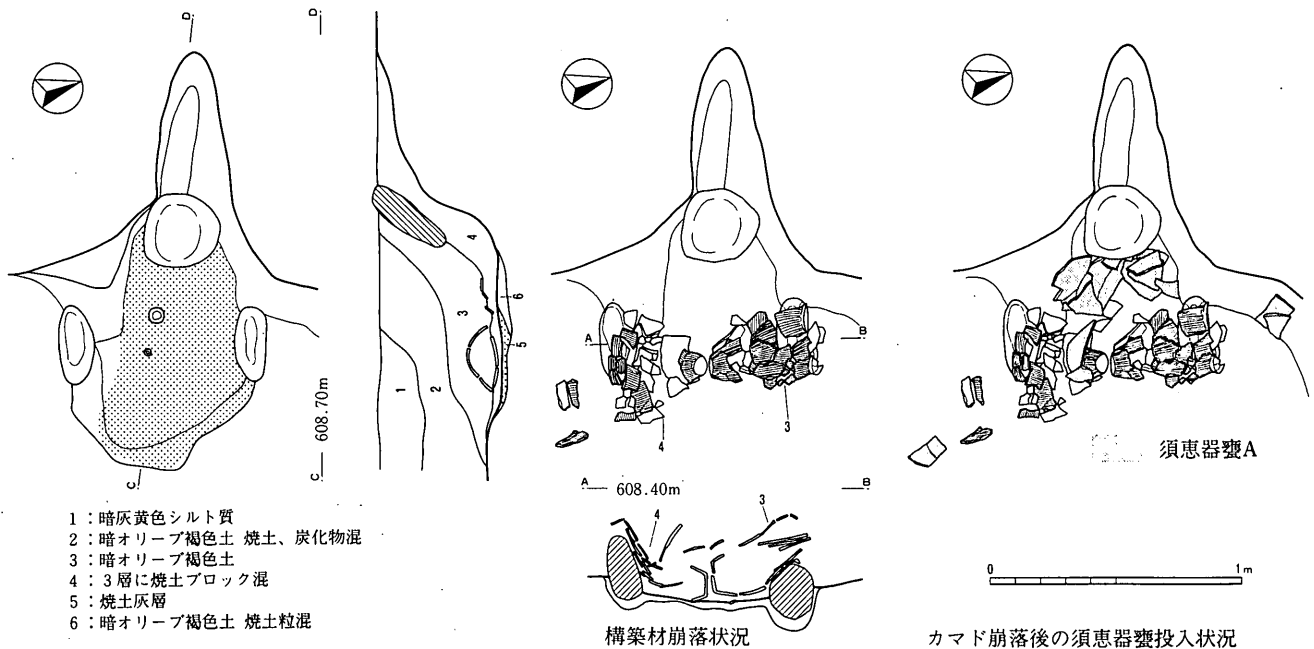
物の様相から3期の所産と考えられる。

SB87 位置：北部II 図版58

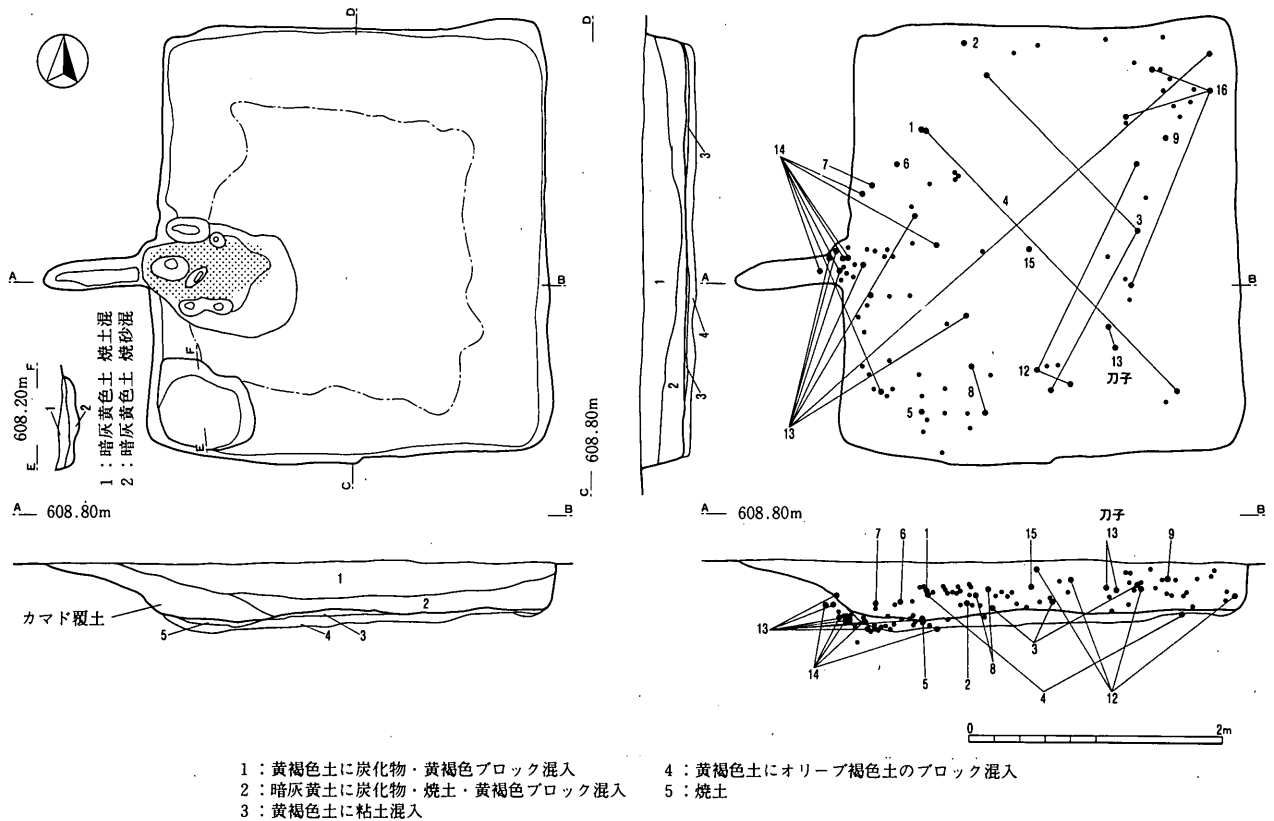
検出：II A 2層上面において溝址群IIIに接するように検出した。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は急に立ち上がり、その先端に煙出しのピットがある。なお煙道は崩落しており、煙道部天井の硬化した焼土の上に褐色土が堆積している。燃焼部は完全に破壊されており袖石の抜取り痕が検出されている。火床は煙道の焼土に比べて顕著ではない。床：全面に埋め戻しが確認され、堅緻な床面が観察された。柱穴：支柱穴は4基確認され掘り方は円形で深さは25～30cmを測る。全ての柱穴に柱痕跡が確認され、直径は15～20cmである。その他小ピットが1基ある。埋没：覆土は2層に分層されるが1・2層共に褐色土ブロックを含み、本来は一時期に人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物出土状況：須恵器甕類を中心として出土しているが、量は多くない。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB88 位置：北部II 図版59、第30図、PL20

検出：II A 2層上面においてSX30・SK713を切るように検出された。カマド：西壁に位置するが、北西隅に寄る石組カマドで、掘り方は壁外に掘り込み函形カマドに近い。煙道は短く急に立ち上がり、煙出しのピットはない。燃焼部は崩れているが、崩落した状態を保っている。袖は両袖ともに短く作られており、1個ずつ河川礫が埋め込まれている。焚口部分の天井は土師器甕Bを2個体(3・4)使って底部を向かい合わせて構築材として使用している。土師器甕Bは空洞のまま使用されたようで完全に扁平に潰れて出土した。なお4の内部には須恵器大甕の破片が差し込まれていた。燃焼部内部からは大量の須恵器甕Aの破片が出土したが、ほとんどが接合して80cm大の大破片になり、細かく打ち砕いてカマド内に投げ込んだことが推定される。なおこの須恵器破片とSB152出土のものと接合している。煙道口上部には花崗岩の人頭大の礫が天井石として使用されている。床：地山をそのまま床面として使用している。埋没：覆土は3層から成り、1層は暗灰黄色土、2・3層は暗オリーブ褐色土であり、1層と2層は焼土・炭化物によって完全に区別することができる。いずれも自然埋没を示している。遺物出土状況：遺物はカマドに集中し、しかもカマド構築材がほとんどを占める。時期：SX30との切り合い、SB152との接合などから7期前後と考えられ、構築材として使用された土師器甕Bは6期の様相を示す。



第30図 SB88カマド実測図及び遺物出土状況図



第31図 SB89実測図及び接合関係図

SB89 位置：北部II 図版59・61、第31図、PL20

検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：西壁やや南に寄る石組カマドと考えられるが、袖石は既に抜取られて全く存在しない。煙道は比較的緩やかに立ち上がる。燃烧部は完全に破壊されており、4基の袖石の抜き取り痕と中央に支脚の抜き取り痕がみられる。火床は良く焼け硬化している。床：堅緻な床が広がり全面に埋め戻しが観察された。中央部分は良く叩き締められ非常に堅緻である。カマド南、南西隅に灰溜め施設があり、覆土には焼土を多量に含んでいた。埋没：覆土は2層から成るが、いずれも暗灰黄色土に褐色ブロックを含み基本的には同一層と考えられる。人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：出土量は多く、カマドに土師器甕B(13・14)が集中しているが、覆土からもまとまって出土している。主な出土遺物としては灰釉陶器皿(12)、墨書土器(図版168-46)、刀子(図版189-13)などが覆土から出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB90 位置：北部II 図版61

検出：II A 2層上面において単独で検出されたが、3分の2は調査区域外にかかり、カマド等は検出されなかった。床：非常に堅緻な床面が検出された。全面に貼床が認められ5~10cm前後の埋め戻しが観察され、貼床下部は鉄分の集積がみられた。柱穴：2基の主柱穴が検出されているが調査区域外に2基存在すると考えられ基本的には4本柱と考えられる。掘り方は円形で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の径は15cm前後である。その他小ピットが2基存在する。埋没：覆土は2層でいずれも暗灰黄色土にオリブ褐色土のブロックを含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：出土量は非常に少なく、覆土からの出土である。墨書土器(図版168-47)はピットと覆土のものが接合している。図版168-48は2層上面からの出土である。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB91 位置：北部II 図版57・59

検出：II A 2層上面においてSB149・150と切り合うように検出された。切り合いの判定は非常に困難であ



第32図 SB92表測図及び遺物出土状況図

り、土層観察の結果混入するブロックの量によってSB149→SB91→SB150の順に決定した。SB91とSB150の切り合い関係は把握することができなかった。カマド：西壁中央に位置する石組カマドである。煙道部は攪乱により破壊されているが、短く急に立ち上がるものと考えられる。石組は全て硬砂岩により、右袖の奥壁にある2個の石を除いて原位置から動いている。床：貼床は確認されなかった。埋没：覆土は単層で、暗褐色土に黄褐色土ブロックを含み人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：カマドとP3付近に集中する。墨書土器が5点出土している。図版167-49・50が床面、51~53が覆土からの出土である。また、円面硯(図版188-495)は区画溝Ⅲ出土のものと接合している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB92 位置：北部Ⅱ 図版57・59、第32図、PL21

検出：ⅡA2層上面において単独で検出された。南側部分がやや張り出すが1軒として捉えた。カマド：東壁の中央やや南に位置する石組をもつ函形カマドである。煙道は急に短く立ち上がり、その先に煙出しのピットがあるが部分的に攪乱を受けている。燃焼部は天井部が崩落しているが良好に残っている。左袖部分には花崗岩の河川礫が2個埋め込まれているが、右袖部分は焚口部分に花崗岩の袖石を使い、奥壁部分には須恵器大甕の破片を芯材に転用している。この袖石を褐色土で覆っている。火床には焼土が厚く堆積し、中央に石製支脚がある。床：全面に埋め戻しが観察され、中央部分は堅緻な叩き締められた床で南西隅部分が低くなっている。カマド右、南東隅に灰溜め施設がみられ、焼土を多量に含んでいる。出入口：南壁中央でやや壁が張り出し、ステップ状になっており出入口に関する施設の可能性がある。3層の炭化物層が張り出し部分に入り込み、単に壁が崩れたのではないことは明らかである。埋没：覆土は大きく4層に分層される。1層は暗褐色土、2層は暗褐色土に炭化物・焼土を多量に含む、3層は焼土と炭化物の互層、4層はオリブ褐色土から成る。住居廃絶後に4層が堆積した後大量の土器の投棄が始まり、3・2・1層と自然に堆積したのと考えられる。遺物出土状況：SB143・97に次ぐ出土量で、特に須恵器杯を中心に食器類の出土が多い。覆土からの出土が多く特に3層に多く、2層・1層の順になる。4層にはあまり遺物を含まない。まさにゴミ捨て場の様相を呈している。カマドからの出土(15・18・39・51・52・62・77)も多い。床面遺物としては須恵器鉢A(72)、土師器甕B(80)などがある程度形を保って、灰溜めピットの横から出土している。墨書土器も多量に出土しており33点を数える。そのほとんどは3層に集中し、床面から出土しているのは須恵器鉢A(72・図版175-85)に記されたものだけである。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB93 位置：北部Ⅰ 図版54・56、第33図

検出：ⅡA2層上面においてSD171を切り、SK926に切られるように検出された。カマド：西壁に焼土がみられカマドと認定して掘り下げたが、カマド施設ではなくカマドは検出できなかった。床：全面に貼床が認められた。床面の中央と東壁中央部分が焼けて硬化している部分がある。床面中央部分の範囲は100×130cmである。柱穴：支柱穴となるようなピットはないが、北壁を除き周壁に径25~30cm前後の小ピットが8基ある。柱間は東壁と西壁が200cm前後、南壁が150cm前後となる。埋没：覆土は単層で暗褐色土に焼土・炭化物粒を多量に含むが、一応自然埋没と考えられる。遺物出土状況：遺物は多くないが黒色土器A、灰釉陶器を中心に出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB95 位置：北部Ⅱ 図版63・65

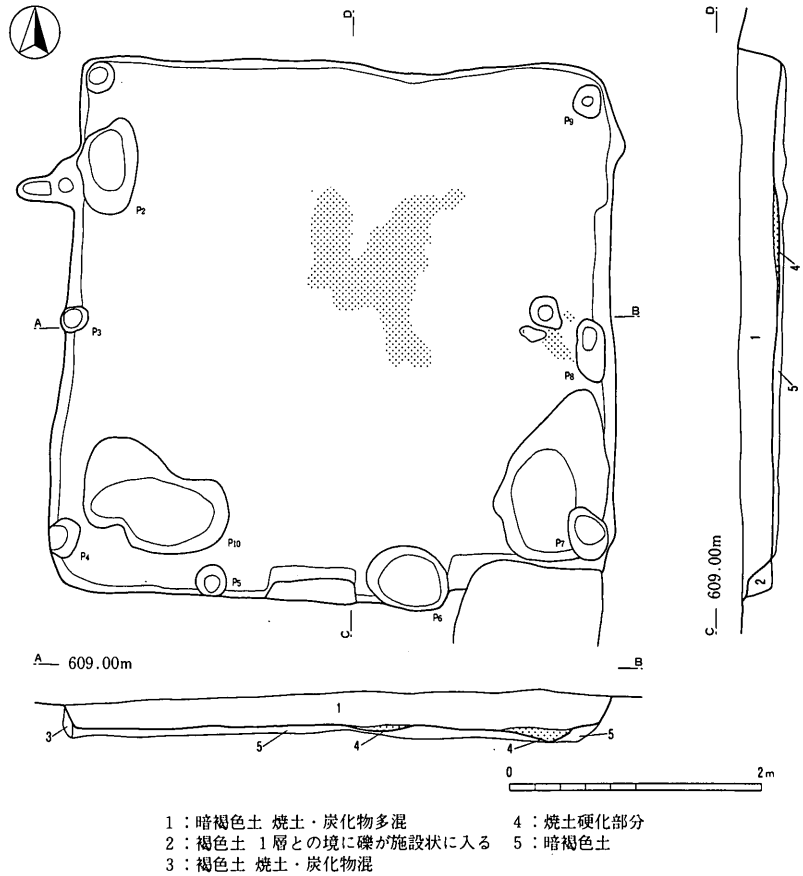
検出：ⅡA2層上面において住居址の中央をSD106に切られるように検出された。本址は黄褐色土の落ち込みであり、地山に非常に近く検出には苦労したが、SD106は褐色土で土質に差がみられた。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。カマド北側部分が溝により破壊されている。煙道は比較的急に立ち上がり、その先に煙出しがある。燃焼部は完全に崩落して原形を留めない。掘り方は方形であるが、上部は

崩れる。床：床面上に炭化物の薄い層があり、検出は容易であった。全面に埋め戻しが確認されたが、叩き締められた部分はなかった。埋没：覆土は4層で、1～3層ともにII A 2層を主体としてII A 1層のブロックが入る人為的に埋め戻された土である。4層は炭化物の薄い層である。遺物出土状況：カマド及びその周辺に集中する。須恵器甕類が主である。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

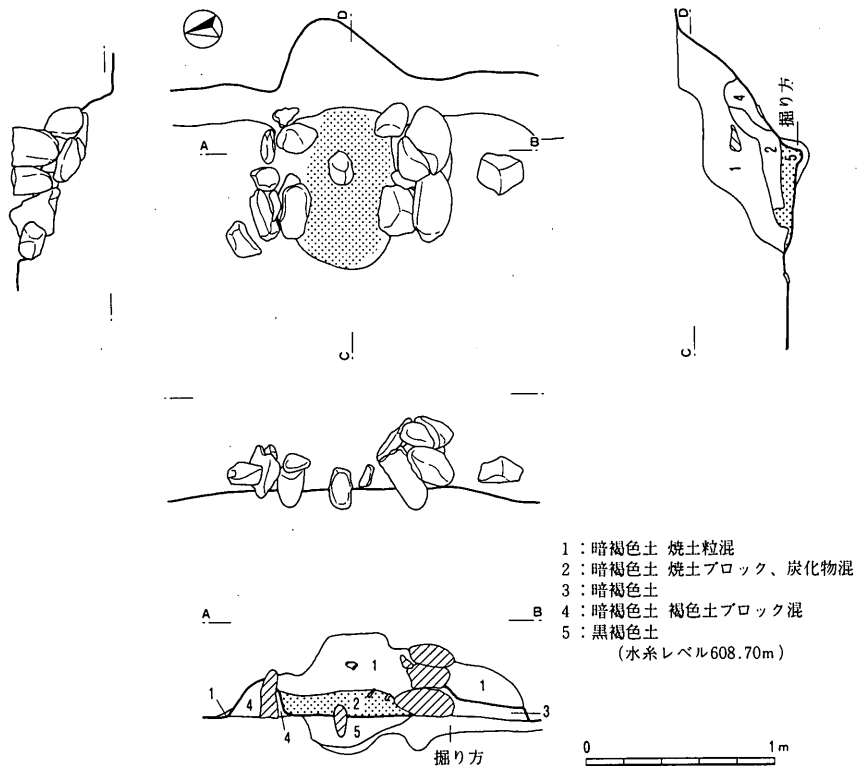
SB96 位置：北部 I

図版54、第34図、PL22

検出：II A 2層上面において検出した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は急激に立ち上がりわずかしか残存しない。燃焼部石組は良好な遺存状態を示しており、良く原形を留めている。右袖は花崗岩、左袖は硬砂岩を中心として組んでおり、また、右袖が平石を積み重ねているのに対して、左袖は縦に立てているなどの違いがみられる。中央には石製支脚が埋め込まれている。床：埋め戻しが観察され、中央やや北寄りに堅緻な部分が見られ、中央部分がやや高い。カマド左、南東隅寄りに楕円形の落ち込みが見られ、灰溜め施設と考えられる。埋没：覆土は2層に分層されるがそのほとんどが1層で占められる。1層は暗褐色土で小礫を含むが均一であり自然埋没と考えられる。遺物出土状況：遺物は覆土の中～下層にかけて多



第33図 SB93実測図



第34図 SB96カマド実測図

い。カマド及び灰溜めからも出土(3・6・23)している。灰釉陶器は覆土からの出土が多い。床面遺物として5・24がある。墨書土器は3点出土しており、図版170-88・89が覆土で、87が灰溜めから出土している。鉄製品はいずれも覆土からである。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

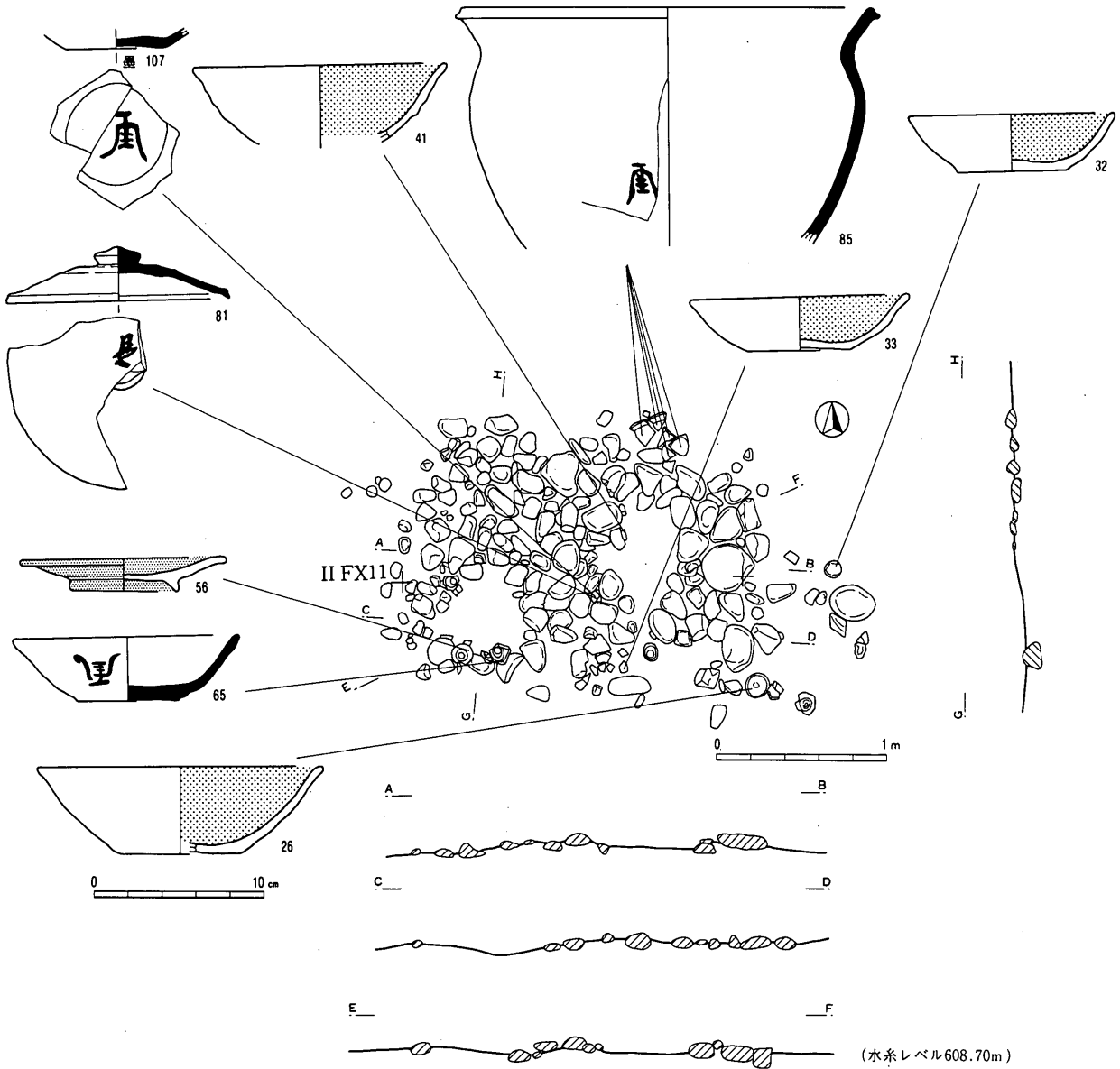
SB97 位置：北部 I 図版52・54、第35～39図、PL22・23・24

1軒として掘り下げたが、周囲を巡る礎石が床面より浮くこと、住居址中央よりやや南に位置する鍛冶施設に関連する炭層が床面より高いところで検出されたことなどから、建替えが行なわれたものと判断し、新・古に分けた。ただ、新しい時期の床面は確認されておらず、周囲を巡る礎石が浮いたのは壁構造の結果浮いた様に検出された可能性もあり、1軒の可能性も捨て切れない。

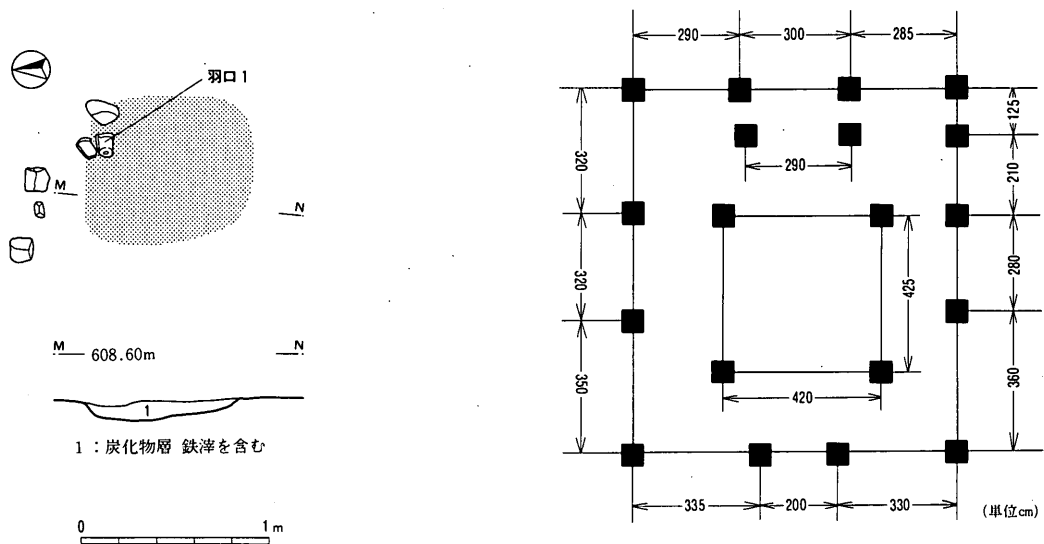
検出：II A 2層上面においてSK489・491・496・493を切るように検出された、本遺跡最大の住居址である。

古段階 カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。カマドは壁よりも内側に作られており、燃烧部は壁から1m内側のところに位置する。残存状況は非常に悪く、煙道などはほとんど削平されている。袖石は右袖先端部に1個埋め込まれるだけである。床：石敷き施設やカマドの火床から床面を判断したが、堅緻な床面は存在しない。石敷き施設：南東隅付近に位置する。150～200cmのほぼ長方形に10～20cmの河川礫を敷き詰めてあり、径40cm前後の円形に2カ所礫が切れるところがある。性格については判然としないが、一つの可能性としては須恵器大甕を設置した施設の可能性がある、水場として使用されたのではないかと考えられる。遺物も石敷きに密着するように出土している。礎石：主柱を支える礎石が4個、カマド脇の支柱を支える礎石が2個ある。柱間は等間隔で420cmを測り、方形に配される。礎石という新しい方法を取り入れているが柱の配置など旧来の方法であり、上屋構造もそれほど変化はしていないと考えられる。礎石下には円形の掘り方があり、栗石が込められ、特にS2は良好な状態で検出されている。使用されている石材はほとんどが硬砂岩の河川礫で55～70cm大で厚く、上面が扁平なものを使用しており、S3は重量感にあふれる。列石：周壁下70cm程離れて大礫が巡る。床面に埋め込まれており、北壁を除いて検出されている。列石の間隔は80～150cmであり等間隔ではない。列石が壁から離れていることから、この間には壁が存在した可能性があり、列石も壁構造の一部であると考えられる。列石間に土層の変化は認められないが、覆土に近似した土が埋め戻され、列石上に壁が作られたことが推定される。埋没：覆土は2層に分層され1層は褐色土に中～小礫を含む粘質土であるのに対して2層は黄褐色土に中～小礫を含むが、1層よりも少ない。2層のほうがやや土質も粗い。2層は自然埋没の可能性もあるが、人為埋没の可能性が高い。遺物出土状況：この段階に付くものは石敷き施設から出土した土器である。須恵器杯などを中心に出土しており、『甕』の墨書土器が3点(図版171-101・107・110)、『足』が1点(図版171-109)出土している。また赤彩土器皿(56)も出土している。また複数の字句が書かれた墨書土器(図版171-103)は2層からの出土である。時期：遺物の様相から6～7期の所産と考えられる。

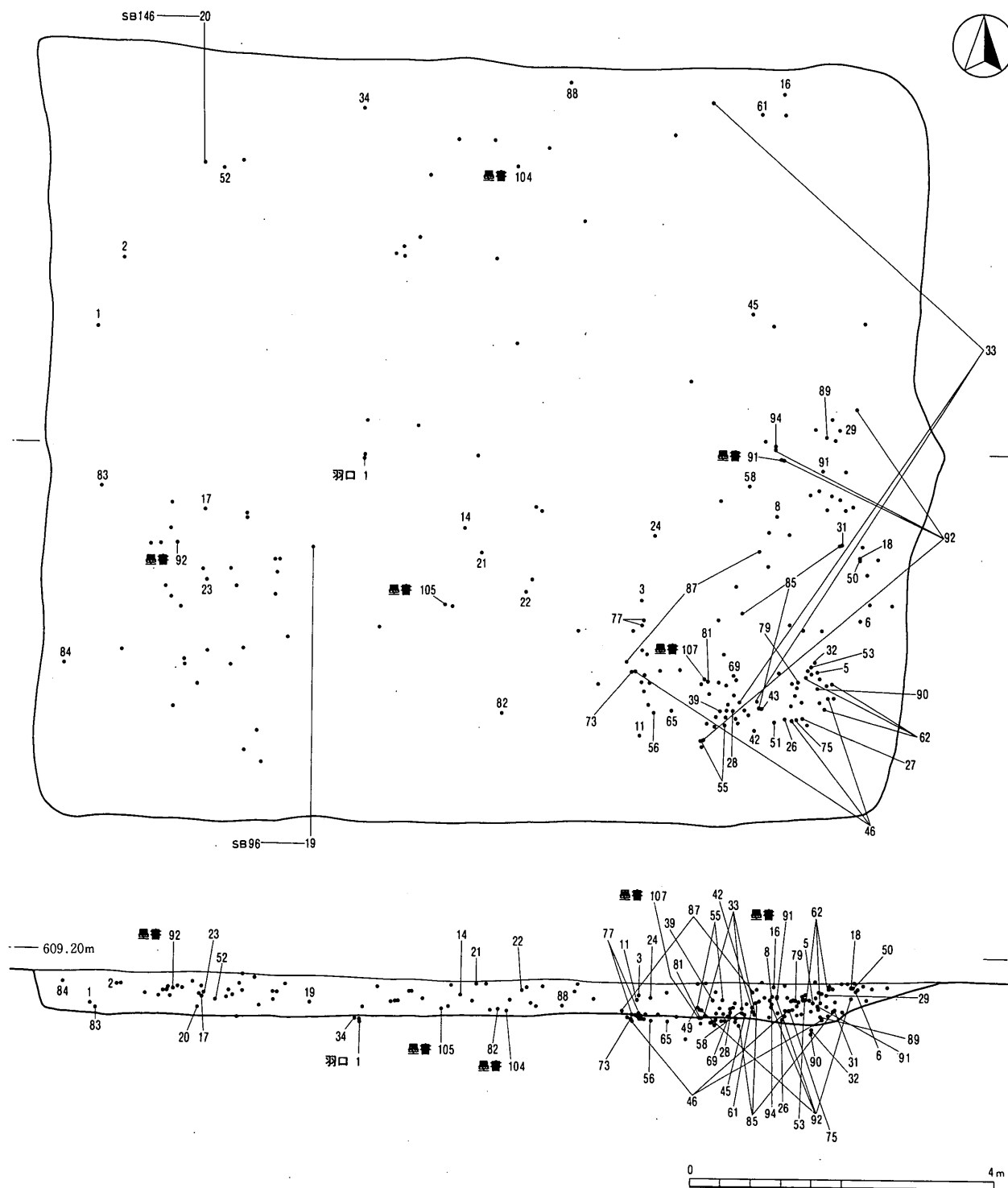
新段階 カマド：古段階のものをそのまま使用している。床：先にも記したように明確な床面は存在しない。このことは二時期に分けた想定が間違っているか、あるいは板敷等の床が想定できる。礎石：主柱をのせる礎石はそのまま継続して使用されるが、支柱を支える礎石に変化がみられる(主柱を支える柱がなく全く掘立柱建物址と同じ柱配置の可能性もある。また、カマドも全く新しい形態に変わっている可能性も考えられる)。主軸方向に4個ずつ、直交軸方向に2個が壁から離れて周囲を巡る。柱間は直交軸方向で280～350cmで、ほぼ等間隔である。西壁は中央の2個の礎石の間隔が短くなっている。北壁は等間隔に並ぶ。いずれも硬砂岩で、平坦面をもつ細長い河川礫を使用している。諸施設：住居址中央やや南に炭化物を含む落ち込みが床面より高い位置で確認された。一辺80cmの隅丸方形の範囲に炭化物の集積があり、その上面から羽口、鉄滓が出土しており鍛冶に関する施設と考えられる。遺物出土状況：覆土1層出土のものを新段階のものと考えた。



第35図 SB97石敷き施設遺物出土状況図



第36図 SB97鍛冶施設及び柱配置模式図

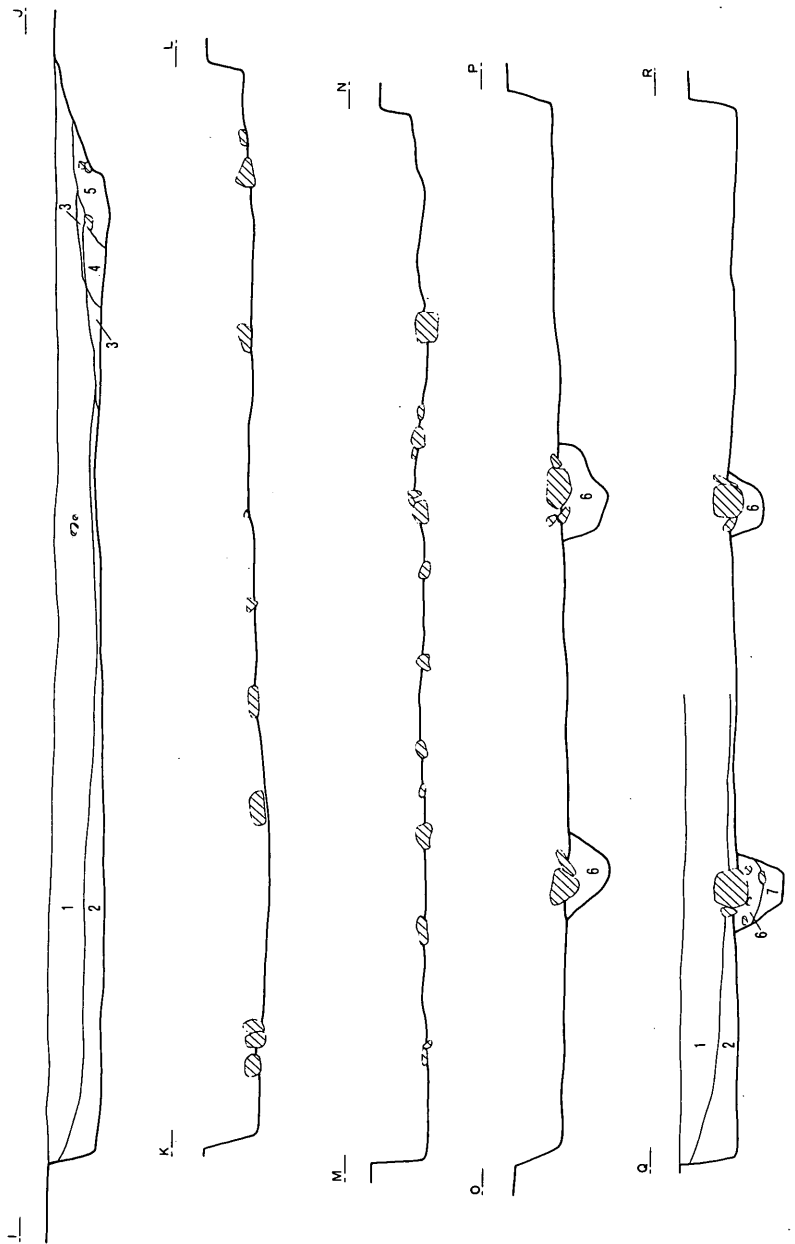
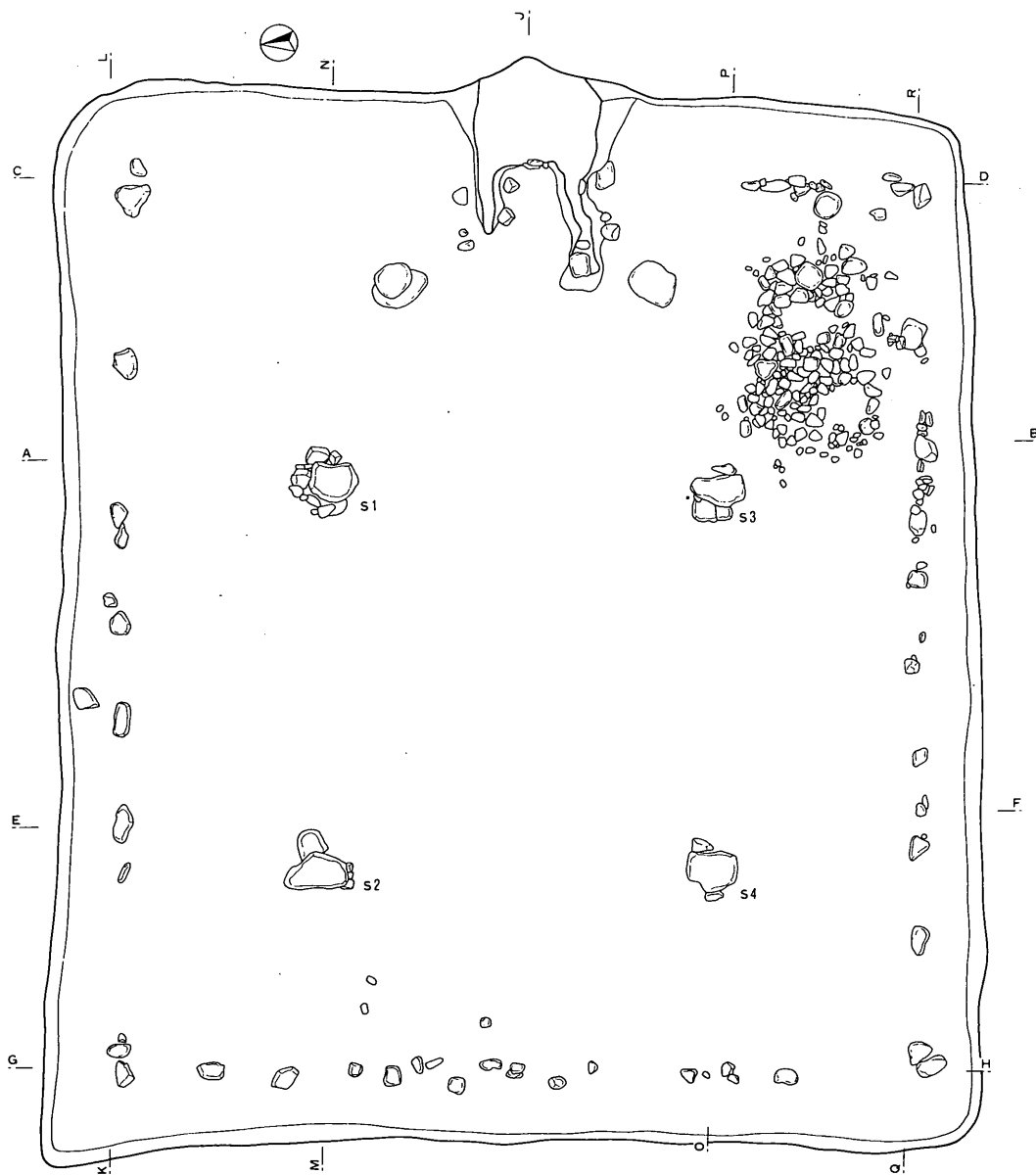


第37図 SB97遺物出土状況図 (1:80)

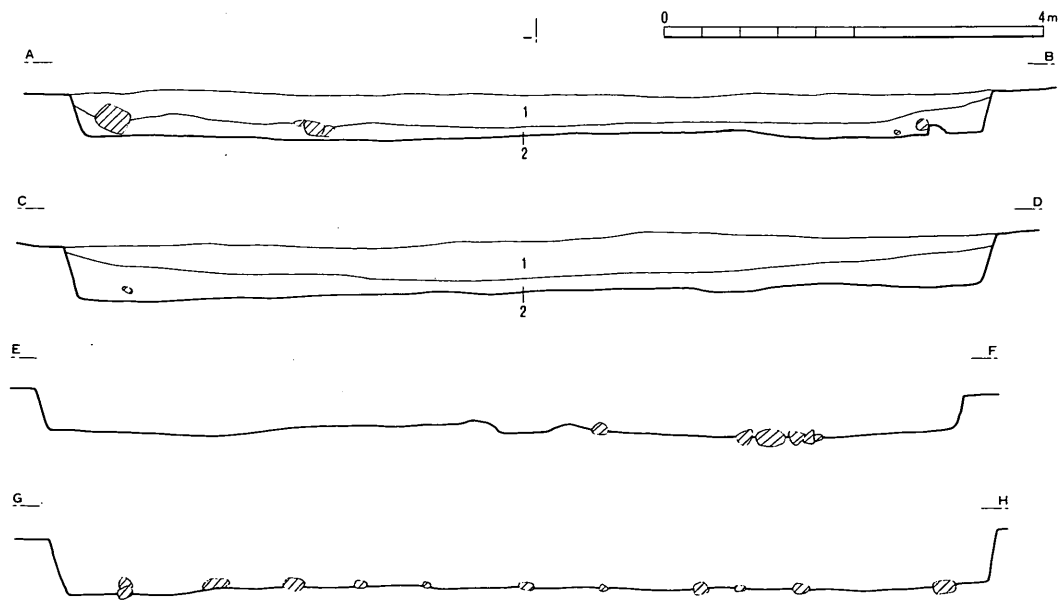
様相的に見ると新旧ともにほとんど相違はないが、上層のほうはやや灰釉陶器等が多い。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB99 位置：北部I 図版55、第40図

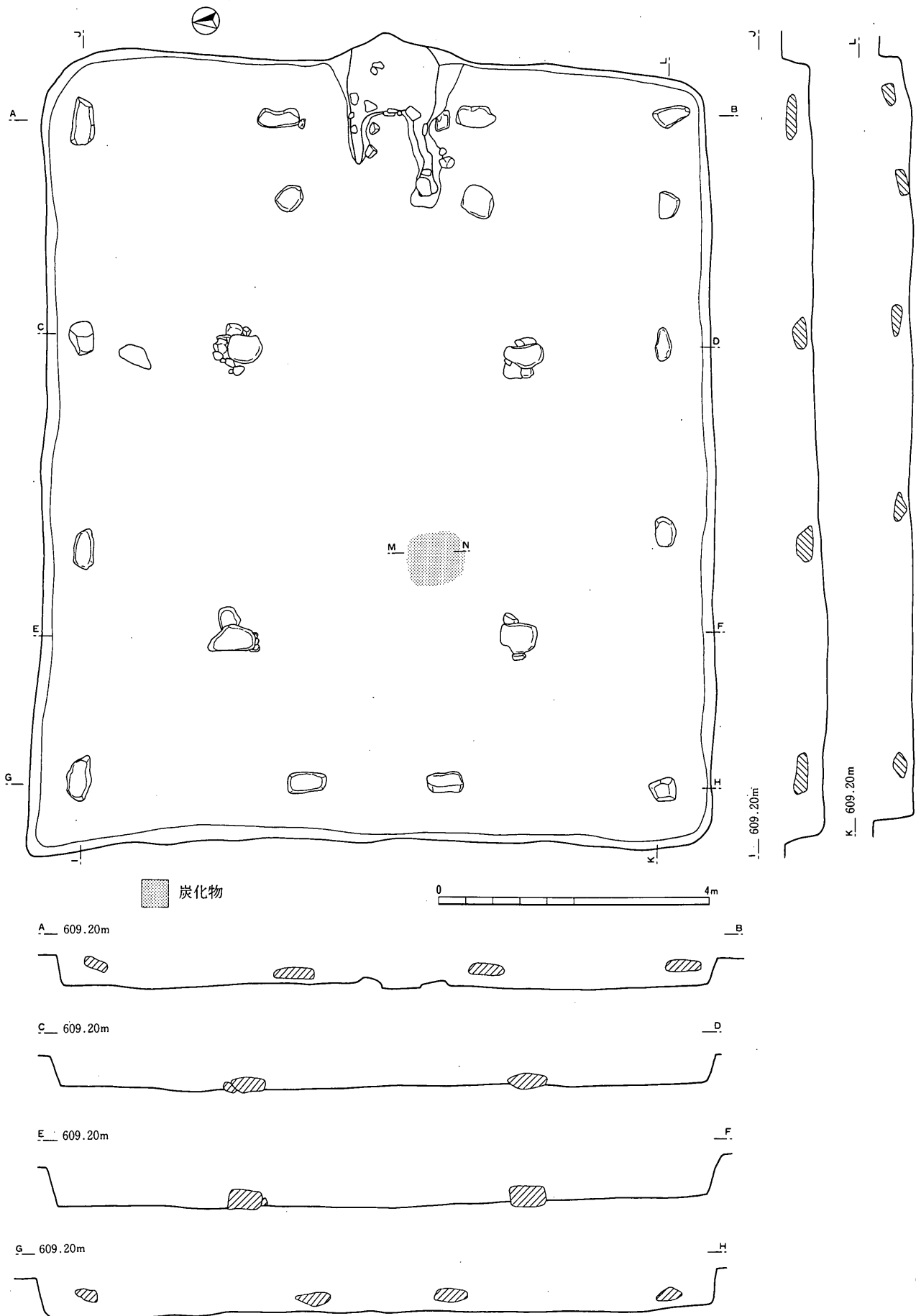
検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：北壁と西壁に検出されている。北壁中央に位置するカマドはカマド施設を残さず完全に破壊されており、また焼土等もほとんど検出されていない。掘り方は不整形に壁を掘り込む。西カマドは西壁中央に位置する函形カマドである。煙道は短く急に立ち上がる。燃焼部は崩落しており、袖等は残存しない。火床には焼土が厚く堆積し、奥壁部分は焼けて赤化して



- 1: 褐色土に小・中礫混
- 2: 黄褐色土に小・中礫混
- 3: 褐色土に焼土粒混
- 4: 焼土
- 5: 2層に焼土混
- 6: 褐色土に小礫多混
- 7: 6層に黄褐色土混

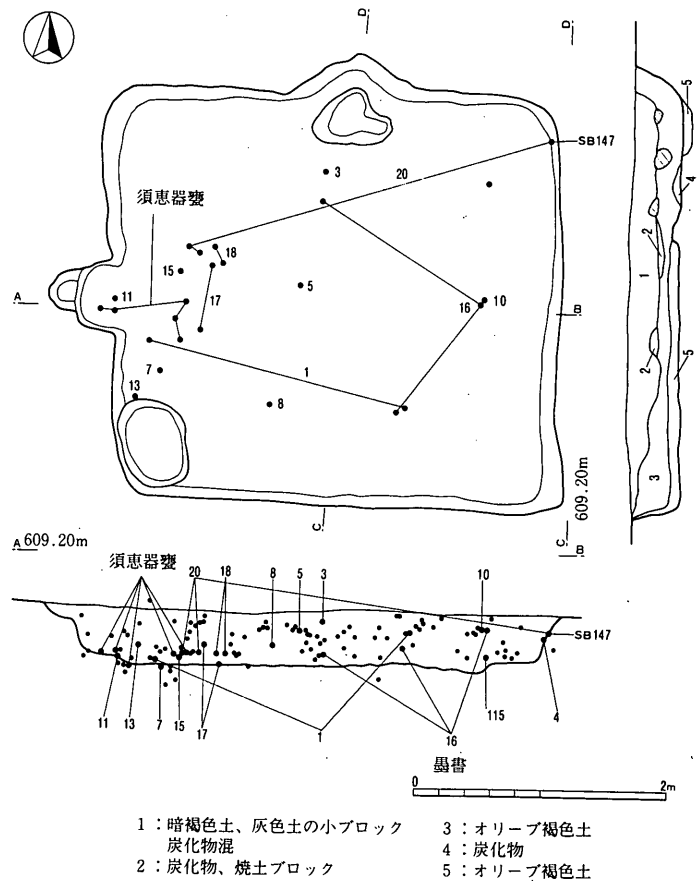


第38図 SB97実測図 (古段階)



第39図 SB97実測図 (新段階)

いる。北カマドから西カマドへ何らかの理由により作り替えられたと考えられる。床：中央部分に堅緻な貼床が認められるが、周囲はやや軟弱である。周囲の床下には不整形な掘り込みが見られる。西カマド左脇、南西隅に楕円形の落ち込みがあり、焼土や遺物を多量に含むことから灰溜め施設と考えられる。埋没：基本的には2層であるが、間に部分的に炭化物の層が入る。1層は暗褐色土で、3層はオリーブ褐色土の自然埋没と考えられる。遺物出土状況：住居址の規模に比して多量の遺物が出土しており、特に須恵器貯蔵具が多い。西カマド(11)及びその周辺(7・13・15・17)に多いが、覆土からも多く出土している。須恵器甕A(20)はSB147出土のものと同接合している。墨書土器は4点出土しており、図版171-105がカマド、107が床面、残りが覆土からである。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。



第40図 SB99遺物出土状況図

SB100 位置：北部 I
図版53・55

検出：SB143・144と切り合っている。当初、本址のカマドをSB143のカマドと誤認しSB143の掘り下げ段階で確認された。SB143の覆土中に本址のカマドが構築されていること、SB144の床が切れて低くなっていることなどから本址が一番新しいことがわかる。カマド：東壁やや南に位置する非常にコンパクトにまとまった石組カマドである。煙道は急激に立ち上がりほとんど残存しない。掘り方はやや方形に壁に掘り込み、大～巨礫を埋め込み袖部分を形成している。火床中央には石製支脚がありカマド前面には炭化物が広がっている。床：埋め戻し等は確認されていない。SB143の覆土をそのまま床面として使用しており、堅緻な面はない。カマド右、南東隅に焼土を多量に含む落ち込みがあり、灰溜め施設と考えられる。埋没：単層。暗オリーブ褐色土に小礫を包含する。一応自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド内の土器は一部を除き廃絶時の遺物と考えられる。須恵器長頸壺C(23)は床面から出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB101 位置：北部 II 図版64、第41図、PL25

検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：西壁中央よりわずかに南に位置する石組カマドである。煙道部分は上半が削平されているが、比較的緩やかに長く延びている。燃焼部はコンパクトにまとまったカマドであり石組もしっかりと残っている。大型の花崗岩の平石を利用して袖を作り、焚口部分の天井石には両端を成形した花崗岩を使用している。また煙道口部分の天井にも両袖に花崗岩の平石を載せている。床面：埋め戻しは確認されていないが中央部分に堅緻な部分が認められた。なお床面上には薄い焼土の層が広がっていた。諸施設：床面において2基落ち込みが確認されている。南西隅に位置する落ち込み(P1)は焼土・炭化物粒を含むことから灰溜め施設と考えられる。東壁中央下に位置する落ち込み(P

2)は不整形な三角形を呈する。埋没：覆土は2層であるが1層が大部分を占める。1層はII A 1層を基調とする暗褐色土で自然埋没と考えられるが、埋没過程で焼けた石の投げ込みがみられた。遺物出土状況：遺物はカマドに集中するが、P 1(2・10)・P 2(7)からの出土が見られる。カマド遺物には上面からの出土とカマド内出土のものがみられ、前者は廃絶時の遺物と考えられる。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB102 位置：北部III 図版67・69

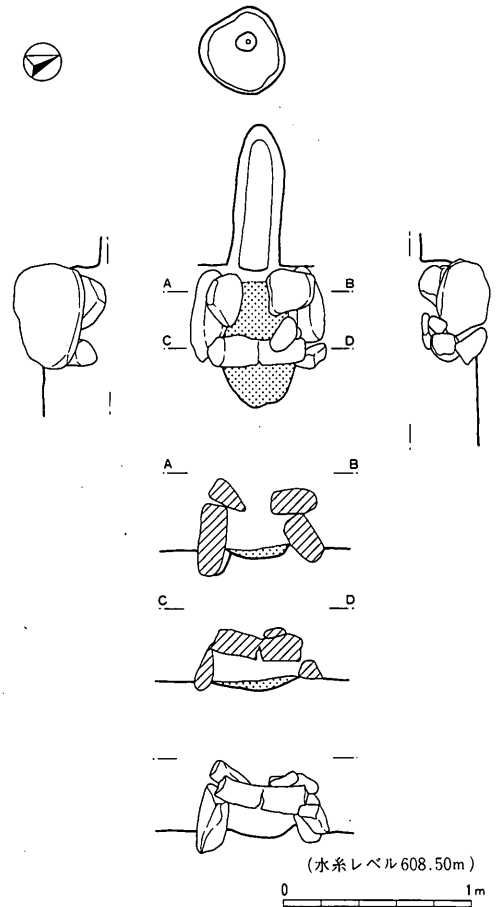
検出：II A 2層上面においてSB104と切り合うように検出された。本址の覆土は多量の礫を含むのに対して、SB104は礫を含まず褐色のブロックを含むことから、本址が切っていることが明らかとなった。カマド：東壁中央に位置するが、ほとんどが破壊されているため火床のみの検出となった。煙道もほとんど検出されていない。本来は粘土カマドで、大～中礫を芯材として用いたものと考えられる。床：II A 2層中への掘り込みであり、礫を多量に含み床自体も非常に不安定である。部分的に褐色土の貼床が存在するが非常に薄い。カマド南に極く浅い落ち込みがある。埋没：覆土は単層でII A 1層を基調とする暗褐色土に中礫を含んでいる。遺物出土状況：まとまった出土は見られない。西壁やや南の床面から潰れた状態であるが完形の黒色土器鉢A(8)が出土している。墨書土器(図版171-122)は覆土からの出土である。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB103 位置：北部III 図版69

検出：II A 2層上面においてSB104、ST106と切り合うように検出された。切り合い関係は本址が暗褐色土に焼土粒を含むのに対して、両址とも褐色のブロックを含むことにより本址が一番新しいと判断した。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は短く急に立ち上がる。燃焼部はかなり崩れているが両袖に花崗岩を埋め込んで袖部分を形成している。特に左袖の残りが悪い。床：貼床は部分的に認められ、住居址北半が堅緻なのに対して南は軟弱である。南西隅と北西隅の床面上に花崗岩の平石が据えられていた。埋没：覆土は単層で暗褐色土に焼土粒を含む。遺物出土状況：食器類の出土は少ない。中央やや南東よりの床面より上部を欠損した須恵器甕D(7)が出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB104 位置：北部III 図版69

検出：II A 2層上面においてSB102・103に切られ、ST106を切るように検出した。なおST106との切り合いの把握は不安定である。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道の一部及び右袖部分はSB102によって破壊されている。煙道は急に立ち上がりやや離れて煙出しがある。燃焼部の掘り込みはやや浅く、右袖部分に花崗岩の割石が配される。床：掘り方はII A 2層までであるが、西側ではII F層の礫層に達しているところもある。中央部分を除き軟弱である。埋没：覆土は単層で暗褐色土に大きなブロックを含み一時期に埋め戻されたものと考えられる。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。覆土中より墨書土器が3点出土している。時期：出土した遺物や遺構の切り合い関係から6期の所産と考えられる。



第41図 SB101カマド実測図

SB105 位置：北部III 図版66・69

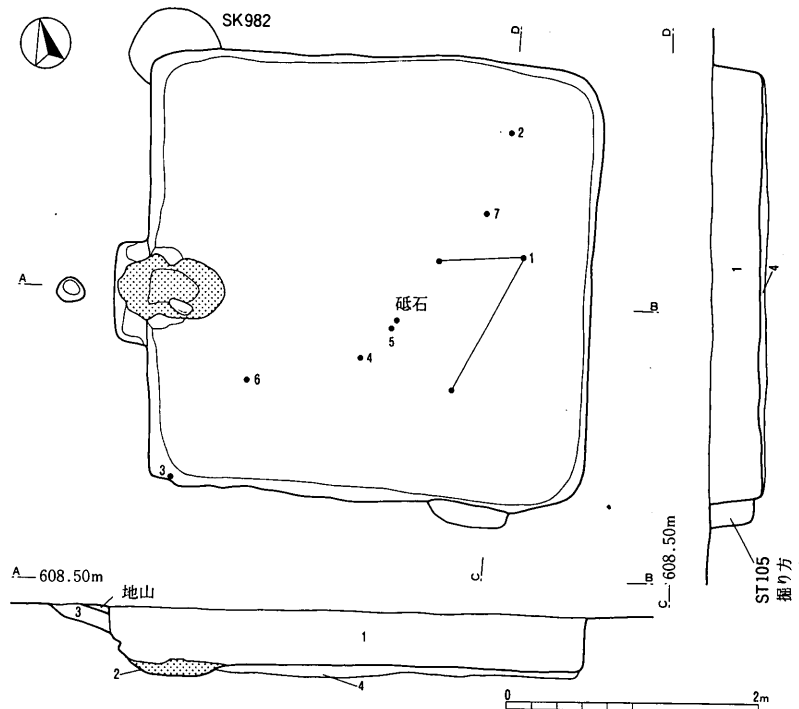
検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：西壁中央に位置する函形カマドと考えられるが、掘り方はやや崩れて丸みを帯びている。煙道はやや急に立ち上がる。燃焼部は崩落しており袖部分も崩れている。左袖部分と燃焼部奥壁上部に石がみられるが、小さく基本的には粘土で構築されている。床：全面に埋め戻しが確認され、比較的厚く施されている。中央部分に堅緻な面が認められる。カマド左、南東隅に小さな落ち込みが見られる。埋没：覆土は2層に分層され、いずれも褐色土のブロックを含むが、2層上面において比較的小さな礫による集石がみられた。集石内には焼土がみられるところもあり、1・2層とも人為埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土、床ともに遺物は比較的多い。墨書土器(図版172-126)がカマド上面より出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB106 位置：北部III 図版68・69

検出：II A 2層上面においてSD102と切り合うように検出された。切り合い関係は土質が近似するなどかならずしも明確ではないが、平面、土層観察で溝址が切るようには確認されなかった。カマド：東壁に位置するが、南東隅に寄って検出された。残存状況が非常に悪く火床のみの検出となった。火床の範囲から推定して小型のカマドであったと考えられる。また、抜き取り痕などがないことから構築材には粘土が使用されたと考えられる。床：全面に埋め戻しが認められたが、比較的軟弱な面が広がっている。カマド右に不整形な落ち込みがあり焼土等が認められることより、灰溜め施設と考えられる。その他小さな落ち込みが1基ある。埋没：覆土は単層で暗褐色土の淘汰の良い土であり、自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド周辺に集中する。墨書土器が2点出土しているが、図版172-127は灰溜め施設内、128は覆土から出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB107 位置：北部III 図版68、第42図

検出：II A 2層上面においてST105、SK982・987を切るように検出された。ST105の掘り方には褐色のブロック、焼土粒を含むのに対して、本址は淘汰の良い土であり土質に明瞭な差がみられる。カマド：西壁中央に位置する函形カマドである。壁への掘り込みは比較的浅く、掘り方をある程度埋め戻して燃焼部を作っている。天井部は崩落しているがその粘土が残存し、袖部分にもわずかに認められる。火床には焼土が厚く堆積し、奥壁にも焼土化した面がみられる。煙道は比較的急に立ち上がる。床：全面に埋め戻しが施され、平坦で比較的堅緻な面が広がる。カマド左、南西隅に浅い落ち込みがみられる。埋没：II A 1層を基調とする褐色土の単層である。遺物



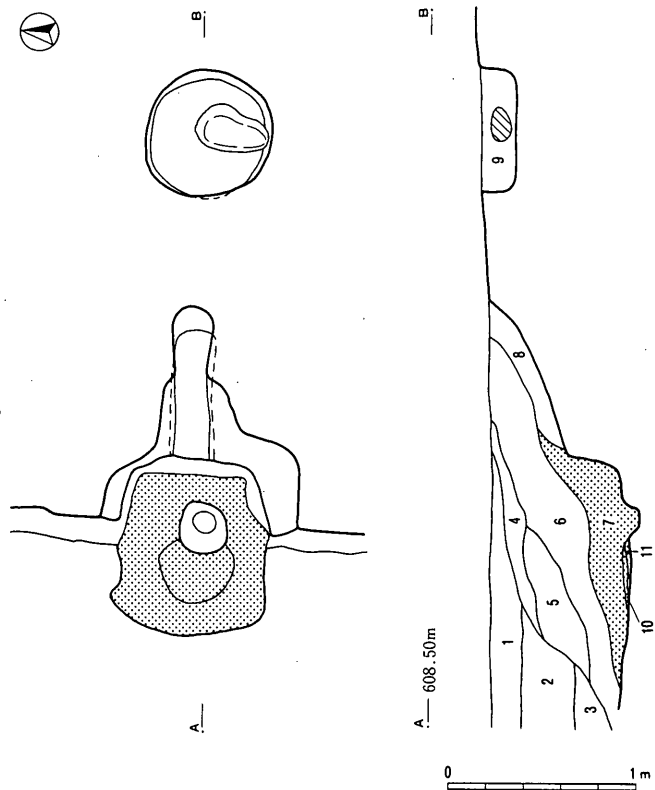
第42図 SB107実測図

出土状況：カマドを中心として出土しているが、遺物は非常に少ない。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB108 位置：北部Ⅲ

図版68、第43図、PL25

検出：II A 2層上面において検出された。SB109と切り合い関係にあるが、両址とも土質の差はわずかで土層観察によりSB109の貼床が認められないことより本址が新しいと判断した。しかし、遺物の検討より本址が古いことが判明した。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。非常に大型のカマドである。煙道は比較的緩やかに立ち上がるが、煙道口から煙出しのピットまでは2m程ある。ピット状に残った煙出しには花崗岩の人頭大の礫が1個入れられている。燃烧部の天井は崩落しており広範囲に粘土が広がっている。火床には厚く焼土が堆積しており、住居址の壁を結ぶ線に支脚抜き取り痕跡が認められた。燃烧部の内面は非常に焼け硬化している。床：地山に近い土が全面に埋め戻されており、非常に堅緻な叩きの床が認められた。南東隅部分でやや軟弱な部分が認められている。南西隅の床面上に小砂利をつき固めたステップ状の高まりが検出されており、出入口に関する施設の可能性がある。埋没：覆土は3層に分層されたが、いずれもII A 1層を基調とし、2層で褐色のブロックが顕著となる。いずれも人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物出土状況：住居址の規模に比して遺物の出土は非常に少ない。墨書土器が南西隅の床面上から出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。



- 1：褐色土 灰白色土多量に混入、焼土・炭化物少量
- 2：にぶい黄褐色土 黄褐色土・灰白色土がブロック状に混入
- 3：灰黄褐色土 黄褐色土ブロック混入
- 4：灰黄褐色土 炭化物混入、焼土ブロックがバンド状に入る
- 5：にぶい黄褐色土 黄褐色土ブロックが多量に混入
- 6：褐色土 ブロック少混
- 7：暗褐色土 焼土ブロック、炭化物を多量に含む
- 8：褐色土 焼土ブロックが多量に混入
- 9：暗褐色 焼土ブロック、炭化物を多量に混入
- 10：炭化物層
- 11：地山 焼土化した部分

第43図 SB108カマド実測図

SB109 位置：北部Ⅲ 図版68、PL25

検出：II A 2層上面においてSB108と切り合うように検出された。一部SD108の影響を受けた砂層に掘り込んでいる。カマド：東壁中央に位置する。粘土カマドと考えられるが、カマドの構造物は煙道のみを検出となった。また、壁への掘り込み等もみられなかった。床：北東隅を除いて全面に貼床が認められた。南東隅に落ち込みがみられ、灰溜め施設と考えられる。埋没：覆土は2層に分層したが、1・2層ともオリーブ褐色土であり同一層と考えられるが、挟雑物の差により細分した。覆土は自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド火床及び灰溜めに集中するが、遺物の量自体は少ない。時期：SB108との切り合い関係や遺物の様相から7期の所産と考えられる。

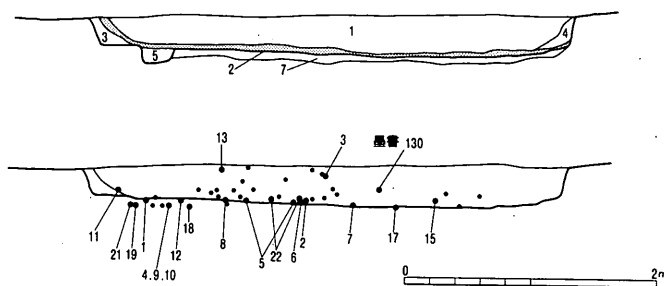
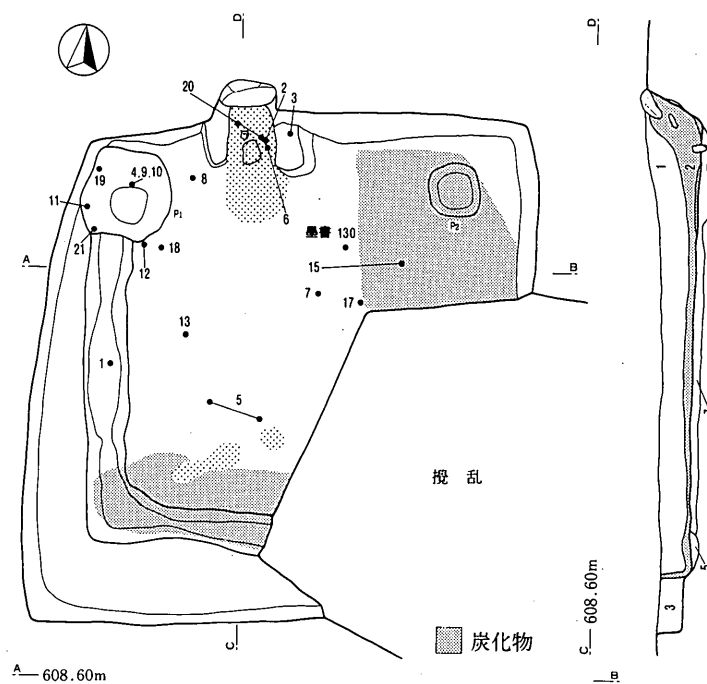
SB110 位置：北部Ⅲ 図版68

検出：II A 2層上面で単独で検出されたが、本址もSD108の影響を受けた砂層に掘り込んでいる。カマド：東壁中央よりわずかに南に位置する。若干の壁への掘り込みがみられる。煙道は短く急に立ち上がり、上半は削平されている。燃烧部には左袖の奥壁部分に花崗岩の石材がみられる。焚口部分に枕石状の細長い

石がみられる。また奥壁部分に土師器甕が張り付くように検出され、構築材の一部と考えられる。火床部分には焼土は少なく使用頻度が低かったか、あるいは焼土が掻き出された結果と考えられる。床：2面確認された。両面ともに全面に貼床されている。何らかの理由で床面のみが補修されたものと考えられる。埋没：覆土は褐色土粒の量の違いにより2分層したが基本的には同一層と考えられる。II A 1層を基調とする黒褐色土層から成り自然埋没と考えられる。遺物出土状況：土師器甕類の出土が多く、カマドにまよまる。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB111 位置：北部III 図版80、第44・45図、PL25

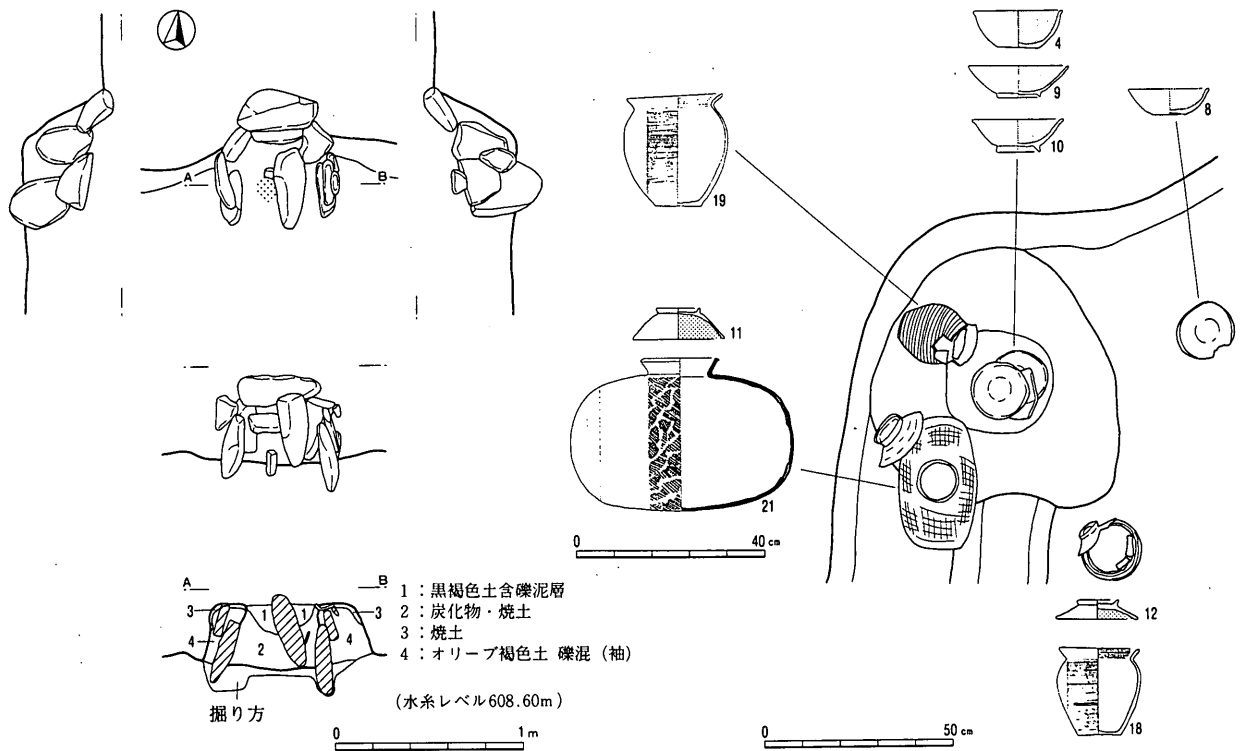
検出：本遺跡の北端に位置する住居址で、工事により一部破壊を受けている。II F層上面において単独で検出された。カマド：北壁中央よりやや西による石組カマドである。天井部を除いてほぼ原形を留めている。煙道はほとんど残存せず急激に立ち上がっている。燃焼部は11個の石材により組まれており、そのまわりを地山の礫混じりの土で覆っている。袖部分は3個の石を組み合わせる袖を形成し、焚口部と煙道口に天井石を渡している。いずれも河川礫の花崗岩と硬砂岩を使用している。半割などある程度の大きさに加工しており、左右の袖石が接合しているものもある。焚口部分のものは崩れ落ちているが、不自然な落ち方をしており破壊された可能性がある。火床部には石製支脚がある。床：全面に禾本科類の炭化物が広がっており検出は容易であった。炭化物の分布は住居址の東半と南半に厚く分布しており住居内の機能を考えるうえで貴重な資料である。また炭化物は周溝状の掘り方の外には及ばずそこで立ち上がっている。これは住居の荒掘り後に南壁と西壁部分を埋め戻し、何らかの壁構造を有したと考えられる。また周溝状の掘り方もこの時点で埋められ床が作られている。貼床は全面に及んでおり、北東隅に小さなすり鉢状の落ち込みがある。埋没：覆土は2層から成り1層は中～小礫を多量に含む黒褐色土であり、2層は炭化物の層であるが炭化材、焼土は含まない。1層は自然埋没と考えられる。2層は焼失による炭化物とは考えにくく住居廃絶に伴うもので、カマドの破壊とともに焼却されたものと考えられる。遺物出土状況：当時の生活遺物が良好な状態で検出された。遺物はカマド左脇に集中している。黒色土器Aの椀・皿・杯、小型甕、横瓶が出土している。小型甕D(18)には皿(12)が、横瓶(21)には椀(11)の蓋がされていたらしく、ずり落ちた状態で出土した。時期：出土した遺物の様相から7期の所産と考えられる。



- 1：黒褐色土、含礫泥層
- 2：炭化物、焼土
- 3：黒褐色土、含礫泥層
- 4：黄褐色粘土混の焼土層
- 5：オリーブ褐、砂礫層

第44図 SB111実測図

SB112 位置：北部I 図版49
 検出：II A 2層上面において単独で検出



第45図 SB111カマド実測図・遺物出土状況図

したが、住居址の大部分が調査区域外に延び、調査できたのはカマドを含めてごくわずかである。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は既に削平されてない。燃烧部石組は両袖ともに袖先端部分に硬砂岩の河川礫を埋め込み、比較的小さな石2個で焚口部分の天井を作っているが、逆「ハ」の字状に崩れ落ちている。火床中央部に石製支脚がある。床：地山の土を埋め戻している。埋没：掘り込みはII A 1層から行なわれているようであるが覆土との区別は難しい。覆土は3層から成り、1・2層は褐色土、3層は暗褐色土である。遺物出土状況：カマド内からの出土が多い。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB113 位置：北部 I 図版51

検出：II A 2層上面において単独で検出された。一部II F層にかかる。カマド：西壁中央やや北に位置するカマドであるが、カマド掘り方は半円形状に大きく張り出すが、火床のほかは検出されずカマド自体もはっきりしない。床：掘り方も確認されかなり厚く埋め戻しがなされているが、床自体は非常に軟弱である。カマド左に焼土の極く薄い落ち込みがある。埋没：II A 1層を基調とする黒褐色土に中礫を多量に包含する単一層である。遺物出土状況：遺物は極端に少なく細片が少量出土しただけである。時期：時期を決定できる遺物がないが、住居址の規模等から7期に属すると考えられる。ただ住居址の主軸方向が他と異なっており注意を要する。

SB114 位置：北部 I 図版50・51

検出：II A 2層上面において検出され、SK452を切る。カマド：東壁中央よりやや南に位置する。煙道は短く急に立ち上がる。燃烧部は完全に破壊されており、火床のみの検出となった。やや粘質で炭化物を含む褐色土が構築材の粘土と考えられる。火床の両側に平石が出土しているが、カマド構築材であるのか、その他の用途か判断できない。床：南側ではII F層の礫層が高く、床には多量の礫を含んでいる。不安定な床で柱穴等の施設もない。埋没：II A 1層を基調とするが中礫を多量に包含する黒褐色土の単層である。遺物出土状況：食器類が中心で土師器甕類の出土が少ない。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられ

る。

SB115 位置：北部 I 図版51、第46図

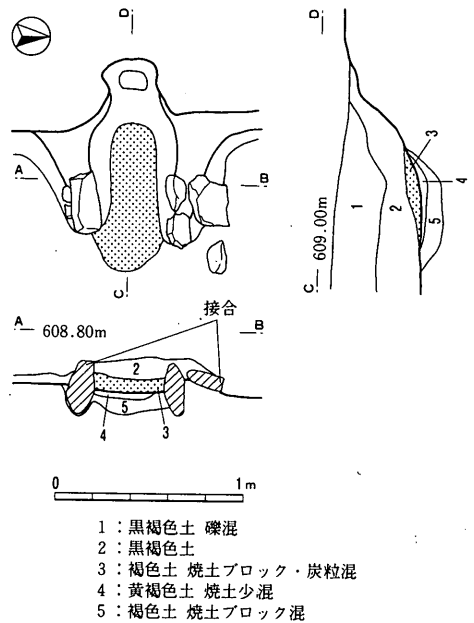
検出：II A 2層上面においてSD117と切り合って検出された。当初SD117を切ると判断し、長方形のプランを想定した。切り合い自体には間違いはないが遺物や接合関係より方形に近いプランとなる可能性がある。カマド：西壁やや北寄り(中央の可能性もある)に位置する石組カマドである。煙道は短く急に立ち上がる。燃烧部の天井部はすでになく袖部分の石組のみが残存している。左袖1個、右袖に2個の石を埋め込んでおり、袖石の基部には中礫が栗石状に詰められている。右袖にはさらに石が添えられているが、この石は左袖石と接合する。これは構築時に袖石の上端をそろえるために打ち欠かれ、打ち欠いた石を補強材として使用したと考えられる。床：東半で固く、カマド周辺で軟弱となっている。埋没：覆土は2層に分層したが、いずれもII A 1層を基調とし礫の混入に違いが見られる。自然埋没と考えられるが時間的断絶は認められない。遺物出土状況：比較的まとまって出土しているがSD117からの混入が見られる。墨書土器が6点出土している。時期：出土した遺物には時間幅が認められ最も新しい様相を示す7期の所産と考えられる。

SB116 位置：北部 I 図版51 第47図

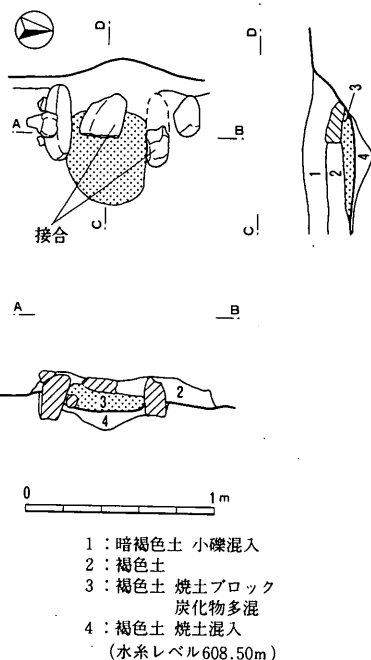
検出：II A 2層上面において検出されたが一部II F層に切り込んでおり、区画溝 I、SD117と切り合い関係をもつ。当初区画溝 I に切られると判断したが遺物等の検討により本址が切ることが確認された。カマド：西壁中央に位置する石組カマドである。上面は削平され煙道は存在しない。両袖に花崗岩の平石を1個ずつ埋め込んで袖としているが、右の袖石は途中で折損しており、火床上面に遺棄されている。これは住居廃絶時にカマドが破壊されたものと考えられる。床面：II F層に掘り込んでおり非常に不安定な床面となっている。カマド右に不整形な落ち込みを検出した。埋没：覆土は単層で暗褐色土に中礫を大量に含む。遺物出土状況：カマド内より完形の黒色土器杯A(3)が出土している。カマド内より墨書土器の破片が出土している。時期：出土遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB117 位置：北部 I 図版53

検出：II A 2層上面においてSK501・503・504を切るように検出された。カマド：東壁中央に位置するが構造等は不明である。短く急に立ち上がる煙道があるだけで火床等も検出されていない。床：非常に不安定な床であり焼土・炭化物の広がりをもって床面とした。床面中央に非常に軟弱な部分がみられ、不整形な深い落ち込みとなった。SB14でも同様な落ち込みが検出されているが、用途等は不明である。埋没：覆土は3層に分層され、1層はII A 1層を基調とする暗褐色土で礫を含み、2・3層は褐色土を中心とする粘質土である。遺物出土状況：覆土1層を中心として出土している。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。



第46図 SB115カマド実測図



第47図 SB116カマド実測図

SB118 位置：北部III 図版70

検出：II A 2層上面においてSK1094を切るように検出された。カマド：東壁中央やや南に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに長く延び、離れて煙出しのピットがある。煙出しのピットには焼けた花崗岩が入れられている。燃焼部の壁への掘り込みは比較的浅く、火床部分が縦長に延びており住居址の規模に対して大型のカマドとなっている。燃焼部はすでにくずれており火床のみの検出となったが、石組等はなく粘土のみによる構築と考えられる。床：住居址南半に焼土が薄く堆積しており、この焼土により床面を判断した。特に貼床は認められず地山を床面として使用している。小さな落ち込みが3基認められた。また、南西隅に礫の集積がみられ、砥石(図版193-13)を含んでいた。これら礫の集積は石錘として使用されたと考えられる。埋没：覆土は4層に分層され、1・2層が大部分を占め、暗褐色土に褐色土粒・ブロックを含んでいる。3層は暗褐色土に灰色土粒を含み、4層は焼土層である。遺物出土状況：土師器甕が多くカマドに集中する。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB119 位置：北部III 図版72、PL27

検出：II A 2層上面において検出されSB120と切り合う。本址がII A 1層を基調とするのに対してSB120はII A 2層を基調とし、暗褐色のブロックを含み明確に区別でき、本址が新しいと判断した。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドで壁への掘り込みは丸くなっている。煙道部は既に削平されて存在しない。燃焼部も崩れており袖等は検出されず火床のみの検出となった。火床中央に石製支脚と考えられる石がある。床：貼床は中央部分で確認されたが、面的には確認されなかった。カマド右脇に小さな落ち込みが確認された。埋没：暗オリーブ褐色土の単層で自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土からの出土は少なく、カマドに集中する。南西隅よりの床面上に小型甕D(6)の上半が出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB120 位置：北部III 図版70・72、PL27

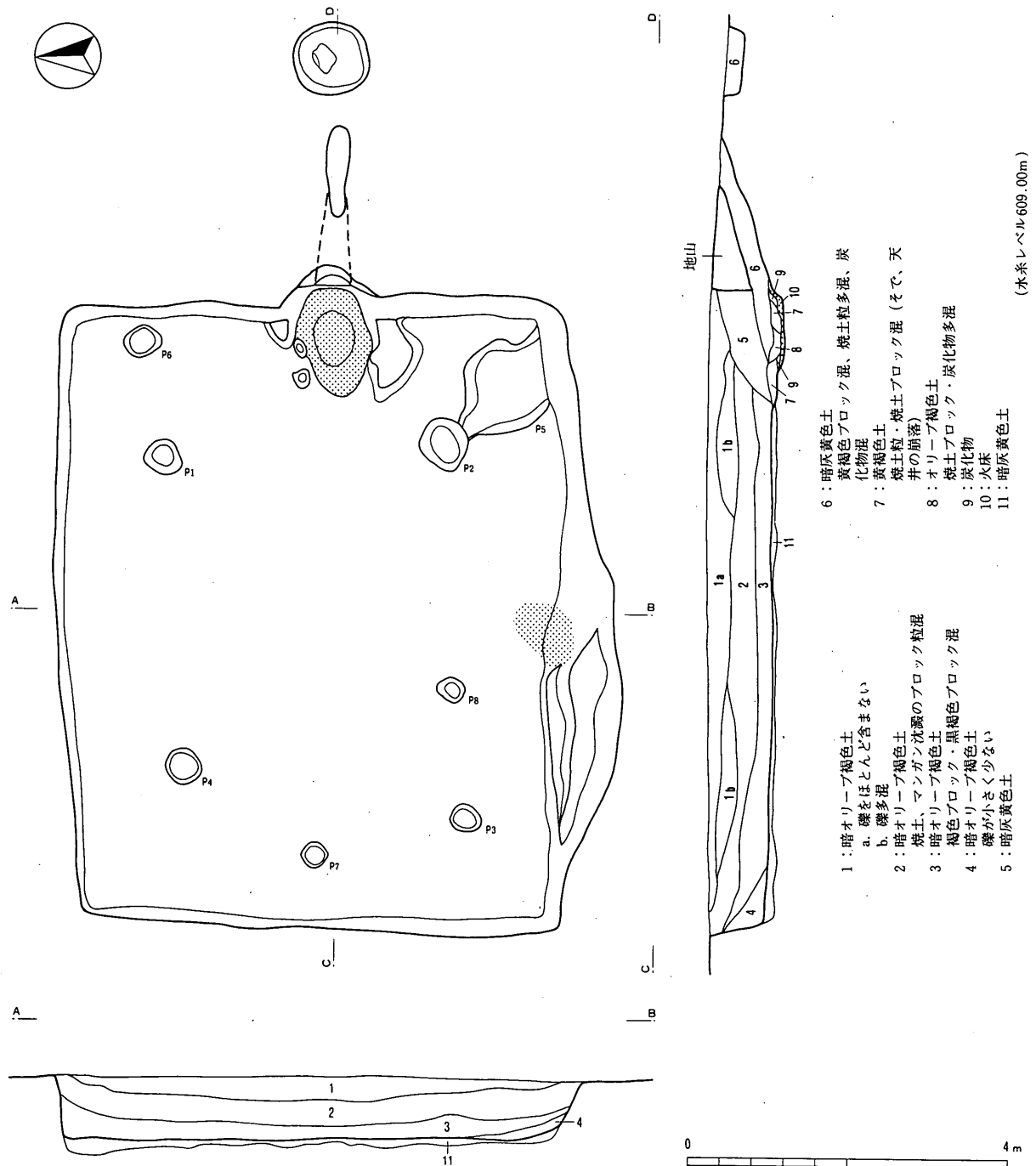
検出：II A 2層上面においてSB119に切られ、SK1327・1328に切られるように検出された大型の住居址である。掘り下げ段階でカマドが2基みつき東カマドを古段階、北カマドを新段階とした。

古段階 カマド：東壁中央に位置する粘土カマドである。煙道は長く緩やかに立ち上がりやや離れて煙出しのピットがある。燃焼部は完全に破壊され新段階の貼床の下に火床部分が残るだけである。床：全面に貼床が認められた。荒掘りは凸凹しておりその上に貼床がなされている。周溝は新段階のものに破壊されておりはっきりしない。柱穴：主柱穴は4基確認され、柱間間隔は主軸方向で325cm、直交軸方向で300cmを測る。その他北西隅に落ち込みが1基ある。遺物出土状況：煙道内より須恵器杯Cが出土している。

新段階 カマド：北壁中央に位置する粘土カマドと考えられる。カマド上面はSB119に破壊されており、また本体も崩れて火床のみの検出となった。床面：全面に貼床が認められた。カマド部分を除き周溝が巡る。柱穴：床面においては確認されなかった。しかし、柱穴に重複のあとがないことから古段階のものをそのまま継続して使用した可能性が高い。埋没：覆土は単層でオリーブ褐色土に暗褐色土の大きなブロックが混ざる。遺物出土状況：住居址規模に比して出土量は少なくカマドに集中している。食器の出土が少ない。時期：出土した遺物やSB119との切り合い関係から4期の所産と考えられる。

SB121 位置：北部III 図版74、第48図、PL27

検出：II A 2層上面において単独で検出された非常に大型の住居址である。プランは長方形で南壁の一部が張り出す。カマド：東壁ほぼ中央に位置する非常に大型の函形カマドである。煙道部は全長で300cmを越え、残存する煙道だけでも200cmに達する。煙出しのピットは径が90cmを測り、花崗岩の河川礫が入れられている。燃焼部は完全に崩落しており火床がパックされた状態で検出された。構築材は粘土のみであり、黄褐色土が使用されている。火床中央で構築材の粘土が切れるところがあるが、それは火床の中央に位置



第48図 SB121実測図

し掛口部分を示すと考えられる。火床、煙道共に良く焼け使用を物語っている。床：礫砂層に掘り込んでおり灰黄色土を埋め戻している。全面が堅緻というわけではないが部分的に鉄分の集積があり堅緻な部分が存在する。柱穴：支柱穴は4基と考えられるがP3の位置がずれておりやや不整形な配置となる。柱間隔は主軸方向195cm、直交軸方向で180cmを測る。埋没：覆土は3層に分層され、1層は暗オリーブ褐色土で礫をほとんど含まない。2層は暗オリーブ褐色土で礫を多量に含み、灰白色のバンドが含まれる。3層は基本的には2層に類似する。いずれも自然埋没と考えられる。遺物出土状況：2層を中心として出土しており、小破片が多い。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB122 位置：北部III 図版80

検出：トレンチ調査でその存在が確認されたが、検出は難しく当初複数の切り合いを予想したが土層観察

により単独の住居址と確認した。本址は上面を礫層により削られておりわずかしか遺存しない。カマド：東壁中央に位置する。遺存状態は非常に悪く火床のみの検出となった。燃焼部はわずかに丸く壁へ掘り込んでいる。石組カマドと考えられるが、遺存するのは右袖のみでそれも動いている。床：南半に貼床が残る。南壁下とカマド付近に上面が平らな石があり礎石の可能性がある。南壁下に不整形な落ち込み(P1)があり焼土の堆積がみられた。埋没：覆土は2層であるが基本的にはオリーブ褐色土の同一層と考えられ、礫を含んでいる。遺物出土状況：カマド(2・7・10・13)とP1(5・15)に集中する。墨書土器が1点覆土から出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB123 位置：北部II 図版58・60

検出：II A 2層上面において溝址群IIIに切られて検出された。溝址との切り合いは平面においても断面においても良好に確認された。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は急に立ち上がりやや離れて煙出しのピットがある。燃焼部は完全に崩落した形で検出された。天井部を形成していた粘土は地山の黄褐色土を用いたもので非常に固くなっている。壁への掘り込みは比較的浅く、焚口部分に抜き取り痕と考えられる落ち込みがあり、焚口部分は石組で補強してあった可能性がある。床面：全面に貼床が認められた。西壁中の下の床面に浅い円形の落ち込みがあり、焼土を含んでいた。埋没：3層に分層したがいずれも暗褐色土に褐色ブロックを含む同一層と考えられ、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：遺物量は少なく、カマド右脇の床面上に須恵器甕が敷き詰められるように出土している。時期：遺物量が少なく時期決定が難しいが溝址群IIIに切られることから5期あるいは6期の古い段階と考えられる。

SB124 位置：北部II 図版60

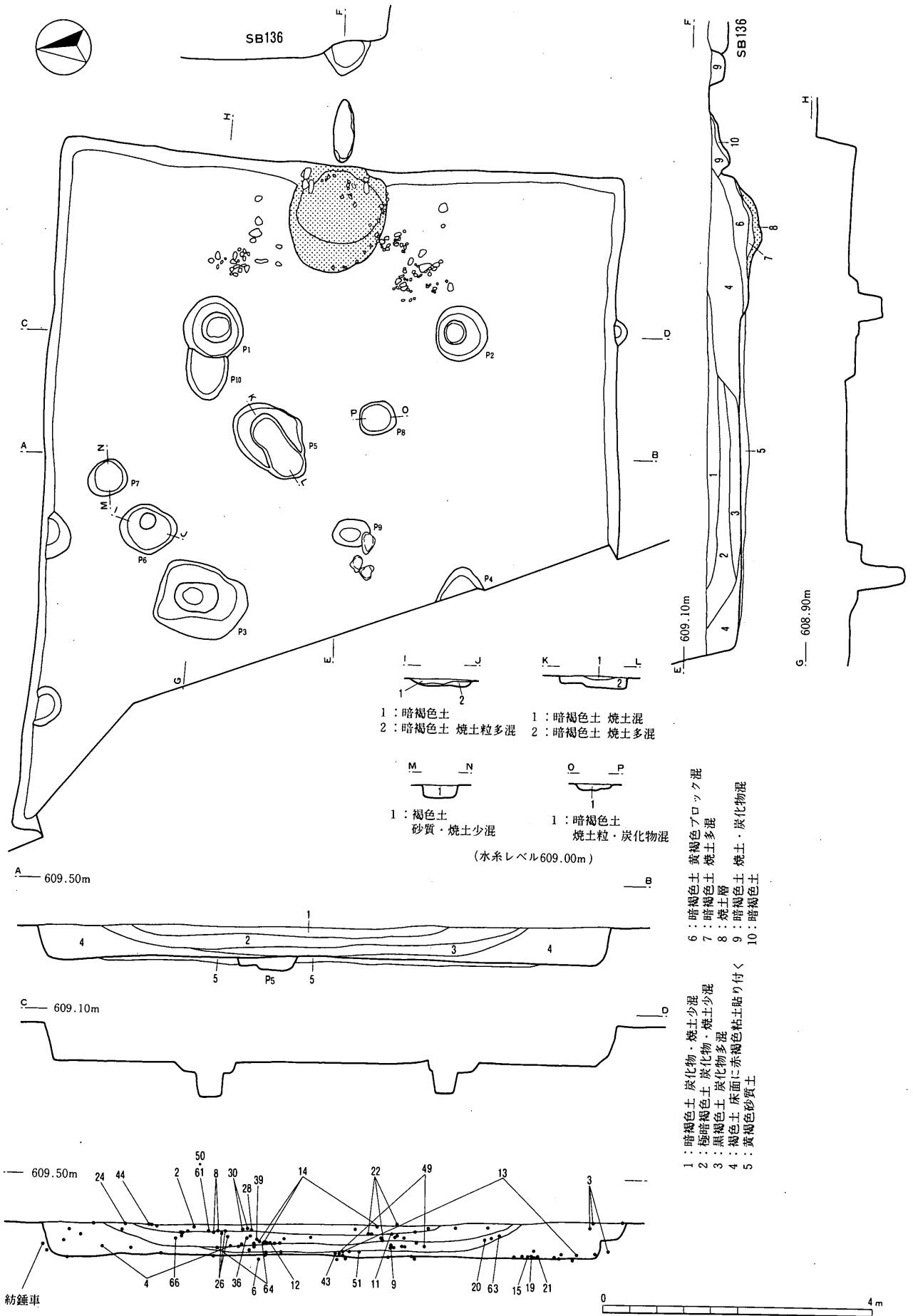
検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドと考えられる。煙道は緩く立ち上がりその先端がわずかに肥大して凹む。燃焼部は崩れており構造は判然としない。袖等も痕跡のみが検出されたに過ぎない。火床中央には袖石抜き取り痕が確認された。床：中央部分に堅緻な床面がみられ、全面に埋め戻しが確認された。柱穴：主柱穴は2基対角線上に検出されたが基本的に4基の本柱穴をもつと考えられる。ほぼ方形に配されると考えられ柱間は210cm程度になることが予想される。その他落ち込みが3基確認されている。埋没：覆土は2層に分層されたがいずれも暗褐色土で褐色土粒を含んでおり漸移的に変化する同一層と考えられる。一応自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土から散漫に出土している。土師器甕B(13)は煙道からの出土である。時期：遺物の様相から4期の所産と考えられる。

SB125 位置：北部II 図版62

検出：II A 2層上面において単独で検出されたが南西隅部分が調査区域外に入る。カマド：東壁中央やや南に位置する。煙道は比較的緩やかに立ち上がり、わずかに先端が肥大する。燃焼部は両袖の上端に比較的小さな礫をのせるが基本的には粘土カマドである。床：ほぼ平坦な床で全面に埋め戻しが確認された。南東隅に円形のすり鉢状の落ち込み(P1)がみられ灰溜め、あるいは貯蔵穴と考えられる。埋没：覆土は4層から成るが上下層に大きく分けられる。上層は黒褐色土を中心とし、下層は灰黄褐色土である。人為埋没を示す様相はない。遺物出土状況：P1からまとまって出土している(1・3・5・7・9)。時期：出土した遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB126 位置：北部I 図版52・54、第49図、PL28

検出：II A 2層上面において検出され、SD135、SK476と切り合う。南西隅部分は調査区域外にかかっている。非常に大型の住居址であり、SB97に次ぐ規模をもつ。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドと考えられるが、袖基部に若干の石組が残る。煙道は比較的急に立ち上がり、その先に煙出しのピットがあるが、



第49図 SB126実測図

その一部はSB136により破壊されている。燃焼部は崩れ去り遺存状況は非常に悪い。袖基部のみ破壊を免れたらしく両袖基部にカマド石を埋め込んでいる。また、カマドの周囲に中礫のまとまりがみられカマドとの関連が予想される。床：周壁部分の70～80cmを除き貼床が認められた。貼床は5cm程度認められた。柱穴：支柱穴は4基確認されたがP4の大部分が用地外にかかっている。柱間間隔は主軸方向に400cm直交軸方向に360cm程度で、やや矩形に配される。P4を除き柱痕跡を確認することができ、柱は40cm程度と推測できる。諸施設：床面上には7基の落ち込みが確認された。P5は浅い落ち込みであるが焼土が多量に認められ、火処と考えられる。またその隣のP7も焼土を含みその脇に石が3個出土している。用途は不明であり、根拠もないが鍛冶に関連する施設の可能性も考えられる。埋没：覆土は4層に分層され、1～3層と4層に大きく分けることができる。1～3層は炭化物・焼土を含む黒褐色土で、特に3層は炭化物を30%以上含んでいる。4層は褐色土で炭化物等の混入は無い。4層の埋没後に人為的な埋め戻しを含めた自然埋没と考えられる。遺物出土状況：遺物は非常に多く、1～3層に集中し住居址廃絶後の凹地をゴミ穴として使用したと考えられる。主な遺物としては漆入の須恵器杯A(32)、土製紡錘車などが床面から出土している。覆土からの主な遺物としては朱墨硯(図版188-501)などが出土しており、墨書土器5点も覆土からの出土となっている。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB127 位置：北部I 図版50・52、PL28

検出：II A 2層上面において検出されたが建物址の可能性のあるSK442・472・473に切られている。西壁部分が調査区域外に入る。カマド：東壁中央やや南に位置する粘土カマドである。煙道は比較的急に立ち上がり、離れて煙出しのピットがある。燃焼部は崩れており原形を留めず石組等の痕跡はない。床：貼床が認められ、堅緻で平坦な面が広がっている。南東隅に不整形な落ち込みがみられ、焼土等を含んでおり灰溜めの施設と考えられる。埋没：覆土は3層に分層され、1層は暗褐色土、2層は褐色土、3層は暗褐色土で、いずれも自然埋没を示す。遺物出土状況：遺物は少ない。覆土中から小型の円面硯(図版188-493)が出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB128 位置：北部II 図版60・62

検出：II A 2層上面においてSB129に切られるように検出された。本址のカマドが検出されないこと、また、土質にも違いがみられ本址のほうが古いと判断した。カマド：東壁中央に位置すると考えられるが、SB129に完全に破壊されている。わずかに床面とSB129の床下に火床の一部が検出されただけである。床：全面に貼床が認められた。柱穴：支柱穴は4基確認されたが床面では検出できず、床下の精査の段階で確認した。柱間は200cmで方形に配される。掘り方の平面形は方形である。埋没：覆土は3層に分層され、1・2層は暗褐色土に褐色のブロックを含み、3層はオリーブ褐色土で混じりが無い。いずれも人為的に短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：非常に少なく、いずれも細片である。時期：7期の遺構に切れこれ以前であるが遺物が少なく時期の決定が難しい。周辺遺構との関連から4～5期と考えられる。

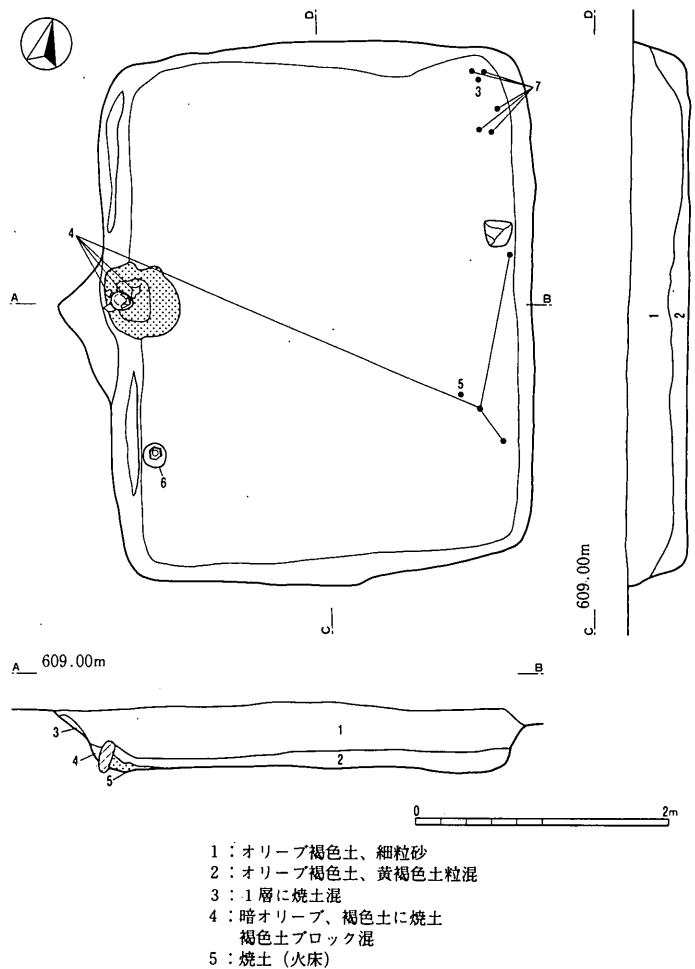
SB129 位置：北部II 図版60・62

検出：II A 2層上面においてSB128を切るように検出された。カマド：当初北壁で切り合う土坑(SK744)をカマドと誤認してしまい、掘り下げ段階で東カマドと確認した。煙道は急に立ち上がり煙出しのピットはない。燃焼部は完全に崩れ黄褐色土でパックされている。壁への掘り込みはほとんど認められないが、直に奥壁をつくっている。右袖には花崗岩が埋め込まれており、内面は良く焼けている。また火床内にも焼けた花崗岩が検出されている。床：全面に貼床が認められるがそれほど堅緻ではない。南東隅に不整形な落ち込みがみられる。また床面上に4個の石があり、カマド前面と中央の硬砂岩が接合している。埋没：覆土は4層に分層されたが、いずれも暗褐色土で下層になるに従い褐色土粒が多くなる。自然埋没と考え

られる。遺物出土状況：黒色土器鉢、杯類がカマド右脇の床面に積み重なるように出土している。SX30と接合関係がある。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB130 位置：北部II 図版62・64、第30図、PL29

検出：II A 2層上面において単独で検出された。プラン、主軸方向ともに特異な住居址である。カマド：西壁中央に位置する。遺存状態は非常に悪く火床と支脚のみ検出できた。粘土カマドと考えられ石組の痕跡はない。石製支脚は奥壁に接するように立てられ、支脚上部には小型甕B(4)が被せられるように検出された。床：地山をそのまま床として使用している。埋没：覆土は2層に分層したが基本的には同一層と考えられる。オリーブ褐色土で地山に近く黄褐色土粒を含んでおり、下層になるに従って増える。遺物出土状況：カマド左脇の床面上に美濃須衛産の長頸壺B(6)がほぼ完形で出土している。また覆土からは大型の平瓶(7)が出土しており、SB139・141のものと接合している。時期：遺物の様相から4期の所産と考えられる。



第50図 SB130実測図

SB131 位置：北部I 図版58
 検出：II A 2層上面において検出されたが、南半はII A 1層が深まっており黒褐色土中において検出した。7期のSK663を切る。プランは長方形で特異なプランである。カマド：西壁中央に位置する石組カマドで煙道部は破壊されている。石組は両袖先端部分と左袖の奥壁部分に残存する。袖上端にも礫が載っていたと考えられ、カマド周辺に散乱している。床：中央部分に貼床らしきものがあるがほとんどは不安定な床である。カマド両側に円形の比較的大きな落ち込みがある。左のピット(P1)のものは長大な河川礫が入られている。また右のピットには角礫が多く検出されている。埋没：覆土は2層で1層は暗褐色土、2層は1層にオリーブ褐色土が斑文状に入る。いずれも自然埋没と考えられる。遺物出土状況：出土量は多いほうである。覆土、カマドなどから散漫に出土している。P1から7・14が出土している。時期：出土した遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB132 位置：北部II 図版58

検出：II A 2層上面において検出したがSB131同様北半を黒褐色土中で検出した。カマド：西壁中央に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに立ち上がるが上半は削平されている。燃焼部は崩れており火床のみの検出となった。火床内には焼土が厚く堆積している。床：ほぼ平坦な床であるが掘り方をそのまま床面として使用している。埋没：覆土は4層から成るがほとんどが1層で占められる。1層はII A 1層を基調とする黒褐色土でわずかに焼土を含んでいる。遺物出土状況：カマドやその周辺に限られる。須恵器杯類が多い。墨書土器(図版173-146)がカマド前面の床面上から出土している。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB133 位置：北部I 図版54

検出：II A 2層上面においてSD135を切るように検出された。当初2軒の切り合いを予想したが土層観察では2軒とは認められなかった。ただしカマドは西壁と東壁に煙道の一部を検出しており、プランもやや不整な形である。西カマド：西壁中央に位置する函形カマドである。煙道は急に短く立ち上がり、かなり離れて煙出しのピットがある。煙道内部は非常に良く焼け硬化している。燃烧部は完全に破壊されたらしく火床すら残存しない。東カマド：カマド上面には集石がのるがほとんどが10cm程度浮いておりカマドの構造物とは考え難い。煙道部分と火床部に焼土が確認された程度であり構造は不明である。床：覆土と地山の区別が非常に困難であり床の認定には苦慮し、貼床等は確認することができなかった。軟弱な床面である。埋没：覆土は単層で暗褐色土に非常に小さな鉄滓粒を多量に含んでいる。埋没過程でカマド石の投棄がみられ、北東隅に集中しておりその他はまばらに分布する。遺物出土状況：覆土からの出土がほとんどである。鉄滓が多いことが本址の特徴となっている。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB134 位置：北部I 図版54

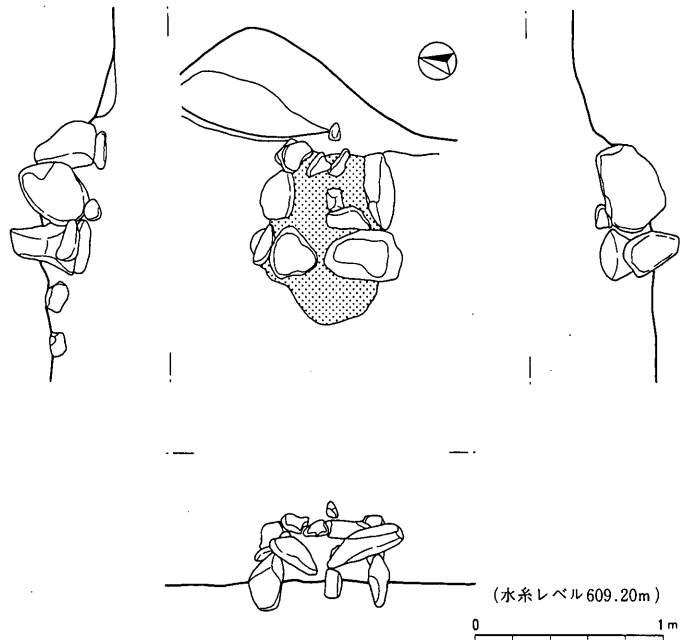
検出：II A 2層上面においてSK523・524を切るように検出された。カマド：当初西カマドと考え掘り下げたが北壁北東隅よりに検出された。煙道は短く急に立ち上がる。燃烧部の残存状況は極めて悪く火床のみが検出されている。床：にぶい黄褐色土を全面に貼床しているがさほど堅緻ではない。埋没：覆土は2層から成るがいずれもII A 1層を基調とする同一層と考えられ、礫や焼土の混入に違いがみられる。2層中に焼けた河川礫の割石の投棄がみられ、床面より10~20cm程浮いた状態で出土している。これらの集石はカマド付近の上部に集中しておりSB133とその状態が似ている。自然埋没中の投棄と考えられる。遺物出土状況：覆土上層からの出土が多い。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB135 位置：北部I 図版54

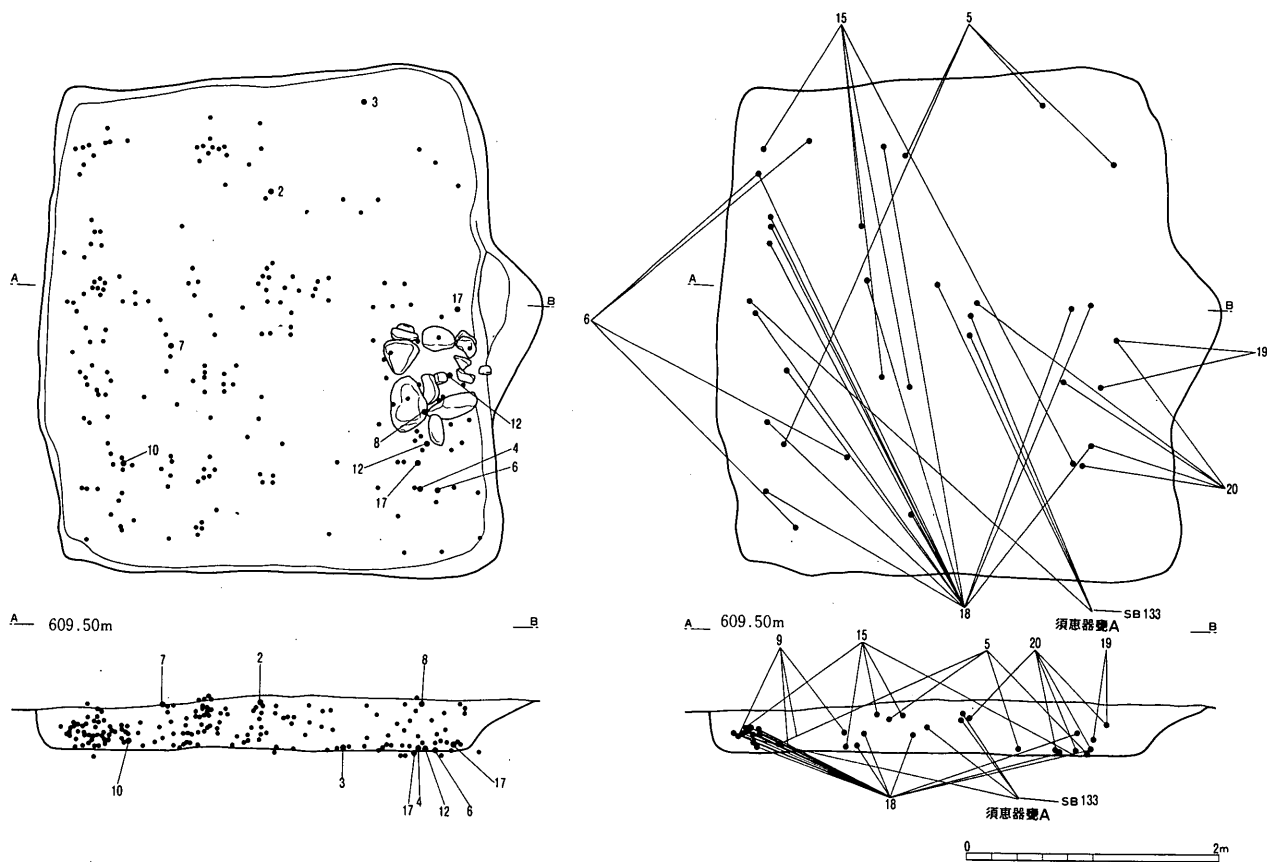
検出：II A 2層上面においてSD139を切るように検出された。カマド：東壁中央に位置する粘土カマドと考えられる。煙道は急に立ち上がると考えられるが既に失われている。燃烧部は非常に小さくコンパクトであり、奥壁の近くに石製支脚がある。床：全面に貼床が確認されたが西半で安定している。埋没：覆土は2層に分層したが基本的には同一層と考えられII A 2層粒子を多量に含んでいる。1層中に比較的小さな礫の投棄がみられるが量は少ない。自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土上層に浮いたかたちでの出土が多くなっている。墨書土器3点、羽口1点が出土しているがいずれも覆土中からである。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB136 位置：北部I 図版52、第51・52図

検出：II A 2層上面においてSB126の煙道を切るように検出された。カマド：東壁中央やや南に位置する石組カマドである。若干の崩れは認められるがほぼ原形を保って検出された。煙道は認められないが急に立ち上がると考えられる。燃烧部石組は花崗岩の河川礫を用いており、右袖に2個、左



第51図 SB136カマド実測図



第52図 SB136遺物出土状況図

袖に3個の石を埋め込み、焚口部の天井には2個の石を載せている。火床部中央には石製支脚がある。このほか周囲にある石も石組に関係があると考えられる。床：地山の土を埋め戻しており非常に判断が難しかったがカマド、遺物の出土状況から判断した。埋没：覆土は2層であるが基本的には同一層と考えることができ、II A 2層粒子を多量に含んでいる。自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土中の出土が多いが、甕類はカマド周辺に多い。小型甕D (17) はカマド脇からほぼ完形で出土している。墨書土器(図版173-151) は覆土からの出土である。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB138 位置：北部II 図版62、PL29

検出：II A 2層上面で検出されたがSB139・140と切り合う。SB139との切り合いは覆土は近似するものの本址の覆土にブロックを含むことから本址が切られており、SB140とは焼土によって区別されやはり切られている。カマド：東壁中央に位置する函形カマドであるが、掘り方はやや崩れており円形に近い。煙道は水平に延びるが先端部分はSB140に切られている。燃烧部は火床のみで支脚も抜き取られているため破壊されていると考えられ、袖部分はほとんど確認することができなかった。床：床面に広がる焼土をもって床と判断したが中央部分に比較的堅緻な叩きの床がみられる。床面の周囲には周溝が巡るが非常に幅が狭く浅いものである。床面に広がる焼土は南西隅より北東隅に顕著であり、南西隅のところはごく浅い落ち込みとなっている。埋没：覆土は4層であるがほとんどが1層で占められる。1層はオリーブ褐色土に褐色ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：遺物量は非常に少ない。ほぼ完形の須恵器杯A (3) がカマド脇の床面から出土している。時期：遺物の様相から4期の所産と考えられる。

SB139 位置：北部II 図版62・64

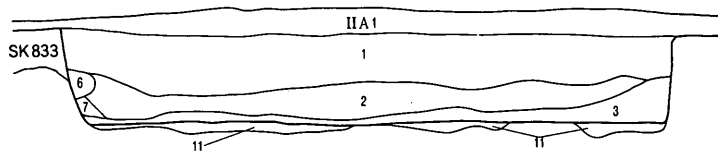
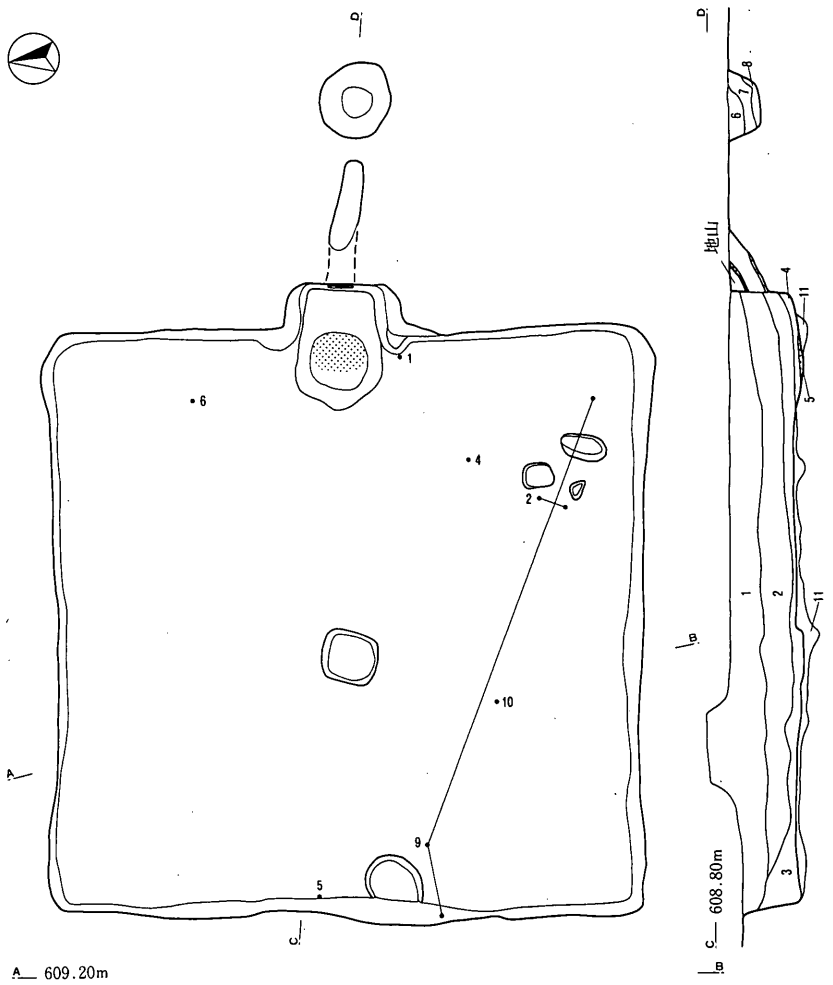
検出：II A 2層上面においてSB138・141を切るように検出された。SB141との切り合いはほとんど接する

ような切り合いであるが覆土にブロックを含んでおり区別できた。カマド：東壁中央やや南に位置する函形カマドである。煙道は比較的緩やかに延び、やや離れて煙出しのピットがある。燃烧部の遺存状況は非常に悪く、火床と支脚の抜き取り痕を検出したにすぎない。覆土と構築材である粘土との区別がつかず破壊されたのか崩落したのかは明らかでないが、支脚が抜き取られていることなどから破壊された可能性が高い。火床には厚く焼土が堆積しており良く使用されている。床：地山をそのまま床として使用している。カマド右脇に円形の落ち込みがあり焼土を多量に含むことから灰溜めの可能性が高い。埋没：覆土は3層でいずれもオリーブ褐色土を基調とするが下層は褐色土粒を多く含むようになる。自然に堆積したものと考えられる。遺物出土状況：覆土からの出土は少なくカマド及びその周辺にまとまる。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB140 位置：北部II

図版62、第53図、PL29

検出：II A 2層上面においてSK833・834を切るように検出された。土坑の覆土には焼土が多量に入り検出は容易であった。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は急に立ち上がり煙出しのピットは離れている。燃烧部は完全に崩れておりオリーブ褐色土の粘土が広範囲に分布している。また石組等はなく粘土のみで構築されたカマドと考えられる。火床及び奥壁、煙道内は良く焼けて焼土化して固くなっている。床：全面に貼床が認められるが掘り方は平坦ではない。中央部分が堅緻であり周囲はやや軟弱になっている。小さく浅い落ち込みが4基認められている。埋没：覆土は3層に分層され1層はオリーブ褐色土、2層は暗オリーブ褐色土、3層はオリーブ褐色土で2・3層には褐色土のブロックを含んでいる。2・3層はブロックを含んでおり人為的に埋め戻されたと考えられるが、1層には認められず一応自然埋没と考えられる。また土坑の影響を受けて覆土に焼土粒を含んで



- 1：オリーブ褐色土、褐色土ブロック混入
- 2：暗オリーブ褐色土、褐色土ブロック混入
- 3：オリーブ褐色土
- 4：オリーブ褐色土、焼土ブロック炭化物混入
- 5：炭化物焼土
- 6：SK833の焼土ブロック（大）
- 7：SK833の焼土ブロック（小）
- 8：オリーブ褐色土、焼土炭化物小混
- 9：オリーブ褐色土、焼土ブロック混入
- 11：黄褐色土

第53図SB140実測図

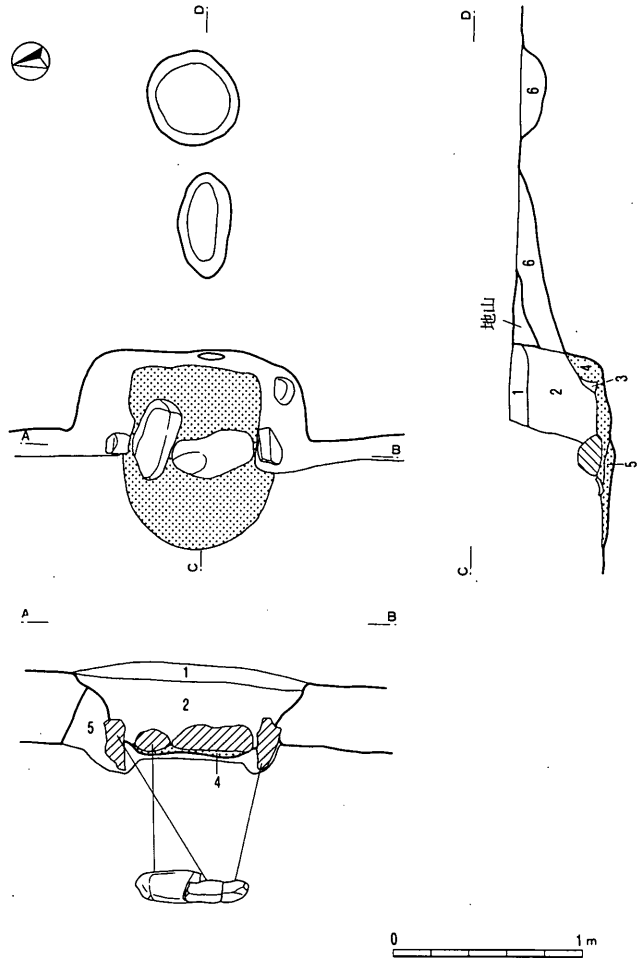
いる。遺物出土状況：遺物は少なく覆土から散漫な出土となっている。時期：遺物の様相や遺構の形態から5期の所産と考えられる。

SB141 位置：北部II 図版62・64

検出：II A 2層上面においてSB139、SD106に切られるように検出された。SD106の切り合いについては土質に差があり溝の覆土は砂質であるのに対して、住居址の覆土が粘質であるので容易に区別することができた。カマド：住居址の2分の1が溝により破壊を受けておりカマドもほとんどが破壊されている。残存する焼土及びその痕跡から西壁中央あたりに位置する函形カマドと考えられる。床：覆土、床面が地山に近似しており検出には苦勞した。カマド周囲と壁際を除いて堅緻な床面が認められた。埋没：覆土は4層に分層したが大きく1・2層と3・4層に分けられる。3・4層はオリーブ褐色土に褐色土のブロックを含み人為埋没と考えられ、1・2層は焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土である。住居廃絶後に中央部分を残してある程度埋め戻した後、中央の凹地をゴミ捨て穴として使用したと考えられる。遺物出土状況：須恵器杯、甕類を中心として上層から出土している。図示したものは10を除き2層出土のものである。時期：遺物の様相から5期の所産と考えられる。

SB142 位置：北部II 図版64、第54図、PL29

検出：II A 2層上面において単独で検出された。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに立ち上がり、わずかに離れて煙出しのピットがある。燃焼部の天井部は崩落しており崩落土の上に住居址の覆土がのっている。燃焼部の構造は住居址の壁を結んだ線上に石組の焚口を設けている。S2とS5を天井部を補強するために埋め込み、火床に落ち込んでいるS3、S4を載せたものと考えられる。S2・S4・S5は接合し長さが60cmを超える河川礫となる。床：中央部分が堅緻であるが貼床は確認できなかった。住居址周囲には周溝が巡らされておりカマド部分を除いて全周する。浅い落ち込みが2基あり、P1は花崗岩が埋め込まれている。埋没：覆土は3層で1層はオリーブ褐色土、2層はオリーブ褐色土に黄褐色土のブロックが入り3層は床面上の極く薄い層である。2・3層は人為的な埋め戻しと考えられる。遺物出土状況：覆土からの出土はほとんど無くカマドに集中しているが、遺物量自体は非常に少ない。図示した遺物は全てカマド火床からである。時期：出土した遺物の様相により5期の所産と考えられる。



SB143 位置：北部I 図版53・55、
第55図、PL30

検出：II A 2層上面においてSB82を切り、SB100・144に切られるように検出された。カマド：北壁中央わずかに東に位置する石組カマド

- 1：オリーブ褐色土
 - 2：オリーブ褐色土に褐色土ブロック混
 - 3：焼土ブロック
 - 4：暗オリーブ褐色土、焼土多混
 - 5：オリーブ褐色土
 - 6：暗オリーブ褐色土
- (水糸レベル609.00m)

第54図 SB142カマド実測図

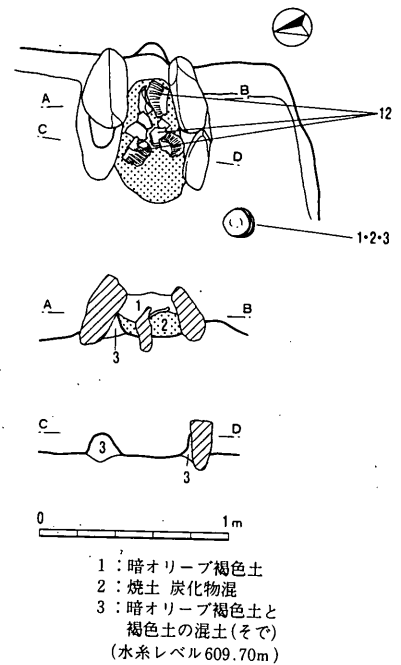


第55図 SB143実測図及び遺物出土状況図

である。掘り方は方形でありわずかに壁へ掘り込んでいる。煙道はそのまま急角度で立ち上がり、100cm程離れて煙出しのピットがある。煙道口の天井部には花崗岩の河川礫があったと考えられ、煙道内に落ち込んでいる。燃烧部は袖基部に若干の石組を残すのみであるが、火床面はさらに広がっており残存する袖よりも若干大きくなると考えられる。床：中央部分に貼床が認められるが周囲は若干低くなり貼床は認められない。南西隅付近に楕円形の浅い落ち込みが認められる。埋没：覆土は3層で1・2層ともオリブ褐色土に小～大礫を包含する同一層と考えられるが、1層には多量の灰・炭化物が認められる。3層は部分的である。遺物出土状況：本遺跡最多の遺物量を誇り、杯類だけでも24kgとなり、総量では40kgを超える。遺物は1層下部に集中しており、ある程度の埋没した後の凹地をゴミ穴として使用したと考えられる。床面遺物は須恵器杯蓋B I (40)、高杯(54)などがある。墨書土器が34点出土しているが全て覆土からの出土である。高杯・赤色塗彩の皿等の遺物、墨書土器の内容からみるとSB97の古い段階の内容に近いと考えられる。時期：出土した遺物の様相は6～7期と考えられ遺物の廃棄場所という性格を考えると遺構の時期は6期の所産と考えられる。

SB144 位置：北部 I 図版53・55、第56図、PL30

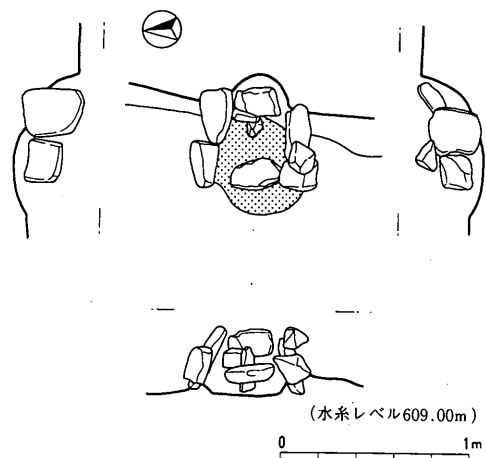
検出：かなり礫を含むII A 2層上面においてSB100に北壁部分を切られるように検出された。上面が削平されたため浅い住居址である。カマド：東壁南東隅に寄って検出された石組のカマドで、コンパクトにまとまった小さなカマドである。煙道は急に立ち上がりほとんど残存しない。天井部は既になく袖石が露出した状態で検出された。袖部の石組は右袖に2個、左袖に1個の40cm程度の花崗岩を使用しているが、左袖にも本来は2個の袖石を使用したと考えられる。袖石はいずれも「ハ」の字状に内傾している。燃烧部奥壁寄りに花崗岩製の支脚を埋め込んでいる。床：地山の砂礫層を床面としており全体的に軟弱で凸凹が見られる。埋没：覆土は礫を含む暗オリブ褐色土のオリブ褐色土のブロックが入る。人為的に埋め戻された可能性も考えられる。遺物出土状況：カマド内に土師器甕類が破片の状態で出土している。カマド右脇の床面よりわずかに浮いて黒色土器杯A(1～3)が3枚重ねの状態出土している。また、覆土中より墨書土器が1点出土している。時期：切り合い関係と遺物の様相から7期の遺構と考えられる。



第56図 SB144カマド実測図

SB145 位置：北部 I 図版55、第57図、PL32

検出：II F層の礫層中に検出された住居址でSK606に切られる。SK606の覆土には多量の炭化物が含まれており焼失住居の可能性があると考え掘り下げたが、掘り下げ途中で土坑であることが判明した。カマド：東壁中央やや北に寄る石組カマドである。SB144のカマド同様コンパクトにまとまったカマドで袖石が露出した状態で検出された。煙道は急に立ち上がりほとんど残存しない。煙道口上部に天井石を配したと考えられるが崩落し煙道内に落ち込んでいる。袖部の石組は両袖ともに2個ずつ花崗岩を埋め込んでおり、右袖にはさらに1個花崗岩を載せている。焚口部の火床上面には天井石と考えられる硬砂岩が落ち込んでいる。燃烧



第57図 SB145カマド実測図

部奥壁よりに花崗岩の支脚を埋め込んでいる。カマド形態はSB144と共通点が多い。床：II A 2層の砂層に掘り込み、地山をそのまま床として使用しており軟弱である。埋没：礫を包含する暗オリーブ褐色土の単層である。覆土中に入頭大の礫が2個投げ込まれている。自然埋没と考えられるが、人為埋没の可能性も捨て切れない。遺物出土状況：カマド及びその周辺に集中している。時期：出土した遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB146 位置：北部 I 図版53・55

検出：II A 2層上面において検出されたが一部II F層で検出された。SB147と切り合うが、含有する礫の量により明確に区別でき、本址が新しいことが判明した。カマド：西壁中央に位置する。遺存状態が悪く石組カマドの可能性もあるが一応粘土カマドと考えられる。煙道は削平により失われているが、短く急に立ち上がるタイプと考えられる。燃焼部火床のみの検出となり中央に硬砂岩の支脚がある。奥壁の両側に火を受けた小さな礫が配される。床：地山をそのまま床面として使用しており、貼床は認められない。カマド前面の床面に円形の落ち込みがある。埋没：覆土は2層に分層したが一連の堆積と考えられる。1層は暗褐色土で、2層は褐色土が多くなる。遺物出土状況：甕類を中心として散漫な出土を示す。時期：遺物の様相から7期の所産と考えられる。

SB147 位置：北部 I 図版53、PL30

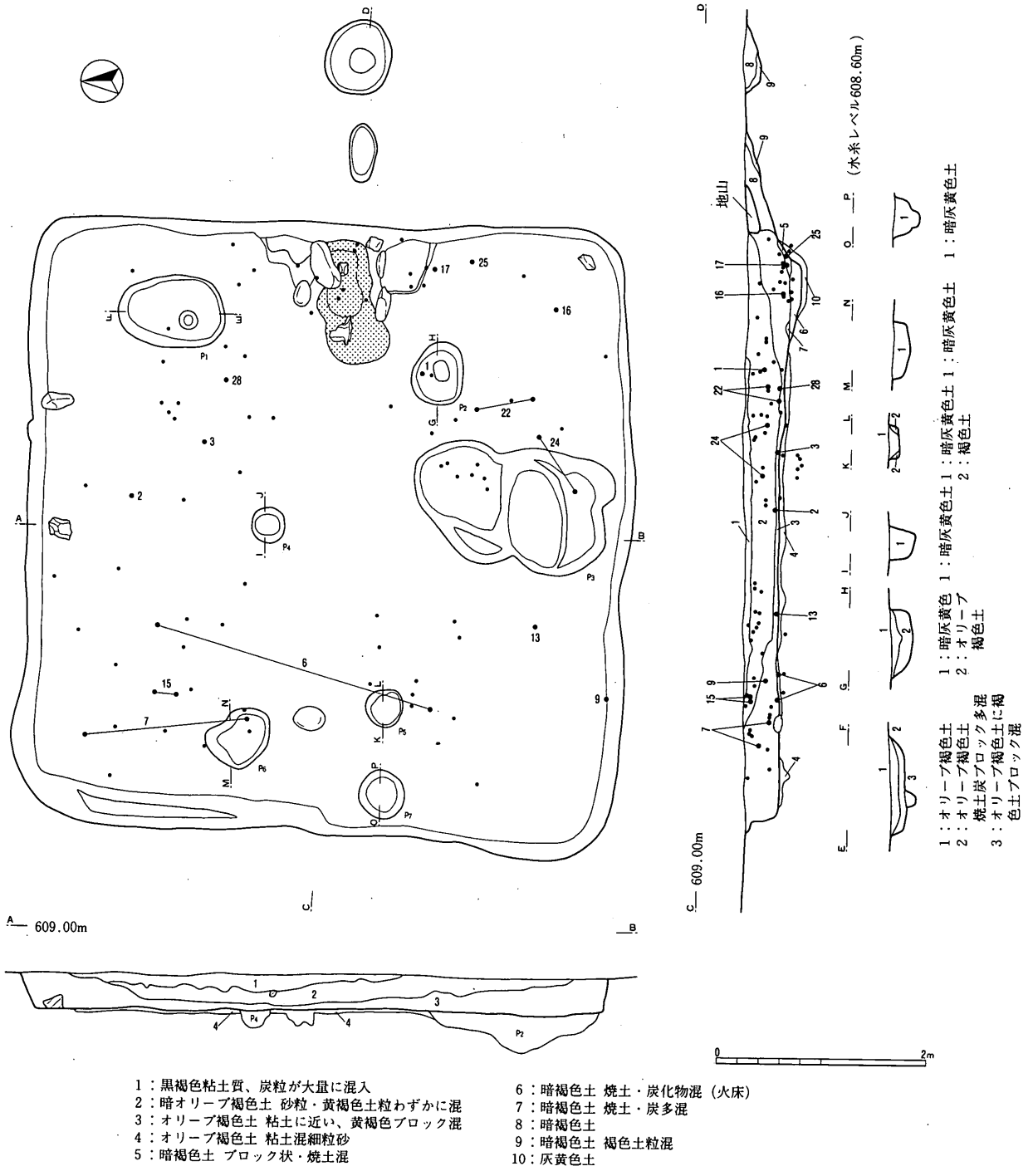
検出：II F層の礫層中にSB146に切られるように検出された。カマド：東壁中央に位置する函形カマドであるが、壁への掘り込みは非常に浅い。煙道部は比較的急に立ち上がり途中で水平になりそのまま煙出しピットにつながっている。燃焼部は完全に崩落しており、火床上に下面が焼けて硬化している褐色土を検出した。両袖部には袖基部が残り天井部の崩落土よりは礫の混入が多い。支脚は既に抜き取られている。床：中央部分に堅緻な面が認められるが貼床は認められない。北側に緩やかに傾斜している。北壁下に幅広の周溝状の不整な落ち込みがあり埋め戻されている。埋没：覆土は単層で褐色土の粘質土に礫を多く包含する。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。カマドから土師器甕Cの破片が出土している。時期：遺構の切り合い関係と遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB148 位置：北部 I 図版55、第58図、PL31

検出：II A 2層上面においてSD170、SK576に切られるように検出された。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は緩やかに立ち上がりやや離れて煙出しのピットがある。煙道の断面は方形になっている。燃焼部の残存状況は右袖で比較的良好なのに対して左袖は崩れている。先端の袖石は上端が打ち欠かれており、右袖の火床に落ち込んでいる花崗岩は天井石の可能性もある。使用石材は花崗岩と硬砂岩である。火床中央に花崗岩製の支脚が置かれている。床：全面に堅緻な貼床が認められ、特に中央部分は非常に堅緻である。諸施設：床面に7基の落ち込みが検出された。P1～P3までは柱穴の可能性もあるが配置は不整形になる。南下壁の不整形な落ち込みは焼土を含み下面是鉄分の集積が見られた。埋没：覆土は3層に分層される。1層は炭化物・灰を多量に含む黒褐色土、2層は暗褐色土であり、3層はオリーブ褐色土に褐色ブロックを含んでいる。3層は人為的に埋め戻された可能性があるが、1・2層は自然埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土1・2層からの出土が多く、カマドなどにも集中してみられる。墨書土器が5点出土しており、図版174-191を除き床面及びピットから出土している。時期：遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB149 位置：北部 II 図版57・59、PL33

検出：II A 2層上面においてSB91・150、SD176に切られるように検出された。本址もSB150ともにブロックを含むのに対して溝址はブロックを含まない暗オリーブ褐色土の単一層であり一番新しい。SB150とは本址のカマドが破壊されており含有するブロックの量、大きさにも差がみられ本址が一番古いことが判明



第58図 SB148遺物出土状況図

した。カマド：東壁中央に位置する函形カマドである。煙道は比較的緩やかに立ち上がり、わずかに離れて煙出しのピットとなる。ピット状に残る煙出しには丸く扁平な河川礫が入れられている。煙道断面は縦に長く矩形である。燃焼部は一部SB150に破壊されており天井部は崩落している。燃焼部の構造はまず焚口部の両袖に袖石を配し粘土で天井部を渡したと考えられる。右袖には花崗岩を埋め込みその上に硬砂岩を載せている。左袖には硬砂岩を埋め込んでいるが上部は破壊を受けており右袖と同様になっている可能性がある。火床には多量の焼土や灰が堆積しており良く使用されている。支脚は抜き取られている。床：床面中央に堅緻な面が広がり良く叩き締められている。諸施設：カマド右脇に円形の落ち込みがあり焼土を含んでおり灰溜めの施設と考えられる。その他不整なピットが西壁下に並ぶ。南壁下に周溝状の落ち込みがみられ中央部分が切れている。埋没：オリーブ褐色土に褐色ブロックを含む単層であり、人為的に埋め戻

されたものと考えられる。遺物出土状況：覆土及び床面から散漫に出土している。墨書土器が4点出土しているがいずれも覆土からである。時期：遺構の切り合い関係と遺物の様相により5期の所産と考えられる。

SB150 位置：北部II 図版57・59

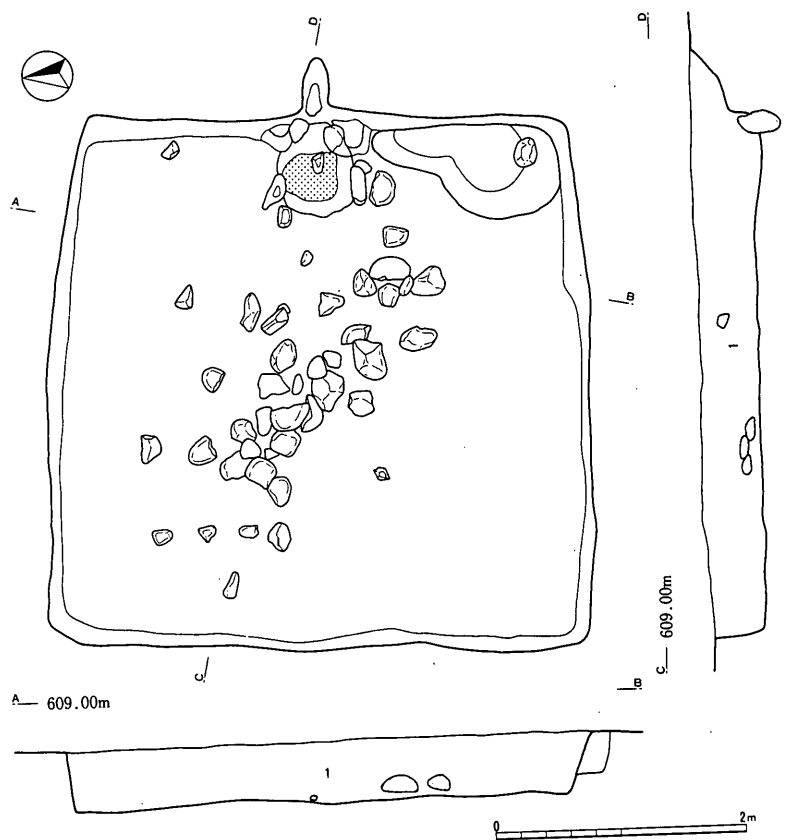
検出：II A 2層上面においてSB149を切り、SD176、SK710に切られるように検出された。カマド：北壁北西隅寄りに位置する石組カマドと考えられるが、SD176に切られて一部破壊されており、石組がすべて抜き取られている。煙道は短く水平に延びその先端がわずかに円形に落ち込んでいる。燃焼部は完全に破壊されており両袖部に2個ずつ抜き取り痕が見られた。火床部中央にも支脚抜き取り痕跡と考えられる小ピットがある。床：貼床は認められないが中央部分は叩き締められている。カマド右脇に円形の落ち込みがみられる。埋没：単層でオリブ褐色土に褐色ブロックが入り人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：遺物の出土量は非常に少ない。カマド脇のピットからまとまった出土がみられたがいずれも破片である。時期：遺構の切り合い関係と遺物の様相から6期の所産と考えられる。

SB151 位置：北部II 図版56

検出：II A 1層が深く落ち込んでいる黒色土中においてSB152に切られるように検出された。SB152との切り合いは本址の覆土中にカマドが検出されたこと、また覆土にブロックを含むのに対しSB152は含まないなどの違いがみられ本址が切られていることが確認された。カマド：東壁中央やや北に位置する函形カマドである。煙道は緩やかに立ち上がると考えられるがはっきりしない。煙道口の断面は方形を呈す。燃焼部は火床のみの検出となった。床：中央部分に良好な床が認められたが貼床等は認められない。カマド両脇の隅部分が低く軟弱である。埋没：暗オリブ褐色土に褐色ブロックを含む単層である。人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物出土状況：遺物は非常に少なくカマドに集中する。墨書土器(図版174-195)カマド前面の床面上から完形の状態で出土した。時期：遺物が少ないが遺構の切り合いからSB152、SD137よりは古くSB132と形態等が共通することから5期の所産と考えられる。

SB152 位置：北部II
図版56・58、第59図、
PL33

検出：SB151同様II A 1層でSB151、SD137を切るように検出された。SD137との切り合いは平面ではつかめなかったが、断面観察において砂層を含む溝址の断面の連続が認められず本址が新しいことが確認された。カマド：東壁中央に位置する石組カマドである。煙道は短く急に立ち上がる。燃焼



1：暗オリブ褐色土 細礫・炭化物混入

第59図 SB152磔出土状況図

部石組は焚口部分と奥壁部に2個ずつ石を埋め込み天井を渡したと考えられる。奥壁部分の石は内傾しており内側部分は火を受け煤が付着しており露出していたことがわかる。焚口部分の左袖の石は抜き取られている。崩落土の中に天井石と考えられる硬砂岩がやや浮いて出土している。火床部分には花崗岩製の支脚がある。床：中央部分に良好な床面が認められ貼床らしきものがあるが、周囲までは及んでいない。カマド右に不整形な落ち込みがあり、上面に焼土・炭化物が多量に含まれ灰溜めの施設と考えられる。埋没：暗オリーブ褐色土の単層である。床面から覆土にかけてカマド石と考えられる河川礫の集石が認められる。廃絶後の埋没過程での投棄と考えられる。集石は住居址中央部にまとめり45個ほどになる。遺物出土状況：遺物量は多く、覆土からもまとまっている。カマド内からは土師器甕Bが破片であるがまとまって出土している。時期：遺構の切り合い関係遺物の様相から7期の所産と考えられる

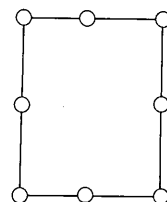
SB153 位置：北部III 図版73

検出：II A 2層上面においてSD100・104に切られ、SK1407を切るように検出された。プランが小さく溝により中央部分が破壊されていることもあり不明遺構として扱ったが掘り下げの結果住居址として扱うこととした。カマド：東壁部分に位置すると考えられるがほとんど溝址にけずられており焼土の痕跡を検出したのみである。床：非常に地山に近い覆土であり床の判断には苦慮し、焼土の分布を頼りに判断した。貼床等は認められない。埋没：覆土は3層に分層され1層はオリーブ褐色土、2・3層は褐色土でオリーブ褐色土のブロックが入る。すべての層に焼土粒が入る。人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物出土状況：遺物は非常に少ない。時期：わずかな遺物であるが5期の所産であろう。

2 掘立柱建物址

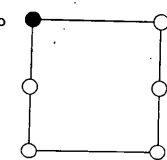
ST 1 位置：南部III 図版41

検出：II A 2層上面において検出された。柱配置：2間×2間で主軸を南北にとると考えられるが、北側部分にやや不規則な庇が付く可能性もある。柱間は規則的な配置をするが梁間で狭く、桁行で広がっている。柱穴：掘り方は円形で南側の2柱穴が大きいがその他は径50cm程度で一定している。埋土は暗褐色土で柱痕跡はない。時期：周辺遺構との関連から7期の可能性が考えられる。



ST 2 位置：南部III 図版40、PL34

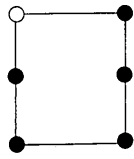
検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×1間で主軸を南北にとる。柱の配置は規則的であるが、柱間は梁間が桁行の2倍になっている。柱穴：掘り方はすべて同じ規模で、やや不整形な円形を呈し、ほぼ同じ深さをもつ。埋土は暗褐色土でブロックを含むものと含まないものがみられる。柱痕跡はない。時期：遺物がまったく出土しておらず時期の確定は困難であるが、主軸方向などから5期のSB7・9などとの関連が考えられる。



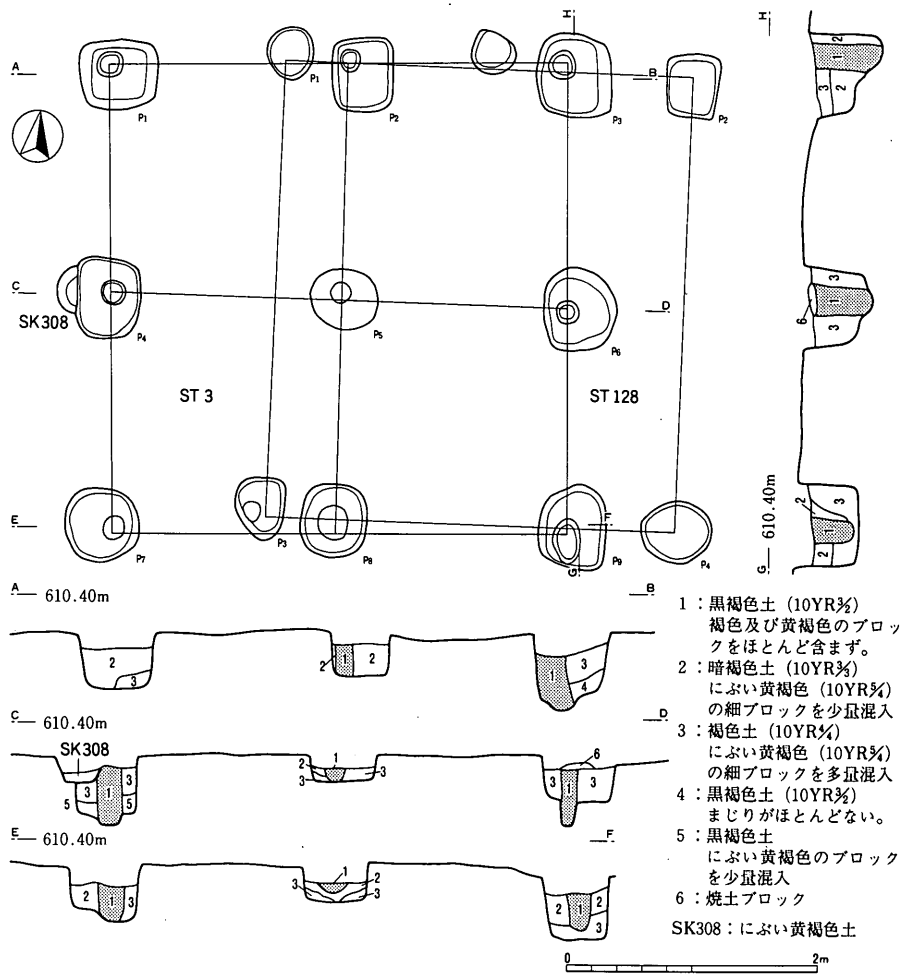
ST 3 位置：南部III 図版39、第60図、PL34

検出：II A 2層上面においてST128と重複して検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。柱はほぼ方形に配されるが内側の柱穴がやや小さく浅いことから主軸を南北にとると考えられる。柱間はほぼ190cm前後で一定している。柱穴：掘り方は方形のものと円形のものがあるが、円形のものも方形の掘り方を意識しているようである。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径20cm前後の太さをもつ。埋土は褐色土と暗褐色土との互層になるものもみられ、黒褐色土の柱痕跡が明瞭に確認された。遺物出土状況：須恵器杯B(1)、甕、土師器甕Bなどが掘り方から出土しており、柱痕跡からは土師器甕B(2)が出土している。時期：出土した遺物等から5期の所産と考えられ、SB13などとの関連がある。

ST 4 位置：南部III 図版37・39



検出：II A 2層上面においてSK279を切るように検出された。柱配置：2間×1間、主軸を南北にとるがやや振れが大きい。規則的な配置をするが柱間は桁行で狭く、梁間で広がっている。柱穴：建物址の規模に比して柱穴掘り方は大きく、方形である。4カ所の掘り方から柱痕跡が検出されている。柱痕跡の径は20cm前後である。埋土は上層が黒褐色土、下層が褐色土を基調とし、ブロックを含んでいる。時期：遺物は出土しておらず時期決定が困難であるが、SB25などと主軸が一致し、7期の可能性が考

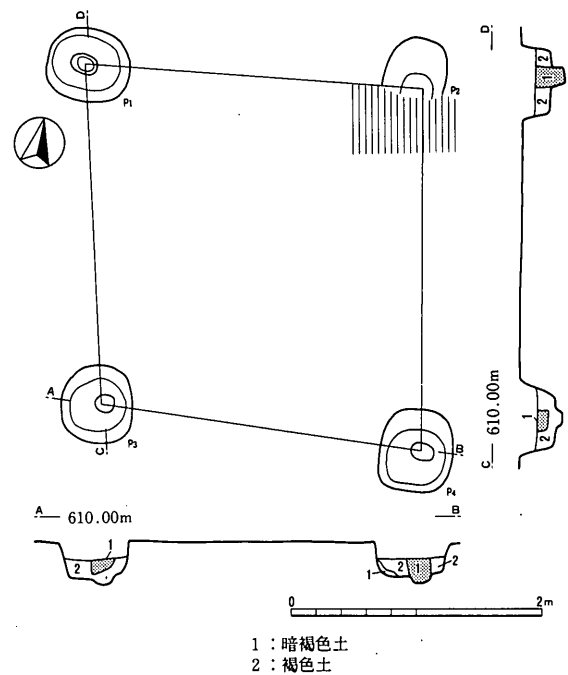


第60図 ST 3・128実測図

えられる。ただし、掘り方の大きさなどを考えれば、本址の南に展開する掘立柱建物址群との関係も考えなければならない。

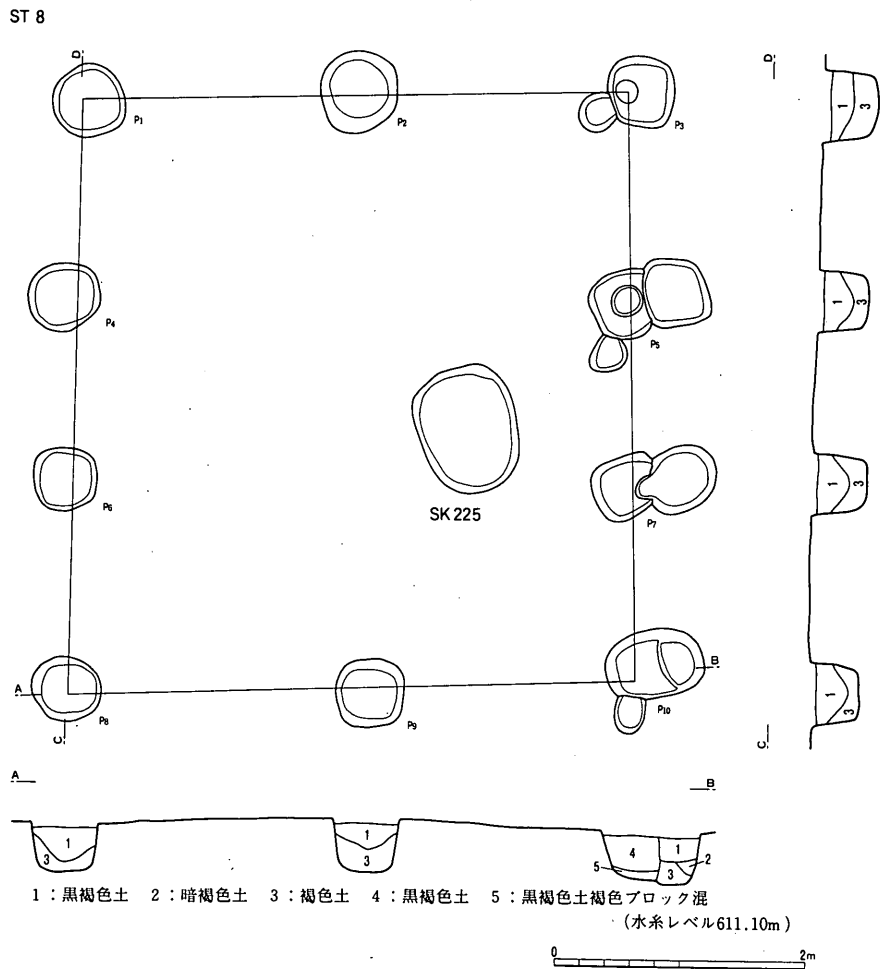
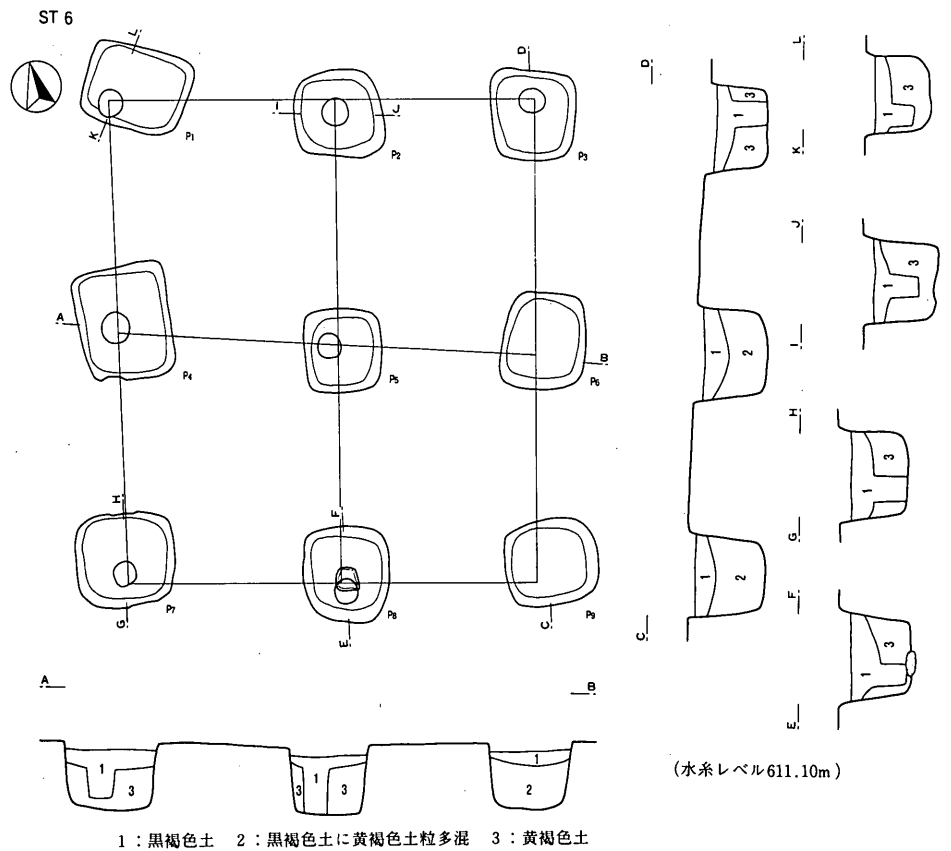
ST 5 位置：南部III 図版45・46、第61図
 検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：1間×1間、柱配置はほぼ方形に配されるがわずかに南北に長く桁行を南北にとると考えられる。柱穴：掘り方は円形を基本とするが隅丸方形に近いものもみられ、すべての柱穴で柱痕跡が検出された。埋土は褐色土で暗褐色の柱痕跡が確認されている。時期：遺物もなく時期決定が困難であり、周辺遺構も5・7期の住居址がみられるがまばらである。建物址自体は非常に簡易的であり時期が下る可能性も考えられる。

ST 6 位置：南部III 図版34、第62図、PL35
 検出：II A 2層上面においてSD21(溝群I)と切り合っって軒を並べる3棟の建物の中のひとつとして検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址で、主軸を



第61図 ST 5実測図

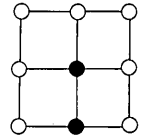
南北にとりわずかに南北に長い。梁間は桁行に比べてわずかに短くなる。柱穴：掘り方は方形を基本とし長方形のものもみられ、比較的大型の掘り方をもつ。深さは55cm程度で一定している。平面の観察では確認できなかったが、P6、P9を除き、断面観察で柱痕跡が検出されている。P8の柱痕跡下には平石が認められた。埋土の上層は黒褐色土で覆われており下半に柱痕が検出され、その周りは褐色土が埋め戻されている。このことから柱が抜取られている可能性も考えられる。柱痕跡の径は20cm前後である。遺物出土状況：掘り方から須恵器杯A(1)、黒色土器杯A、須恵器甕などが出土しており、須恵器鉢(3)はP5、P6出土のものと同接合している。柱痕跡からは土師器甕Bが出土している。須恵器杯蓋(2)は検出面のものである。時期：出土した遺物から考えると5～6期の所産と考えられ、SB26～32と対応すると考えられる。住居址のほうが2時期考えられ建物址群も2時期に分けられ黒色土器の点数が多いことから6期の所産の可能性はある。



第62図 ST 6・8実測図

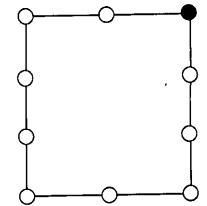
ST7 位置：南部III 図版32、PL36

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址で南北にわずかに長く柱配置などから南北棟建物と考えられる。桁行は規則的に配列するが梁間で若干くずれる部分がみられる。柱穴：掘り方は方形で30cm前後と浅い。柱痕跡の確認された掘り方は4基で柱痕径は15cmとST6に比べて細い。埋土は上層が黒褐色土、下層が褐色土のブロックを含んでいる。黒褐色土の柱痕跡が確認できるものもある。遺物出土状況：梁間の北側の掘り方2基から須恵器杯Aの細片が出土している。時期：ST6と同様に考えられるがST6よりもやや古いと考えられる。



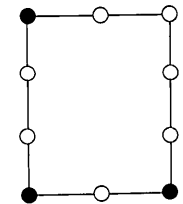
ST8 位置：南部III 図版32・34、第62図、PL36

検出：II A 2層上面においてSA2と切り合っている。柱配置：3間×2間の建物址で南北にわずかに長い。柱配置ST6・9との関係などにより南北棟建物と考えられる。柱間寸法は桁行で短く、梁間で長い。柱穴：掘り方は方形であるが円形に近く、深さは45cm程度で一定している。柱痕跡は1基のみから確認されているが、掘り方の底部に段状の落ち込みが検出されているものが1基ある。上層は黒褐色土、下層は茶褐色土の埋土をもつ。付属施設：本址内に楕円形の落ち込み(SK225)がみられるが、覆土より出土している土師器甕BがP7出土のものと同一体の可能性があり、この落ち込みも本址に付く可能性がある。遺物出土状況：掘り方より須恵器杯A、杯B(1)、甕類、土師器甕B(2)、黒色土器杯Aなどの細片が出土している。時期：ST6と同様な時期と考えられ、主軸方向も一致する。



ST9 位置：南部III 図版32、PL36

検出：II A 2層上面において検出された。柱配置：3間×2間で南北に長い建物址である。柱間寸法は桁行で160cm、梁間で190cmで梁間のほうが長くなっている。柱穴：掘り方は方形を基本としているが、円形に近いものもみられる。大きさは50cm台で一定しているが、P2のみ35cmと小さい。深さは35cm程度で平均している。柱痕跡は3基の柱穴から確認されており、P1の柱痕跡下には平石が埋め込まれている。柱痕跡の径は15cmと細い。遺物出土状況：いずれも掘り方からの出土で、黒色土器杯A(1)、土師器甕Bの細片が出土している。時期：出土した遺物からは5～6期と考えられST6・8など一連の掘立柱建物址と同じ時期と考えられる。

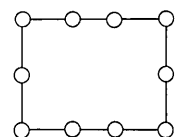


ST11 位置：南部III 図版34・36、第63図

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×2間で柱は方形に配されるが西側が1間となっている。棟方向は柱配置から東西棟の可能性が強いが、南北棟の可能性もある。柱穴：四隅の掘り方は50cm程度と大きく、その間に位置する掘り方は30cm程度で小さく浅い。いずれの掘り方からも柱痕跡は認められない。埋土は上層が黒褐色土、下層が褐色土である。遺物出土状況：須恵器甕Aの破片が出土している。時期：遺物からは時期決定が苦しく、周辺遺構に頼らざるをえない。SD18の内側に位置し一連の掘立柱建物址群と主軸を同一にしており5～6期の遺構と考えられる。

ST12 位置：南部III 図版37

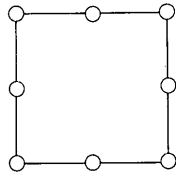
検出：II A 2層上面においてSB26に切られるように検出された。柱配置：3間×2間の東西に長い建物址である。柱間寸法は梁間に比べて桁行の方が若干短い。柱穴：掘り方は方形に近い円形である。西側の梁方向の掘り方がやや大きくなっている。いずれの掘り方からも柱痕跡は検出されていない。埋土は暗褐色土の単層である。遺物出土状況：須恵器杯A、土師器甕Bの細片が出土している。時期：6期の住居址に切られていることや周辺遺構の関係により5期の建物址と考えられる。



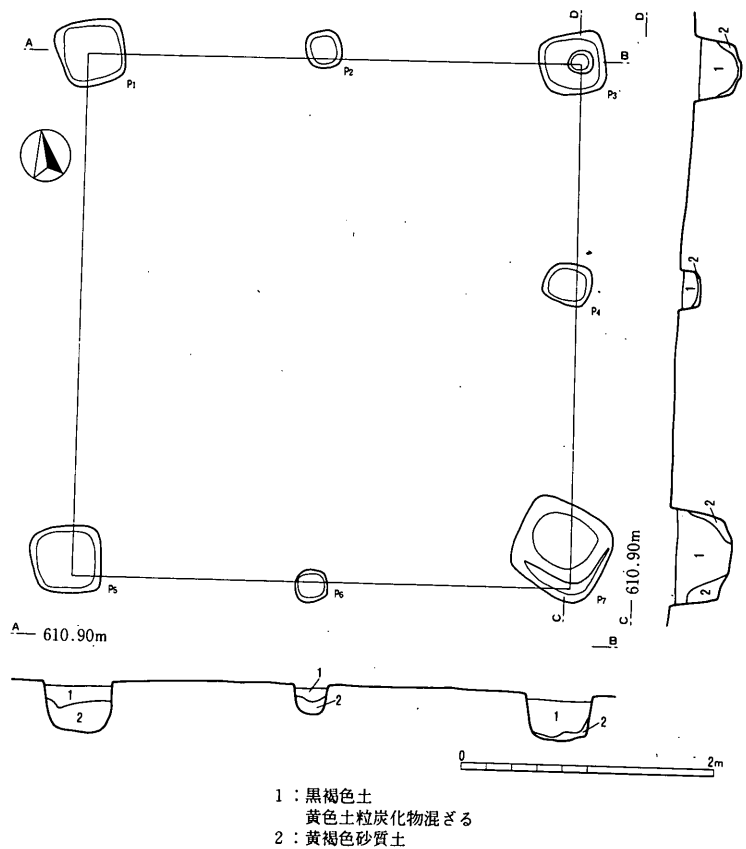
ST13 位置：

南部III 図版34

検出：II A 2層上面において小土坑と切り合うように検出さ



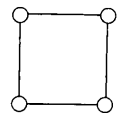
り合うように検出されたが、小土坑が集中しており検出には苦慮した。小土坑には規則的な配置をみせるものもみられ、2棟程度の重複が予想される。柱配置：2間×2間で柱はほぼ方形に配されるが南北方向の掘り方が大きく東西方向の掘り方が小さいことから南北棟の建物と考えられる。柱穴：掘り方は円形で、梁間の中央の掘り方が小さく、深さについては一定ではない。柱痕跡は確認されていない。埋土は基本的には上層が褐色土、下層が暗褐色土となっている。時期：出土遺物がなく時期が確定できないが一連の掘立柱建物址群の時期に一致すると考えられる。



第63図 ST11実測図

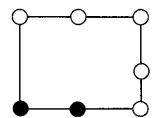
ST14 位置：南部III 図版40

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：1間×1間の小規模な建物で棟方向は不明である。柱穴：掘り方は円形で非常に小さく20~30cmで浅い。柱痕跡は確認されていない。時期：出土遺物もなく周辺遺構に頼らざるをえない。ST 2などと主軸が一致するが、掘り方規模からするとST 1に関連する可能性があり7期の可能性が考えられる。



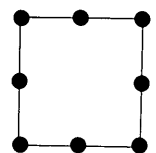
ST15 位置：南部I 図版18、PL37

検出：II A 2層上面において単独で検出された。一部調査区域外に延びる。柱配置：2間×1(2)間の東西に長い建物址であるが、東側梁間の柱穴がやや不規則に配置するが、本址には直接関係しないと考えられる。ST16との関係からこれ以上は東に延びないと思われる。柱間寸法は桁行では150cm、梁間で240cmを測る。柱穴：掘り方は方形をなし、深さは30cmを測る。埋土は上層及び柱痕跡に黒褐色土が、下層は暗褐色土に褐色土ブロックが入る。時期：出土遺物はなく周辺遺構との関連で考えなければならない。遺構が調査区域外へ延びており即断はできないが、SB38・39・40との関係が考えられる。これらから5~6期と考えられる。



ST16 位置：南部I 図版16・18

検出：II A 2層上面においてSA 3に切られるように検出された。柱配置：2間×2間ほぼ方形に規則的に配列し、中央には柱をもたない。柱間寸法は桁行、梁間共に170cm前後で一定している。柱穴：掘り方は方形で規模はやや小さい。北西隅を除き柱痕跡が確認されている。埋土は柱痕跡に暗褐色土が落ち込み、周囲を褐色土を含む暗褐色土で埋め戻している。時期：ST15と柱穴の形状、規模等が共通し、軒先もそろうため同様な時期と考えられる。

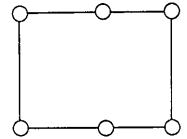


ST17 位置：南部 I 図版14

検出：II F層の礫層中に検出されたが、非常に不安定な場所でありすべての柱穴は検出できなかった。柱配置：2間×2間、あるいは3間×2間の建物と考えられる。当初2間×2間の南北棟を想定していたが、梁間に比べて桁行が延びておりやや不自然で、3間×2間のほうが妥当と考えられる。柱穴：掘り方はすべて円形であり、掘り方規模は35～50cmと小規模である。埋土は黒褐色土が主体を占め、柱痕跡は確認されていない。遺物出土状況：掘り方から須恵器杯Aの細片が出土している。時期：SB47などの周辺遺構との関連により5期と考えられる。

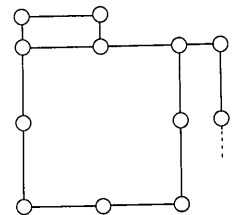
ST18 位置：南部III 図版41・43

検出：II A 2層上面においてSB5・10に切られるように検出された。柱配置：2間×1間で主軸を東西にとる。柱間寸法は桁行で180～220cm、梁間で300cm程度となる。柱穴：掘り方は長～方形、円形と規格性がなく、南側の桁行の掘りの方が大きくなっている。埋土は暗褐色を主体としており、柱痕跡は検出されていない。時期：SB5は6期、SB10は4期に比定されており4期以前と考えられるが、周辺には4期以前の遺構がなく切り合い関係が逆転し時期が下る可能性がある。



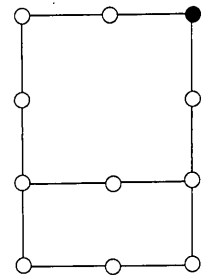
ST19 位置：南部 I 図版14・15

検出：II A 1層上面で検出された。柱配置：2間×2間を基本とするが北側と東側に付属施設をもち、西側の柱筋には複数の柱穴が介在している。柱間寸法は桁行、梁間共に210cmで若干広めである。柱穴：掘り方は円形で、小規模である。埋土は黒褐色土が主体を占める。付属施設：東側の張り出しは柱間寸法の約半分程を外に出している。庇になる可能性も考えられたが南東隅には柱穴は確認できなかった。北側にも同様な張り出しが見られるが柱筋の通りが悪い。時期：周辺遺構から5～6期と考えられるが、柱穴規模、建物の構造は本遺跡においては特異となっており、時期が近世まで下る可能性がある。



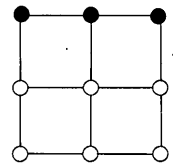
ST20 位置：南部 I 図版17・19

検出：II A 2層上面において単独で検出されたがSD45と重複関係にある。前後関係は不明である。柱配置：3間×2間で入側柱を1本持つ。柱間寸法は桁行、梁間共に210cm前後で長い。柱穴：掘り方はすべて円形であり、規模は若干小さめである。埋土は黒褐色土を主体としている。柱痕跡は2基の掘り方で検出されているが明確ではない。時期：出土遺物がなく時期決定が困難であるが、周辺のSB46・49・50などの遺構との関連により5～6期と考えられる。



ST21 位置：南部 I 図版17、PL38

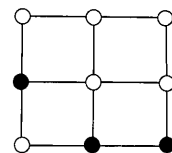
検出：II A 2層上面において単独で検出された。砂礫層の不安定なところでの検出となった。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。ほぼ方形に配列され棟方向は不明である。柱間寸法は桁行、梁間共に180cm程度でほぼ一定している。柱穴：掘り方は円形のものと同方形のものが混在する。深さは一定ではないが規則性は見られない。柱痕跡は3基の掘り方から確認されている。埋土は黒褐色土を主体としており、柱痕跡にも落ち込んでいる。遺物出土状況：検出面において後世の混入が認められた。時期：ST23とは同時存在は考えられず2時期が与えられる。また主軸方向はST23を除き一致し、6期と考えられるSB50とも一致する。これらから6期あるいは5期の時期が想定される。



ST22 位置：南部 I 図版17、PL38

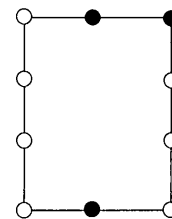
検出：II A 2層上面の比較的安定したところにおいて単独で確認された。柱配置：2間×2間の総柱の建

物址である。柱穴は規則的に配列されるが東西に長く東西棟と考えられる。柱間寸法は梁間より桁行の方が10~20cm程長くなっている。柱穴：掘り方は円形を基本としており、規模は80~97cmと非常に大型になっている。深さも50cm前後を測る。埋土は暗褐色土を基本とし下層に褐色土の入るものもある。時期：出土遺物もなく時期決定が困難であるが、ST21と同様の時期と考えられる。



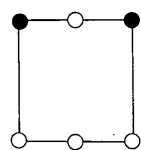
ST23 位置：南部 I 図版17・19、PL38

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：3間×2間の南北に主軸をとる建物址である。柱間寸法は桁行よりも梁間で広がっている。柱穴：掘り方は円形であるがやや崩れたものが見られる。規模は比較的小型のものが多く、西側の桁行の内側が特に小さい。埋土は黒褐色土を主体としている。時期：出土遺物がなく時期決定が困難であるが、ST22との関連が考えられる。一連の掘立柱建物址群と同様な時期と考えられるが主軸方向が異なりやや先行するのであろう。



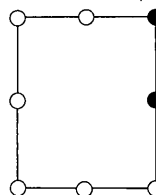
ST24 位置：南部 I 図版24

検出：II A 2層上面のやや不安定なところでST25と接するように検出された。柱配置：2間×1間で南北にわずかに長い小規模な建物で簡易的である。柱配置等から南北棟と考えられる。柱穴：掘り方は円形で規模は30cm台で非常に小規模である。また確認されている柱痕跡も非常に細くなっている。南側の梁間で建て替えと考えられる柱穴の重複がみられる。付属施設：北側梁方向と並行するように溝がみられる。やや主軸がずれるが雨落ち溝と考えられる。時期：柱穴の重複等からST25よりは古いと考えられるが、遺物の出土もなくまた周辺遺構も稀薄で時期の決定が困難である。



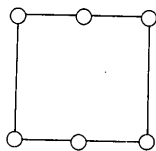
ST25 位置：南部 I 図版24

検出：II A 2層上面において検出されたが南側部分が攪乱を受けている。柱配置：攪乱により不明な部分もあるがこれ以上延びることも考えられず、2間×2間で南北に長い建物と考えられる。柱間寸法は梁間に比べ桁行が長くなる。柱穴：掘り方は円形で比較的小規模である。柱痕跡も2基の掘り方で検出されている。埋土は黒褐色土を主体にし柱痕跡にも入る。時期：ST24に続く時期と考えられるが時期の決定は困難である。



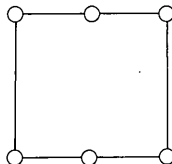
ST26 位置：南部 II 図版31

検出：I層下部からII層にかけての検出面において単独で検出した。柱配置：2間×1間の東西にわずかに長い建物で、東西棟と考えられるが柱の通りがやや悪い。柱穴：掘り方は円形で規模は最大でも35cmと非常に小型である。埋土は褐色土を基調とし、柱痕跡は確認されていない。時期：遺物が全く出土しておらず時期決定が困難である。主軸方向はSB55などに近く6期の可能性も考えられるが、検出面がI層であること、掘り方も小さいことから近世に下る可能性も考えられる。



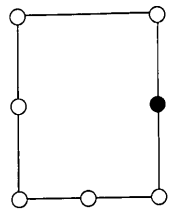
ST27 位置：南部 II 図版29

検出：ST26同様I層下部からII層にかけての検出面で単独で確認された。柱配置：2間×1間のわずかに東西に長い建物址であり、東西棟と考えられるが柱の通りが悪く、不規則な配列となっている。柱穴：掘り方は円形で非常に小型である。埋土は褐色を主体としており柱痕跡は確認されていない。時期：ST26と規模、形状が似ており同時存在の可能性が強い。ただし時期の特定はできない。



ST28 位置：南部II 図版27・29

検出：II A 2層上面においてSB56を切るように検出された。SB56の切り合い関係はいずれも暗オリーブ褐色土を基調とするが、本址の覆土には人為的に埋め戻されたブロックを含んでおり区別できた。また複数の小土坑があり掘立柱建物址が重複している可能性もある。柱配置：2間×2間の南北に長い建物址である。ただし北側の梁間の中間に位置する柱穴がない。柱間寸法は梁間に比べ桁行の方が広がっている。柱穴：掘り方は不整な円形で50~70cmと比較的大型で、深さは40cm前後である。埋土は暗オリーブ褐色土に褐色ブロックを含んでいる。時期：SB56を切っており6期以降と考えられ、周辺遺構から下っても7期までと考えられる。



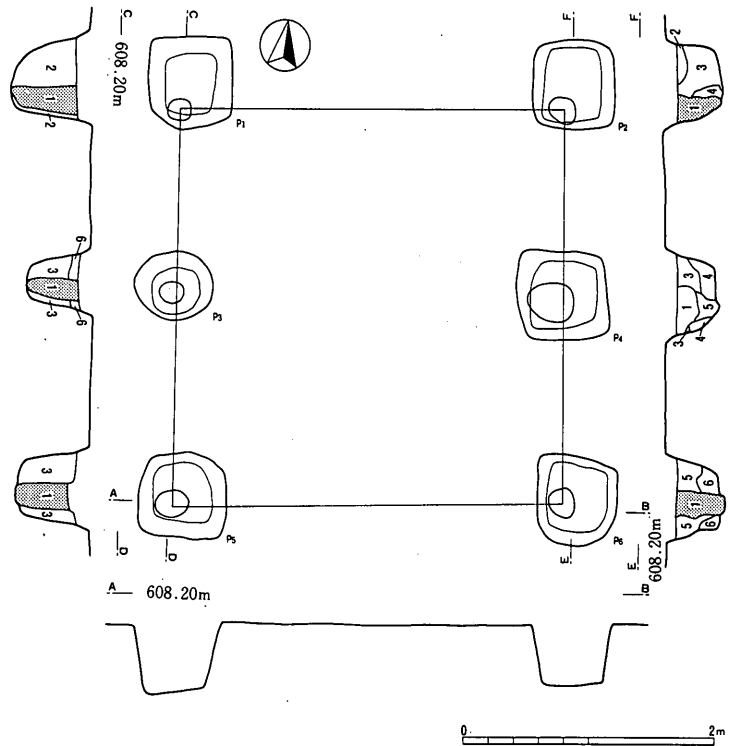
ST29 位置：南部II 図版31

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：1間×1間と非常に小型の建物址で若干東西に長くなっている。柱間寸法は東西150cm、南北方向で130cm前後となっており、恒常的な建物であるか疑問である。柱穴：掘り方は円形であり非常に小型である。埋土は黒褐色土を主体としている。時期：遺物もなく時期決定が困難であるがST27と関連すると思われる。



ST30 位置：北部III 図版75、第64図

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×1間の建物址で柱穴は方形に規則的に配列され、柱配置により南北に主軸をもつと考えられる。柱間寸法は桁行で150cm、梁間で305cmと桁行の2倍になっている。柱穴：掘り方は1基を除き方形で、どの掘り方も70cm前後で大きさも揃っている。すべての掘り方で柱痕跡が確認されている。柱痕跡の径は20cm程度である。埋土は柱痕跡には暗灰黄色が落ち込み、周囲には主に暗灰黄色にオリーブ褐色土のブロックを含む土が埋め戻されている。遺物出土状況：掘り方より須恵器杯の細片が出土している。時期：遺物よりは時期の特定が難しいが周辺遺構の分布より5期と考えられる。



- 1：暗灰黄粘土 風化礫5mm散点礫2mm散点
- 2：暗灰黄粘土 炭化物5mm散点
- 3：オリーブ褐粘土混細粒砂オリーブ褐ブロック 3cm~4cm混
- 4：3層に類似する、暗オリーブ褐混
- 5：オリーブ褐粘土混細粒砂主体とし黒褐色土
- 6：暗灰黄粘土主体、オリーブ褐砂のブロック混

第64図 ST30実測図

ST101 位置：北部III

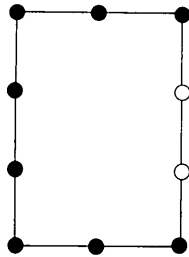
図版69、第65図、PL39

検出：II A 2層上面においてSD103を

切るように検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。柱は規則的に配列され、やや南北に長く南北棟と考えられ、柱間寸法は梁間で175cm前後、桁行では215cm前後となる。柱穴：掘り方は80cm程の方形で大型でしっかりしている。全ての掘り方で柱痕跡が確認されており径は20cm以上である。P5の柱痕跡の下部、木口部分に当たるところに暗灰黄色の粘土が確認されている。埋土は柱痕跡に黒褐色土が落ち込み、オリーブ褐色土の褐色ブロックを含む土が埋め戻される。遺物出土状況：掘り方より須恵器杯A(1)、黒色土器杯A、土師器甕Bなどが出土しており、柱痕跡からは須恵器杯A甕などが出土している。時期：

出土遺物から5～6期と考えられる。

ST102 位置：北部III
図版69、PL39



検出：礫混じりのII A 2層上面において単独で検出された。柱配置：3間×2間の南北に主軸を取る建物址である。柱間寸法は桁行、梁間共に210cm前後で一定している。柱穴：掘り方は隅丸方形のものを主体とするが、楕円形のものも混在している。平面規模は70cm程度で比較的大型であるが、深さは削平されているため比較的浅い。柱痕跡は東側桁行の一部を除いて検出されている。埋土は暗褐色土が柱痕跡に落ち込み周囲に礫を含む暗褐色土が埋め戻されている。

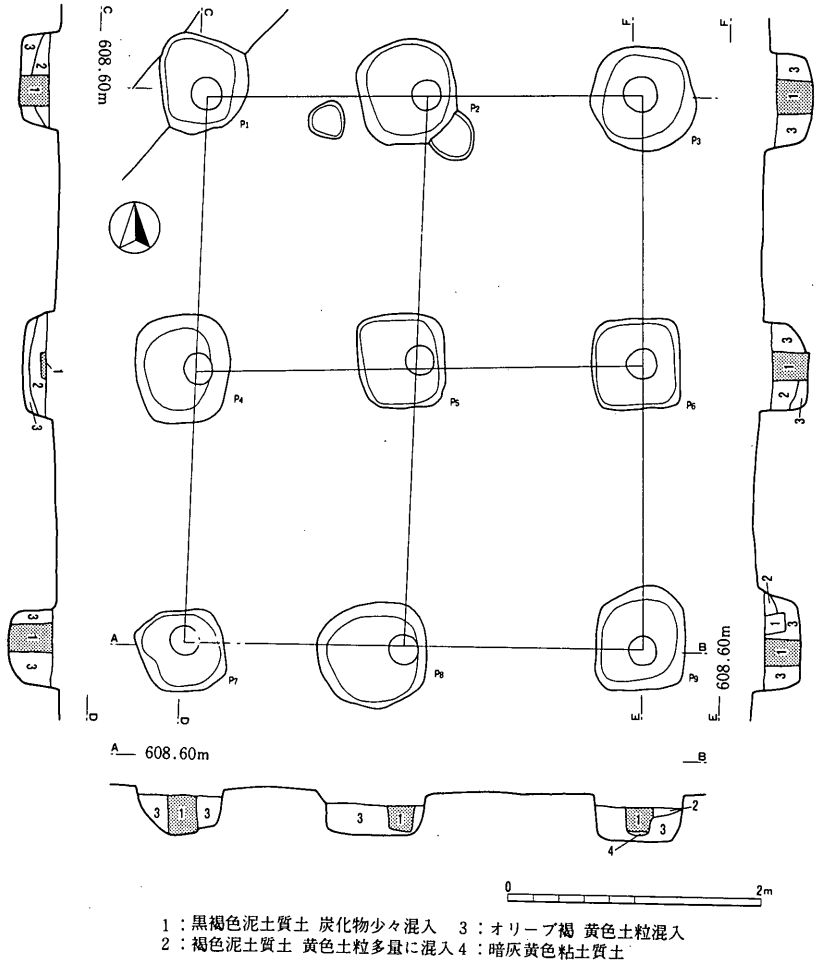
遺物出土状況：北側の梁間の掘り方より須恵器杯A(1)、須恵器杯蓋(2)、杯B(3)、黒色土器杯Aなどが出土している。時期：出土遺物より5～6期と考えられる。

ST103 位置：北部III 図版71、PL40

検出：II A 2層上面においてSD104に切られるように検出された。小土坑が重複しており掘立柱建物址となることも考えられる。柱配置：3間×2間の総柱の建物址である。柱穴は規則的に配列され南北にやや長い建物である。柱間寸法は桁行で短く、梁間で長くなっている。柱穴：掘り方は方形を基本とするが円形や不整形なものが混在している。深さは中央の柱穴が周囲の柱穴より若干浅くなっている。柱痕跡は一部のみで確認された。また、掘り方の底部に灰黄色の粘土のまとまりがみられる。埋土は柱痕跡には暗オリーブ褐色土が落ち込み周囲はオリーブ褐色土が主体を占めている。時期：出土遺物がなく時期の決定が困難であり、SD100・104よりも古く、主軸方向もややずれる傾向にあるがST101・102などと前後する時期の所産と考えられる。

ST105 位置：北部III 図版68、PL40

検出：II A 2層上面においてSB107に切られるように検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。柱は規則的に南北に長く配列され桁行が長くなっている。柱穴規模の割には小型の建物である。柱穴：掘り方はすべて方形であり、75～90cmの規模をもち、深さも40～60cmと深い。埋土は焼土、炭化物を含むオリーブ褐色土が主体を占めている。柱痕跡は部分的に確認されるのみである。柱痕跡下部に粘土が認められるのが1基ある。遺物出土状況：



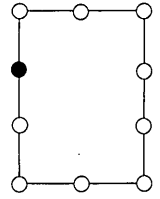
1：黒褐色泥土質土 炭化物少々混入 3：オリーブ褐 黄色土粒混入
2：褐色泥土質土 黄色土粒多量に混入 4：暗灰黄色粘土質土

第65図 ST101実測図

いずれも掘り方で細片であるが須恵器杯A甕、黒色土器杯Aなどが出土している。時期：6期と考えられるSB107に切られることや遺物等から考えて5期と考えられる。

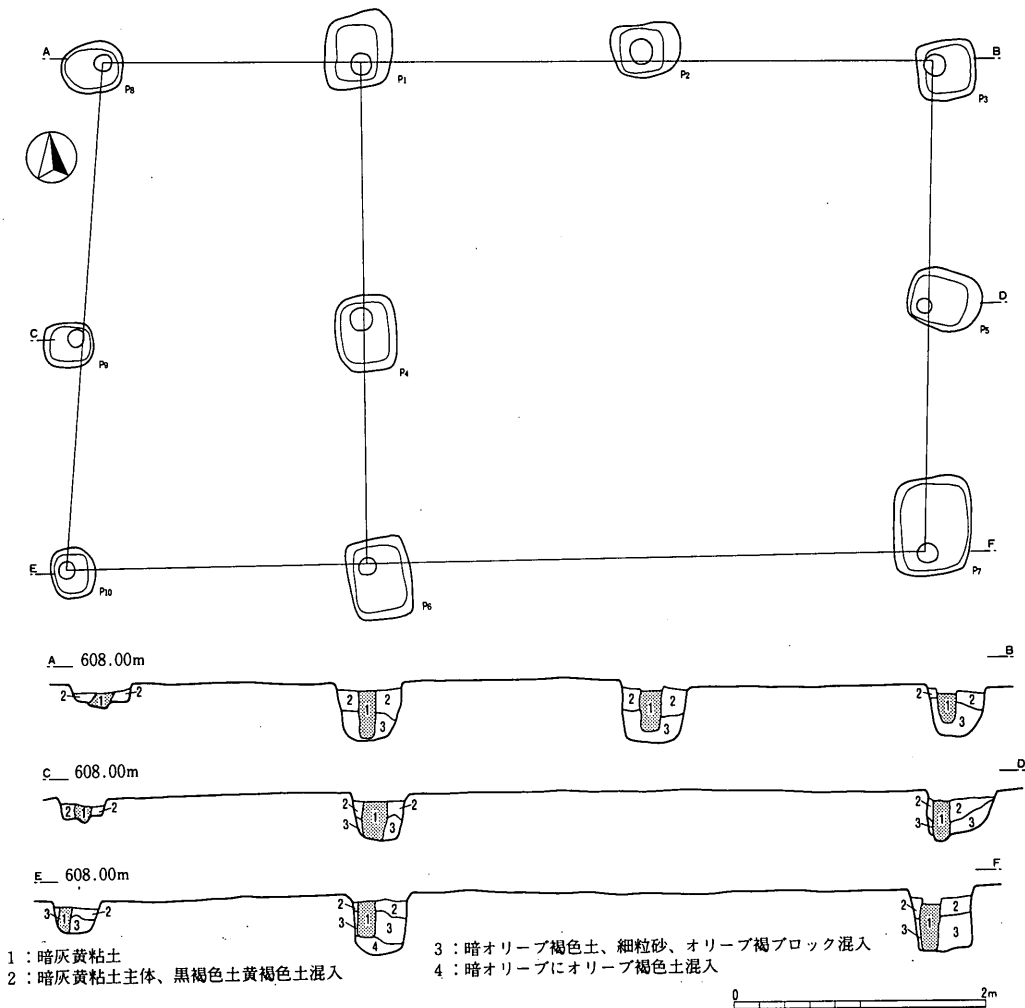
ST106 位置：北部III 図版69

検出：II A 2層上面においてSB103・104に切られるように検出された。柱配置：3間×2間の南北に長い建物址である。ただし、南側の梁間の中央には柱がなく1間である。柱穴：掘り方は方形、円形が混在し規模にも規格性がないが西側桁行がやや大きめである。埋土は上層に黒褐色土、下層にオリブ褐色土が分布する。時期：SB103・104に切られており7期以前と考えられる。ST102などに関連する。

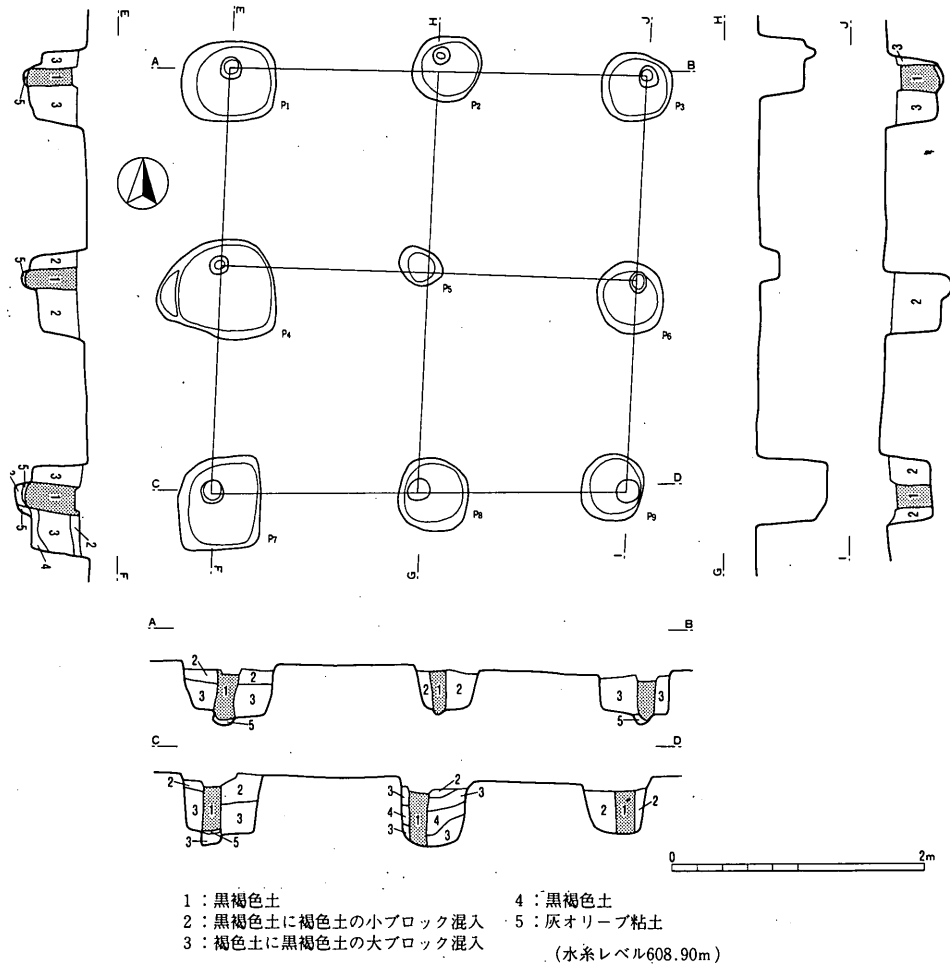


ST107 位置：北部III 図版75、第66図

検出：II A 2層上面において検出され直接の切り合い関係ではないがSD144と重複する。柱配置：3間×2間の東西に長い建物址である。西側梁間の掘り方が小さく浅い庇付建物となる。南側桁行の柱穴が1基無い。柱穴：方形の掘り方で50~77cm程の規模をもち、深さは50cm程度であるが西側の梁間は規模が40cm、深さ25cmと一回り小さい。柱痕跡はすべてで確認されており15cm程度の太さをもつ。埋土は柱痕跡に暗灰黄色が落ち込み、周囲にはブロックを含む暗灰黄色が埋め戻されている。ST30に近似した埋土である。遺物出土状況：掘り方より黒色土器Aの細片が出土している。時期：遺物からの特定は困難であるが周辺遺構から5期と考えられ、SB72・78などに関連が深いと思われる。



第66図 ST107実測図



第67図 ST108実測図

ST108 位置：北部II 図版58、第67図、PL41

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址であるが中央の掘り方は小さく浅い。柱穴は規則的にほぼ方形に配列され、棟方向は不明であるが一応南北棟と考えたい。柱間寸法は桁行、梁間共に165cm前後となっている。柱穴：掘り方は方形あるいは方形を意識した円形のものが見られる。規模は西側の桁行が大きく70~80cm、残りが50cm台でやや小さくなる。中央の掘り方は35cmと非常に小さい。柱痕跡はほとんどの掘り方で検出されている。埋土は柱痕跡部分に黒褐色土が、周囲に黒褐色土と褐色土のブロックを含んでおり、版築状になっているものもみられる。柱痕跡の下部には粘土が埋め込まれている。遺物出土状況：P1の掘り方より須恵器蓋・土師器甕が出土しており、P3の柱痕跡の下からは土師器甕が出土している。時期：遺物からの時期の特定は困難で周辺遺構との関連から5~6期と考えられる。

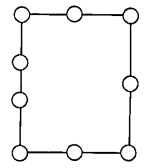
ST109 位置：北部III 図版68

検出：II A 2層上面において単独で検出されたがほとんどが調査区域外に延び詳細は不明である。柱配置：南北は2間でこれ以上延びない。東西方向で確認されているのは間に小ピットを挟むが1間である。2間×1間の南北棟建物址あるいは2間×2間の総柱建物址の可能性も考えられる。柱穴：掘り方は方形で規模は75~90cmと大型である。深さは東側南北列の両側の掘り方が50cmと深く、その中間に位置する掘り方が33~41cmとやや浅い。全ての掘り方で柱痕跡が確認されている。埋土は柱痕跡に焼土粒を含む暗いオリブ褐色土が落ち込みその周囲にブロックを含むオリブ褐色土が埋め戻されている。遺物出土状況：掘り方より須恵器杯A、土師器甕の細片が出土している。時期：遺物からの特定は難しく、また調査区の西に寄っているため周辺遺構との関連も不

明な点が多いが、比較的古い時期と考えられる。

ST110 位置：北部II 図版62・64

検出：II A 2層上面においてSD160に接するように検出された。柱配置：3(2)間×2間の南北に長い建物址であるが、東側の桁行は2間である。基本的には2間×2間の建物址と考えられ西側に何らかの施設が付帯したため柱を1本加えたと考えられる。柱間寸法は西側桁行が105~130cm、東側が180cmであり、梁間は140cm程度である。柱穴：掘り方は方形、円形のもの混在している。埋土は暗褐色土で柱痕跡は確認されていない。ただし、掘り方の底部に粘土が確認されており柱位置を推定できるものがある。時期：遺物はなく時期の特定は困難であるが、周辺遺構との関連により5期前後と考えられる。

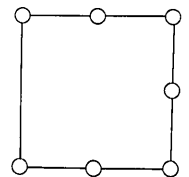


ST111 位置：北部I 図版54・56、第68図、PL41

検出：II A 2層上面において複数の遺構と切り合うように検出された。柱痕跡には多量の焼土含んでおりすべての遺構を切っている。西側部分は調査区域外へと延びている。柱配置：東西に長い建物で梁間4間、桁行3間以上と考えられ南側に庇をもつ本遺跡最大の建物址である。柱間寸法は梁間、桁行共に165~175cmで柱筋は良く通る。庇はこれらの柱間より広く225cm程南に出している。柱穴：掘り方は方形を基本としているが、庇部分は円形である。規模は身舎部分の掘り方が70~115cmと非常に大型で、庇部分は50~70cm程でやや小さくなっている。埋土は柱痕部分に落ち込んでいる土は焼土・炭化物を多量に含むオリーブ褐色土で、周囲にはブロック混じりのオリーブ褐色土が埋め戻されている。付属施設：建物内部より須恵器大甕の埋設遺構が3基検出されている。大甕底部と口縁部が出土しており胴部を欠いている。出土状況は底部のなかに口縁部が落ち込んだ状態で出土し、覆土には焼土・炭化物を含んでおり、柱痕跡の状況に近似している。本址の廃絶時に破壊された可能性がある。これらの大甕が本址に付くとすれば液体、あるいは穀類の収納の施設ということになる。遺物出土状況：掘り方及び柱痕跡から比較的まとまって出土している。主な出土遺物はP4から黒色土器杯A(4・5)、須恵器短頸壺蓋(12)、須恵器甕D(13)、P3から須恵器杯A(6)、P9から須恵器蓋(9)、P8から須恵器杯B(8)、『甗』の墨書土器(7)、P11からは須恵器杯B(11)、いずれも掘り方より出土している。柱痕跡出土のものは図示できなかったが須恵器杯A・甕・壺類、黒色土器杯A、土師器甕類が出土している。また建物址内の土坑からは須恵器甕1・2・3が出土している。時期：出土遺物から6~7期にかけての時期と考えられる。

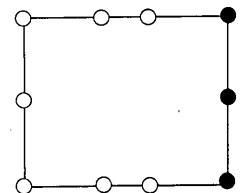
ST112 位置：北部II 図版64

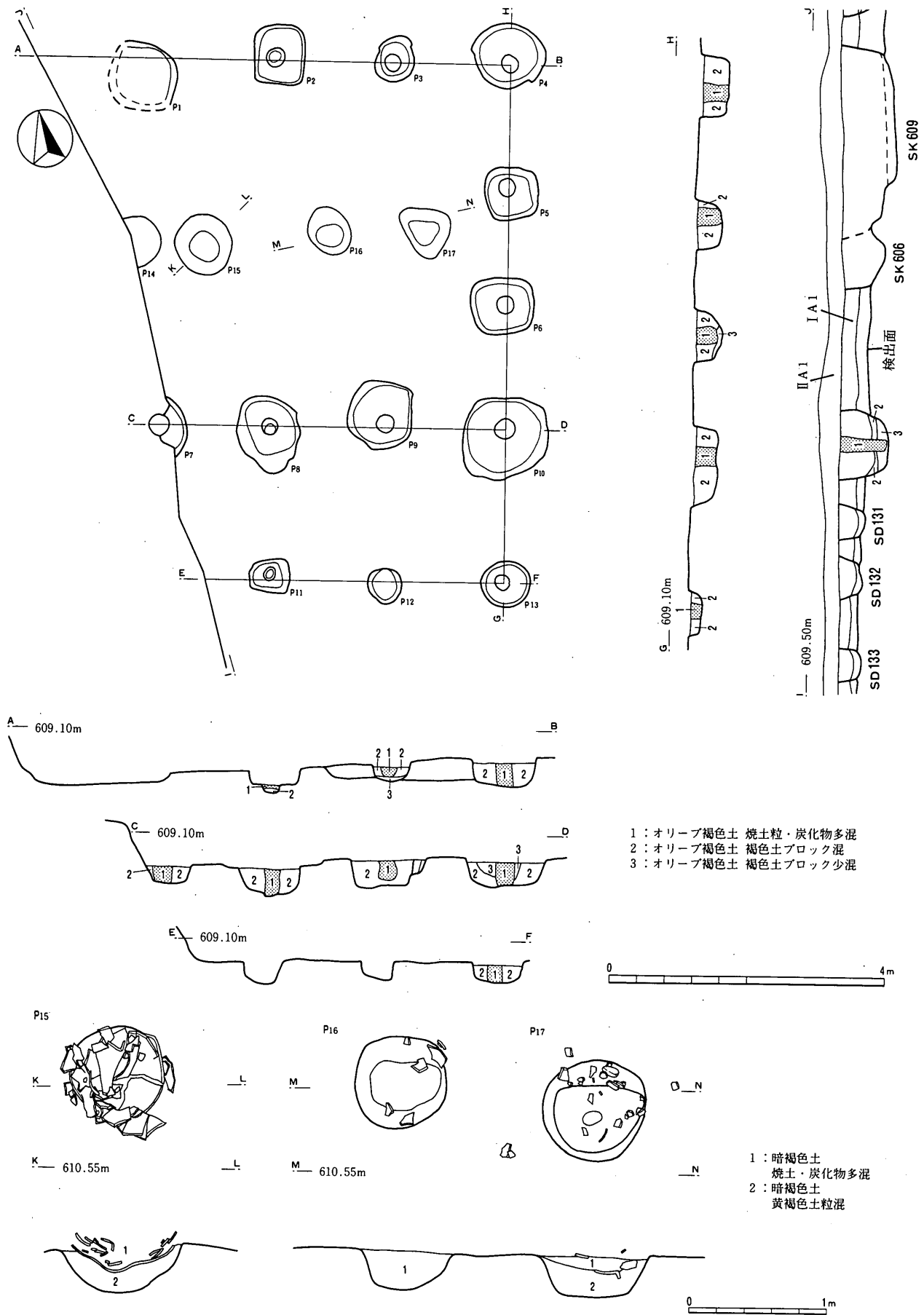
検出：II A 2層上面において単独で検出されたが、柱配置：2間×2間であるが西側南北列の柱穴1基が欠落している。柱配置から東西棟建物と考えられる。柱間寸法は桁行、梁間共に200cm程度である。柱穴：掘り方は円形であるが不整形のものも含まれている。埋土は暗褐色土の単層で、柱痕跡は確認されなかった。時期：遺物はまったく出土しておらず、時期を特定できないが、主軸方向からSB101あるいはSB142のいずれかの時期につくことが予想され、柱間間隔が延びることなどからSB101に付属する可能性が高い。



ST113 位置：北部III 図版79、PL42

検出：II A 2層上面において単独で検出された。ST114と軒を揃える。柱配置：3間×2間の東西に長い建物址である。梁間の柱筋は通るが、桁行は西に向かってやや開いている。柱間寸法は梁間がやや広く240cm程度であり、桁行は180~210cm程度で特に中央の柱間が狭くなっている。柱穴：掘り方は方形で規模も50cm台で比較的小型である。柱痕跡は東側の梁間で確認されている。埋土は柱痕跡に暗灰黄色土が落ち込み周囲を褐色土で埋め戻している。遺物出土状況：掘り方より須恵器杯A・長頸壺、土師器甕B、黒色土器杯A(1)が柱痕跡か



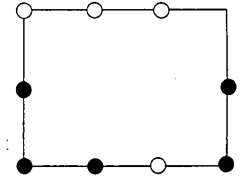


第68図 ST111実測図及び須恵器甕A出土状況図

ら須恵器杯A(2)・杯蓋(3)などが出土している。時期：出土遺物から5～6期と考えられ、周辺遺構との関連は5期の遺構であるSB72と主軸方向を揃えており関連が強いと考えられる。

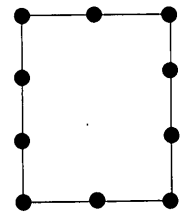
ST114 位置：北部III 図版79、PL42

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：3間×2間の東西に長い建物址である。北東隅の柱穴は検出できなかったが本来は存在したと思われる。ST113と規格、形態が近似する。柱間寸法は桁行にくらべて梁間のほうが20cm程長くなっている。柱穴：掘り方は方形で60cm大となっており、やはりST114に共通する。柱痕跡は半数の掘り方で検出されており径は20cm前後である。埋土は柱痕跡に暗灰黄色土が落ち込み周囲をオリーブ褐色土で埋めている。遺物土状況：柱痕跡から須恵器杯A、土師器甕の細片が出土している。時期：ST113と共通性が強く同時期に存在したと考えられる。



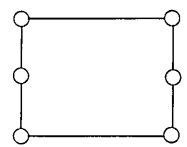
ST115 位置：北部III 図版70、PL42

検出：II A 2層上面においてSB34に接するように検出された。小土坑が集中する部分で、複数の小土坑と切り合い、さらに建物が重複している可能性もある。柱配置：3間×2間の南北棟である。柱間寸法は若干不揃いの部分もあるが桁行で170cm前後で、梁間で200cm程度である。柱穴：掘り方は方形で規模は70cm前後で比較的大型である。柱痕跡はすべての掘り方で確認されている。埋土は柱痕跡に暗オリーブ褐色土が落ち込み、周囲にはオリーブ褐色土を主体に埋め戻されている。遺物出土状況：掘り方より須恵器大甕の破片が出土している。時期：遺物からの特定は困難であるが、SB34よりは新しいが比較的古いと考えられる。



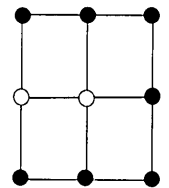
ST116 位置：北部III 図版76

検出：II A 2層上面において検出された。中央に大型の土坑が重複しているが、積極的な根拠はないが周囲に遺構がなく中央に位置していることなどから同一遺構の施設と判断した。柱配置：1間×2間の東西棟建物址と考えられる。桁行は1間で柱間寸法は400cm、梁間は2間で柱間寸法は150cm程である。非常に簡易的な建物を想像させる。柱穴：掘り方は円形で非常に小型である。埋土は暗灰黄色土の単層で柱痕跡は検出されていない。付属施設：建物内に円形で浅い落ち込みがあり、焼土・炭化物を多量に含んでいる。ただ坑底部には焼けたという状況は認められない。遺物出土状況：中央の落ち込みから土師器甕類の細片が出土しているのみである。時期：遺物、周辺遺構からの特定は困難で不明である。



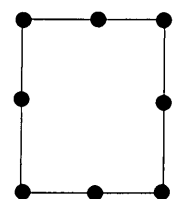
ST120 位置：北部II 図版63

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。柱穴は規則的に配列し若干南北に長い建物である。柱間寸法は梁間で175cm、桁行で215cm前後である。柱穴：掘り方は方形で2基の柱穴を除き柱痕跡が検出されている。埋土は柱痕跡に暗褐色土が、周囲には暗褐色土を含む鈍い褐色土が埋め戻されている。時期：遺物が出土しておらず時期の特定が困難である。周辺には4期、5期の住居址がありいずれかに付く可能性がある。



ST121 位置：北部II 図版58・60、第69図、PL42

検出：II A 2層上面において溝址群IIIを切るように検出された。柱配置：2間×2間の南北に長い建物址である。桁行は195～235cmと一定でない。梁間は195cmと安定している。柱穴：掘り方は円形で60cm程度、すべての掘り方で柱痕跡が検出された。埋土は柱痕跡に暗褐色土が落ち込み周囲には暗褐色土と褐色土がブロック状に混じり合った状態で埋め戻されており、版築状の土層を示すものもみられる。時期：遺物は全く出土しておらず



周辺遺構に頼らざるをえない。本址が切っている溝址群IIIは5期の住居址を切っており6期あるいは7期に属すと考えられる。

ST122 位置：北部 I 図版54・56

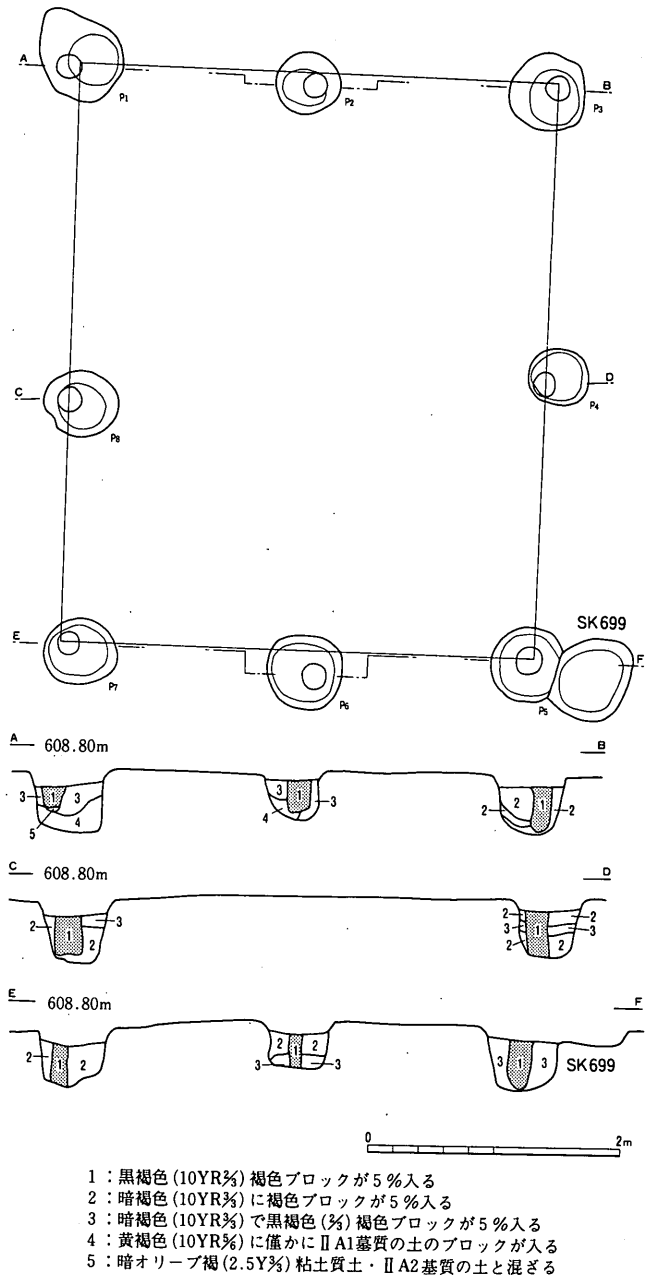
検出：II A 2層上面においてSB93に切られるように検出された。掘り方が不安定であり建物址として成り立つか疑問な点もあるがある程度柱筋が通っているため建物址と認定した。小土坑が集中しておりこのほかにも重複したり近接している可能性がある。柱配置：3間×2間の建物址と考えられるが中央の柱が西によっている。柱配置ほぼ長方形に配されている。柱穴：掘り方は方形で規模は大きいが浅く柱痕跡が検出されているのは中央の柱穴のみである。埋土はオリブ褐色土を主体としている。遺物出土状況：須恵器甕D、長頸壺などの細片が出土している。時期：7期の住居址に切られているがそれほど上がらないと考えられる。

ST123 位置：北部 I 図版57、第70図

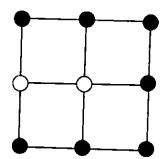
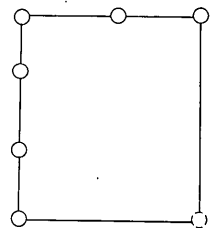
検出：II A 2層上面において検出された。北西隅の掘り方はなかなか検出ができず断面観察によって確認された。SD128・170・181などに囲まれ、SD178と重複している。柱配置：2間×2間のやや東西に長い建物址である。柱間寸法は桁行で250cm、梁間で220cmとなり桁行に長くなるが、全体としては柱間は延びている。柱穴：掘り方は方形で規模は大型であるが特に南側で大きくなっている。埋土は柱痕跡部分に炭化物を多量に含むオリブ褐色土が落ち込み、周囲はブロックを含むオリブ褐色土が埋め戻されている。付属施設：本址周囲を囲む溝址は何らかの関連があると思われ、雨落ち溝を兼ねた排水溝と思われる。遺物出土状況：P8からは須恵器杯A(2)、黒色土器A皿(1)、P7からは須恵器杯蓋(3)などが出土している。時期：出土遺物から7期の所産と考えられる。

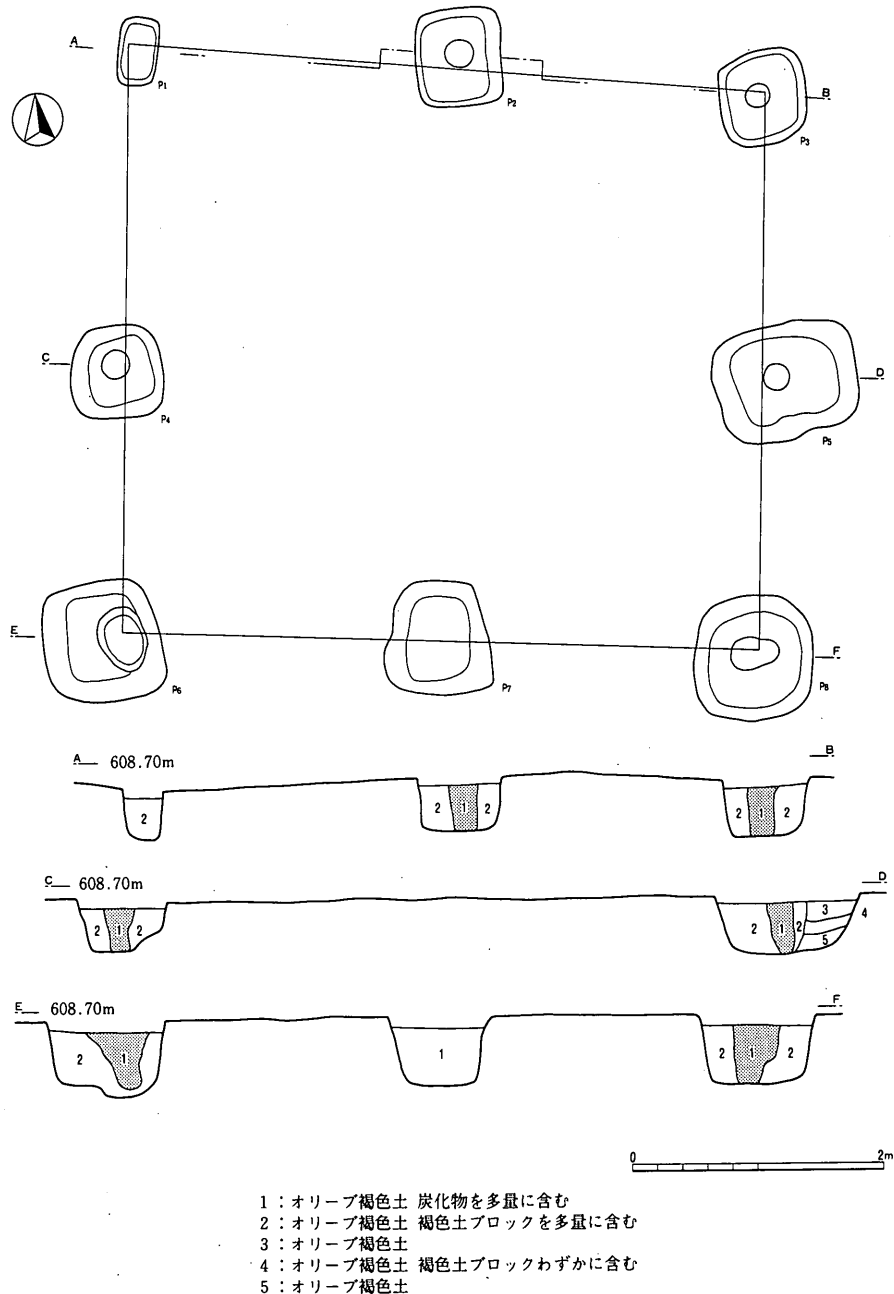
ST124 位置：北部 II 図版61

検出：II A 2層上面においてSD175に切られるように検出された。柱配置：2間×2間の総柱建物で、柱穴は規則的に方形に配列されており棟方向は不明である。柱間寸法は桁行、梁間共に170cm前後である。柱穴：柱穴は方形を基本としているが、不整形なものも見られる。どの掘り方も二段になっており、ある程度柱位置を決めて掘り下げ、再度柱位置を決め直した結果と考えられる。掘り方規模は上面では非常に大型であるが下段では普通の大きさとなる。埋土は柱痕跡に暗褐色土が落ち込み、周囲をブロックを含む褐色土が埋め戻されている。時期：出土遺物がなく時期決定が困難であるが、周辺遺構との関連から4～6期あたりと考えられる。



第69図 ST121実測図





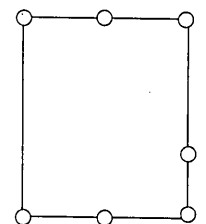
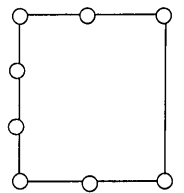
第70図 ST123実測図

ST125 位置：南部II 図版32・34

検出：II A 2層上面においてST13と重複するように検出された。柱配置：3間×2間の南北棟と考えられる。桁行に比べ梁間がやや広がってる。東側桁行の柱穴は検出されていない。柱穴：掘り方は円形で、大きさは25～45cmと不揃いであるが梁間中央の柱が大きく深くしっかりしている。埋土は暗褐色土の単層で柱痕跡は確認できなかった。時期：遺物は出土しおらず不明であるが遺構の配置から5～6期と考えられる。

ST126 位置：南部II 図版34

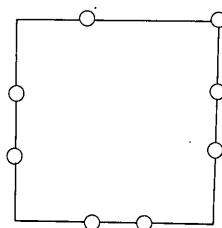
検出：ST125と同様である。柱配置：3間×2間と考えられるが桁行の柱穴は検出できなかった。桁行の柱が揃っており建物址として認定したが若干問題が残る。主軸を南北方向に取る。柱間は梁間がやや長く220cm、桁行が160cmである。柱穴：掘り方はすべて円形で、50cm前後の規模をもつ。特に南側の桁行の掘り方は段状を呈す。埋土は暗褐色の単



層である。時期：ST125と同様に考えられるが、両者の間隔は1mと近接しており同時併存は無理である。

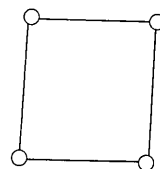
ST127 位置：南部III 図版40

検出：II A 2層上面において単独で検出された。すべての柱穴が検出されたわけではなく建物址として認定するのに躊躇したが柱の配置からなんらかの構造物が想定され建物址とした。柱配置：桁行、梁間共に150cmでわずかに東西に長いがほぼ方形に配される。北東隅を除き各隅の柱穴が欠落している。柱穴：60～70cm前後の規模をもちすべて円形の掘り方である。深さも40～60cmと安定している。埋土は黒褐色土の単層であり柱痕跡は確認できない。出土遺物：須恵器、土師器甕の細片が出土している。時期：時期決定が困難であるが周辺遺構SB24との関連により4～5期と考えられる。



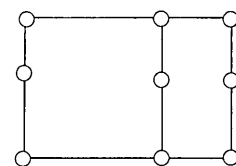
ST128 位置：南部III 図版39

検出：ST 3と重複するように検出された。ST 3に比べ規模、構造の点で劣りその認定には躊躇した。柱配置：1間×1間の若干南北に長い建物址である。北側梁間中央には他の柱穴より小型で浅い柱穴がある。柱穴：35cm～55cmとやや不揃であり掘り方の形状も基本的には方形を意識しているようであるが形状がくずれるものが多い。埋土は黒褐色土～暗褐色土の単層である。時期：周辺遺構との関連により6期と考えられる。



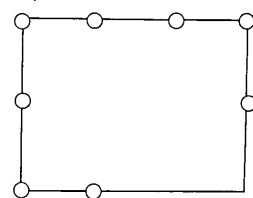
ST129 位置：北部I 図版56

検出：II A 2層上面において複数の柱穴が検出されたが、建物址として認定できなかったが図上で復元した。SD128を切る。柱配置：2間×2間東面庇付の建物址で東西に長い。一応東西棟と考えるが南北棟の可能性もある。柱穴：掘り方は円形と方形のものが混在しており、規模も55～90cmと幅がある。埋土は暗褐色土に褐色土ブロックが入る。柱痕跡は西側梁間中央の柱穴のみに認められる。遺物出土状況：北側桁行の第1・第2柱穴から出土しており、第2柱穴からは灰釉陶器小瓶、壺蓋の他に銅製品(PL91)の破片も出土している。時期：出土遺物から7期と考えられる。



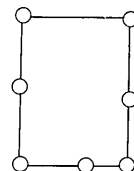
ST130 位置：北部III 図版69

検出：II A 2層上面においてST101・106と切り合うように検出された。当初建物址として認定されなかったが、西側の柱穴がしっかりしていることなどから認定することになった。柱配置：3間×2間の東西に長い建物址である。柱間は桁行、梁間とも210cm前後で等間隔に配列される。柱穴：掘り方は方形であるが崩れるものもある。規模はほぼ60cmと安定している。時期：ST101よりも古いと考えらる。



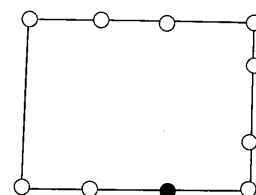
ST131 位置：北部III 図版74

検出：II A 2層上面において単独で検出された。柱配置：2間×1間で主軸を南北にとる。柱穴：掘り方は円形で規模は30～90cmと一定ではない。特に桁行中央の柱穴は30cm前後と小さいのに対して四隅がしっかりしている。埋土はオリーブ褐色土に褐色土のブロックが入る。時期：周辺遺構の分布から5期前後と考えられる。なお、SD119とはほぼ軸方向をそろえ、規模も揃うことから何らかの関連があると考えられる。



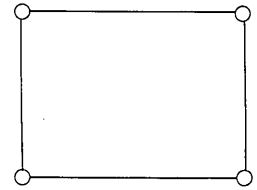
ST132 位置：北部III 図版74

検出：II A 2層上面においてピットが集合した状態で検出した。柱配置：3間×2間と考えられるが桁行の柱穴は検出できず不明である。柱穴：掘り方は全て円形で、規模も30～60cmと小さい。埋土は暗褐色土に褐色土のブロックを含む。柱痕跡は確認されていない。時期：周辺遺構との関連により5期と考えられる。



ST133 位置：北部Ⅰ 図版50・51

検出：II A 2層、II F層上面においてSD117に切られるように検出された。またSB114と重複している。柱配置：1間×1間の東西棟である。柱間間隔が長く建物址として成立するか疑問であるが規格的に配置する柱穴により掘立柱建物址として認定した。柱穴：掘り方はすべて方形であるが一部円形に近いものも含まれる。規模は60～80cmと安定している。埋土は暗褐色土の単層である。時期：SD117に切られることから6期以前と考えられ、周辺遺構から5期と判断される。



3 柵 址

SA 1 位置：南部Ⅲ 図版39、PL47

検出：II A 2層上面においてST 3、SB18などの南側に単独で検出された。規模・形状：全長10.9m、主軸をN93°Eにとり、直線状に延びる。東端は調査区域外に延び確認できない。柱配置は7間以上で柱間は西側の第1・2柱穴間が広く385cmであるが、そのほかはほぼ等間隔に配列され、220～270cmの間隔をもつ。柱穴はすべて円形の掘り方をもち直径40～60cm、深さ22～48cmの規模である。埋土は黒褐色土に褐色土のブロックが入る。柱痕跡は西から第2・3柱穴に確認されている。時期：出土遺物もなく時期決定が困難であるがST 3と主軸方向を合せており5期の遺構と考えられる。6期の遺構も取り込んでいるため6期まで継続していると考えられる。所見：SB11・13、ST 3などを取り込む柵と考えられる。これら遺構の西側にも小ピット列があり柵になる可能性が高いが、規格性に欠ける。

SA 2 位置：南部Ⅲ 図版32、PL47

検出：II A 2層上面においてST 8・9に切られるように検出された。規模・形状：全長6.6m、主軸をN12°Eにとる。柱穴は4基、3間が確認され、中央の柱間隔が280cmと広く両端が190cmとなる。柱穴はすべて円形で25～35cmと小規模である。埋土は褐色土で柱痕跡は北から第2、4柱穴に確認されている。時期：ST 8・9に切られることから5期の所産と考えられる。

SA 3 位置：南部Ⅰ 図版16

検出：II A 2層上面においてST16を切るように検出された。規模・形状：全長5.6m確認されたが東は調査区域外に、西は攪乱を受けておりさらに長くなる。主軸を周囲の建物址、竪穴住居址と同方向であるN95°Eにとる。柱配置は3間以上であり、柱間間隔は180cmで等間隔である。掘り方は方形で40～45cm、深さ25cmの規模をもつ。埋土は黒褐色土に褐色ブロックを含む。柱痕跡はすべての柱穴で確認されている。時期：出土遺物はないが建物址と切り合うことから6期あるいはそれ以降と考えられるが、調査区の東端に当たり区画される遺構がはっきりしないため特定はできない。

SA101 位置：北部Ⅲ 図版67、PL47

検出：II A 2層上面で単独で検出したが、柱穴の配列は不規則である。規模・形状：全長10m以上、主軸をN84°Eにとる。柱配置はまったく規則性が認められず、柱穴の規模もばらつきがある。比較的大きな柱穴を拾い出すと柱間間隔は170～220cmほどになり、この間を小ピットが埋めている。柱穴は25～35cmと40～70cmに分けられる。掘り方はやや不整な円形である。埋土はオリーブ褐色土で、柱痕跡は1基の掘り方から確認された。時期：出土遺物はない。本址はST102、SD108との中間に位置しておりこれらの遺構との関連により5～6期前後と考えられる。

4 溝 址

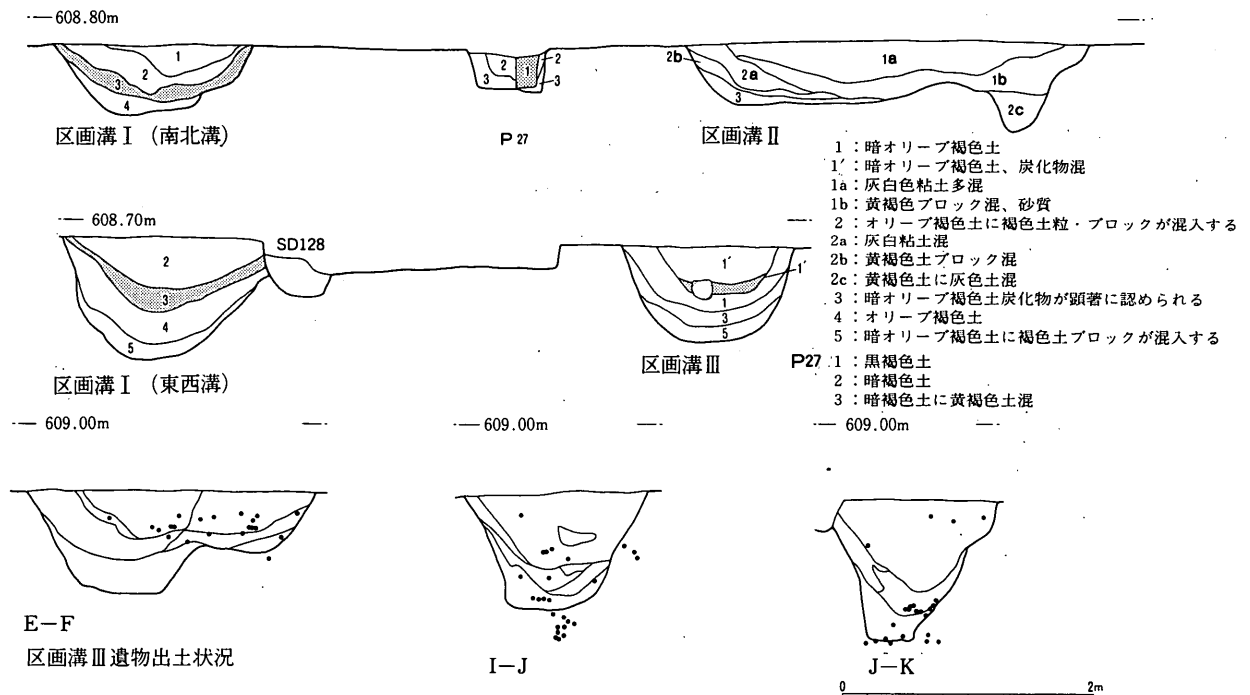
(1) 区画溝

区画溝 I・II・III・SA102 位置：北部 I 図版49・51・53・55・56・57、第71・72図、PL43

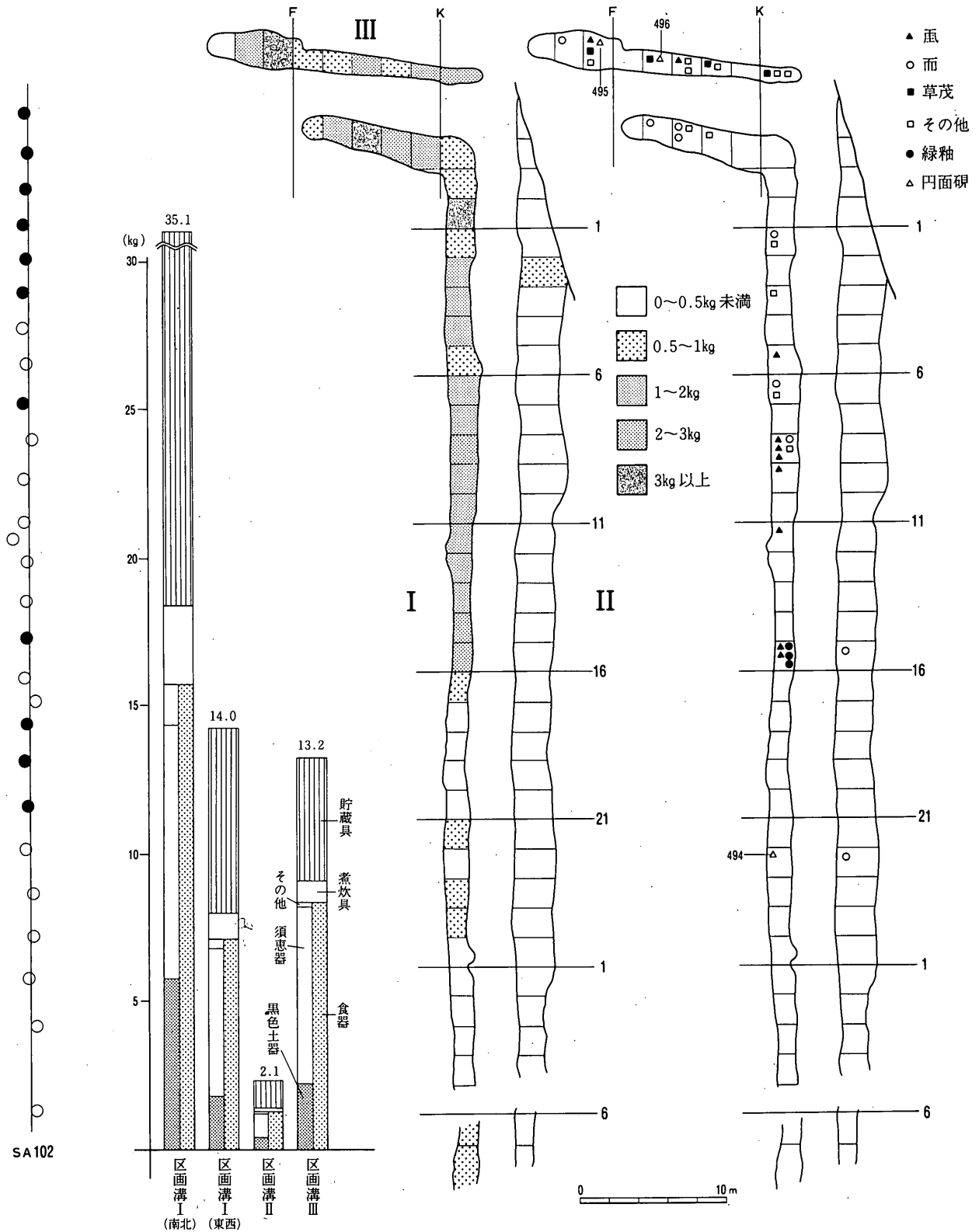
本址は3条の溝と1条の柵址から成り、それぞれの遺構が相互に関連して1つの遺構を形づくっている複合遺構である。内帯を区画する溝を区画溝 I、外帯を区画する溝で南北方向に走る溝を区画溝 II、東西方向に走る溝を区画溝 IIIとした。

検出：調査が2年度にわたっているため全体像を把握するのに苦慮した。II A 2層上面、一部II A 1層において検出された。南端部分は不安定な砂・礫層に掘り込み、攪乱を受けており確認できなかった。

規模・形状：南北約75m(内側部分70m)、東西約20mを測る。南北方向は主軸を真北にとるのに対して、東西方向はN100°Eと直角ではなく、区画内部の住居址の規制を受けている。区画溝 IIは区画溝 Iに比べて広くなっている。東西方向に走る部分は両者ともに同規模である。区画溝 I：南北に70m延び、北側部分は鉤の手状に曲がり10m程延びる。幅は南部で130cm、中央部分で170cm、東西部分で190~280cmで、ほぼ200cm前後で推移している。深さは絶対高で示すと南側が609.30m、中央部分で608.34m、北側で608.10m、東西部分で607.87mで東西部分が一番深く検出面から87cmを測る。南側部分はやや掘り足りない可能性もあり、あるいは南側と北側では同一の深さとなる可能性もある。断面形は逆台形に近い「U」字状を呈す。溝底の状況はかなりの起伏があり一様ではない。区画溝 II：南北に72m直線的に延びる。幅は南端部分で狭く180cm、中央部分で280cm、北側部分で350cmを測る。南側部分は検出面の影響を受け狭くなっているが本来は300cm前後で一様な溝であったと考えられる。深さを絶対高で表示すると南部では608.20m、中央部で608.30m、北側部分で608.10mとほぼ一様である。北端部分は確認できていないが溝底は徐々に高くなっておりすぐに立ち上がるものと思われる。断面形は船底状を呈すが、一部「W」字状となる。区画溝 III：長さ20mで直線的に延びるが区画溝 IIとはつながっていない。幅は150cmでほぼ一定しているが西側部分で幅が250cmと広がっている。深さは東側が絶対高で607.21m、検出面からは125cmと非常に深く、西にいくに従って段状に高まっている。中央部分で607.58m、深さ89cm、西端部で607.12m、深さ40cmとなる。SA102：



第71図 区画溝土層図及び遺物出土状況図



第72図 区画溝柵址模式図・区画溝遺物出土状況図

区画溝 I・II の間に挟まれた部分に柱穴が直線状に並ぶ。ほぼ71mにわたって26基の柱穴と7基の補助柱穴が確認された。東西方向ではII A 1層が深まっており非常に検出しにくい状況であったが柱穴は確認できなかった。柱配置：柱はほぼ直線状に配列されるが部分的に乱れ鋸歯状に波打つ部分がある。柱間は南側で280~300cmと広く、北側で220~260cmとやや狭くなっている。柱穴：平面形は円形、楕円形が主体を占めわずかに方形のものが含まれる。柱痕跡が確認されたものは半数程である。

層位：区画溝IIを除きほぼ同様な堆積状況を示す。基本層序は1層は暗褐色～暗オリーブ褐色土で下部に炭化物の混入がある。2層はオリーブ褐色土で褐色土粒、ブロックの混入が認められる。3層は暗オリーブ褐色土で1層に近く炭化物が顕著に認められる。4・5層は部分的に確認されるもので区画溝Iの東西部分、区画溝IIIに認められる。4層は地山の砂礫層の影響を強く受けている層でオリーブ褐色土である。5層は暗オリーブ褐色土で褐色ブロックが入る。人為的埋没を明瞭に示すのは2・5層であるが、残りも人為的な感が強い。区画溝I：1～4層が存在する。東西部分では1～4層が、南北部分の北半は1～3層、南側は1・3層が分布しやや様相を異にする。南北部分の2カ所に集石が認められ、いずれも多量の炭化物を含み、人頭大の礫と多数の角礫から成っている。1層下部に見られる炭化物が顕著な部分と一致する。遺物は1層に集中しているが3層にも比較的多くみられる。区画溝II：基本的には基本層序の1・2層が分布するが灰黄色粘土を含む点がやや特異である。下層には部分的にグライ化した暗灰色粘土が分布し滞水を予想させる。炭化物の混入は認められない。区画溝III：1～5層が分布するが2・3層は顕著ではない。これはこの部分がIIA 1層が厚く分布する部分でその影響を受けて2層がはっきりしなくなったと考えられ、基本的には全域に分布すると考えられる。5層は砂層に切り込んでおり構築時に埋め戻された可能性もある。

遺物出土状況：64.7kgの土器と、少量の金属製品が出土している。土器の分布を平面的にみると区画溝I・区画溝IIIに多く区画溝IIは非常に少ない。つまり、内帯を区画する溝に多く、外帯を区画する溝には少ないということになり、これは柵の影響を強く受けた結果と考えられ、これをさらに進めると東西方向には柵はなかったと考えるのが妥当である。層位的には1・3層からの出土が多く、これは炭化物包含層に当たる。溝の存続中と廃絶段階の大きく2時期にわたって多量に土器が廃棄される状況があったと考えられる。ただし遺物からは明瞭な時間差を見出すことはできないが、1層に黒色土器皿、緑釉陶器皿などが多い傾向はある。出土遺物で注意を引くものとして被熱により変化した土器群の存在を挙げることができる。黒色土器などは酸化により黒色処理が失われたり、土器自体が発泡したり、歪みが認められるものがある。また、緑釉陶器は銀化により黒色を呈している。これら土器群は本址の埋没や区画内部の状況を示唆するものと考えられる。区画溝I：距離も一番長く全出土量の4分の3が出土している。南北部分で全体の2分の1が出土しており、SD117付近を境として北半で出土が多くなる傾向が認められる。これは住居址の分布とも一致している。特に、集石をとまなう部分からの出土が多く、炭化物が濃密に分布するところである。この炭化物の集中する1層下部からは円面硯(図版188-494)・銅製容器(図版191-52・53)なども出土している。墨書土器は24点出土しており、『甗』8点、『而』6点、『大』1点、不明・その他9点である。その多くは1層からの出土である。須恵器杯B、図版139-10はSX30と接合関係にあり、須恵器平瓶(18)はSD108出土のものと同一体と考えられる。その他漆紙の細片が1層から出土しているが非常に遺存状態が悪い。区画溝II：出土量は2kg強と非常に少ない。分布および出土層位に特別な状況はなく非常に散漫な出土のしかたである。墨書土器『而』が3点出土している。区画溝III：比較的まとまった出土がある。1層からの出土が一番多いが3層からも多く出土しており、最下層からの出土もある。主な出土遺物として円面硯が2点(図版191-495・496)が出土しており、495はSB91と接合する。墨書土器は18点出土しており、『甗』5点、『草茂』3点、『而』2点、その他・不明8点となる。出土層位は1・2層のものが多いが242は5層からの出土である。

時期：出土遺物の様相は6期を中心としてその前後のものが伴う。上限については6期と考えられる。下限については7期のSB116に切られており7期の前半までと考えられる。これはSB97の時期とほぼ一致する。

(2) 溝 址

SD 1 位置：南部II 図版22・23・24・25

検出：II A 2層上面において単独で検出された。SD49と合流するがほぼ同時期と考えられる。掘り込みが砂・礫層にあたる部分があり、特に南半では不明瞭な部分がある。規模・形状：南北55m以上にわたるが、北側では主軸方向をやや東に振るが、南側ではほぼ北にとる。溝の幅は最大で55cm、最小で30cm程度で、断面が逆台形を呈す。南から北への傾斜が若干認められるがほぼ平坦に推移する。層位：暗オリーブ褐色土の単層であり、流水等の痕跡は認められない。時期：出土遺物はほとんど無いが、須恵器杯A、土師器甕などが出土している。本址を境に西側に展開する住居址群がとぎれること、ほぼ同時期と考えられるSD49がSB65に切られることなどから5～6期前後と考えられる。

SD 2 位置：南部III 図版47・48

検出：II A 2層上面において検出され、西側でNR 1に接している。規模・形状：東西13m、幅50～90cm、掘り込みは浅く鍋底状を呈す。NR 1との関係で自然の流路の可能性もある。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物は赤彩土器・刀子などが出土しているが非常に少ない。赤彩土器は6期に特徴的に認められ6期の可能性が高い。

SD 3 位置：南部III 図版47・48

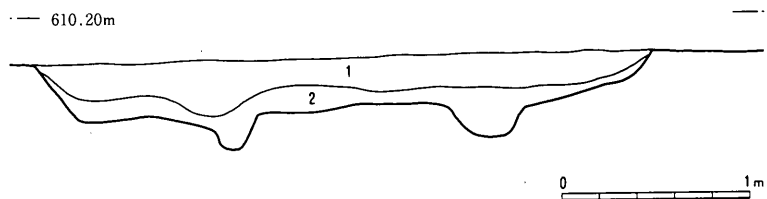
検出：II A 2層上面において検出された。西端でNR 1、東側部分でSD 4と接している。規模・形状：東西17m、幅約80cm、掘り込みは比較的浅く鍋底状の断面を呈す。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物がなく不明であるがSD 2と同時期と考えられる。

SD 4 位置：南部III 図版47・48

検出：II A 2層上面において検出された。東端でNR 1と接し、西端でSD 3と接している。規模・形状：全長6mで不整に蛇行している。幅は約70cm、鍋底状の断面を呈す。層位：黒褐色土の単層である。時期不明であるが、SD 2～4までほぼ同時期と考えられる。NR 1は古代から現在まで継続しているが、SD 2の遺物、検出層位などから6期の遺構あるいは自然流路と考えられる。

SD 7 位置：南部III 図版42・43、第73図、PL46

検出：II A 2層上面でSB 6・8を切るように検出された。東端は調査区域外に伸び、西端は礫層にあたり十分に確認できず、SB23の断面観察によって確認されたにすぎない。形状・規模：全長52mであるが両端ともにさらに延び、主軸をN15°Eにとり緩やかにカーブする。幅は約3m



1：黒褐色砂質土、小礫混
2：黒褐色砂質土、礫含まない。下層に黄褐色土粒混

第73図 SD7土層図

と広いが深さは30cmでさほど深くない。断面形は「W」字状を呈し、当初2本の溝の重複、あるいは改修を考えたが断面観察では確認できなかった。西端がやや高くわずかに東に傾斜している。層位：上下2層に分層したが最深部では褐色土粒が多く含まれている。上層は黒褐色土に小礫を含むのに対して下層では含まない砂質の土である。顕著な流水の痕跡は認められないが砂質土の堆積が認められることより流水の可能性はある。時期：遺物は非常に少ないが須恵器杯A、黒色土器A杯A、土師器甕などが出土している。7期の住居址と考えられるSB 6・8・35を切ることから7期あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

SD 9 位置：南部III 図版41

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：全長3.2mで非常に浅い溝址である。主軸を

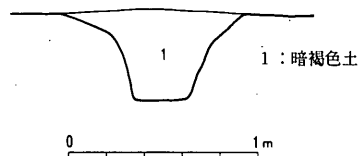
南北にとり、直線状に延びる。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物もなく時期は不明である。

SD10 位置：南部III 図版42

検出：II A 2層上面において検出された。SK363を切る。規模・形状：全長21mで主軸をN4°Eにとり直線状に延びる。掘り込みは非常に浅く断面形は鍋底状を呈す。層位：黒褐色土の単層である。流水の痕跡は全く無い。時期：出土遺物がなく決定ができない。

SD18 位置：南部III 図版35・36・37、第74・75図、PL46 611.00m

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：全長50mで主軸をN101°Eにとり直線的に延びる。幅は60~90cmで深さは平均30cm程度で断面は逆台形を呈す。層位：暗褐色土の単層である。流水の痕跡はない。遺物は比較的多く出土しているがほとんどが覆土中層からの出土である。時期：遺物は貯蔵形態のものを中心に出土しており、黒色土器A、須恵器

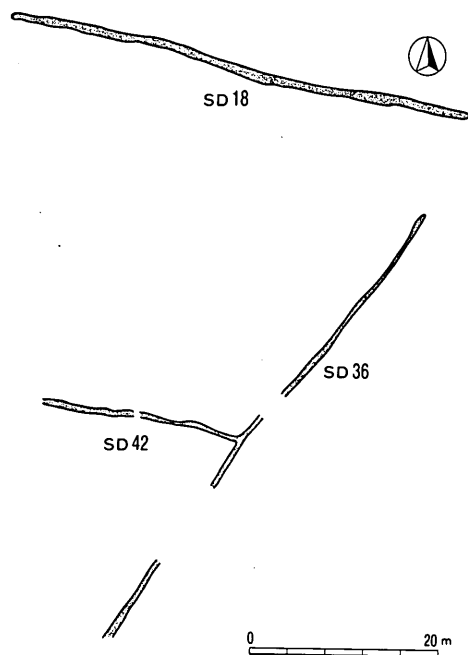


第74図 SD18土層図

などの杯Aも出土している。遺物からは5~6期と考えられ、SB26~SB32などの周辺遺構との関係においても肯首できる。所見：本址の主軸は南に展開する住居址・掘立柱建物址群とほぼ一致し、さらにこの遺構群を挟んで存在するSD42と並行しており、SD36と共に住居域を区画する溝と考えられる。

SD36 位置：南部II 図版28・30・31・33・35、第75図

検出：II A 2層上面において単独で検出された。ただし中央部分においてSD42と接し、南端は調査区域外に延びる。規模・形状：全長約60mでほぼN37°Eの方向に直線状に延び、地形の影響で北に向かって緩やかに傾斜する。溝の幅は40cm前後、20cm程度の掘り込みで断面形はすり鉢状である。溝底はほぼ平坦であるが部分的にピット状の凸凹が認められる。層位：暗褐色土の単層であり、流水の痕跡はない。時期：出土遺物はなく不明な点が多いが、周辺遺構との関係からSD18と同様な時期が考えられる。



第75図 SD18・36・42配置図

SD38 位置：南部III 図版44

検出：調査区の西端、II A 2層上面において単独で検出されたが、部分的に確認されたに過ぎず全容は不明である。規模・形状：N60°E方向に延びる。掘り込みは約10cmすり鉢状の断面形を呈す。層位：暗赤褐色土の単層である。時期：出土遺物は全く無く時期は不明である。

SD39 位置：南部I 図版16

検出：II A 2層上面において検出されたが東側部分は調査区域外に延びる。SK148を切る。規模・形状：確認できたのは6mであるが東にさらに延びる。走向は東西方向に延び、幅は60cm、断面形はすり鉢状で非常に浅い。層位：暗褐色土の単層であるが褐色土のブロックがわずかに認められ人為的に埋め戻された可能性がある。構築後すぐに埋められた可能性も考えられ、溝本来の機能とは別のものと考えられる。時期：出土遺物がなく周辺遺構も東に広がり不明な点が多いが5・6期前後と考えられる。

SD40 位置：南部I 図版16

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：確認されたのは6mでほぼ南北に主軸をとるが南端は調査区域外に延びる。皿状の掘り込みで非常に浅い。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物もなく不明である。

外に延びる。皿状の掘り込みで非常に浅い。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物もなく不明である。

SD41 位置：南部II 図版28

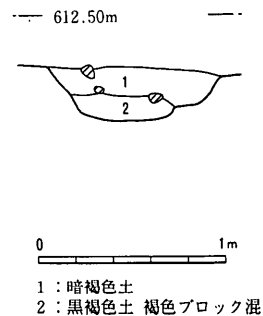
検出：II A 2層上面において単独で検出されたが西側部分で調査域外に延びる。規模・形状：主軸をN110°Eにとり4m程確認されている。断面形は逆台形で20cm程の掘り込みがある。層位：オリブ褐色土の単層で淘汰が良い。時期：遺物は全く出土しておらず時期は不明である。

SD42 位置：南部II 図版30

検出：II A 2層上面において検出された。西側は調査区域外に延び、東側でSD36と接している。規模・形状：全長21mで主軸をN102°Eにとる。ほぼ直線的に延びるがわずかな蛇行が認められる。部分的に深淺の差は認められるが顕著な傾斜は認められない。溝の幅は約60cm、深さは10～15cm前後で断面形はすり鉢状である。溝底にピット状の落ち込みが部分的に観察されている。層位：黒褐色土の単層であり流水の痕跡等は認められない。時期：遺物は全く出土していないがSD18と同様な時期が与えられる。所見：SD18とは規模・形状において違いを有するが主軸方向は全く一致し同様な機能が推定できる。本址の溝底にあるピット状の落ち込みは柵の痕跡を示している可能性がある。

SD45 位置：南部I 図版17・18・19、第76図

検出：II A 2層上面において検出したが、一部礫・砂層中に掘り込まれており検出が困難である部分があった。ST20と重複している。形状・規模：全長13m、主軸をほぼ東西にとる。断面は逆台形であり、30cm程の掘り込みがある。層位：2層に分層したが上層は暗褐色土で下層は黒褐色土に褐色土のブロックが入る。流水の痕跡は認められない。時期：須恵器杯Aのみが出土している。5～6期と考えられる。所見：ST23の北に位置しほぼ軸線を揃えており何らかの関係があると考えられる。



第76図 SD45土層図

SD46 位置：南部I 図版19

検出：II A 2層上面において検出したがSD45同様東側部分は礫層にあたる。SK120・121などに切られる。規模・形状：東西約6m、幅50cmで掘り込みは10cmと浅い。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物は非常に少ないが、須恵器杯A、黒色土器A杯Aなどが出土しており5～6期にかけての遺構と考えられる。

SD47 位置：南部I 図版20

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：全長約3mで非常に浅い。層位：黒褐色土の単層である。時期：遺物もなく不明である。

SD48 位置：南部I 図版20

検出：SD47同様II A 2層上面で単独で検出された。規模・形状：全長4mで非常に浅い。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物もなく不明である。

SD49・50 位置：南部II 図版23

検出：II A 2層上面においてSB65に切られるように検出された。SB65の東側をSD49、西側をSD50としたが本来は同一の溝と考えられる。検出面が砂質で部分的に検出できないところもみられる。東端においてSD1と接している。規模・形状：全長約20mであるがその中央部分をSB65に破壊されている。主軸方向はN86°Eと東西方向に走るが途中で東北方向に向きを変える。層位：暗オリブ褐色土の単層である。時期：出土遺物はないが7期の住居址に切られるため5～6期と考えられる。

SD51 位置：南部I 図版24

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：約3mと小規模な溝である。ST24に並行し

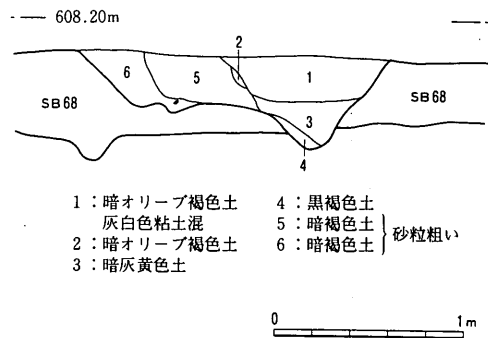
ており建物址の付属施設の可能性がある。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：遺物の出土がなく不明である。

SD52 位置：北部I 図版54・56

検出：SD132、SK555・615・616に切られ、SD135を切る覆土はいずれも近似しており検出は非常に困難であった。また、不整形な溝状の落ち込みで、やや不整形であり溝としての規格性に欠ける面もある。規模・形状：全長9.2m、幅は最大170cm、最小でも100cmを測る。主軸方向はほぼST111と並行しており関連性が認められるが切り合い関係からは古く関連を認めることはできない。層位：暗褐色土に褐色ブロックを含み人為的な埋没を示す。時期：切り合い関係からは7期と考えられるがST111との関連性を重視するならば6期となる。

SD100・104 位置：北部III 図版69・71・73・74、第77図

検出：II A 2層上面において検出した。南からST103、SB68、SD109、SB153などを切りその他小土坑を切っている。規模・形状：全長113mで両端が調査区域外にかかる。軸方向はN136°Eで周辺遺構と比較して特異な方向である。南側では断面形が「W」字形を呈し、土層からも改修による流路の変更が認められた。溝の幅は最大で2mを越える。層位・時期：出土遺物は須恵器杯A・B、長頸壺、甕などが出土している。土器の様相からは5～6期であるが、切り合い関係から6期以降と考えられ、さらに新しくなる可能性がある。



第77図 SD100・104土層図

SD101 位置：北部II 図版67

検出：II A 2層上面において単独で検出された。西端でSD108と接し、東端は調査区域外へと延びる。規模・形状：東西方向に延びる溝で緩やかに蛇行する。確認された部分は7mで溝幅は30cm、掘り込みは「U」字状で、溝幅に比べて深くなっている。層位：暗褐色土の単層である。流水の痕跡は確認できなかったがSD108とは同時に存在した可能性が強いと考えられる。時期：出土遺物はなく時期は不明であるがSD108の存在した4～7期の時期のいずれかに存在したと考えられる。

SD102 位置：北部III 図版69

検出：II A 2層上面においてSB106に切られるように検出されたが、西端はSB106と接すると考えられたが検出できなかった。規模・形状：東西方向に延びる溝で全長20mで緩やかに「S」字状にカーブする。掘り込みは非常に浅く皿状の断面形である。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物は全く無く不明であるが、北に存在するSD103と規模・形状が似ており、またSB106に切られることから6期以前の遺構と考えられる。

SD103 位置：北部III 図版68・69・71

検出：II A 2層上面においてST101に切られるように検出された。規模・形状：SD109とほぼ並行するように延び、主軸方向をN36°～51°Eにとる。両端ともに十分確認することができなかった。SD109とも関連が強い。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物はないがST101に切られることから6期以前の遺構と考えられる。

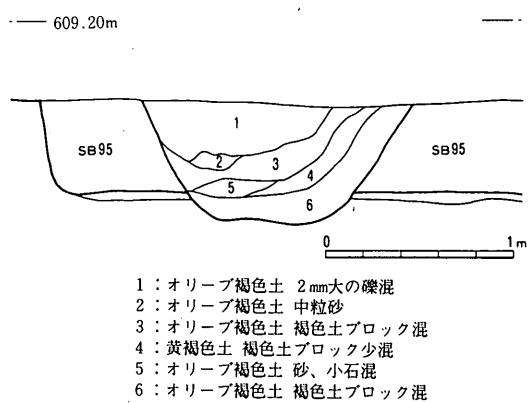
SD105 位置：北部III 図版68・70・72

検出：II A 2層上面において検出された。多数の土坑と切り合いを有す。規模・形状：全長36mであるが南端は調査区域外へと延びる。主軸をほぼ南北にとるが、南側ではやや西に振っている。溝の幅は50～100cmで、南側で若干高くなるがほぼ平坦なレベルとなっている。溝底の状況は土坑と切り合ってピット状の落

ち込みが多数見られ同時存在の可能性も否定できない。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。流水、埋め戻しの痕跡等は認められない。時期：須恵器杯A・Bが出土しており、1は『人人』の墨書がされている。出土遺物からは5期の様相と考えられる。所見：流水等の痕跡等も見られないことなどから土坑、溝址などが並行しており、これらの遺構と複合してある程度集落を画する性格を有すると考えられる。

SD106 位置：北部II 図版62・63・64・65、第78図、PL46

検出：II A 2層上面においてSB95・141・SD107を切るように検出された。規模・形状：全長56m、東西方向に直線状に延び、調査区を横断し、両端とも調査区域外に延びている。溝の幅は190～220cm、深さは約70cmと非常に大型の規模をもつ。断面形は逆台形を呈す。傾斜はわずかであるが東に向かって低くなる。層位：大きく3層に分層でき、3時期の流水面を確認した。また人為的埋没を示す層が2面あり改修を示すものと考えられ、構築時の規模を縮小しながら長期にわたって使用されたと考えられる。時期：遺物は非常に少なく須恵器甕類を中心として出土している。遺物の様相からは6期前後と考えられるがSD108との関係も考慮に入れなければならない、また覆土は新しい様相を示していることからSD108埋没後の所産と考えられる。



第78図 SD106土層実測図

SD107 位置：北部II 図版64

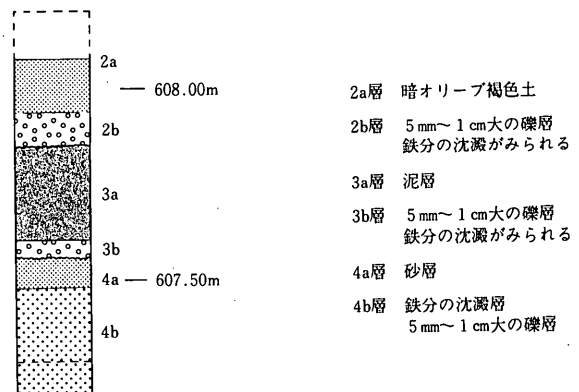
検出：II A 2層上面においてSD106に切られるように検出された。規模・形状：N60°E方向に延びる。約20mに亘って確認された。断面はすり鉢状を呈し、比較的浅い溝である。層位：暗褐色土の単層である。時期：遺物は全く出土していない。走向からSD103などとの関連が考えられる。

SD108 位置：北部II・III 図版64・65・66・67・68、第79～84、PL44・45

非常に大型の不整形な流路であり調査段階で自然の流路と考えたが、人為的な係わりが強く本項で扱うことにした。また、便宜的に大きく4区に分け遺物の取り上げ等分けて行なった。1区は西側の深み部分、3区は2つに分流して中洲状に残る部分、2区は1区と3区の間、4区は3区の隣で東側部分を指す。なお本址は西側部分で松本市調査分のSKS溝址1に続く。

検出：II A 2層上面において検出された。焼土の集中する部分が1区と3区に2カ所ずつ確認されたが、明確に掘り方をつかむことはできなかった。SD101・103・104・109・110など多数の流路と係わりをもつ。

規模・形状：全長約60m大きく蛇行しながらほぼ東西に延びる。幅は5～8m、最深部分は1区で110cm、最も浅い部分は2区で30cm程となっている。溝底は不規則な凸凹があり、部分的な深みがある。また鉄分の集積が激しく赤変しているところもある。



第79図 SD108 1区土層模式図

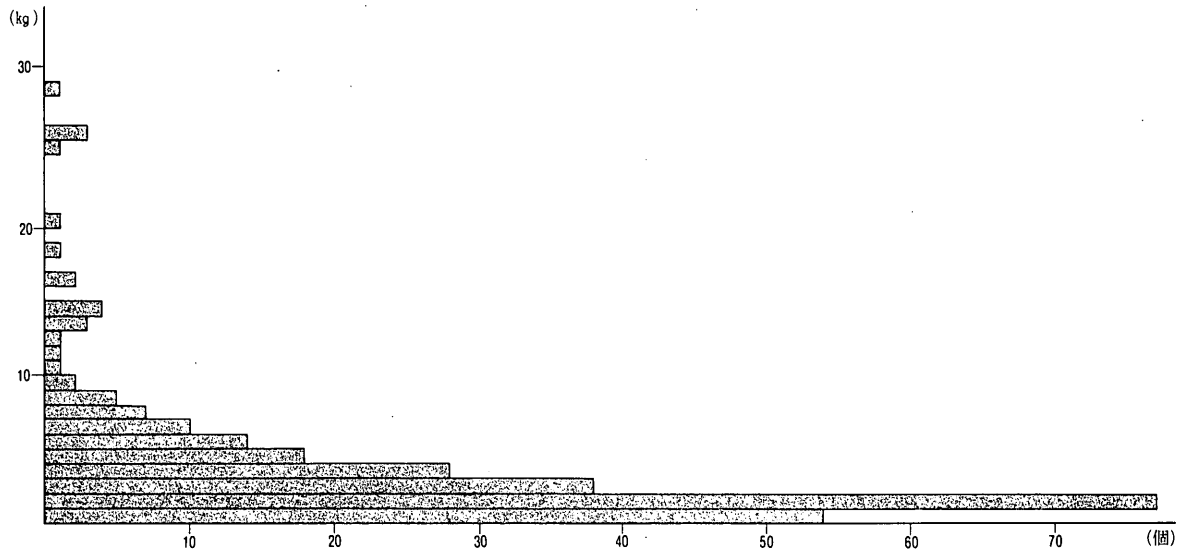
層位：大きく4層に分かれるが1層は2～4区にかけての一部しか存在しない。2層は全体に分布し、上層は砂質、下層は小豆大の砂礫混じりの砂層である。3・4層は1区の深み部分のみ存在する。3・4層はさらに上下2層に分層できそれぞれ泥層と小豆大の礫層のセットが確認された(第79図)。遺物のほとんど



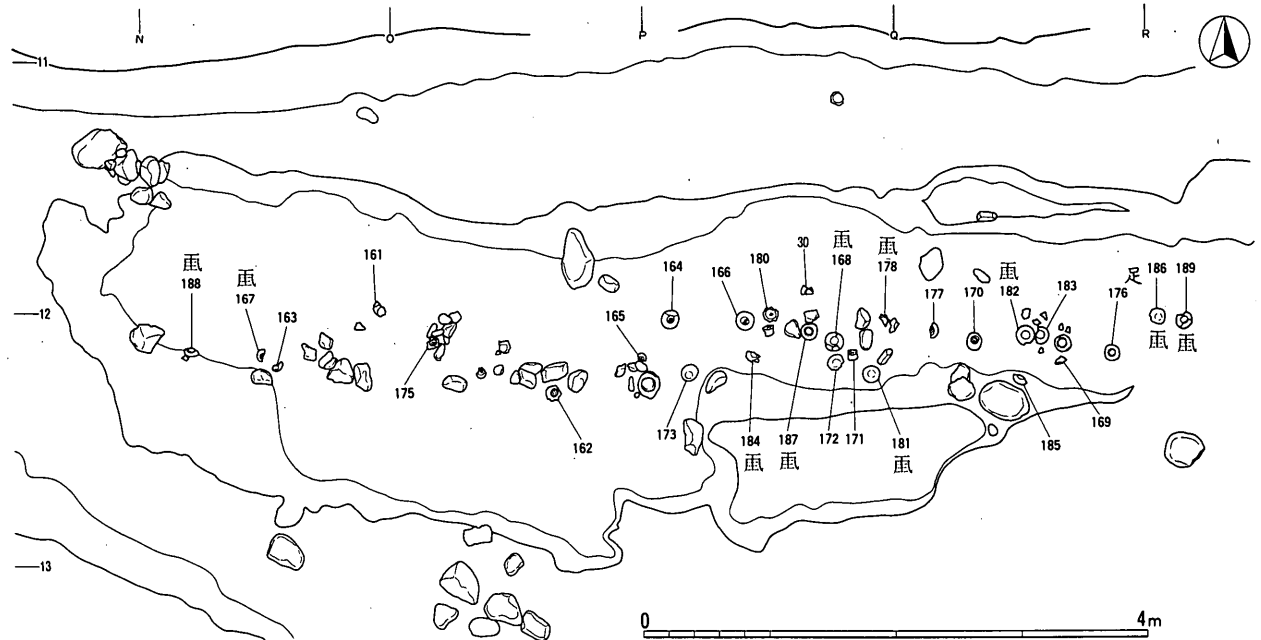
第80図 SD108 1区礫出土状況

は2・3層に集中するが特に2層下部にまとまっている。

遺物出土状況：遺物は土器がほとんどを占め若干の鉄製品が伴う。土器の総出土量は178kgと非常に多くの遺物が検出されている。住居址約30軒分に相当する量である。また土器の構成は非常に食器類が多く重量比で50%をこえる。個体数比では圧倒的な数になる。地区毎に出土状況をみることにする。1区：花崗岩の河川礫を中心とする礫の投棄に特徴がある。礫の分布は2つの深み部分に集中している。若干の自然礫の混入も考えられるが300個近い石が雑然と投げ込まれており、3kg以下の石が大部分であるが30kg近くの石も含まれている。集石は2層から3層にかけてみられ、ある程度浮いたものが多い。3層がある程度堆積した後に投棄が始まったと考えられる。一部自重により3層に沈下したものもみられる。主な出土遺物は土器、鉄製品、銭貨などで、28個体の墨書土器がある。土器は4区のなかでは一番多く全体の3分の1弱を占める。食器では須恵器杯A・Bを中心として、土師器杯C、黒色土器A杯Aが伴う。須恵器杯B(67)と蓋(63)が完形のまま並んで出土している。墨書土器は『人人』、『甗』、『草茂』などが出土しており、『人人』が多い。銭貨は「神功開寶」で2層中より出土している。2区：遺物量が一番少なく全体の10%に満たない。これは他の3区に比べて深さがないためもあるが、投棄場所が一定しており投棄場所から外れていたためとも考えられる。土器は須恵器甕・壺類を中心として、食器の杯類が伴う。土器の構成比も他の3区とは若干違い貯蔵具の割合が高くなっている。墨書土器も3点と少ない。主な出土遺物は須恵器杯Aなどで、2層上面より灰釉陶器の段皿が出土している。3区：本区の特徴は多量の土器の投棄にあり、多数の墨書土器が伴っている点である。本区は2つに分流しており、本流は大きく湾曲し、支



第81図 SD108 1区出土礫構成図

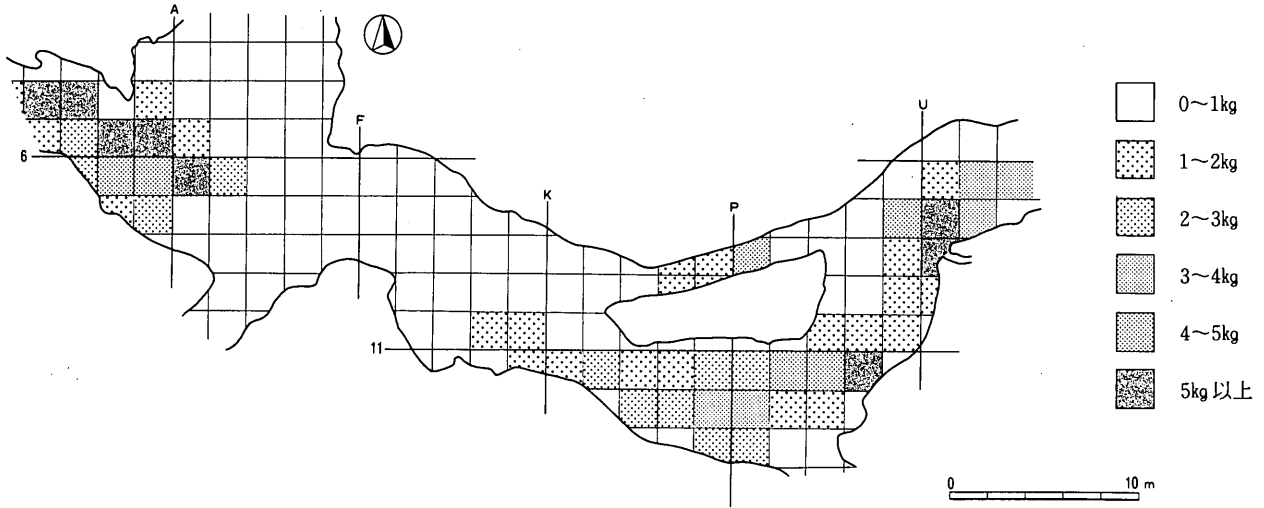


第82図 SD108 3区遺物出土状況図

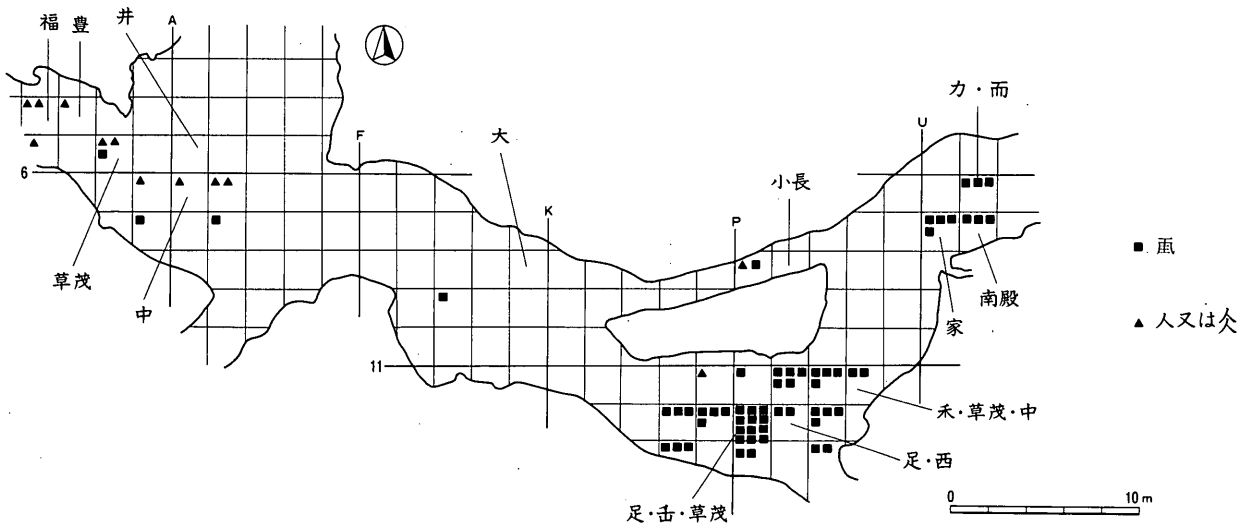
流はバイパス状に直線的につながっている。遺物は本流の湾曲している部分の段状に凹んでいる部分からの出土が多くなっている。墨書土器の出土状況も特異な状況を示し、完形、半完形品を多数ともなっている。第82図は出土状況を示しているが、土器は底部を上にした状況(墨書面を上にして)でほとんどが溝底あるいは2層下部から出土している。ほとんどの土器に同一の墨書『夙』が確認されているが、墨書されている土器はバラエティーに富んでいる。青灰色の須恵器、黒色土器A、黒く光沢のある黒色土器B、赤彩土器などがあり、あたかも土器の色を意識したような構成となっている。こうした状況は単なる投棄以上のものを感じさせる。本河川が集落内で重要な役割を担っていたことがわかる。3区の主な出土遺物は須恵器杯A、皿、黒色土器A杯A、椀、皿などが出土しており、若干の緑釉陶器、灰釉陶器を伴っている。墨書土器は『夙』のほか『草茂』『禾』『中』『而』『小長』『足』『西』などがある。4区：再び合流した部分で出土遺物はほぼ3区と同様な内容をもつ。土器の量もほぼ同量であるが、墨書土器の量が少ない。主な出土遺物は須恵器杯A、黒色土器A杯A・椀・皿などが出土しており、緑釉陶器、灰釉陶器が伴う。

墨書土器は『厷』が最も多いが、このほかに『家』『足』『力』『西』などが出土している。

時期：最も古いと思われる土器群はヘラ切りの須恵器杯Aなどであり、最も新しい土器群は灰釉陶器、黒色土器などである。集落が開始した頃には既に存在していたと考えられ、ほぼ全時期を通じて存在したと思われる。ただ、1区と3・4区とでは若干の時期差が感じられ、1区は5期を中心としており、3・4区は6～7期を中心としている。投棄場所あるいは投棄した集団の違いがみられる。これは墨書土器の分布からも肯首できる。『人々』は北部III地区を中心として分布しており、『厷』は北部I地区を中心とした分布を示す。本河川内では1区に前者が、3・4区に後者が分布しており本河川の使い分けがなされている(第84図)。



第83図 SD108遺物出土状況図

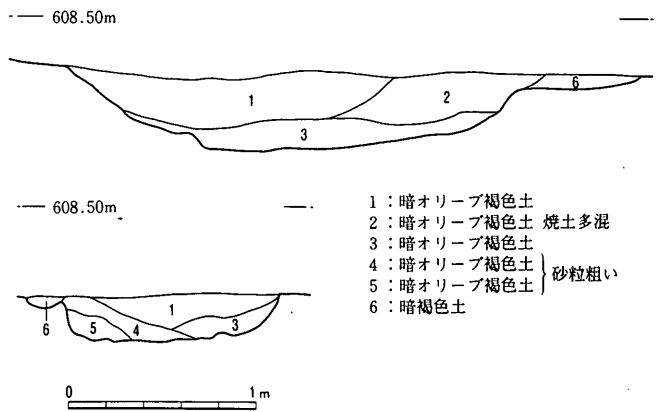


第84図 SD108墨書土器分布図

SD109 位置：北部III 図版69・71・73、第85図、PL49

検出：II A 2層上面においてSD100・104に切られ、SK1034を切るように検出された。規模・形状：全長約50mにわたり、SD108付近ではほぼ北方向に向くが、しだいにN35°E方向に走り、松本市調査分SK S 溝址1へとつながると思われる。溝はほぼ平坦であるが若干北東方向に低くなっている。溝の幅は約150cm、深さは20～40cm断面形はすり鉢状を呈す比較的大きな溝である。層位：ほぼ暗オリーブ褐色土の単層で粗い粒子であるが、部分的に暗灰色の粘質土が入る。溝底には鉄分の集積が認められ流水の痕跡が認められる。時期：SD108との接点の部分に比較的まとまっており、北半部分にもまとまりがみられた。出土遺物は土器を中心とするが、特記すべきものとして銅製銚帯(巡方・図版191-48)があり非常に残りが良いものであ

た。土器は須恵器杯A、甕類を中心として黒色土器A杯Aなどが伴う。土器の様相は5～6期を示しており、また、本址の南端部分は洪水性の氾濫に起因するものなのかは不明であるが砂層が広がっており、その砂層を切って6・7期のSB109・110が構築されていることなどにより5～6期の所産と考えられる。所見：本址はSD108から取水した人工の水路と考えられ、松本市調査区の笹賀地区に生活用水を供給するものと考えられる。



第85図 SD109土層図

SD110 位置：北部II 図版64

検出：II A 2層上面において検出されたがSD108と全く同様な検出状況であった。規模・形状：全長12mであるが非常に不整形で南端はSD111に切られて不明となる。層位：暗褐色土の単層であるがSD108の2層に近似する。時期：須恵器杯A・B、甕類を中心に出土している。5～6期の様相である。所見：SD108の支流と考えられ、形状・土層ともに人為的な痕跡は認められない。

SD111 位置：北部II 図版64

検出：II A 2層で検出したが、やや高いレベルから観察された。規模・形状：5mで西側が調査区域外に入る。ほぼ東西に延び、非常に浅い。層位：黒褐色土の単層である。時期：出土遺物が全く無く不明であるが覆土の様相から後世に下る可能性もある。

SD112・113 位置：北部II 図版68・70

検出：II A 2層上面でSB108に切られるように検出された。規模・形状：全長25m程になるが中央部をSB108に切られている。非常に浅い溝であり両端ともに確認できていない。層位：オリーブ褐色土の単層であるが、流水の痕跡はない。時期：遺物はないが、SB108に切られており6期以前と考えられる。

SD116 位置：北部I 図版51

検出：II A 2層上面において区画溝I・IIを連結するように検出された。規模・形状：全長3.5mで直線状にN67°Eに走る。深さは20cmで断面形は逆台形を呈す。時期：出土遺物は全く無いが区画溝と同時期かそれ以前と考えられる。

SD117 位置：北部I 図版50・51

検出：II A 2層、一部II F層の礫層上面においてSB115・117に切られるように検出された。規模・形状：全長18mで、N80°E方向に走るやや不整形な溝である。北部I地区の溝のほとんどがN10°(100°)E方向に走りかなり特異な存在である。溝の幅は130cm程度であるがSB115とSB116の間は広く250cmを測り、この部分に遺物が集中している。層位：上下2層に分かれ、1層は暗褐色土、2層は褐色土でいずれも炭化物を含んでいる。流水、埋め戻しを示す材料はない。時期：比較的まとまった出土遺物があり5～6期の様相を示す。ただしSB115との間に混乱がみられ、住居址に混入している遺物もある。主な出土遺物は須恵器杯A・B類を中心として黒色土器A杯Aなどが出土している。墨書土器は6点出土しており『厷』、『而』の2種類が出土している。また、7期の住居址に切られること、墨書土器等からも6期の様相を示し、区画溝I・IIと同一時期に存在したと考えられる。

SD118 位置：北部III 図版68・70

検出：II A 2層上面においてSD124を切るように検出されている。規模・形状：全長約7mで主軸方向をN6°Eにとり、ほぼSD105と並行しその間隔は約1mである。溝の幅は70～80cm、深さは30cm弱で、すり鉢

状の断面形を呈す。時期：遺物は少なく、わずかに黒色土器A杯A、須恵器杯Aなどがある。遺物からは5～6期と考えられる。

SD119 位置：北部III 図版68・70

検出：II A 2層上面においてSK1069に切られるように検出された。SK1069には須恵器甕底部が入っており本址が切られることが明らかである。規模・形状：全長5.7mで主軸方向をN10°EにとりほぼSD105・118などに並行している。幅40cm、深さ5～10cmと非常に浅い。皿状の断面を呈す。時期：黒色土器Aを中心に出土しており、杯A、皿などがあり、6～7期の様相を呈す。所見：本址の西約1mにやや不整な南北棟の建物址ST131があり、軸方向がわずかにずれるが、その雨落ち溝の可能性はある。

SD120 位置：北部II 図版62

検出：II A 2層上面においてSD123と切り合うように検出された。南端は試掘溝によって破壊されている。規模・形状：全長3mで幅25cm、非常に浅い溝である。軸方向はN10°Eで、SD122・123・溝址群IIIと同一の方向である。層位：暗褐色土の単層である。時期：遺物はなく不明であるが、溝址群IIIと同時期の可能性はある。

SD121 位置：北部III 図版72

検出：II A 2層上面においてSK1348に切られるように検出された。規模・形状：全長5mで南北に走る。幅50～70cm、深さ20cmである。層位：暗褐色土の単層である。時期：出土遺物がなく不明である。

SD122 位置：北部II 図版60・62

検出：II A 2層上面においてSB128に切られるように検出されたが、後の検討により住居址を切っていることが明らかになった。SB129との切り合いは十分つかめなかったが本址が切られると考えられる。また、SK801に切られている。規模・形状：全長12mでN10°E方向に走る。幅20～30cmで、非常に浅い。層位：暗褐色土の単層である。時期：遺物はないがSD120と同様に考えられる。

SD123 位置：北部II 図版60・62

検出：II A 2層上面においてSD120・122などと共に検出された。南端はトレンチによって破壊されている。規模・形状：全長9mで、ほぼ南北に走り、SD120と同様な形状である。層位：暗褐色土の単層である。時期：SD120と同様に考えられる。

SD124 位置：北部III 図版68・70

検出：II A 2層上面においてSD118に切られるように検出された。規模・形状：全長約6mほぼ南北方向に走る。溝幅は60cmで深さ20cmを測る。層位：暗褐色土の単層である。時期：出土遺物は細片であり少ないが、須恵器杯A、土師器甕などが出土しており5期の様相であるが確定的ではない。本址の性格を考えると東に1.5m程はなれて方向を揃えるST115との関連を考えなければならず、雨落ち溝の可能性はある。SD118との切り合い、土器様相からは5期あるいはそれ以前が考えられ、ST115と関連があれば5期の可能性はある。

SD128 位置：北部I 図版56・57

検出：II A 2層上面、一部II A 1層中において検出したがST129に切られ、西側部分は調査区域外に延びる。規模・形状：全長約55m区画内部の北端を画するようにN10°E方向に直線状に走るが一部分不整に湾曲している。途中でSD178と分流し、SD182と接している。溝の幅は30～40cm、深さ20cm、断面形は逆台形を呈す。東に傾斜している。層位：2層に分層したがいずれもオリーブ褐色土で同一母材である。恒常的な流水の痕跡は認められない。時期：出土遺物は須恵器杯A・B、高杯、黒色土器A杯A、灰陶陶器などが出土しており、『厩』の墨書土器も出土している。ST111・123などに並行して走り同時存在の可能性はある。これらの建物址は6～7期に該当し土器様相とも一致する。区画溝を切っており、比較的短期間の溝

である。

SD129 位置：北部 I 図版56

検出：II A 2層上面においてST129に切られるように検出された。規模・形状：全長6m、N104°E方向に走り、40～70cmの幅、15cmの深さである。層位：暗褐色土の単層である。時期：出土遺物はないが、7期の建物址に切られておりそれ以前の所産と考えられる。

SD130 位置：北部 I 図版54・56

検出：II A 2層上面においてSD138を切るように検出された。規模・形状：長さ3m、幅30cm深さ5cmの小規模の溝である。層位：暗褐色土の単層である。時期：須恵器蓋、墨書された灰釉陶器碗などが出土しており、7期の様相を示している。所見：ST129と1m程はなれて軸方向を揃えており、排水施設の一部と考えられるが、建物址よりやや短い。

SD131 位置：北部 I 図版54・56

検出：II A 2層上面においてSD52、SK600に切られるように検出された。西側は調査区域外となる。規模・形状：長さ5m、幅35cm、深さ10cm、N99°E方向に走る。層位：暗オリーブ褐色土にオリーブ褐色土ブロックが入る。人為的に埋められた痕跡を示す。時期：6～7期の建物と重複しており、それに切られるSK600が本址を切っていることから6期以前と考えられる。

SD132 位置：北部 I 図版54・56

検出：II A 2層上面においてST111、SK559・562に切られるように検出された。西側は調査区域外となる。規模・形状：長さ11m、幅40cm深さ5～10cmと非常に浅い。N103°E方向に走る。層位：SD131に近似する。混入する焼土粒がやや多い。人為的な埋め戻しと考えられる。時期：須恵器蓋が出土している。小片であるが黒色土器A、須恵器杯なども出土しており5～6期の様相である。

SD133 位置：北部 I 図版54・56

検出：II A 2層上面においてSK547・555に切られるように検出された。規模・形状：N102°E方向に走る溝で、長さ4m、幅30cm、深さ5cmを測る。層位：SD131と全く同一である。時期：出土遺物はなく不明であるが、ST111と同じ軸方向であり、底部分から80cm程離れている。ST111の施設の一部と考えれば6期、土層を重視すればSD131と同じく6期以前と考えられる。

SD134 位置：北部 I 図版54

検出：II A 2層上面においてSK548に切られるように検出された。西側部分が調査区域外となる。規模・形状：SD133と全く同じ形状である。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：黒色土器A、須恵器蓋などが出土しているが細片である。遺物から6期の所産と考えられる。

SD135 位置：北部 I 図版54

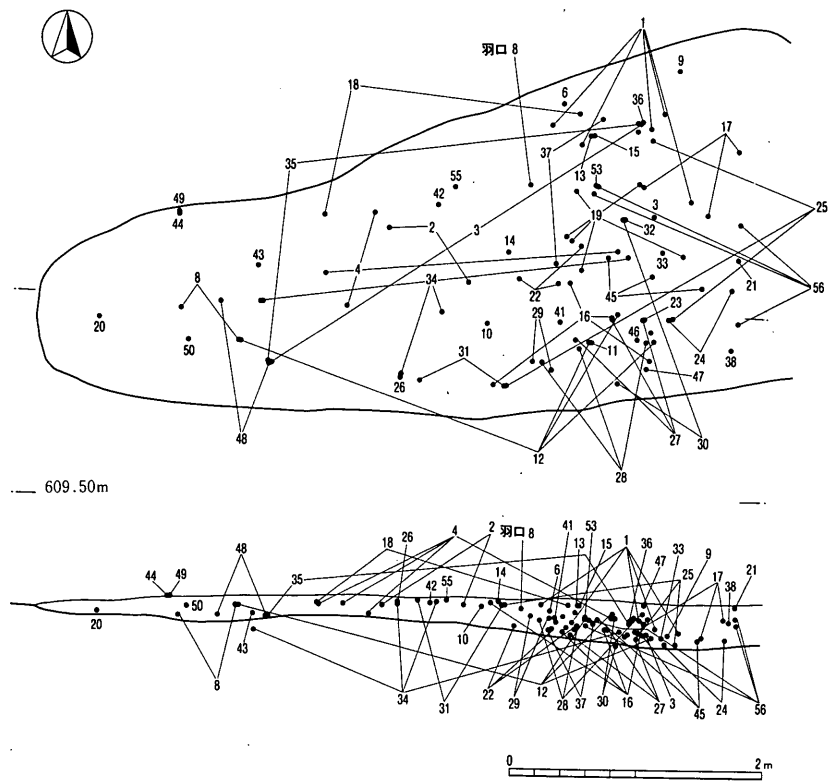
検出：II A 2層上面においてSB133、SK549・556に切られている。SB126との切り合いは十分確認できなかったが本址が切ると考えられる。規模・形状：SD131～134とは対照的に南北方向N10°Eに走る。確認できたのは13m、幅30～50cm、深さ10cm程度の掘り込みである。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：黒色土器Aを中心として須恵器が伴う。6～7期にかけての時期と考えられる。所見：SD171と同方向に走りSB97に付属する小規模な区画溝である可能性がある。

SD136 位置：北部 I 図版50

検出：II A 2層上面においてSK447に切られるように検出された。規模・形状：長さ3.7m、幅30cm、深さ5cmの小規模な溝である。SD171の延長上にあり軸方向もN7°Eでほぼ一致する。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物はなく不明であるが、SD171と同時期存在した可能性がある。

SD137 位置：北部 II 図版56、第86図

検出：II A 1層中において検出された。SB152に切られる。規模・形状：SB152に切られており全体を把握することができないが、確認できた長さは6m、幅は最大部分で270cm、深さは最深部で35cmである。平面形は不整形で溝というよりは細長い土坑といった形で断面形は鍋底状である。緩やかに東に向かって深くなる。溝底の状況は部分的に鉄分の集積がみられたり、還元作用によって暗灰黄色を呈していた。層位：オリブ褐色土砂質土で自然埋没である。ある程度の流水があったものと思われる。遺物出土状況：15kg近い遺物が出土している。ほぼ溝の全域からやや浮いた状態で出土している。出土している遺物はいずれも破片で投棄された状態を示し、広範囲に接合している。出土遺物は須恵器甕類がほとんどを占めるが、須恵器杯A・B、黒色土器A杯A・碗・皿などに赤彩土器皿、緑彩陶器碗、灰彩陶器碗・皿などが伴う。時期：6～7期にかけての様相を示す。これはSB152の土器様相よりも古く切り合い関係とも一致する。所見：遺物の出土状況などから、時期はやや後出するがSX30と同様な遺構と考えられる。



第86図 SD137遺物出土状況図

SD138 位置：北部 I 図版54

検出：II A 2層上面においてSD130に切られるように検出された。規模・形状：長さ1.7m、深さ20cm、N 5°E方向に走る小規模な溝である。層位：3層に分層できるがいずれもオリブ褐色土で2層は焼土層である。時期：出土遺物はないが、SD130に切られることから7期以前と考えられる。

SD139 位置：北部 I 図版54

検出：II A 2層上面においてSB135、SK519に切られるように検出された。SD171の続きの溝の可能性が高いがSB135に切られて不明なため別番号を与えた。規模・形状：確認できたのは4mほどであるが3m程さらに東に延びる。幅50cm深さ10cmで皿状の断面形である。N101°E方向に走り、SD171とは直角に交わる。層位：にぶい褐色土に焼土・炭化物を比較的多く含んでいる。時期：出土遺物は多くないがそのほとんどに墨書されている。主な遺物に黒色土器A杯、蓋、須恵器杯などがある。7期の住居址に切られており遺物の様相から6期から7期にかけての所産と考えられる。所見：SD170・171・136などと同時に存在したと考えられ、SB97を中心にその外郭を取り巻く小区画溝であろう。

SD140 位置：北部 I 図版54

検出：II A 2層上面においてSK543に切られるように検出された。規模・形状：長さ1.7m、幅15cm、深さ5cmと非常に小規模な溝である。N101°E方向に走る。層位：炭化物を多量に含む暗褐色土で褐色ブロックを含み、人為的埋没を示す。時期：出土遺物はないがSD131～134などと軸方向が一致し7期前後と考えられる。

SD141 位置：北部III 図版70

検出：II A 2層上面においてSK1150に切られるように検出された。規模・形状：長さ4.5m、幅は北側で70cm、南側でやや広く90cmを測る。溝底は平坦であるが部分的にピット状の落ち込みがみられる。N 5° E方向に走る。層位：暗オリーブ褐色土にオリーブ褐色土のブロックが入る。ピット状に落ち込んでいる部分ではブロックが顕著で、人為的埋没の可能性が高い。時期：遺物はなく不明である。所見：本址周辺には小土坑が集中しており建物が建つ可能性があり、その施設の一部の可能性も考えられる。

SD142 位置：北部III 図版71・73

検出：II A 2層上面においてSD100・104に切られるように検出された。規模・形状：SD109と並行するが3mと非常に短い。幅40cm、深さ5cm、断面皿状を呈す。時期：細片であるが黒色土器A、須恵器などの杯が出土しており、5期頃と考えられるが確定はできない。

SD143 位置：北部III 図版73

検出：II A 2層上面においてSK1395・1398に切られ、SK1393を切る。規模・形状：長さ4m、幅40cm、深さ5cm、SD100・104と並行するが、わずかに湾曲する。時期：出土遺物はなく切り合い関係からも判断できない。

SD144 位置：北部III 図版75

検出：II A 2層上面においてSK1482を切り、ST107と重複している。規模・形状：長さ3m、幅50cm、深さ30cm、N 5° E方向に直線的に延びる。層位：3層に分層したが1・3層が暗オリーブ褐色土、2層が暗灰黄色土で自然埋没を示す。時期：須恵器杯の細片が出土しているのみである。5期を前後する時期と考えられるが、ST107との関係は不明である。

SD145 位置：北部III 図版77

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ4.5m、幅40cm、深さ5cmの小規模で不整形な溝である。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物はなく不明である。

SD146 位置：北部III 図版73・74・75

検出：II A 2層上面においてSD147と切り合うように検出された。規模・形状：全長約30mであるが南東部分で2度の中断があるが、規模、形状ともに似ているため同一の溝として扱った。また北西部分は3条の溝が合体している。SD100・104とほぼ並行し、N125° E方向に走る。溝の幅は北東部分では130～250cmと広く、南東部分では50cm程になっている。深さは10～25cmを測る。層位：暗灰黄色を主体としオリーブ褐色土が粒状に入る。溝底には鉄分の集積が部分的に観察された。ある程度の滞水が考えられる。時期：出土遺物は須恵器杯、甕などの細片であり時期決定が困難である。ただ本址はSD100・104並行しておりほぼ同時期と考えられる。

SD147 位置：北部III 図版74・77

検出：II A 2層上面においてSD146に接するように検出された。規模・形状：長さ14m、幅50～100cm、深さ20cmである。断面すり鉢状を呈す。SD100・104と直交し、N50° E方向に直線的に走る。層位：暗褐色土から暗灰色を呈し、灰白色粘土粒が入る。溝底に鉄分の集積が部分的に認められた。基本的にSD146と共通する。時期：墨書された須恵器杯が1点出土している。墨書は『人』で、5～6期に集中的にみられるものであり、本址も6期を前後する時期に帰属するものと考えられる。

SD148 位置：北部III 図版74

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ2.7m、幅50cm、深さ10cm、断面台形を呈す。ほぼ南北方向に主軸をとるが南側で緩やかにカーブする。層位：にぶい黄褐色土の単層である。時期：出土遺物はなく不明である。

SD149 位置：北部III 図版76・79

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ4.2m、幅40cm、深さ10cm、東西方向に延びる小規模な溝である。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物はなく不明である。

SD150 位置：北部III 図版72・74

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ約5m、幅50cm、深さ10cmでわずかに主軸を東に振りながら南北に延びる。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物は全く無く時期は不明である。

SD151 位置：北部III 図版70・72

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ3.2m、幅50cm、深さ10cm、ほぼ南北方向に延びる小規模な溝である。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：須恵器杯A、蓋などが出土している。5期の様相を示すが出土量が少なく確定はできない。所見：本址の東側にピット群があり、建物址として成立する可能性もあり、これらに付属する遺構とも考えられる。

SD152 位置：北部III 図版74

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ2.7m、幅50cm、深さ20cmを測り、N32°E方向に延びる。軸方向が他の遺構とはやや異なる溝状の落ち込みである。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物がなく不明である。

SD163 位置：北部II 図版58・61

検出：II A 2層上面において検出された。北端はSB85と接しており住居址を切ると考えたが検出できなかった。規模・形状：主軸をN5°Eとわずかに振るが南北方向に延び、南側部分において分流し、一方は直角に曲がり、他方はそのまま延びSX30に接する。長さは南北方向に約20m、東西方向に8m延びる。60～100cmの幅をもち、深さは15cmで部分的には凸凹はあるが全体としては平坦である。層位：暗褐色土の単層である。時期：出土遺物は少ないが黒色土器A杯、皿、須恵器杯Aなどが出土しており、『厷』墨書も出土している。これらより6期から7期にかけての時期と考えられる。所見：本址の西に広がる溝址群IIIとほぼ並行しておりその一部を構成すると考えられる。

SD167・168 位置：北部II 図版62・63

検出：II A 2層上面において単独で並行する2条の落ち込みを検出した。規模・形状：両者ともに長さ2.6m、幅20cm、深さ5～10cmの非常に小さな溝である。層位：暗褐色土の単層である。時期：出土遺物もなく不明である。

SD169 位置：北部II 図版63

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ1.8m、幅20cm、深さ10cmと非常に小規模であり、SD167・168と近似する。層位：暗褐色土の単層である。時期：出土遺物がなく不明である。

SD170・171 位置：北部I 図版54・55・56・57

検出：II A 2層上面において検出された。SB93・135に切られ、SB148を切る。SK579・926を切り、SK534に切られる。東西部分をSD170、南北部分をSD171とした。規模・形状：東西方向に33m、南北方向に15m延び、幅はほぼ70cmで平均している。深さは10～40cmと幅があり、東西部分の西側が一番深い。断面は逆台形を呈す。区画溝I、SD128などに並行し東西方向はN99°E、南北方向はN10°Eに直線的に延びる。層位：暗オリーブ褐色土の単層で、焼土・炭化物が散点する。遺物出土状況：ほぼ全域から出土しているが出土量は多くない。主な出土遺物は黒色土器A鉢・杯A・耳皿、須恵器杯A・盤、灰釉陶器椀などが出土しており、墨書土器も『厷』、『而』などが出土している。時期：出土遺物より6期から7期にかけての遺構と考えられる。所見：SB97を中心とその周囲には東側に大きな区画溝が2条あり、北から西側には小規

模な溝が2条巡っている。その内帯を区画するのが本址であり、SD136・139と共に機能を果たしたと考えられ、西側に開口部がみられる。

SD173 位置：北部II 図版65

検出：II A 2層上面において単独で検出された。SD108と接しており途中で分流しており、北側をSD173、南側をSD174とした。SD173の東側部分は調査区域外に延びる。規模・形状：東西方向に直線的に延びる溝で長さ35m、幅90cm、深さ40cm、断面は逆台形を呈し、人為的な形態である。溝底はほぼ平坦であり、わずかに東に傾斜している。湾曲している部分から取水しているが、SD108の取水部分には特別な施設はみられない。SD108と取水部分との差は40cm程ある。層位：4層に分層した。砂粒は下層に行くに従って粗くなり、最下層には鉄分の集積が見られ、明らかに流水の痕跡が確認できた。時期：遺物は取水部分に集中するが、出土遺物は少なく黒色土器A、須恵器杯Aなどが出土しており、6期の様相を示す。

SD174 位置：北部II 図版65

検出：SD173と共に検出された。南東部分は十分に検出できなかった。規模・形状：長さ13m、幅100cm、深さ20cmで、断面すり鉢状を呈す。N112°E方向に延びる。取水部分はSD173と共通するがSD173のほうが10cm程深い。層位：SD173の上層と共通し、同時に存在したと考えられる。時期：SD173と同様である。

SD175 位置：北部II 図版59・61・63・65

検出：II A 2層上面においてST124を切るように検出された。規模・形状：長さ30m、幅35～50cm、深さ5～10cmでN5°E方向に直線的に延びる。南側が若干高い。層位：にぶい黄褐色土の単層である。時期：切り合い関係などから比較的新しい遺構と考えられるが時期の特定はできない。

SD176 位置：北部II 図版57・59

検出：II A 2層上面、一部II A 1層中において検出した。SB149・150、区画溝I・IIIなど全ての遺構を切っている。北側部分は調査区域外に延びる。規模・形状：長さ約23m、幅は北側で狭く50cm、南側では100cmと幅が広くなり、掘り込みも北側では「V」字状、南側はすり鉢状を呈している。溝底はわずかな凸凹は認められるが高低差は認められない。層位：暗オリーブ褐色土の単層で自然埋没である。時期：黒色土器A杯、灰釉陶器碗の細片が出土しており7期の所産と考えられ、切り合い関係とも符合する。

SD178 位置：北部I 図版56・57

検出：II A 2層上面においてSD182に切られ、ST123と重複する。規模・形状：SD128と分流しやがて平行に延びる。長さ17m、幅40cm、深さ5cm、断面皿状を呈す小規模な溝である。東端はST123付近で立ち上がる。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：SD128とほぼ同時期と考えられるがST123との関係で同時存在は考えられず、SD182などとの関係で建物址の構築以前の遺構と考えられる。

SD181 位置：北部II 図版61

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長さ4m、幅30cm前後で、深さ10cmを測る小規模な溝状の落ち込みである。N7°E方向に延びる。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物は黒色土器Aのみで3個体確認されている。時期の特定は難しいが6～7期の所産と考えられる。

SD182 位置：北部I 図版54・56

検出：II A 2層上面においてSD128とSD170を連結するように検出されSK652を切る。規模・形状：長さ約6m、幅50cm、深さ30cmと比較的深い。「U」字状の断面形を呈す。層位：暗オリーブ褐色土の単層である。溝底には鉄分の集積がみられた。時期：SD128・170などと同時期と考えられる。

SD183 位置：北部I 図版57

検出：II A 2層上面においてSD182と同規模の溝が確認された。規模・形状：南側はSD170と接するが、北側はSD128付近まで延びるが接してはいない。長さ6m、幅40cm、深さ5cmを測る。N7°E方向に走るが

これはST123の軸方向と一致する。ST123との間隔は約1m程度である。層位：オリーブ褐色土の単層である。時期：出土遺物でないがST123と同時期と考えられ、7期の所産と考えられる。所見：ST123は3方に溝を配しており、本址も排水施設の一部と考えられる。

(3) 溝址群

溝址群 I

位置：南部 II・III

図版30～39、第87図

南部III地区の南約50mの範囲に長さ5m前後、幅20cm前後の同規模の数条ずつ検出した。これらをまとめて溝址群Iとした。検出：II A 2層上面において検出された。規模・形状：長いものは9m、短いものは1mと幅があるが4m程度のものが多い。溝と溝の間隔は1.5m前後で一定している。主軸の方向によって4グループに分けることができる。

N 0°E W SD 8・21・22

N 30°E SD 24・25・28・31・32・35

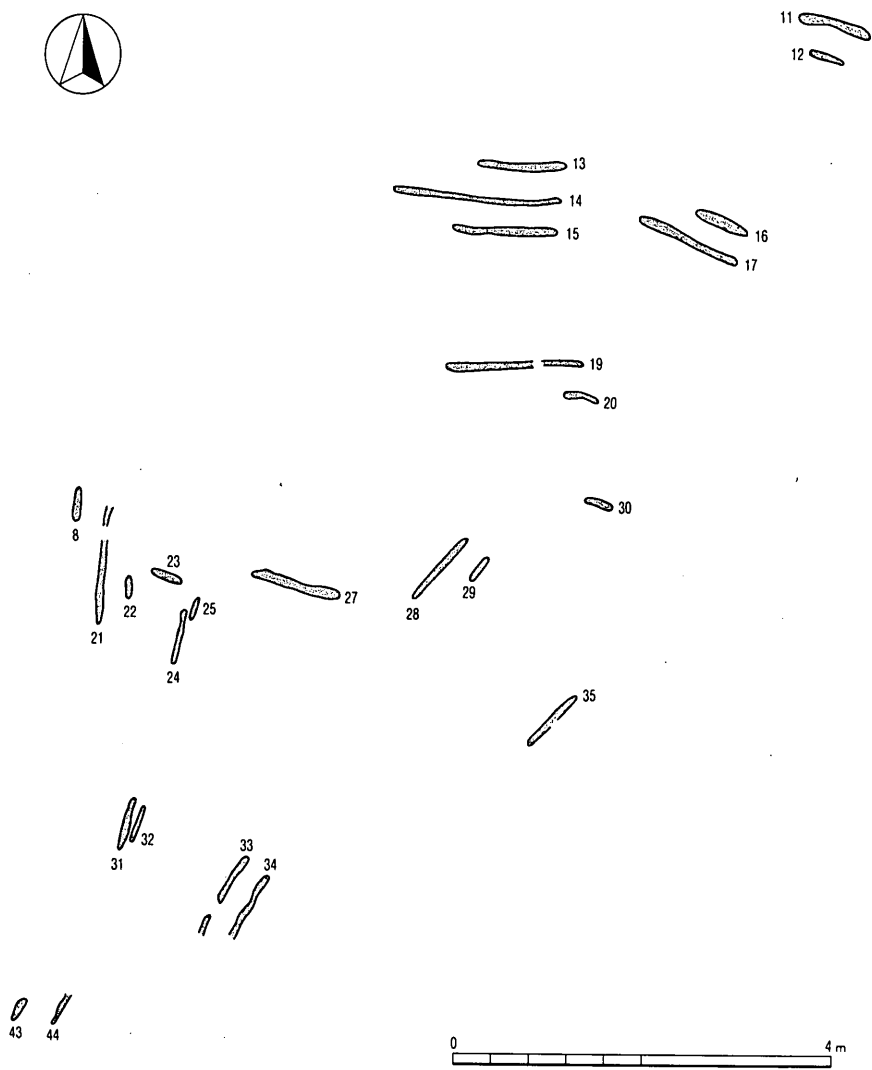
N 90°E SD 13・14・15・19・20・26

N 110°E SD 11・12・16・17・27・30

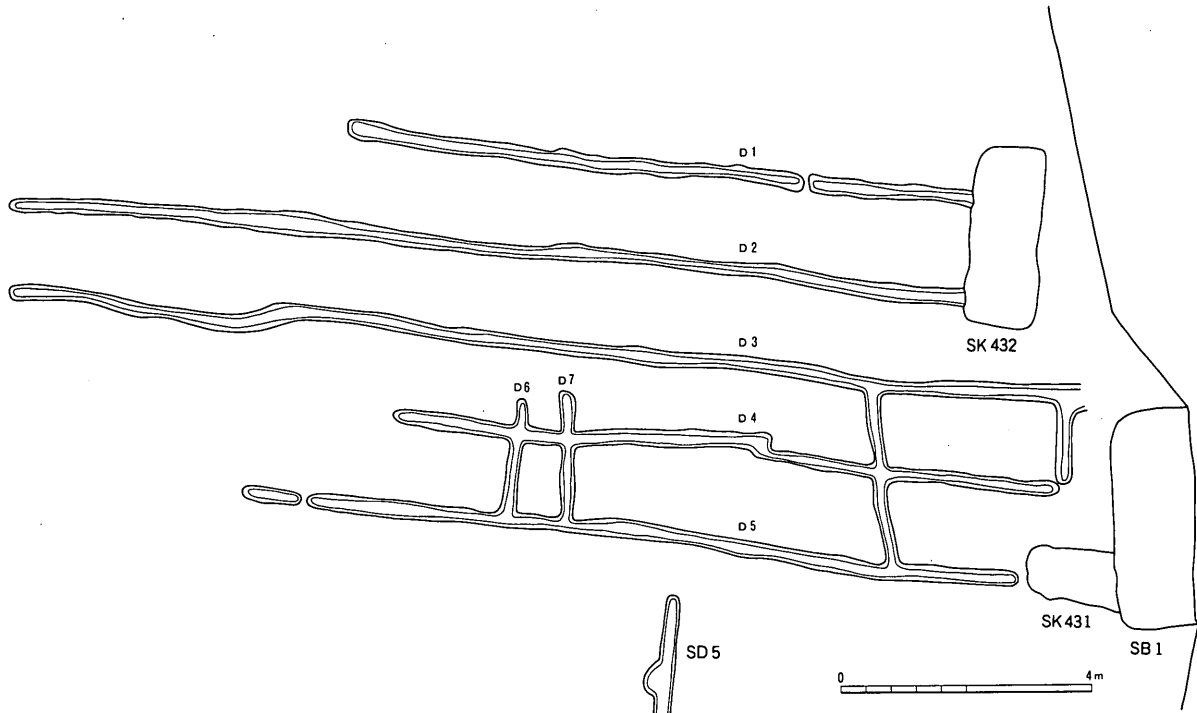
層位：黒褐色土に褐色土粒が含まれる。人為的な様相である。時期：出土遺物がなく不明である。同様な遺構で近世の所産と考えられるSN 1が検出されているが、検出された面は古代面であり古代の遺構と考えられる。所見：単独では機能を果たすことが困難と考えられ、複数の溝状の遺構が等間隔に集合したと考えられ、畝に似ているため畝址となる可能性がある。

溝址群 II 位置：南部III 図版46、第88図

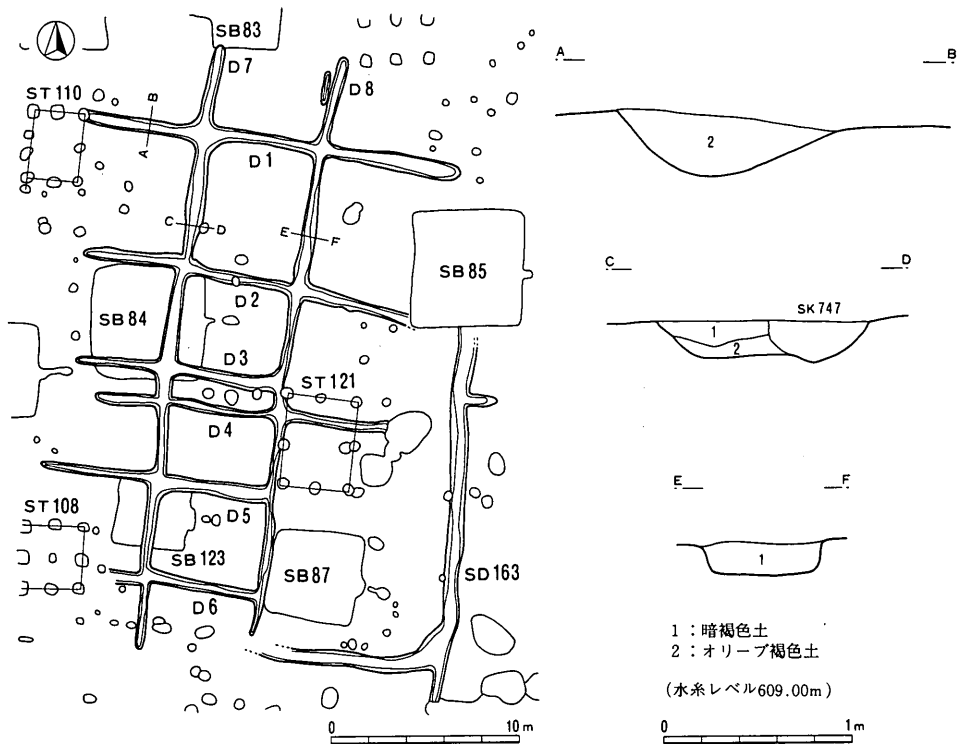
検出：東西約20m、南北約10mの範囲に細長い溝状の落ち込みが検出された。規模・形状：東西方向に7条、南北方向に5条が走る。長さは北から10・15・11・12・5・5m、南北方向は短く1～2mで東西方向に走る溝を連結する。幅は15cm程度で一定しており、深さも10cmと非常に浅い。断面は逆台形を呈す。層位：暗褐色土に黄褐色土粒が入る。人為的な様相である。時期：出土遺物はなく不明であるが、SB 1に切られているため7期以前である。



第87図 溝址群 I 配置図



第88図 溝址群Ⅱ実測図



第89図 溝址群Ⅲ実測図

溝址群Ⅲ 位置：北部Ⅱ 図版58～63、第89図

検出：ⅡA 2層上面において検出された。SB83・84・87・123を切り、ST121および3基の土坑に切られる。規模・形状：東西20m、南北30mに溝が等間隔に並ぶ。南北方向、東西方向の溝ともに10度ほど振っている。東西方向に6条、南北方向に2条走り、SD163も本址に伴う可能性がある。6～7mの区画をつくる

ように溝址が配列するが、南側部分で不規則となるところがある。それぞれの溝は規模・形状が近似し幅50～70cm、深さ20cm前後でありすり鉢状の断面形を呈す。層位：暗褐色土の単層であるが、一部オリーブ褐色土を呈するところもある。流水の痕跡は全くなく自然堆積を示す。時期：遺物は少量であるが黒色土器A杯、須恵器杯などが出土しており、6期の様相を示している。これは4～6期にかけての住居址を切ることと符合し、6～7期の短期間のうちに営まれた遺構と考えられる。所見：一見水田址のようであるが畦畔ではなく溝である。区画内部に建物等はなく全く機能については不明である。生産址関係の遺構であろうか。

5 土 坑

(1) 分類

古代の土坑は総数で1547基の土坑が検出されている。本遺跡で検出された土坑は以下のように分類される(第90図、第1表)。それによるとII群土坑が圧倒的に多く全体の85%以上を占め、規模では80%が65cm以下の小型の土坑で占められる。これら小型の土坑が集中するのは南部地区ではIII地区の東側、北部地区ではI地区西側、III地区南側である。これら小型の土坑は柱穴あるいはそれに類似する機能が推定され墓墳的要素をもつものはきわめて少ない。

属性で見ると次のようなものがある。

- ・土坑の内壁が焼けて焼土化している

I 群	1 種	SK1294	3 種	SK658・703・705・713・724
	2 種	SK59・903・993・996・1338	4 種	SK941

- ・埋納物を含む土坑

銭貨	SK490	土器	SK835
----	-------	----	-------

- ・焼土を含む大型土坑

SK833・834・905・1003・1034・1535・1536・1537

- ・焼土・炭化物を多量に出土した土坑

SK580

- ・須恵器甕の出土している土坑

原形を留めているもの SK566・1069

破片の形で SK590・612

- ・鉄製品を出土した土坑

SK323・440・468・531・609・626・652・1348

- ・銅製品を出土した土坑

SK565・623

- ・鉄滓を多量に出土した土坑

SK519・541・684

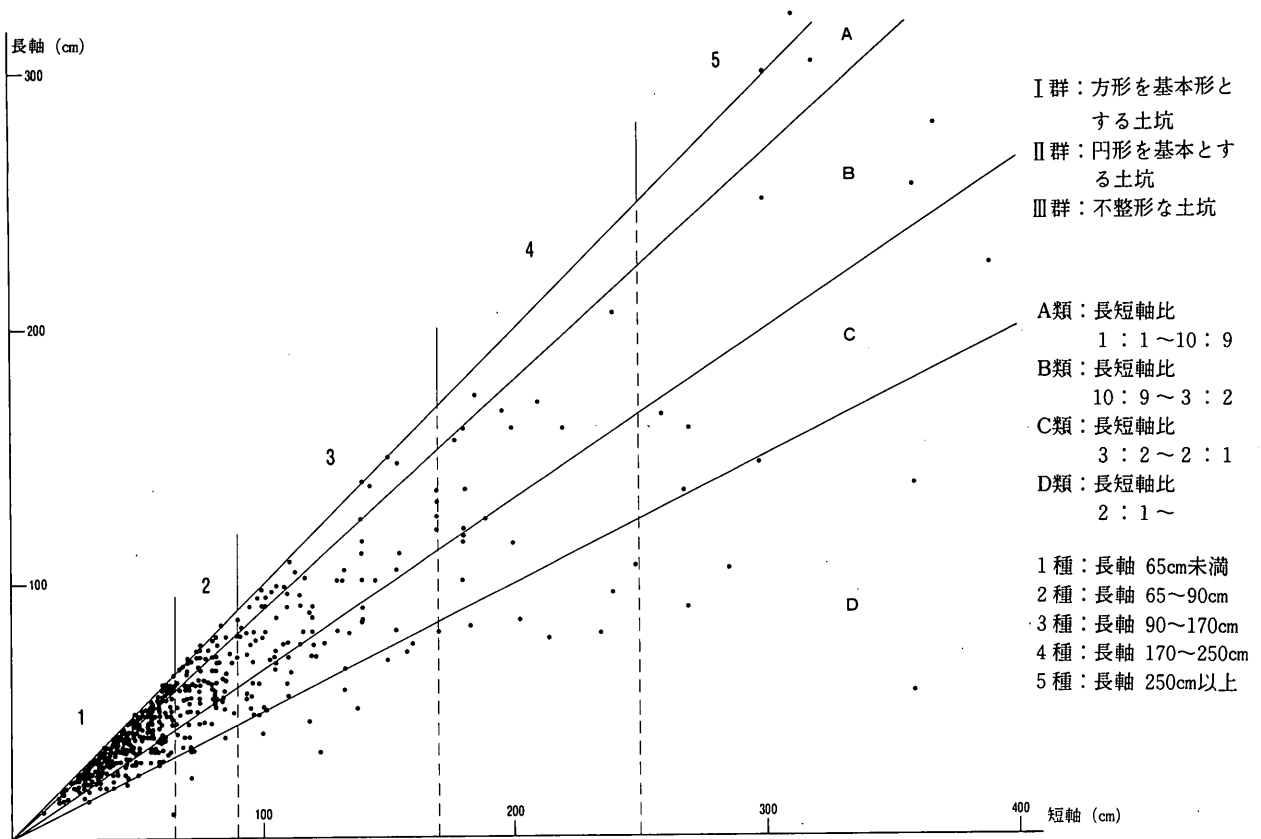
- ・羽口の出土した土坑

SK557・684

- ・墨書土器の出土した土坑

SK435・436・466・491・534・628・910

焼痕を伴う土坑は最小のもので60cm、最大のものでも150cmと比較的小型のものが多い。形状は長方形と方形のものが見られる。覆土の状況も共通しており土坑底部分に炭化物層をもっている。SD108を挟む部分



第90図 古代土坑法量分布図

形態	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	不明	合計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5			
I	47	13	2	0	1	63	46	14	7	4	2	73	5	6	8	1	2	22	0	0	1	1	2	4	26	188
II	577	28	8	1	0	614	407	65	32	5	0	509	39	18	13	0	1	71	0	2	8	4	3	17	85	1296
III	3	2	0	0	0	5	7	5	6	4	3	25	1	1	2	2	1	7	0	2	5	2	2	11	4	52
計	627	43	10	1	1	682	460	84	45	13	5	607	45	25	23	3	4	100	0	4	14	7	7	32	115	1536

第1表 古代土坑分類表

に分布している。これらのほかに大型で不整形な土坑があり大量の焼土をとまなう一群がありこれもSD108の周辺に分布している。

遺物を伴う土坑は大小様々の形態があり一括できないが分布は北部I地区、つまり区画内部に集中している。以下主な土坑のみ記述する。

(2) I群土坑

SK460 (IC5土坑) 位置：北部I 図版51

検出：II F層中において単独で検出された。規模・形状：長方形を基本としているが中央部分がくびれ不整形である。III群土坑に属すと考える方が正しいとも思える。長軸268cm、短軸137cmで、断面船底状を呈す。形状、断面ともに簡易的な掘り方である。層位：黒褐色土の単層で焼礫が多量に入る。時期：黒色土器皿、緑釉陶器碗などが出土しており、出土遺物から6～7期にかけての所産と考えられる。所見：SK435・436・437・459と共にSD117に平行する。時期がやや先行するSK435を除き、ほぼ同時期と考えられる。出土遺物は被熱により変形しており同様な遺物は区画溝Iからも出土しており、特に緑釉陶器(区画

溝I-17)は区画溝Iと接合しており、区画の廃絶に関連した遺構と考えられる。

SK531(ID3土坑) 位置：北部I 図版54、第91図

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：主軸をN103°Eにとる。長軸150cm、短軸70cmのやや不整な隅丸長方形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底は西側がテラス状に高く東側が一段低い。層位：褐色土の単層で人為的埋没を示す痕跡は認められない。遺物出土状況：鉄製の鎌(図版189-3)が土坑ほぼ中央の覆土中から出土している。時期：出土土器がなく不明である。

SK541(IB2土坑) 位置：北部I 図版54、第91図

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：長軸75cm、短軸53cmの隅丸方形を呈し、断面はすり鉢状である。層位：2層に分層したが1層は炭化物、灰層に鉄滓粒が入る。2層は鉄滓粒が壁部分に集中している。時期：遺物がなく不明である。所見：鉄滓粒の出土状況など鍛冶址の一部と考えられる。

SK580(IC4土坑) 位置：北部I 図版54、第91図、PL48

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：主軸を東西にとる。長軸190cm、短軸120cmの隅丸長方形を呈す。断面は逆台形で、深さ90cmと深い。層位：15層に分かれた。焼土・炭化物が顕著に認められ互層が続く。遺物出土状況：遺物は比較的まとまって出土しているが破片の状態で出土している。焼土が集中する10層を中心として出土している。主な出土遺物に須恵器杯B(8・9)・皿(10)・高杯(16)・灰釉陶器碗(11・12)・段皿(13)、赤彩土器皿(14)などが出土している。特にSK580-16の高杯はSX30、ST111と接合関係がある。時期：出土遺物から6期から7期にかけての様相を示し、SX30との接合関係を考えると6期の後半とすることができる。所見：複数の焚火の痕跡が認められること、遺物が破損していることなどを考えると墓墳としての性格は考え難く、短期間に連続的に火を焚いたと考えられ、ゴミ捨て穴としての性格が想定できる。

SK703(IC3土坑) 位置：北部II 図版59、第91図、PL48

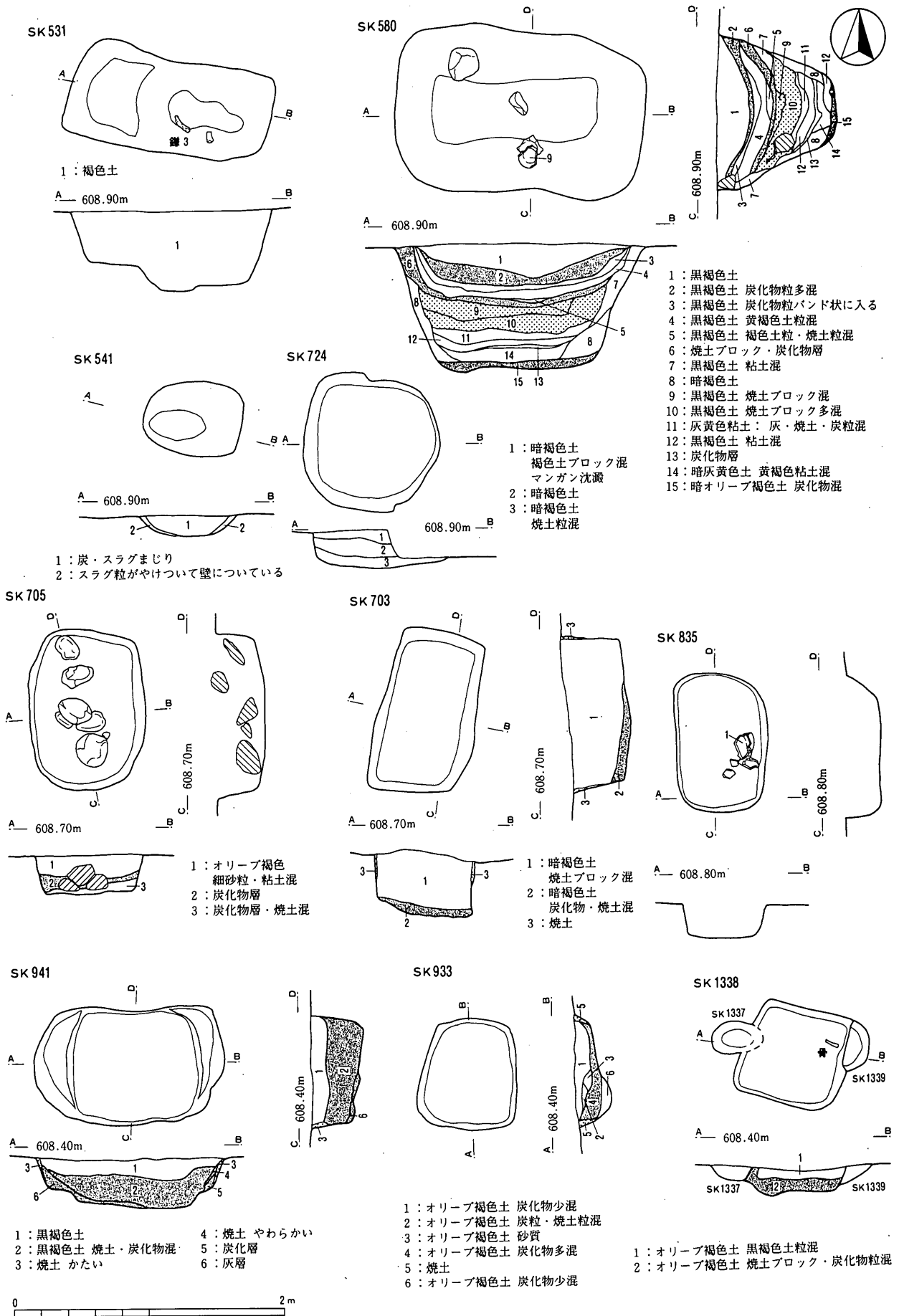
検出：SX30を切るように検出された。硬化した焼土が検出されカマドの一部と考えたが焼土が方形に回ることが確認され土坑とした。規模・形状：主軸をN15°Eにとる。長軸120cm、短軸75cmの端正な長方形を呈す。壁は直に立ち上がり断面箱形を呈す。側壁は坑底より20cm程の上部が被熱により赤変し、硬化している。構造物等はない。層位：2層に分かれ、2層は5cm程の炭化物層である。時期：出土遺物は須恵器甕の細片で時期を知ることはできないが、6期の遺構であるSX30を切っており6期以降である。所見：土坑内において焚火の痕跡があること、形状が非常に整っていることなどから火葬施設あるいは埋葬施設の可能性もある。

SK705(IB3土坑) 位置：北部II 図版59、第91図、PL48

検出：II A 2層上面において単独で検出された。規模・形状：主軸をほぼ南北にとる。長軸120cm、短軸87cmの隅丸長方形を呈す。壁は直に立ち上がり、断面タライ状を呈す。土坑中央、1層下部から2層にかけて人頭大の礫が直線状に検出された。礫質は花崗岩4、硬砂岩3で構成されている。層位：3層からなり、1層はオリーブ褐色土、2層炭化物層、3層炭化物・焼土層である。1層は人為埋没を示す痕跡はないが礫の存在などから人為埋没と考えられる。2・3層が土坑内で火を焚いた痕跡を示し、続いて1層を埋め戻している。時期：出土遺物は全くなく不明であるが周辺遺構から6期以降と考えられる。所見：遺物などはないが、礫、焚火の痕跡などにより墓墳の可能性が高い。

SK724(IA3土坑) 位置：北部II 図版60、第91図

検出：II A 2層上面において単独で検出したが、一部をトレンチにより破壊されている。規模・形状：長軸・短軸共に100cmの隅丸方形を呈す。断面タライ状を呈し、壁は直に立ち上がる。壁の一部には焼土化



第91図 I群土坑実測図

して硬化した部分が認められ、坑内で火を焚いたと考えられる。遺物はほとんど無く土師器甕の細片が3点出土した。層位：3層に分けられ、暗褐色土を基調とするが、1層は人為埋没を示し、3層には大量に焼土が入る。

SK833 (IA5土坑) 位置：北部II 図版62

検出：II A 2層上面において焼土に集中が見られ方形の落ち込みが確認された。SB140に切られる。規模・形状：やや不整形な300cm程の隅丸方形を呈す。掘り込みは浅く、中央にむかって緩やかに傾斜している。中央部分に焼土の集中が見られる。層位：5層に分けられるが基本的にはオリーブ褐色土を基調とし、焼土ブロックを含んでいる。特に2層で顕著である。熱変により風化した花崗岩粒が混入している。時期：出土遺物は須恵器杯、甕、土師器甕などが出土しており、5期の住居址に切られることなどから4期と考えられる。所見：竪穴住居址の可能性も考えられたが床面等もなくプランも不整形であり別の機能が考えられる。

SK834 (IA5土坑) 位置：北部II 図版62

検出：SK833と同様に検出された。SB140、SK835に切られる。規模・形状：長軸320cm、短軸300cmのほぼ方形を呈するがやや不整である。中央部分が深く周囲にむかって緩やかに立ち上がり壁ははつきりしない。西側部分に焼土の集中が見られる。層位：2層からなり暗褐色土を基調としている。熱変により風化した花崗岩粒が入る。2層には焼土が顕著に認められる。時期：出土遺物に須恵器杯、土師器甕などがあり、4期と考えられる。所見：SK833と規模・形状、覆土などが類似し同時期に存在したと考えられる。SB130・138と関係があると考えられる。

SK835 (IB3土坑) 位置：北部II 図版62、第91図、PL48

検出：SK834を精査中に本址がSK834を切るよう検出した。規模・形状：主軸をほぼ南北にとる。長軸105cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈す。遺物出土状況：遺物は少ないが平瓶の大破片が東壁下・坑底に接するように出土している。層位：SK834の覆土がそのままは入り込んでいるため人為埋没の痕跡は示していない。時期：出土した灰釉陶器平瓶により7期と考えられる。所見：平瓶の大破片のほかに同一個体の破片は出土しておらず破損した状態で意識的に入れられたものと考えられる。

SK941 (IC3土坑) 位置北部II・III 図版67、第91図

検出：自然流路SD108をわずかに切るように検出した。規模・形状：主軸をほぼ東西にとる。長軸140cm、単軸85cmの隅丸長方形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁の上端部分の一部を除いて被熱により赤変し硬化している。坑底は東西両端が段状に高くなる。層位：5層に分層したが大きく上下2層に分けることができる。上層は暗褐色土で、下層は暗褐色土に多量の炭化物を含む。特に坑底から側壁にかけては炭化物が顕著に認められる。時期：出土遺物は全く無いがSD108の埋没時期は7期と考えられ、それ以降の所産である。所見：類似する焚火の痕跡をもつ遺構により火葬施設あるいは埋葬施設と考えられる。

SK993 (IB2土坑) 位置：北部III 図版68、第91図

検出：SD109の影響と考えられる砂層に切り込む。SK994・995を切る。規模・形状：主軸を南北に取る。長軸80cm、短軸70cmのやや台形に近い方形を呈す。壁は直に立ち上がり側壁上面は被熱により赤変し硬化している。層位：5層に分層したが、大きく上下2層にまとまる。上層は暗褐色土で人為埋没を示すブロックが入る。下層は炭化物を多量に含む層である。時期：出土遺物は全く無い。遺構の切り合い関係から6期以降の所産である。所見：類似遺構から火葬施設の可能性がある。

SK1338 (IA2土坑) 位置：北部III 図版72、第91図

検出：II A 2層上面においてSK1339を切り、SK1337を切るように検出された。規模・形状：長軸78cm、短軸72cmとほぼ方形を呈す。壁も急に立ち上がり、断面形はタライ状を呈す。壁の上面は焼土化して硬化し

ている。時期：遺物は須恵器杯A底部が出土しており、確定はできないが6期を前後する時期と考えられる。所見：骨片の出土、焚火の痕跡、などから火葬施設、墓壇の可能性が高い。

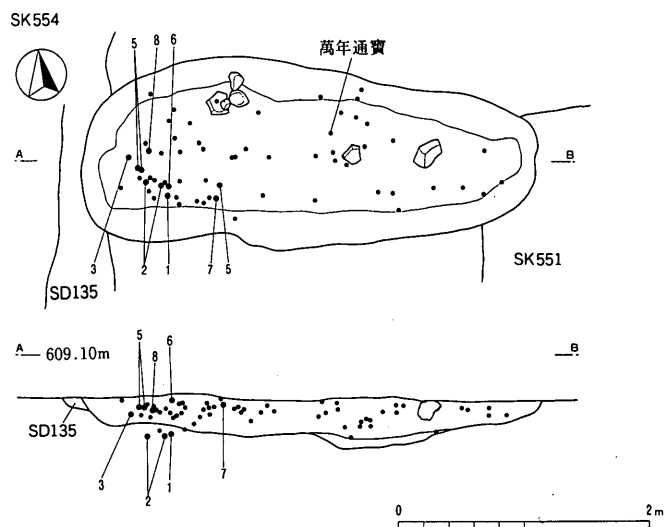
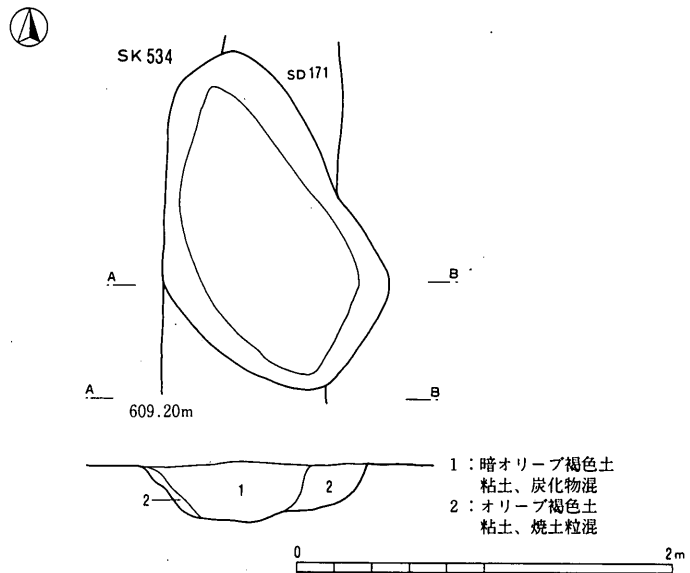
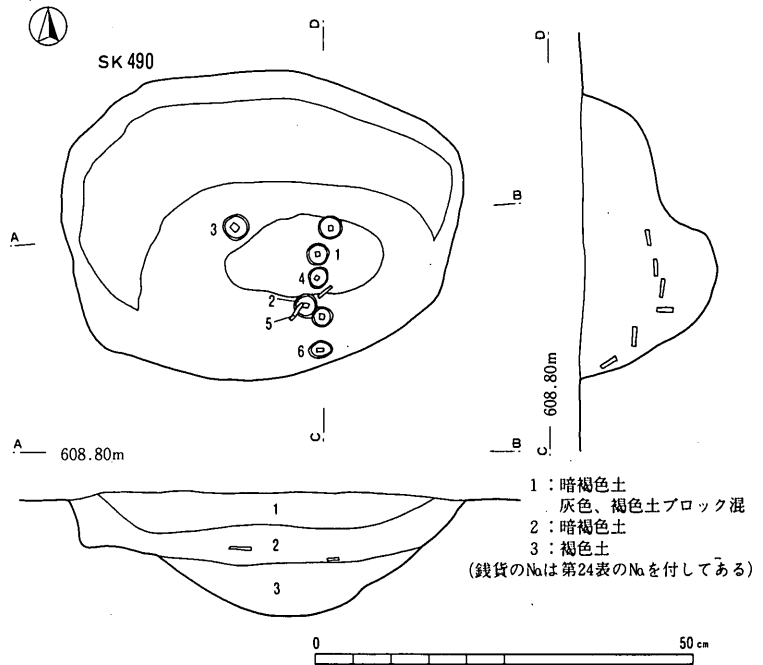
(3) II群土坑

SK490(II B 1 土坑) 位置：北部 I
図版52、第92図、PL48

検出：II A 2 層上面においてSB126に接するように検出された。規模・形状：54×40cmやや楕円形に近い。断面形はすり鉢状を呈すが北側にテラス状の段がある。遺物出土状況：皇朝十二銭のうちの2種が出土して注目される。出土した銭貨は9点で、「万年通寶」4点(図版191-56・57)、「神功開寶」3点(図版191-58・59)、不明2点である。2層下部において1点を除きほぼ南北に直線状に並んで検出された。これは紐等によりつながっていたか、人の手によって丁寧に並べられたという状況である。層位：3層に分層した。いずれも暗褐色土を基調とするが3層は地山に近い。1・2層には灰・褐色土のブロックが入り、ほとんど差異は認められない。これらの状況から3層を埋め戻し、銭貨を埋納し1・2層を埋め戻したと考えられる。時期：出土した銭貨により8世紀末、5期と考えられる。所見：単独遺構として銭貨を埋納することは考え難く隣接するSB126と関連付けて理解したい。つまり、SB126の建築時における地鎮のための埋納遺物と考えたい。

SK534(II C 4 土坑) 位置：北部 I
図版54、第92図

検出：SD171と切り合うが明瞭には検出できなかったが、この段階では本址が溝を切ると判断した。規模・形状：不整形な楕円形を呈し、長軸180cm、短軸110cmを測る。断面形はナベ底状を呈し、坑底には鉄分の集積が認められた。層位：2



第92図 II群土坑実測図

層に分かれ1層は暗オリーブ褐色土、2層はオリーブ褐色土である。遺物出土状況：須恵器杯A・Bを中心として1層から出土しており、ほとんどが破片の状態である。この中には9点の墨書土器が伴う。時期：出土遺物から6期の所産と考えられる。所見：土坑としてとらえたがこの部分は溝も深まることから溝の施設の一部の可能性が高い。また、SD170・171の遺物出土状況と異なり遺物が集中することから、構築時、あるいは溝存続中に祭祀的な行為が行なわれた可能性がある。同様な状況はSD139とSK519についても指摘できる。

SK554(ⅡB 5土坑) 位置：北部Ⅰ 図版54、第92図

検出：ⅡA 2層上面においてSD135、SK551を切るように検出した。規模・形状：主軸をN99°Eにとる。長軸365cm、単軸128cmの不整形な楕円形を呈す。断面形は船底状を呈し、壁もしっかりせず、不安定な立ち上りをみせる。土坑底は東側部分が深くなる。遺物出土状況：比較的まとまった出土量があるがほとんどが破片の状態で出土し、全て覆土中の出土である。図示できたのは全て西側に比較的まとまって出土したものである。「万年通寶」(図版91-60)が1点が検出面から出土している。層位：2層に分層したがほとんどは暗褐色土によって占められる。時期：出土遺物から7期と考えられる。なお「万年通寶」は混入の可能性が高い。所見：遺物の出土状況、断面形など2基の土坑が複合している可能性もある。

SK565(ⅡA 1土坑) 位置：北部Ⅰ 図版54

検出：ⅡA 2層上面においてST111の柱穴に掘り込むように検出された。規模・形状：須恵器甕Dの底部が埋設されており、平面形・断面形共に甕の形状に準じており、長軸・短軸共に50cmの円形である。体部下半から底部にかけて完全に残存しており崩れ落ちたと考えられる甕破片が落ち込んでいる。層位：暗褐色土に焼土ブロックが入る単層である。

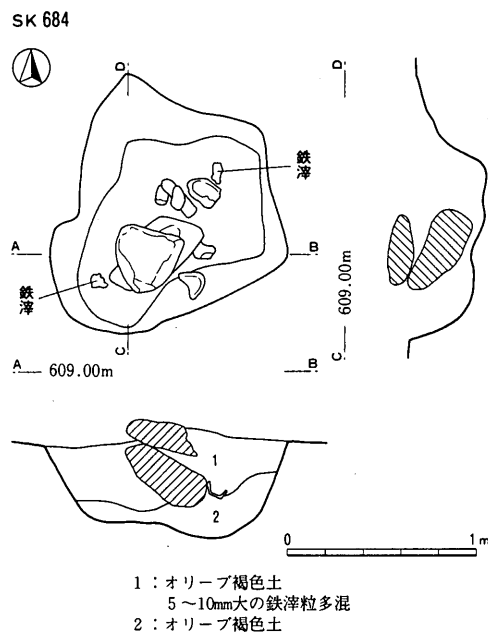
SK612(ⅡA 2土坑) 位置：北部Ⅰ 図版56

検出：ⅡA 2層上面においてSK611を切るように検出した。ST111と重複しており建物址内の施設の可能性はあるが一応単独の遺構とした。前後関係は不明である。規模・形状：平面形はほぼ円形で、長軸、短軸共に68cmである。断面形はタライ状を呈す。埋没：暗褐色土の単層であるが焼土・炭化物を比較的多量に含んでいる。また遺物として須恵器甕破片を多量に含んでいる。

(4) Ⅲ群土坑

SK684(ⅢB 3土坑) 位置：北部Ⅱ 図版58、第93図

検出：ⅡA 2層上面において単独で検出された。規模・形状：方形に近いが不整形な5角形を呈す。長軸140cm、短軸125cmを測る。断面は不整形なすり鉢状を呈す。土坑中央に50cm大の硬砂岩が2個重なるように出土している。これより小さな礫が若干伴う。層位：2層に分層したが両者ともに暗オリーブ褐色土の同一層である。1層には多量の5～10mm大の鉄滓が入り、覆土と区別できないほどである。遺物出土状況：鉄滓が多量に出土しており、非常に小粒なものが多いが比較的大型のものも含まれる。土器としては須恵器長頸壺の底部が出土している。時期：須恵器長頸壺の形態はSB95出土のものと同じであり5期の所産と考えられる。所見：鍛冶関連の遺物が多数出土しているが直接鍛冶址と認定できる材料は全く無く、別地点で行なわれた鍛冶に伴う廃棄場所と考えられ、礫は台石の可能性もある。



第93図 Ⅲ群土坑実測図

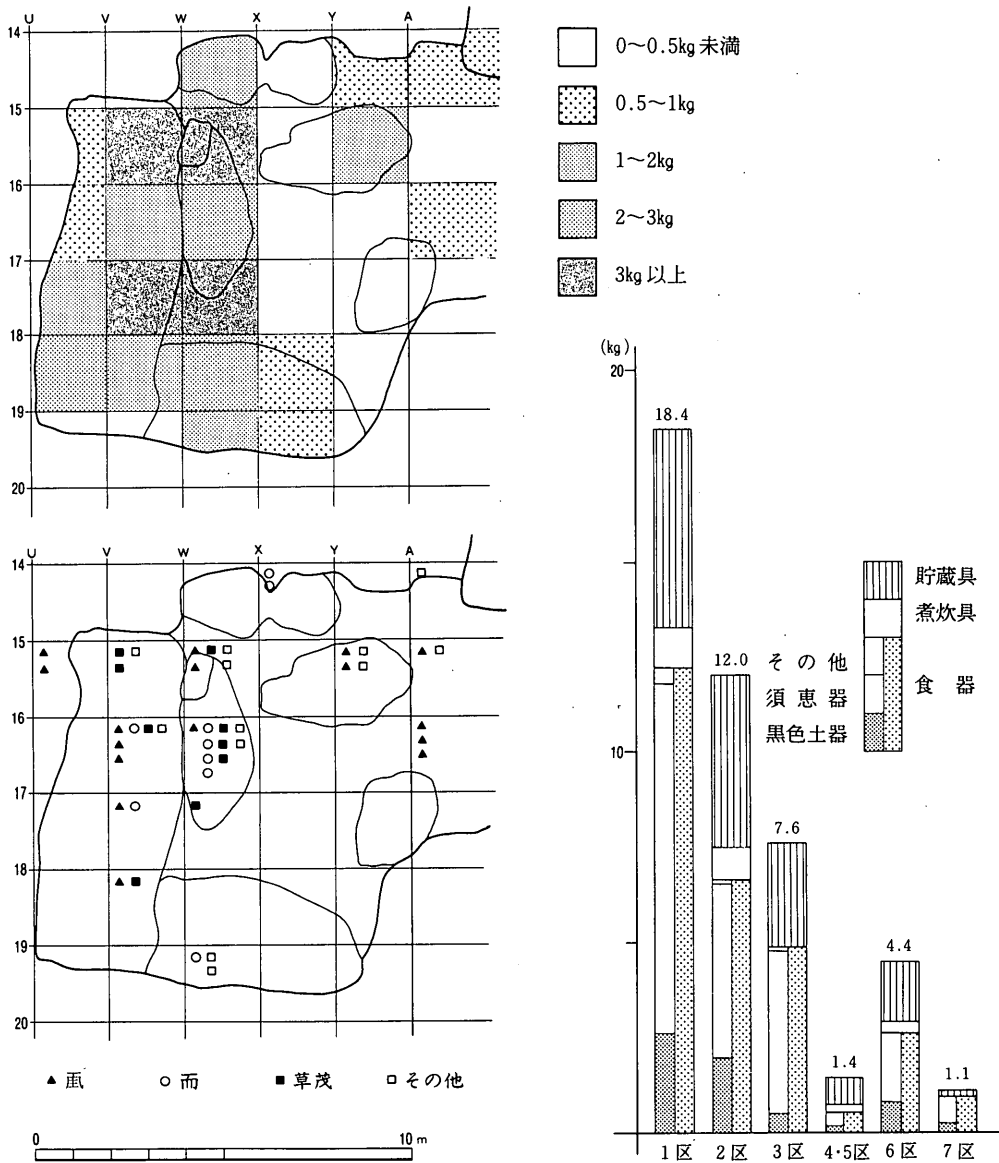
SK1069(II B 3土坑) 位置：北部III 図版70

検出：II A 2層上面においてSD119を切るように検出された。規模・形状：110×90cmの楕円形を呈す。断面形は中央を外して段状の落ち込みがありその周囲は皿状で浅い。遺物出土状況：出土遺物は少ないが須恵器甕Aの底部の大破片が出土している。甕内部には破片はなく、もともと破損した甕の底部を埋めた可能性が高い。層位：2層からなるが同一母材と考えられ、にぶい褐色土が入る。時期：SD119を切るが時期は特定できない。

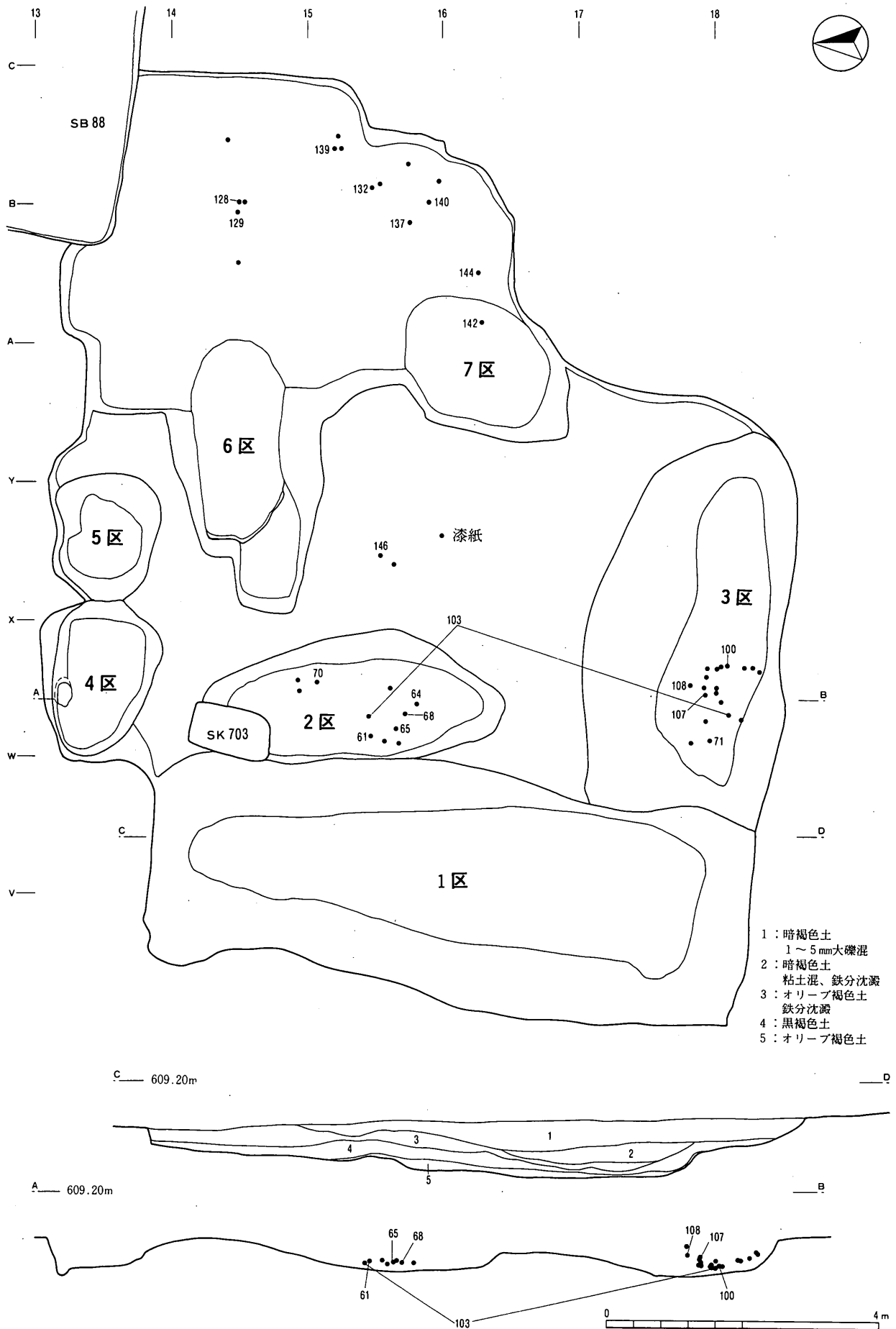
6 不明遺構

SX30 位置：北部II 図版56～59、第94・95図、PL50

検出：II A 1層が深く落ち込む部分においてI C層下、II A 1層中においてSB88、SK703に切られるように検出された。複数の遺構が複合したもの、特にSD137、区画溝IIIの連続と判断したが、トレンチ調査の結果同一覆土をもつ単一遺構であることが確認された。いくつかの深みがあり便宜的に1～7区に分けた(第95図)。



第94図 SX30遺物出土状況及び土器構成図



第95図 SX30実測図

規模・形状：東西13m、南北11mのほぼ方形の範囲の不整形な落ち込みである。西側の1区としたところが南北約8m、東西3.6mの長方形に落ち込んでおり、深さ82cmを測る。1区東側に当たるのが2区で南北約4.5m、東西2m、深さ60cmの楕円形に落ち込む。北端部分をSK703に切られる。4区東西約2.5m、南北1.8m、深さ56cmを測る。5区もほぼ同様である。6・7区ははっきりした落ち込みではない。

埋没：覆土は5層に分層した。1・2層に1～5mm大の細礫が入り、3～5層はきめの細かい鉄分の沈殿がみられる粘土質の土である。恒常的な滞水を示すと考えられる。4～5層が分布するのは1区のみであり、東側部分は1～3層が分布し、1層がほとんどを占める。

遺物出土状況：まとまった出土がみられ重量で50kgの出土があり、とくに西側1～3区の落ち込み部分に多い。出土遺物では杯類が圧倒的に多く全体の60%を占め、貯蔵具類32%、煮炊器具8%の順となる。以下地区ごとに出土状況を見ることにする。1区：出土量の36%の出土がある。1層下部から3層にかけて出土が多くなる。主な遺物に少量の黒色土器杯Aと多量の須恵器杯A・Bなどが伴う。須恵器杯A(14～29)、杯B(34～43)、高杯(44～46)などがあり、また赤彩される土器(9～13・58)も1層から出土している。42はSD108と53はSB97と接合関係がある。特に53は本址内でも広範に接合している。2区：全体の23%の出土がある。須恵器杯類の出土が多い。胎土・色調ともに近似する土器で同一墨書『而』をもつ土器(5・7・10)が一括状態で検出されており、これらにともなって『草茂』の墨書土器(9・16・17・21・25)、『而而』(1)、『仁通』(29)も出土している。これらの墨書土器とこれらに伴う土器はある程度の一括性をもつと考えられる。3区：破片の状態で1層下部から2層にかけて出土した。須恵器杯類を中心として出土している。4・5区：出土量は少ない。遺物の傾向は1～3区と同様である。6区：出土遺物は少ない。墨書土器が4点出土している。SB92出土の盤(SB92-14)と接合関係にあり、SD108とも接合している。

7区：さらに出土遺物は少ない。その他の区：特記すべき遺物として漆紙文書が出土している(付編1参照)。遺存状況は非常に悪く細片の状態で検出されたため文書として解読はできなかった。その他の部分から墨書土器としては『南殿』(10)が出土している。22は須恵器杯B Iで、区画溝I出土のものと接合している。**時期：**出土遺物から6期の遺構と考えられる。開始時期については5期に遡る可能性もあるが確定的ではない。

所見：形状が不整形である点、水に関係した土層であることなどから園池的な遺構と考えられる。区画溝に続く位置にあり区画という機能を果たしながら、一方では土器捨て場としての機能を合せ持っていたと考えられる。これは土器の構成がSD108、区画溝などと同じことから類推される。

第3節 中世以降の遺構

古代7期までは確実に遺溝を捉えられるが8期以降の遺構は近世まで検出されない。遺物もみるべきものは近世までない。遺物では若干中世の遺物が確認できているが遺溝はなく出土している。土器・陶磁器のほとんどが近世以降に位置づく。近世の遺溝として確実にとらえられるのはSN1のみである。のこほか南部III地区において近世遺物が集中する部分があり、形態的に古代の掘立柱建物址と異質であるST19やその付近の小ピット群が存在するが確実に伴う遺物はなく、また覆土でも明確に区別できず近世の可能性を指摘するに留まる。

1 畠址

SN1 位置：南部II 図版31・33、PL49

検出：II A 1層、一部II A 2層上面において単独で検出された。不整形な溝状の落ち込みが南北16m、東西

6.5mにわたって確認された。ある程度規則的な配列をもつことから畠址として認定した。当初古代の遺溝として考えたが埋土の検討により古代以降とした。

規模・形状：約100㎡の部分から29条の畝が確認された。上面は削平が激しく畝間部分の一部分を検出したにすぎず、畝本体はすでにない。畝は東西方向からやや振っておりN102°E方向に走る。何回もの耕作により畝は非常に不整形をしており基本的には東西方向に走るが、南北方向に走る畝も部分的に観察できる。特に、畠址の西半分で顕著であり、畠面が変わる可能性がある。畝は長いもので6m、短いもので2.5m、深さは5～10cmを測る。畝間間隔は40cm程度で一定している。埋没：畝間部分に落ち込んでいる土は灰黄色土に黒褐色土がブロック状に入り込んでいる。この灰黄色土はI層起源の土であり、近世の遺溝である根拠となる。遺物出土状況：近世の遺物として瀬戸・美濃系の拳骨茶碗、丸椀、銭貨として寛永通寶が出土している。古代の遺物として須恵器杯、土師器甕などが混入する。いずれも畝間の落ち込みからである。所見：プラントオパール分析の結果、畝より少量であるがイネが検出された。また柱状サンプルの分析からI層下部からタケ、イネなどが出土しており、乾燥した環境を示している。これらの結果からも畠址であった可能性が高い。

第3章 遺物

第1節 縄文時代の遺物

1 土器 (図版81-1~5)

前期から晩期の土器が総数267点出土している。その内訳は前期1点、中期17点、後期109点、晩期78点、時期の確定できない土器62点である。前期の土器は繊維を多量にもつ破片で、黒浜式期に比定できる。中期の土器は加曾利E III式土器3点と「ハ」状文のある曾利式土器が確認されている。後期は堀之内式土器を34点識別できるほかは、無文および小破片のため認定はできない。但し、その中には胎土や色調などから加曾利B式土器が含まれていそうである。3・4は同一個体で、球胴形の体部から屈折して、朝顔状に口縁部が外へ広がる堀之内I式土器の鉢である。器肉が厚く、丁寧な作りではない。

晩期の土器は、1がSK415から出土しており、体部を条痕文によって整形し、頸部はヘラで磨き、内面は横方向になでている。岡谷市中島A遺跡(長野県教委 1987)で甕C1に分類しているものである。ほかに甕C2と区別のできないものもあるが、合せて甕Cは47点が出土し、SK158・170とその周辺の検出時に出土している。時期的には氷II式期に比定され、晩期末葉に位置付く。このほかには、末葉に属さない晩期の土器がわずかに2点出土している。2は、SD109に混入していた晩期前葉の清水天王山式土器と思われる台付鉢で、脚部との接合部に鎖状隆帯をめぐらせる。伊那市百駄刈遺跡(長野県教委 1973)4号住居址に似たものがあり、伴出は加曾利B式土器である。実物をみていないが、あるいはこの時期かもしれない。5は、三叉文を肉彫りし、列点文や沈線文を施す晩期中葉の安行3c式併行期の土器である。

これらのうち、晩期の土器はII A層上面の検出時や古代の遺構に混入して出土しているのに対し、後期以前の土器は古代遺構に混入しているか、それより下層から出土している。また晩期の土器は、南部に多く、そのほかは北部に多い。

2 石器 (図版81-1~5)

石器21点、剥片16点、石核3点が出土している。総数40点のうち34点が北部地区に集中し、ほか6点は南部III地区から検出された。ほとんどは古代遺構に混在していることが多く、遺構外のはII層からの出土が主となっている。石器の内訳をみると石鏃6点、スクレーパー3点、打製石斧11点、石錘1点となっており、小形石器はチャート5点、黒曜石3点、大形石器は硬砂岩・砂岩・ホルンフェルス・凝灰岩などの石材がみられた。石核・剥片は19点とも黒曜石である。このうち打製石斧を図示した(1~5)。1・4・5のように片面に自然面を多く残すものや、縁辺を簡単に打ち欠いただけのものが多い。5は晩期から弥生時代のものと思われ、同様のものがもう1点ある。図示できなかった石鏃については、晩期あるいは後期と思われるヒコーキ鏃2点、有茎鏃2点、無茎凹基1点、無茎平基1点がある。

第2節 古代の遺物

1 古代の土器

(1) 古代の土器の概観

ア 土器の事実記載

下神遺跡では竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址・土坑などの古代の遺構を始めとして、遺構外の包含層などから出土した古代の土器は膨大な量にのぼる。

本報告書ではこの膨大な量の土器の事実提示を、限られた紙幅のなかで行うために、実測図と文章記載、遺構別の出土土器一覧表の三者で行うこととした。実測図では図示可能な土器について法量・調整などを示し、文章記載では実測図に示せなかった情報を中心に必要な最小限の記述をおこなった。また、主要な遺構の土器については出土土器の構成表を加え補足した。構成表では土器分類の細別に従って、器種それぞれの推定個体数と重量、個体数の構成比率、実測図番号を示した。さらに巻末の出土土器一覧表(附表3)では遺構出土の土器を推定個体数で表わし、遺構出土の土器がすべて網羅できるようにした。

イ 下神遺跡の古代の土器

下神遺跡では、古代2期から古代7期まで古代各期を通じて、それぞれの時期の遺構から多量の土器が出土した。総論編でそれぞれの器種の分類の詳細や型式変化・時期区分について述べるので、ここでは下神遺跡の古代各期の土器様相についてその概要を述べる。

2期：2期の土器はSB21に見られるのみである。SB21は遺構の残存状態がよくなく、資料の一括性にもやや不安がある。出土した土器は須恵器杯Aと土師器甕A・甕B、須恵器の甕の破片のみである。食器は須恵器のみで、杯Aは回転ヘラ切り未調整と回転ヘラ切り後底面を手持ちヘラ削りするものの二者がある。これらは底径6.4～8.4cmと底径が大きく、体部の開きの弱い形態である。

3期：この時期も遺構が少なく、安定した土器様相を示す遺構に恵まれない。この時期のSB84では、食器はほとんどが須恵器、煮炊具は土師器甕Bを主体に甕Aと甕Cがある。貯蔵具の様相は明らかでない。食器の須恵器は杯Aが多く、杯Bは少ない。杯Aは底部回転ヘラ切りと回転糸切りが共伴し、この段階ではまだ回転ヘラ切りが回転糸切りを上回っている。

4期：食器にいくつかの変化が起きる段階である。食器の主体が須恵器であることは3期と変わらないが、3期に出現した杯Aの底部回転糸切りは漸増しつつに回転ヘラ切りを上回るようになる。またこの時期、ロクロ調整の黒色土器A杯Aが出現する。これらはロクロ調整の後底部を回転糸切りするもので、大小の2法量をもつものと思われる。また、一般に甲斐型杯と呼ばれる土師器杯Cが出現するのもこの時期である。煮炊具でもこの時期にロクロ調整の小型甕Dが出現し、土師器甕Bを主体に、甕C・小型甕B・小型甕Dによる組み合わせが普遍化する。

5期：4期の状況を受け継いでいる。食器は須恵器を主体に、黒色土器A杯AⅠ・Ⅱ、土師器杯Cが少量入る組み合わせとなる。須恵器は杯Aが主体で、回転糸切りのみであるが、体部の開きの弱い形態である。杯Bは法量分化が明瞭でⅡ(口径15～17cm・器高4～5cm)・Ⅲ(口径14.5～17cm・器高5.5～8cm)・Ⅳ(口径12～13.5cm・器高3～4cm)・Ⅴ(口径11～12cm・器高4～5cm)・Ⅵ(口径9～10.5cm・器高4～5cm)の各法量が認められる。煮炊具は土師器甕B・小型甕Dの組み合わせを軸に、甕C・小型甕Bが少量ある。

6期：基本的な土器様相は4・5期と変わらない。食器では、黒色土器Aの量が次第に増え、2期以降食器の大部分を占めていた須恵器をおびやかしつつある。食器の主体である須恵器杯Aは自然な型式変化

の結果、体部の開きの大きいものへと形態を変化させている。杯Bは量を減らし気味で法量の分化もやや不安定なものになりつつある。黒色土器Aは杯A I・杯A II・鉢Aがある。この時期、北部II区のSB92・148、SX30などに、明褐色で軟質の胎土に赤彩を施した杯・碗・鉢類が見られる。一種北陸地方の赤彩土器に類似したものであり、松本平では他に類例がない。7期に現われる赤彩土器の皿Bとは異質のものである。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの2者による組み合わせが主体で、甕Cが少量入る。

7期：6期の終りから7期の始めにかけての時期に食器に大きな変化が起きる。碗・皿の登場である。2～6期までの食器は杯Aと杯Bの2形態をその代表的形態としてきたが、7期にいたって有台の碗と皿が出現する。碗は黒色土器A・灰釉陶器・緑釉陶器、皿Bは黒色土器A・黒色土器B・赤彩土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。このうち赤彩土器・須恵器の皿Bは、今回の調査では下神遺跡でしか出土していない。また、食器の主体は7期に須恵器から黒色土器Aへと入れ替わり、もはや須恵器は食器の主体ではなくなってしまう。須恵器杯Aは、底径が縮小してさらに体部の開きを強め、また器壁が薄くロクロ目の目立つものとなる。さらに、7期の後半では形態は須恵器杯Aと同様であるが、焼成が軟質で灰白色を呈し、内外面に黒斑の残る杯Aが出現する。この土器は、従来からある還元焰・硬質の須恵器杯Aに対して軟質須恵器の名称を付して区別することとした。松本平の他の遺跡では、この軟質須恵器杯Aは次の8期まで存在する。また7期の終りにはSB152に見るように、ロクロ調整で内面をヘラ磨き・黒色処理することのない土師器杯Aが出現する。須恵器杯Bははその量を減じ、法量分化の実態もつかみ得ないほどとなっている。食器が7期に大きな変化を始めるのに対し煮炊具は、6期の様相をそのまま引き継いでいる。土師器甕Bと小型甕Dの2者による組み合わせで構成され、甕Bは4・5期のそれと比べれば器高が低く、底径の大きなズングリした形態となっている。また、口縁部形態も直線的に立つものへと変わっている。貯蔵具も灰釉陶器の長頸壺などが搬入され始めることを除けば、須恵器の壺類・甕類を主体とした組み合わせは5・6期の状況と変わらない。この時期に搬入される灰釉陶器は、黒笹14号窯式・光ヶ丘1号窯式の各窯式である。また、緑釉陶器は京都産と考えられる。

下神遺跡における、基本的・一般的な土器様相の変化は以上に見てきた通りであるが、5期を萌芽期として、6期・7期と遺跡内の遺構のあり方によって土器様相に大きな違いが見られる。端的に言えば、北部I・II区の溝や竪穴住居址・土坑などに廃棄された土器と、それ以外の地区の竪穴住居址出土の土器様相との差である。これは下神遺跡の同時期における、遺跡内で地区による異質性を考えるうえで、非常に重要な内容を含んでいるものと考えられる。この点については次の第4章で述べる。

(2) 遺構出土の土器

ア 竪穴住居址出土土器

SB 1 図版82

遺物は少なく3点が図示できたのみである。2は灰釉陶器碗で光ヶ丘1号窯式。3の土師器甕Bは、頸部を強くヨコナデし立ち気味の口縁部をやや肥厚させている。7期の土器様相である。

SB 2 図版82

食器は黒色土器Aが主体である。黒色土器A杯AはII(1～6)とI(7)の2法量がある。(10・11)の土師器小型甕Dは底面に糸切り痕が残る。7期の土器様相である。

SB 3 図版82

食器は黒色土器A(1・2)が主体で須恵器(3)と軟質須恵器(4)が少量ある。3の須恵器杯Aは底面まで手持ちヘラ削りを施す。5は長頸壺Aであるが緻密な灰白色の胎土で灰釉陶器か須恵器か迷うものである。6は須恵器鉢Aで体部をロクロナデする。7期の土器様相である。

SB 4 図版82・83、第96図、第2表、PL50

食器は須恵器が主体で土師器、黒色土器Aがある。1・2は体部外面下半を手持ちヘラ削り、内面には放射状暗文が施される。須恵器杯Aはすべて回転糸切りで、法量は平均で口径11.5~14cm・器高33~4.3cmと、底径が大きく体部の外傾が弱い形態である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dがあるが、28・29は口縁部の外傾の強い形態である。31は口縁部が「コ」字状に近くなっている。30は底面に糸切り痕が残る。32は煮炊具の蓋と考えられ、内面と天井部は不定方向のハケ目調整、つまみ部は面取りして箱状に仕上げ円孔をうがっている。5期の好資料である。

SB 5 図版83

食器は黒色土器A(1~3)と須恵器(4)で構成される。1は杯A IIで体部がやや内湾する形態である。2は杯A I、3は鉢Aである。1と3は回転糸切り後底部外周を手持ちヘラ削りしている。4の須恵器杯Aは底面全体を手持ちヘラ削りする。

図示できないが、そのほかに須恵器杯Aは3点あるがいずれも回転糸切り未調整である。6期の土器様相である。

SB 6 図版83、第97図、第3表、PL51

食器は黒色土器A(1~7)・須恵器・軟質須恵器(8~10)・灰釉陶器があるが、主体となっているのは黒色土器Aである。黒色土器A碗・皿Bは高台が小さな断面三角形状で、体部は直線的に開く浅めの器形である。軟質須恵器杯Aにはいずれも体部内外面に黒斑がある。煮炊具は土師器甕B(11~13)が主体で、小型甕D(14)・甕C(15)がある。甕B(11)は口縁部が長くのびる形態で、体部のハケ目は浅く、底部周辺を手持ちヘラ削りしている。15は端面をヨコナデし平坦面を内と外に作っている。

貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で須恵器長頸壺Aに把手の付くもの、須恵器甕C(16)、灰釉陶器小瓶(17)がある。17は底面に糸切り痕が残る。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。7期の土器様相である。

SB 7 図版84

遺物は少ない。食器は須恵器(1・2)が主体で、他に土師器杯Cと黒色土器Aが2個体ずつある。煮炊具

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	杯 C	6	140	7 10%	1・2
	高 杯	1	15		
黒色土器A	杯A II	4	50	5 7%	
	鉢 A	1	40		
須恵器	杯 A	30	2650	67 72%	3~21
	杯B II	1	215		27
	杯B III	5	390		26
	杯B IV	4	130		25
	杯蓋B	12	280		22~24
	鉢 A	2	35		33・34
灰釉陶器	碗	1	5		

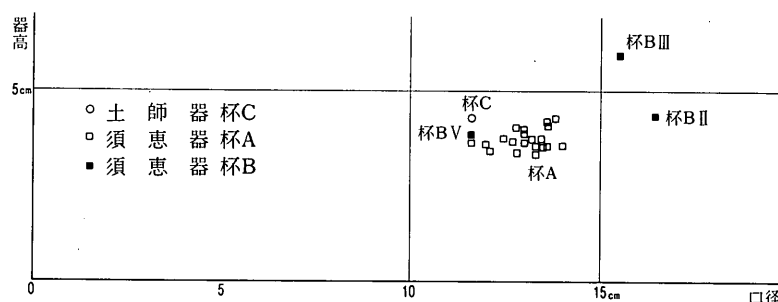
煮炊具

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	甕 B	5	1000	17 18%	29
	甕 C	1	75		31
	小型甕B	1			28
	小型甕C	1			
	小型甕D	8	710		30
	甕 蓋	1	120		32

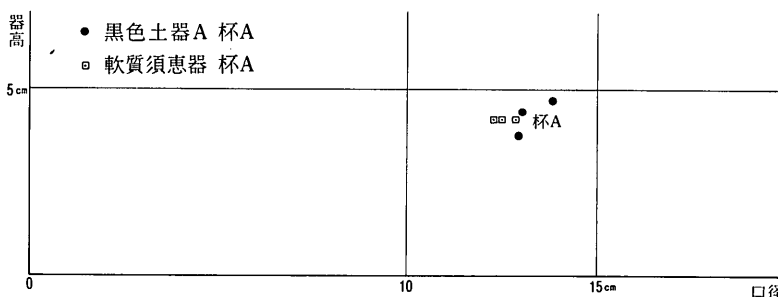
貯蔵具

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
須恵器	甕	8	6360	9 10%	
	瓶	1	200		

第2表 SB 4 出土土器の構成



第96図 SB 4 出土土器法量分布図



第97図 SB 6 出土土器法量分布図

は土師器甕A・甕B(5)・甕C(6)・小型甕D(3・4)があるが、図示していない甕Aの底面には木葉痕が観察できる。7は須恵器長頸壺Aで緻密な胎土に自然釉をかぶり搬入品の可能性もある。5期の土器様相である。

SB 8 図版84

食器のほとんどを黒色土器A(1~4)が占めている。煮炊具は土師器甕B(5・6)が多く、小型甕Dは小片である。甕Bの口縁は肥厚し短く「く」字に外反する。7・8の円筒形土器は縦方向のハケ目の後底部周辺を手持ちヘラ削り、端部を内側に折るようにしてヘラで面取りをしている。底径はそれぞれ10.6cm、10.9cmである。7期の様相である。

SB 9 図版84・85

1・2は土師器杯Cで、体部外面下半をヘラ削りする手法は変わらないが、1では放射状暗文が内面に施され、2ではロクロナデのまま

暗文は観察できない。底面の調整は1が回転糸切り未調整であるのに対し、2は底面の中程までヘラ削りしている。3は黒色土器A杯Iで底面と底部外周を手持ちヘラ削りする。須恵器杯A(4・5)は9個体識別できたが、すべて回転糸切り未調整である。煮炊具は甕B(7・8)・甕C(9)・小型甕B(10~13)・小型甕Dがあるが、小型甕Bが最も多い。小型甕Bは口径11.3~15.2cm、器高11.8~15.5cmの法量で、10は縦方向のハケ目の後ロクロ状のヨコナデを施し、底部外周を手持ちヘラ削りする。11は内面にもハケ目を施している。14は須恵器長頸壺Aで灰白色の緻密な胎土で搬入品と考えられる。このほかに須恵器甕に美濃須衛窯産と思われるものがある。5期の土器様相である。

SB10 図版85

須恵器杯Aは回転ヘラ切りと回転糸切りが共伴している。1は黒色土器A杯A IIで底部回転糸切り、2~4の須恵器杯Aは2が回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り、3は回転糸切り後手持ちヘラ削り、4は回転糸切り未調整である。8は須恵器短頸壺Cで底部回転糸切り後外周を手持ちヘラ削りしている。9・10は須恵器甕Eで体部をタタキ調整する。11は丸底の甕Aである。4期の土器様相である。

SB11 図版85

土師器小型甕D(1)が1点図示できたのみである。体部外面はカキ目調整後、下半部を斜め方向にヘラ削りし、内面には粘土紐積み上げ痕が観察できる。底面は指ナデ調整している。4期の土器様相と考えられる。

SB12 図版85

食器は須恵器(4~7)と黒色土器A(1~3)であり、ほぼ同量で構成されている。須恵器杯Aは体部の外傾の強い形態である。須恵器の貯蔵具には横瓶が1点含まれている。6期の土器様相である。

SB13 図版86

1は土師器杯Cで内面に放射状暗文、体部外面から底部にかけては手持ちヘラ削りを施している。5期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A II	18	945	31 64%	1~3
	杯A I	5	350		4・6
	椀	6	325		5
	皿 B	1	30		7
	鉢 A	1			
	不明		235		48 69%
須恵器	杯 A	4	45	6 13%	
	杯蓋B	2	10		
軟質須恵器	杯 A	8	430	8 17%	8~10
灰釉陶器	椀	2	5	3 6%	
	皿	1	5		

煮炊具

土師器	甕 B	8	4445	13 19%	11~13
	小型甕D	3	480		14
	甕	1	85		
	円筒形土器	1	230		15

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	5	165	7 8 12%	
	甕 C	2	150		16
灰釉陶器	小瓶	1	70	1	17

第3表 SB 6 出土土器の構成

SB14 図版86、第4表、PL51・52

黒色土器A(1~5)主体に食器は構成され、須恵器(6)・軟質須恵器(7)・灰釉陶器(8~10)が少量ある。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(13~16)と小型甕D(11・12)で、甕Bは口縁部が直線的にのびる形態となり体部上半をヨコナデ、下部をヘラ削りしている。11・12は回転糸切りである。17は須恵器長頸壺A、18は黒色土器Bで体部の内湾する鉢Bで、内面と外面下半を縦ヘラ磨き、外面上半は横ヘラ磨きする。7期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A II	6	555	} 11 52%	1~3
	椀	5	250		4・5
黒色土器B	鉢B	1	180	} 1 5% } 21 5 24% } 52% 1 5%	18
須恵器	杯A	5	35		6
軟質須恵器	杯A	1	120		7
灰釉陶器	椀	3	205		8~10

煮炊具

土師器	甕B	9	4040	} 13 33%	13~16
	小型甕D	4	555		11・12

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	260	} 6 15%	17
	甕	4	155		

第4表 SB14 出土土器の構成

SB15 図版87

食器の主体は黒色土器A(1~3)と須恵器(4~7)であるが、量的には黒色土器Aがやや多い構成である。灰釉陶器(8)は2片のみで、光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕Bが中心で、9は口縁部の外反が強い形態である。貯蔵具には灰釉陶器の小瓶がある。7期の土器様相である。

SB16

図示できる遺物はない。須恵器杯Aは切り離し不明、土師器甕Bには内面にハケ目を施すものが2個体ある。4期前後の土器様相と考えられる。

SB17 図版87

食器は須恵器(2~4)と黒色土器A(1)で、須恵器がやや多い構成である。1は口縁部に稜をもって外反させるもので、底部は手持ちヘラ削りを施している。須恵器杯A(2)は、9個体識別できるがすべて回転糸切りである。形態は2のように底径の大きな箱形のものが多い。煮炊具は土師器甕B(8~10)・甕C・小型甕B(5~7)・小型甕Dがある。8は口縁端部に平坦面を作り外面上半はヨコナデしている。5期の土器様相と考えられる。

SB18 図版87

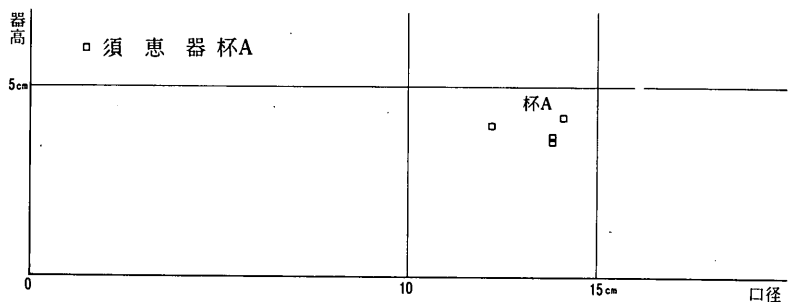
食器は黒色土器A(1)と須恵器(2~4)があるが、須恵器が主体を占めている。6の土師器甕Cは口縁部が「コ」字に近い形態である。7は須恵器長頸壺である。6期の土器様相である。

SB19 図版87

1は土師器杯Cで底径6cmに復元できる。内外面ともに器表が荒れて調整は観察できないが、底面には糸切り痕が観察できる。2は須恵器杯Aである。3・4は土師器甕Bで口縁部が短く強く外反する形態である。5期の土器様相である。

SB20 図版88

1は黒色土器A杯A I、図示できないが黒書工器杯A IIが5個体ある。2~4は須恵器杯Aでいずれも底部回転糸切りである。6は土師器小型甕Dで底部に糸切り痕が残る。7は須恵器甕E、8は甕Aである。6期の土器様相である。



第98図 SB21出土土器法量分布図

SB21 図版88、第98図、第5表、PL52
 遺物の量は少ない。須恵器杯Aのうち1～3は回転ヘラ切り、4は回転ヘラ切り後底面全体を手持ちヘラ削りされる。底部回転糸切りのものはない。煮炊具は土師器甕Aと甕B(5)があるが、5は口縁部に面を作っている。2期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図NO
須恵器	杯 A	4	490	} 33%	1～4

煮炊具

土師器	甕 A	1	85	} 7	5
	甕 B	6	970		

貯蔵具

須恵器	甕 A	1	75	} 1	8%
-----	-----	---	----	-----	----

第5表 SB21 出土土器の構成

SB22 図版89

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが、量的には黒色土器Aのほうが多い構成である。黒色土器Aは杯AのみでI(5～7)、II(1～4)の2法量がある。土師器甕Bの12は口径22cm・器高33.6cm・底径10cmで口縁部はやや肥厚している。須恵器貯蔵具には長頸壺A・短頸壺・甕A・甕Dがある。6～7期の土器様相である。

SB23 図版89

食器に須恵器は無く黒色土器A(1・2)・軟質須恵器(3)・灰釉陶器(4～6)で構成されている。灰釉陶器は段皿(4)・皿(6)・椀(5)があるがいずれもハケ塗りで施釉し、光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(7～11)と甕C(12)で小型甕Dはない。13の円筒形土器は底部周辺をヘラ削りし、端部を内側に折り曲げて面取りする。7期の土器様相である。

SB24 図版90

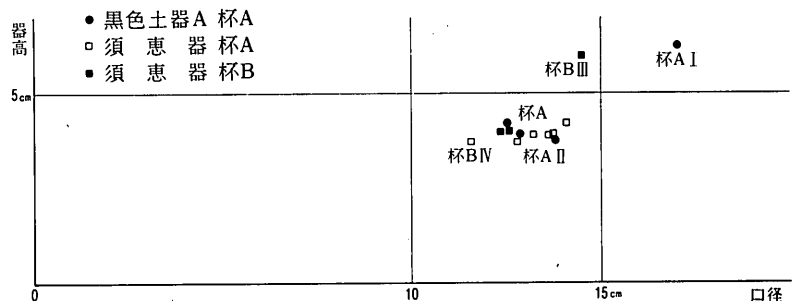
食器は土師器杯Eと須恵器杯A(1・2)・杯蓋B(3)がある。1は底面全体を、2は回転糸切り後底面の外周のみを手持ちヘラ削りする。煮炊具は土師器甕A・甕B(8・9)・小型甕A(7)・小型甕B(5・6)がある。甕Aには底部に木葉痕が観察できるもの1点がある。4は須恵器長頸壺である。4期の土器様相である。

SB25 図版90

食器は黒色土器A(1～10)が主体で、須恵器と軟質須恵器(11)が少量ある。煮炊具は土師器甕B(14・15)と小型甕D(12・13)のみである。15は口縁部が直線的にのび体部上半に横方向のハケ目を施している。7期の土器様相である。

SB26 図版90・91、第99図

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されているが、量は須恵器が多い。黒色土器Aは杯AのみでII(1～3)とI(4・5)の2法量がある。須恵器杯A(6～11)はすべて回転糸切りである。杯BはIV(15・16)・III(13)・II(14)の各法量がある。煮炊具は土師器甕B(17・18)・甕C・小型甕D



第99図 SB26出土土器法量分布図

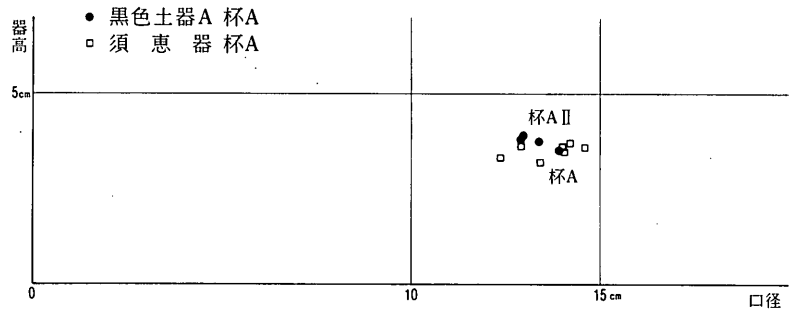
(19)がある。17は口径22cm・器高33.4cm・底径8.9cmの法量で口縁部は外反が強く、底部が小さく締まる形態である。貯蔵具は須恵器で大形の甕が多い。22～24は平底である。21は体部内面に同心円文が残る。20は長頸壺Aで底面にヘラ記号がある。このほかに甕Dがある。また、須恵器甕のなかには美濃須衛窯産製品を含んでいる。6期の土器様相である。

SB27 図版92

食器は須恵器が主体で、他に土師器杯Cと黒色土器A杯Aがあるが、小片のため図示できない。須恵器杯A(1~5)は回転糸切り未調整。杯蓋Bは端部を屈曲させ、くちばし状の形態をなす。13は口径22.2cmを測る大形である。杯BはII・III(17・18)・IV・V(14~16)の各法量がある。煮炊具は土師器甕B(21)・甕C(19・20)・小型甕D(22)があり、21は体部外面に縦方向のハケ目を施した後、縦方向のヘラ削りを行なっている。須恵器貯蔵具には長頸壺A・短頸壺・甕D等があり、美濃須衛窯産製品も含まれている。5期の土器様相である。

SB29 図版92・93、第100図

食器は須恵器(7~17)と黒色土器A(1~6)で構成されるが、量的には須恵器が黒色土器Aをやや上回っている。須恵器杯A(7~13)は底径が小さく体部の外傾が強い形態で、器壁が薄くロクロ目が目立つ。煮炊具の23は土師器甕Bの底部を抜いた形態で甕Bである。外面は縦方向、内面



第100図 SB29出土土器法量分布図

は横方向のハケ目を施している。貯蔵具は須恵器長頸壺A(24)、短頸壺B(25)、短頸壺C(26)、甕A、甕C(27)、甕D(28)、横瓶がある。長頸壺のなかには胎土の違いから美濃須衛窯産と思われるもの、その他の産地から搬入されたと思われるものが含まれている。6期の土器様相である。

SB31 図版93

遺物は少ない。1は須恵器杯Aで底部回転糸切り、2は須恵器高杯である。土師器甕類は甕B・甕C(5)・小型甕B(3)・小型甕C(4)がある。5期の土器様相である。

SB32 図版93

食器は黒色土器Aと須恵器があるが、須恵器がやや多い。1の黒色土器A杯A Iは、底部回転糸切り後外周を回転ヘラ削りしている。2の須恵器杯Aは底径7.2cmと底径が大きい。3の土師器甕Bは口縁部が強く外反する。5期の土器様相である。

SB33 図版93

食器は黒色土器A(1)・須恵器(2~5)で構成されるが、須恵器がやや多い。煮炊具は土師器甕B(7・8)と小型甕D(6)があり、7・8は内面にハケ目調整を施している。6期の土器様相である。

SB34 図版94

1は須恵器杯Aで、底部全面を手持ちヘラ削りする。杯蓋B(2・3)は器高が低く、天井部が扁平な形態で、天井部の回転ヘラ削りの範囲は広い。端部は折り曲げるのみで屈曲させない。煮炊具は土師器甕B(5・6)・甕G(9)・小型甕B(4)・小型甕D(8)があり、5・9は口縁端部を面取りして平坦面を作る。6は内面全体に横方向のハケ目を施している。3期を前後する段階の土器様相である。

SB35

遺物は小片で図示できない。黒色土器A杯A、須恵器杯A、土師器甕Bがあり、甕Bは薄手・硬質の焼き上りで内面には指によるナデアゲのあとが観察できる。6~7期の土器様相である。

SB36 図版94

4点が図示できたのみである。1・2の須恵器杯Aは底部回転糸切り、3も底面中央に糸切り痕が残っている。4は黒色土器A鉢Aである。6期の土器様相である。

SB37 図版94

土師器甕Bと甕Cがあるのみである。甕B(1)は「く」字に外反する口縁部形態であるが、口縁部をやや肥厚させ気味で新しい様相も見せている。6期の土器様相である。

SB38 図版94

1は土師器杯C、外面は器表が荒れ調整は不明であるが、内面には放射状の暗文が見える。2の須恵器杯Aは底部回転糸切り。3・4の杯Bも底面中央に糸切り痕が残る。5はハケ目調整する小型甕B、6・7は底部に糸切り痕の残る小型甕Dである。9は灰白色の緻密な胎土で、内面には同心円文が残る美濃須衛窯産製品である。8は内外面に強くロクロ目を残す長頸壺Cで、体部と口頸部は別々に作り、接合する方法をとって成形している。黒色土器Aは無く、5期の土器様相である。

SB39 図版94・95

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが、両者の量はほぼ同量である。2の須恵器杯Aは底径5.6cmと小さく体部の外傾は強い。土師器甕は甕B(6・7)・甕C(8)・小型甕D(3~5)がある。3は回転糸切り、5は底面と底部外周を手持ちヘラ削りする。8の甕Cは口縁部から底部まで復元できた数少ない例で、口径23cm・器高28.2cm・底径4.2cmを測る。口縁部は「コ」字状を呈し外反する。9は体部に把手を1対付ける須恵器甕Bで口縁部は直立し、端部は内傾気味の平坦面となっている。把手は粘土紐を貼りつけたもので断面は円形である。6期の土器様相である。

SB40 図版95

1は土師器杯Cで外面は手持ちヘラ削り、内面には鋸歯状の暗文を施す。2は黒色土器A杯A I、3・4は須恵器杯Aであるが体部の開きは大きい。6期の土器様相である。

SB42 図版95

遺物は少ない。1・2は底部回転糸切りで体部の開きの強い須恵器杯A、4は土師器甕Bで内面は上半に横方向のハケ目、下半は縦方向のハケ目が施される。6期の土器様相である。

SB43 図版96

食器は黒色土器A(1~3)・須恵器(4・5)で構成される。煮炊具は土師器甕B(8・9)・甕C(10)・小型甕D(6・7)がある。8は完形で口径24.7cm・器高33.5cm・底径8.6cmである。8・9ともに頸部の強い指ナデにより口縁部はやや肥厚している。6期の土器様相である。

SB44 図版96・97

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されている。煮炊具は土師器甕B(5・6)・甕C・小型甕C(7)・小型甕Dがある。6は内面にも縦方向のハケ目を施している。貯蔵具は須恵器長頸壺A・横瓶(8)・甕D(9・10)がある。10は肩部に断面三角形の凸体を巡らし、粘土紐を短く切った耳を四方向に貼付しているが、孔は穿たれていない。底部外周を手持ちヘラ削りしている。6期の土器様相である。

SB45 図版97

食器は須恵器杯B(1)が1点あるのみである。2はロクロ調整の土師器小型甕Dで底部周辺を手持ちヘラ削りする。3は甕Bで口縁部は短く外反する。5期の土器様相である。

SB46 図版97

1~4は底部回転糸切りの須恵器杯Aで底径は大きく、体部の外傾が弱い形態である。5は土師器甕Bで頸部内面に波状にハケ目を施している。6は平瓶の底部と考えられる。外面は回転ヘラ削りしている。5期の土器様相である。

SB47 図版97

食器は須恵器のみである。1は杯Aで底部回転糸切り、2は杯B VIである。煮炊具は土師器甕B(4)のみである。5期の土器様相である。

SB48 図版97・98

食器は黒色土器A(1~4)・須恵器(5~14)で構成されているが、量は須恵器のほうが多い。黒色土器Aは杯A II(1・2)、杯A I(3)・皿B(4)がある。須恵器杯BはIII(13・14)のみである。煮炊具は土師器甕B(16)・甕C・小型甕D(15)がある。15には底面に糸切り痕がある。6期の土器様相である。

SB49 図版98

遺物は少ない。1の須恵器杯Aは体部の開きが強い形態で、器壁は薄くロクロ目も強い。2は口径10.6cm・器高4.4cmの杯B Vである。5期の土器様相である。

SB50 図版98

須恵器が主体の食器構成である。1は黒色土器A杯Aで内面には炭化物が付着している。5は口径13.2cm・器高5.3cmで口径はやや小さいが、須恵器杯B IIIに分類する。煮炊具は土師器甕B(8~11)・甕C(7)・小型甕D(6)がある。6期の土器様相である。

SB51 図版98

食器は黒色土器A(1)と須恵器(2・3)・灰釉陶器(4)がある。4は灰釉陶器の椀でハケ塗り、内面には重ね焼きの跡が残る光ヶ丘1号窯式である。土師器甕Bは4個体図示できたが、口縁部が「く」字状に強く外反するのは6のみで、7~9は口縁部が立ち気味で肥厚する。また体部外面肩の部分に横方向のナデが施される。7期の土器様相である。

SB52 図版99

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが、量は黒色土器Aの方が多。黒色土器Aは杯A II(1)と杯A I(2~4)、椀(5)がある。須恵器杯A(6~9)は底部回転糸切りで底径5.4~5.8cmと小さく体部の開きが強い形態である。杯BはIII(10)とIIがある。7期の土器様相である。

SB53 図版99

須恵器がほとんどを占める食器構成である。杯A(1~3)は底部回転糸切りで底径の大きな形態で、杯Bは5の杯B III 1点のみである。6は土師器甕B。8は体部をヘラ削りする甕で、甕Cに分類したが底径が大きく、器壁も厚手で甕Cの中ではやや形態が異なっている。在地の甕が外来系の甕Cの影響を受けたものであろうか。7は小型甕Dでロクロ調整、体部下半を手持ちヘラ削りしている。5期の土器様相である。

SB54 図版99

食器は須恵器が主体の構成になっている。1の黒色土器A杯A IIは回転糸切り後底面全体を手持ちヘラ削りする。須恵器杯BはIII・IV(6)・V(5)がある。5期の土器様相である。

SB55 図版100

食器は黒色土器A(1)と須恵器(2~5)で構成されるが、須恵器がやや多い構成である。煮炊具は甕Bと小型甕D(6)のみで、6の底面には糸切り痕が残る。6期の土器様相である。

SB56 図版100

食器は須恵器のみである。3は底部回転糸切りの短頸壺Cである。煮炊具は口縁部が強く外反する土師器甕B(6・7)、甕C(4・5)と小型甕Dがある。甕Cは口縁部形態が「く」字に外反する4と「コ」字になる5の2形態がある。6期の土器様相である。

SB57 図版100

食器は黒色土器Aが主体で、須恵器は少量である。黒色土器Aは杯AのみでI(1)とII(2~5)の2法量が観察できる。須恵器杯Aは底部回転糸切りで体部の開きが大きい。煮炊具は土師器甕B(9)と小型甕D(8)がある。貯蔵具は須恵器のみで甕Dと甕Eがあるが、いずれも破片が1点ずつである。6期の土器様相である。

SB58 図版100

食器は杯Aのみで、黒色土器A 1個体・須恵器2個体である。煮炊具は土師器甕B(5)・小型甕C(4)・小型甕Dがあり、小型甕Dは1個体のみである。貯蔵具は6の平底の甕1点のみで、内面には同心円の当て具痕が残る。5期の土器様相である。

SB59 図版101

黒色土器Aが主体の食器構成で2・3は杯A I、4は鉢Aで底面には糸切り痕が残る。5・6の土師器甕Bは、口縁部の外反は強いが、口縁部がやや長くのび頸部を強く撫でることによって口縁部を肥厚させている。6の内面には指によるナデアゲ痕が明瞭に残っている。貯蔵具は須恵器壺・甕の破片1片ずつと少ない。6期の土器様相である。

SB60 図版101

須恵器主体の食器構成である。1・2は回転糸切り。3は底面を手持ちヘラ削りしている。5期の土器様相である。

SB61 図版101

遺物は少ないが、ほとんどが図示できた。1・3の底面には糸切り痕が残る。5期の土器様相である。

SB62 図版101

食器は黒色土器A(1・2)が主体である。須恵器杯A(3)は薄手で体部の開きが強い。6期の土器様相である。

SB63 図版101

須恵器が食器のほとんどを占めている。1は黒色土器A杯A I、2～4は須恵器杯Aで底部回転糸切り、5は杯B IIIである。煮炊具は土師器甕B(6)と小型甕Dがあり、6は口縁部が短く外反する器形で、内面はハケ目後指によるナデアゲで底部付近にハケ目調整が見られる。口径21.7cm・器高33.2cm・底径8.7cmである。貯蔵具はない。5期の土器様相である。

SB64 図版102

1は黒色土器A杯A IIで、底部から体部下半にかけて回転ヘラ削りを施す。須恵器杯A(2～4)は底部回転糸切り。煮炊具は土師器甕B(7・8)と小型甕C(6)で、6には脚台が付く。8は口径21.7cm・器高31.7cm・底径9.1cmで体部上半はヨコナデでハケ目がナデ消されている。6期の土器様相である。

SB65 図版102

食器は黒色土器Aが主体で、須恵器は少ない構成になっている。黒色土器Aは杯A II(1・2)と杯A I(3)・皿B(4・5)がある。煮炊具は土師器甕B(9・10)・甕C(11)・小型甕Dで構成される。甕Bは口縁部がやや立ち気味で、9は口径22.1cm・器高30.8cm・底径8.7cmである。甕Cは口縁部が「コ」字状に開く形態である。13は須恵器の壺で口頸部が小さく締まる形態となるが、完形となる類例がなく器形は定かでない。体部外面下半は横方向のヘラ削り、内面は体部下半を指ナデしている。頸部には接合痕が見える。7期の土器様相である。

SB66 図版103

食器は須恵器(3～6)と黒色土器A(1・2)で構成され、須恵器が黒色土器Aを上回っている。黒色土器Aには皿B(2)がある。土師器甕B(8)は口縁部が短く外反する形態である。9はSB65の13に類似する須恵器壺で、頸部には接合痕が見える。6期の土器様相である。

SB67 図版103

遺物は少ない。底部回転糸切りの須恵器杯A(1)と土師器小型甕B(2)の2点が図示できた。2は体部外面に横方向のハケ目の後縦方向のハケ目を施し、内面は指ナデで調整するが、粘土紐の積み上げ痕が見え

る。5期の土器様相と思われる。

SB68 図版103

食器は黒色土器Aと須恵器がほぼ同量で構成されている。黒色土器Aは杯A I (3・4)とII (1・2)、須恵器は杯A (6~8)と杯蓋B (5)のみである。11は須恵器短頸壺C、12は須恵器で注口部と思われるが器種は不明である。6期の土器様相である。

SB69 図版103

遺物は少なく小片で、2点が図示できたのみである。1・2は須恵器杯Aで底部回転糸切りである。このほか須恵器杯Aには回転ヘラ切りかと思われるものも1点ある。土師器甕Bは内面にもハケ目調整を施す。須恵器の中には杯A・杯B・甕に美濃須衛窯産製品がある。4~5期の土器様相と考えられる。

SB70 図版103

食器は黒色土器A (1・2)と須恵器 (3~5)で構成されるが、量は須恵器が多い。煮炊具、貯蔵具はいずれも小片である。須恵器杯Aは底部回転糸切りで体部の開きが強い形態である。6期の土器様相である。

SB71 図版103

煮炊具と貯蔵具のみである。1は土師器小型甕Bで内面にも横方向のハケ目が施される。2の甕Cは緩く外反する口縁部である。3は短頸壺Dである。5期の土器様相と考えられる。

SB72 図版104、第101図、第6表、
PL52・53

食器の量が多いのに比して、煮炊具・貯蔵具、特に煮炊具の量が少ない。須恵器主体の食器構成で土師器杯Cと黒色土器A杯Aが加わる。1の土師器杯Cは口径11.6cm・器高4.3cmで底面外周から体部下半にかけてヘラ削り、内面には放射状暗文が施される。黒色土器A杯A (2~4)は底部回転糸切り未調整である。須恵器杯Aは55個体が識別できるが、すべて回転糸切りである。法量は口径12~13.6cm・器高3.1~4.1cm底径5.4~7.4cmで、底径が大きく体部の開きの弱いものが多い。また5・7・15~17に見られるように、底面で回転糸切りした面と、ロクロで体部を挽き出した面との間に段があるものが目立つ。杯BはII・III・IV・Vがあり、23・24・25・27は底面中央に糸切り痕が残る。杯Bには美濃須衛窯産製品が1点ある。煮炊具は28の小型甕Dが図示できるのみである。5期の土器様相である。

SB73 図版104

遺物は少ない。食器は黒色土器A (1・2)と須恵器 (3)で構成されており、黒色土器Aの量が多い。図示したものは杯Aでいずれも底部回転糸

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	杯 C	2	60	2%	1
黒色土器A	杯A I	1	50		10%
	杯A II	9	730	2・3	
須恵器	杯 A	55	3310	92%	5~17
	杯B II	1	190		27
	杯B III	3	380		26
	杯B IV	13	660		23~25
	杯B V	3	180		22
	杯 B	2	240		
	杯蓋B	17	480		18~21

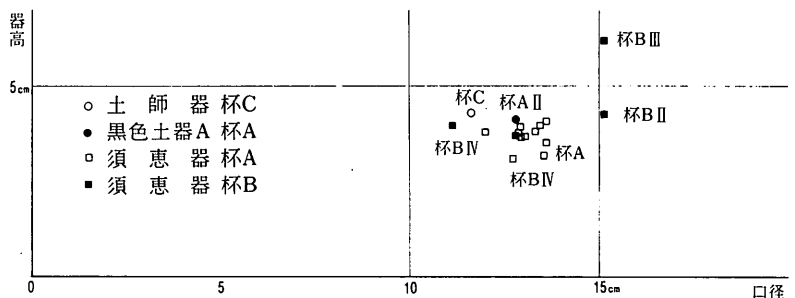
煮炊具

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	甕 B	4	300	11%	
	小型甕B	1	60		
	小型甕D	6	670		28

貯蔵具

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
須恵器	長頸壺A	3	510	8%	
	甕 D	1	20		
	甕 A	2	900		29
	甕	2	240		

第6表 SB72 出土土器の構成



第101図 SB72出土土器法量分布図

切りである。4の土師器甕Bは口縁部が短く強く外反する。6期の土器様相と考えられる。

SB74 図版104

食器の量が多いが煮炊具・貯蔵具は量が少なく小片で図示できるものはない。食器は須恵器主体で、土師器杯Cと黒色土器A杯A I (1)・II (2)が少量加わる。須恵器杯A (3~9)はすべて底部回転糸切り、杯BはIII (10・11)・IV (12・13)の2法量がある。10・11は底面の中央部に糸切り痕が残る。杯蓋B (14~17)は口縁部を屈曲させる。5期の土器様相である。

SB76 図版105、第102図、第7表、PL53・54

食器は黒色土器Aと須恵器・灰釉陶器がある。量的には杯Aで比較すると、個体数で黒色土器A21個体に対し須恵器16個体と黒色土器Aがやや多い構成である。黒色土器Aは杯A I (1~5)・II (6~13)・椀 (14)・皿B (15~18)がある。1~16は底部に糸切り痕が観察でき、17・18は底面に回転ヘラ削りをほどこしている。須恵器杯A (20・21)は底部回転糸切り、23は盤の脚台と思われる、透かしの円孔を3方にうがつ。24・25は灰釉陶器で、内面に自然降灰の釉が掛る黒笹14号窯式である。煮炊具は土師器甕B (26)・甕C・小型甕Dがある。須恵器貯蔵具のなかには胎土が緻密で搬入品と思われる、須恵器長頸壺A・甕などがある。6~7期の土器様相である。

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A I	7	300	28 38%	1~5
	杯A II	14	500		6~13
	椀	1	90		14
	皿B	6	625		15~18
須恵器	杯A	16	1885	43 59%	19~20
	杯B III	2	120		21
	杯B IV	10	340		22
	杯B V	1	20		
	杯蓋B	13	365		
	盤	1	200		23
灰釉陶器	椀	2	75	3%	24・25

土師器	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	甕B	4	5960	9 10%	26
	甕C	3	330		
	小型甕D	2	135		

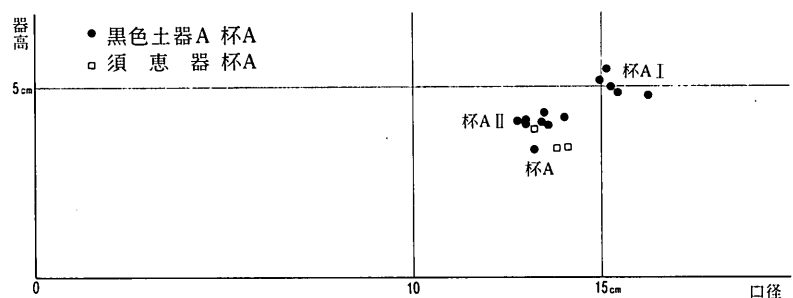
須恵器	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
須恵器	長頸壺A	2	130	11 27%	
	甕D	1	1150		
	甕A	7	20630		27
	壺蓋A	1	5		

第7表 SB76 出土土器の構成

SB77 図版105・106

食器は黒色土器Aと須恵器があり、杯Aで比較すると黒色土器Aがやや多い構成である。黒色土器Aは杯Aが主体で椀は1点のみ、皿Bはない。杯Aでは2・3・5のように底部に回転ヘラ削りを加えるものがある。須恵器杯Aは回

転糸切り未調整で、体部の開きが大きい。煮炊具は土師器甕B (13)・甕C・小型甕D (14)がある。甕Bは口縁部が直線的に開く形態である。貯蔵具は須恵器のみだが、多様な器種がある。長頸壺A (18)・把手付き長頸壺A (17)・壺蓋A (15)・短頸壺A (16)・甕D・甕Aなどで、このなか



第102図 SB76出土土器法量分布図

には胎土が緻密で一見して他産地からの搬入品と思われるものが含まれている。6~7期の土器様相である。

SB78 図版106

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されており、須恵器のほうが量が多い。1の黒色土器A杯Aは横方向のヘラ磨きが内面下半にまで及んでいる。2は杯A Iである。須恵器杯BはIV (6)を図示したがこの他にIIIがある。また、6の底部中央には糸切り痕が見える。10は須恵器甕Dで肩の部分に断面四角形の凸帯を貼

付する。残存部位が少ないため耳の存否は不明である。外面体部下半はタタキ目をヨコナデで消している。5期の土器様相である。

SB82 図版106

食器は黒色土器Aと須恵器があるが、量は須恵器のほうが多い。2は黒色土器A鉢Aの底部を穿孔したもので、底面には糸切り痕が残る。3・4は須恵器杯で底部回転糸切り、7は須恵器甕の口頸部で頸部外面にタタキ目が観察できる。6期の土器様相である。

SB83 図版106

遺物は少なく、底部回転糸切り未調整の須恵器杯A(1)と、杯B III(2・3)が図示できるのみである。5期の土器様相である。

SB84 図版107、第8表、PL55

食器は須恵器が主体で、黒色土器A杯Aと土師器杯Cが少量入っている。1・2は黒色土器A杯A IIで

底部回転糸切りである。須恵器杯Aは回転糸切り9個体に対し回転ヘラ切り5個体が識別できる。3～5は回転ヘラ切り未調整、6・7は回転糸切り未調整で、底部小さく体部が直線的に開く形態で、黒色土器Aを含めて遺構の重複により6期あるいは7期の土器の混入の可能性もある。8～10は杯蓋Bである。杯BはIV(11)とIII(12・13)があり、11には底面中央に糸切り痕が残る。14は口径17.4cm・残存高8.3cmで底面を回転ヘラ削りしており、厚手の体部で高台は付かないものと判断される。煮炊具は土師器甕A・甕B(15～18)・甕C・小型甕A(19)がある。甕Bでは、いずれも外面は縦方向のハケ目調整、16・17は内面にハケ目調整を施す。16は底部に木葉痕がある。貯蔵具は短頸壺B(20)・横瓶(21)・甕がある。21は体部にタタキ目が残る器体の短いもので美濃須衛窯産と考えられる。4期の土器様相である。

SB85 図版108、第9表、PL55

食器の主体は須恵器で構成されている。須恵器杯Aは底部回転ヘラ切り3個体、回転糸切り4個体が識別できる。1・2が回転ヘラ切り、3・4が回転糸切りである。杯蓋B(5)は口径19.2cmを測る。6の杯Bは灰白色の緻密な胎土で搬入品と考えられるが、産地は不明である。煮炊具は土師器甕A・甕B(8～10)・甕C(7)があり、甕Cは「く」字状に外反する形態である。3期の土器様相である。

SB87 図版108

1は黒色土器A椀である。2～5は須恵器杯

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	杯 C	1	10	} 3%	1・2
黒色土器A	杯A II	4	65		
須恵器	杯 A	14	640	} 29 50%	3～7
	杯B III	3	120		12・13
	杯B IV	1	30		11
	杯蓋B	5	100		8～10
	椀 A	1			14

土師器	甕 A	5	2670	} 18 21%	15～18
	甕 B	9	8155		
	甕 C	1	5		
	小型甕A	3	240		19

貯蔵具

須恵器	短頸壺B	1	70	} 11 19%	20
	甕	8	1920		
	横瓶	1	1860		21
	その他	1	40		

第8表 SB84 出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A II	1	20	} 8%	1～4
須恵器	杯 A	7	400		
	杯B IV	2	350	} 11 92%	6
	杯蓋B	2	30		5

煮炊具

土師器	甕 A	2	1360	} 10 37%	8～10
	甕 B	7	5690		
	甕 C	1	220		

貯蔵具

須恵器	甕 D	1	80	} 5 19%	
	甕	4	340		

第9表 SB85 出土土器の構成

Aですべて回転糸切りである。2～4が底径の大きな体部の開きの弱いものであるのに対して、5は体部が直線的に開く形態である。須恵器甕に美濃須衛窯産があり5期の土器様相であると思われる。1・5は7期の土器の混入であろう。

SB88 図版108

食器は須恵器と黒色土器Aで構成されているが、須恵器が多い。煮炊具は甕B(3・4)のみで口径23cm・器高35.2cm・底径9cmと両者ほぼ同法量である。体部は薄く仕上げ、口縁部は直線的に伸びる形態で類似している。6期の土器様相である。

SB89 図版109、第103図、第10表、PL56

黒色土器Aが主体の食器構成である。黒色土器Aには杯A II(1～4)・杯A I(5・6)・椀・皿B(7・8)がある。9は須恵器杯A、10・11は軟質須恵器である。12は灰釉陶器皿で内面にはトチンの目跡が3カ所にあり、自然降灰の釉が全面に掛る黒笹14号窯式である。煮炊具は土師器甕B(13・14)と小型甕Dがある。甕Bは器高が低く底径の大きな形状で、口縁部は直線的に伸びる、14は底部外周をヘラ削りしている。完形に復元できる14の法量は口径20.4cm・器高30.4cm・底径9.8cmである。貯蔵具はすべて須恵器で15は長頸壺A、16は甕Dで肩の凸帯は小さい断面三角形で、残存が少なく耳が貼付されるかどうかは不明である。7期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A I	2	220	23 65%	5～6
	杯A II	14	1150		1～4
	椀	3	190		
	皿B	4	310		7・8
須恵器	杯A	6	230	8 23%	9
	杯蓋B	2	20		
軟質須恵器	杯A	3	120	9%	10・11
灰釉陶器	皿	1	210	3%	12

煮炊具

土師器	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
	甕B	9	5930	12 23%	13・14
	小型甕D	3	260		

貯蔵具

須恵器	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
	長頸壺A	1	200	6 11%	15
	甕D	1	600		16
	甕	3	300		
	平瓶	1	10		

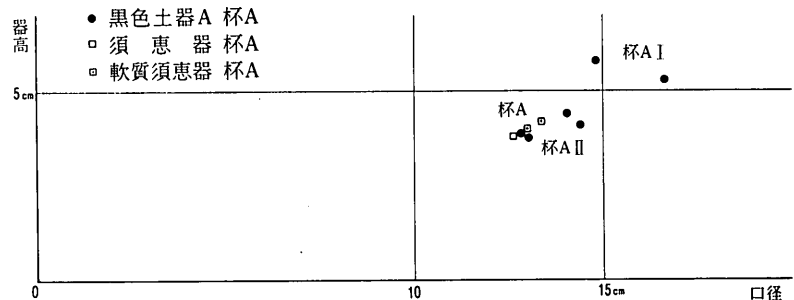
第10表 SB89 出土土器の構成

SB90 図版109

須恵器が主体の食器構成である。須恵器杯A(2～5)は底部回転糸切りである。8は須恵器鉢Aで底部を回転糸切りする。5期の土器様相である。

SB91 図版110

須恵器を主体とする食器構成である。須恵器杯A(2～6)は底径が小さく



第103図 SB89出土土器法量分布図

く体部の開きが大きい形態である。7は土師器甕Bで口縁部の外反は強い。6期の土器様相である。

SB92 図版110～112、第104図、第11表、PL57・58

土器の量が非常に多い遺構である。特に食器の量が多く器種も豊富である。食器は黒色土器Aと須恵器で構成されており、他に灰釉陶器が2片と土師器盤A 2個体、赤彩土器杯・鉢(17)の2個体がある。黒色土器Aは杯A I・II、椀・皿B・鉢Aがある。杯A・鉢Aは回転糸切り未調整を基本とするが1・3・11・13は底面あるいは底面から底部周辺にかけての範囲を回転ヘラ削りしている。11は底部周辺を手持ちヘラ削りする。3・7は口縁部に煤が付着しており灯火器として使用されたものと思われる。12の椀は角高台を有する。黒色土器Aは全体に磨きが丁寧で、黒色処理も厚くなされている。赤彩土器は黄褐色の軟質の胎土に赤彩を施したもので、SB148・SD108・SX30などに類例があるほかは、松本平の他の遺跡では見ら

れない種類の土器である。須恵器は147個体を数える。杯A、杯B II・III・IV・V、杯蓋B、盤、高杯、鉢Aがある。杯Aはすべて回転糸切り未調整である。杯蓋B(51)はくびれの無いつまみが付く。杯Bでは58・59の体部の立ち上がりは稜をもって立ち上がり、腰に丸味のあるなだらかな立ち上がりとなっている。54・55・58・63の底面中央には糸切り痕が残る。高杯は口縁部を折り曲げて「S」字状に屈曲させるもので、杯部外面は広く回転ヘラ削りし、外径で5.6cmの脚台を貼り付ける。杯部の内面中央には木葉痕が残っている。69は鉢としたが類例は少ない。煮炊具は甕Bと小型甕Dのみで量も食器の量に比して少ない。80はほぼ完形に復元でき、口径22.5cm・器高33.8cm・底径8.6cmで口縁部が短く強く外反する、底径の小さな形態である。貯蔵具は多様な器種がある。75は灰色の緻密な胎土で天井部に緑色の釉が厚く掛る。78も灰白色の胎土で全体に自然釉が掛り灰釉陶器と区別できない。6期の土器様相である。

SB93 図版112

黒色土器Aが主体の食器構成で、須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器が少量入る。須恵器と軟質須恵器は小片で図示できない。灰釉陶器皿5は体部外面ヘラ削り、口縁端部は丸く納める。6は三日月高台である。7は角高台で内外面に釉が掛る。8の小瓶は底部回転糸切り、9は灰釉陶器長頸壺である。灰釉陶器は7が黒笹14号窯式の他は光ヶ丘1号窯式である。7期の土器様相である。

SB95 図版112

食器は須恵器のみである。1の須恵器杯Aは底部回転糸切り。3の杯

B IIIの底部中央には糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕C(4)と小型甕Dがあるが甕Bはない。甕Cは口縁部が「く」字状に外反する形態である。5は須恵器短頸壺で体部外面下半は回転ヘラ削りを施す。6は口頸部が短い甕Cで、タタキ調整の後外面はヨコナデする。底部内面には指オサエのあとが残る。5期の土器様相である。

SB96 図版113、第12表、PL59

食器は土師器・黒色土器A・黒色土器B・須恵器・灰釉陶器がある。主体となるのは黒色土器Aである。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図NO
土師器	盤A	2	380	1%	70
黒色土器A	杯A I	4	180		50 25%
	杯A II	41	1900	1~11	
	椀	1		12	
	皿B	3	140		
	鉢A	1			
	不明		1330		
赤彩土器	杯	1	20	2 1%	
	鉢	1	60		17
須恵器	杯A	103	9370	147 72%	18~49
	杯B II	5	700		57~58
	杯B III	5	770		59~63
	杯B IV	11	1030		55~56
	杯B V	3	110		54
	杯蓋B	14	800		50~53
	盤	2	120		64~68
	鉢A	2	1250		71~72
	鉢	1	170		69
	高杯	2	600		65~67
	不明	1			
灰釉陶器	不明	2	10	1%	

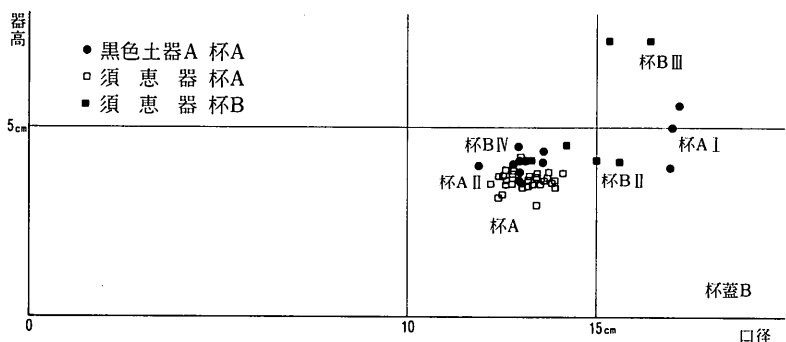
煮炊具

土師器	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図NO
	甕B	7	3610	16 7%	80・81
	小型甕D	9	780		79

貯蔵具

須恵器	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図NO
	長頸壺A	4	760	19 95%	76
	長頸壺C	2			73~74
	壺蓋A	1	130		75
	壺A	6	7630		77
	壺D	6	3560		78
灰釉陶器	長頸壺	1	40	5%	

第11表 SB92 出土土器の構成



第104図 SB92出土土器法量分布図

11は黒色土器A皿Bであるが、底部回転糸切りのまま高台を付けてない。12~14は須恵器杯A、15は高杯である。16は杯Aに含めたが、口径20.4cmを測る大形で、底面は広い範囲にわたって回転ヘラ削りを施している。灰釉陶器は、17が段皿で器肉は厚く灰白色、内面に厚く釉が掛る。角高台で黒笹14号窯式である。18~21は三日月高台の付く椀で、口縁部は外反し施釉はハケ塗りである。光ヶ丘1号窯式に属する。22は土師器の鉢で体部外面を手持ちヘラ削り、口縁部を折り曲げて直立させる。調整にロクロは用いていない。貯蔵具は灰釉陶器短頸壺(25)と長頸壺(24)がある。須恵器は長頸壺A(23)と甕(26)である。煮炊具は土師器甕B(28・29)・甕C・小型甕D(27)である。7期の土器様相である。

SB97 上層 図版114、第105図、PL60・81

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。土師器では14の高杯脚部がある。外面を縦ヘラ削りによって8~9面に面取りし、内面には絞り目が見える。明褐色の緻密な胎土で一見して在地産でないことが知れ、畿内産の可能性もある。黒色土器A杯Aはすべて回転糸切り未調整で、内面の磨きは粗い。灰釉陶器は19・22が黒笹14号窯式、20・21が光ヶ丘1号窯式である。緑釉陶器は円盤状の高台破片でSB100の18と接合し、SB100に図示してある。23の土師器甕Bは口縁部を肥厚させる。7期の土器様相である。

SB97 下層 図版114~116、第106図、PL60・61

食器は黒色土器A・赤彩土器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。55は黒色土器A皿で口縁部を波状にする。赤彩土器の皿Bは、内外面全面をヘラ磨きし赤彩を行うもので、黒色土器Bの黒色処理を赤彩に置き換えたものである。形態的にも黒色土器B皿Bと同様である。須恵器杯Aは底部回転糸切りで体部の外径の強い形態である。84は高杯杯部で口縁部を短く折り曲げ外反させて口縁

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	鉢	1	100	2%	22
	杯A II	19	850		1~4
黒色土器A	椀	8	380	34 52%	5~9・11
	皿B	6	495		
	鉢A	1	190		
	不明		580		
黒色土器B	皿B	1	125	2%	10
須恵器	杯A	11	540	23 35%	12~14・16
	杯B IV	4	120		
	杯蓋B	7	200		
	高杯	1	50		
灰釉陶器	鉢A	1	50	6 9%	18~21
	椀	5	305		
	段皿	1	60		

煮炊具

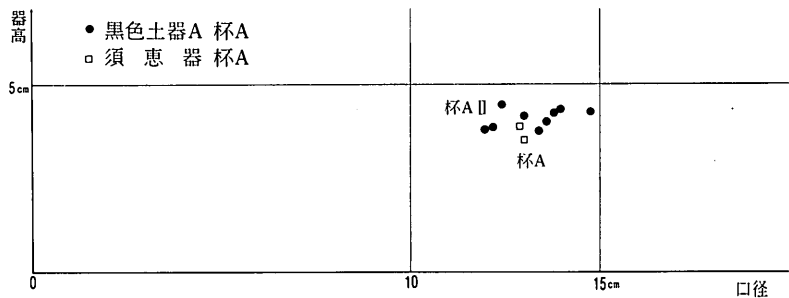
種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	甕B	16		22 23%	28・29
	甕C	1	20		27
	小型甕D	5	1240		

貯蔵具

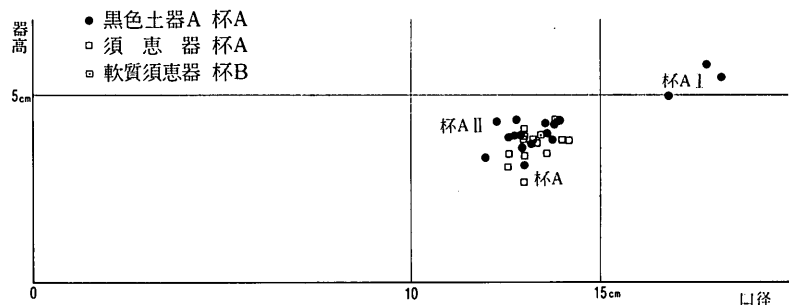
種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO	
須恵器	長頸壺A	2	810	5 63%	23	
	壺蓋A	1	180		8 8%	26
	甕A	2	6480			24
灰釉陶器	長頸壺	2	340	3 37%	25	
	短頸壺	1	90			

第12表 SB96出土土器の構成

面取りし、内面には絞り目が見える。明褐色の緻密な胎土で一見して在地産でないことが知れ、畿内産の可能性もある。黒色土器A杯Aはすべて回転糸切り未調整で、内面の磨きは粗い。灰釉陶器は19・22が黒笹14号窯式、20・21が光ヶ丘1号窯式である。緑釉陶器は円盤状の高台破片でSB100の18と接合し、SB100に図示してある。23の土師器甕Bは口縁部を肥厚させる。7期の土器様相である。



第105図 SB97上層出土土器法量分布図



第106図 SB97下層出土土器法量分布図

帯を作っている。灰釉陶器は86・87で86は光ヶ丘1号窯式、87は黒笹14号窯式である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Cで、図示した甕Bは口縁部を短く「く」字状に外反させ、外面のハケ目と内面のナゲアゲで器厚は薄く仕上げている。6～7期の土器様相である。

SB99 図版116、第107図、第13表、PL61・62

食器は黒色土器A(1～7・13～16)・須恵器(8～10)・軟質須恵器(11)・緑釉陶器(12)・灰釉陶器がある。緑釉陶器は円盤状に削り出した高台の破片で底面まで施釉している。底径4.8cmを復元できる。胎土は浅黄色で焼成は堅緻である。17は土師器盤Aで口縁部は外反させて丸くおさめる。煮炊具は土師器甕B・甕C(18)・小型甕Dで構成されている。貯蔵具は須恵器長頸壺A・壺蓋A・甕A(20)・甕D、灰釉陶器長頸壺Aがある。7期の土器様相である。

SB100 図版117、第14表、PL62・63・81

食器は黒色土器A(1～7・19)・赤彩土器(8・9)・須恵器(11～13)・灰釉陶器(14～17)・緑釉陶器(18)がある。黒色土器A碗(5)は角高台を貼付する。6・7は皿Bとしたが器高が3.3cmとやや深い。8・9は内面をへら磨きし赤彩処理を施すもので底部には糸切り痕が残る。13は高い高台を付す須恵器皿Bである。灰釉陶器は14・16がハケ塗り施釉三日月高台の碗で、15は内面ハケ塗り角高台の碗で、17は狭縁の段皿で内面に自然降灰の釉が厚く掛る。15・17が黒笹14号窯式、14・16が光ヶ丘1号窯式である。18は緑釉陶器碗で円盤状の高台で、口縁部は外反する。口径13.4cm・器高3.7cm・底径6.2cmの法量で胎土は浅黄色の軟質で釉は底面も含め全面に掛けられる。釉は半透明の白色を呈する。器面へのへら磨きは残存部からは認められない。煮炊具は土師器甕B(21・22)と小型甕D(20)の二者である。甕Bは口縁部が肥厚して直線的に立つタイプである。23は長頸壺Cで底部に糸切り痕を残し体部・口頸部の外面にはロクロ目が強く残る。口頸部は体部と別々に作って後接合している。7期の土器様相である。

SB101 図版117・118、PL63

食器は黒色土器Aが主体である。1は黒色土器A杯A Iで、底部中央にやや斜め方向に焼成後穿孔している。9～11の碗・皿Bにも底部に糸切り痕が見える。甕B(12)は口縁部が直線的に伸びる形態で口径21.6cm・器高31.4cm・底径9.8cmである。7期の土器様相である。

SB102 図版118

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	盤 A	2	1000	} 3%	17
黒色土器 A	杯 A I	1	60		} 39 52%
	杯 A II	30	1590	1～4	
	皿 B	2	150	6・7	
	鉢 A	6	1440	13～16	
須恵器	杯 A	18	810	} 30 39%	8・9
	杯 B IV	6	140		10
	杯蓋 B	6	100		
軟質須恵器	杯 A	1	120	} 1 14%	11
緑釉陶器	碗	1	10		} 1 1%
灰釉陶器	皿	1	2	} 3 43%	
	不明	2	2		

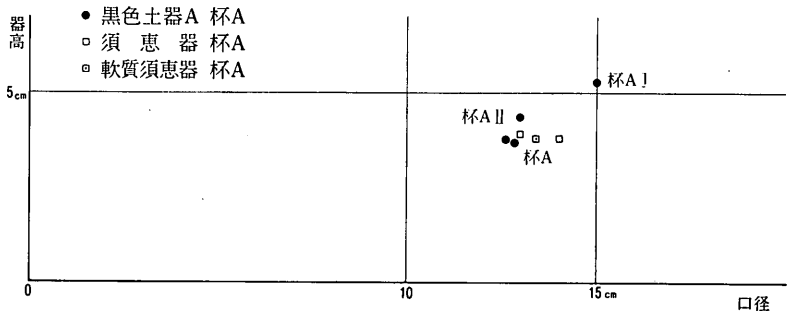
煮炊

土師器	甕 D	6	1640	
	甕 C	1	210	18
	小型甕 D	4	250	19

貯蔵具

須恵器	長頸壺 A	3	90	} 15 63%	} 18 17%
	壺蓋	1	5		
	甕 D	1	60		
	甕 A	10	14860		
灰釉陶器	長頸壺	2	120	} 3 17%	
	広口瓶	1	140		

第13表 SB99出土土器の構成



第107図 SB99出土土器法量分布図

のへら磨きは残存部からは認められない。煮炊具は土師器甕B(21・22)と小型甕D(20)の二者である。甕Bは口縁部が肥厚して直線的に立つタイプである。23は長頸壺Cで底部に糸切り痕を残し体部・口頸部の外面にはロクロ目が強く残る。口頸部は体部と別々に作って後接合している。7期の土器様相である。

黒色土器A主体の食器構成である。2の黒色土器A杯A IIは底部を手持ちヘラ削りする。6・7は底部回転糸切りの須恵器杯Aである。8は鉢Aで外面上半に炭化物の付着が見られる。7期の土器様相である。

SB103 図版118

黒色土器A主体の食器構成である。7は須恵器甕Dと思われ、底部周辺外周は手持ちヘラ削りを施す。7期の土器様相である。

SB104 図版119

黒色土器A主体の食器構成である。1はロクロ調整を施すもので、底部の調整は不明、土師器杯Aである。6・7は底部回転糸切りの須恵器杯Aで、体部の開きの強い形態である。7期の土器様相である。

SB105 図版119

黒色土器Aと須恵器で食器は構成されるが、黒色土器Aが多い構成である。黒色土器A杯Aは内面のヘラ磨きが粗いものが多く、2・4では口縁部は横方向に比較的丁寧に磨かれるが、

内面中ほどでは縦方向のヘラ磨きの間隔が粗く、ヘラ磨きの間にロクロ目が観察できる程である。須恵器杯A (10~15)は体部の開きの強い形態で、器壁は薄く外面のロクロ目が目立つ。煮炊具は土師器甕B (19)・甕C (20)・小型甕D (17・18)があり、甕Cは「コ」字状の口縁部である。7期の土器様相である。

SB106 図版119

須恵器が主体の食器構成で、土師器杯Cが1点ある。1は土師器杯Cで外面はロクロ調整の後下半を手持ちヘラ削りし、内面には放射状の暗文が施される。口径11cm・器高4.2cmを測る9の須恵器杯B IIIは、体部の立ち上がりにはっきりした稜を持たず丸味をもって立ち上がる形態である。12の土師器甕Cは「コ」字状口縁である。6期の土器様相である。

SB107 図版120

須恵器が主体の食器構成である。須恵器杯A (2~4)は体部の開きが強い。煮炊具は土師器甕B (7)と甕Cのみで小型甕Dはない。6期の土器様相である。

SB108 図版120

食器は黒色土器Aと須恵器があるが、須恵器がやや多い構成である。6期の土器様相である。

SB109 図版120

食器は黒色土器Aが主体の食器構成である。黒色土器Aは杯A II (1・2)・杯A I (3・4)・皿B (5・6)・鉢A (8)がある。須恵器は底部回転糸切りの杯A (7)が1点のみ図示できた。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕D (9・10)があり、9は静止糸切り後底部外周を手持ちヘラ削りしている。11・12は須恵器甕Dと思われ、12は底部周辺を手持ちヘラ削りしている。7期の土器様相である。

SB110 図版120・121

食器は黒色土器A (1・2)と須恵器 (3~6)があり、量的には須恵器が多い構成である。須恵器杯Aでは4

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器 A	杯 A I	1	50	19 38%	1~3 4・5 6・7 19
	杯 A II	9	495		
	椀	3	120		
	皿 B	5	260		
	鉢 A	1	140		
	不明		130		
赤彩土器	皿 B	3	40	6%	50
須恵器	杯 A	13	495	21 42%	70% 8・9 10 12 11 13
	杯 B IV	2	35		
	杯蓋 B	4	180		
	皿 B	2	25		
緑釉陶器	椀	1	15	2%	18
灰釉陶器	椀	4	210	6 12%	14~16 17
	段 皿	2	15		

煮炊具

土師器	甕 B	7	2400	11 15%	21・22
	小型甕 D	4	270		20

貯蔵具

須恵器	長頸壺 A	2	210	8 80%	10 14%
	長頸壺 C	1	350		
	甕	5	1465		
灰釉陶器	長頸壺	1	45	2 20%	
	壺蓋 A	1	10		

第14表 SB100出土土器の構成

は3に比べ体部の開きの弱いのもで形態的には古い様相である。煮炊具は土師器甕B(10)・甕C(7・8)・小型甕Dがある。7・8は口縁部形態に相違があり7は「コ」字状、8は「く」字状となるが両者ともにカマド中よりの出土である。6期の土器様相である。

SB111 図版121、第108図、第15表、PL64・65

黒色土器Aが主体の食器構成である。黒色土器Aは杯A I(1・2)・杯A II(3~8)・椀(9~11)・皿(12・13)ですべての底部に糸切り痕が残る。須恵器杯A(14)は体部の開きが強い形態である。16の灰釉陶器椀は自然降灰による釉が内面全体に掛る黒笹14号窯式である。煮炊具は甕B(20)と小型甕D(17~19)があるが、小型甕Dは17が口径8.5cm・器高8.1cm、18は口径12.5cm・器高13.7cm、19が口径15.2cm・器高17.1cmとそれぞれ相似形状に法量に差がある。遺構の項で述べたように、この竪穴住居址は火災にあっており竪穴の北西の隅に一括して土器が使用の状況を留めたような状態で出土した。4・8・9・10・11・12・18・19・21がまとまって出土した資料で、それらは完形に復元できた。このうち12の黒色土器A皿Bが18の土師器小型甕Dの蓋として、11の黒色土器A椀が21の須恵器横瓶の蓋として利用されており、土器の使用を考えるうえで興味深い。7期の土器様相である。

食器

種類	器類	個体数	重量(g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A I	3	495	18 69%	1・2
	杯A II	10	960		3~8
	椀	3	670		9~11
	皿B	2	205		12・13
須恵器	杯A	5	65	7 27%	14
	杯B IV	1	40		15
	杯蓋B	1	5		
灰釉陶器	椀	1	5	4%	16

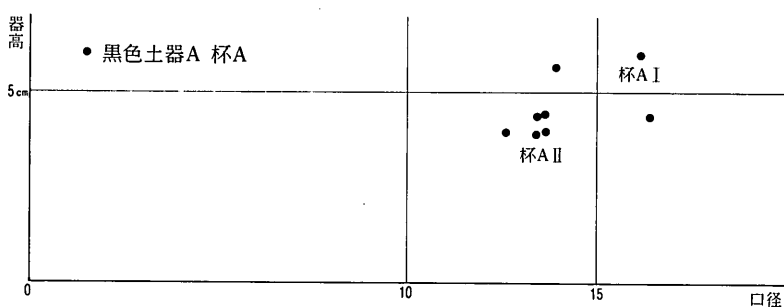
煮炊具

土師器	甕B	4	2780	9 23%	20
	小型甕D	5	1370		17~19

貯蔵具

須恵器	甕	3	210	4 10%	21
	横瓶	1	3640		

第15表 SB111出土土器土器の構成



第108図 SB111出土土器法量分布図

SB112 図版122

遺物は少ない。食器は黒色土器A(1)・須恵器(2)・灰釉陶器(3)がある。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕Bのみ。口縁部が直線的に伸びる形態(4)で、外面下半の底部周辺にヨコナデを施している。7期の土器様相である。

SB114 図版122

黒色土器A主体の食器構成である。黒色土器Aは杯A II(1)・椀(2・3)・皿B・鉢Aがある。須恵器は杯Aと皿B(4)である。灰釉陶器(5)は黒味の強い灰白色の胎土で、外面下半は回転ヘラ削りする。内面全体に自然降灰の釉が掛り内面底部にトチンの目跡が残る。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で、須恵器長頸壺A(9)・短頸壺D(7)・甕D(8)・甕A、と灰釉陶器長頸壺である。7期の土器様相である。

SB115 図版122・123

溝址との重複で遺物の混入が予想される。食器は黒色土器A(1~7)・須恵器(8~22)・灰釉陶器(23・24)がある。須恵器杯Aは底径の大きな体部の開きの比較的弱い形態が多く、14は底面の内面にも体部の接合の剝離したあとに糸切り痕が観察できる。須恵器杯BはV(18)・IV(19)・III(20・21)があり、22は皿Bである。23・24の灰釉陶器椀は黒笹14号窯式である。煮炊具は土師器甕B(27~29)・小型甕D(25・26)の組み合わせである。貯蔵具は須恵器で甕(32)・甕D・長頸壺A(30)・短頸壺A(31)がある。短頸壺と長頸

壺は内面の自然釉の位置と大きさにより判断された。6～7期の土器である。

SB116 図版123

遺物は少ないが、黒色土器A主体の食器構成である。6は口縁部が外反する黒色土器B皿である。9・10は光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器椀底部で、9は高台の大きさに合わせて再調整している。11は土師器小型甕Bで内面にも横方向のハケ目を施している。13は須恵器甕Cである。7期の土器様相である。

SB117 図版124

黒色土器A主体の食器構成で、5は軟質須恵器である。煮炊具は土師器甕B(6～8)のみ、8は肥厚する口縁部が直線的に開く形態で、体部のハケ目は浅く施され、体部下半底面外周は手持ちヘラ削りされている。7期の土器様相である。

SB118 図版124

須恵器主体の食器構成で、1は底部回転糸切り、煮炊具土師器甕B・甕C・小型甕B(2)・小型甕D(3)がある。甕Cは図示できないが、口縁部が「く」字状に開く形態である。5期の土器様相である。

SB119 図版124

須恵器主体の食器構成で、須恵器杯A(2～4)は底径が大きく体部の開きが弱い形態である。7の土師器甕Bも口縁部が短く強く外反している。5期の土器様相である。

SB120 図版124

食器は須恵器のみ。1は須恵器杯Cで底面は全面を回転ヘラ削りし底面を屈曲させる。2～4は杯Aで、2・3は底部回転ヘラ切り、4は回転糸切りで底部外面が段をなす形態である。煮炊具は甕A・甕B(6～8)・小型甕D(5)がある。甕Aの底部には木葉痕が残るものが1点ある。6・7は内面にもハケ目を施し、7の底面には靱圧痕が付く。4期の土器様相である。

SB121 図版125、第109図、第16表、PL65

須恵器主体の食器構成である。須恵器杯A(2～5)は底部回転糸切り、杯BにはII(12)・III(9～11)・IV(7・8)の各法量がある。貯蔵具は須恵器のみで大形の甕類が多いが、中に美濃須衛窯産製品を含んでいる。5期の土器様相である。

SB122 図版125

食器は黒色土器A・須恵器で構成され、量的には両者が拮抗している。黒色土器Aは杯Aのみで椀・皿類はない。須恵器も杯A(7～12)が主体で底部回転糸切り、体部の開きの強い形態である。15は土師器甕Bで口縁部が直線的に伸びる形態である。6期の土器様相である。

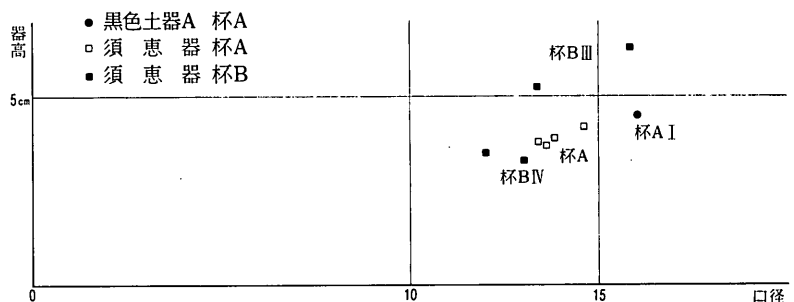
SB123 図版125

食器					
種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A I	1	20	59%	1
	杯A II	3	60		
	鉢 A	1	610		
黒色土器A	杯 A	24	1285	1869%	2～5
	杯B II	1	80		12
	杯B III	3	245		9～11
	杯B IV	9	520		7・8
	杯蓋B	12	375		6
	鉢 A	1	40		

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	甕 A	6	580	2226%	14
	甕 B	13	960		
	甕 C	1	170		
	小型甕D	2	110		
	不明		1035		

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
須恵器	甕	7	5470	8%	13

第16表 SB121出土土器の構成



第109図 SB121出土土器法量分布図

食器はきわめて少なく3片のみで、すべて図示した。2は土師器盤で体部にタタキ目が残る。5～6期の土器様相である。

SB124 図版126、第110図、第17表、PL65・66

食器は須恵器主体で黒色土器Aが2点ある。ロクロ調整の黒色土器A杯A(1・2)は、体部が口縁付近でやや内湾する形態となる。1が口径15cm、2が口径16.2cm・器高5.8cmを測る。底部外面は切り離し後全面を手持ちヘラ削り、内面のヘラ磨きは非常に丁寧で方向は見にくい、全面横方向であろう。須恵器杯Aは11個体識別でき、そのうち回転糸切りが10個体(3～5)、回転ヘラ切りは1個体(6)である。杯BはIV(9～11)・III・II(12)の各法量がある。このうち12は口径16.8cm・器高5.2cmと大形で5期以降には認められない法量である。煮炊具は土師器甕B(13・14)・甕C・小型甕D(15)で、15は底部静止糸切りである。貯蔵具は須恵器長頸壺・甕A・甕D(16)がある。16は頸部もタタキ調整を行なう。須恵器のうち杯蓋B(8)と甕に美濃須衛窯産がある。17は須恵器で灰白色の胎土で美濃須衛窯産に近く、口径45cmに復元できるが器種は不明である。4期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土A	杯A I	2	200	7%	1・2
	杯A	11	435		3～6
須恵器	杯B II	1	1170	27 93%	12
	杯B III	2	30		9～11
	杯B IV	5	185		
	杯蓋B	6	140		
	他	2	50		17

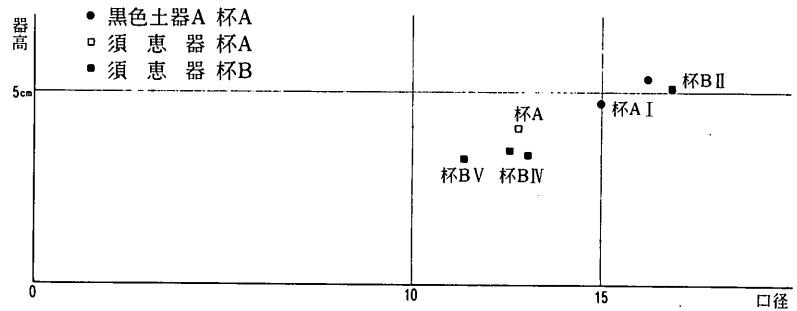
煮炊具

土師器	甕B	7	2670	9 20%	13・14
	甕C	1	40		15
	小型甕D	1	130		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	40	8 17%	16
	甕D	1	640		
	甕	5	3000		

第17表 SB124出土土器の構成



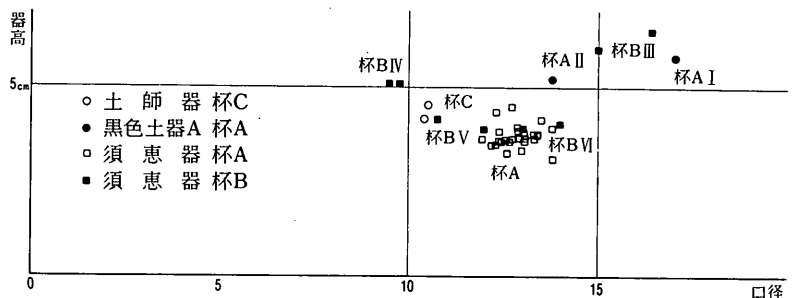
第110図 SB124出土土器法量分布図

SB125 図版126

黒色土器Aが主体の食器構成で軟質須恵器もかなり量が多い。5～7は軟質須恵器で内外面に黒斑が見える。7期の土器様相である。

SB126 図版127・128、第111図、第18表、PL66・67

食器は須恵器が主体である。1・2の土師器杯Cは体部外面下半を手持ちヘラ削り、内面に暗文は観察されない。1は口径10.5cm・器高4.5cm、2は口径10.4cm・器高4.1cmを測る。3・4は黒色土器Aで、3は器高の高い器形で底面はヘラ削りする。須恵器杯Aはすべて回転糸切り未調整で、5～32は底径の大きな体部の開きの弱い形態である。32には杯内部に漆及びそれに付着した漆紙が検出された。杯BはII(48)・III(49～51)・IV(45～47)・VI(42～44)の各法量があり、42・44・45・49・51の底面中央には糸切り痕が残る。杯蓋B(33～41)は口径18.6～13.4cmまで法量に差がある。52・53は灰釉陶器で52は黒笹14号窯式、53は光ヶ丘1号窯式にあたるが、これらは遺構の重複による混入の可能性が高



第111図 SB126出土土器法量分布図

い。煮炊具は土師器甕B (58・59)・甕C (60)・小型甕B (57)・小型甕D (54~56)がある。61は円筒形土器で底部を内側に折り曲げ指ナゲ調整している。貯蔵具は須恵器で、長頸壺A・長頸壺C・壺蓋A・甕A・甕C・甕D・甕Eがあり、66は底部回転糸切りである。68は口縁部を折って口縁帯を作る形態で、美濃須衛窯産である。5期の土器様相である。

SB127 図版126

1は土師器杯Cで底径5.4cm、2は黒色土器A皿Bであろう。須恵器杯A(3・4)は体部の開きの弱い形態である。土師器甕B(8~11)は口縁部が短く強く外反する形態で、11の内面にはハケ目調整がなされる。12は平瓶の把手で猿投窯よりの搬入品であろう。5期の土器様相である。

SB128 図版128

土器は小片が多い。黒色土器A杯A IIは1の1点のみ。2・3は須恵器杯Aで、2は回転糸切り後、底部外周を回転ヘラ削り、3は回転糸切りである。5期の土器様相である。

SB129 図版128

黒色土器Aのみ図示できた。1~4は杯A II、5~8が杯A I、9は椀・10は鉢Aである。いずれも底部回転糸切りで、9は口縁部に煤が付着し灯火器として使用されたと考えられる。7期の土器様相である。

SB130 図版129、第19表、PL67

食器は須恵器主体である。須恵器杯Aは底部回転ヘラ切り(1)と回転糸切り(2)の両者があり、個体数では回転糸切りのほうが多い。土師器甕は甕C・小型甕A(5)・小型甕B(4)で、4の底面には木葉痕が残る。貯蔵具は須恵器甕・長頸壺B(6)・平瓶(7)で、6は体部に稜を持ち、口頸部がラップ状に開く形態で頸部の付け根にリング状に凸帯を貼り付ける。体部は回転ヘラ削りを施す。7には天井部に板状の把手を貼付した痕跡が観察できる。6・7は美濃須衛窯産である。4期の土器様相である。

SB131 図版129

黒色土器A主体の食器構成である。黒色土器Aは杯A II(1~4)・I(5)・椀(6)・皿B(7・8)がある。9は須恵器、10は軟質須恵器杯Aである。須恵

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	杯 C	4	140	} 3%	1・2
黒色土器A	杯 A I	4	185		} 19 12%
	杯 A II	15	1065	3	
須恵器	杯 A	76	4450	} 132 82%	5~32
	杯 B II	1	60		48
	杯 B III	9	1035		49~51
	杯 B IV	9	480		45~47
	杯 B V	4	270		
	杯 B VI	2	130		42~44
	杯蓋 B	30	1865		33~41
	鉢 A	1	30		62
灰軸陶器	椀	4	60	} 3%	52・53

煮炊具

土師器	甕 B	10	2095	} 20 9%	58・59
	甕 C	2	120		60
	小型甕B	1			57
	小型甕D	6	690		54~56
	円筒形土器	1	190		61

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	4	1040	} 38 95%	63~65
	長頸壺C	1	70		66
	壺蓋A	1	125		
	甕 A	12	6840		70
	甕 C	1	200		67
	甕 D	4	88		
須恵器	甕 E	4	140	} 40 18%	69
	甕	11	4060		68
灰軸陶器?	壺	2	10	} 5%	

第18表 SB126出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	杯C	1	10	} 14%	1・2
須恵器	杯A	4	145		
	杯B IV	1	5	3	
	杯蓋B	1	40		

煮炊具

土師器	甕B	3	500	} 7 39%	
	甕C	1	40		
	小型甕A	1			5
	小型甕B	1			4
	小型甕D	1	640		

貯蔵具

須恵器	長頸壺B	1	1580	} 4 22%	6
	甕	1	15		
	平瓶	2	730		7

第19表 SB130出土土器の構成

器が体部外面にロクロ目が目立ち、内面見込の部分強く押えるのに対し、軟質須恵器はロクロ目が目立たず内面は底部から口縁部まで滑らかに挽きあげている。17は須恵器高杯の脚台である。11・12は灰釉陶器で、黒笹14号窯式である。15は土師器小型甕Cである。16は須恵器短頸壺Cで体部ロクロナデ、底面には糸切り痕が残る。18は甕Dで肩の部分に凸帯が貼付されるが残存が少なく耳が付くかどうかは不明である。7期の土器様相である。

SB132 図版129

遺物は少ない。食器は須恵器のみで、杯A(1~4)は回転糸切りで底径が大きく体部の開きの弱いものである。6は土師器甕Cである。5期の土器様相である。

SB133 図版130

黒色土器A主体の食器構成である。1の内面には「×」の線刻が焼成後になされている。7・8は灰釉陶器で黒笹14号窯式である。9は土師器鉢で口縁部を折り曲げて直立させる形態で、非ロクロ調整、SB96に類例がある。土師器甕B(10・11)は口縁部が直線的に伸び、底部周辺を手持ちヘラ削りする。12の灰釉陶器長頸壺は光ヶ丘1号窯式である。7期の土器様相である。

SB134 図版130

黒色土器A主体の食器構成である。4は軟質須恵器。5は須恵器杯BIVである。6~8は灰釉陶器で6はハケ塗り、内面に重ね焼き痕がある。図示した3点とも光ヶ丘1号窯式である。10の円筒形土器は外面底部周辺を手持ちヘラ削り、内面も端部をヘラ削りで調整している。体部内面には粘土紐積み上げ痕が観察できる。11は灰釉陶器短頸壺である。7期の土器様相である。

SB135 図版130

食器は土師器・黒色土器A(1~4・10)・須恵器(5・6)・軟質須恵器(7)・灰釉陶器(8・9)で構成される。黒色土器A(3)は皿Bであろう。このほか黒色土器Aは杯A II(1)・杯A I(2)・椀(4)・鉢A(10)など多様な器種がある。灰釉陶器のうち9は角高台・自然降灰で黒笹14号窯式、8は三日月高台・ハケ塗りで光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(11・12)があり、11は口縁部が肥厚し直線的に開く形態である。7期の土器様相である。

SB136 図版131、第112図、第20表、PL68

黒色土器A主体の食器構成で須恵器(7・8・14)・軟質須恵器(9・10)・灰釉陶器(11~13)が少数ある。黒色土器Aは杯Aと椀のみである。須恵器(14)は高杯の脚部である。灰釉陶器はいずれも三角高台ハケ塗りで、13は体部の回転ヘラ削りは体部外面上半にまで及んでいる。煮炊具は土師器甕B(18~20)と小型甕D(16・17)で、甕Bは底部外周を手持ちヘラ削りしている。7期の土器様相である。

SB138 図版131

遺物は少なくそのほとんどが図示できた。1・2は黒色土器Aで回転糸切り未調整、3は須恵器杯Aで回転ヘラ削り、4は回転糸切りで底部外周を回転ヘラ削りしている。煮炊具は土師器甕B(7)・甕C(6)・小型甕D(5)で、7は

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A I	1	65	} 21 49%	3
	杯A II	17	495		1・2
	椀	3	380		4~6
	不明		300		
須恵器	杯A	4	140	} 10 23%	7・8
	杯BIV	2	50		
	杯蓋B	3	20		
	高杯	1	130		14
軟質須恵器	杯A	4	300	} 4 9%	9・10
灰釉陶器	椀	7	280	} 8 19%	11~13
	段皿	1	5		

煮炊具

土師器	甕B	9	11190	} 14 20%	18~20
	小型甕D	5	620		16・17

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	3	60	} 11 92%	} 12 17%
	甕	8	1310		
灰釉陶器	小瓶	140	40	} 8%	15

第20表 SB136出土土器の構成

内外両面をハケ目調整、5は底部回転糸切りである。8の須恵器甕Aは口縁部に櫛描波状文と沈線による文様を施している。4期の土器様相である。

SB139 図版132

食器は黒色土器A(1~3)と須恵器(4・5)で構成され、それぞれの個

体数はほぼ同量である。須恵器杯Aはすべて回転糸切り未調整である。煮炊具は6が小型甕Dで底部糸切り痕が残し、体部には縦方向のハケ目が施される。7は小型甕Bである。8・9は甕Bで8は口縁部が強く短く外反している。9は底部外周を手持ちへら削りする。5期の土器様相である。

SB140 図版132

食器は須恵器が主体で、土師器(1)・黒色土器A(2・3)は少ない。1の杯Cは内面見込に沈線を施し、放射状暗文を残す。体部外面は下半部を手持ちへら削り、底面は回転糸切り後外周をへら削りしている。2の黒色土器A杯Aは底径の大きな器肉の厚いもので、底面は手持ちへら削りを全面に施している。須恵器杯Aはすべて回転糸切り、杯BはIII(9)・IV(7・8)・V(6)がある。10は土師器小型甕Bである。5期の土器様相である。

SB141 図版132

食器の主体は須恵器で、他には1の土師器杯Cが1点あるのみである。1は外面体部下半から底面にかけて手持ちへら削り、内面はロクロナデの後放射状の暗文が施されていたものと思われるが、器表が荒れ暗文は観察できない。杯蓋B(4~6)のうち6は美濃須衛窯産、杯Bでは8が美濃須衛窯産で、底面を手持ちへら削りの後高台を貼り付けている。この他に美濃須衛窯産の長頸壺がある。須恵器杯A(2・3)はすべて回転糸切り、体部の開きが弱い形態である。11は土師器小型甕C、12は甕Bで口縁部の外反は強いが口縁部をやや肥厚させている。5期の土器様相である。

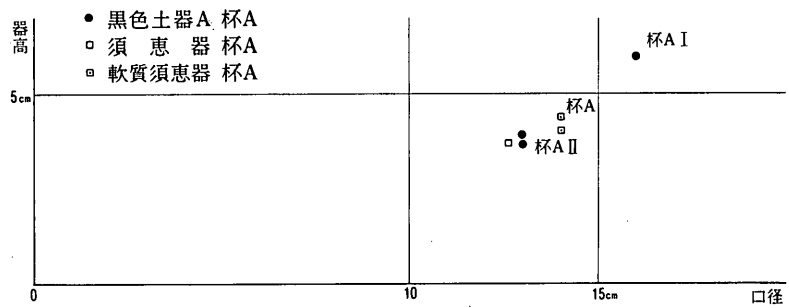
SB142 図版132

遺物は少ない。1・2は須恵器杯蓋Bで口縁部の屈曲は強くない。3・4は土師器小型甕Dで体部にはロクロ目が観察できるが、3の底面にはロクロ切り離し痕は観察されず指オサエのあとが残る。4の体部外面はハケ目調整、底面は指ナデである。5期の土器様相である。

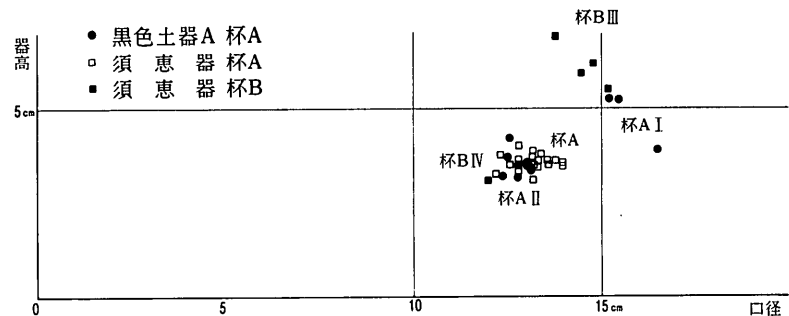
SB143 図版133・134、第113図、第21表、PL69・70・81

土器の量が多く、特に食器類の出土量が非常に多い遺構であるが、ほとんどは覆土中からの出土で、破片が多かった。食器では黒色土器Aと須恵器が主体で両者の量がほぼ拮抗しており、土師器・黒色土器B・赤彩土器・灰釉陶器・緑釉陶器は少

ない。黒色土器Aは杯A I・杯A II・碗・皿B・蓋など多様な器種がある。杯Aの底部の調整では9・13が回転糸切り後手持ちへら削り、11が回転へら削りのほかは回転糸切り未調整である。14は食器の蓋と思われるが身の部分が何に対応するのか不明である。口縁部はやや反り気味に外反



第112図 SB136出土土器法量分布図



第113図 SB143出土土器法量分布図

して丸く納め、天井部は中程まで回転ヘラ削り、つまみは扁平な宝珠形である。内面は口縁部周辺を横方向、それより内側を放射状にヘラ磨きする手法は杯Aや椀・皿の磨きと同様である。17の黒色土器A皿Bは底面を手持ちヘラ削りし、短い三角形の高台を貼付する。18・19は赤彩土器皿Bで18の口縁部は外反が強く反り気味である。須恵器杯Aはすべて回転糸切り未調整、体部の開きの強い形態である。38・39は皿Bと考える。須恵器杯BはI・III・IVがある。49は大形で口径21.6cmを測り40・41の杯蓋Bと対応するものと思われる。杯蓋Bのうち、40・41は厚手大形で、やや高い天井部、器厚は口縁部で薄くなり端部を強く屈曲させている。つまみも算盤珠状の高いものである。50・51は器壁の厚い体部で外面下半を回転ヘラ削り底部の形態は明らかでないが、51は口縁部に片口が付く。52は灰釉陶器椀で内面に灰オリーブ色の自然降灰釉が掛かる。黒笹14号窯式である。53の緑釉陶器は小形の椀で円盤状の高台の底面には糸切り痕が残る。胎土は灰白色軟質で、直径3mmほどの礫が入る粗いものである。内外面ともにヘラ磨きは観察されない。釉は浅黄色を呈する。54・55は須恵器高杯で口縁部を屈曲させて「S」字形にしている。54の内面中央には木葉痕が残る。56の土師器盤は体部・脚部ともにロクロで調整し、脚台の透かしは3方向にヘラで切り開けられている。58の須恵器壺Cは底部に回転糸切り痕が観察できる。煮炊具は57の小型甕Dが図示できるのみである。6～7期の土器様相である。

SB144 図版134

黒色土器A(1～6)と須恵器(7・8)で食器が構成されている。1は体部外面にカキ目が施される。5・6は皿Bである。煮炊具は土師器甕B(10～12)と小型甕D(9)があり、10はハケ目調整が底部まで及び、(11・12)の口縁部はやや肥厚して直線的に外上方へ伸びる形態である。6～7期の土器様相である。

SB145 図版134

黒色土器A(1～5)主体で須恵器が少ない食器構成である。灰釉陶器は6の1点のみである。6は体部外面のヘラ削りが上半まで及び、内面には自然降灰の釉が厚く掛る。内面にはトチンの目跡が残る。黒笹14号窯式である。8は須恵器甕Aで口頸部にはヘラで沈線を3条引いている。7期の土器様相である。

SB146 図版135

黒色土器A(1・2)が主体の食器構成である。3は灰釉陶器椀で、内面に自然降灰の釉が掛る。黒笹14号窯式である。7期の土器様相である。

SB147 図版135

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO	
土師器	杯 C	1	20	} 2 0.5%	56	
	盤 A	1	555			
黒色土器 A	杯 A I	228	9160	} 268 54%	11～13	
	杯 A II				1～10	
	椀	25	540		15・16	
	皿 B	13	220		17	
	蓋	2	65		14	
黒色土器 B	皿 B	1	30	} 0.3%	18・19	
赤彩土器	皿 B	5	175			} 498 85%
須恵器	杯 A	155	9135	} 214 43%	20～37	
	杯 B I	1	300		49～51	
	杯 B III	8	600		44～48	
	杯 B IV	15	780		43	
	杯蓋 B	28	2240		40～42	
	皿 B	3	60		38・39	
	鉢 A	2	335		} 54・55	
	高杯	2	660			
緑彩陶器	椀	1	10	} 0.5%	53	
灰釉陶器	椀	4	30		} 7 1%	52
	皿	3	20			

煮炊具

土師器	甕 B	24	3840	} 36 6%	57
	小型甕 D	12	2360		

貯蔵具

須恵器	長頸壺 A	11	1625	} 54 98%	} 55 9%
	長頸壺 C	3	110		
	壺蓋 A	1	20		
	甕 D	2	210		
	甕	37	7530		
灰釉陶器	長頸壺	1	60	} 2%	

第21表 SB143出土土器の構成

遺物は少ない。1は黒色土器A杯A II、2は須恵器杯B IVで、底面中央に糸切り痕が残る。3の土師器甕Cは口縁部が「く」字に外反する形態である。6～7期の土器様相である。

SB148 図版135、第114図、第22表、PL71

食器は黒色土器A・赤彩土器・須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器が主体となっている。1は口縁部に煤が付着し灯火器として使用されたと思われる。

4は底部周辺を手持ちヘラ削りする。6・7は赤彩土器で、6は杯または椀、7は蓋である。須恵器杯Aはいずれも底部回転糸切りである。杯BはII (25~28)・III・IV・Vの各法量がある。29・30の灰釉陶器はいずれも内面に自然降灰の釉の掛る椀で、黒笹14号窯式であるが、これは遺構の重複による混入の可能性がある。煮炊具・貯蔵具は小片で図示できない。6期の土器様相である。

SB149 図版135、第115図

須恵器が主体の食器構成である。須恵器杯A (2~8)は体部がやや開き気味の形態である。13は須恵器高杯脚部で、脚部上方に横方向のハケ目をカキ目状に施している。15の須恵器長頸壺Aは、頸部が細く直立気味に伸びる形態である。5~6期の土器様相である。

SB150 図版136

食器には黒色土器Aと須恵器・赤彩土器がある。黒色土器Aは杯A I (1)を図示したが残りの5個体は杯A IIである。須恵器杯A (2~4)は体部の開きの強い形態である。杯B III (5)の底面中央には糸切り痕が残る。6は土師器甕Bの底部で周辺を手持ちヘラ削りしている。6期の土器様相である。

SB151 図版136

遺物は少ない。1は黒色土器A杯A IIで、底部回転糸切り後外周を手持ちヘラ削りする。2は土師器甕Bで内面にも斜め方向のハケ目調整を施している。5期の土器様相である。

SB152 図版136、第23表、PL71

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
黒色土器A	杯A I	1	380	17 21%	3・4
	杯A II	14	850		1・2
	椀	1	40		5
	皿 B	1	10		
赤彩土器	杯	2	20	3 4%	6
	蓋	1	40		7
須恵器	杯 A	34	2060	58 72%	8~23
	杯B II	4	280		25~28
	杯B III	4	160		
	杯B IV	3	100		
	杯B V	2	70		
	杯蓋B	9	280		24
	鉢 A	1	60		
	高杯	1	40		
灰釉陶器	椀	2	20	3%	29・30

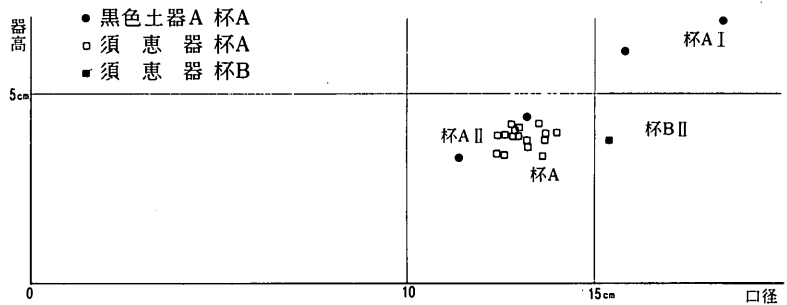
煮炊具

土師器	器種	個体数	重量 (g)	個体数比
土師器	甕B	7	900	12 11%
	小型甕D	5	100	

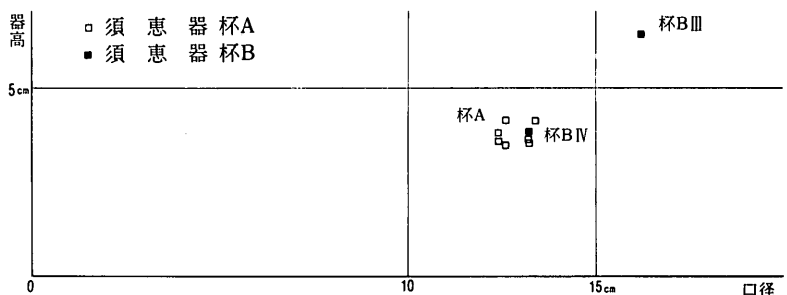
貯蔵具

須恵器	器種	個体数	重量 (g)	個体数比
須恵器	長頸壺A	3	190	16 94%
	甕	13	9980	
灰釉陶器	壺	1	20	1 6%

第22表 SB148出土土器の構成



第114図 SB148出土土器法量分布図



第115図 SB149出土土器法量分布図

主体は黒色土器Aである。1は土師器杯A IIで、本遺跡ではこの器種はこの1点のみである。内外面ともにロクロ調整で外面暗褐色、内面黄褐色の酸化焰焼成で口径14cmである。黒色土器Aは杯A I・杯A II・椀・皿B・鉢Aなど多様な器種がある。8～11は須恵器、12～14は軟質須恵器、15は灰釉陶器で、15は光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B (16・17)・小型甕D (18) があり、甕Bは体部上半外面をヨコナゲし、口縁部は直線的に立つ形態である。貯蔵具は須恵器 (19・20)と灰釉陶器があり、19は底部に糸切り痕がある。灰釉陶器は長頸壺である。7～8期の土器様相である。

SB153 図版136

出土土器は少ない。食器は須恵器のみで、杯A (1)は回転糸切りのみ。2は杯BIVである。煮炊具は土師器甕B (3)が1点あるのみである。貯蔵具は須恵器で長頸壺Aと甕の体部破片がある。5期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量 (g)	個体数比	実測図NO
土師器	杯A II	2	140	3 5%	1
	椀	1	70		
黒色土器A	杯A I	1	100	23 38%	2・3
	杯A II	14	670		
	椀	5	230		
	皿B	2	230		
	鉢A	1	50		
須恵器	杯A	18	490	24 40%	7
	杯BIV	3	60		
	杯BV	1	30		
	杯蓋B	1	5		
	鉢A	1	50		
軟質須恵器	杯A	9	580	15%	8・9
灰釉陶器	椀	1	20	2%	10
				60 57%	11
				19	12～14
				18%	15

煮炊具

土師器	甕B	11	3870	19 18%	16・17
	小型甕D	8	650		

貯蔵具

須恵器	長頸壺C	2	130	23 88%	26 25%
	壺類	5	650		
	甕D	1	80		
	甕類	15	3690		
灰釉陶器	長頸壺	3	150	12%	19
				12%	20

第23表 SB152出土土器の構成

イ 掘立柱建物址出土土器

ST 3 図版137

土器は2を除いて掘り方からの出土である。1の須恵器杯BIVはP9の掘り方、2の土師器甕Bは口縁部が「く」字に強く屈曲する形態で、P6の柱痕跡から出土した。このほかに、掘り方から須恵器杯B III・甕・甕D、土師器甕B・小型甕Dが出土している。5期の土器様相である。

ST 6 図版137

P3の柱痕跡から土師器甕Bが出土した以外は、掘り方出土である。1は体部の外傾の強い須恵器杯AでP6の掘り方から出土した。2はP9の検出時に出土した須恵器杯蓋Bである。3は短頸壺Cと思われる壺の底部で糸切り痕が残る。P6とP5の掘り方に分かれて出土し接合した。他に掘り方出土の遺物として、須恵器杯A・甕、土師器甕B・甕C、黒色土器A杯Aがある。6期の土器様相か。

ST 7 図版137

1は北西隅柱穴掘り方から出土した、須恵器杯Aである。小片ながら口径14cmに復元できる。北側中央柱穴の掘り方からも須恵器杯Aが出土している。

ST 8 図版137

すべて掘り方出土である。1はP3の須恵器杯BIV、2はP9の土師器甕Bである。他に黒色土器A杯A、土師器甕B、須恵器甕がある。

ST 9 図版137

土器はすべて掘り方出土である。1は南東隅柱穴出土の黒色土器A杯Aである。他に土師器甕Bがある。

ST12 図版137

西側中央柱穴から出土した。柱痕跡は不明。1は須恵器杯A底部破片である。底径6cm糸切り痕が残る。他に、須恵器杯A破片と土師器甕Bがある。

ST17 図版137

北東隅柱穴から須恵器杯A(1)が出土した。底部回転糸切りで底径6cmである。

ST21 図版137

南東隅柱穴から、1の須恵器杯BIIIが出土した。底面中央に糸切り痕が残る。

ST30 図版137

P5の掘り方から1の須恵器杯Aが出土した。器壁が薄く体部の開きの強いものである。

ST101 図版137

掘り方から須恵器杯A、黒色土器A杯A、土師器甕Bが、柱痕跡から土師器甕B、須恵器杯A(1)、須恵器甕が出土した。1はP5の柱痕跡出土で、底径5.8cmの小さめの底部から体部が直線的に伸びる形態である。図示していないが、P8から出土した土師器甕Bは口縁部が肥厚して直線的に伸びる。

ST102 図版137

遺物はすべて柱掘り方出土である。1の須恵器杯A、2の杯蓋Bは北東隅、3の杯BIIIは北西隅である。他に須恵器甕と黒色土器A杯Aが4点出土している。単純に掘り方出土の須恵器杯Aと黒色土器A杯Aの量を比べれば、黒色土器Aのほうが多いことになる。6期前後の土器様相か。

ST105 図版137

2・3は北側中央の柱掘り方から出土した須恵器杯Aで、糸切り痕が残る。1の黒色土器A杯Aは北側中央の上層から出土し、柱掘り方か柱痕跡のいずれかは不明である。他に南東隅の掘り方から須恵器甕の破片が出土した。

ST108 図版137

1はP1掘り方出土の須恵器杯蓋Bである。P1掘り方には他に土師器甕Bがある。P3柱痕跡からは土師器甕Bが出土した。

ST111 図版137・138、PL79

柱掘り方・柱痕跡両者から比較的まとまった量の遺物が出土した。1・3はそれぞれ建物址内の土坑に据えられていたもので、頸部に櫛描波状文を施している。1は内面の当て具痕を横方向のハケ目で消している。8は杯BVの体部外面に板状にヘラ削りした把手を一对つけるもので、類例が区画溝I(14)にある。10は杯蓋Bとも思われるが、口縁端部を「S」字状に納める高杯であろう。6期の土器様相である。

ST113 図版139

1は南東隅柱穴の掘り方出土の黒色土器A杯AIIで底部外周を回転ヘラ削りしている。2の須恵器杯Aは東側中央柱穴の柱痕跡出土で底部回転糸切り、口径13.4cm・器高3.5cm・底径6cmである。3の須恵器杯蓋Bは西側中央柱穴の柱痕跡出土である。他に、柱穴内から土師器甕B・小型甕D、須恵器杯A・長頸壺A、黒色土器A杯Aが出土した。5～6期の土器様相である。

ST123 図版139

いずれの柱穴も柱痕跡は確認されていない。1はP8から出土した黒色土器A碗である。2・3は須恵器杯A・杯蓋BでそれぞれP8・P7から出土した。

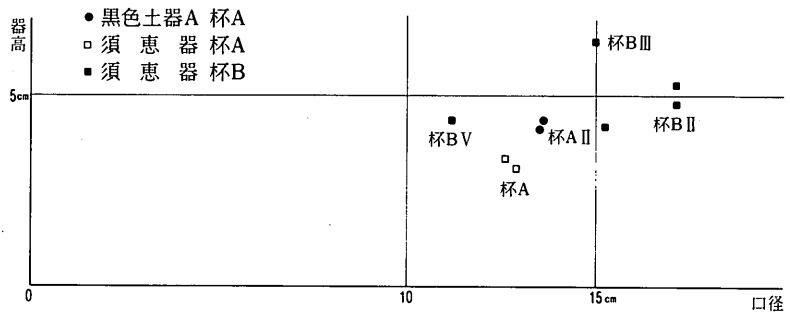
ウ 溝址出土の土器

区画溝出土の土器 北部I地区の「L」字状の区画溝I～III出土の土器群である。各溝とも覆土の層位は対応でき、各層は炭化物を含むかあるいは覆土がブロック状になって堆積しており、人為的に埋め戻された埋め土であると考えられる。1層下部と3層では炭化物の堆積が顕著である。出土土器は一覧表

で見ると、いずれの溝・層位をとっても煮炊具がきわめて少なく、食器類が大半を占め、貯蔵具も比較的多い構成となっている。区画溝 I は、上層の 1 層が 7 期、2 層以下は 5～6 期の土器様相を示している。また、区画溝 II・III の土器群はいずれも 6 期の様相である。

区画溝 I (南北溝) 1 層 図版139、第116図、PL72・73

食器は土師器・黒色土器 A・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。量的に多いのは黒色土器 A と須恵器で、ほぼ同量であるが、杯 A に関してみれば黒色土器 A のほうが多い。黒色土器 A は杯 A I・杯 A II・椀・皿 B・鉢 A のすべての器種がある。5 の黒色土器 A 杯 A I は底面を手持ちへら



第116図 区画溝 I (南北溝) 1 層出土土器法量分布図

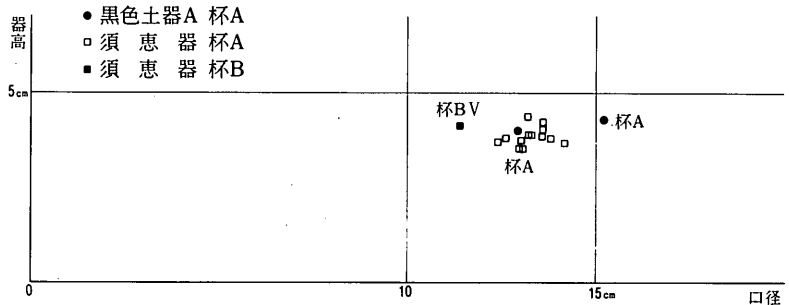
削りしている。14の須恵器杯 B V は体部外面に板状の把手を一对付けるものである。15の灰釉陶器段皿は器壁の厚いもので、内面にのみ厚く釉が掛かる。16・17は緑釉陶器椀であるが、二次的な被熱を強く受けており釉の剥落が激しく、残った部分でも銀化して灰色ないし黒色を呈する。高台は円盤状の切り高台で、16は底径で6.5cm、17は口径15.5cm・器高4.3cm・底径6.8cmである。これはSK460出土の破片と接合した。20は比較的小形の須恵器甕 D で口縁部から底部まで復元できる。口径13.6cm・器高33.1cm・底径12.6cmを測る。

区画溝 I (南北溝) 2 層 図版139、PL72・73・81

この層では食器のなかに占める割合が須恵器が黒色土器 A をやや上回る構成となっている。須恵器杯 A (23～28) はいずれも底部回転糸切りで、体部の開きが弱い形態である。

区画溝 I (南北溝) 3 層 図版140、第117図、PL72・73

この層でも 2 層と同様、食器で須恵器が黒色土器 A を量的に上回る構成となっている。黒色土器 A 杯 A では底面と底部外周をへら削りするもの(31・32)がある。34の黒色土器 A 皿 B は角高台をもつ。須恵器杯 A は底部回転糸切りで、体部の開きは弱い。50は須恵器高杯、51は鉢 A で底面に糸切り痕が残る。



第117図 区画溝 I (南北溝) 3 層出土土器法量分布図

区画溝 I (南北溝) 7 層

図版140

3 層に対応する層で、炭層中の土器である。52は黒色土器 A 杯 A II、53は須恵器甕 E である。黒色土器 A は杯 A II が 1 点あるのみである。

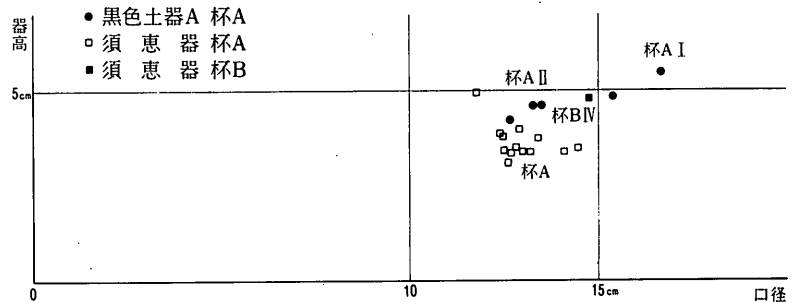
区画溝 I (南北溝) その他 図版140・141、PL72・73

区画溝 I (南北溝) 中、出土層位不明の土器である。黒色土器 A (54～63・66) 黒色土器 B (64)、赤彩土器 (65)、須恵器 (67～77・81・85・86)、灰釉陶器 (78・82・83)、緑釉陶器 (79・80)、土師器 (84) がある。このうち65は赤彩土器皿 B で、内外両面をへら磨きし赤彩しているが、底面には糸切り痕が残る。調整手法は黒色土器 B と同様である。78の灰釉陶器椀は体部が直線的に開く形態で、自然降灰の灰釉が内面にのみ掛る。83は壺蓋。82は器種不明である。緑釉陶器のうち80は二次的な被熱を受けている。79は口縁端部で外反する形態で、胎土は灰白色軟質で、内面は不明であるが外面ではへら磨きは観察できない。釉は淡い黄

緑色を呈するが、胎土が脆いためところどころで剥落している。80はやや内湾気味に開く器形で、胎土は陶質で堅い。内外面ともにヘラ磨きは観察されない。釉は灰褐色を呈し細かい貫入が入る。体部は直線的に開く器形である。2次的な被熱のため器面の荒れが激しく調整等の観察は困難である。釉は銀化して灰色を呈する。81は底径6.1cmを測る土器であるが器形は不明である。

区画溝 I (東西溝) 1層 図版141、第118図

食器は土師器と黒色土器A・須恵器がある。土師器は盤A、黒色土器Aは杯Aと椀がある。須恵器杯A(88・89)は体部の開きの大きい形態である。92は須恵器皿Bで底面には糸切り痕が残る。93の壺蓋Aは、緻密な胎土で、暗オリーブ褐色を呈し、外面には自然釉が掛かり、内面には鬼板を掛けている。搬入品と考えられる。



第118図 区画溝 I (東西溝) 1層出土土器法量分布図

区画溝 I (東西溝) 2層

図版141、PL73

食器は黒色土器Aと須恵器があるが、須恵器が主体である。94・95は

黒色土器A杯A Iで、94は底径が大きく体部の張りの強い形態で、底面は手持ちヘラ削りを施している。95は一般に見られる形態で、底面には糸切り痕が残る。須恵器杯A(96~102)はいずれも底部回転糸切りで体部の開きの弱い形態である。102は内面にカキ目が施され、底面には手持ちヘラ削りが施されている。100は灯火器に使用されている。

区画溝 I (東西溝) 3層 図版141・142、PL73

食器は黒色土器Aと須恵器で、量的には須恵器が黒色土器Aを上回る。黒色土器A杯A(104~110)では、底部切り離しの後底面あるいは底部周辺に手持ちヘラ削りを施すもの(104・107・108~110)が目立つ。須恵器杯BではII・III(120)・IV・VI(121)がある。122は高杯の体部で口縁部を「S」字状に折り返している。

区画溝 I (東西溝) 4層 図版142

遺物は少ない。125は黒色土器A鉢A、126・127は須恵器杯Aでいずれも底面に糸切り痕が残る。

区画溝 II (南北溝) 図版142、PL74

区画溝 I (南北溝)と柵列を挟んで平行する南北溝であるが、区画溝 I と比べ遺物の量が極端に少ない。食器は須恵器が主体で、他に黒色土器Aがある。須恵器杯A(4~8)は器壁が薄くクロクロ目の目立つもので、体部の開きの強い形態である。7は灯火器として使用されている。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dがあるが微量である。貯蔵具は須恵器で、11は長頸壺C・12は短頸壺Cである。

区画溝 III (東西溝) 1層 図版142、PL74

土器の量は多い。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器がある。土師器には杯C(1)と盤Aがある。黒色土器Aは杯A II(2~4)・杯A I(5・6)・鉢A(7)のほか椀・皿Bが1片ずつある。須恵器杯(8~20)は器壁が薄く体部の開きの強い形態である。25・26は須恵器杯蓋Bで、器壁が厚く高いつまみが付くものである。器壁の厚さや、焼成の状況から杯B Iに対応するものと考えられるが、天井部で屈曲して口縁部にいたる器形で、佐波理碗を模倣したと考えられる椀蓋の形態に類似している。外面の回転ヘラ削りは屈曲する部分まで施される。27は高杯である。

区画溝 III (東西溝) その他 図版143、PL74

区画溝中で、層位不明の土器である。28は土師器杯C、29は黒色土器A鉢A、30・31は杯A II、32は杯A Iである。33~39は須恵器杯Aで回転糸切りである。40~43は杯蓋Bであるが天井部の回転ヘラ削りの

範囲は狭い。44は須恵器高杯の脚部で、三方に長方形の透かしを開け、透かしと透かしの間には2条の平行沈線を引いている。45は須恵器杯B Iであるが器壁は厚く壺類の底部かとも思われるが、底部内面を平坦に挽き出し体部を立ち上がらしている点は壺と異なる。底部近くの体部外面に『厶』の墨書がある。

SD 1 図版143

土師器甕Bを図示した。1は口縁部が短く強く外反する形態で、底部も底径が小さく、外面のハケ目は底部ぎりぎりまで施される。5期の土器である。

SD 7 図版143

1は黒色土器A杯A Iで内面に漆が付着している。2は須恵器杯B IIIである。

SD18 図版143

1は黒色土器A杯A II・2は須恵器杯Aでいずれも底部回転糸切りである。6は灰釉陶器小瓶で体部外面に把手の貼付された痕跡がある。

SD52 図版143

1は土師器甕Bで、底径10.8cmである。

SD100・104 図版143

調査区を斜めに横切る溝、SD104とそれを改修して掘り直したと考えられる溝SD100の土器である。ほとんどが検出時に出土した遺物で、1～3・7はSD100・104いずれの遺物か不明である。4～6はSD104の1層出土である。

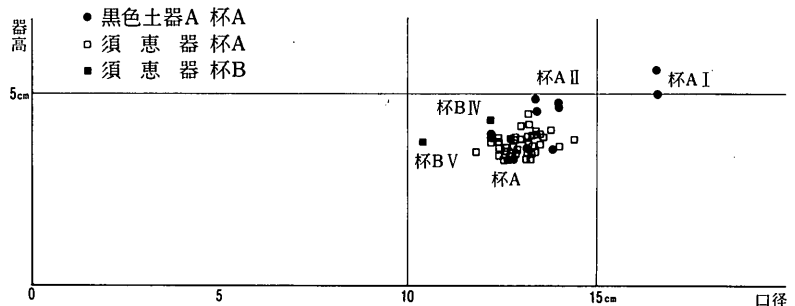
SD106 図版152

土器は少ない。食器では須恵器が主体で、杯A(3～5)と杯蓋B(6)がある。杯Aは体部が直線的に開き(3)と開きの弱い(4・5)がある。2は黒色土器A皿Bで低い高台を貼り付ける。

SD108 出土の土器 SD108は調査区を東西に横切る溝であり、遺構の項で述べたように幅の狭い部分、広い部分、深い部分、浅い部分、分岐した部分など多様に形状を変えている。それらは1区から4区までまとまりとしてとらえることができる。それぞれの区について出土層位ごとの土器について述べる。この溝の土器のあり方で特徴的なことは、竪穴住居址の土器と比べて、土器全体に占める食器の割合が非常に高いことである。これは前述した区画溝I～IIIでも見られた傾向であり、次いで貯蔵具が多く、煮炊具が極めて少ないことも区画溝と共通する特徴といえる。

SD108 1区 2層 図版144・145、第119図

食器は土師器と須恵器・黒色土器Aがあり、量的には須恵器が多い。黒色土器Aは杯Aが主体で杯A I(12～17)と杯A II(1～11)の2法量がある。黒色土器Aでは他に碗(18)と皿B(19・20)がある。須恵器では杯A(21～62)が主体である。このうち(21・22)は底部回転ヘラ切り、23は回転糸切り後手持ちヘラ削りを底面に加えている。杯BはVI(65)・V(66)・IV(67・68)・II(69・70)の各法量がある63の杯蓋Bと67の杯BIVは完形で、並んで置かれたように出土し、胎土・色調など類似しておりセットとなると思われる。70は美濃須衛窯産である71は高杯で、脚部上端には三方向に「十」字の透かしが施される。煮炊具は土師器甕B・小型甕C(72)・小型甕Dがあるがローリングを受けた小破片が多い。貯蔵具は須恵器のみで、壺類・甕類ともに多い。壺は73の小壺、74の長頸壺B、75・80の長頸壺Aがある。甕



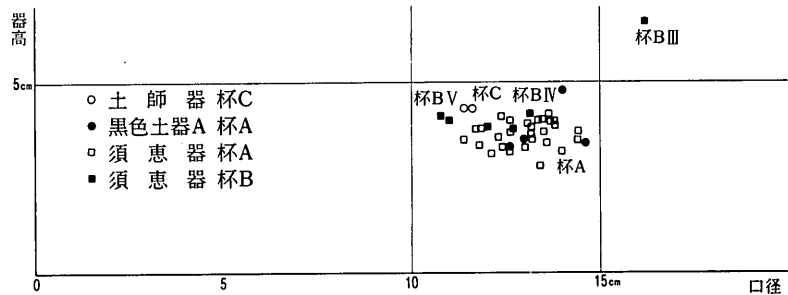
第119図 SD108 1区 2層出土土器法量分布図

類は76は頸部をタタキ調整するもの78は頸部外面に櫛描波状文を施している77・79は灰白色の緻密な胎土で美濃須衛窯産である81は甕Cである古い時期の要素としては底部回転ヘラ切りの須恵器杯A (21・22)・杯B (70) 等があり、新しい要素としては黒色土器A碗・皿B (18~20) などがあるが、主体となる土器は5期の様相である。この層から「神功開寶」が1枚出土している。

SD108 1区 3層 図版145・146、第120図、PL75

食器は土師器・黒色土器A・赤彩土器・須恵器があり、主体は須恵器である。土師器は杯C (83~85)と盤Aがある。83・84は体部内面に放射状のヘラ磨きを施し、体部下半と底面は手持ちヘラ削り、内面底部と体部外面はロクロナデ痕が残る。85は内面に暗文は観察できない。法量は84で口径11.6cm・器高4.3cm・底径5.6cmを測る。黒色土器Aでは杯A

II (86~90)・杯A I (91・92)が主体で、碗 (93)・蓋 (94) はそれぞれ1個体のみである。食器のなかで、最も量の多い器種は須恵器杯A (95~125)である。底部回転糸切り未調整がほとんどであるが、124は回転ヘラ切り、125は回転糸切り後手持ち



第120図 SD108 1区 3層出土土器法量分布図

ヘラ削りである。127は大形の杯蓋Bで杯B Iに対応するものと考えられる。杯BはV (128~130)・IV (131~133)・III (134~137)がある。138は鉢Cであろう。139は全体の形態は不明であるが、鉢に分類した。煮炊具は小片で図示できない。貯蔵具は須恵器で、141・143は長頸壺A、142は短頸壺C、140は小形の壺蓋Aで灰白色の胎土、外面には黄緑色の釉が掛かり搬入品と思われる。2層の土器様相とほぼ同様5期の土器群である。

SD108 2区 1層 図版146

他の区に比べ、土器は少ない。食器では須恵器が主体となっている。144の黒色土器A杯A IIは底部を回転ヘラ削りする。須恵器杯A (145~149)は底部回転糸切り未調整である。5~6期の土器様相である。

SD108 2区 2層 図版147

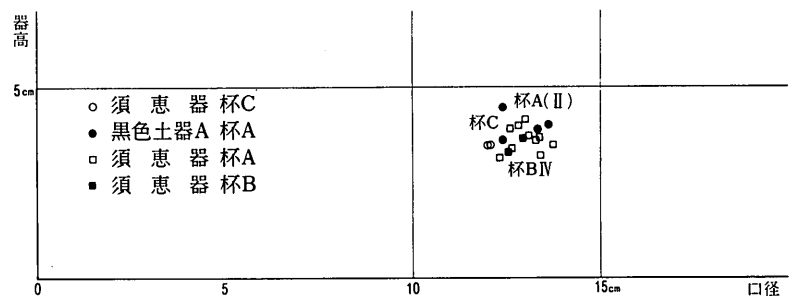
食器は土師器、黒色土器A、赤彩土器、須恵器、灰釉陶器があるが、土師器は杯C、赤彩土器も小片1片、灰釉陶器も160の段皿1片のみである。主体となるのは黒色土器Aと須恵器で量的には須恵器が最も多い。須恵器杯A (151~157)は底部回転糸切り未調整である。160は灰釉陶器段皿である。1層の土器様相に近い。

SD108 3区 1層 図版150

食器は須恵器主体で、黒色土器Aは少ない。図示したのは須恵器杯Aで底部回転糸切りである。

SD108 3区 2層一括土器 図版147、第121図、PL76・77

SD108の中央東寄りの深まりの部分の中央に並べられたような状態で、検出された一群の土器である。遺構の項で図示したように底を上にして伏せた状態で出土したものが大半で、164・166・167・168・170・173・176・179・181・182・186・187・188・189は完形であった。土器は食器のみで、

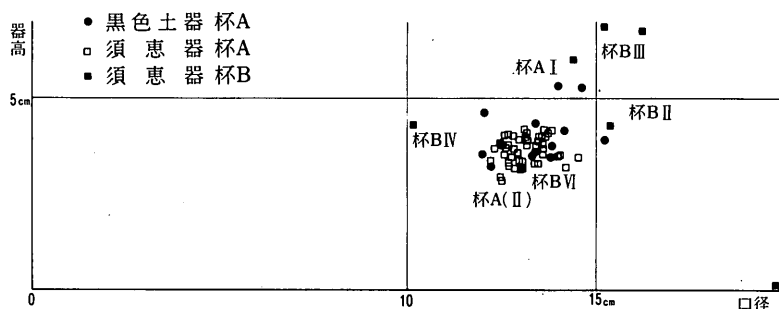


第121図 SD108 3区 2層一括出土土器法量分布図

黒色土器A杯A II (161~165)、皿B (181~182)、黒色土器B皿B (183)、赤彩土器皿B (184~186)、須恵器杯A (166~175)、杯C (176~177)、杯BIV (178~180)、皿B (187~190)がある。161は底面を回転糸切り後手持ちヘラ削りを行ない、「キ」字の線刻を行なっている。須恵器杯Aは底部回転糸切りで、体部の開きはやや強い。杯Cは底面を回転糸切り後回転ヘラ削りし、底部を途中で屈曲させるもので、杯Bの高台を外した形態となる。176・177ともに口径12cm・器高3.5cmの法量である。180は底部中央に内面から直径2.5cmほどの穴を開けている。皿Bの形態は黒色土器A・黒色土器B・赤彩土器・須恵器の4種類がある。黒色土器Aは内面をヘラ磨き後黒色処理、黒色土器Bと赤彩土器は内外面をヘラ磨き後黒色処理または赤彩を施す。須恵器皿Bはこの遺構にのみ見られる器種である。どの種類の土器も底面回転糸切り後回転ヘラ削りを施している。墨書の施された土器が多く、165~168・178・181~184・186~189には『甗』が、169には『西』が、176・177には『足』が墨書されている。6~7期の土器様相である。

SD108 3区 2層 図版147~150、第122図、PL76・77・81

食器と須恵器壺・甕類が多く煮炊具は、土師器甕B・甕C・小型甕Dの小片が少量あるのみである。食器は土師器・黒色土器A・赤彩土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。土師器は杯C (191~194)と盤Aである。杯Cは体部内面に鋸歯状の暗文を施し、外面は上半に横ヘラ磨き下



第122図 SD108 3区 2層出土土器法量分布図

半は手持ちヘラ削りを施す。黒色土器Aは杯A I (195~198)、杯A II (199~209)、蓋 (210)、椀 (211・212)、皿B (213~222)、鉢A (225~228)がある。杯Aは底部回転糸切り未調整を基本とするが、209では底面を手持ちヘラ削りしている。210の蓋は口縁部を屈曲させる須恵器の杯蓋Bの形態に類似するもので、口径14.4cmである。皿Bでは底面の回転ヘラ削りが省略されるものが多く、216・219・220・222でヘラ削りが施されるほかは回転糸切り未調整である。須恵器杯Aは形態にかなりの差があり、時期差のある遺物の混在が予想される。229~231は底部回転ヘラ切り、229は口径13.4cm・器高3.8cmである。232~282は底部回転糸切りの杯Aであるが器形状の差がかなり大きい。232~240では底径が大きくしたがって体部の開きも比較的弱い、26・77~282ではそれとは逆に底径が小さく体部の開きが強い形態で、器壁が薄くなる。その他はそれらの中間的な形態である。杯BはII (287)・III (288~291)・IV (292~294)・V (295)・VI (296~297)がある。いずれも底面を回転ヘラ削りしているが、288では糸切り痕が残る。292は美濃須衛窯産である。灰釉陶器皿 (299・300)は器壁の厚いもので内面のみ施釉するが、299はハケ塗りで重ね焼き痕が残る。301~303は緑釉陶器皿である。301・303は円盤状の切り高台である。301・302は胎土・釉調ともに近い。胎土は淡黄褐色の軟質で、内外面ともにヘラ磨きは行なわれておらず、体部外面下半にはヘラ削りが施されている。施釉は底面も含め全面に淡黄緑色の釉が施されるが、剥落している部分が多い。303は2次的な被熱をうけ鉛釉は銀化している。304~312は須恵器の貯蔵具である。304は壺蓋A、305・306は短頸壺で、305は口縁部が外反する短頸壺D、306は底部に回転糸切り痕を残す短頸壺Cである。307は平瓶の体部であろう。体部で屈曲するもので天井部に体部をふさいだ痕跡が残っている。310は口縁部を「コ」字に折り曲げる形態で、体部内面には同心円文が残る。美濃須衛窯産である。312の甕Bは四方向に板状の把手を付ける。流路の同一層中の土器であるが、4~6期の土器を含んでいる。

SD108 3区 枝溝1層 図版150

須恵器杯A (313~315)と杯B III (316)を図示した。杯Aはいずれも底部回転糸切りである。

SD108 3区 枝溝2層 図版150

須恵器杯A(320~322)は底部回転糸切り、杯B(324~327)は底面を回転ヘラ削りしている。330は土師器小型甕D、331~333は須恵器長頸壺Aである。

SD108 4区 2層 図版151・152

食器は須恵器が主体を占め、黒色土器Aは少ない構成である。334~338は黒色土器A杯A IIで、338は灯火器として使用され、内外両面口縁部全周に炭化物が付着している。339の黒色土器A碗は口径12.1cm・器高5.4cmと器高の高い形態である。須恵器は杯A(342~373)・杯C(340・341)・杯B(378~385)・杯蓋B(374~377)・盤(387)・鉢Aがある。杯Cは底面全体を回転ヘラ削りし、底部は途中で折れる形態である。法量は341で口径11.4cm・器高3.4cmとIII区一括土器中のものより小形である。杯Aはすべて底部回転糸切りで、体部の開きの強いものが多い。杯BはIII(382~385)・IV(379~381)・V(378)がある。杯蓋Bはつまみに多様な形態があり374はつまみの中央がくぼむ。386は須恵器長頸壺A、388は灰釉陶器小壺である。

SD109 図版152

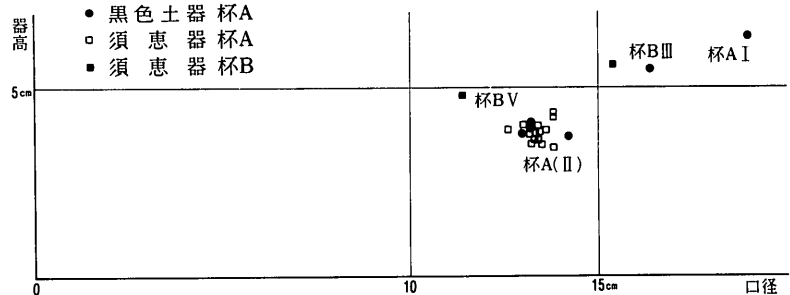
食器は土師器・黒色土器A・須恵器があり須恵器が主体を占める。土師器杯Cは体部外面上半はロクロナデ、下半を手持ちヘラ削りする。内面は暗文状のヘラ磨きがなされる。口径12.1cmである。須恵器杯A(4~12)は底部回転糸切り。17は口縁部を屈曲させる小形の鉢Aである。煮炊具は土師器甕B(21)と小型甕D(18~20)の2者があり、21は口縁部を強く短く「く」字に屈曲させている。5期の土器様相である。

SD110 図版152

煮炊具はわずかで、食器が多く次いで貯蔵具が量的には多い。食器は須恵器主体で黒色土器Aは少ない。1は底部回転糸切りの須恵器杯A、2は杯B IIである。5~6期の土器様相である。

SD117 図版153、第123図

食器が多く煮炊具・貯蔵具が少ない構成は他の溝の様相と類似している。黒色土器Aは杯A II(1~6)と杯A I(7~11)で碗・皿類は無い。須恵器杯A(12~25)は底部回転糸切りである。『而』と『厷』と墨書されたものがあり形態的に比較できる。『而』は12~14で体部の腰が強張り体部の開きは弱い。『厷』は15で体部が直線的に強く開く形態をとる。16~25は体部の開きの強い形態である。26~28は杯蓋Bであるが26は大形で、杯B Iに対応するものである。杯Bでは29が杯B V・31がIIIとともに体部の開きは大きく、底面中央には糸切り痕が残る。33は須恵器壺蓋A、34は甕Eである。6期の土器様相である。



第123図 SD117出土土器法量分布図

は12~14で体部の腰が強張り体部の開きは弱い。『厷』は15で体部が直線的に強く開く形態をとる。16~25は体部の開きの強い形態である。26~28は杯蓋Bであるが26は大形で、杯B Iに対応するものである。杯Bでは29が杯B V・31がIIIとともに体部の開きは大きく、底面中央には糸切り痕が残る。33は須恵器壺蓋A、34は甕Eである。6期の土器様相である。

SD118 図版153

1は黒色土器A杯A II、2は須恵器杯Aである。

SD119 図版153

遺物は少ない。食器では黒色土器A杯A II(1)、皿B(2)がある。

SD124 図版153

1は須恵器杯Aで底部回転糸切りである。

SD128 図版153

食器は須恵器と黒色土器Aがあり、量的には須恵器が主体である。須恵器杯A(4~7)は底部回転糸切り

で、体部の開きは大きい。12は高杯の体部である。

SD130 図版154

灰釉陶器碗(1)を図示した。光ヶ丘1号窯式である。

SD132 図版154

1は須恵器杯蓋Bで口径19cmを測る。口縁端部は短く折り返される。

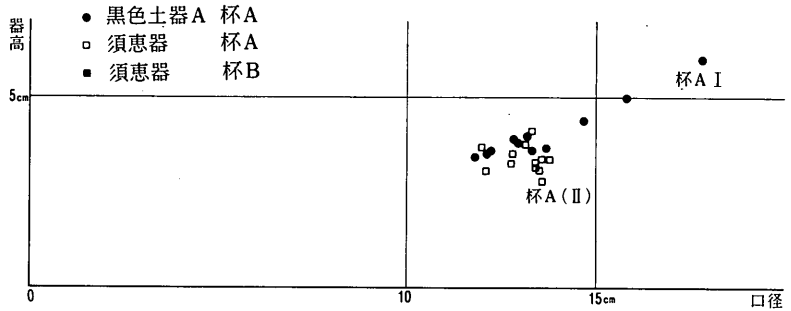
SD135 図版154

食器は黒色土器A(1~3)が主体の構成である。

SD137 図版154・155、第124図、PL81

遺物は比較的多く、食器が主体を占め次いで貯蔵具が多く、煮炊具が非常に少ない土器構成となっている。

食器は黒色土器A・赤彩土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器があり、主体となる黒色土器Aと須恵器はほぼ同量である。黒色土器Aは杯A II(1~9)・杯A I(10~12)・碗(13~15)・皿B(16)・鉢A(18~20)のすべての器種がある。杯Aは底部回転糸切り未調整で、碗も13・14は



第124図 SD137出土土器法量分布図

糸切り痕が残る。16の皿Bとしたものは高台が高く器高4.4cmを測る。鉢A18は底部に焼成後の再調整として穿孔を行っている。19・20は底面にヘラ記号がある。須恵器杯A(21~32)は器壁が薄く体部の開きの強い形態である。杯蓋B(37)は口径24.4cmを測る大形で、38の杯B Iに対応するものである。43~46は灰釉陶器碗である。いずれも器壁は厚く底部ヘラ削り、小さめの丸味を帯びた角高台を貼付する。45では口縁部を強く外反させている。施釉はいずれも内面全体に自然降灰の灰釉が掛かる。外面は無釉である。いずれも黒笹14号窯式に属する。47は緑釉陶器で円盤状の切り高台である。胎土は軟質で、釉はほとんど剥落している。貯蔵具では、灰釉陶器壺蓋A(48)、短頸壺(49)、長頸壺(50~53)があるが、須恵器では甕A(54・55)、鉢A(56)がある。また42は、須恵器壺蓋Aと思われるが、天井部に沈線と刺突による文様を施している。

SD139 図版155

食器がほとんどである。黒色土器Aと須恵器では須恵器の量が多い。4・5は本遺跡でも出土の少ない黒色土器A蓋で、4のつまみは扁平な宝珠形で須恵器杯蓋Bのものに似ている。内面は杯類同様口縁部周辺を横ヘラ磨き、内部は放射状のヘラ磨きを施し黒色処理する。4は口縁部を単に丸く納めるが、5は須恵器の杯蓋Bのように屈曲気味である。6は底部を回転ヘラ削りし、屈曲させる須恵器杯Cである。

SD147 図版155

底部回転糸切りの須恵器杯Aを図示した。

SD151 図版155

須恵器杯蓋Bを図示した。

SD163 図版155

食器のみ図示したが、須恵器甕の出土が多い。1は黒色土器A碗、2は皿Bである。土師器杯A IIがある。4は灰釉陶器長頸壺、5は須恵器鉢Aである。

SD170 図版156

食器と須恵器の貯蔵具類が多く土師器甕類は少ない。食器では須恵器が主体である。2の黒色土器A鉢

Aには内面に漆が広い範囲にわたって付着している。4の皿Bは角高台が貼付されている。8の須恵器杯蓋Bは口径21.4cmを測る大型である。11の灰釉陶器椀は、厚手の胎土で内面にのみ釉が掛かる黒笹14号窯式である。12は須恵器長頸壺Cである。

SD171 図版156

1は土師器の耳皿Aで内面のみへら磨きし、底部には糸切り痕が残る。3の椀は低い角高台を貼付するもので体部は直線的に伸び越州窯系の青磁碗を彷彿させる形態である。8の灰釉陶器椀は厚手の胎土で内面にのみ釉がかかる黒笹14号窯式である。9は須恵器盤の脚台である。

SD173 図版155

黒色土器A杯A II(1)と須恵器杯A(2)を図示した。両者ともに底部回転糸切りである。

SD176 図版155

2は小形の灰釉陶器椀で、やや厚手の胎土に内面にのみ自然降灰の自然釉が掛かる。

SD181 図版155

黒色土器A杯A Iを図示した。

溝址群III 図版156

遺物は小破片が多い。黒色土器杯Aのうち1・3は底部回転糸切り後へら削りの可能性がある。16の須恵器壺蓋Aは胎土より尾張方面からの搬入品と思われる。

エ 土坑・その他の遺構出土土器

SK110 図版157

黒色土器A杯A II(1)が1点出土したのみである。

SK170 図版157

土師器甕Bのみ3個体出土した。図示した1・2ともに口縁部は短く強く外反する形態で、体部は薄く仕上げられている。5期の甕である。

SK398 図版157

須恵器杯蓋B(1)が1点のみ出土した。

SK435 図版157

食器は黒色土器A杯A II(1)、須恵器杯A(2)・杯BIV(3)、煮炊具は土師器甕Bと小型甕B、貯蔵具は須恵器甕がある。

SK436 図版157

1は体部の開きの強い須恵器杯Aで『而』の墨書がある。

SK460 図版157

黒色土器A皿B(1)を図示した。全体に強い被熱のため歪んでおり、内面の黒色処理のため吸着させた炭素も抜け落ちている。緑釉陶器椀は区画溝I南北溝の17と接合した。

SK466 図版157

1・2ともに底部回転糸切りの須恵器杯Aである。

SK491 図版157

食器は須恵器(2~8)が主体で黒色土器A(1)は少ない。須恵器杯Aは体部の開きが比較的弱い形態である。

SK530 図版157

1は口径11.3cm・器高3.2cmの灰釉陶器椀で、底面から体部外面下半を回転へら削りし、角高台を付する。釉は内面にのみ見られる。

SK533 図版157

1の須恵器杯Aが1点のみ出土した。口径14.2cm・器高3.9cm・底径8.2cmで、底部回転ヘラ切りである。

SK534 図版157

2は赤彩土器の蓋である。ロクロ調整の後ヘラ磨きすることなく赤色塗彩を施している。類例はSX301区にある。須恵器杯Aでは3～5に『甗』の墨書が、杯BIVの7には『草茂』の墨書がある。

SK540 図版157

黒色土器A杯A I (1・2)と、須恵器杯A (3)を図示した。1は体部の深い形態で、底部外周を回転ヘラ削りしている。

SK551 図版158

食器類では黒色土器A (1～3)と須恵器、軟質須恵器(4・5)がある。(1・2)には内面に「×」の刻書がある。土師器甕B (7)は、器壁の厚い、口縁部の直線的に伸びる外反の弱い形態である。

SK554 図版157

食器は須恵器より黒色土器Aが多い。黒色土器Aは杯A I・杯A II (1・2)・椀(3)・皿B (4・5)・鉢Aがある。7の灰釉陶器椀は、器壁の薄い作りで、口縁部を強く外反させている。

SK555 図版158

1は黒色土器A皿B、2は灰釉陶器皿で三日月高台、内外面にハケ塗りで施釉する。3は須恵器鉢か。体部に稜を作る形態で、類例がSB92にある。

SK565 図版158

土師器甕B (1)を図示した。口縁部は短く外反するが、頸部を強く指オサエするため口縁部がやや肥厚する。

SK566 図版158

須恵器把手付長頸壺A (1)と平底の甕(2)を図示した。1は体部をタタキ調整の後ロクロナデしている。

SK574 図版159

量は少ないが、食器・煮炊具・貯蔵具ともにあり、竪穴住居址の構成に似ている。食器では黒色土器A (1～4)、須恵器(5・6)、軟質須恵器(7)、灰釉陶器(8)がある。8は、厚目の胎土で、底部と体部外面下半を回転ヘラ削りし、断面方形の角高台を付ける。施釉は内面のみで、全面に厚く釉が掛かる。施釉方法は不明。

SK579 図版158

2は黒色土器A椀である。

SK580 図版159、PL78

土坑内の覆土中から多量の焼土とともに出土した土器群である。黒色土器Aは杯A II (3)と鉢A (1・2)があり、椀・皿Bはない。4は赤彩土器の皿Bで、口径12.4cm・器高2.2cm、底面は回転ヘラ削り、他は全面ヘラ磨き後赤色塗彩を施しており、SB97・SB143・SD108-3区出土のものと同形態・調整とも同一である。須恵器は杯A (5～7)、杯B (8・9)、皿B (10)、高杯 (16)がある。高杯は口径21cm・器高15.4cmで、体部は直線的に伸びる浅いものである。口縁端部は内傾する面を作るが「S」字に屈曲することはない。脚部には三方向に長方形の透かしを穿ち、透かしと透かしの間には二条の平行沈線を引いている。11～13は灰釉陶器である。11は椀で直線的に開く体部は、外面を底部から体部中程まで回転ヘラ削りし、底面には輪状高台を貼付する。釉は内面にのみ自然降灰の釉が掛かる。又内面には三叉トチンの目跡が残る。12は体部の深い椀で、器壁は厚く内面にのみ釉が掛かる。13は広縁の段皿で、高台は角高台、釉は内面にのみ厚く掛かる。焼土とともに廃棄された一括遺物である。

SK599 図版158

須恵器杯A(1)1点のみ図示した。底部回転糸切りである。

SK609 図版159

食器では須恵器の量を黒色土器Aが上回っている。黒色土器Aは杯Aのほか碗(2)・鉢Aがある。4の須恵器短頸壺Bには肩部に把手が付く。6は須恵器壺蓋A、7は須恵器高杯である。

SK610 図版159

遺物の量は少ない。体部の開きの弱い須恵器杯A(1)を図示した。底部回転糸切りである。

SK624 図版159

1は黒色土器A杯A Iで、底面と底部周辺を回転ヘラ削りしている。

SK628 図版159

1は須恵器杯Aで底部回転糸切りである。

SK632 図版160

1は灰釉陶器碗で、厚手の胎土に角高台を付ける。釉は内面のみにかかる。

SK643 図版160

壺蓋Aを図示した。灰褐色の緻密な胎土で、搬入品であろう。

SK652 図版160

須恵器短頸壺A(1)が1点のみ出土した。

SK684 図版159

1は須恵器長頸壺Aである。底面に「×」のヘラ描きがある。

SK833 図版160

1は須恵器杯A、2は土師器小型甕Aである。

SK834 図版160

1・2は須恵器杯A、3は土師器小型甕Aで底面に木葉痕が残る。

SK835 図版160

須恵器杯A1片と、1の灰釉陶器平瓶が出土した。平瓶は、体部最大径26.8cm・底径17.6cmを測る。体部で稜をなして屈曲し、中央がやや盛り上がる天井を作る形態で、体部外面は回転ヘラ削り、天井部には釉を厚くかぶる。また、底面にも釉が掛かる。

SK910 図版160

回転糸切りの須恵器杯A(1)と、杯BIV(2)を図示した。

SK937 図版160

食器は須恵器杯Aのみで、体部の外反の弱い形態(1)である。

SK975 図版160

食器は須恵器の量を黒色土器Aが上回る。2の須恵器杯Aは器壁が薄く、体部の開きの強いロクロ目の目立つ形態である。

SK1008 図版160

黒色土器A杯A I(1)は厚手で、体部のない湾が強い形態である。須恵器杯A(2・3)は体部の開きが弱い。食器では黒色土器Aより須恵器が多い。

SK1069 図版160

丸底の須恵器甕底部を図示した。

SK1208 図版161

土師器甕B(1)を図示した。口縁部が短く強く外反する形態である。

SK1276 図版160

食器は須恵器と黒色土器Aがあり、須恵器の量が多い。須恵器は体部の開きが比較的弱いもの(2~4)が多い。

SK1281 図版161

須恵器杯A(1)、杯蓋B(2)、長頸壺C(3)を図示した。1・3の底部には糸切り痕が残る。2は高い天井部で、口縁部を強く屈曲させている。

SK1285 図版161

食器は須恵器のみである。杯A(1・2)は底径が大きく体部の開きの弱い形態である。3は杯BIVである。

SK1286 図版161

1は須恵器鉢Aの口縁部で、底部に糸切り痕が残る。

SK1338 図版160

須恵器杯A(1)を図示した。

SK1410 図版161

1は土師器小型甕Dで、口径17.2cmを測る。

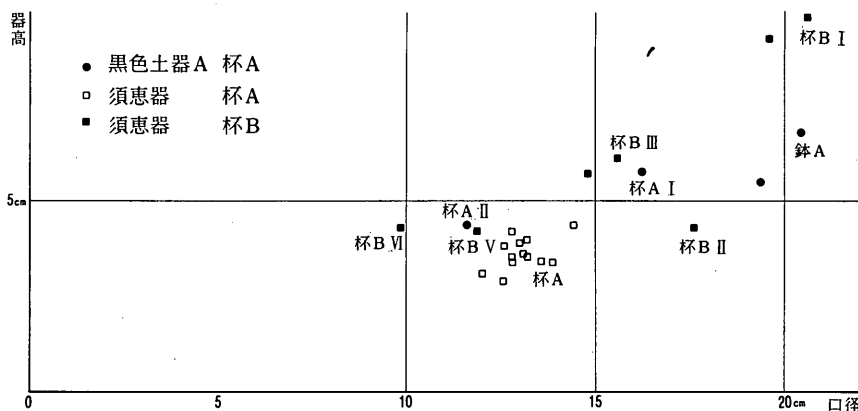
SK1527 図版161

1は須恵器杯Aで、底径が大きく体部の開きの弱い形態である。

SX30出土土器 SX30は大型の湿地状の遺構であり、遺構の項で述べたように平面的に1~7区に分けられる。それぞれの区の土器について述べる。

SX30 1区 図版161・162、第125図、PL80

出土土器のほとんどを食器が占める。煮炊具は13個体、貯蔵具は23個体を数えられるが小片が多い。食器は土師器盤A(1・2)、黒色土器A杯A I(4)・杯A II(3)・鉢A(5~7)。7は内面に漆が付着している。赤彩土器(8~13)はロクロ調整の土器である。軟質で褐色味の強い灰白色の胎土で、赤褐色の粘土によって内外両面に塗彩されている。胎土が軟質のためか顔料ははがれやすい。8は無台の杯で、底面の調整は不明である。9・10も同様な器形になると思われる。9は灯火器として使用されている。11は蓋である。12は8~10同様体部の開きは強いが、同一個体と思われる高台の破片がある。13は皿Bで、内外面をヘラ磨きし赤彩を施す。8~12が赤彩にヘラ磨きを伴わないのに対し、13は黒色土器Bの皿Bに器形・手法ともに共通している。須恵器杯A(14~29)は量的に最も多く92個体を数えられる。出土土器法量分布図に見るように、杯BはVI(34)・V(35)・IV(36)・III(37~39)・II(40・41)・I(42・43)の6法量が認められる。体部の開きの大きいものが多く35・39・40・43では顕著である。杯蓋Bは杯Bとの対応関係はさだかではないが、30は杯B Iと対応するであろう、器壁が厚くつまみも高い。44~46は須恵器高杯である。44は口縁端



第125図 SX30 1区出土土器法量分布

44は口縁端

部を「S」字状に折り返す。口径21.4cmを測る。45は脚部で、三方に長方形の透かしを穿ち、さらに透かしと透かしの間は2条の平行沈線を引いている。47は須恵器鉢Aである。48は灰釉陶器碗で、内面無釉、外面に自然降灰の釉が薄く掛かる。49は緑釉陶器碗で、胎土は褐色味を帯びた灰白色軟質、内外両面に光沢のある淡黄緑色の釉が掛かる。ところどころ斑点状に緑の濃い部分がとんでいる。煮炊具では50が土師器小型甕D、51が土師器甕Bである貯蔵具は須恵器長頸壺A(52・53)、甕D(54)・甕E・甕がある。6期の土器様相である。

SX30 2区 図版162・163

煮炊具・貯蔵具が少なく、食器が土器の主体を占めるあり方は一群の構成に近い。食器は黒色土器A・赤彩土器・須恵器があるが主体は須恵器である。55～57は黒色土器Aで55が杯A II、56・57は杯A Iである。55は底面から体部下半にかけて手持ちヘラ削りを施している。58は赤彩土器で、有台の皿Bであろう。59～79は出土土器の主体を占める須恵器杯Aである。すべて回転糸切り未調整で、体部の外傾は強い。85は盤の脚部か。破片であるが煮炊具は土師器甕Bと小型甕D、貯蔵具は須恵器長頸壺A・短頸壺A・甕・甕Dがある。6期の土器様相である。

SX30 3区 図版163・164

土器の構成の状況はI・II群と変わらない。86は黒色土器A杯A II、87～99が須恵器杯A、100～105は杯蓋Bで、杯BはV(106)・IV(107・108)・III(110)・II(109)・Iの5法量が認められる。111は高杯である。煮炊具では小型甕D(115)を図示した。貯蔵具は須恵器のみで、長頸壺A・長頸壺C・短頸壺A・甕(112)・甕E(113・114)がある。6期の土器様相である。

SX30 5区 図版164

土器は少ないが食器主体である。黒色土器A杯A I(116)、須恵器杯A(117・118)を図示した。他に赤彩土器杯がある。6期の土器様相である。

SX30 6区 図版164

土器の構成は1区以下に類似する。須恵器杯A(120・121)が量的に最も多い。6期の土器様相である。

SX30 7区 図版164

土器の構成は1区以下に類似するが、他に比べ貯蔵具がやや多い。黒色土器A杯A I(122・123)・須恵器杯蓋B(124)を図示した。6期の土器様相である。

SX30 不明 図版164

SX30の検出時、あるいは先行調査時にトレンチから出土した土器で、各区に返せない土器である。食器、中でも須恵器が主体で、1～7区の土器様相と類似している。

オ その他の土器(図版165、PL81)

遺構調査に先立つトレンチ出土の土器である。1～8は黒色土器A、9～22・28～30は須恵器、23・24・31・32は灰釉陶器、25～27は緑釉陶器である。16はつまみが環状になる蓋で、碗蓋である。19・20は盤の脚台か、20には透かしがある。21・22は高杯の脚部で、22には透かしがある。23の灰釉陶器碗は、底部から体部下半にかけて回転ヘラ削りする。内面には自然降灰による釉が掛かる。24は三日月高台を付する皿で、施釉はハケ塗りである。25の緑釉陶器碗は、付け高台で、高台端面をヘラで押えくぼみをつける。胎土は軟質の淡黄灰色で、底面まで全面に光沢のある斑点状の濃淡のある淡黄緑色の釉を掛ける。26・27は円盤状の高台をもつ緑釉陶器皿である。全面に施釉されるが、ヘラ磨き調整は観察できない。両者ともに被熱を受け、鉛釉部分は銀化して黒褐色を呈している。26は須恵器短頸壺Bで体部に「十」字の透かしを施す。8はSD108、15・18は区画溝I、25はIIFQ08グリッド、26はIIDQ20グリッド、27はIIBQ13グリッド、29はIIHI区、30はSB21付近のIIL区、31はIIFR22より出土した。

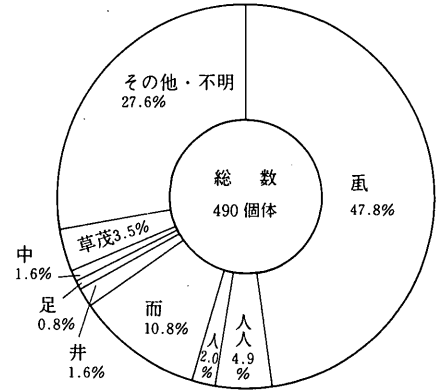
2 文字関係資料

本遺跡で出土した文字関係の資料には墨書土器、刻書土器、篋書土器、漆紙文書、陶硯類などあり質、量ともに豊富である。なお墨書土器、刻書土器、篋書土器の分類については総論編(松本市内その1)を、漆紙文書については付編1を参照されたい。

(1) 墨書土器

ア 墨書土器の出土状況

490点の出土がある。竪穴住居址197点、掘立柱建物址1点、溝址204点、土坑13点、その他の遺構53点、遺構外、検出面から23点が出土している(附表4)。出土量の多い遺構を見ると埋没河川であるSD108からの出土が多く123点が出土している。竪穴住居址ではSB143の34点、SB92の33点、SB97の24点などが多い。このほかに区画溝I・II・III(45点)、池状遺構であるSX30(53点)などもまとまった出土量がある。これらの遺構は土器の出土状況に共通性が認められる。それは土器自体の出土量が多くしかも覆土に集中して見られることである。廃棄された遺物として処理されたものと考えられ、従って墨書土器もまたその遺構自体には属さないと考えらる。ただしSD108、SX30の一部にある程度の一括性の認められる出土がある。



第126図 墨書土器出土文字割合

文字の構成は圧倒的に『厶』が多く全体の半数を占める。次いで『而』、『人人』と続く(第126図)。

イ 文字分類

(ア) 厶

234点と本遺跡の墨書土器の半数近くを占める。意味自体は不明であるが、類似する文字の類例が関東地方を中心として増加している。書体により方形タイプ、縦長タイプに大きく2分することができる。さらにそれぞれ細分が可能でA～E類に分類した。

A類：点画がしっかりしており、書き慣れた感じを受ける一群である。縦長タイプに近いが全体の形状では裾が張ることから方形を呈す。字形により1・2に細分される

B類：全体に丸みを帯び、方形タイプのみに限られる。文字の大きさや細部の違いによりさらに細分が可能で1・2に分けられる。

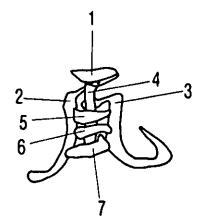
C類：B類に近いが、点画がしっかりする一群である。第3画の跳ね方により1・2に細分される。

D類：方形タイプのみで若干丸みを帯び、裾部分と第7画との間が開く。1・2に細分される。

E類：縦長タイプのみである。第2画と第3画の裾部分に特徴が見られる。全体の形状はやや背の高い台形を呈す。

なお筆順については複数の書き方が存在するが便宜上313の筆順(第127図)を基本として以下分類ごとに説明をすることにする。

A1類：『厶』のなかで最も書き慣れた感じを受ける書体である。全体として右上りで点画が力強い。第1画と第2画が繋り、第2画を力強く払い、第3画の肩が張り、裾部分は釣り針状に湾曲しながら跳ね上げるのを特徴とする。313・319はいずれもSD108から出土しており、同一の書き手による可能性が高い。A1類のほかに第3画の裾を張り斜め上方に跳ね上げる手法はなく細片であるが、205・346などもこれに



第127図 『厶』墨書土器筆順

属すと考えられる。また、322は第1画と第2画が繋っておりこれも本類に属すと考えられる。197はD1類に分類したが第1画と第2画が繋がる点では本類と共通する。

A2類：全体形状の知れるものはないが第2画と第3画がループ状に繋るものをA1類から分離した。A1類同様達筆の部類に入る。282・481などがあり、同一の書き手によると考えられる。前者はSD108後者は遺構外遺物で、SB97のあるII F区からの出土である。

B1類：308を典型とする一群で、58・61・110・114・117・169・199・210・214・238・294・306・308・309・333・335～337・359・389などがある。第2画と第3画の運筆は丸みを帯び、やや内湾しながら裾部分を外開させており、左右対称形に仕上げている。横線部分は短く仕上げわずかに左上りのもの(337)が見られる。このうち308・309・335～337は文字の大きさが1cm角のもので、SD108の3区からの出土であり、308・309は赤彩土器に、335～337は須恵器皿Bの底に墨書されている。墨書される位置も中心部を外れ高台側に寄っている。墨書される土器は同一の焼きの土器であることや、書く位置の癖などから同一の書き手によりほぼ同時期に墨書され廃棄されたものと考えられる。また、SB143出土の166はごく一部しか確認できないが赤彩土器皿に、185は須恵器皿に墨書され、やはり小さな文字で同一部位に墨書され同一の書き手による可能性がある。このことはSD108の3区の一括土器群とSB143との同時性を示すものとして注目される。このほかはこれらよりも文字が大きくほぼ2cm角の大きさである。第3画の横線部分が丸みを帯び共通性が認められたため本類に入れた。同一の書き手とは判断できないがいずれかを手本にして複数の人により書かれた可能性がある。

B2類：170・175を典型とする。書体は若干左上りで、第2画と第3画の肩部がやや角ばり第3画の肩部が丸みを帯び撫肩になる。裾部分の払いは小さく第3画の跳ねは見られず軽く払うかそのまま止めるものが多い。B1類と共通点が多く分離が不可能なものも多い。160・161・167・170・175～179・362・387・409などが本類に属し、102・108・152・173・174・180・203・254・273・274・355・362・384・385・405・445・473などは別類、あるいはB1類に入れたほうが良いかもしれない。本類はSB143を中心として出土しており170・175・178については同一の書き手と判断して差し支えないであろう。

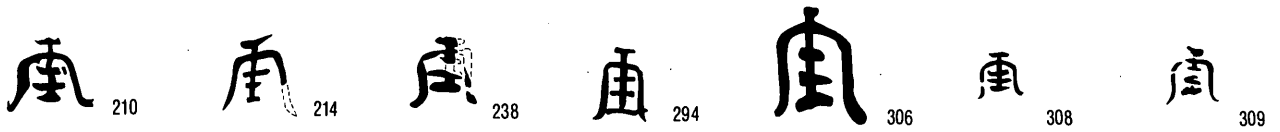
C1類：B類同様方形の書体を持ち、ほぼ左右対称形となるが若干右上りになる。第2、第3画の肩部が角ばるのを特徴とする。裾部分は左右に広がり、両端ともに丸味を帯びるように処理する。69・84・86・115などがあり、122についても若干違うがこのまとまりに入れた。E1類に分類したものに近いがより方形の書体に近いものを分離した。

C2類：C1類と同様肩部が張るもので文字の小さなものを一括した。裾部分の形態は左右に開くものとあまり開かないものの2種がある。前者の典型は290後者の典型は305である。290の仲間としては4・59・98・99・155・159・163・200・276・278・280・344・347・374・390・408などがあり、SB143を中心として出土している。155・163は同一の書き手により墨書されたものであろう。305の仲間として5・55・56・105・147・263・285・343・349などがある。SB135出土の147とSD108出土305は同一の書き手によるものと考えられ、同一形態の黒色土器A皿に墨書される。

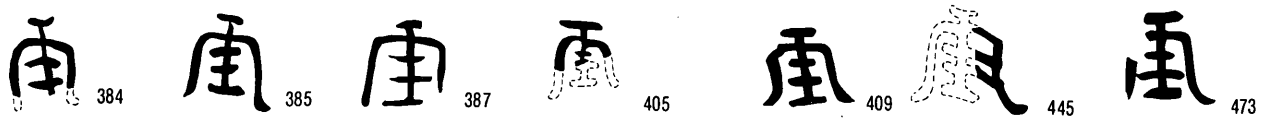
D1類：右上りで、縦方向に長い書体である。肩部や裾部の処理はやや丸みを帯びるのを基本としている。第2画は外開しながらわずかに横に払うか跳ねている。第3画の裾部分はほぼ直角に折れ曲がり止めるかわずかに跳ねる。315を典型とする。62・67・101・148・171・197・351・382・406・417などがある。62・171・315・406などは同一の書き手によるものと考えられる。SB92・143、SD108、SK534からの出土であり出土遺構に若干の時間幅がある

D2類：D1類の書体に近く第3画の処理の仕方に差異が認められる。第3画は鋭角に折れ曲がり斜め上方に跳ね上げている。328を典型とし、他に112・168・186・317・325・383・399・463・487などがある。

A類



B類



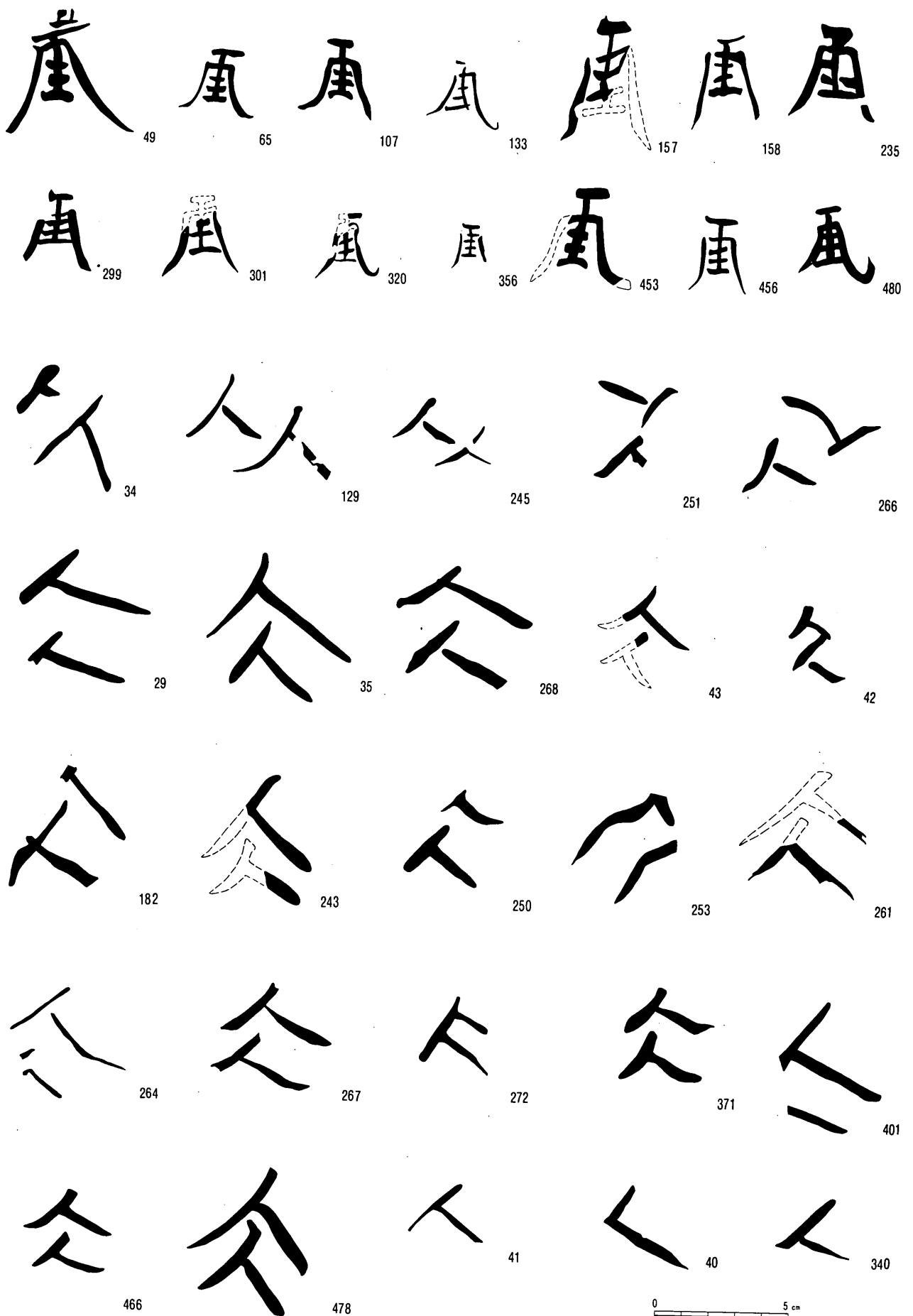
C類



第128図 墨書土器文字集成 1



第129图 墨書土器文字集成 2



第130图 墨書土器文字集成 3

168と328、186と383はそれぞれ同一の書き手によると考えられる。

E 1 類：全体形が台形になるものの中で、裾部の処理を左右に開くものをまとめた。第2画の裾を斜め下方へ跳ね、第3画を丸みを帯びながら斜め上方へ跳ね上げている。185を典型とし60・75・242・345などがある。302・363・418・443・479についてはE 1 類との中間の形態を示し、E 2 類に入れたほうが良いかもしれない。185・242・345は同一の書き手と判断してよく、特に185(SB143)と242(区画溝Ⅲ)は別遺構からの出土であるが、特徴ある器種須恵器杯B I で出土数も少なく蓋と身の関係にある可能性が高い。

E 2 類：全体形状が台形であり、E 1 類程裾部を広げず左右対称となる。裾部分と第7画がそろそろ。91を典型とする。100・153・192・292・312・348・360・452などがある。

E 3 類：E 2 類と同様であるが裾部分と第7画とに間隔があるものをまとめた。235・299などが代表的である。65・107・133・157・158・301・320・356・453・456・480などがある。49についてはいわゆる『厶』とは異なるがこの分類に入れた。

(イ) 人

『人人』24点、『人』10点出土している。『人人』の墨書は文字自体による分類は出来ないが文字の配置により3タイプに分けることができる。2文字目を正位に斜め下方に配置するもの(34・129・245)、文字を逆位に向い合わせるもの(251・266)、文字を正位に配置し、2文字目を下方に配置するもの(29・35・42・43・182・243・250・253・261・264・267・268・272・371・401・466・478)がある。このタイプは第1文字目が大きなもの35・264・401とほぼ同じ267・371・466などの2種があり、複数の書き手がいることがわかる。

(ウ) 而

『厶』に次いで出土数の多い文字で53点出土している。書体、書き順などにより大きく4分類(A～D類)することができさらに細分が可能である。

A 類：通常書き順のもの。第5・第6画の処理の仕方により、大きく2分類できる。比較的大きな文字で第4画を大きく内湾させながら跳ね、第6画を長く払うのを特徴とする。68・72・104・207・222・240・241・275・400・407・426・428・430・443・477・482・483などがある。これらの墨書は共通性がありほぼ同一の書き手と判断してよいであろう。430は正位に2文字を重ね、文字の大きさはやや小さいがこの仲間に入れてよいであろう。240・241はやや書体が異なる135・223・399などもこの仲間に入れてよい。

B 類：通常書き順であるがA類と異なり文字の下端を揃えるものをまとめた。2・71・132・145・187・202・206・221・339・377・398・402・403・448・461・489などがある。これらはいくつかの書体を含んでおり複数の書き手が見られる。132・377・489は同一の書き手であろう。

C 類：第4画と第5・第6画の書き順が逆転するもの216・427などがある。216・427などは同一の書き手によるものであろう。

D 類：所謂『而』とは若干書体が異なるがこの仲間に入れた。11・365・434・435がある。第3画を内側に折り返し、あたかも1画を成すように処理する一群である。特に434・435は同一の焼成品と考えられる須恵器に墨書されておりSX30からの出土である。同一の書き手により同時に墨書されたものと考えられる。A類に分類した240・241も同様な書き方であり、共通性がある。

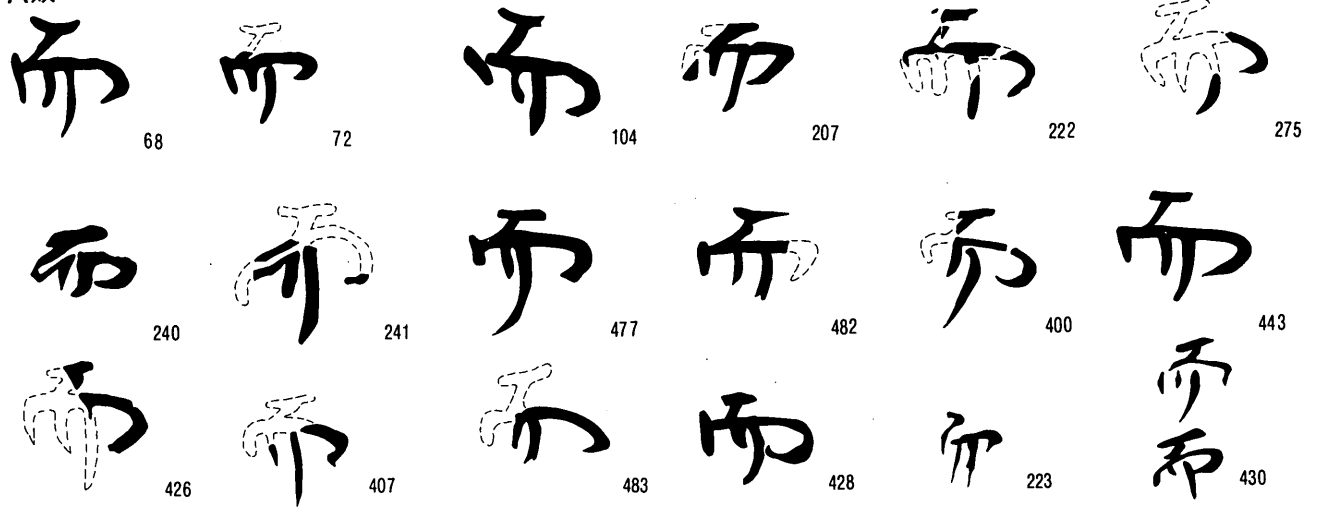
(エ) 井

8点出土している。18・386を除いて北部Ⅲ地区より出土している。SB72からは3点と集中する。18・28・30・32は同一の書体であるが遺構は北部Ⅲ地区と南部Ⅱ地区に離れている。文字の大きさの点で126・127・244・386は共通性がある。

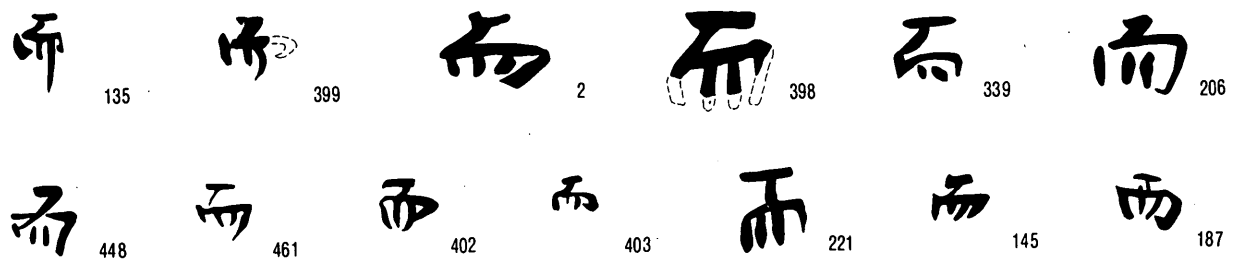
(オ) 足

4点出土しているがこのほかに可能性のあるものとして2点が加わる。この文字は特定器種に墨書され

A類



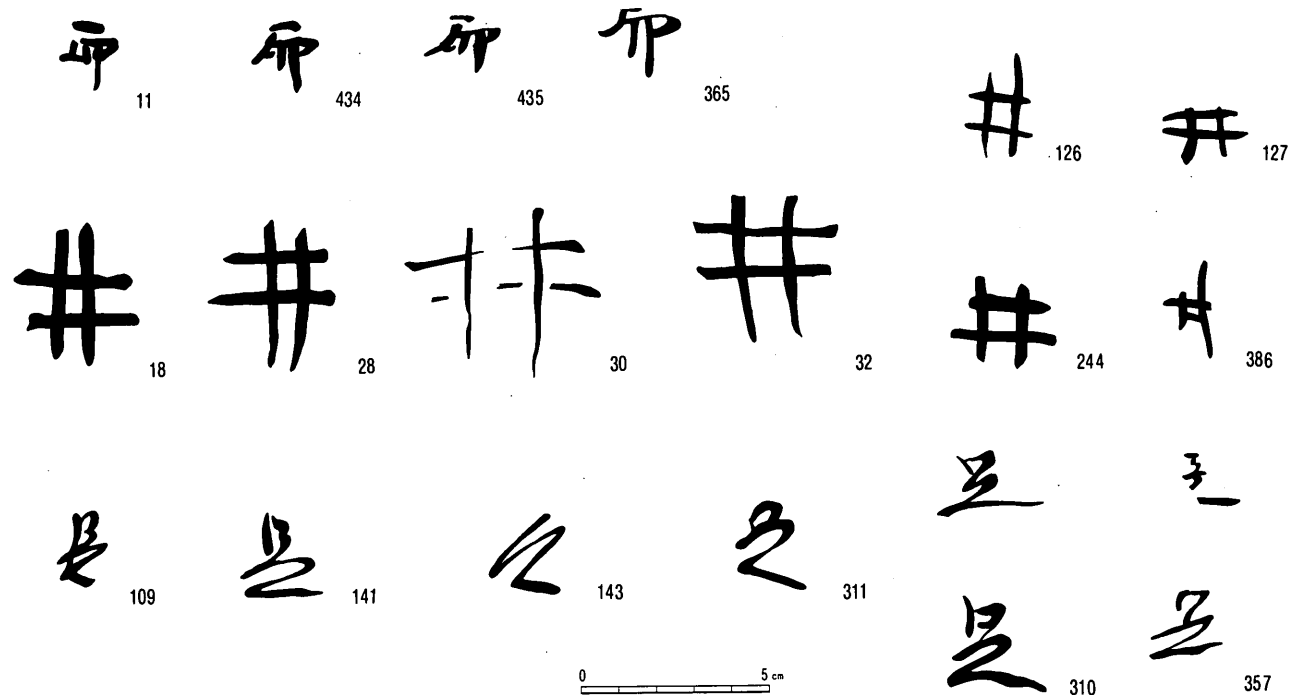
B類



C類

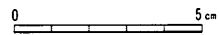


D類



第131图 墨書土器文字集成 4

る傾向がある。東海系の搬入品と考えられる須恵器杯Cの底部内面および底部外面に墨書される(310・357)。311も同一器種であり、底部内面にも墨痕が観察され『足』となる可能性が高い。また、109は須恵器杯蓋の内外面に墨書が認められる。特に外面の墨書はつまみ部分にされており非常に珍しい。SB126出土の141・143は須恵器杯A・Bの底部外面になされている。



第132図 墨書土器文字集成 5

(カ) 中

「イ」偏の付く『仲』(22・123)も含めて7点出土している。『中』は灰釉陶器の338を除き須恵器杯Aに墨書される。松本市の調査したSKMT第8号住居址からも出土している。

(キ) 禾

3点出土しており基本的には灰釉陶器に墨書される文字である。SB96出土の89、SB100出土の121は灰釉陶器の底部に墨書されている。

(ク) メ

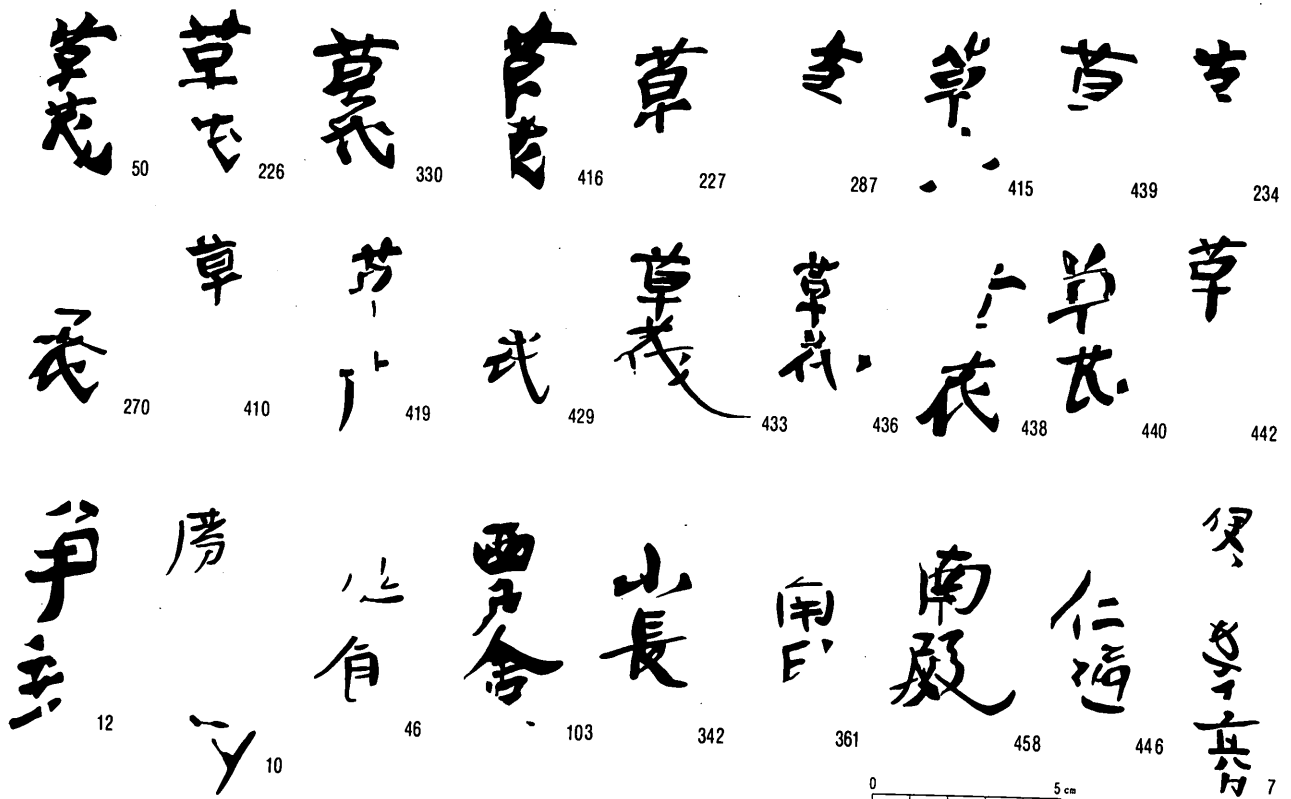
140・142がSB126、201が区画溝Iから出土している。いずれも須恵器杯の底部に墨書される。松本市の調査したSKMT4号住居址からも出土している。

(ケ) その他の文字

全(3・6)、力(19・358)、継(47・48)、秋(14・31)、木(138・211)、大(273・303)などが複数出土している。8・412・468などは「満」などの可能性があるがはっきりしない。21は「道」、23は「茜」、87は2文字の可能性もあるが読みは不明である。295は『缶』に近く則天文字の「正」の可能性もある。平川南氏(1989)によると下野国府(栃木)、作坊遺跡(千葉)などで類例が見られるということである。297も同様な可能性がある。

(コ) 複数字句の墨書

草茂：17点出土しているが墨痕が薄く確定し難いもの(350・442)を含めると19点の出土となる。出土遺構はSB91、区画溝III、SD108、SK534、SX30から出土しており、特にSX30に集中する。文字は50・416などのように文字が太めのものと、429・433・436などのようにやや細めのものがある。「茂」の書き方にも違いが見られるが、いずれも異体文字である。全体形状の分かるものは少なく文字の分類はできないが少なくとも2人以上の書き手が存在することは確かである。



第133図 墨書土器文字集成 6

その他の文字：SB21出土の7は5文字以上の文字が確認できるが判読できたのは第1文字と第4文字でそれぞれ『伊』、『真』である。確実なことは言えないが文字の長さなどから人名の可能性が高い。SB21は2期と古く本遺跡最古の墨書土器である。第5文字目は『長』の可能性が高い。SB27出土の10は須恵器杯蓋Bに2文字確認でき1文字は『廣』の可能性が高い。残りの文字については確認できない。SB40出土の12は『争主』と読んで差し支えないであろう。46はSB89から出土しているが『口食』と読める。103は『西戸舎』と読めるが小破片でありさらに文字が続く可能性がある。342はSD108からの出土で墨痕も鮮やかに『小長』と読むことができる。361・458は『南殿』と読むことができる。446は『仁通』と読むことができるが2文字目は不鮮明である

(2) 刻書土器

2点出土した。いずれも黒色土器A杯Aに「×」の線刻がされる。出土遺構はSB133、SK551で両者ともに近接している。491は内面と外面2か所に「×」の線刻がなされる。492は内面のみに同様な線刻が見られる。線刻は細く先端の尖ったものでなされている。

(3) 陶硯類

ア 円面硯

6点出土している。いずれも円面硯で圈台をもち、無堤式である。全て破片の状態出土しており全体形状の分かるものはない。住居址から出土したのは493(SB127)のみであり、そのほかは区画溝Ⅰ・Ⅲ及びSD117からの出土である。498を除き全て北部Ⅰ・Ⅱ地区に集中している。以下個別別に見ることとする。

493は在地窯系の胎土ではなく移入されたものと考えられるが産地は不明である。圈台部分を欠く。外堤径は9.7cmと小型である。外堤下縁に一条の突帯を巡らしている。圈台部分には8個の透かしがある。陸部はよく使用され摩耗しているが墨痕は認められない。494は区画溝Ⅰから出土しているが圈台部分を欠く。在地窯産である。外堤部をやや内側に付け外堤部と圈台部との間に突帯部分を巡らしているがかなり突出している。外堤部の外面には2条の沈線を巡らしその間を鋸歯状文で充填している。陸部はよく使用され摩耗しているが墨痕は認められない。495・496はいずれも区画溝から出土しており形状もよく似ている。495はSB91と接合している。圈台部分と陸部を一体に作り、圈台上端部に外堤部を付ける。器厚は非常に薄く、陸部でも変わらない。圈台部は4～5の透かしをもちその間を沈線で充填する。498も同様に圈台部と考えられる。497は溝址群Ⅲから出土しているが493と同様な形態をもつ外堤部の小破片である。

イ 転用硯

7点出土した。このうち明らかに使用が確認できるものは501・502のみである。その他は墨、朱の付着が確認されたものである。ここではこれらも含めて転用硯として扱うこととする。

501はSB92から出土しており須恵器杯BⅢを転用している。底部内面に摩耗面が確認され良く使用されている。わずかに朱痕が確認される。本来は完形あるいは口縁部などの部分的な欠損の状態転用されたものと考えられる。

朱の付着が確認されたものは500～505でいずれも須恵器杯A・Bの内面に認められる。501はSB92、502はSB123出土である。小破片であるが底部内面及び側面の一部は摩耗しておりさらに朱痕が確認できる。503はSB126出土である。朱墨は杯内面の3分の2までの範囲に分布しており、破断面にも確認され、そこからこぼれ出るように外面にも朱痕が確認でき、一部が破損した状態で転用されたことがわかる。504はSD117から出土しており、内面及び底部に朱墨痕が確認される。505(SX30)は確認されたなかで朱痕が一番鮮やかである。

墨痕が確認されたのはSB23出土の499である。灰釉陶器碗の底部外面の高台の内側部分全体に確認できた。墨痕と判定の難しいものがあり、実数はさらに増えるものと考えられる。

3 金属製品

(1) 鉄製品・鉄滓

ア 鉄製品 (図版189・190、PL87・88)

本遺跡から出土した鉄製品は184点である。その内訳は鋤・鋤先1点、鎌6点、刀子66点、斧1点、鑿2点、釘17点、鍬5点、馬具3点、金具6点、苧引鉄1点、紡錘車2点、不明品69点(棒状48点、板状11点、環状1点、塊状2点、鉄片6点、その他1点)である。このうち明らかに中近世の遺物と考えられるものは燧金1点、蹄鉄3点、刀の鏢1点の5点のみでその他は古代に属すと見て大過ないであろう。

鉄製品が比較的まとまって出土した遺構はSB143の16点、SB76の7点、SB97・136の5点などである。住居址以外ではSD108の14点、区画溝の12点SX30の8点などであり、土器の出土量の多い遺構と一致する。各遺構出土を示したのが付表8である。以下器種ごとに概観することにする。

鋤・鋤先：SB97出土の1点のみである。耳部で折損するが完全な形で出土している。広義のU字形鋤・鋤先で若干先端部が尖る。

鎌：6点出土したなかの3点を図示した。このほかに鎌と考えられる破片が3点(SB11・区画溝I・SD108)出土している。1(SK531)・3(SK609)が土坑、2がSB97からの出土である。1は完形品で基部に最大幅をもち刃部は直線的に延び、先端部分に向かって内湾する。着柄部は背縁と端部のぶつかるコーナー部分を折り返す。2は基部と先端部を欠き、3は先端部分を欠くが2と同形と考えられる。6点のほかに鎌とは認定できなかったがその可能性のあるものが2点あり、SB12出土のものは板状品として分類したが鎌となる可能性が高い。

刀子：本遺跡出土の鉄製品のなかで出土量の最も多い器種である。66点中21点を図示した(5~25)。刃部の長さにより2分することができる。刃長が8cm程度のもの(5~21・25)と10cm以上と考えられるもの(22~25)である。区画溝Iから出土している23は刀子とすれば大型品の部類に入るが、大部分は小型品によって占められる。関部の形状は両関のもの(10・11・13・15・18・19・20・22・24・25)、棟側の関がはっきりしているもの(5・6・7・12・14・16)、関部がはっきりしないもの(8・9・21)などがある。刃部の形状は使用によりかなり変化しており内湾するもの(19)もみられる。折損部位は刃部先端を欠くものが多く、次いで茎基部の順となる。

斧：26の1点のみの出土で有袋鉄斧の一種と考えられる。SB69からの出土であるが錆の付着が激しく原形を復元することが困難である。推定できる大きさは全長9cm、幅4.5cm程度になるであろう。SB69の時期が不安定のため時期の確定を見ないが4~5期にかけての所産であろう。

鑿：31・32を図示した、SB55出土の31は全長約20cmで、7cmの茎部をもち関部がやや張り出す。断面は角柱状を呈し、先端部は鳥嘴状になる。32は刃部先端を欠く。残存する長さは17.5cmほどで、断面角柱状を呈す。頭部は釘状にやや肥厚し、丸くなる。

釘：17点出土した。図示したのは27~30の4点であるいずれも鍛造の角釘である。ただし、断面が丸みを帯び、L字状に曲がっており、先端部を欠く。28・29は完形で、2.3~2.5寸前後の大きさである。30は先端部を欠くが6.5寸以上と大型である。27~29は板材(2~3cm)用と考えられ、30は5cm前後の厚さものを打ち付けたものと考えられる。

鍬：5点出土している。このうち図示したのは3点(33~35)である。33がSB29、35がSB85、34が遺構外出土である。33が細根式で、刃部断面は両丸造りである。34・35が平根式で、断面縞造りである。いずれも短い篋被をもつ。図示しなかったがSB93のものは篋被部にあたる。遺構外出土のものはいずれもII F区からの出土である。

馬具：馬具の可能性のあるものが3点出土している。SB93出土の39とSB129の47、SK626の37がそれである。いずれも轡の引手部分の金具の一部であろう。39は建具の締め金具の可能性もある。

金具類：6点出土している。37・40～42・44を図示した。40は長さ9.1cmで、柄先から4.5cmのところに関部がある。先端部は鉤状に折れ曲がる。柄先部は丸く仕上げ、環状になる。海老錠の一部の可能性もある。41は3×4.5cmの小札状を呈し、3カ所に小孔が開く。いずれもSB143からの出土である。42は棒状の先端部に環状の金具が付くが、錆化が激しく詳細な観察はできない。用途については全く不明でSB11からの出土である。44は溝址群IIIから出土している。リング状を呈すが一部に接合の痕跡が認められたので金具とした。用途等まったく不明である。

苧引鉄：SB64から1点出土している。刃部の幅が8.3cm、高さ3.7cmで断面形は楔状を呈す。完形である。

紡錘車：紡錘車と認定できたのは2点のみであるが不明品のうちの棒状品いくつかは紡錘車になる可能性があり、実数ではさらに増えるものと考えられる。図示したのは43(SD108)の1点のみで、軸部の破損品である。紡錘部の破片は認められなかった。

用途不明品：破損などによって器種の特定ができないものが多数存在する。その形態・形状により棒状品、板状品環状品、鉄片に分類した。以下分類ごとにみることにする。

棒状品：断面の形状により3種に分類できる。方形(1)を呈すものは17点、円形(2)のもの9点、長方形(3)のもの12点を数える。1は小型のもので釘の可能性もある。図示したものはない。2は紡錘車の軸などの可能性のあるものである。3は刀子の基部の可能性のあるものである。これも図示したものはない。

板状品：製法により3種に分けられる。鍛造、鑄造、不明あるいは素材である。鍛造品が7点、鑄造品が1点、素材が1点、不明2点出土している。図示したのはSX30から出土した38の1点のみである。

環状品：SX30から1点出土している。環状を呈し、その一端が切れる。4.4×2.4cmで、径7mmの円形を呈す。

鉄片：6点出土したが図示はしてない。

その他・不明品：SB29から出土した46は形態的には40に近似するが用途等は不明である。6.3cm程の柄部をもち、径4mm程の身部をもつ。先端部分を欠く。

イ 鉄 滓

総計26.107kgの出土がある。遺構別内訳は堅穴住居址11.197kg、溝址2.885kg、土坑4.875kg、不明遺構5.280kg、遺構外1.870kgの出土である。半数以上が堅穴住居址以外から出土しており、堅穴住居址出土のものも覆土中の出土が多くなり遺構に帰属するものは少ない。SB97出土のは床面上に羽口を伴う鍛冶施設からで例外的といえるであろう。

出土した鉄滓の形状は長径10cm以上で重量が300gを越える大型滓、長径の7.8cmで100～300gの中型、100g以下の小型滓に分けられる。小型滓はさらに10g前後の鉄滓粒を分離することができる。大型滓はSB44・72・76・99・130、SK684・SX30などから出土しており点数は多くない。中型滓も同様に量的にも少ない。大・中型滓に対して主体的となるのが小型滓であり、そのなかでも10g以下のものがほとんどを占める。特にSK864では60%、SB152では40%が10g以下の小型滓で占められる。これに対してSX30では15%に留まり大型滓が主体を占め遺構の性格を反映したものであろう。

次に形状について述べることにする。個々について詳しく述べることはできず、傾向性についてのみふれる。大・中型滓はすべて碗形滓に属す。不整形な半球状を呈し、表面は比較的緻密で、スサ状のものを取り込んでいるものがある。小型滓は不整形で、表面が海綿状に発泡しているものや、気孔を多く持つものがみられる。小石などを取り込んでいるものもみられ、鉄分をほとんど含まないものもある。次に磁性であるが、非常に低いものがほとんどを占めている。SB97・133出土のものに磁性の強いものがみられたが

例外的である。

(2) 銅製品・銭貨

ア 銅製品 (図版191、PL89)

本遺跡の古代に属す銅製品と銭貨は25点出土している。内訳は銅製銚2点、金具類2点、容器類10点、銭貨11点である。これらは銅製銚2点を除くと遺構外出土のものも含めて北部I地区に集中している。以下器種ごとに見ることとする。

銚：2点出土しており、いずれも巡方である。48はSD109、49はSB25からの出土である。48は完形であり非常に遺存状態が良く、方形で長方形の透かしが入り裏金具には鍍金の痕跡が認められ、鋳留めもしっかりしている。裏金具の鍍金に対して表面は漆が斑点状に残存している。49は長方形でやや丸みを帯びやはり透かしが入る。鋳留め痕が観察される。

金具：50・51、いずれも遺構外出土である。50は不整形に湾曲しており、断面は半円型を呈す。部分的に鍍金が観察される。一応古代の遺物として扱ったが煙管の可能性もある。51はリング状を呈し刀子類の口金具と考えられる。

容器類：容器類と総称したが器厚1mm程度のもの(52~54)と、5mm(55)程度のものである。52・53は区画溝Iの出土であるがいずれも被熱のため変形しており原形は不明である。54はやや厚く花卉状にもみえる。55は容器の口縁部であるが口径は23cm程度で非常に大きなものである。口縁部外面には2条以上の沈線が巡る。内面は鋳放しで粗い。このほかに6点が出土している(PL89)が小破片であり形状は知りえない。PL89-82は鋳放しの製品、あるいは鋳つぶした状態のものと考えられる。77・82は55と同様なものと考えられるが不明である。被熱により変形している。

イ 銭貨

11点出土しているが9点はSK490からの出土である。SK490出土のものは非常に遺存状態が悪く取り上げ段階で原形を失ったものがある。60はSK554、PL89-83はSD108から出土している。内訳は万年通寶4点、神功開寶6点、不明2点である

万年通寶：4点出土している。60(SK554)を除きいずれもSK490から出土している。全体形状の窺えるのは56・57・60の3点である。56は「年」のやや下側の一部を欠くが遺存状況は出土した銭貨の中で一番良い。57ともにほぼ同様な造りであるが万年通寶A(奈良国立文化財研究所 1974)に分類される(註1)。

神功開寶：6点出土している。PL89-84(SD108)を除きSK490からの出土である。全体形状の窺えるのは3

点である。PL89-84は埋没河川からの出土であり、全面に砂が付着しておりX線撮影の結果「神功開寶」であることが判明した。銭文は鮮明に浮き出ており、「功」の傍らが「刀」となり第2画が長くなるいわゆる「長刀」である。開は「开」が「井」

番号	種類	外縁外径(cm)	外縁内径(cm)	内郭外径(cm)	内郭内径(cm)	外縁厚(cm)	出土遺構	図版
1	万年貨寶	2.68	2.10	0.84	0.64	0.175	SK490	56
2	万年貨寶	2.63	2.20	0.81	0.645	0.18	〃	57
3	神功開寶	2.575	2.17	0.89	0.69	0.195	〃	58
4	神功開寶	2.45	2.20	0.86	0.65	0.20	〃	59
5	神功開寶	-	-	-	-	-	〃	83
6	神功開寶	-	-	-	-	-	〃	
7	万年開寶	(2.375)	-	-	-	0.175	SK554	60
8	神功開寶	2.52	2.10	0.845	0.62		SD108 IIBA06	84

第24表 銭貨一覧表

註1 奈良国立文化財研究所1974 『平城宮発掘調査報告書VI』によった。
 万年通寶A 普通の銭型である。萬はすべて「内」につくり「内」につくらない。また、通の変形、とくに甬の各画の配置に変化がある。
 註2 神功開寶E 銭文は「功」につくことは神功開寶A・C・Dと同じ。開は「開」につくり、寶の「貝」は神功開寶Dよりもさらに小さい。また、功は各辺が丸味をおび第2画が内郭側辺と平行しないことは神功開寶Cに類似し、とくに刀の第2画が長く延びるところから「長刀」とよばれる。出土した神功開寶のうち過半を占め、文字の配置など細部にわたって酷似するものが多く、なかには同範とかんがえられるものがある。

となる。神功開寶Eに属すと考えられる(註2)。58・59も同様な銭文である。

4 石製品(図版191~194、PL88~91、第25表)

19点出土している。内訳は石鏝1点、紡錘車1点、軽石製品2点、砥石13点、丸石1点、石錘1(17点)である。以下器種ごとに述べることにする。

鏝(1)：1は丸軋でトレンチ調査時に出土した(II DT21)。石質は柱状石灰岩、2.5×2.2×0.5cmで蒲鉾型というよりも六角形に近い。表裏面には漆と考えられる黒斑が観察される。

紡錘車(2)：SB34出土の1点のみである。石質は暗茶褐色を呈す変成岩と考えられるが不明である。断面台形を呈し直径4.2cmほどである。

軽石製品(4・5)：2点出土している。4はSB6、5はSB25からの出土である。石質は多孔質に富む軽石である。いずれも使用により摩耗している。

砥石(3・6~16)：SB90出土の1点を除いて図示した。12を除き竪穴住居址からの出土である。時期別に見ると5期5点、6期3点、7期5点が出土している。

石質により2つのグループ、凝灰岩と砂岩に分けることができる。前者は6~9・11で全体的に小型のものが多く柱状のものが多。後者は10・12~16で、扁平中型(12・13・15・16)のものから大型角柱状(14)のものまである。10は砂岩系と考えられるが木目は細かく形状ともに凝灰岩製のものに近い。完

形品は少なく、いずれも破損後も使用されている。SB96出土の3は砥石としたが粘板岩であり特異な形状である。中央部に縦方向に擦り切り砥を思わせる溝が走る。下端部も擦り切りの結果直線的に割れている。表面はよく研磨されており自然面はほとんど残らない。石鏝等の母材の可能性もある。

図版番号	出土遺構	時期	種類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	使用面数	形状
3	SB96	7	II	粘板岩	12.5	7.4	1.0	130	—	不整形
6	SB2	7	II	凝灰岩	4.6	3.9	1.5	40	4	方形(板)
7	SB76	7	II	凝灰岩	5.0	4.5	2.2	80	4	方形(板)
8	SB72	5	II	凝灰岩	12.2	6.3	4.3	255	4	不整形
9	SB68	6	II	凝灰岩	10.5	4.4	4.4	255	4	柱状
10	SB107	6	II	砂岩か	9.9	4.6	1.9	140	4	方形(板)
11	SB19	5	II	凝灰岩	9.7	5.6	4.0	135	4	柱状
12	SD106	7	I	砂岩	9.8	8.8	3.1	425	4	方形(板)
13	SB118	5	II	砂岩	8.2	7.2	2.8	265	4	方形(板)
14	SB52	7	IIか	砂岩	19.6	11.6	9.7	2680	6	柱状
15	SB54	5	I	砂岩	13.6	8.5	4.6	840	2	方形(板)
16	SB64	6	II	砂岩	13.5	9.9	4.6	1280	4	方形(板)
	SB90	6	I	砂岩	12.1	9.1	3.7	690	4	方形(板)

第25表 砥石一覧表

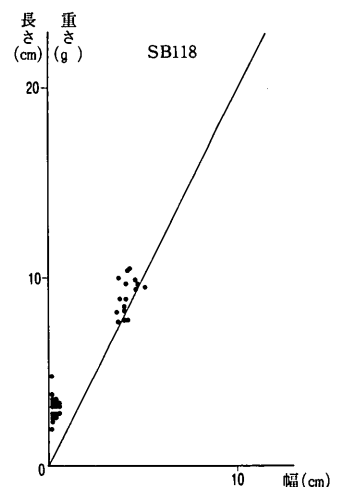
丸石：図示できなかったがSB150から出土している。5.5×5.0×4.7cmやや卵形にちかい。

石錘(第134図)：個別には図示しなかったがSB118から17点出土した。住居址の床面から出土しており、集積された状態で出土している。比較的小型の柱状の河川礫によって構成される。石質は硬砂岩が多いがホルンヘルスが2点含まれる。

5 土製品(図版194、PL91)

土製品は羽口、紡錘車の2種類が出土した。

羽口(1~13)：43点出土したが、ほとんどが細片であり全体の形状が明らかになるものは1・2のみである。出土点数の多い遺構はSB152で12点、SK684で9点であり、また遺構外からの出土も多くなっている。いずれも北



第134図 石錘長幅比及び重量分布図

番号	遺構名	図番号	備考	番号	遺構名	図番号	備考
1	SB 92		ガラス質化、破片、先端部分	12	区画溝III	9	先端部破片
2	SB 97	194-1	完形	13	SD108		
3	SB115	3	先端部破片 2	14	SD137	8	
4	SB115	4		15	SX 30		ガラス質化、発泡、先端部破片 4
5	SB121	5	先端部破片、発泡	16	遺構外 (IIDQ01)	10	
6	SB123		先端部破片、非常に短い	17	遺構外 (IIDQ17・18)	11	
7	SB135	6	先端部破片、ガラス質化	18	遺構外 (IIB~F)		
8	SB136		先端部破片、ガラス質化	19	遺構外 (IIFQ23-26)	2	1/2残存
9	SB152	7	破片12	20	遺構外 (IIDQ15)		
10	SK554			21	遺構外 (IIDQ16)		
11	SK684		先端部破片 9	22	遺構外 (IIDQ12)	12	

第26 羽口一覧表

部I地区に集中している。図示したのはSB97(1)、SB115(3・4)、SB121(5)、SB135(6)、SB152(8)、区画溝III(10)であるが、このほかにSB92・SB123・SB136・SX30・SK554・684などからも出土している。1は完形で先端部分は硝子質化している。9も同様である。7は先端部の破片であるが発泡している。紡錘車(14)：1点のみで、SB126の床面から出土した。直径8cm、厚さ2.5cmの円板状である。

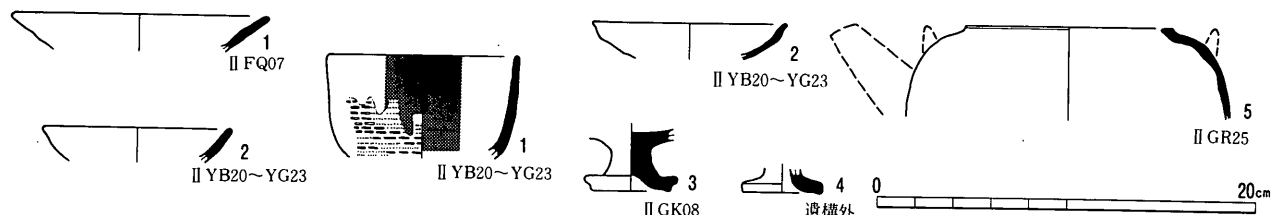
第3節 中世以降の遺物

1 土器・陶磁器

概観 (中世-第135図1・2、近世-第135図1~5、第27表)

中世に属する遺物として捉えられるものは9点ある。製作年代の順に追っていくと、鎬蓮弁文をもつF類かH類に分けられる青磁の碗が1片、捏鉢VI類1片、内耳鍋4片で、NR1から3片2個体、グリッドからI類に属するものが1片出土している。また、灰釉の掛かった古瀬戸系陶器の皿(後期様式後半)1片(1)と、大窯製品の丸皿2片(2)が出土している。これらは少ないながら、出土地点は北部I区の北西、南部I区のほぼ中央、NR1の3カ所に限られている。

近世に属する遺物は、総数142片ある。確実に17世紀に属するものとして、天目茶碗や長石釉の掛かった丸皿などを中心にして9片、18世紀代のものとして肥前系磁器の碗や、瀬戸・美濃系陶器の碗があり、20片がみられる。18世紀後半から19世紀の所産のものとしては、瀬戸・美濃系陶器の碗を中心にして32片、幕末



第135図 中・近世の土器・陶磁器

頃のものとしては産地不明のものが増加し、42片ある。時期不明のものは、ほとんどが18世紀後半から幕末頃のものと考えられる。近世の遺構であるSN1から瀬戸・美濃系の拳骨茶碗と丸碗が出土しており、いずれも18世紀後半以降の所産である。このほかは主にIA層から出土しており、調査区の全域に広がっている。

このほか明らかに明治時代前半に属すものとして、磁器が25片出土している。

以下、特に近世の遺物の主なものを記述しておくことにする。

(1) 土器

手付き鍋の把手部分と思われるものが1点出土している。硬質感のある橙色を呈した土器である。

(2) 陶器

碗：瀬戸・美濃系陶器—17世紀代のものとしては、天目茶碗と鉄釉系の丸碗がある。底部下半を露胎とし、高台脇を削ることなくロクロナデを残している。

18世紀代としては、鎧茶碗と拳骨茶碗があり、例外なく鉄釉を掛けている。前者は、薄く釉を掛けたあと、体部下半に鉄釉を漬掛けしている。1がそれで、小札文様の凹状部分に長短を付けて文様に変化を与えている。18世紀でも新しいものであろうか。ほかに錆釉の施された丸碗がある。

18世紀後半から19世紀代のものとしては、御深井釉と呼ばれている淡黄緑色を呈する丸碗が多い。小片ばかりで図示できるものはない。

碗：肥前系—碗の底部が1片確認されている。灰釉系の透明釉で、貫入が多く、全体に黄味が強い。胎土は緻密で軟質感がある。17世紀後半頃のものであろう。

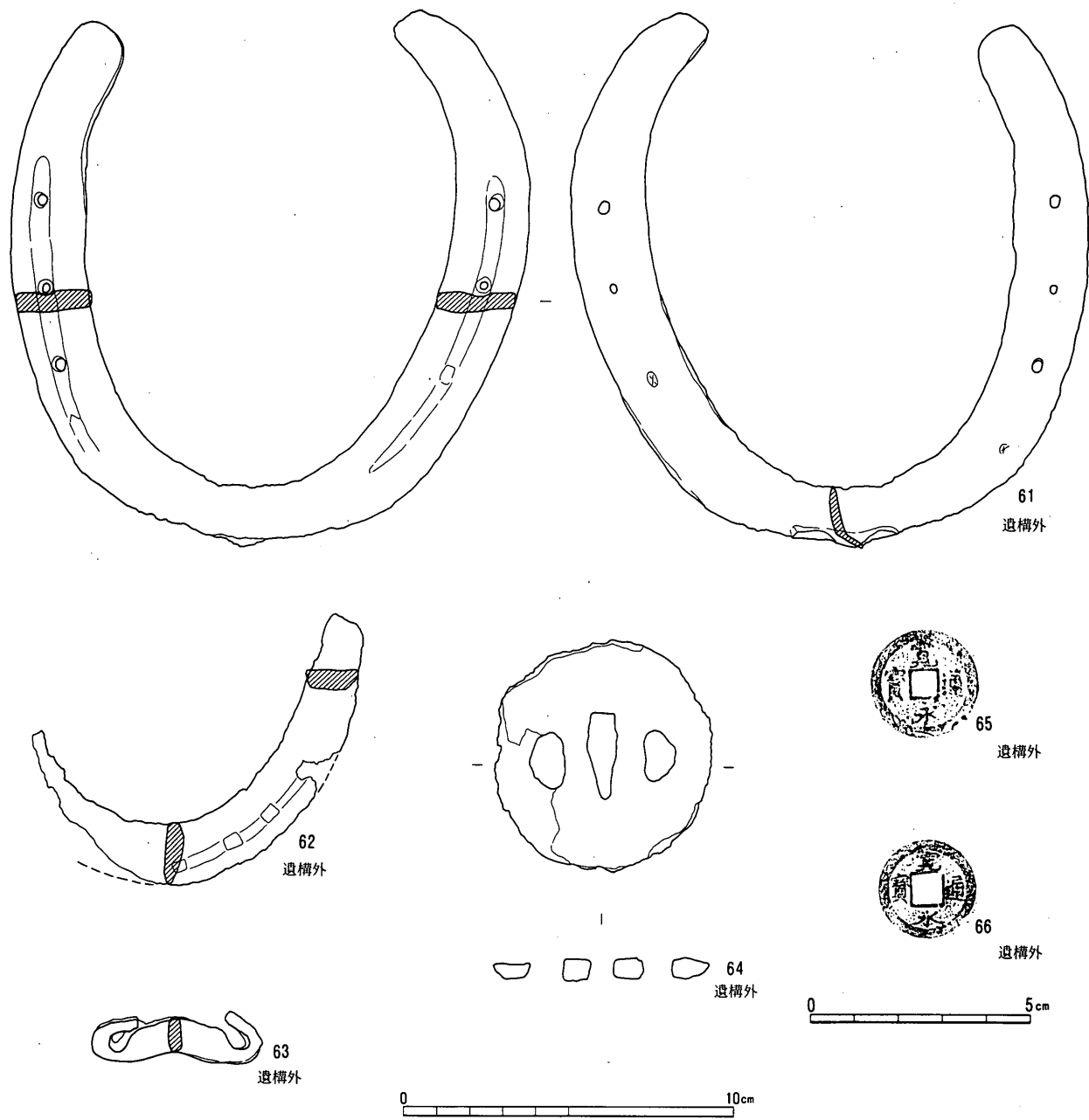
皿：瀬戸・美濃系—丸皿7点のうち3点は志野織部で、白色を呈する長石釉を厚く掛けている。口唇部と見込みに鉄絵を施しているのが知れるものと、無文としているものがある。ほかに18世紀後半以降に属す、灰釉の掛かった皿がある。底部片で、高台径12.6cm、底外面は回転ヘラ削りによって調整されている。燈明皿と燈明受皿が各1片づつ確認されている。両片とも錆釉で、燈明皿を2に示した。残存部では、全体に釉が掛けられ、外面は回転ヘラ削りされているのがわかる。

皿：その他の産地—産地不明の燈明皿・燈明受皿がある。灰釉が1点あるほかは、錆釉が施されている。瀬戸・美濃系として抽出したものより釉を薄く掛け、明るい色調が表われている。これらは瀬戸・美濃系製品の可能性もある。時期的には19世紀中頃のものであろう。

鉢：瀬戸・美濃系—播鉢の体部片が多い。やや光沢のある茶色が発色した錆釉を刷毛塗りしている。胎

陶器 132	瀬戸・美濃系陶器 110		肥前系陶器 1		磁器 9	瀬戸・美濃系磁器 3	
	碗	天目茶碗 3 鎧茶碗 2 拳骨茶碗 9 丸碗 47	碗 1	碗 1		碗 1	碗 1 小碗 1 杯 1 御神酒徳利 1
皿	丸皿 7 燈明皿 1 燈明受皿 1	常滑系 1	鉢	播鉢 1	肥前系磁器 6		
鉢	播鉢 14 片口鉢 3 捏鉢 8 土鍋 2 油壺 1 壺 2 甕 4 甕瓶 2 その他 3	産地不明 20	碗 1 皿 3	丸碗 1 燈明皿 3 燈明受皿 1	碗 4 丸碗 2 小碗 2		
鍋	土鍋 2 油壺 1 壺 2 甕 4 甕瓶 2 その他 3		鉢 1 鍋 7 壺 2 壺 2 土瓶 4 その他 1		土器 1	産地不明 1 鍋 1 土鍋 1	

第27表 近世土器・陶磁器 器種構成表



第136図 中・近世の鉄製品・銭貨

土は軟質感のある緻密なものである。そのほか片口鉢・捏鉢かと思われる小片があり、多くは灰釉を厚めに掛けたものである。

鉢：その他の産地—産地不明の搦鉢と、胎土から常滑系かと思われる搦鉢がある。後者は、赤っぽい胎土で、器壁が厚く、搦目は粗い。

瓶：産地不明—鉄釉と錆釉の土瓶が確認されている。5は錆釉を施し、体部をロクロナデで成形し、蓋が接する口唇部は露胎としている。土瓶はいずれも19世紀代、特に中葉頃と考えられる。

その他：瀬戸・美濃系—仏飯は3・4に示したもので、3は釉調が灰釉系の透明釉で、貫入が多い。4は、残存部では露胎となっており、胎土は両者ともに、軟質感のあるやや黄味を帯びた精胎である。

(3) 磁器

碗：瀬戸・美濃系—小片のため詳細を知ることができないが、小碗は筆描きによって文様が描かれている。また、杯は無文の薄手のものである。

碗：肥前系一丸碗・小碗ともに18世紀代と考えられる。底内面にコンニャク印判による五弁花文をもつ丸碗と小碗があり、丸碗の見込みには2本の圈線を引いている。小碗は、体部外面に雪輪文を描くものがある。

瓶：瀬戸・美濃系一御神酒徳利が出土している。ロクロ成形によるもので、高台は付高台、胎土は陶器質で軟質感がある。

2 金属製品

(1) 鉄製品

中世以降の鉄製品の数は遺構がないこともあって非常に少ない。古代の項で述べたように明らかに時代が下がるものだけをここでは扱うことにする。蹄鉄・鏝・燧鉄などが出土しており釘などの一部も近世と考えられるものを含む。以下器種ごとに述べることにする。

蹄鉄：3点出土したうちの2点を図示した。61は完形品で長さ15.5cm、幅15.6cmと大型で時期の下るものと考えられる。62は錆化が激しく一部しか残存しないがやや小型である。

燧鉄：南部地区の畠址から1点出土しているほぼ完形に近い。

鏝：1点のみ出土した。これも時期が下るものであろう。

(2) 銭貨

3点出土している。いずれも遺構外遺物であり、65は南部I地区、66は北部III地区からの出土である。いずれも寛永通寶である。

第4章 遺構・遺物の分析

第1節 遺構の分析

1 竪穴住居址

(1) 概観

検出された竪穴住居址は総数142軒で、南部地区60軒、北部地区82軒で北部地区にやや片寄りがみられる。これは南部地区が砂礫層に覆われており居住域とするにはやや不適當な部分があることや、北部地区に集落の中核的な部分が位置することなどによる。時期別に見ると2期1軒、3期3軒、4期8軒、5期46軒、6期35軒、7期49軒である。5期から爆発的な増加を示すが、6期にわずかに減少し、7期に最大数となる(第28表)。5期以降の増減は数字にみるような大きな変化は認められず5期以降同程度の規模を維持していたものと考えられる。

地区		時期						
		2期	3期	4期	5期	6期	7期	計
南部地区	I				5	4		9
	II				9	9	6	24
	III	1		3	7	5	11	27
北部地区	I				2	4	18	24
	II		1	4	13	3	7	28
	III		2	1	10	10	7	30
計		1	3	8	46	35	49	142

第28表 地区別、時期別竪穴住居址検出数

(2) 規模

検出された竪穴住居址で最大の規模をもつのはSB97で一辺が10.05×9.55m、床面積95.97m²あり、次いでSB78・126などが続く。一方最小の規模をもつものはSB45で2.45×2.00m、4.90m²である。平均17.13m²である。超大型の竪穴住居址(SB76・97・126)を除いた平均面積は15.36m²である。時期別に見ると4期24.75m²、5期18.88(15.44)m²、6期16.04m²、7期12.47m²で漸次減少の傾向にある。

次に第137図をもとに住居址規模の変遷についてみることにする。

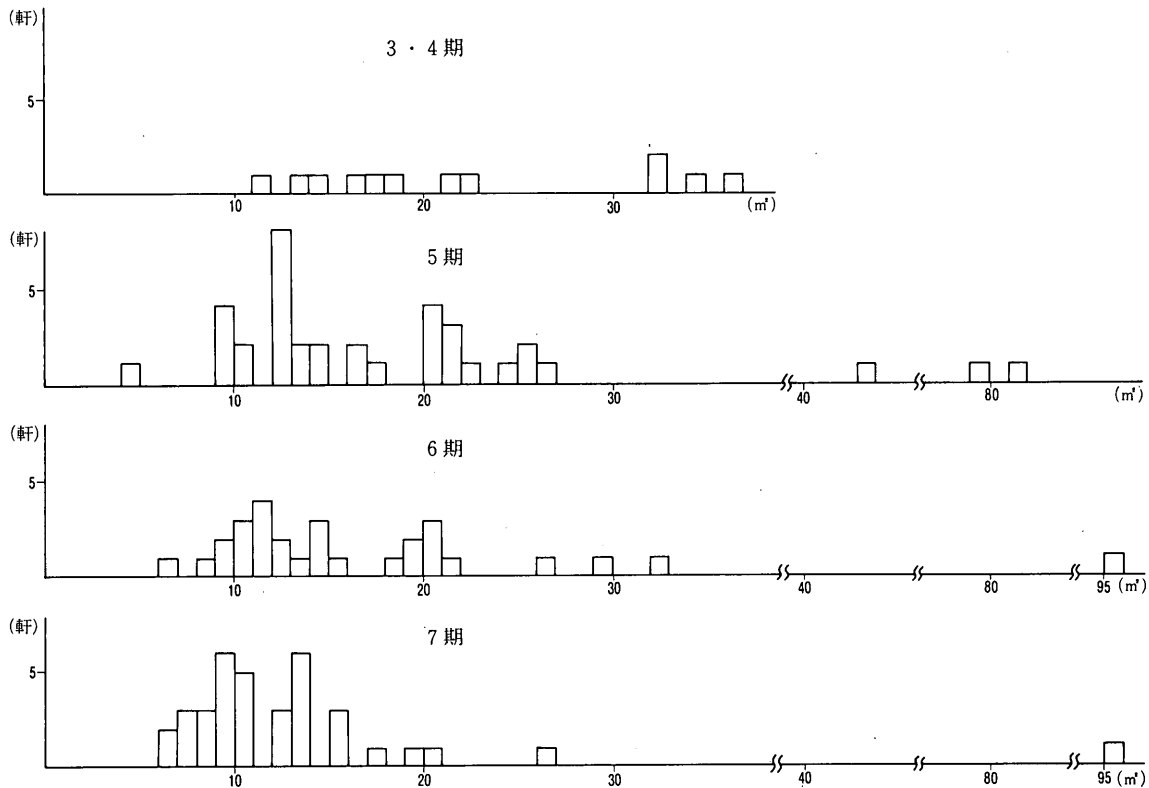
2期の住居址については1軒のみであり、しかもプラン・規模ともに不明である。

3期の住居址も2軒と軒数が少なく傾向はつかめない。住居址の形態に長方形、方形の二者があり、比較的大きな規模である(22・32m²)。

4期は30m²を境に大きく2群に分かれる。さらに30m²以下は20m²を境に2群に分けることができる。30m²以上の大型の規模をもつ住居址はSB24・84・120でそれぞれ南部III地区、北部I地区、北部III地区の各地区に分布する。この段階では住居址の規模の格差は大きくはない。

5期は12m²前後、20m²前後、40m²以上の3群に大きく分かれる。SB126・78など隔絶した規模を有する住居址が存在する。4期に認められた3群のうち30m²以上の群は隔絶した規模をもつ超大型住居址の群へ、30m²以下の2群はわずかではあるが面積を縮小するという相反する動きをしながら3群の構成はそのまま継続している。最小のSB45については格差としてとらえるよりも別機能と理解したほうが良いであろう。

6期は5期の傾向が引き続き認められるが超大型の住居址は存在しない。ただし7期としたSB97については6期からの存続が予想される。



第137図 時期別の竪穴住居址規模分布図

7期は住居址の縮小傾向は続き、10㎡以下が半数以上を占める。特にこれらの分布はSB97の周辺に集中する。6期段階で20㎡以下は2群に分かれたが、この段階では3群に分かれ、さらに分化が進んだことがわかる。一方ではSB97のような隔離した規模を有するものがある。5期段階では複数存在していた超大型住居址が、この段階でSB97に集約していることも注目される。6期に減少し7期に再び増加する住居址数の変動は住居址規模の縮小と関係があるのであろう。

(3) カマド方向と軸規制

竪穴住居址の主軸方向はカマドを通る中軸線を主軸とし、座標北からの角度で示した。検出された竪穴住居址のうちカマド位置が明らかなものは95軒で南にカマドをもつ住居址は存在しない。北側にカマドをもつ住居址は非常に少なく10軒(カマドを作り替えたSB120を入れると11軒)である。東側にカマドをもつ住居址は全体の73%を占め圧倒的な数となる。これに対し西側にカマドをもつものは23%程度で北カマドは例外的に存在し、南側にカマドをもつ住居址は存在しない。

次に時期別の軸規制の状況を見ることにする(第138図)。

2期については不明である。3期はSB34・85の2軒のみであり、特別な規制を読み取ることはできない。いずれも東カマドであるが、真東を向くSB85と10°以上ずれるSB34の二者がある。

4期は東カマドが多く例外はSB130の1軒のみである。ほとんどの住居址はN90°Eに集中しておりSB120がややずれている。なおSB120は東カマドから北カマドへと建替えを行なっている。唯一西を向くSB130は住居址の形状も他とは異なっており、軸の振れも大きい。

5期は4期の状況とはやや異なり、ほとんど振れないグループとやや振れるグループ、振れの大きなグループの3群が存在するようになる。集団ごとに軸規制が違っていたことを示している。また北部II・III地区のように同一地区内においても異なる規制をもつものがある。特に振れが大きく特異な軸規制をもつのは南部II地区で30°近くの振れをもち注目される。この段階ではカマド方向も西カマドが増えており、2

棟単位の対応の仕方に変化があることがわかる。4期までが基本的に同一方向をもつ組み合わせ(SB84とSB124)であったものが、この段階ではカマドを向き合わせたり(SB140とSB83など)、あるいはカマドの対辺を向かい合わせる組み合わせ(SB132とSB151など)が増えたためと考えられる。北カマドの出現もまた2棟あるいは3棟単位の対応によって出現したものと考えられる。

6期になると5期まで主流を占めていた0°前後の振れ角のグループが減少し、振れ角5°~10°近くが多くなる。カマド方位については5期と変化はみられない。

7期は6期にみられた傾向が引き続き認められる。主軸方向は最大の振れ角をもつようになる。

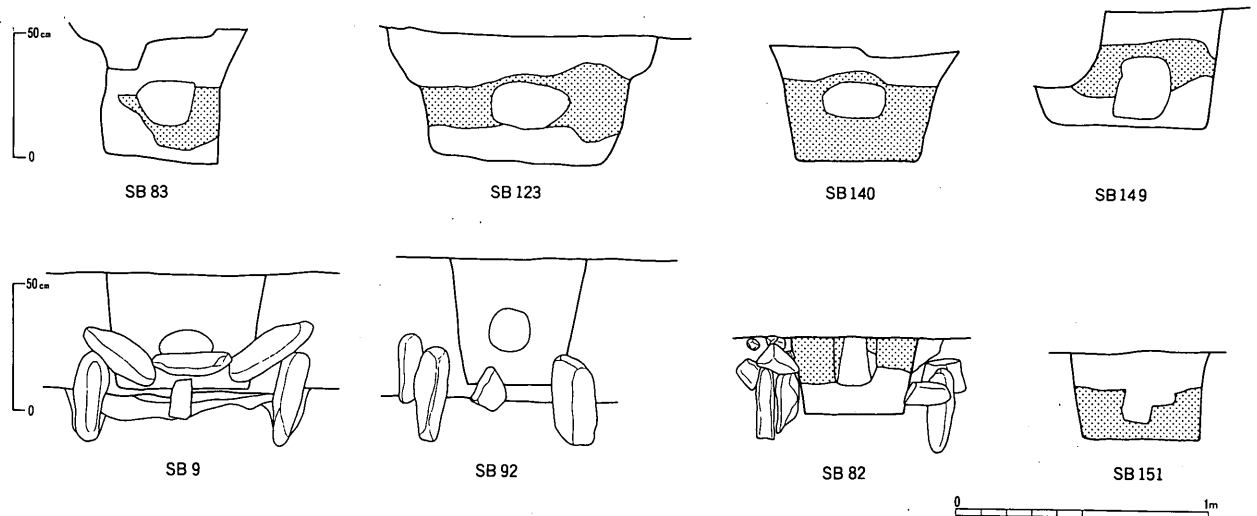
以上時期別に軸規制について概観したが、意図的に大きな振れ角をも

つもの以外、基本的には軸規制はかなり緩やかであったことがわかる。ただ時期毎に意図された振れ角には若干の変化が見られ、5期を過渡期として徐々に振れ角を大きくしている。

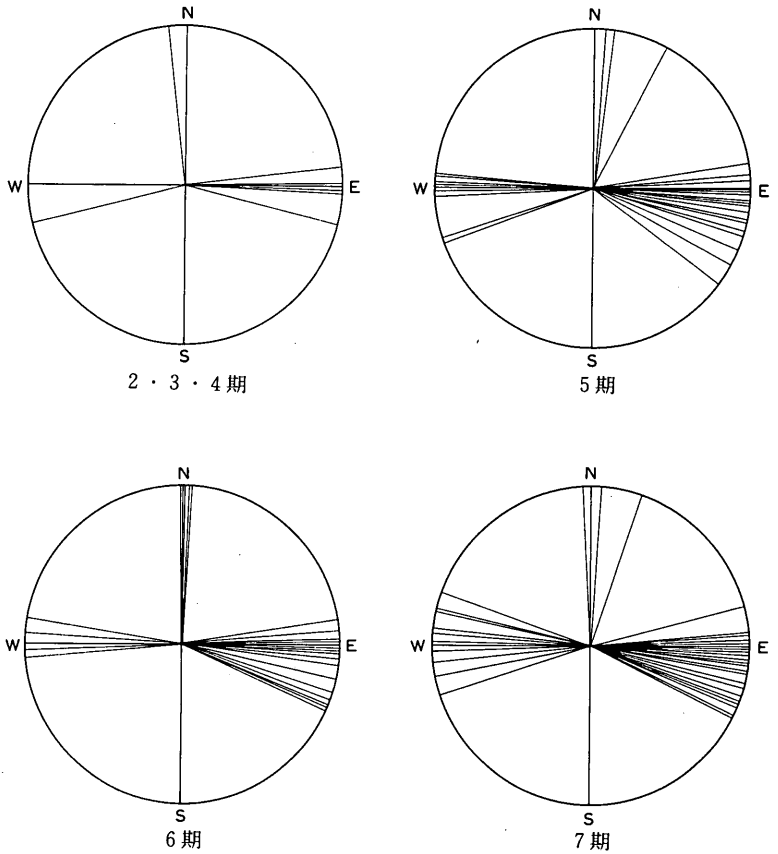
(4) カマド

カマドは構築材によって大きく石組カマドと粘土カマドに分かれる。粘土カマドは壁への掘り込みの有無により函形カマドと粘土カマドに分かれ、基本的にはこの三者のカマドが存在する。

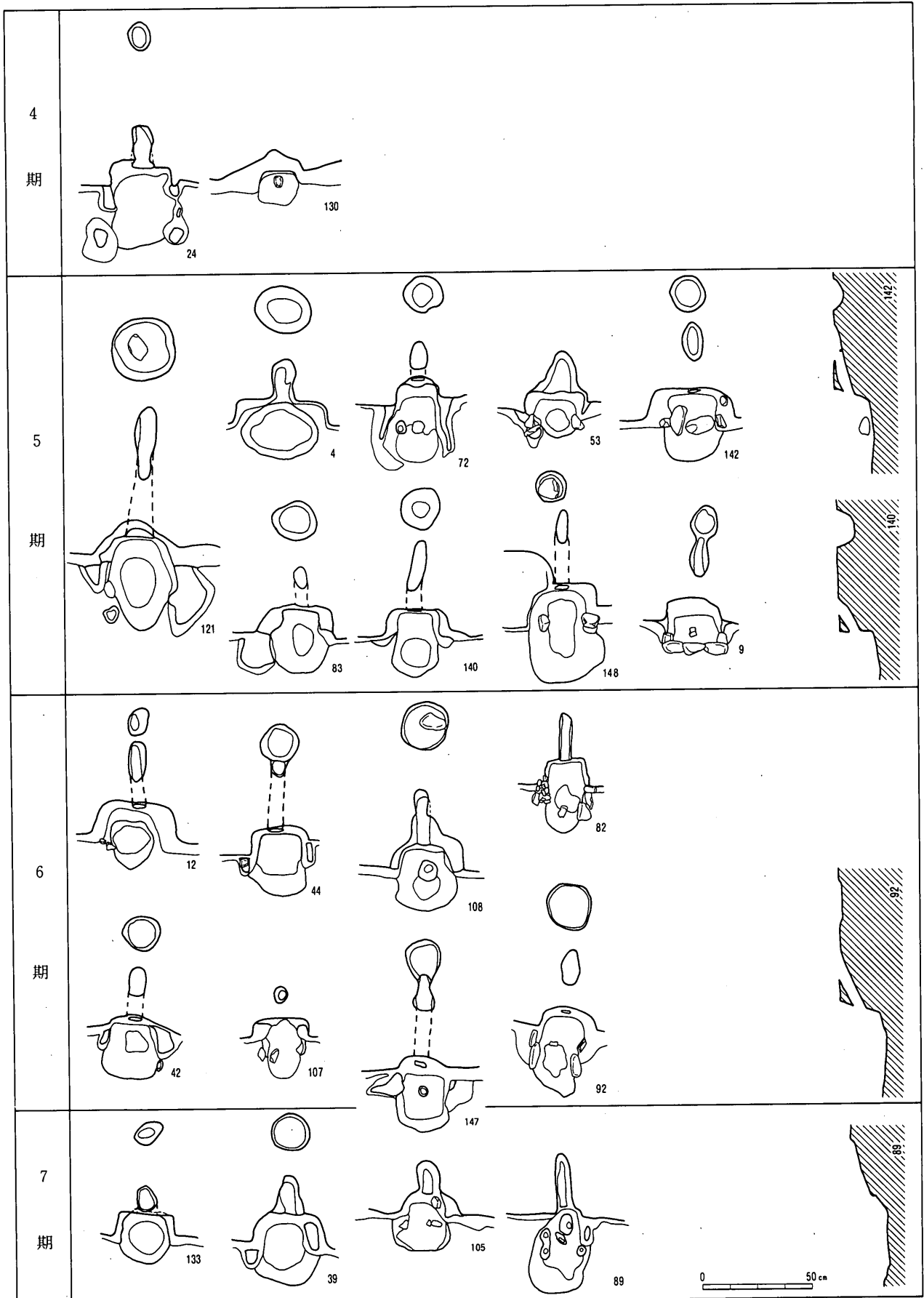
ア 函形カマド(第140図)



第139図 函形カマド焼土化部分と煙道位置



第138図 竪穴住居址主軸方向分布図



第140図 函形カマド集成図

住居址の壁外に方形の掘り込みをもち煙道は比較的緩やかに立ち上がりそのさきに煙出しのピットが存在する。基本的には袖部分を側壁で代用する粘土カマドといえる。時期的には4～7期にみられ、5期に多い。

基本的な構築方法は、先ず住居構築時にカマド位置が決められ、荒掘り段階にカマド掘り方が掘られる。掘り方の上端部はさらに広がるものがあり、これは天井部の粘土を受けるためのものと考えられる。煙道もこの時点において掘り込まれるものと思われる。天井部及び袖部分が良好に検出された例はないが、燃焼部奥壁部分に残る焼土化部分、あるいは石組で推定することができる(第139図)。煙道の位置は火床からほぼ15～20cmに掘り込まれており、住居址の深さとはほとんど関係しない。例外としてSB72があり40cmと高いものも認められるが、一番深いSB121でも規模の大きなカマドであるにもかかわらず煙道位置は15cmである。天井部は火床から30cmと推定されこれも同様である。煙道は地山をくり抜く方法が使われており、煙道より深く掘り込まれている。煙出しのピットも雨水を防ぐためばかりではなく構築時にも排土を出すために利用されたことが予想される。煙出しのピットには、人頭大の河川礫が入るものもあり、蓋石として使用されたものが落ち込んだものと考えられる。

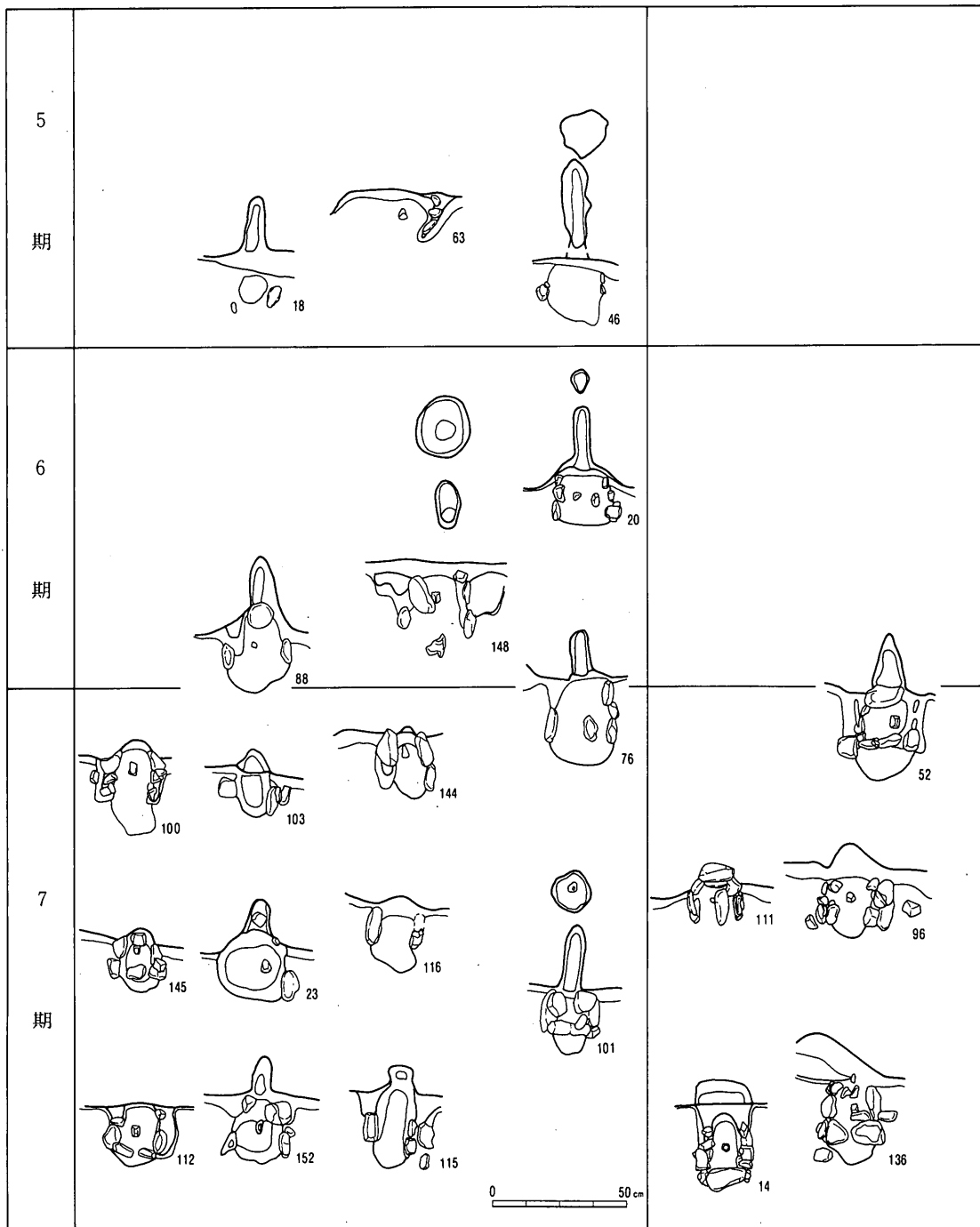
石を構築材として使用しているものは非常に少ない。抜き取り痕跡をもつものも非常に少なく粘土のみで構築することを基本としている。このタイプのカマドは例外なく潰れた状態で検出されており、強度にやや難点があったと思われる。このため焚口部分のみに石組みによる補強を行なっているもの(SB53・149)や焚口部分の両袖に袖石を埋め込みそのうえに天井石を渡しているもの(SB142)も見られる。

次に変遷についてみることにする。先にも触れたように完全な状態で検出されたものはなく、支脚・火床などからその状態を復元しなければならないが、焚口の位置により2タイプに分けることが可能である。焚口が壁のライン上あるいはわずかに住居址の内に位置するものと、住居址内に袖を伸ばし、かなり内側に位置するものの二者がある。前者の代表的な例としてはSB9・142、後者の例としてはSB92を上げることができる。支脚位置はほとんど変化しておらずその変化は微妙であるが、袖部分は住居址内に確実に伸びている。これは燃焼部をより長く取り込むことにより、強力な火力を得るための変化であろう。これはそのまま時期差を表わしており、前者から後者へと変化が考えられる。また、これに連動するように壁への掘り込みは減少傾向にあり、6期のSB42・147などはほとんど掘り込みを持たなくなる。住居址規模の縮小に伴って、カマドも規模の縮小や掘り方の形状も崩れる傾向にある(第140図)。

イ 石組カマドについて(第141図)

本遺跡から検出された石を使用したカマドは基本的に袖部分に1対の石を埋め込むものがほとんどであり完全な石組のものは少ない。ここでは完全な石組のものを石組カマド、その他を石使用のカマドとし区別することにする。時期的に見ると石使用のカマドは4期から存在するが7期のものがほとんどであり、完全な石組カマドは7期に限定される。使用石材は花崗岩、硬砂岩を使用している。

石使用のカマドは3期のSB85が古く、左袖に花崗岩1個を使用している。4期には認められず、5期にはSB46・63などがある。6期にはSB20が比較的整った石組をもつ。この段階では比較的小型の石を縦に並べるように使用する特徴がみられる。SB148のように石を使用し、壁への掘り込みを持たないが函形カマドに近似するものも見られ、過渡期的形態を示している。7期になると石使用のカマドの比率は非常に高くなり、2タイプのカマドが存在する。袖部分に1対の袖石をもつタイプとしっかりした石組をもつタイプである。前者の例としてはSB23・103・115・116をあげることができる。SB18のように6期段階からみられる。SB88のカマドについては6期から7期にかけての所産と考えられ、函形カマドとの過渡的形態を示す。また、袖石が片袖のみに認められる例が多く完全なものは少ないという特徴をもつ。後者の例としてSB14・52、96・101・111・136などがある。煙道は短く、ほとんど認められないものが多い。前者から後者



第141図 石組カマド集成図

へとの変化が想定できるが、7期段階では両者が併存する。

ウ カマドの構築及び廃棄について

(ア) 土器のカマド構築材への転用

基本的には粘土、石組の一部を土器で転用するカマドである。構築材として転用するものと補強材として転用するものの2種類がある。後者についてはその認定が難しくここでは扱わない。

3例の転用が認められた。SB7はSB9と全く同形態のカマドであり函形カマドに属すが、SB9は石組カマドであるのに対して、SB7は土師器甕を焚口部天井に、小型甕を支脚に転用し、土師器甕内部に土を詰めている。SB88のカマドは崩れた形で検出され、焚口部に土師器甕2個をが原形を保ちながら扁平に潰れた状態で出土しており、これら土師器甕を天井として転用していることがわかる。出土状況を見ると2

個体の甕を底部を合わせるようにし、甕内部に須恵器甕の破片を詰めているが、基本的には空洞のまま天井にしている。SB92は須恵器甕を袖石に転用している例である。左袖は2個の河川礫を使用しているが、右袖は焚口部に河川礫を使用しその奥を須恵器大甕の体部を構築材として利用している。

カマド石に使用するものは花崗岩と硬砂岩を主体としており、特に花崗岩は遺跡の付近を流れる鎖川、奈良井川流域から産出されず、梓川から入手しなければならない。その点ではかなりの労力を必要としたものと思われる。この一方でカマド石を投棄した遺構が存在するという一見矛盾した現象がある。これら多数のカマド石が集落内に集積されているにもかかわらず、土器をカマド構築材へ転用することにはどのような理由があるのであろうか。転用される土器には完形品を転用しているものと破損品を再利用したものがある。完形品を利用するものについてはカマド石の選択と同様な意味があったのであろう。

(イ) カマド構築に伴う儀礼

特異な遺物の出土状態を示す住居址が認められた。SB76の遺物出土状態は雑然と須恵器甕、杯、土師器甕、黒色土器杯などが出土している。そのなかにあつてカマド焚口部の掘り方部分から並んで出土した黒色土器皿、杯は合せて4個体出土し、3個体は焚口部に口縁を上にした状態で整然と並び、そのうちの杯と皿は合せ口状になっていた。この合せ口状になっているものには穀物などが入れられた可能性が高く、火入れのまえに儀礼的な行為が行なわれたものと考えられる。1例のみであるがカマド構築後の火入れに際して何らかの儀礼が行なわれたことを予想させる例である。

(ウ) カマド石の接合

カマド石の接合は5例(SB111・115・116・142)が認められた。このうち構築時に係わるものがSB111・115・142で、廃棄にかかわるものがSB116・129である。

まず、構築にかかわるものについてみることにする。SB111は左袖の高さ調節の結果、上端を打ち欠いたものを右袖に使用している。SB115についても同様である。SB142は60cmの細長い河川礫を4個体以上に打ち割り、そのうちの3つの破片を焚口の袖と天井部に使用している。

廃棄にかかわるものとしてはいずれも火床内に打ち欠いた礫を投げ入れている。SB116は左袖が破壊され打ち欠かれた一方を火床内に入れ、他方はほぼ原位置を保つ。SB129は火床内と床面のものが接合しており、一方の袖のみを残して破壊された状態で検出され、このように故意に破壊されたカマドが存在する。袖石の一方のみが残存するカマドが見られ、同様の行為が行なわれたと考えられる。

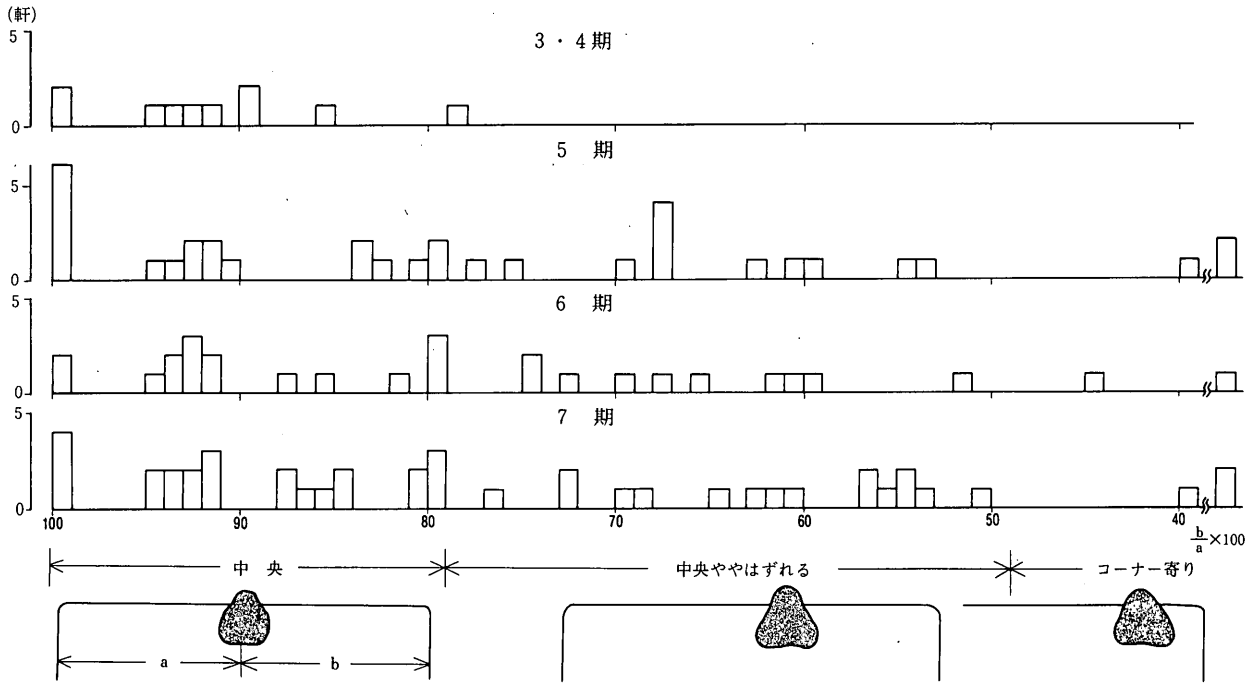
これらカマドの破壊に伴って、須恵器甕(SB207・688)、あるいは土師器甕(SB22・23・43・59・62・63・89)の破片をカマド内に詰める行為も認められる。両者ともカマドの終焉を宣言する行為といえよう。

(5) 住居の空間利用と入口の推定

ア カマド位置と灰溜めピット

灰溜めピットの確認された住居址は5期9軒、いずれも東カマドの住居址で、すべて南側に位置している。ただし1軒(SB38)はカマドの両側に灰溜めピットを持っている。6期は東カマド3軒、西カマド1軒、北カマド1軒で灰溜めピットが確認され、東カマド、西カマドのものはすべて南に位置し、北カマドのものは西側に位置している。7期は東カマド10軒、西カマド6軒、北カマド1軒で確認されている。東カマドのものはすべて南側に、西カマドのものはSB4、1軒を除いて南側に、北カマドのものは西側に位置しており、5・6期の状況と変わらない。また灰溜めピットは検出されていないが遺物の出土状況から類似した機能が推定できる住居址もあり、これらの動きと矛盾しない。つまり灰溜めピットの位置はカマド位置によってされ固定されており、同一の機能をもっていることがわかる。

これらのカマドと灰溜めピットの動きと矛盾するものはSB7・9・17やSB144・145・146などの例のように向かい合う2軒の住居址は基本的な動きに合致するが、残りの1軒がこれら住居址の灰溜めピット側



第142図 時期別カマド位置分布図

に動いている。つまりそれぞれの住居址群単位の規制の結果イレギュラーなものが生れる。

また、この動きに対応するようにカマド位置も中央を外れて灰溜めピット側に動いている(第142図)。3～4期はすべて中央に位置するが5期以降にバラエティーが現われる。6・7期もその状況が継続するが、住居址の隅に寄るものが増える。この動きは住居址内の空間の有効利用の結果と考えられ、住居址の縮小を可能にした動きといえよう。

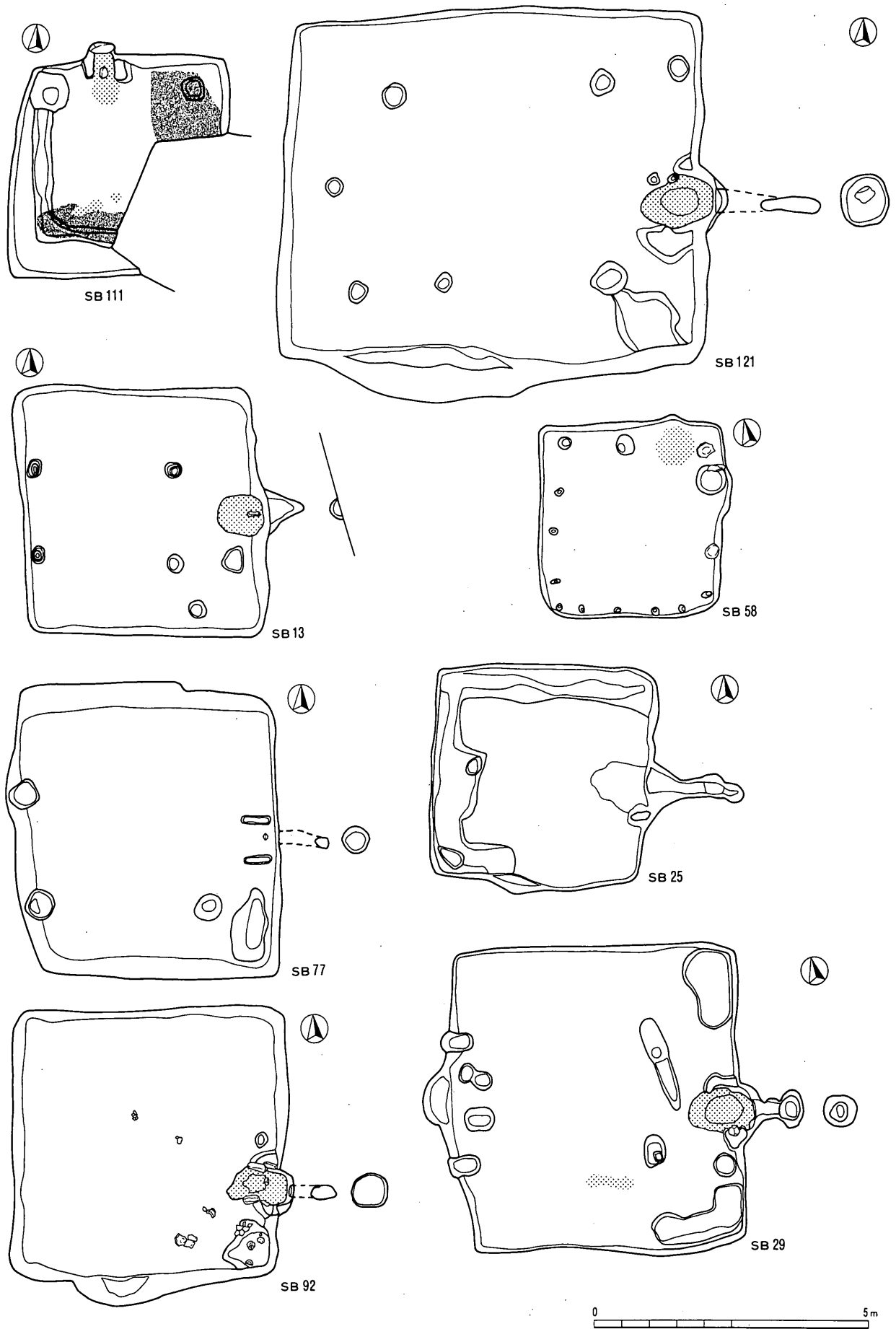
さて、灰溜めピットがカマドと連動して一定の空間を保っていることが明らかになった。次に、この機能について分析することにする。出土状況の良好なSB111についてみると、カマド脇のわずかに凹めた灰溜めピットには大型の貯蔵具として須恵器横瓶があり、このほかに土師器小型甕が2個体、杯・碗が積み重ねられた状態で出土している。このほかSB58・103から須恵器甕Dの体部下半が、SB64では土師器甕の完形品が、SB128・144からは黒色土器A杯などが積み重なって出土している。このことから厨房に関する空間とすることができるであろう。

イ 入口の推定(第143図)

入口部に関する資料は非常に乏しく具体的に提示できる資料は皆無に等しい。類推できる資料としてはSB111の焼失資料、住居址プラン、特に南側の壁に膨らみをもつSB25・92・121、柱穴位置によって推定できるSB13・29・58・77などをあげることができる。

SB111は焼失住居に準ずる扱いができる住居址であり入口部のみならず住居の空間利用に関して重要な問題を提起している。SB111は床面に「L」字状に炭化物の分布がみられ、これらの炭化物はイネ科植物のような繊維質で、何らかの敷物の可能性があり、これら敷物のない部分が入口に当たると予想され、それは西側に位置する。カマドは北壁の入口側のコーナーに寄りカマド脇には灰溜めピットが存在する。遺物の出土状況は前述したように完形の遺物が遺棄されている。以上の状況から入口が西壁にあり、入口の右側が厨房施設およびそのための保管の空間、左側から奥にかけてが寝間空間、中央部分がオープンスペースとなっていたことが予想される。

SB25・92・121などはいずれも東側にカマドをもつもので、その南側中央にテラス状の膨らみをもち入口



第143図 入口部想定住居址

部である可能性が高い。いずれも東カマドと入口部の間のコーナーには灰溜めピットが存在する。この推定が正しいとすればカマド、灰溜めピット、入口が連動して住居址の縮小化に係ることになる。以上の例はカマドの横の灰溜めピットを挟んだ直角方向に入口部が想定されるものである。

柱穴位置から推定できるものはカマドの対辺中央に想定することができる。柱穴がカマドの対辺の方向に偏ったり壁上に位置するものがある。上部の空間が広く取れるようになり何らかの施設(入口)が存在した可能性があるが、さらに住居址の構造の検討を重ねる必要がある。SB58については北カマドの住居址であるが西南壁際に小ピットが開き、壁構造の存在が予想され東側に入口部がくることが予想される。

入口に関しての検討を行ってきたが、2形態の入口つまりカマドと直角になるものと、カマドの対辺に位置するもので、これは住居形態に起因するものと考えられ今後住居址の構造を考えるうえで重要な意味をもつと考えられる。またカマド、灰溜めピットと入り口の関係に注目してきたが、2軒あるいは3軒の組み合わせをもつ住居址群では灰溜めピットの位置が動くものがあり、入口も同様に動くことが予想され精密な分析を重ねれば住居址相互を結ぶ道が復元も可能になると考えられる。

(6) 遺物出土状況

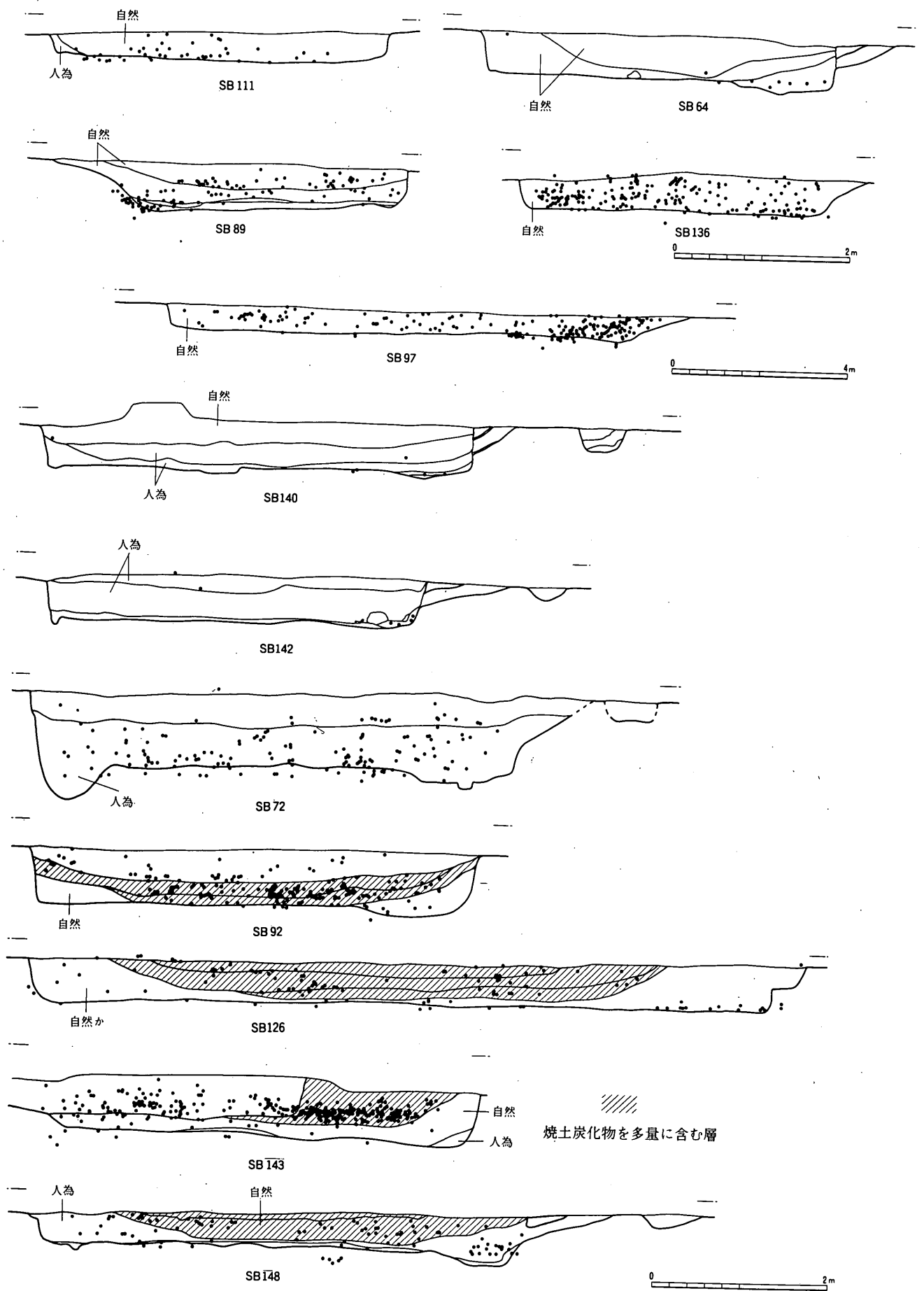
ア 遺物出土状況

竪穴住居址の覆土は基本的にはII A 1層を起源とし、これに若干のII A 2層を包含するものがある。その他の起源のものはないが、I A・I C層に上面を覆われることがある。埋没の要因には大きく自然によるものと人為的な力によるものに分かれる。なお、人為埋没の判定にはブロック状の包含物の有無によった。ただし、II A 2層を起源とする褐色土粒の混入によりその判定が困難なものがある。このような視点で竪穴住居址の覆土を検討すると、1、自然埋没、2、人為埋没、3、自然埋没+人為埋没、4、人為埋没+自然埋没に分けることができる(第144図)。一方遺物の出土状況はカマドに集中して出土したり、覆土にまとまって出土したり、ほとんど出土しなかったりと多様である。また、器種の構成においても、土師器甕が多い住居址や食器類が多い住居址や貯蔵具が多い住居址など様々である。これはカマドの項で述べたようにカマドの廃棄に関する行為や遺物の遺棄や投棄に様々な人為の係りなどが存在するからである。ここでは埋没状況と遺物の出土状況の関係について検討することにする。

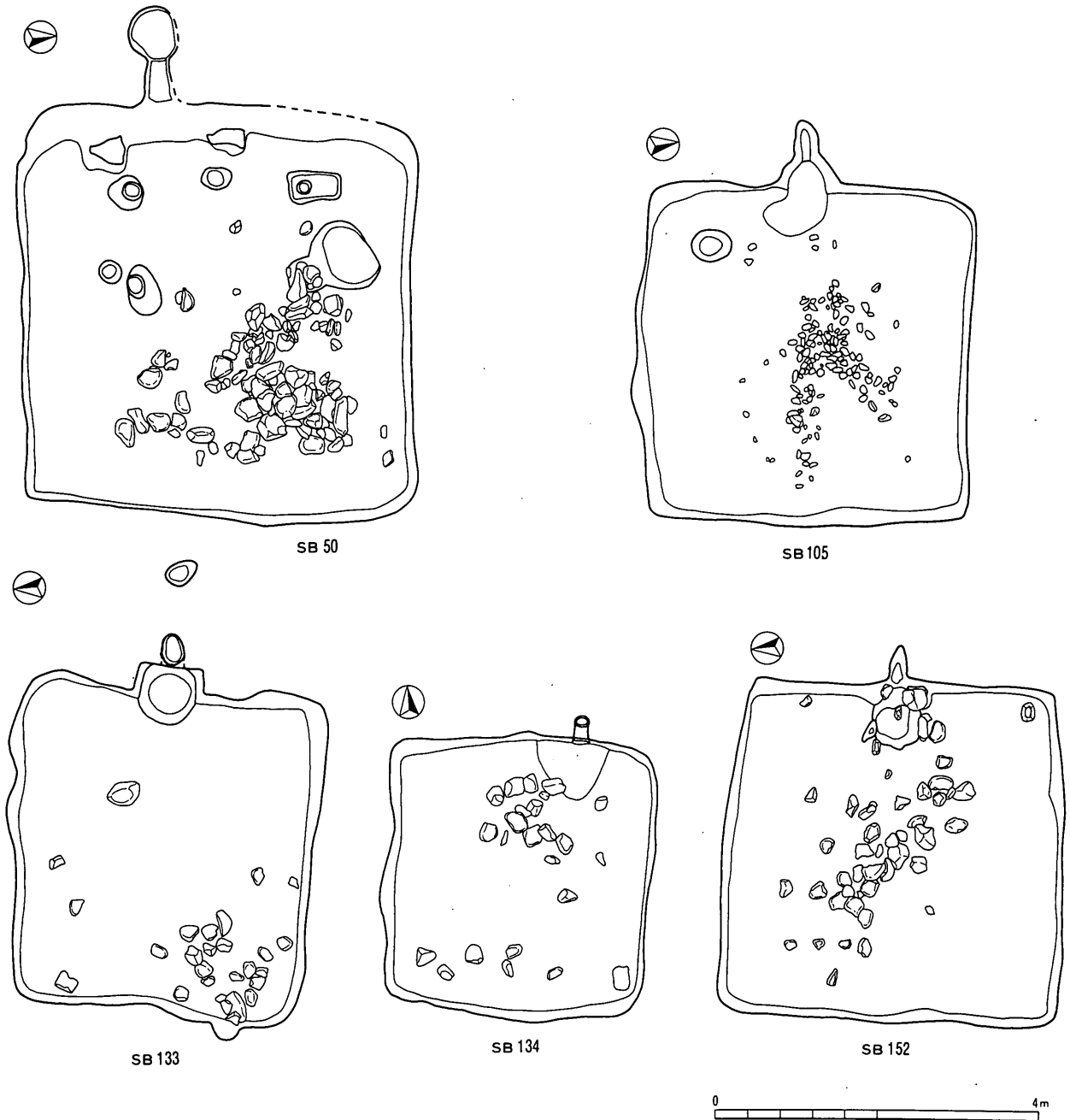
まず、床面に意図的に遺物が遺棄された例についてみることにする。SB111は床面に完形の遺物が遺存する例で、本遺跡においてはSB111のみである。床面上に炭化物がL字状に巡り、一見焼失住居をおもわせるが、炭化材等は小片を除いて確認されず、不慮の火災に遭遇して遺物が遺棄されたとは考えにくく、意図的な廃棄を予想させる。廃棄された遺物はカマド西側に原位置を保って出土しており、貯蔵具である横瓶を中心として小型甕2個体、杯・椀4点が一括で出土している。その他は床面カマド覆土から破片の形で出土しているが量は多くない。SB111のほか部分的であるが原位置を保つものがある。SB129・144は杯類が3個体ほど積み重ねられた状態でカマド脇から出土しており、SB64は土師器甕が、SB58・103では上半が失われているが須恵器甕が住居コーナーに据えられている。また、SB130は須恵器長頸壺Bがカマド脇から出土している。これらの住居址はSB130・144を除いて自然埋没を示している。

次に自然埋没に見られる遺物の出土状況である。大きく覆土中に遺物が見られる場合とほとんど見られない場合の二者がある。まず、遺物出土量がきわめて少ない例である。SB88は遺物の量から見ると須恵器甕など多量に出土しているがカマド構築にかかわる遺物、あるいは廃棄時の遺物である須恵器甕であり、覆土および床面からの出土は非常に少ない。カマドに関する行為を除くと覆土および床面からは遺物の出土が見られない。SB5・34・36・62・132なども非常に少ない。これらも同様な出土状況を示し床面遺物はほとんどなく、覆土からも出土しない。これは人為的埋没の遺物出土状況に類似する。

これに対してSB136は非常に遺物が多く覆土全般から出土する。またカマド内部にも多くの遺物が遺存



第144図 遺物出土状況図



第145図 住居内磔出土状況図

している。この出土状況は7期の遺構に多く見られSB14・23・65・76・89・96・97・99・131・152などがある。SB97については若干の問題を残す。いずれもカマドからは多量の土師器甕が出土しており、SB136では土師器甕の占める割合は76%と非常に高くなっている。3・4期では比較的原形を保った形での出土が多い(SB84・85)のに対して、7期では復元によって1個体となるがカマド内部に破片の状態で詰められることが多い。このことから7期においてカマドの廃棄に関して特別の行為が盛んに行われた可能性が高い。ただし、構築材、特に補強材との識別を厳密にする必要がある。これらは覆土への投棄とカマドの廃棄行為が重なった例といえる。

次に、SB83・123などの覆土に代表される人為埋没の覆土をもつ例である。覆土・床面・カマドなどを問わず極端に遺物の出土量が少ない。カマドや床面の遺物も片付けられた状態を示す。またほとんど開口していないため覆土の遺物の出土も少ない。SB33・82・87・95・107・108・120・142などがある。SB64につ

いてもこの仲間に入るのであろうが、土師器甕の完形品が床面から出土しており若干出土量が多い。またカマドを失っているがSB47・128などもこの仲間に入る可能性が高い。これらの出土状況にカマドなどに遺物を詰め込んで竪穴住居址を放棄する場合もみられる。カマドへの行為が重なった例として、SB95などがある。北部II地区を中心として確認される。

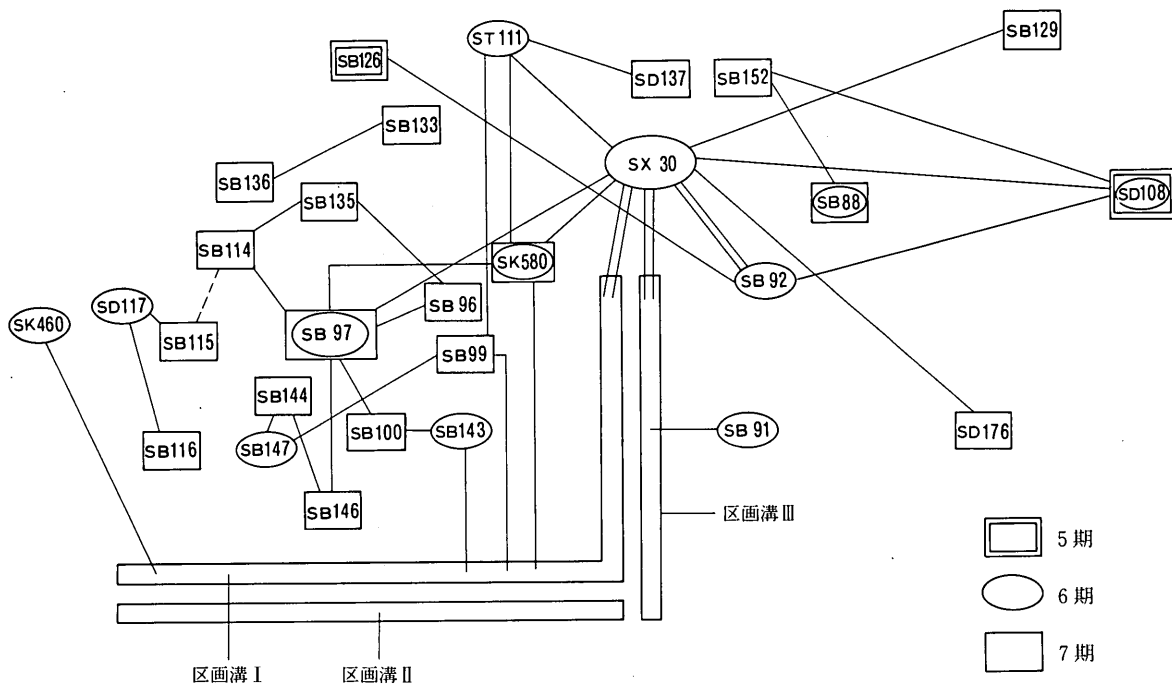
SB92・143の覆土は自然埋没層を挟んで覆土中に多量の遺物が廃棄される。SB92からは36.1kg、SB143からは40.6kgの出土があり、杯などの食器類や、須恵器甕などの貯蔵具の出土が多く、煮炊器具の割合が低い。食器の全体に占める割合(重量比)はSB92で54%、SB143で62%を占める。一方煮炊器具はSB92で12%、SB143で20%と低くなっている。SB72・121・126・141・148なども間層(自然埋没層あるいは人為埋没層)を挟んで覆土中に多量の土器が投棄される例である。これらの住居址は住居中央にすり鉢状に落ち込む炭化物層をもち、多量の焼土炭化物層を含むという共通性が認められる。土器の構成も食器類の出土が高く、煮炊器具の出土が低いという共通性がある。SB4もまた同様な土器構成を示めすがカマドを中心とした廃棄でありやや出土状況が異なる。北部I地区を中心として確認される。

これらの出土土器の構成は竪穴住居址ではないが区画溝・SD108・SX30などと共通しており、食器の割合が高いということは他住居址からの継続した投棄を示す目安となるであろう。

このほかに河川礫の投棄のみられる住居址がある。覆土中にカマド石と思われる石の投棄は小規模なもののかかなりの住居址で認められるが、かなりまとまった量を示すのはSB50・105・133・134・143・152など

NO	地区	遺構名	遺構名	図番号	土器種類	器種	備考	NO	地区	遺構名	遺構名	図番号	土器種類	器種	備考			
1	南部地区	III	SB6	SB23		土師器	円筒形	同一個体か	23	北部地区	I	SB100	SB143	SB100-23	土師器	小型甕	切り合いによる混入か	
2		II	SB28	SB42		須恵器	甕	同一個体か	24		I	SB100	SB143	SB100-11	須恵器	杯B	〃	
3		I	SB45	SB46・SK4		須恵器	短頸壺		25		I	SB115	SD117	SB115-20	須恵器	杯B	〃	
4	北部地区	III	SB66	SB67		I 師器	小型甕	切り合いによる混入か	26		I	SB115	SD117	SB115-21	須恵器	杯B	〃	
5		III	SB68	SD100・104		須恵器	甕D	〃	27		I	SB116	SD117		須恵器	杯A	〃	
6		III	SB76	SB77	SB76-25	灰釉陶器	碗	〃	28		I	SB116	SD117		須恵器	杯A	〃	
7		II	SB88	SB152		須恵器	甕		29		II	SB129	SX30		須恵器	甕		
8		II	SB91	SB149		灰釉陶器	瓶	切り合いによる混入か	30		II	SB130	SB139・141	SB130-7	須恵器	平瓶		
9		II	SB91	区画溝III		須恵器	碗		31		I	SB133	SB136		須恵器	甕		
10		II	SB92	SB126		須恵器	甕D		32		I	SB143	SB152・区画溝I		須恵器	甕		
11		II	SB92	SX30	SB92-77	須恵器	甕D		33		I	SB143	区画溝I		須恵器	甕		
12		II	SB92	SX30・SD108	SB92-64	須恵器	盤		34		I	ST111	SD137		須恵器	甕		
13		北部地区	I	SB96	SB135	SB96-21	灰釉陶器	碗			35	I	ST111	SK580・SX30・SB97	SK580-16	須恵器	高杯	
14			I	SB97	SB114・135		須恵器	甕D			36	I	区画溝I	SK580		灰釉陶器	碗	
15			I	SB97	SB115		須恵器	甕D	14と同一か		37	I	区画溝I	SX30	区画溝I-103	須恵器	杯B	
16			I	SB97	SB96	SB97-19	灰釉陶器	碗			38	I	区画溝I	SD108	SD108-307 区画溝I-18	須恵器	平瓶	同一個体
17			I	SB97	SB146	SB97-20	灰釉陶器	皿			39	I	区画溝I	SB143	区画溝I-85	須恵器	長頸壺	
18			土	SB97	SB100	SB100-18	緑釉陶器	碗			40	I	区画溝III	SX30		須恵器	杯B	
19			I	SB97	SX30	SX30-53	須恵器	壺			41	I	区画溝III	SX30・	SX30-146	須恵器	杯B	
20			I	SB99	SB147	SB99-20	須恵器	甕			42	II	SX30	SD108	SX30-42	須恵器	杯B	
21			I	SB99	区画溝I		須恵器	甕			43	II	SX30	SD176	SX30-47	須恵器	鉢	
22	I		SB99	ST111		須恵器	甕		44		I	SK460	区画溝I	区画溝I-17	緑釉陶器	碗		

第29表 遺構間の遺物接合一覧表



第146図 接合関係模式図

である(第145図)。7期を中心として見られる。投棄の時期であるがいずれもやや時間の経過した段階であるSB50・105を除いて自然埋没を示す。

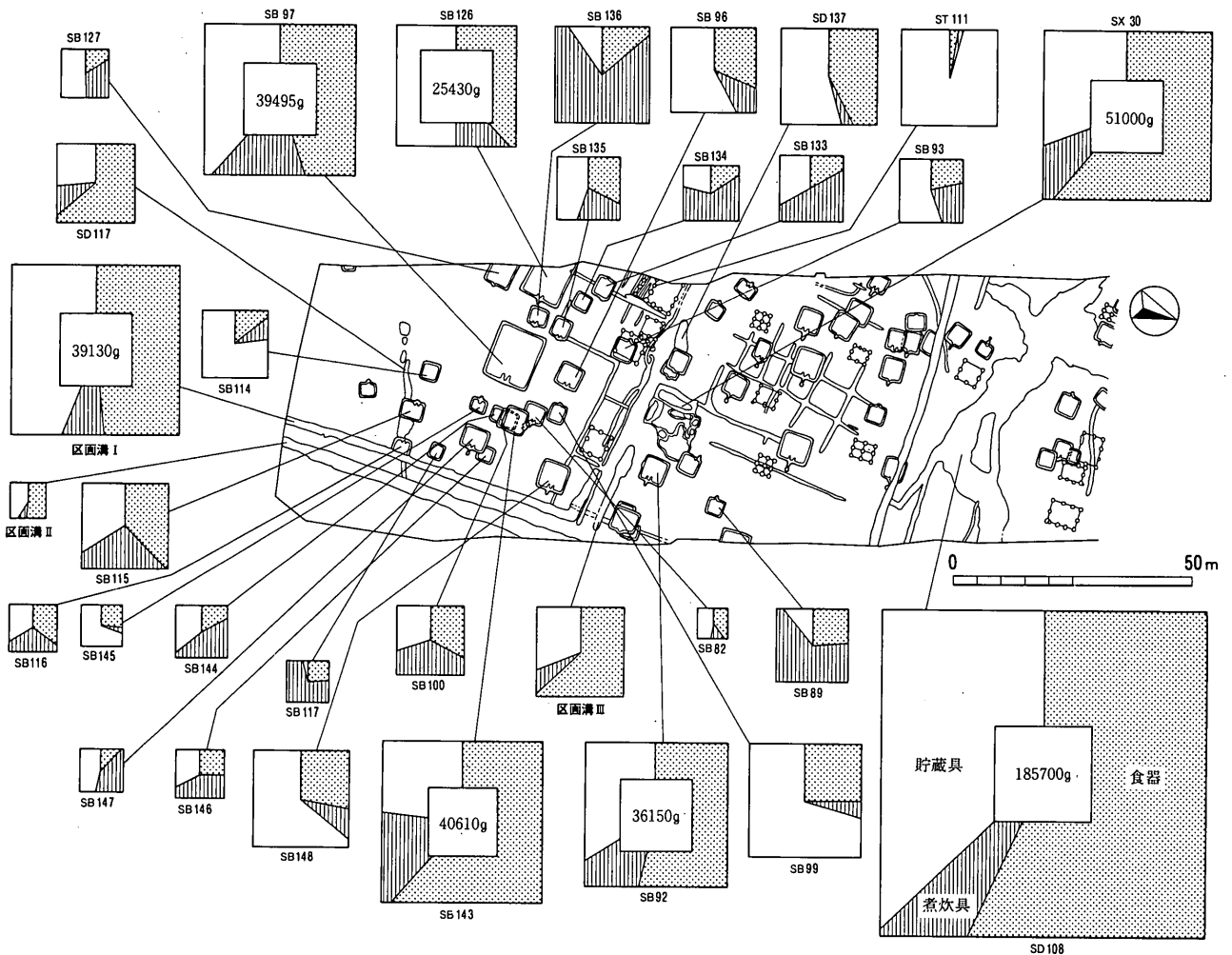
イ 遺構間の遺物接合

遺構間の遺物接合は竪穴住居址以外の遺構とも接合関係が認められるため本項で述べるのはふさわしくないが、その主体を竪穴住居址が占めているため本項で検討することにする。遺構間での接合遺物の観察は破片の多い須恵器甕などの大型品を中心に行ない、特に住居址の密集する北部Ⅰ地区を中心に行なった。隣接する住居址については遺構間の接合に特に留意して接合作業を進めた。

接合関係が認められたのは44例が認められ、このなかには接合しないが明らかに同一個体として認定できるもの4例を含む。地区別に見ると南部地区3例、北部地区41例である。このうち切り合いによる混入の可能性のあるものが9例ある(第29表)。北部Ⅰ地区を中心とした接合関係を示したのが第147図である。

その特徴を見るとまずSB97・SX30という二つの接合関係の核が存在する。SB97の接合関係を見ると接合しているのはSB96・100・114・115・135・146・ST111・SK580・SX30であり、SB97と直接の接合関係は認められないがSB97と接合している遺構とさらに接合するものとしてSB99・144などが。大型のSB97を中心としてその周囲を取り巻く小型の住居址のほとんどと接合しており、時期的には2時期にわたっている。6期のものとしてSX30・ST111、7期のものとしてSB96をはじめとする小型の住居址群がある。このことからSB97の存続期間が普通の住居址よりも長期にわたっていることが分かる。またSB97との廃棄の同時性を示しており、墨書土器の分布とともにこれらの住居址群との関係を示唆する資料である。SX30の接合関係を見るとSB92・97・129・ST111・区画溝Ⅰ・SD108がある。SB(97)・129を除くといずれも多量の土器が投棄された遺構であり同様な性格をもつ。このようにSX30については廃棄される遺構として多くの遺構との関係を示すものである。また、同一区画内における多数の遺構間接合の存在は二次的な移動を示すものである。

次に、かなり離れた遺構であるSD108との接合関係がある。接合例は2例認められる。このほかにほぼ同一個体として認められるものが1例ある。SD108と接合しているのはSB92・SX30で約60m程離れている。



第147図 北部地区土器出土量及び食器構成図

別項で触れたが、いずれも多量の土器が出土しておりSB97を中心とする区画内からの廃棄場所と考えられ、SD108も食器類が多いなど同様な出土状況を示しており廃棄場所と考えることができる。盤や杯Bが別の場所で破損し2遺構にわたって捨てられたことを意味する。別の場所とは区画内部を指すことは明らかであり、区画(SB97)とSD108との関係を示すものである。この区画の南側にはNR1が東西に流れているが遺物の出土はほとんど無く、区画内の生活用水は専らSD108に依存していたことが分かる。

次に接合している器種についてみると須恵器甕類が多い。これは接合作業の対象が須恵器甕類を中心としているためであるが、土師器甕がカマドを中心として廃棄されることも大きな要因と考えられる。煮炊器具である甕はほとんどが住居内において廃棄が完結するのに対して、食器、貯蔵具が住居を越えて廃棄されることを意味している。これは出土状況で述べたようにSB92・143などゴミ捨て穴として使用されている竪穴住居址からの土師器甕類の出土が極端に低いことも符合する。

2 掘立柱建物址

(1) 概観

本遺跡で検出された掘立柱建物址は58棟、うち総柱建物址は11棟である。その特徴はST111を除いて3間×2間までの小規模な建物によって占められることである。竪穴住居址に対する割合は竪穴住居址142に対して58棟、その比率は約1:2.5で、ほぼ一般的な集落の様相を示すと考えられる。

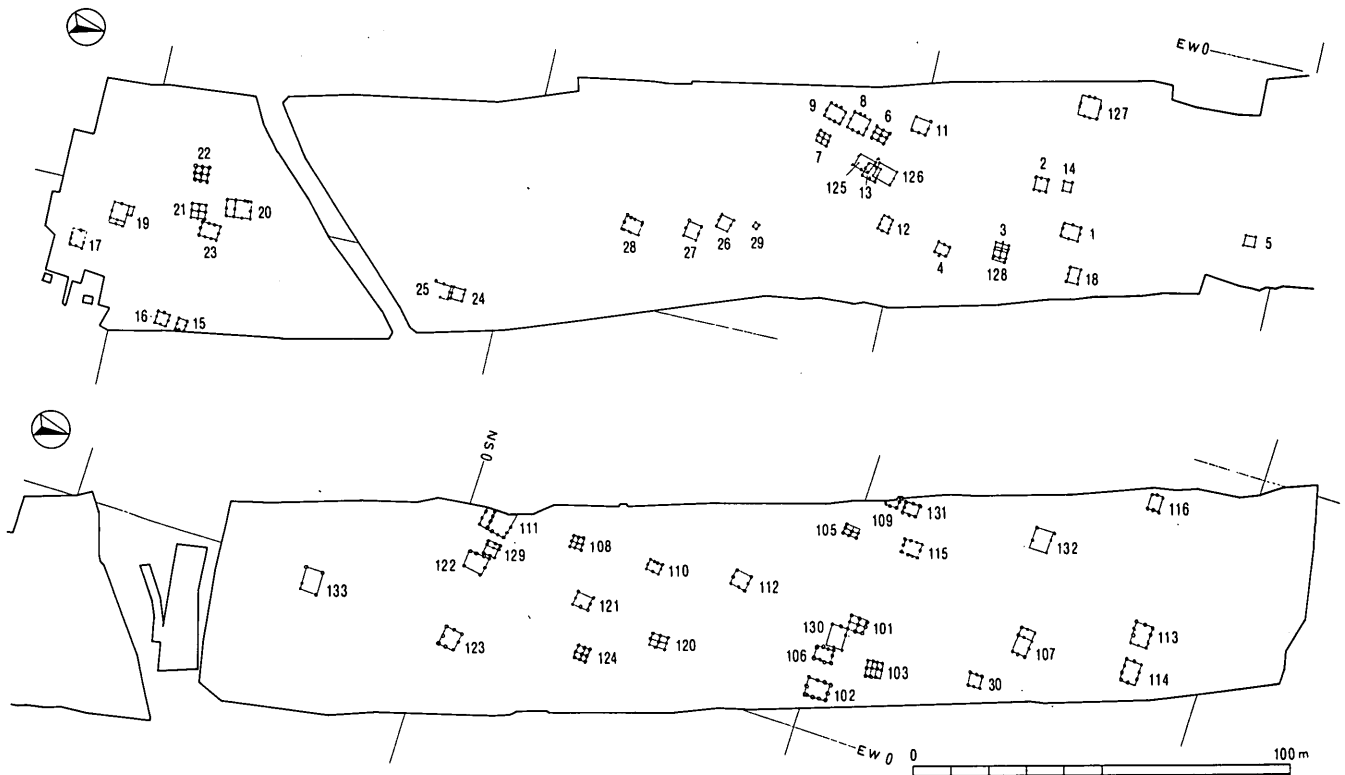
掘立柱建物址の分布(第148図、第30表)は集落全体に広がり、数棟のまとまりをもつ。南部I地区ではST15~17・19~25の10棟が存在する。ST20は本遺跡では大型の建物に属す。構成は総柱建物2棟、2間×

1間2棟、2間×2間2棟、3間×2間2棟である。これらは2時期にわたっており総柱建物1棟、2間×1間1棟、2間×2間2棟、3間×2間1棟の構成をとる。南部II地区ではST 6～12・26～29・125・126の12棟が存在し、北側部分において規格的な配置を示す。総柱建物2棟、2間×2間3棟、3間×2間4棟からなる。ここも2時期にわたっており、ほぼ半数ずつが同時に存在したものと考えられる。南部III地区ではST 1～5・13・14・18・127・128の10棟が存在する。散漫な分布を示し、他地区にみられるような数棟単位の構成は取らない。

地区	規模	総柱建物	1×1間	2×1間	3×1間	2×2間	3×2間	3×3間	不明	合計
南部地区	I	2		2		4	2			10
	II	2	1	2		3	4			12
	III	1	3	3		2		1		10
北部地区	I		1			2	1		1	5
	II	3				3				6
	III	3		3	1		7		1	15
合計		11	5	10	1	14	14	1	2	58

第30表 地区別掘立柱建物址検出数

北部I地区ではST111・122・123・129・133の5棟が存在するが土坑が集中しており、さらに存在した可能性がある。この地区の大きな特徴として総柱建物を含まず、比較的大型の建物によって構成される点が挙げられる。この区画内部のSB143から鍵状の鉄製品が出土しておりこれら掘立柱建物址との関係が注目される。北部II地区ではST108・110・112・120・121・124の6棟が存在する。群をなすというよりも散漫に分布する。北部I地区が総柱建物を含まないのに対してII地区では総柱建物が半数を占める点で両者の関係が注目され、区画内部を避けて倉庫を建てた可能性がある。北部III地区は南部に集中する。ST30・101～103・105～107・109・113～116・130・131・132の15棟からなる。ST113・114のように竪穴住居址との関係を良好に認めることのできるものが存在する。



第148図 掘立柱建物址分布図

総柱建物はほぼ各地区に分布しているのに対し、3間×2間の建物は分布がかたより、特に北部III地区と南部II地区にまとまる。これに対して1間×1間、2間×1間の建物は南部地区に多い。また、北部I

地区は総柱建物を含まない点、4間以上の大型の建物を含む点でこの地区の特殊性を物語っている。

(2) 規模

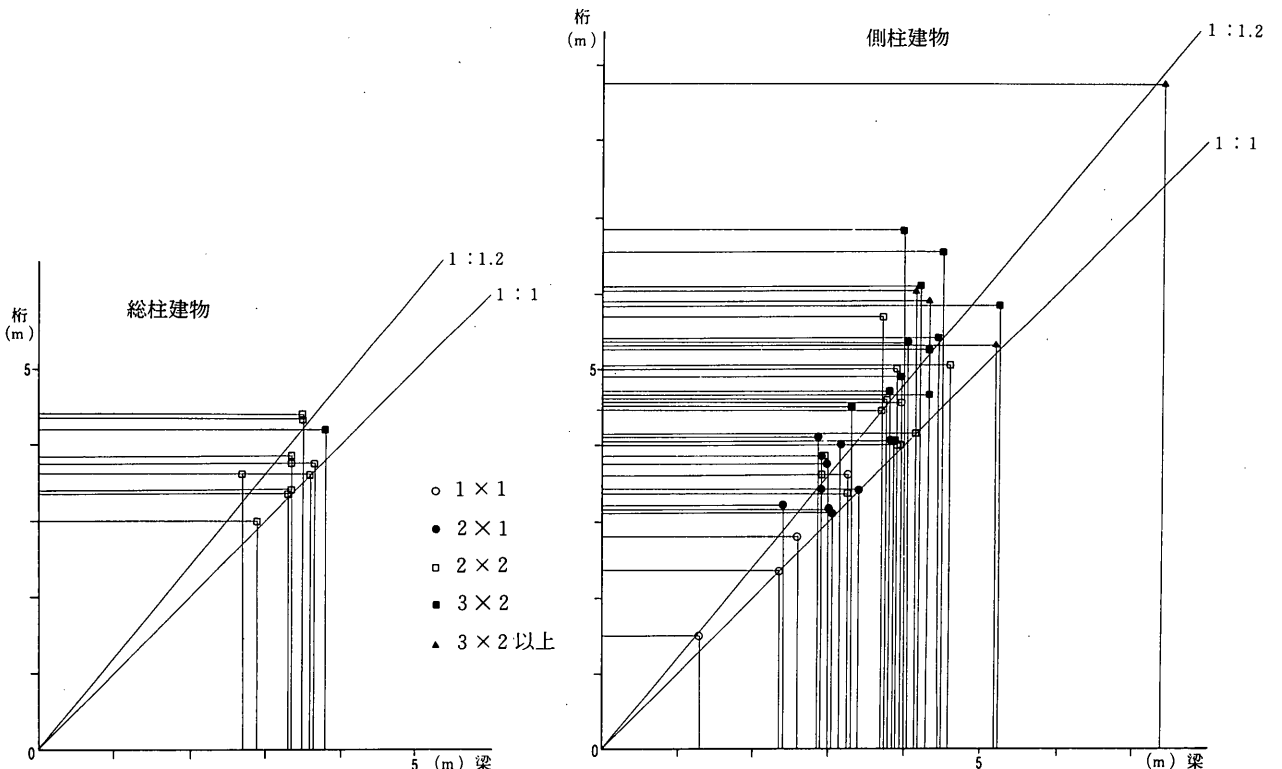
面積別に見るとほとんどが20㎡以下の小規模な建物で占められる。30㎡以上の建物はST111・122の2棟のみであり、20㎡以上のものは全体の24%である。全体として2間×2間、2間×3間の建物を中心とした小規模な建物群である。掘立柱建物址を柱間数で見ると1間×1間5棟、2間×1間10棟、3間×1間1棟、2間×2間24棟、3間×

規模 面積(m ²)	総柱建物	1×1間	2×1間	3×1間	2×2間	3×2間	3×3間	不明	計
~5		1							1
~10	2	2	4						8
~15	6	1	5		4	1			17
~20	3		1		8	4		(1)	16
~25		1			2	4			7
~30				1		4	1		6
30㎡以上						1		(1)	1

第31表 掘立柱建物址規模別棟数

2間15棟、3間×3間1棟、不明2棟である。庇付建物は2間×2間、3間×2間の建物に見られ、はST111を除き梁間側に付く間仕切り用の柱とし捉えることができる。ST111は他の掘立柱建物址と規模・構造の点でかけ離れており、SB97と同様中核的な建物の一つと考えられる。しかし、全体としては構造的に見ても貧弱である。これは時期的に2~3期の掘立柱建物址を含まないことも一因と考えられる。以下規模別にみることにする。

総柱建物址は1棟(ST103)を除いて2間×2間で9~15㎡の規模である。これらの面積は2間×1間、2間×2間の建物領域と重なる。このことから約20%と高床式の倉庫の占める割合が低いが、これらを含めると73%がほぼ類似した用途、倉庫あるいは納屋的な施設と考えられる。総柱建物は規模の点で9㎡、11㎡、15㎡の3段階に分けることができる。3間×2間の建物が1棟存在するが、2間×2間の建物と規模の上では変化がない。ST108は一応総柱建物としたが中央の束柱が他の掘り方の規模とは異なり非常に小さく、2間×2間の建物との関係を示唆する建物である。柱穴は50cm以上100cmまでと大型の掘り方をも



第149図 掘立柱建物址の平面形態

ち、1棟を除いて方形で規格的な掘り方である

1間×1間の規模をもつ建物址は検出された棟数も5棟と少なく、掘立柱建物址の中では補助的なものである。規模で見るとST29の1.95㎡が最小で、5㎡以下が主体となるが、ST5・128規模の大きなものも存在する。特にST5は掘り方も安定している。1間×1間の建物址の掘り方はすべて円形である。

2間×1間の規模をもつ建物址はその形態により方形のもの、つまり梁間の柱間を広く取り桁行の2倍の柱間間隔をもち2間×2間の建物と同様の構造をもつものと、矩形で柱間間隔が梁間と桁行が近似しているものに分けることができる。方形のものとしてST2・4・24・26・27・30、矩形のものとしてST15・18・116・131がある。掘り方は方形円形の両者が存在するが円形のものの方が圧倒的に多く、掘り方の規模は50cm台で小さい。

2間×2間の規模をもつ建物址は、やはり方形のものや矩形のものがあるが顕著な差はみられない。方形のものとしてはST11・13・16・19・112・123・129、矩形のものはST1・12・(17)・25・28・110・121がある。ST112・121・123などは桁行の柱間間隔が長く、規模も大型化している。これらの建物は6～7期の建物で時期がやや下る。またST11のように4隅の柱穴に比べ中央の柱穴が小さく補助的なものもみられる。ST129は底の付くものであるが規模は小さく間仕切り用の柱と考えられる。掘り方は円形、方形の両者があるが円形のものの方が圧倒的に多い。規模も2間×1間の建物址と同様である。

3間×2間の規模をもつ建物址は、やはり方形のものや矩形のものがあるが圧倒的に矩形のものが多い。方形のものはST8のみである。1間×1間から2間×2間にみられた構造的な共通性はみられなくなり、3間×2間の建物址がそれ以下の建物址とは機能的に異なっていることを示唆している。面積的にみると25㎡を境に質的に変化がみられST20・107などのように庇付建物が出現するのも大きな特徴である。庇付建物は梁間に付く間仕切り用の柱穴として捉えることができる。掘り方は方形のものが円形のものを上回るようになる。

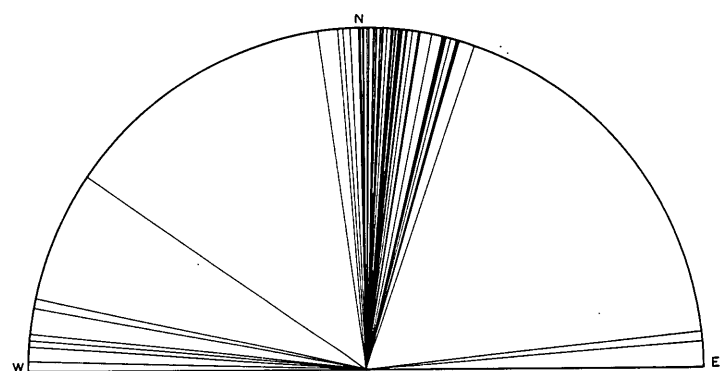
3間以上×4間、ST111の1棟のみである。最低でも50㎡以上と推定され、南側に底をもつ大型の掘立柱建物址である。構造の面でも建物内部に大甕を据えた痕跡があり特異な存在である。この掘立柱建物址が存在するのもSB97同様区画の内部であり、区画の特殊性を物語る建物である。大甕の埋設施設をもつことから無床建物と考えられ一応厨屋的な機能を想定することができる。

建物内部に須恵器の大甕の埋設施設を伴うものは横浜市受地だいやま遺跡(奈良地区遺跡調査団 1987)などいくつか類例が知られており今後さらに増加するであろう。建物を伴わない例として松本市島内遺跡群北方遺跡(松本市教委 1988)が挙げられる。須恵器大甕を利用した貯蔵形態として注目される。

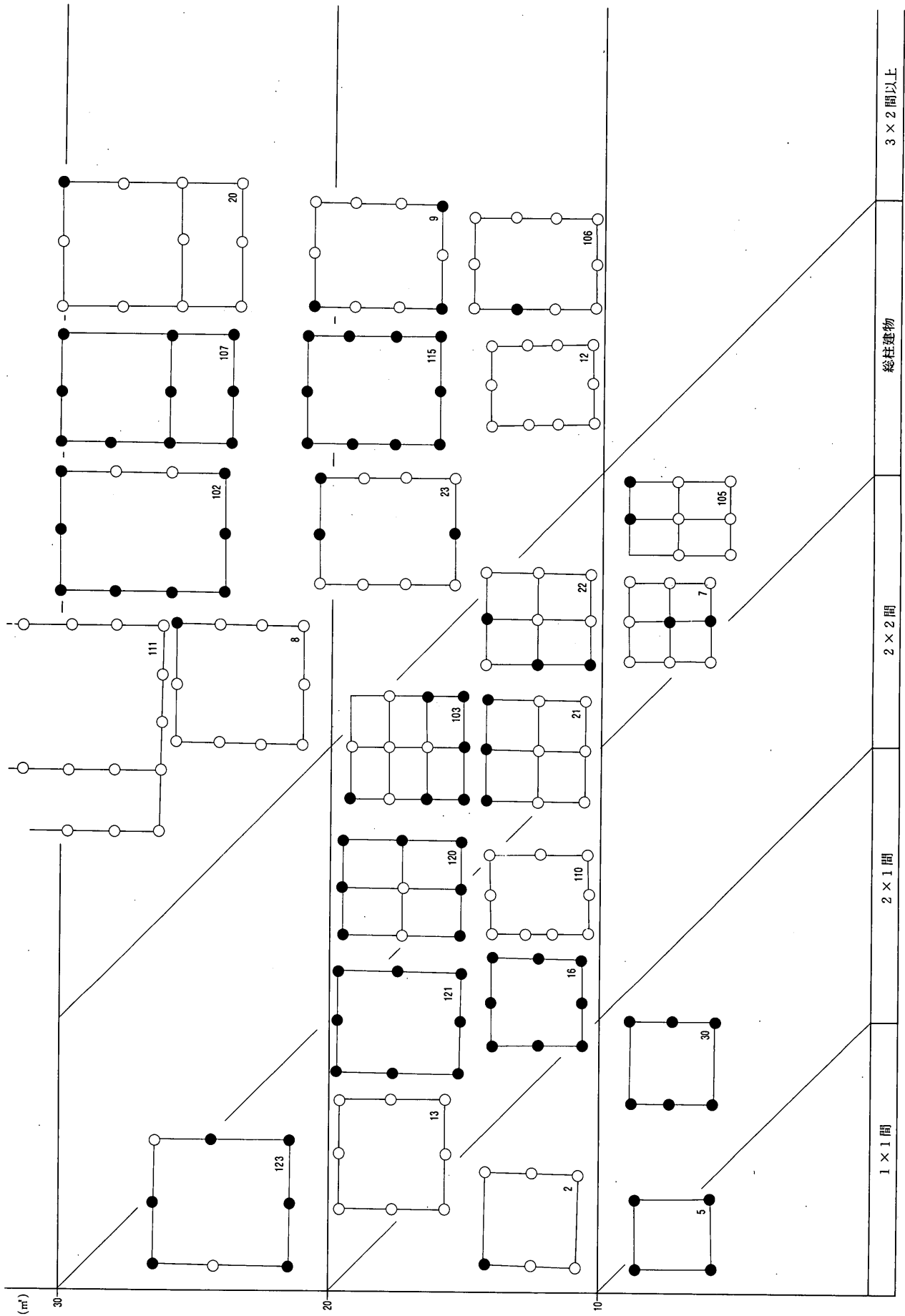
次にどのような設計規格の下、つまり柱間間隔を採用しているのかみてゆくことにする。梁間では2つの柱間間隔が採用されている。160cm前後と180～200cmである。160cmのほうは小型建物に採用されており、後者のほうは3間×2間の建物に採用される。後者の柱間を採用している建物で2間×2間のものは時期の下るものが多い。これに対して桁行の柱間は基本的に160cmの柱間を採用しており、長めの柱間を採用するのは例外的なもので、時期の下るものであろう。

(3) 軸規制

第149図のように全く振れないものと5°前後の振れをもつものと10°以上の振



第150図 掘立柱建物址主軸方向



第151図 掘立柱建物址規模別集成

れをもつものがある。これは竪穴住居址と同様な傾向を示すが、竪穴住居址ほどのばらつきはない。基本的には振れ角 0° の南北方向、東西方向に主軸をとる。振れ角の大きなものは時期的な問題と地区別の問題を含んでいる。 10° 以上振れるものは南部II地区に集中しており、6～7期段階と考えられるST111もまた 10° 以上の振りをもつ。南部II地区は竪穴住居址もまた他地区に比べて大きな振れ角をもち、掘立柱建物址もまた同様な規制を受けていることが分かる。

(4) まとめ

以上、掘立柱建物址について概観した。小規模の建物によって構成されるという特徴をもつが、これは集落の性格、あるいは時期に規定されていると考えられる。ST111とそれ以外の建物の際立った差異はそれを象徴的に物語るものである。また、形態的な差が少ないのも特徴の一つとしてあげることができる。さきにふれたように総柱建物つまり倉庫を頂点として、1間×1間から2間×2間の形態的な共通性をもつ一群が75%を占め、住居あるいは作業所的な機能を有するものが25%程度の構成となる。

時期的な問題であるが4期のものは少なく、ほとんどは5・6期に集中する。この点では9世紀の非常に単純な掘立柱建物址の資料ということができる。奈良時代的な建物がないことも小規模な建物で占められる大きな理由といわなければならない。集落の特性とも関連するが特に3間×3間、4間×3間の建物址を含まなくなるのがこの時期の特徴ということができるであろう。

3 区 画

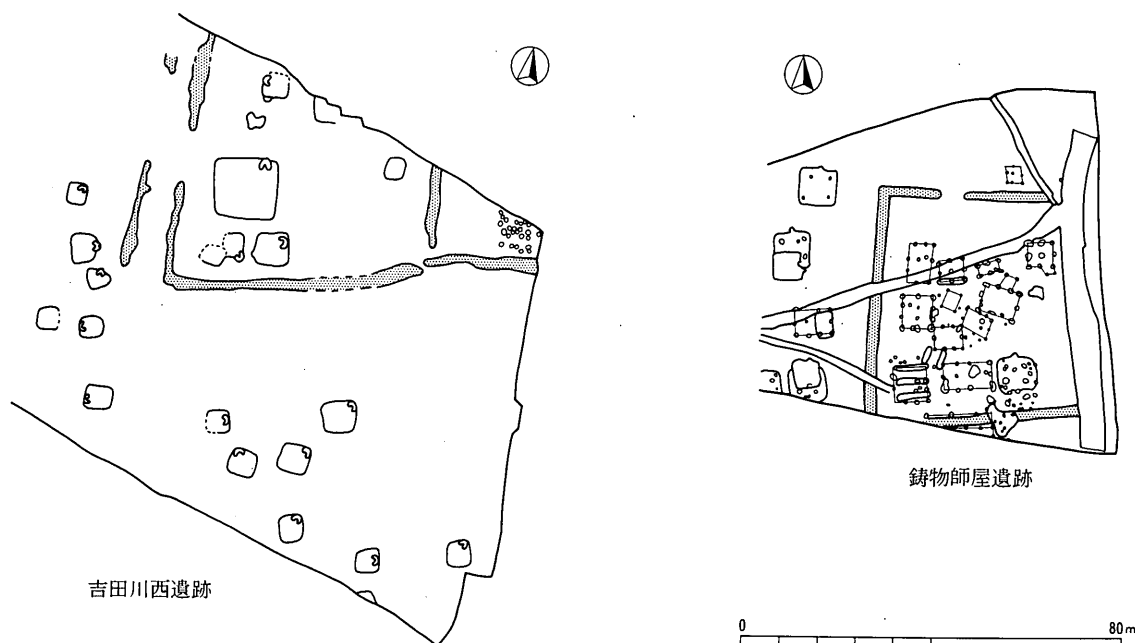
区画とは溝、柵などにより区間的に区切られた部分を指す。本遺跡では、南部地区で2カ所、北部地区で1カ所の区画施設が認められるが、ここでは北部I地区に検出された区画溝に囲まれた部分についてみることにする。

区画溝は2条の溝址とその間の柵址からなる。溝址の間には土塁状の高まりなどは確認されなかった。規模は南北75m、東西20mである。南北に長くなり南端部で自然流路(NR1)に接し、東西方向もSX30などと複合した遺構と考えられ、区画の範囲は東西方向にさらに延び東西60m以上の区画となる。これは2分の1町以上に相当する規模である。SD139・170・171の配置から西側に開口部をもつものと考えられるがはっきりしない。また、SD108への土器の投棄の状況から北側にも開口部をもつが東西方向の溝は規格格的ではなくなる。区画の中心には大型の礎石建ちの竪穴住居址SB97が配置される。遺構は北側に片寄り、南側部分は広場・作業空間のある区画であることが明らかになっている。いくつかの類例にふれながらこの区画の性格について考えていきたい。

集落を溝によって区画することは弥生時代から認められるが、明らかに宅地を区画する例は古墳時代までさかのぼることができる。溝址に区画される類例は古墳時代を中心として日本各地で検出されている。古墳時代のものとしては群馬県を中心として類例が知られる三ツ寺遺跡(群馬県教委 1989)、小笠原氏(1975)の報文によると原之城遺跡、本宿遺跡、郷土遺跡などがあげられる。いずれも5～6世紀にかけての遺跡である。西日本では神戸市松の遺跡などが知られる。三ツ寺遺跡・原之城遺跡などは張り出し部をもち、大規模な濠や土塁により区画され、防御的な色彩が強いが、本遺跡例とは直接の系譜は認められない。

7世紀以降のものとしては千葉県芳賀輪遺跡(千葉県教委 1980)などがある。芳賀輪遺跡は一辺70mの溝により区画されるもので南北に陸橋部をもつ。区画内部には掘立柱建物址7棟がコ字状に配され竪穴住居址はない。規模の点では芳賀輪遺跡と共通性が認められるが区画内部の構成は全く異なる。

2条の溝址と柵址をとまなう遺構の類例としては滋賀県弘川遺跡(滋賀県教委 1979)があげられる。ただし分析の結果2条の溝址の時期を異なるものとして捉えている。弘川遺跡は郷倉址に比定されており倉庫群の外郭を区画する機能をもち8世紀後半に比定されている。溝の規模は東西8m、南北32m、幅1～1.5



第152図 区画溝吉田川西遺跡・鋳物師屋遺跡

m、2条の溝間は約1.8~27mを測り門址をもつ。本址は弘川遺跡の例に近似しており小規模な官衙施設との類似性を指摘することができる。

県内での類例は少なく小諸市鋳物師屋遺跡(小諸市教委 1988)、塩尻市吉田川西遺跡(長野県教委 1989)が知られるのみである(第152図)。鋳物師屋(鋳師屋)遺跡は古墳時代から平安時代にわたる集落遺跡である。区画は東西27m、南北35m以上にわたり溝幅は1.2~1.9m深さ45cmを測る。区画内部は掘立柱建物址4棟により構成されている。報文によれば掘立柱建物址群は倉庫として位置付けられている。

吉田川西遺跡はSD7・10・18・23の区画があげられる。調査区の東端に位置しており全容は明らかでないが一辺45m以上の区画をもつ。さらに区画内部は中央の溝により竪穴住居址群と掘立柱建物址群に分かれる。竪穴住居址SB32は一辺10m前後の大型住居址で東壁下に食器が列状に出土している。SB32の時期は11世紀中ごろと考えられ区画もこの時期に比定される。

本遺跡のような9世紀代の類例は認められないが弘川遺跡からは官衙的な様相をもつことが明らかになっており、吉田川西遺跡との比較からは遺物の出土状況、大型の竪穴住居址を含むなどの共通性が認められる。吉田川西遺跡では区画内部の性格について公的な行事を行う空間と私宅を兼ねた『館』地割として有力な領主階級の存在を予想している。本遺跡の大型竪穴住居址の場合は鍛冶などの工房としての性格を有しており、吉田川西遺跡例とは若干の違いを見せている。本遺跡の区画施設は墨書土器などにより、「草茂庄」の中核部分を区画する機能を有すると考えられ、官衙的な技術と伝統的な技術からなる遺構である。なお、SB97の性格については第4節において検討することにする。

第2節 遺物の分析

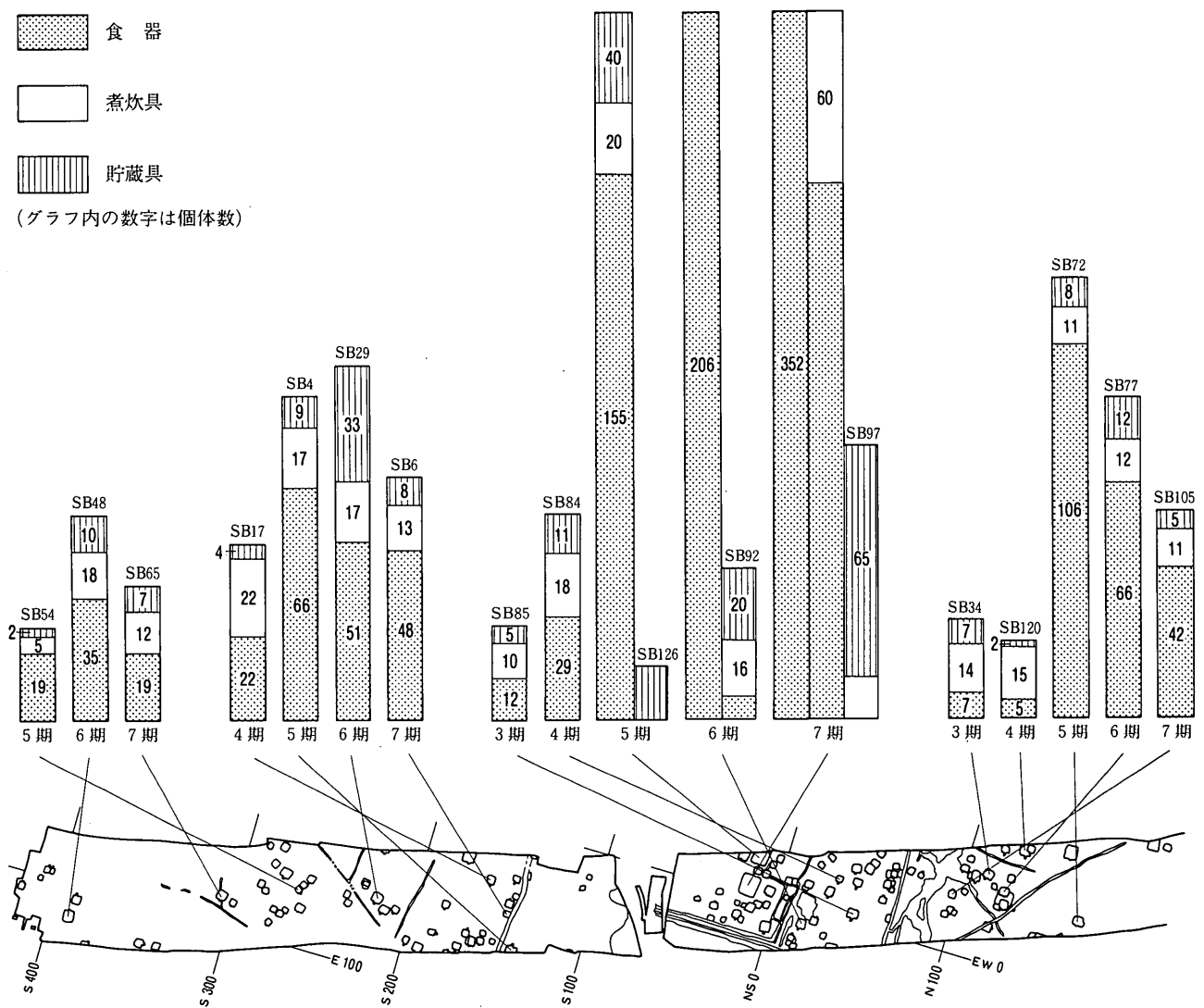
1 下神遺跡における6・7期の土器様相

(1) 下神遺跡における各期・各地区の土器の構成

下神遺跡における各遺構の土器様相については、第2章で述べてきたとおりである。本項では遺構の項

で考察された遺構のまとまりに従って、遺構群間の土器様相の差について述べる。まず検出された遺構群を空間的に南部Ⅰ・Ⅱ地区、南部Ⅲ地区、北部Ⅰ・Ⅱ地区、北部Ⅲ地区の四つのまとまりとしてとらえる。そして、それぞれの地区を時期ごとに対比して土器の様相を比較してみたい。

第153図は各群・各時期の土器の個体数を食器・煮炊具・貯蔵具の別に比較したものをグラフ化したものである。グラフに抽出した竪穴住居址は、それぞれの地区の各時期の竪穴住居址の中で、最も土器の出土量の多い遺構である。このグラフによれば、3・4期では各区の竪穴住居址とも土器の量は少なく、最も多い4期のSB84でも58個体を数えるに過ぎない。また、この時期はどの地区においても土器全体のなかで食器の占める割合が低く50%を超えることはない。このように3・4期までは各地区ともとりたてて土器の様相に相違は認められない。5期になると地区によって土器の量に差が表われてくる。北部Ⅰ・Ⅱ地区のSB126では215個体と、他の地区の同じ5期の竪穴住居址の土器の量を大きく上回る土器の量が出土している。また6期では、その傾向が顕著に見られ北部Ⅱ地区の地区のSB92が飛び抜けて多く、242個体を数えるのに対し、南部のSB48では63個体、SB29では91個体、北部のSB77では90個体とその出土量は少ない。さらに、それらの遺構出土の土器の中で食器の占める割合を比較してみるとSB92では85%、SB48では56%、SB29では50%と土器の構成にも差があり、SB92では食器の量が他の地区の竪穴住居址出土の土器より



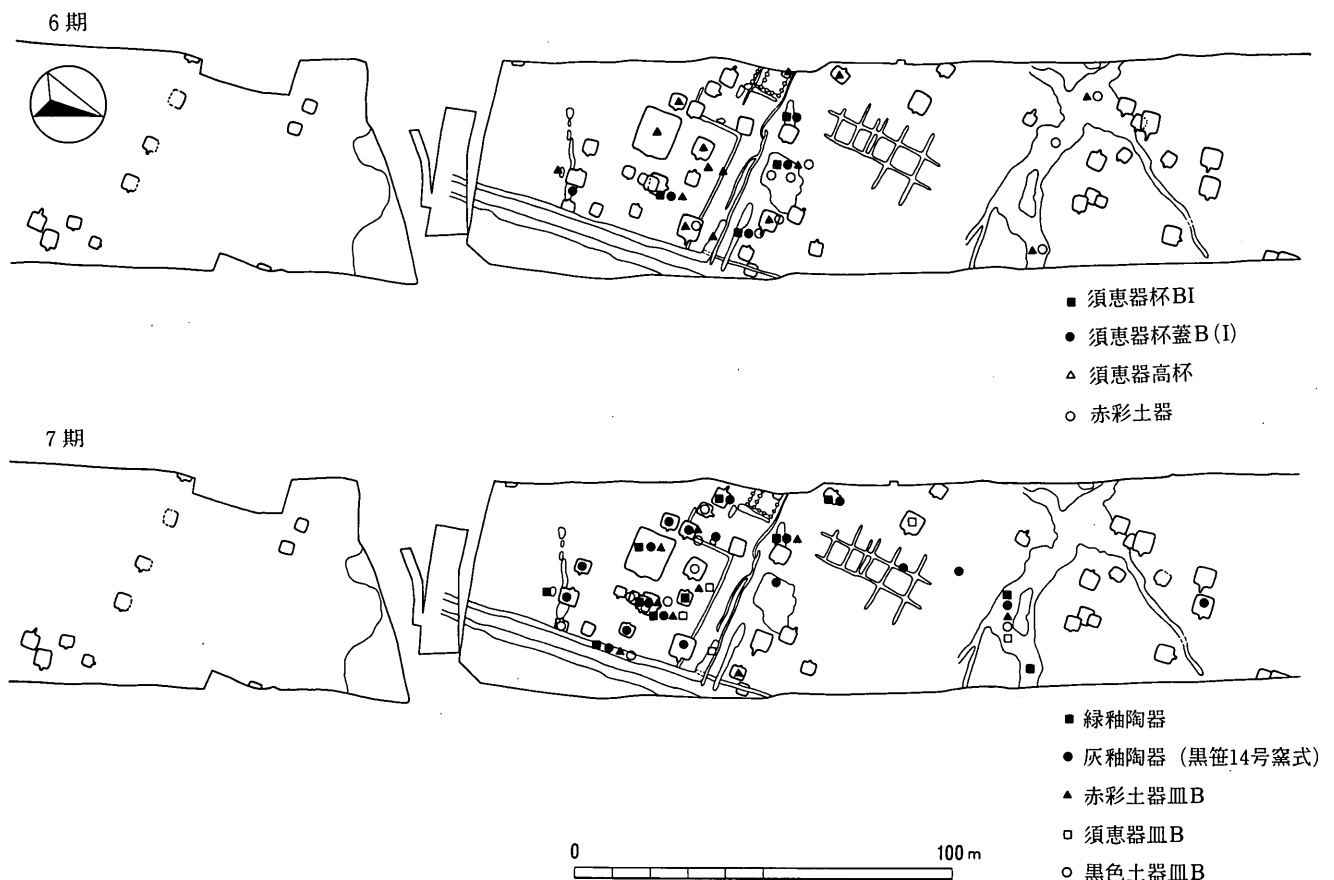
第153図 竪穴住居址出土土器の量と構成

多いことがわかる。次の7期になると北部I・II地区の特殊性はさらに際立ったものとなり、その中心的遺構の一つと見られるSB97では477個体の土器が数えられた。逆にその他の地区では7期には土器の量が減少する傾向にあり、南部地区のSB6・65、北部地区のSB105とも数十個体を数えるに過ぎなくなっている。

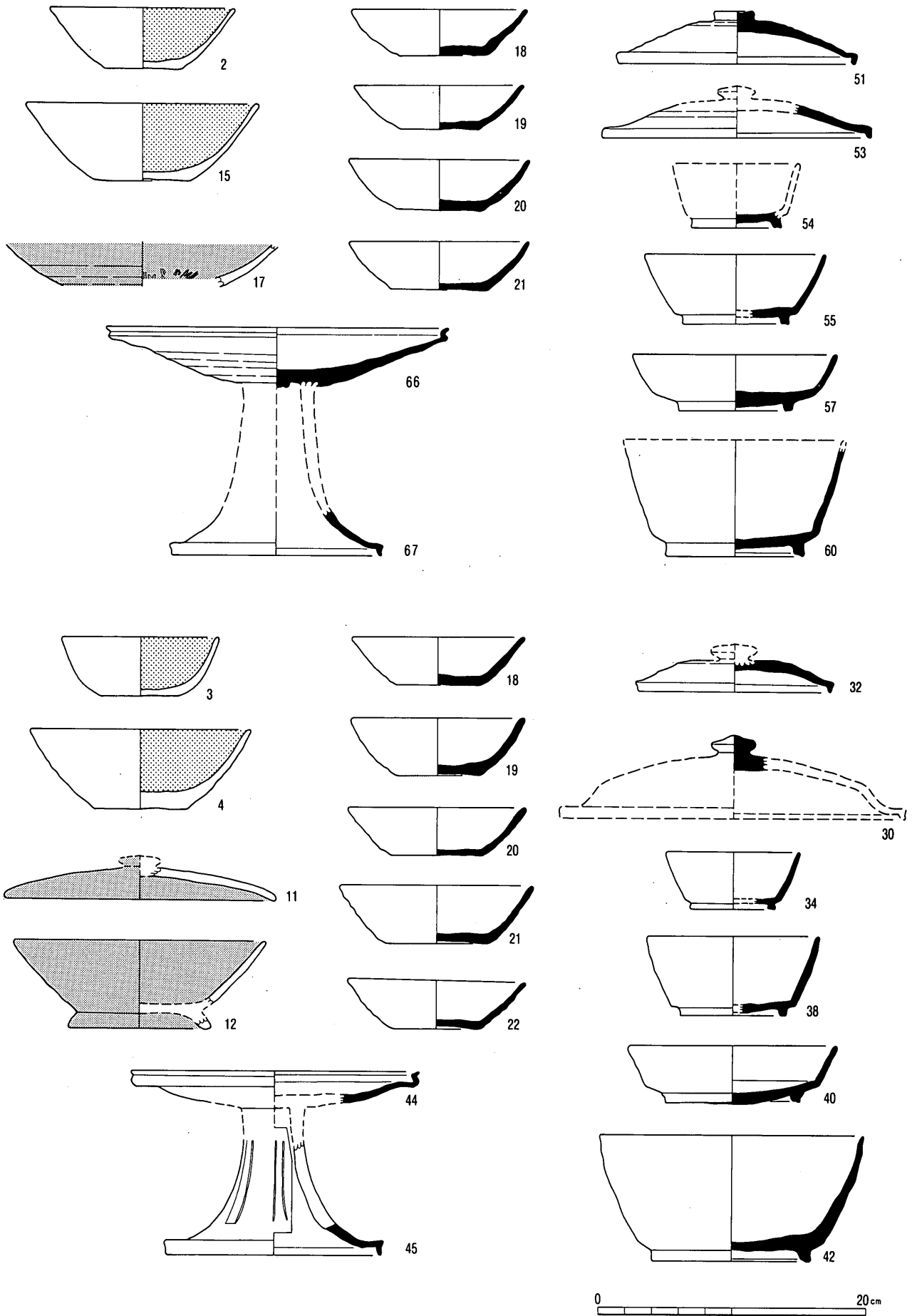
これらの竪穴住居址から出土した土器は、一部分はその遺構が機能していた時期に生活用具として使用されていたものもあるとは考えられるが、大部分は竪穴住居址の廃絶時・あるいは廃絶後に周辺に生活した人々によって廃棄されたものであると考えられる。従ってこのグラフによって示される時期・地区によって分けられた竪穴住居址出土の土器個体数の多寡は、竪穴住居址の質の差を物語るというよりはむしろ、それぞれの地区の土器の使用のされ方の差ということに置き換えて意味付けられるであろう。即ち、下神遺跡においては3・4期には南部地区・北部地区とも土器の量に差はなく、5期頃から北部I・II地区が土器を大量に消費する状況が生まれる。6期・7期とその傾向はさらに増幅され北部I地区が土器の消費では抜きん出た状況となる。そして、その消費の中心が食器であったことも指摘しておかなければならない。

(2) 北部I・II地区の6・7期の土器様相

次に下神遺跡の北部I・II区に見られる6・7期の土器様相について述べる。既に古代土器の概観の項で述べたように、6期から7期にかけての時期は、食器における大きな転機であるということが出来る。5期、食器のほとんどは須恵器によって占められていた。6期を経るなかで次第に黒色土器Aが増加し、食器のなかに占める須恵器の割合はしだいに低下する。また、2期以来の須恵器の代表的器種である杯Bは、減少をはじめ、その法量分化も不安定なものとなる。7期になると食器の主体は黒色土器Aに取って代われ、さらに、椀・皿Bという新しい器種の出現を見るとともに、灰釉陶器・緑釉陶器が搬入され始



第154図 6・7期の遺構と土器



第155図 北部I・II地区6期の食器（上：SB92 下：SX30 1区）

める。

下神遺跡では、6・7期に集落の最盛期を迎え、北部I地区に、区画溝と超大型の竪穴住居址を中心とする特殊な一郭を営むようになる。この一郭では、先に指摘したように土器の量が他の地区に比べ飛び抜けて多く、特に食器の量が多いことが指摘できた。加えて、6・7期の下神遺跡の他の地区はもちろん、同時期の松本平の他の遺跡では出土しない、いくつかの特徴ある器種、あるいはこの時期としては出土例の少ない緑釉陶器等が集中して出土している。この一郭でのみ見られる器種は、須恵器では杯B Iとそれに対応すると考えられる杯蓋B、大型で口縁部を折り返す高杯、皿B、赤彩土器の皿B・杯、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器碗・皿類などである。これらは第154図に示すような分布を示し、竪穴住居址のほか、溝・流路・自然の凹みなどに廃棄された状況で出土している。第147図で示した接合関係は、これらの土器がこの一郭のいずれかで使用され、それが廃棄されたことを物語っている。次にこれらの土器について述べることにする。

ア 須恵器杯B I・杯蓋B

須恵器杯Bは4期から6期にかけて一般の集落では、II・III・IV・V・VIの各法量の分化が安定して見られる。下神遺跡においても同様であるが、この地区においてのみ口径20cm前後・器高10cm前後の大型の杯B Iが見られる。これとセットをなす杯蓋Bが共伴することが多い。杯身・杯蓋とも肉厚の類似した胎土で焼成が甘く、一見して対応関係にあることがわかるものが多い。杯Bは体部の深い形態で、杯B IIIの相似形となっている。杯蓋Bはつまみが高く天井部で屈曲する形態をとるものも多く、金属器碗の蓋の形態を連想させる。SB92・SB143の床面・SX30など6期の遺構に多い。

イ 須恵器高杯

ラップ状に開く筒状の脚台に浅い体部を載せる形態である。体部は浅く直線的に伸び、口縁部を「S」字状に折り返す。体部内面の調整は雑なものも多く、なかには木葉痕の残るものもある。脚部は筒状の細身で裾部で強く開く形態をとり、三方向に長方形の透かしを穿つものが多い。また、透かしと透かしの間に二条の平行沈線を引くものも目立つ。法量は同一形態で口径20cm前後のもの、25cm前後のもの二者がある。口縁部の形態に「S」字が鋭く作り出されるものとやや崩れるものがあり、時間差かとも思われるが明瞭ではない。SB92・SB143の床面・SX30など6期の遺構からまとまった量が出土している。

ウ 須恵器皿B

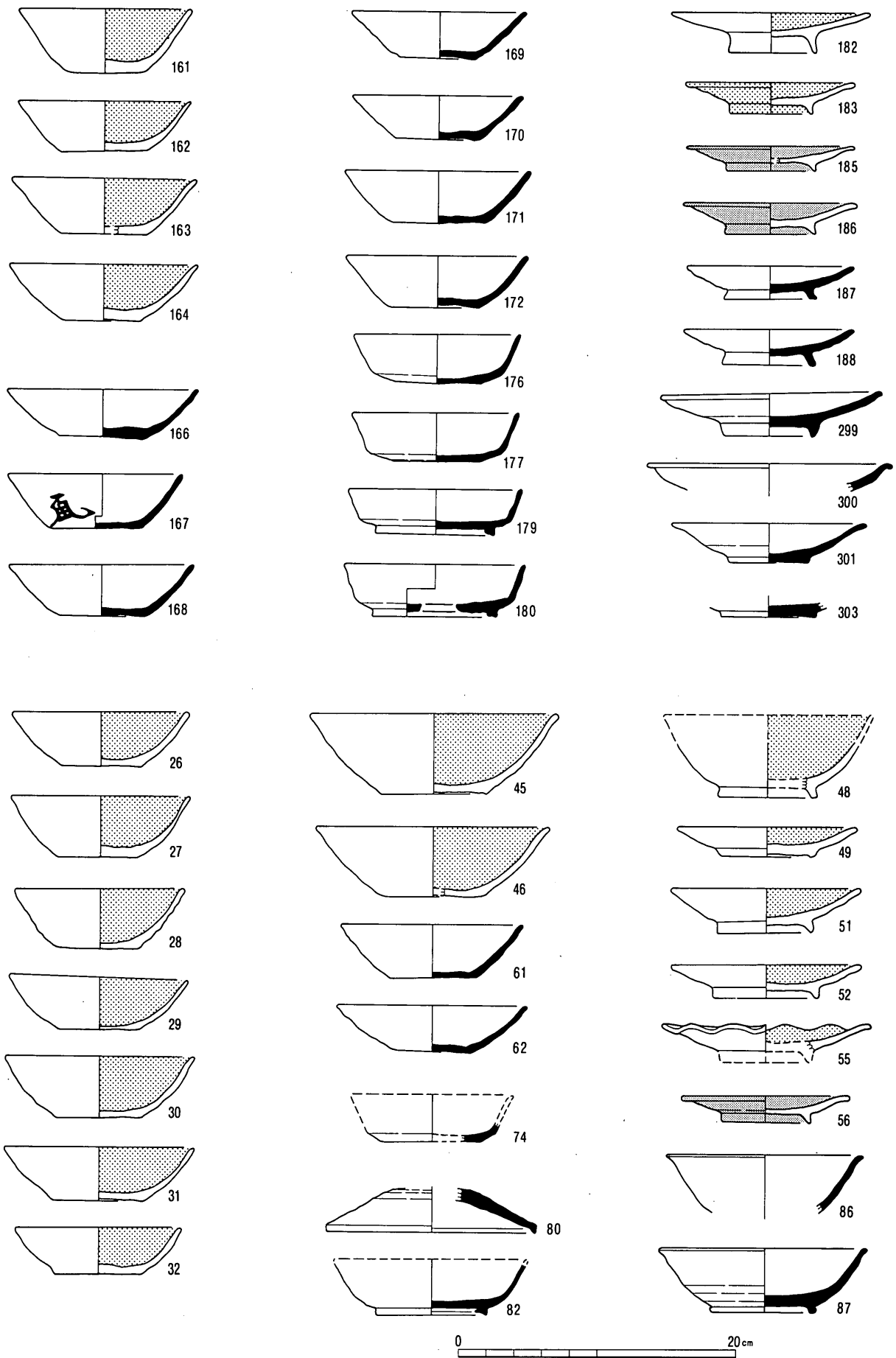
下神遺跡のこの地区のみに見られ、今回の調査では他地区からは出土していない。最もまとまっているのはSD108・3区2層の一括資料である。ここの資料で見ると、口径12.2~12.6cm・器高2.4~2.6cmと法量は非常にまとまりがよく、形態も浅い体部に高めの高台が付く。高台は断面矩形の須恵器杯Bの高台に近いものと、断面三角形の黒色土器の碗・皿の高台に類似した形態をとるもの二者があり、須恵器皿というこの地方では少ない器種の系譜を考える上で興味深い。SD108 3区2層・SD117・SB100・SB143上層など7期の遺構から出土している。

エ 赤彩土器皿B

須恵器皿Bと同様SD108 3区2層からまとまって出土している他、SB97・SB100・SB143上層・SD143など7期の遺構から出土している。口径12.2~12.6cm・器高1.8~2.2cmの法量で、底面を除いて全面をへら磨きし赤褐色の粘土で赤彩を全面に施している。口縁を外反気味に丸く納める形態、高台の断面三角形の形状など、黒色処理と赤彩の調整の最終段階の違いを除けば、黒色土器Bと同一形態・同一技法であり、「赤」と「黒」の色を意識した作り分けといえるであろう。

オ 赤彩土器杯

SX30でまとまった量の出土があったほか、SB92・148、SD108の1・2・4区・区画溝IIIなど6期の遺



第156図 北部Ⅰ・Ⅱ地区7期の食器（上：SD108 3区2層 下：SB97下層）

構から出土している。暗赤色を呈する赤彩と特徴的な胎土によってまとめられる一群の土器である。胎土は黄灰白色を呈し、きめの細かい水簸されたもので、焼成は甘く軟質となる。赤彩は器面全体にわたって行われるが、皿Bのように器表をヘラ磨きすることはなく、ロクロ調整の後、直接赤彩が行われている。赤彩には赤褐色の粘土が用いられていることが分析の結果判明した。口縁部から底部まで復元できるものがなく形態の全容を知るものはない。SX30では口径15.6cmと口径18.1cmの無台の杯と、口径20cmの有台の杯、つまみ付きの杯蓋が出土している。SB92のものは体部のみであるが大型で、鉢になると思われる。SB148では無台の杯と杯蓋がある。SD108のものは杯の体部と思われる。北陸地方に見られる赤彩土器との関連を予想させる資料である。

カ 緑釉陶器碗・皿

器種は皿と碗に限られる。SX30と遺構外出土の碗を除いて、高台は円盤状の切高台で、胎土は黄灰白色の軟質。底面を含めて全面に淡黄緑色の釉を薄く施釉している等の共通点をもつ。被熱を受け器面が荒れているものが多く、器面の調整は観察しにくいが一部に内面をヘラ磨きするものがあるが、体部外面のヘラ磨きはほとんど観察できない。また焼成の際の三叉トチンの使用も確認できない。これらの諸特徴は京都産(系)緑釉陶器とされており、貼り付け高台で、内外面をヘラ磨きするとされる尾張産(東海系)緑釉陶器は下神遺跡では認められない。

これらの緑釉陶器はいずれも7期の遺構から出土している。

キ 灰釉陶器碗・皿

灰釉陶器は碗・皿・段皿・三足盤などの食器のほか、長頸壺・短頸壺・小瓶・平瓶などの貯蔵具もある。碗・皿は大きく二者に分けられる。その一つは全体に厚手で、底部から体部にかけて外面を回転ヘラ削りあるいは回転ナデ調整し、底部に断面方形の角高台を付す。そして、内面はハケ塗りないし自然降灰の自然釉が認められ、焼成は三叉トチンを用いて行っている。胎土はやや粗く黒色の細粒を含むものである。他方は比較的薄手で体部外面を明瞭に回転ヘラ削りし、底部には断面三日月形の高台を付す。体部内面と外面にハケ塗りで施釉し、焼成はトチンを用いない直接の重ね焼きを行っている。胎土は概して細かい緻密な粘土を用い焼き上りは堅く灰白色を呈している。生産地の編年に照らせば、前者は尾張猿投窯の黒笹14号窯式、後者は東濃の光ヶ丘1号窯式にあたる。ここでは、黒笹14号窯式に比定できる灰釉陶器碗・皿の出土分布を示した。灰釉陶器は7期の遺構から出土している。

このほかに他の地区で見られないものとしては、黒色土器AではSB143・SD139から出土した蓋、SB97の口縁を波状にした皿B、黒色土器BではSB96・116・134・143・144・SD108-3区2層などにある皿B、須恵器ではSB97・SD108-3区2層などにある杯Cなどが注目される。

これらの食器の構成を6・7期の代表的な遺構で示したのが第155・156図である。SB92とSX30では須恵器の杯A・杯Bを主体に食器が構成され、ここに持ち込まれた特異な器種も須恵器の高杯と、杯Bの大型品という古い形態の器種である。それに比べて7期では碗・皿という全く新しい器種が登場し、さらに碗では緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器A、皿では緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・黒色土器A・黒色土器B・赤彩土器という異なった材質・技法で作分けられ、色彩的にも青(緑釉陶器)、白(灰釉陶器)、黒(黒色土器B)、朱(赤彩土器)というように同一器種を色で使い分けるといった状況が想像できる。この食器を材質(色)によって使い分けるといったことについては、伊野近富氏の研究(伊野 1982)がある。伊野氏は『「葉碗」「葉皿」考』のなかで、『延喜式』卷三十五大炊寮では位階により飯碗等の使用が規定されており、参議以上は朱漆碗、命婦三位以上は藁、五位以上は葉碗(灰釉陶器か緑釉陶器)、五位以上の命婦は陶碗(須恵器)に対応できるとし、さらに土碗は黒色土器A類に、鉢形は土師器碗に対応するという。このように当時の中央の貴族社会のなかでは、儀式・供宴のなかにおける土器の使用が材質に至るまで定められており、そのような食器使

用の規制が信濃国の下神遺跡のこの地区で行われていたとすれば、当時の都での供宴・儀式的あり様が材質を変えて地方の集落のなかの特殊な一郭に持ち込まれていたことを示したことになる。下神遺跡の北部I・II区が6～7期にかけて「草茂庄」の中心的な一郭を占めていたであろうことは、以上のような土器のあり様からも伺うことができるのである。

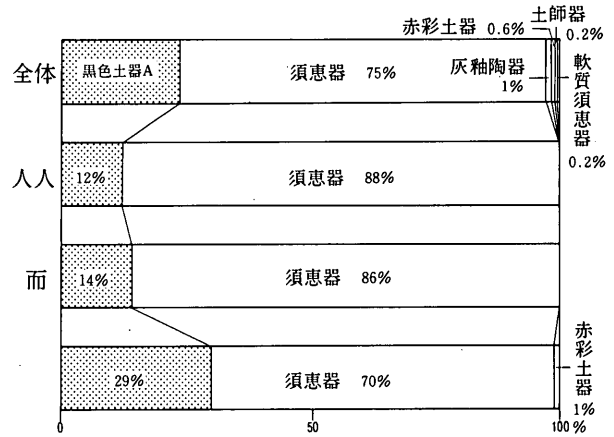
2 文字関係資料

今回の調査によって多量の文字関係資料を得ることができた。特に漆紙文書と500点近く出土した墨書土器は本遺跡の性格を理解するための多量の情報を与えてくれる。本項では墨書土器を中心として分析をしていくことにする。

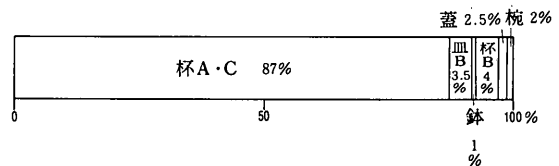
(1) 墨書される土器と墨書部位

本遺跡で墨書される土器には須恵器、黒色土器A、赤彩土器、灰釉陶器がある。第157図に示すように圧倒的に須恵器が多く全体の75%を、次いで黒色土器Aが23%を占め、赤彩土器、灰釉陶器は例外的な存在である。文字別にみても『甗』で黒色土器の比率が30%とやや高く、赤彩土器も含まれるが、『而』『人』は14%、12%と低い値しか示さない。金原 正氏の地域別にまとめたのを参考にすると松本平の他の遺跡では黒色土器が62.6%を占め、次いで須恵器、土師器、灰釉陶器の順となり、須恵器と黒色土器Aとが逆転している。比較的須恵器の比率の高い北信地方でも39%に留まる(長野県教委 1989)。7期で終末を迎える本遺跡では当然といえる。また墨書される器種でも杯Aが圧倒的な割合を占める。須恵器杯B、黒色土器皿が5%前後で、椀類に至っては1%である。若干時期の下る『甗』は器種構成も複雑になっている。器種構成の上からもある程度土器様相を反映しているといえる。しかしながらやはり須恵器の比率が高いようである。時期的様相の明らかな吉田川西遺跡と比較すると、墨書土器の須恵器が占める割合は5期(川西4期)90%、6期(川西5期)46%、7期(川西6期)8%となる。5期段階ではほぼ同様な状況であるが、6・7期段階でその組成に変化がみられる。特に7期段階では黒色土器の割合がが圧倒的となる。これは墨書土器が土器様相をそのまま反映するとすれば、本遺跡の墨書土器が他の遺跡よりも先行したか、あるいは墨書土器が選択的に墨書されたかである。そこで墨書される器種ごとの墨書率についてみることにする。

比較的墨書土器が集中して出土した住居址の器種ごとに墨書される割合を出したのが第32表である。これらの住居址は比較的長期間開口していた住居址で土器の廃棄坑としての性格をもっており、一括出土などの特殊な廃棄状態は示さない。5期段階のSB126では黒色土器杯A、須恵器杯A、杯Bに墨書が認められ、それぞれの比率は5%前後である。次の6期SB92では黒色土器、須恵器鉢の比率が高く、須恵器杯Aも28%

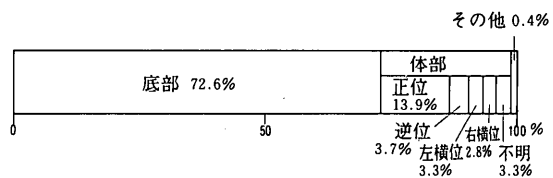


第157図 墨書土器の種類



第158図 墨書土器器種構成割合

比較的墨書土器が集中して出土した住居址の器種ごとに墨書される割合を出したのが第32表である。これらの住居址は比較的長期間開口していた住居址で土器の廃棄坑としての性格をもっており、一括出土などの特殊な廃棄状態は示さない。5期段階のSB126では黒色土器杯A、須恵器杯A、杯Bに墨書が認められ、それぞれの比率は5%前後である。次の6期SB92では黒色土器、須恵器鉢の比率が高く、須恵器杯Aも28%



第159図 墨書土器墨書位置割合

と高い値を示しているが、その他の器種では5%前後である。6期から7期にかけてのSB97・143では黒色土器にも墨書がなされるようになるが須恵器杯Aの値が10%前後を示すのに対して黒色土器の比率は5~7%と低くなる。特殊な器種を除けば各期を通して墨書率は5%前後であるのに対して、須恵器杯Aのみがその倍以上の比率を示す。墨書土器1個体で大きく左右される値であるが、須恵器杯Aがわずかに選択的に墨書されていることがわかる。

次に墨書部位についてみることにする(第159図)。墨書される部位は底部が72.6%、次いで体部の26%

%その他が1.4%である。底部に墨書されるものの比率の高い文字は『草茂』100%、『人』の94%などで、逆に低いものは『井』『中』『而』などでそれぞれ50%、40%、61%となる。体部に墨書されるものは正位に墨書されるものが圧倒的に多く68点、逆位のは18点である。横位のは25点で、右横位が16点、左横位が9点となる。複数箇所に墨書されるものは『甗』では111の体部に2カ所、389の底部と体部に行なわれるものがある。『足』では底部外面と底部内面に墨書される(310・357)。109は蓋であるがやはり内外面に墨書される。特定器種・文字において墨書される部位が固定されているが、基本的には底部に墨書されることが多い。

(2) 文字分類

単字句の文字は1字のみで意味を成すものと複数字句の省略形とがありその解釈をより困難にしている。本遺跡の複数字句のものはほとんどがその読みが不能のものである。解釈できたものは『草茂』『南殿』『小長』『仁通』『争主』『西戸舎』などで、これら複数字句の文字に関連する文字は『南』が1点出土したのみで「草」など省略と考えられる字句は出土していない。『南』自体も関連が認められるとは考えにくい。こ

SB92

種類	土師器	黒色土器						赤彩土器	須恵器						灰釉陶器		緑釉陶器
		杯C	蓋	杯A	皿	椀	鉢		皿	杯A	杯B	蓋	鉢	盤	高杯	椀	
個体数(A)	0	0	45	3	1	1	0	103	24	14	3	2	3	0	0	0	
墨書数(B)	0	0	0	0	0	1	0	29	1	1	1	0	0	0	0	0	
B÷A×100	0	0	0	0	0	100	0	28	3.8	7.1	33.3	0	0	0	0	0	

SB97

器種	土師器	黒色土器						赤彩土器	須恵器						灰釉陶器		緑釉陶器
		杯C	蓋	杯A	皿	椀	鉢		皿	杯A	杯B	蓋	鉢	盤	高杯	椀	
個体数(A)	0	0	126	16	0	7	3	107	21	39	1	0	1	10	4	1	
墨書数(B)	0	0	9	1	0	0	0	11	1	1	1	0	0	0	0	0	
B÷A×100	0	0	7.1	6.2	0	0	0	10.2	4.7	2.5	100	0	0	0	0	0	

SB143

種類	土師器	黒色土器						赤彩土器	須恵器						灰釉陶器		緑釉陶器
		杯C	蓋	杯A	皿	椀	鉢		皿	杯A	杯B	蓋	鉢	盤	高杯	椀	
個体数(A)	1	2	228	13	25	0	5	155	24	28	2	0	2	4	3	1	
墨書数(B)	0	1	13	0	0	0	1	15	1	2	0	0	0	0	0	0	
B÷A×100	0	50	5.7	0	0	0	20	9.6	4.3	7.1	0	0	0	0	0	0	

SB126

種類	土師器	黒色土器						赤彩土器	須恵器						灰釉陶器		緑釉陶器
		杯C	蓋	杯A	皿	椀	鉢		皿	杯A	杯B	蓋	鉢	盤	高杯	椀	
個体数(A)	4	0	19	0	0	0	0	76	25	30	1	0	0	4	0	0	
墨書数(B)	0	0	1	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	
B÷A×100	0	0	5.2	0	0	0	0	3.9	4.0	0	0	0	0	0	0	0	

第32表 墨書率一覧表

のことから単字句の場合はそれ自体で意味のある文字として使用されたと考えられる。文字分類を通して墨書土器の性格について考えることにする。

墨書土器は吉岡氏の分類に従うとその内容から1、建物名・施設名、2、地名、3、官職名・身分、4、人名、5、物品名、6、嘉字・呪字、7、数字・量を表わすもの、8、記号、9、その他(年紀・方位落書)のように分けることができる。

- 1：南殿(361・458)、西戸舎(103)、井(18・28・30・32・126・127・128・244・386)、家(366)、
- 2：草茂(50・226・227・234・270・287・330・350・412・415・416・419・422・429・433・436・438・440・442)
- 4：□□□真□(7)、争主(12)、小長(342)、仁通(442)、而(2・11・68・71・72・104・132・135・145・187・202・206・207・216・217・221・222・223・240・241・275・377・339・398・399・402・403・409・426・427・428・430・434・435・448・461・465・477・482・483・489)、足(109・141・143・310・311・357)
- 5：禾(89・121)、矢(474)
- 6：福(265)、満(8・405・468)、豊(248)、厷(12・15・52・54~66・68~70・74~78・84・86・88・90~93・95~102・105~108・110~112・114~120・122・125・133・134・137・147~150・152~181・184~186・192・196・197・200・203・205・209・210・214・215・231・235・237・238・242・249・252・257・258・263・271・274・276~282・285・286・288・290~292・294・296・298~302・304~309・312・313・315・317~322・325・326・328・331・333・335・341・343~345・347~349・351~353・355・356・359・360・362~364・373・374・378~385・387~390・392~394・395・396・405・406・408・409・411・413・417・418・420・421・423・425・431・437・441・443・445・452・453・456・457・459・462~464・469・473・476・479~481・484・487・490)
- 7：十(139・406)、大(273)、中(225・260・283・314・338)
- 8・9：南(124)、西(316)、継(47・48・146)、仲(22・123)、木(138・211)、力(19・358)、有(218)、宣(194)、道(21)、全(3・6)、秋(14・31)、メ(140・142・406)

建物・施設名称として4点を挙げたが『井』『家』などは広範に出土する墨書土器であり人名等にもつながるものでふさわしくないかも知れない。『南殿』は「政事要略」に「南殿の装束」のように表わされており、天皇が御す南面する中心的な建物を指しており、この場合も中心的な建物を指すと考えられる。また複数の建物の存在を示唆している。『西戸舎』は西戸の家といった意味であるか。人名の可能性もある。

地名と考えられるのは『草茂』であるが庄家を示す施設名の省略形とも考えられる。ただし、石川県横江庄遺跡『三宅』(松任市教委 1983)、藤江A遺跡『石田庄』(石川県教委 1969)、富山県じょうべのま遺跡『西庄』(入善町教委 1975)など庄家に共通して見られる「宅」「庄」は出土しておらず、施設名と考えられる文字も定型的な文字ではなく、庄家を示す語としてより地名として理解しておきたい。

人名としてあげたものも「□磨呂」のように明確なものはない。複数字句のもので可能性のあるものを挙げたのみである。7はフルネームであろうがはっきりと判読できない。『小長』は官職名である荘長への読み替えをしたいところであるが無理があり、やはり人名として理解したい。『而』は人名とは考えられないが他者との区別する言葉、所属を示す言葉として理解したい。『足』も人名の可能性もある。

物品名はほとんど出土していない。普通名詞のなかでそれらしいものを当てた。『禾』は「稲」を示す言葉として理解した。このほかに『矢』がある。

嘉字の類も少ない。『厷』は文字としては明確に読み取ることができるが読みは全く不能である。弘田柵跡(秋田県教委 1985)などから類似的な文字「厷」が見られ、則天文字の可能性を指摘しており、本字もこれに当たるかもしれない。17c前半代に比定される志野織部丸皿(黒根窯出土)に「厷」が見られ長期にわたって使われた文字であることがわかる。字体からすると末広がり文字であり、嘉字の仲間に入れてよいであろう。

数字、ものの大小を表わす言葉は比較的少ない。『大』『中』などがあるのみである。県内では富士見町足場遺跡『八十』（長野県教委 1974）、崩越遺跡『一万』（王滝村教委 1982）、吉田川西遺跡『万』など複数の遺構にまたがって出土する文字に数字が使われているが、本遺跡では出土していない。

その他の文字は方位『南』『西』が出土している。季節を表わす『秋』、そのほか『道』『継』『全』『宣』などは名前の一部と考えられる。このほかに記号とも取れる『メ』がある。

以上、大雑把な分類を試みたがその特徴をまとめると次のようになる。1、官職名は全く無い。2、建物・施設名は少なく庄家建物を示す墨書土器はなく、建物が未分化な状態を示している。ただし『南殿』が示すように複数の建物が存在した可能性がある。3、一般的傾向と同じように意味不明の語句で占められる。4、宮都などで見られる習書の類は全く見られない。集落出土の墨書が文字の形状よりも記号としての意味が強いことを表わしているのではないだろうか。以上、『草茂』などの地名、あるいは建物などを示す語句がわずかに認められ一般集落出土以上の内容をもつが、主体となるものは量の差こそあれ一般集落の墨書土器とほとんど差異を見出すことはできない。

(3) 墨書土器の変遷

県内出土の墨書土器で最古のものは山形村殿村古墳(山形村教委 1987)出土の須恵器杯Bに記されたものである。『錦服□』の文字が読み取れる。1期から2期にかけての時期、8世紀の前半と考えられる。『錦服□』は人名と考えられ、郷名としても存在するが、比定地とは離れている。これに次ぐのが本遺跡出土の『□□□真□』(付編2参照)である。これは判読不明の文字が多いが人名と考えられ、地名と人名が結合している可能性がある。伊場遺跡の出土木簡の人名の書式によると、□□郷□□里戸主+人名、□□郷+人名の書式が考えられる。郷一里となるのは715~738年までで、その後には郷のみとなる。絶対年代を考えると重要な資料である。土器型式でいくと前者の可能性が高く、郷名が省略されている可能性も考えられる。木簡と墨書ではやや性格が異なるが律令的な文書様式をもつ可能性がある墨書土器である。

8世紀後半段階(3・4期)の墨書土器は認められていない(SB69出土のものがあるが遺構の時期自体に問題があるため外した)。

8世紀末から9世紀前半にかけて(5期)では墨書の出土量も増加し、単字句の文字が増加する。ここに前代までと大きな変化を認めることができる。5期の文字としては『宗か』『廣か・人』(SB28)、『井』(SB53・72)『人』『人人』(SB72・74・78)『秋』(SB72)『継』(SB90・132か)『メ』『足』(SB126)『力』(SB53)『巾』(SB58)『厷』(SB149)『茜』(SB67)が挙げられる。『厷』については混入の可能性もある。複数の文字が記されるのはSB28出土の須恵器杯蓋とSB151出土の黒色土器杯Aに記されたものだけである。また、『人人』のように同一文字を重ねて記すものが表われるようになる。いくつかの種類があり習書とは考えられず、人を強調するためのものと考えられ単字句の仲間に入れて差し支えないであろう。複数の遺構にまたがって出土するのは『人』のみで単発的な文字によって占められている。

9世紀前半から後半(6・7期)は前代の状況が継続し、量的にさらに飛躍する。6期の主な墨書土器に『厷』(SB12・15・70・91・92・104・143)『而』(SB5・33・91・92・148)『草茂』(SB91)があり、このほかに『全』(SB20)『満』(SB26)『井』(SB106)『道』(SB64)『人』『人人』(SB70・77・108)『南』(SB104)『木』(SB122)『争主』(SB40)がある。このほかに『南殿』『仁通』『小長』もこの段階に伴う。6期段階での『草茂』の出土は確実にこの段階では「草茂庄」の成立を意味しており、これ以前に「草茂庄」の成立期が求められる。『南殿』『仁通』『小長』などの複数字句の墨書も増え内容的に豊かになる。また、複数の遺構にまたがって出土する墨書土器も、『厷』を始めとして『而』『草茂』などが増加する。特に『厷』と『而』は同様な分布を示し複数の文字によって結び付いていることを示している。

7期の代表的な文字として『厷』(SB52・96・97・99・100・102・115・116・135・144・152)があり、『而』(SB97・

115・131)『全』(SB6)『秋』(SB51)『字』(SB52)『人』(SB76)『禾』(SB96・100)などが伴う。SB97からは『西戸舎』が、SB89からも複数字句のものが出土している。

(4) 墨書土器の分布 (第160図)

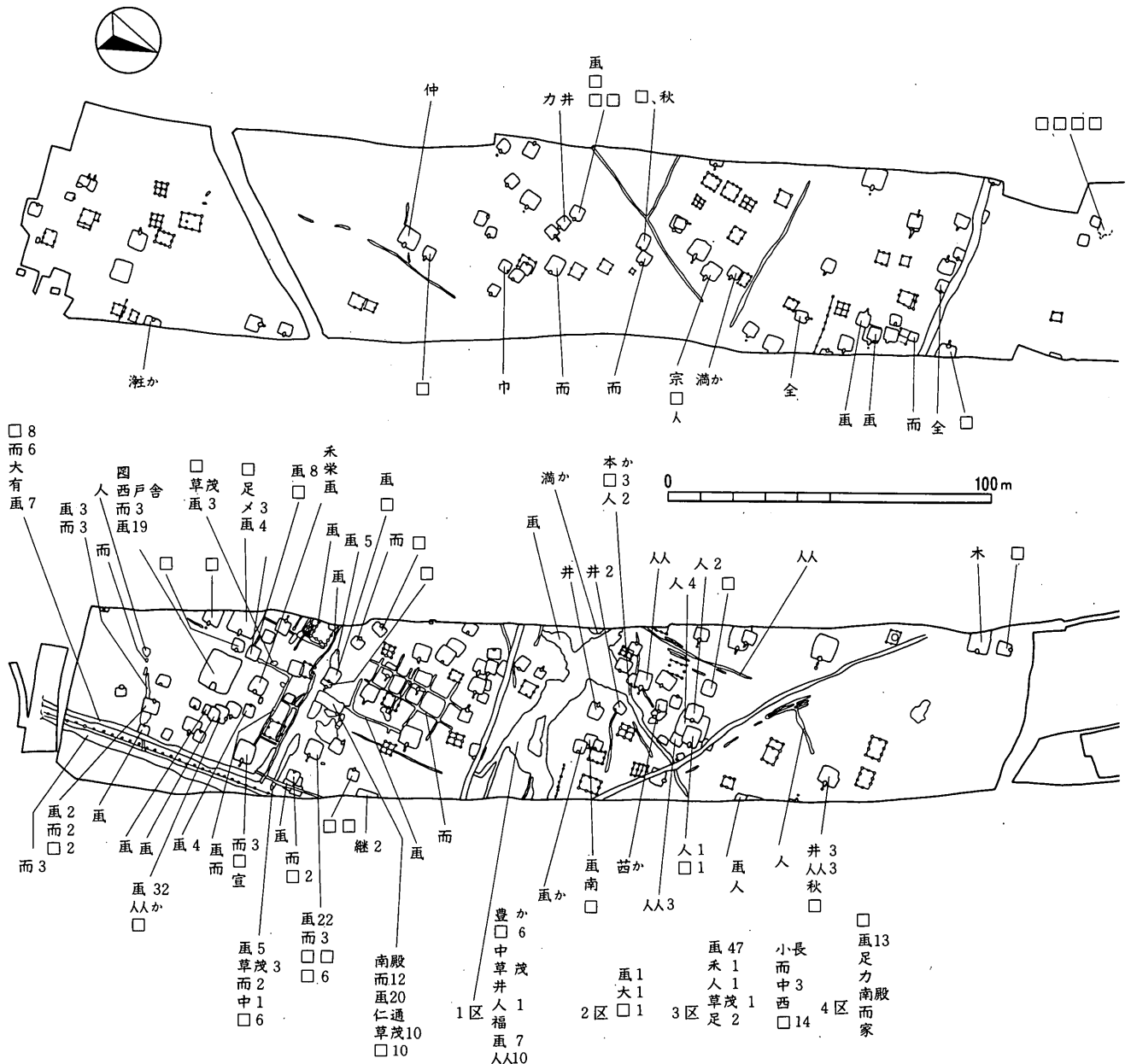
墨書土器は調査区のほぼ全域に分布する。複数遺構にまたがって出土した文字を中心としてその分布についてみることにする。

ア 『甬』(第161図)

南部地区、北部地区、さらには松本市調査区とかなり広範囲に分布し、本遺跡のメルクマールとなる墨書であり、出土量も一番多い。

南部地区において出土している遺構は住居址のみで3軒と少なく、点数もそれぞれ1点ずつである。この墨書が出土しているSB12・15は南側に柵址を伴い住居址が集中しある程度の区画をもつ部分である。この部分は東側にさらに遺構が延びており、全容はつかめていないが南部地区における中核的な部分といえる。このほかさらに南のSB52から出土している。

北部地区についてはI・II・III地区から出土しているがI地区に集中しており、III地区についてはSD108



第160図 墨書土器分布図

の北側にわずかに分布するのみである。本遺跡最大の住居址であるSB97を中心としその周辺の住居址、それを取りまく区画溝などから多量に出土している。II地区ではI地区に隣接するSB92やSX30などから出土しておりその量は多い。SD108を境に出土数は少なくなることからSD108までがSB97の生活領域と考えられ、これは遺物の遺構間接合からも検証される。SD108からは1区から4区まで多量に検出されているが特に3区に集中している。

大雑把に『甗』の分布状況を見たが、遺構間の関係を3点指摘できる。第1点目はSB97とその周囲を取りまく区画内の小型の住居址との関係である。SB97から出土したものは床面出土(98・101・107・110・111)も認められるがほとんどは覆土出土のものである。また、周囲の住居址から出土したのもSB99(115)を除いて覆土からの出土である。これはほぼ同時に開口していたことを示し、SB97と同時存在を示すと考えられる。覆土からの出土であり直ちに周辺の住居址に帰属すると考えることは危険であるが、竪穴住居址に帰属するものも含まれるであろう。第2点はSB92・143などのように住居址には全く帰属しないものである。この関係には溝址(区画溝・SD108・137・SX30)など住居址以外から出土しているものも入る。これらの遺構は多量の土器を含み、出土土器の構成が食器、貯蔵具によって占められるという特徴をもつ。墨書土器も単なる廃棄物としてしか意味を持たない。ただし、竪穴住居址出土以外の遺構は何らかの形で水と関係しており注意を要する。第3点としてかなり離れて出土しているSB12・15・52、松本市調査分の住居址との関係である。『甗』はSB97が分布の上で中心に位置することは明らかでSB97と何らかの関係を想定することができる。SB97からの距離は南部地区のSB15まで170m、SB52まで270m、北部地区のSD108まで100m弱である。松本市の調査区のSKKS25号住居址まで175m、SKS9号住居址まで130mとなる。SB97との関係は第1の関係よりは希薄な関係といえる。

次に同一筆跡の文字の分布を見ることにする。同一筆跡の検討は第3章第2節2で行っておりそれを参照されたい。

その分布を見ると同一遺構内において見られる場合が多い。SD108出土の313・319、SB143出土の155・163・170・175・178などがある。複数の遺構にまたがるものとしてSD108出土の308・309・335～337とSB143出土の166、SB135出土の147とSD108出土の305、SB143出土の185と区画溝出土の242、SD108出土の345などがある。複数遺構にまたがるものは遺構間接合に見られた関係とほぼ同様で、遺物の廃棄関係を示す。つまり、多数の遺物が出土するという共通性を持ち土器の廃棄場所と思われる場所に捨てられているのである。これは墨書土器の機能を考えるうえで重要な問題を提起しているといえる。

イ 『而』(第161図)

『甗』の分布と重なるが出土量、範囲ともに縮小する。

南部地区ではSB5・33・55の3軒の竪穴住居址から1点ずつが確認されているが特別な出土状況は認められない。

北部地区においては『甗』の分布の状況SB97を中心としその周囲に広がる状況と共通するが出土量、範囲ともに縮小する。特にSD108との関係は薄く出土量も非常に少ない。

同一筆跡の分布を見るとSB92・97・区画溝・溝址群III・SK534・SX30と区画溝・SX30とSB115・SD117・SB55の3例が認められる。またSX30内でも1例認められる。同一筆跡の文字が広く分布するという特徴がある。この点は『甗』とは異なりより集中的に管理されていたのであろう。また、SB55とSD117のようにかなり離れて認められる場合もある。

ウ 『人』の分布

『人』『人人』の分布は今まで見た『甗』『而』とは全く別の分布状況を示す。南部地区には全く分布せず北部地区でも1点を除きIII地区に限定され、SB78を中心とした分布状況を示している。SB78は周囲に礎

石をもつ非常に大型の住居址である。SB72の遺物出土状況は覆土から多量に出土していることからゴミ捨て穴の様相を示しており、SB78から捨てられた可能性がある。SD108からも比較的多く出土しているがその分布は1区のみ限定される。『厷』の出土状況と合するとSD108が地区により墨書土器を廃棄する集団がある程度限定されていたことをうかがわせる。

エ 『草茂』の分布

南部地区には全く分布せず、北部地区においても限定的に分布する。『而』の分布状況に近いがさらに少ない。出土している遺構は全て覆土からで遺構に付くものはない。拠点となる遺構がないのも大きな特徴といえる。『厷』『而』の分布、特に『而』の墨書と時期的にも一致しSB97を中心として廃棄されたことが推察される。竪穴住居址以外の出土が多く、比較的まとまった出土状況である。

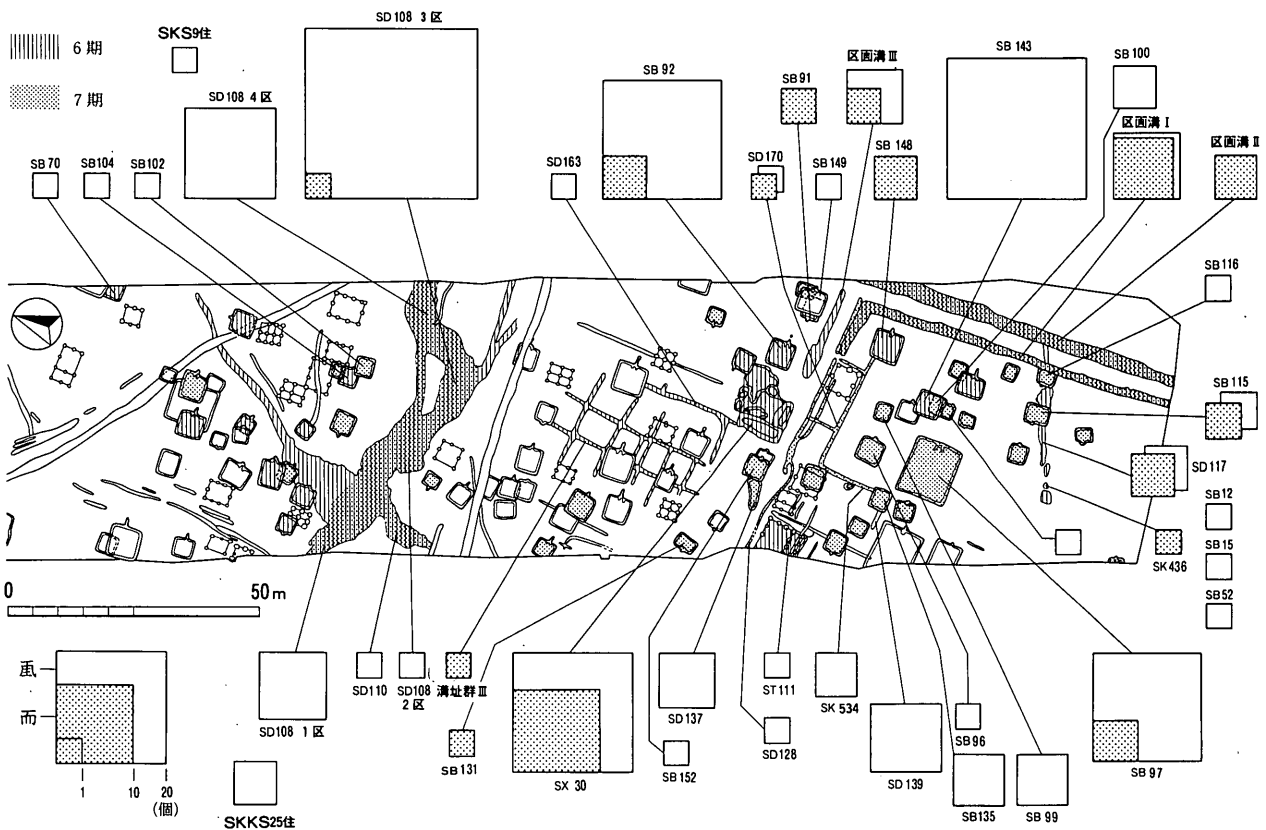
オ その他の墨書土器の分布

南部地区では広範囲に分布が広がっているが単独出土する例が多く、同一字句が複数出土している遺構はない。また、同一住居址からの複数の出土もSB28・52のみで非常に少ない。

北部地区では『厷』『而』などが圧倒的な量を占めその他の字句は少なく、5期の住居址を中心に分布している。また、SD108・SX30からは『厷』『而』のほかにバラエティーに富んだ文字の墨書土器が出土している。

(5) 墨書土器と硯(第162図)

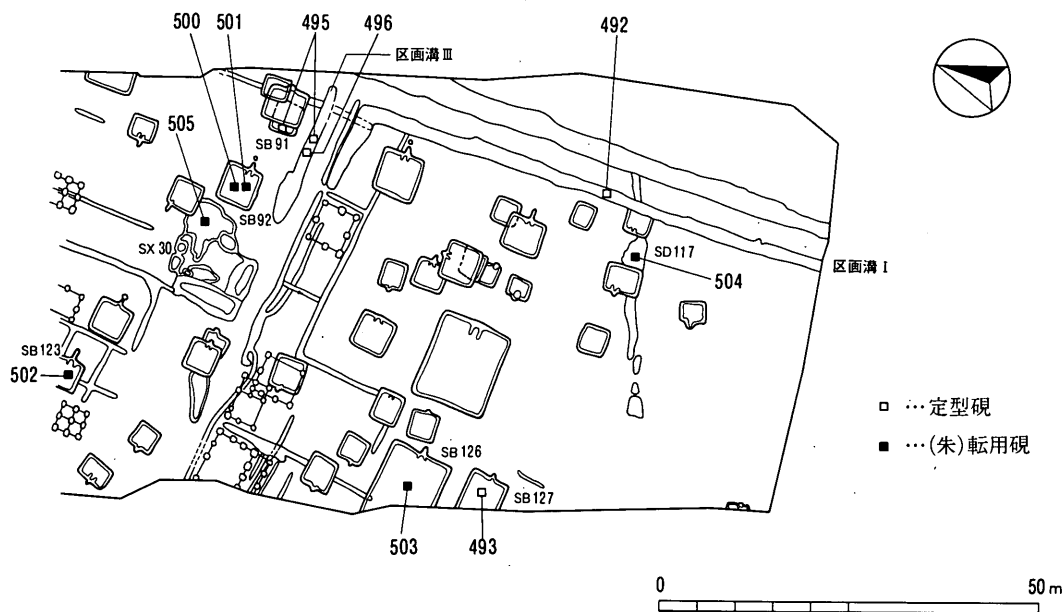
第3章で述べたように、円面硯6点、転用硯7点(硯2点、朱墨硯6点、墨痕1点)が出土している。墨書土器と硯の両者が出土している遺構はSB91(円面硯)、SB92(転用硯・朱墨硯)、SB127(円面硯)、SB126(朱墨硯)である。これら硯の分布は498・499を除き北部I地区及びその隣接地区に限定され、時期的には6期に集中する。6期は墨書土器が増加する時期であり、『厷』『而』など集落を象徴する墨書土器が出現する時期に当



第161図 墨書土器分布図(北部地区)

たる。墨書土器と硯の相関関係は本遺跡内において墨書がなされたことを意味し、墨書土器も6・7期段階においては区画内から一元的に供給された可能性が考えられる。これは『甌』の広範な分布や集落の動きからも肯首できるであろう。

また定型硯・朱墨硯の出土、特に北部I地区への集中は土器への墨書を示すだけでなく、庄園管理事務の一端を示すものと考えられる。



第162図 陶硯類分布図

(6) まとめ

本遺跡から出土した墨書土器の検討をいくつかの面から行なってきたが、その性格については依然不明といわざるをえない。しかし、墨書土器の出土状況(SB92・143)を見るかぎり墨書されない土器と同様な出土状態を示しており、少なくとも廃棄時には墨書されない土器と同様な扱いであったと考えられる。また、500の転用硯は墨書土器67と同一個体であり、墨書された食器としての機能を停止した後、朱墨硯に転用されたことがわかる。墨書される土器が食器に限定されること、墨書される割合はほぼ1割前後で一定していること、同一焼成の土器に同一の書き手によってあたかも入手時に書かれたようなものが存在すること、墨書位置も底部が多いことなどから、単字句の文字は管理記号としての側面が強いものと考えて差し支えないであろう。しかも、漢字を掌握した有力者は集落の象徴としての文字に独自の文字の選択や造字をおこなったことが予想され、『甌』もそのような理由で選ばれたものと考えられる。

一方、溝などからの出土も多く、SD108・SK534・SX30の一部においては完形の状態で一括出土しており、墨書土器の出土が多い地区も見られる。水に関連した遺構からの一括的な出土も認められる。向坂氏の設定したIVb類型(向坂 1985)に近い状況である。ただし墨書土器だけが出土したとはいえ基本的には墨書されない土器と何ら変わる点は認められない。また、記される文字も竪穴住居址等から出土したものと何等変化はなく、呪符等を記したのものもない。同一の書き手と判断してよい墨書土器がSD108と別の竪穴住居址から出土していることも河川出土の単字句の墨書土器に祭祀的性格を付与し切れない理由の一つである。ただし、出土土器の構成が竪穴住居址出土の構成と異なり煮炊具を含まない点は土器の投棄自体にそのような性格が認められるかもしれない。事実、河川や井戸からの大量出土の類例が増えている。これらは土器消費の在り方からの検討が必要になるであろう。

以上、下神遺跡における墨書土器は管理的な側面が強いことを明らかにすることができたと考える。最後に墨書土器の変化をみてまとめたい。

2期では『□□□真□』の墨書土器は郷名を含む人名ということから集落内を対象としたというよりもむしろ集落外を対象としたものであろう。あるいは集落外から持ち込まれたものとも考えられる。これに対して5期以降になると『厶』『而』が示すように抽象的な文字へ変容し、集落内部においてのみ機能するような集落内を対象とした文字へ転化してしまう。このような変化から律令的な文書主義の反映である墨書土器により具体的な支配関係の変化をみる事が可能であろう。個別的な支配から集落の有力者を介した支配へと変化したことが予想される。つまり、集落の有力者層の成長という現象のなかで墨書土器も変容していったと考えられる。本遺跡の墨書土器も4期から5期への変化はまさにこの状況の変化として捉えてよいであろう。5期から6・7期への変化は集落の有力者の成長を反映した変化として捉えられ、SB97の支配力を示すものであろう。

3 金属製品

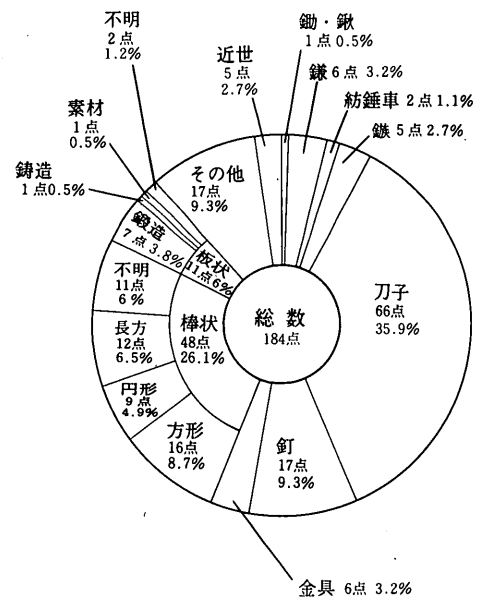
(1) 鉄製品

第163図に示したように、器種別の割合をみると加工具である刀子が圧倒的に多く、農具類である鎌・鋤・鋤先、繊維生産に関する苧引鉄・紡錘車の比率は極めて低い。また武器・武具類も非常に少ない。建具類は若干馬具等を含んでいると考えられるが、割合からすると低い値であるがその存在は注目できる。刀子を工具類としたがあらゆる用途—木工具・調理具・武器・文房具など—が想定でき40%以上を占めるのも肯首できる。これに対して、農作業に直接関係する鎌・鋤・鋤の出土率は低い。また布生産に係る紡錘車は棒状品として分類したもののなかにも若干含まれる可能性があるが、その比率も低い。鉄製紡錘車を補填するものとして土製、石製のものがあるが、これらを加えても、非常に低い値しか示さない。

時期別にみると、遺構の増加に対応するように時期が下るほどその出土量は増加する。特に6期になると量、器種ともに増加し、大きな画期が認められる。出土率(鉄製品出土住居址数÷住居址数)でみると5期21%、6期40%、7期44%となり、6期において倍増している。保有指数(出土点数÷全住居址数)でみると5期が0.2、6期1.1、7期1.0とやはり同様な結果を得ることができる。2～4期については出土数が少なく安定した数値を得ることができないので保留することにする。鉄製品の増加がSB97・区画の成立期に当たることは注目される。

出土量の多い刀子を軸に鉄製品の出土状況についてみることにする。鉄製品の分布は北部地区に厚く、南部地区に薄い分布状況を示す。また北地区においては大型竪穴住居址とその周辺に分布する特徴が見られる。

まず南部地区からみることにする。南部I地区では全く出土しておらず、II地区南では5期1軒、6期2軒、7期2軒から出土している。その他の鉄製品としては鑿・苧引鉄などが出土しているが、特定の住居址に集中することはない。II地区の南側部分は土器の出土量が非常に少ない地区であるのに対して鉄製品の出土は比較的多いといえる。II地区の北側部分についてはSB29とSB42から出土が見られるがSB29に集中しており、その種類も豊富である。南部III地区では点数も少なく5期のSB17・6期SB12・7期のSB2・6に見られるのみである。そ



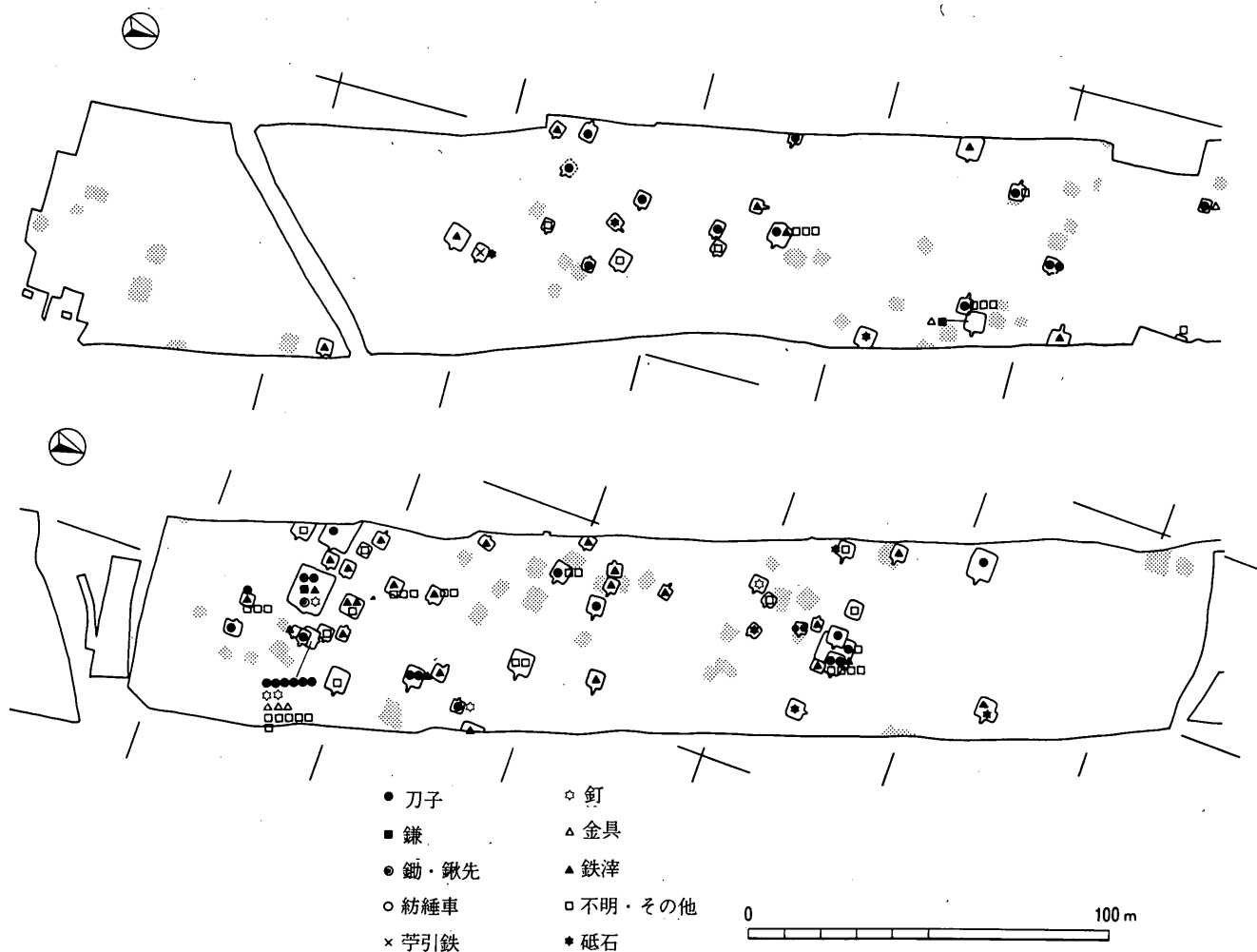
第163図 鉄製品構成割合

他の器種もSB1・11・12・17に見られるのみである。鎌の可能性のある鉄製品が柵址を伴う一郭にみられる。

北部地区に移ると、I地区ではSB97を中心としてほとんどの住居址で鉄製品の出土が見られる。複数の器種を出す住居址もSB96・97・114・135・136・143などがある。鉄製品の出土量が6・7期に増加することと関連があるが、他の地区を圧倒する量である。特にここで注目されるのは釘及び金具類の集中である。SB143出土の鍵状製品や金具類、釘の集中は区画内における建物構造にかかわるものとして注目される。SB143の鍵状製品と近似するものは神奈川県三ツ俣遺跡(神奈川県教委 1986)の遺構外遺物に見られる。正倉院に現存する鐮子(正倉院事務局 1976)を参考とすると牡金具、牝金具、匙の3点の金具からなり、今回の出土のものは匙部分の可能性が高い。県内では伊那市山本田代遺跡(長野県教委 1974)1号住居址で牡金具が出土しているが、匙部分が確認されたのは今回が初めてとなろう。正倉院のものは箱、櫃類に付いていたことが推定されており、本遺跡出土のものが直接建物と結び付くかはっきりしないが、いずれにしても貴重品を保管する建物が存在したことが予想される。

北部II地区ではSB89・129から複数の出土がある。SB85からは鉄鎌が出土している。北部I地区に接しており釘などは他地区から廃棄されたものであろう。北部III地区についてはSB36・76・77・78から出土しており器種、点数ともに少ないが中核的な住居址に分布する傾向がある。

以上、鉄製品の分布から読み取ることのできるのは、1、刀子はほぼ全域から出土するが北部I地区に多い。2、土器の出土量に比例した出土量を示す。3、北部I地区に特殊品が集中していることである。



第164図 鉄製品出土住居址分布図

SB143・136のように出土点数の多い住居址は土器量も多くなっている。このことは刀子などの廃棄のされ方が土器と同様であったことを示している。一方鉄製農具のように土坑に埋納されるものなどは刀子類とは全く違う廃棄の状況を示している。北部I地区の鉄製品は量・質の点で他地区を圧倒しており、他の遺物同様優位性をもっており、区画内部の指導性を示すと考えられる。

(2) 銅製品・銭貨

ア 銅製品

銅製品の出土は北部I地区に集中しているが、銚帯のみ北部III地区(SD109)と南部III地区(SB25)から出土している。銭貨も同様な分布を示している。北部I地区から出土しているのは容器と考えられる不明品で分布のあり方に違いを見せている。

銚帯はいずれも巡方であるが、その規格に2種類がある。SB25出土のものがやや大きく3.1×2.6cmの長方形を呈し、SD109出土のものがやや小さく2.6×2.5cmの方形であるが、幅においてはほぼ2.5~2.6cmと共通した規格であり、ほぼ同一の官位相当の銚帯であったと考えられる。SKMT6号住居址出土のものも同様な規格である。ただしSD109出土のものは裏金具に鍍金の痕跡が観察されるが、表面は漆塗りの痕跡が認められ金銀装腰帯とはならないであろう。このほか石製の丸柄が出土している。単品の出土ではあるがこれら銚帯の出土は漆紙とともに官衙との関連を示すもので注目される。また、墨書土器などあらゆるものが北部I地区を中心とした分布を示すのに対して銚帯のみが分布を異にするのも注目される。SD109の周辺にはSB78の大型住居址があり、また、SB25についてもその周辺には柵址を伴う区画が存在し、これら集団の性格および自立性を示すものであろう。

次に銅製の容器である。出土地点は区画溝出土を除いてSB93西の土坑集中個所にまとまる。これらはやや厚手のものでその形態に共通性があり、同一個体の可能性も考えられる。また被熱により表面が荒れているなどの共通性が認められる。区画溝I出土のものはかなり薄手である。これら佐波理碗がどのように使用されたのかは明らかにすることができないが、土器の項で分析したように律令的な食器の規制が行なわれていたことが明らかになっており、これらの食器の上位に位置付けられたのであろう。

イ 銭貨

古代遺構出土の銭貨はすべて皇朝十二銭で11点出土しているが、いずれも「萬年通寶」「神功開寶」である。そのうちの9点はSK490出土の一括品である。皇朝十二銭は県内において管見にふれただけでも20点の出土があるが(註1)、銭貨の種類は和同開珎が半数を占めている。これは流通期間の長さなどによるものと考えられる。また複数の銅銭が出土した遺跡は茅野市乞食塚古墳、飯田市恒川遺跡、御代田町根岸遺跡例だけである。乞食塚古墳からは和同開珎4点、神功開寶1点が出土している。発掘資料でないのはつき

註1 県内出土皇朝十二銭一覧表

番号	種類	所在地	遺跡名	遺構名	文献	番号	種類	所在地	遺跡名	遺構名	文献
1	和同開珎	更埴市	生仁		1988 長野県史	11	萬年通寶?	御代田町	十二	H-28	1988 十二遺跡
2	和同開珎	更埴市	生仁		1988 長野県史	12	神功開寶	御代田町	野火付	H-13	1985 野火付遺跡
3	和同開珎	明科町	宮本		1984 明科町史	13	神功開寶	茅野市	乞食塚古墳		1986 茅野市史
4	和同開珎	岡谷市	一の釜		1988 長野県史	14	隆平永寶	岡谷市	金山東		1988 長野県史
5	和同開珎	茅野市	乞食塚古墳		1986 茅野市史	15	隆平永寶	御代田町	根岸	H-18	1989 根岸遺跡
6	和同開珎	茅野市	乞食塚古墳		1986 茅野市史	16	富寿神寶	飯田市	恒川		1988 長野県史
7	和同開珎	茅野市	乞食塚古墳		1986 茅野市史	17	富寿神寶	松本市	三間沢左岸	SB16	1988 三間沢左岸遺跡I
8	和同開珎	茅野市	乞食塚古墳		1986 茅野市史	18	富寿神寶	塩尻市	吉田川西	SB159	1989 吉田川西遺跡
9	和同開珎	飯田市	恒川		1988 長野県史	19	饒益通寶	御代田町	根岸	H-13	1989 根岸遺跡
10	和同開珎	佐久市	前田	H-152	1989 根岸遺跡	20	貞観永寶	飯田市	猿小場		1988 長野県史

りしたことは不明であるが追葬による一括出土と考えてよい資料であろう。この資料と岡谷市金山東遺跡の火葬墓出土の隆平永寶の他は堅穴住居址などからの単発的な出土である。

県内の例と比べると9点が一括出土したSK490例(第88図)は特異な出土例といわざるをえない。SK490は小さな土坑であり、埋納された土器等もなく、乞食塚古墳のような墓址の可能性はない。また、出土状況から偶然遺棄された可能性もない。これらのことから墓址以外の意図的な埋納であったことがわかる。ここで浮かぶのが鎮壇具、あるいは地鎮具としての錢貨の性格である。錢貨を基壇や掘立柱建物址に埋納する例は畿内を中心としてみられる(森・松田 1984)。森・松田氏の集成をもとにみると、本例に近いのは平城京左京三条二坊三坪SX2982(和同開珎2枚)、東京都多摩蘭坂遺跡(和同開珎5枚、萬年通寶1枚)、和歌山県吉田遺跡(萬年通寶1枚、神功開寶2枚)、岡田遺跡(和同開珎5枚?)などがある。多摩蘭坂遺跡例は報告では径1mの土坑から出土しことが推定されており火葬墓としており、森氏と見解を異にしている。これらの遺構はいずれも小型の土坑に蓋を伴う須恵器杯B、土師器杯などの内部に錢貨を埋納している。出土状況も建物の内部や掘り方からではなくSK490と共通性が認められる。このほか岐阜県美濃不破関(岐阜県教委 1975)では土屋状遺構の版築層から出土した土師器小型甕内部に和同開珎3枚が埋納されている。埋納される錢貨の枚数は2・3枚のものが多い。基本的には小型の土器に埋納物をいれ、小型の土坑に埋納するということが一般的であったと考えられる。本址と比較すると容器に埋納物を入れる点が大きく異なるがその他の点では共通しており、「地鎮め」の遺構と捉えてよいであろう。

SK490はSB126のすぐ北に位置しており、上屋構造を考えるとSB126の一部とみなすことができ、SB126との関連によって理解することが先ず考えられる。SB126は東カマドであり、入口は南壁あるいは西壁と考えられ、一番安定した北壁のすぐ脇に埋納されたのであろう。ただし、堅穴住居址に対してこのような地鎮具の埋納がなされる例はなく、不特定な地鎮を意図した可能性も考えられる。つまり、この地(区画溝に囲まれた部分)を初めて占地したときに行なわれた地鎮である可能性も考えられるが、いずれにせよSB126(5期)の成立期の遺構であることが予想される。

埋納の時期であるが「萬年通寶」の初鑄が760年(天平宝字4年)、「神功開寶」が765年(天平神護元年)であり、765年をさかのぼることはない。次の隆平永寶の初鑄は796年(延暦15年)で、出土錢貨の一括性を考えると、これを含んでいないことからほぼこの間に比定してよいであろう。ただしSD108(4~7期)・SK554(7期)から出土している錢貨も「萬年通寶」・「神功開寶」である点は慎重を期さなければならない。いずれにせよSB126出土の土器の年代の上限を示す一括資料といえる。

4 生産関連の遺構と遺物

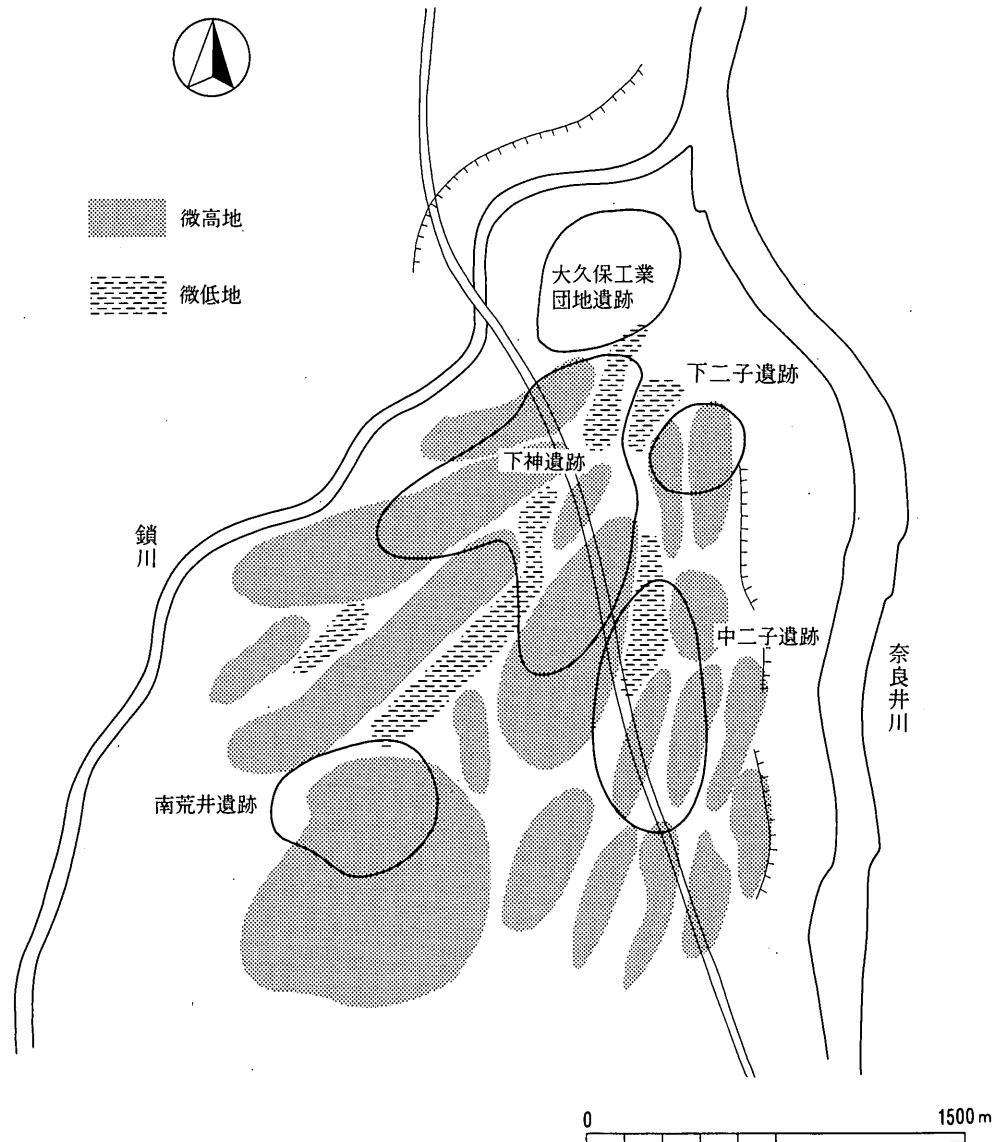
当時の生産の状況について復元することは遺構など確認されておらず困難であるが、前項と重複する部分もあるが出土した遺構・遺物によりその生産関係についてまとめて述べることにする。

(1) 農業関連の遺構と遺物

農業生産にかかわる遺構は溝址などにその可能性を残すものが認められるがはっきりした形で捉えられていない。これは発掘区全体にわたって住居址等が検出されたこともあり、その場所を発掘区域外に求めなければならない。

本遺跡の地形は第1章第3節において述べた通りであるが、その特徴を挙げると以下ようになる。1、自然流路により大きく南北に分けられる。2、紡錘形に残る微高地に集落が形成されている。遺跡は微高地の東端に位置する。3、井戸などの遺構がなく自然流路、あるいは溝などによる導水に頼っている。

第165図は現地地形を元にした地形復原図である。これをもとに可耕地について探っていくことにする。遺



第165図 地形復原図

跡中央を流れる自然流路(NR1)は調査において確認されており、中・近世に続き、長期にわたって安定した流れを保ったと考えられる。また、南部地区の遺跡の縁辺部にも奈良井川に並行するように流路の存在が予想され、中二子、下二子遺跡の間にわずかな微低地が認められる。北部地区においては自然流路であるSD108沿いにわずかな低地が観察される。NR1の周辺、特に南部地区の西側と北部地区の東側を中心として、北部地区のSD108沿いの微低地などが水稻耕作に当てられた可能性がある。特にSD108から取水する溝址(SD101・109・173・174)は生産との関連から注目される。

また遺跡を東西に横切る様に比較的規模の大きな溝が走る。南部地区ではSD7、北部地区ではSD106・100・104などがそれで、いずれも7期前後あるいは集落の廃絶後の所産と考えられる。これはSD108埋没の時期と関係が深く、SD108の流路変更に伴う人工的な流路の開削と考えられる。これらの流路も農業生産に深く係っていたと考えられる。

畑作については全く不明といわざるをえない。溝址群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとしたものにその可能性が求められ、宅地に付属して畠址が存在した可能性が考えられるが、今回の調査では明確にすることはできなかった。

次にこれらの耕作に使用された農具であるが、出土した農具には鉄製品では鎌、鋤・鋤先、加工用農具として苧引鉄、紡錘車などが挙げられる。石製品としては紡錘車、砥石がある。

鉄製農具の所有であるが、出土した鉄製品に占める割合は非常に低く全体の1割にも満たない。鎌の出土しているのはSB11・97でこのほかに、区画溝II、SK531・609から出土している。特にSK531は土坑に埋納される形で出土している。SB97から鋤・鍬先と鎌が共伴している。鋤・鍬先であるが大型住居址の壁際から出土しており、これは北方遺跡のSB15の出土状況に似ている。これら大型住居址からの出土は鋤・鍬先が開発具として独占された可能性も考えられ注目される。

砥石の分布はこれら鉄製農具とは全く異なった分布を示す。これは砥石の用途が鉄製農具を対象としていなかったか、あるいは出土した実数以上に鉄製品が存在したことを意味する。鉄製品と砥石が共伴しているのはSB2・52・76・96の刀子、SB64の苧引鉄、SB118が不明品とである。刀子と共伴している砥石の形態を見ると共通性は全くなく、小型・中型・大型のものが見られる。このことから特に刀子を対象にしたという傾向性は認められない。全く鉄製品と共伴しないSB19・54・98・90・106などのように砥石のみを遺棄し、鉄製品を持ち去った形跡のほうが強い。鉄製農具の限定した在り方や砥石の在り方からその重要度が窺われる。しかし、7期段階における鉄製品の増加と合わせると、決して鉄製農具の未普及は考えられず、再生産により分布には表われないものと考えられる。これら再生産の場所が次に述べるように北部I地区を中心とする区画と考えられる。

次に繊維関連の遺物としては紡錘車・苧引鉄などがある。紡錘車が出土しているのはSB34(3期)、SB126(5期)、SB96(7期)で、材質は石製、土製、鉄製へと変化している。ほぼ全期にわたって出土しているがその数は非常に少ない。第3章2節で述べたように鉄製紡錘車の実数はやや増加すると考えられるがそれでも少ない。

(2) 鍛冶関連の遺構と遺物

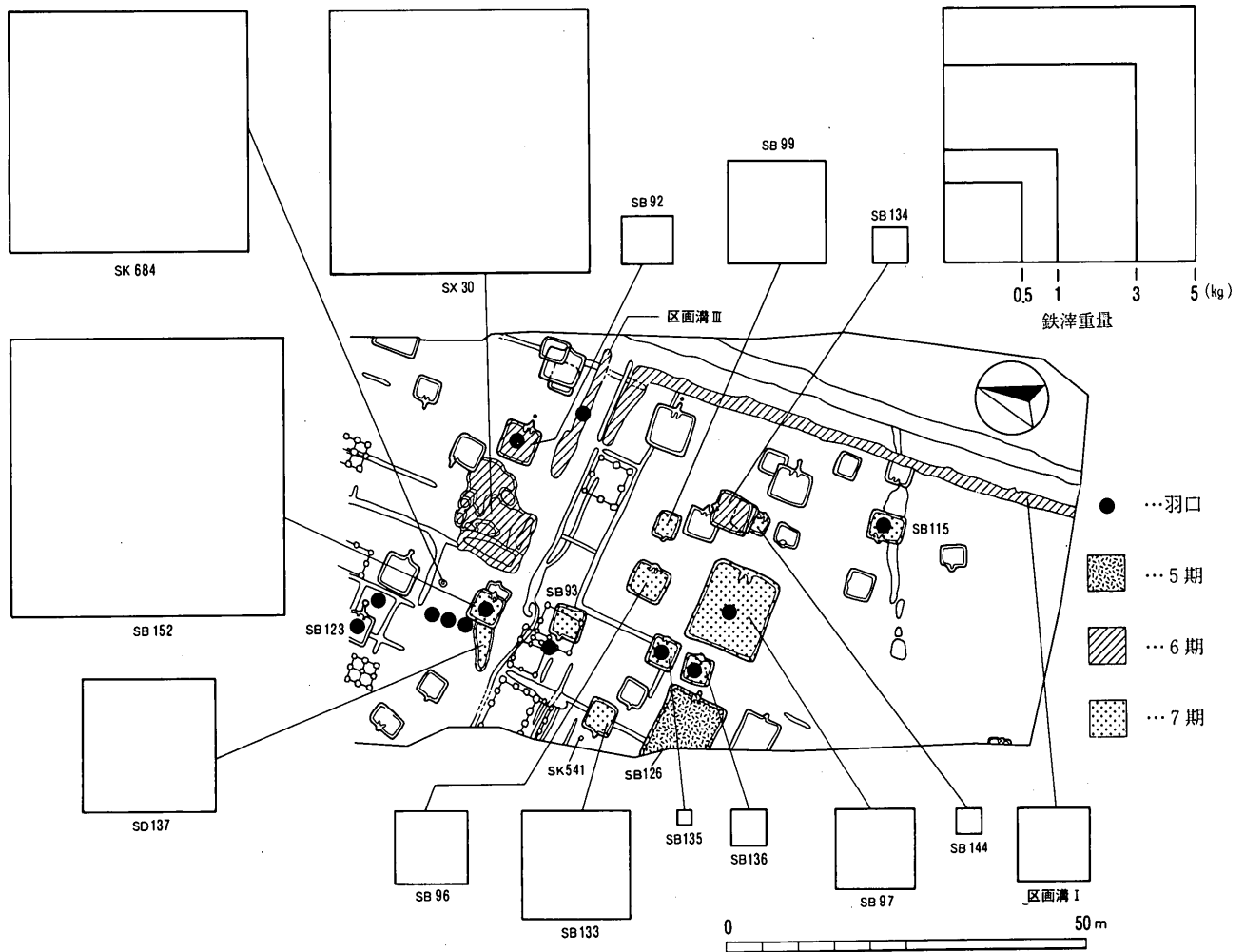
ア 鉄滓の分布

鉄滓は鍛冶に伴う廃棄物であるが出土したすべての住居址で小鍛冶が行なわれていたとは考えにくく、鍛冶施設の確認できた遺構は極わずかである。事実出土状況も覆土からが中心であり、遺構に付くものは皆無に等しい。しかし、集団内部において小鍛冶が行なわれた可能性は捨てられずその分布を考えることにする。

南部I地区において出土したのは出SB38の1軒みであり、量も多くない。調査区域外に鍛冶遺構のある可能性がある。南部II地区ではSB29・32・44・65の4軒から出土しており、SB44からは大型の鉄滓が出土している。南部III地区ではSB4・24の比較的大型の住居址から出土しており、4・5期と連続する。

北部I地区ではSB96・97・99・114・115・133・135・136・143から出土しており集中している。分布状況を示したのが第166図である。時期では7期に集中しているが6期からみられる。SB97は500gの出土量であるが住居址中央に炭化物を含む落ち込みが確認され、羽口・鉄滓も含まれており、鍛冶施設をともなっている。このほかに鍛冶関連の遺構としてSK541があり、また、その可能性があるものとしてSB93がある。確実に区画内部において小鍛冶が行なわれたとみてよいであろう。

北部II地区では多量に出土する遺構が北部I地区に隣接するように分布している。特にSB152からは5840g、SX30からは5280g、SK684からは4460g、SD137からは1450gの出土があり他を圧倒している。これらの遺構は別項でふれたように土器の出土状況から遺物の廃棄場所として使われたものであり、土器の出土量も多い。またSK684は鉄滓粒が多量に出土している遺構であるが焼土などの痕跡は全く認められず、これも小鍛冶後の廃棄坑であろう。時期的にはSK684が5期、SX30が6期、SB152、SD137が7期に属し5期から連続している。以上のことから、これらの遺構は区画内部との関連が考えられ、区画内部では一貫して小鍛冶が行なわれたこととなる。これらから逆に類推するとSB126についても小鍛冶の施設があったと考えられ、事実鉄滓粒の出土こそないものの床面に極浅い落ち込みがあり焼土が多量に含まれる



第166図 羽口・鉄滓分布図

施設が存在する。つまり、SB126からSK684・(SX30)、SB97からSX30・(SB152)へと廃棄されたものと考えられる。このほかにSB92・95・125・131・139などから少量出土している。

北部Ⅲ地区においてはSB36・72・74・76・119から出土している。出土量は少ないが確実に小鍛冶の痕跡が見られる。特にSB72では大型の鉄滓が出土している。

イ 羽口の分布

羽口の出土した遺構はSB92・97・115・121・123・135・136・152・SK554・684・SD108・SX30でSB121を除き北部Ⅰ地区及びその隣接地区からの出土である。遺構外出土のものも例外ではない。鉄滓が遺跡全体に分布するのに対して羽口が限定された分布を示し対称的である。両者が共伴するのはSB92・97・115・135・136・152、SK684、SX30である。このうち確実に遺構に伴うのはSB97のみで、そのほかは廃棄された状態で検出された。時期別にみるとSB123・121・SK684が5期、SB92・SX30が6期、SB97・115・135・136・152が7期である。5期から7期まで連続的に確認されるが6・7期に多い。

ウ まとめ

以上分布を概観したが、各地区ごとに鉄滓の出土する住居址があるが、鉄滓の量・継続性という点でその上位に位置する一群が存在する。つまり区画内部の一群である。鉄滓の分布から羽口の出土こそ無いもののごく小規模な小鍛冶が各群単位に行なわれ、さらに規模の大きな小鍛冶がSB97を中心として行われたことが考えられる。鉄滓・羽口の分布を通して北部Ⅰ地区が工房としての性格を強く持っていたことが分かる。また、区画内の有力者が鉄製品の管理を通して各集団を把握していた姿が浮び上がるであろう。

(3) 漆関連の遺物

ここでいう漆関連の遺物には漆付着の土器、漆紙がある。漆紙については付編1で詳しく触れることにする。

出土した遺物のなかで特に重要なものはSB126出土の須恵器杯A(32)に盛られた漆で、蓋紙が付着した状態で床面から出土している。また、漆紙3点(区画溝I・III、SX30)の出土も漆の消費と深い係りを持っている。漆付着の土器は土師器杯C1点、黒色土器A杯A1点、鉢1点でいずれも食器類の転用である。これらの出土遺構はSB126(5期)以外は溝址からの出土で、SD7(7期)、108(5~6期)、170(7期)からである。漆紙の出土地点は、SX30、区画溝I・III(いずれも6期)からである。漆付着の土器および漆紙の出土地点はSD7を除き、いずれも区画内部からの土器の廃棄場所であり、SB126出土の漆と合せて区画内部を中心に漆の使用が行なわれたものと考えられる。

漆使用の範囲であるが、出土した漆付着の土器はいずれも食器類の転用であり、大型の貯蔵具からは確認されていない。出土量および容器として使用された器種からは大規模な漆消費は想定しえない。また漆の存在のみで工具や製品については全く不明であり、どの様な段階の作業が行なわれていたのかも明らかでない。しかしながら、区画内部においても有力者による漆消費が行なわれていたという事実を重視したい。

以上、大雑把ながら生産関係についてみてきたが区画内部を中心として鍛冶、漆、などの生産機能を持ちある程度完結した世界を形成したことがうかがえる。

第3節 集落の構造と変遷

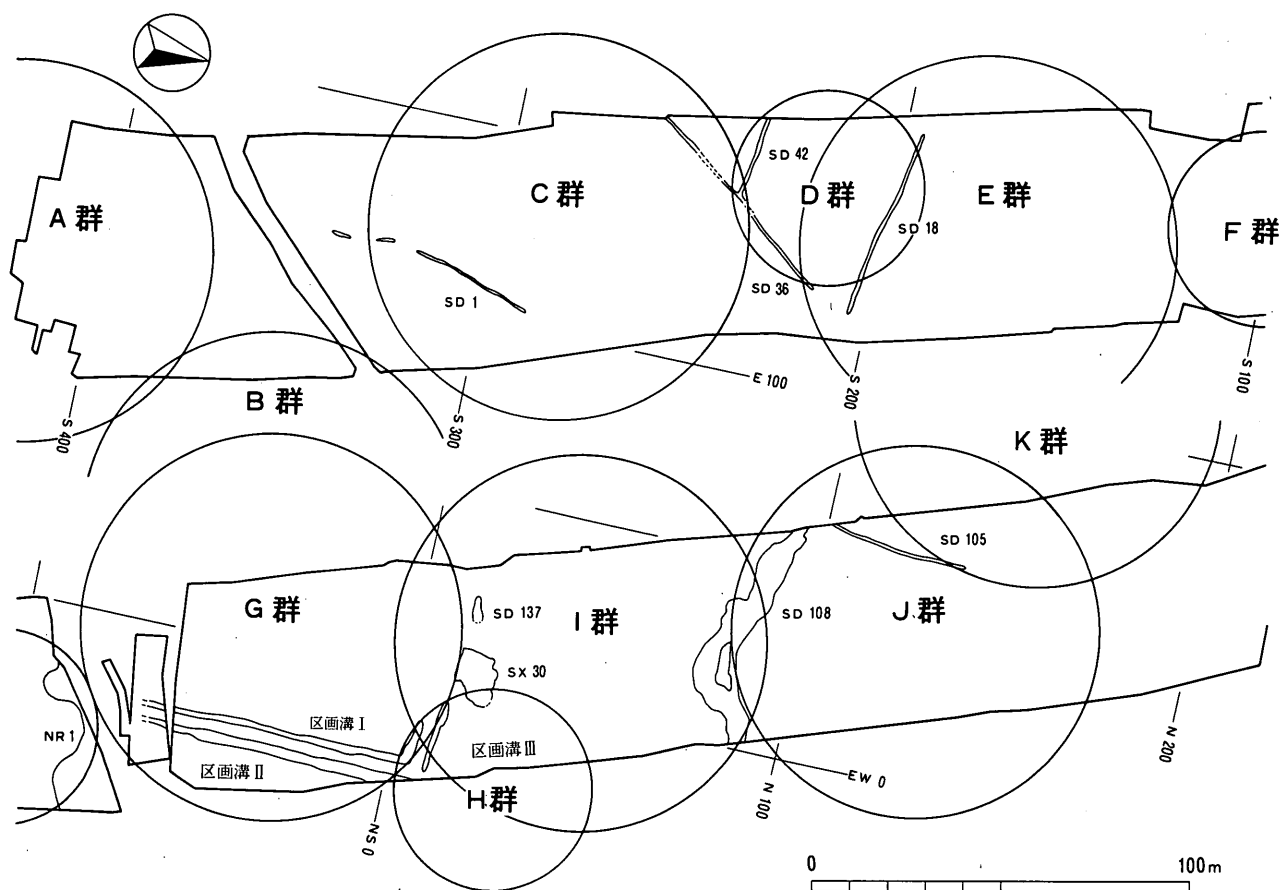
1 古代遺構のグルーピングと概観

本遺跡の遺構は比較的短期間に構築され、消滅しているため、ある意味では非常に単純な様相を示している。墨書土器、遺物の接合関係、遺物の廃棄状況などを考え合せるとある程度のまとまりを把握することが可能である。ただし、調査区自体が南北に長い道路幅に限定され東西方向を十分に確保することができず全体像が明らかになったとはいえない。集落が遺跡全体に拡散し、ある程度占拠が固定した時期の溝址などをメルクマールに堅穴住居址のグルーピングを試みたのが第167図である。

南部I地区には2群が、南部II地区には2群が、南部III地区には大きく2群が存在する。北部地区においてはI地区には1群が、II地区には2群が、III地区にも2群が存在する。

A群 (第168図)

遺跡の南端に位置し、不安定な礫層中に遺構が構築されている。5・6期の2時期に分けられる。5期はSB47を中心としSB45・46・49が存在するが、SB49とSB46は切り合っておりSB49→SB46への建替えと思われる。SB45については非常に小型の住居址であり別の機能が考えられる。これらの堅穴住居址に建物址が4棟ほど伴っており、2棟は総柱建物址である。なおSB45・46は遺物が接合しており確実に同時存在したと考えられる。遺物の出土量は非常に少ない。特にSB47はカマドを破壊されているとはいえ人為埋没を示し、ほとんど遺物を残さない。6期についてはSB48・50の2軒が存在し、住居址はやや大型化しており、遺物出土量も増加している。なおSB50には河川礫の投棄が認められる。これらの堅穴住居址に建物址が1棟ほど付く。5期の構成とほとんど変化は見られない。A群は5期から6期にかけて2時期にわたって存在し、それぞれ堅穴住居址2軒、掘立柱建物址数棟から成り立つ。



第167図 遺構群分布図

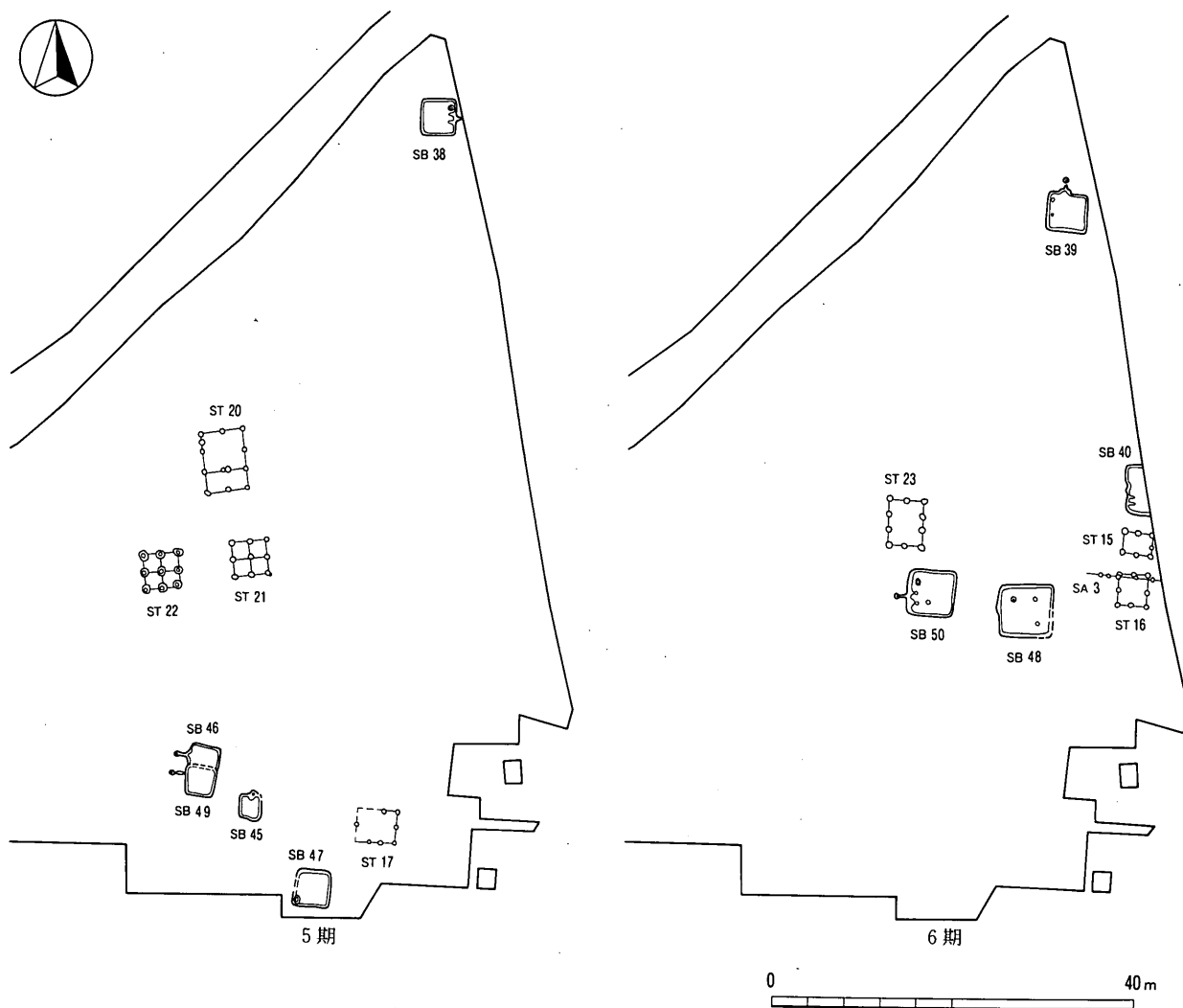
B群 (第168図)

A群との関連が予想されるが、東側の調査区域外に安定したII A 1層が続き遺構の存在が予想されるので、A群とは分離して考えることにした。しかし確認できたのは周辺部分のごく一部と考えられ、群の構成ははっきりしない。5～7期にかけての遺構が確認されており、南部I地区ではA群よりも長く継続したと考えられる。竪穴住居址と掘立柱建物址からなる。掘立柱建物址は2間×1間、2間×2間と小規模であるが、掘り方は方形で規格的である。倉庫に類似する規模の建物である。5期の住居址としてSB38、6期としてSB40、6～7期としてSB39が存在する。SB38とSB40については同一個体の須恵器甕が出土していることから同時に存在した可能性があり、SB39についても6期に上がる可能性がある。掘立柱建物址についてはその帰属時期は不明である。

C群 (第169図)

3時期に分けられる。5期にはSB53・54・58・60・61の5軒があるが、SB53・54は近接しており遺物の様相からSB53が先行する。SB60が面積的に見ても他の住居址よりも大きく中核と考えられる。掘立柱建物址は伴わない。6期に属する遺構はSB33・43・44・55・56・63・64の7軒と掘立柱建物址2棟がある。SB43・55が他の住居址よりも大きく、SB43・44とSB55・63・64の小単位に分けられる。SB43を中心とする単位は遺物の出土もC群内では多い。特にSB44からは大型の鉄滓の出土がある。なおSB55には簡易的な建物が付属する。住居址の配置も散在した在り方になる。7期に属する遺構は、SB52・57・59・62・65の6軒と掘立柱建物址が1棟伴う。遺物量、規模の点でSB65が中心的な住居址と考えられる。SB52からは『甗』の墨書土器が出土している。

5・6期が中心的な建物を取り囲むように配置されるのに対して、7期では両者が分離している。本群

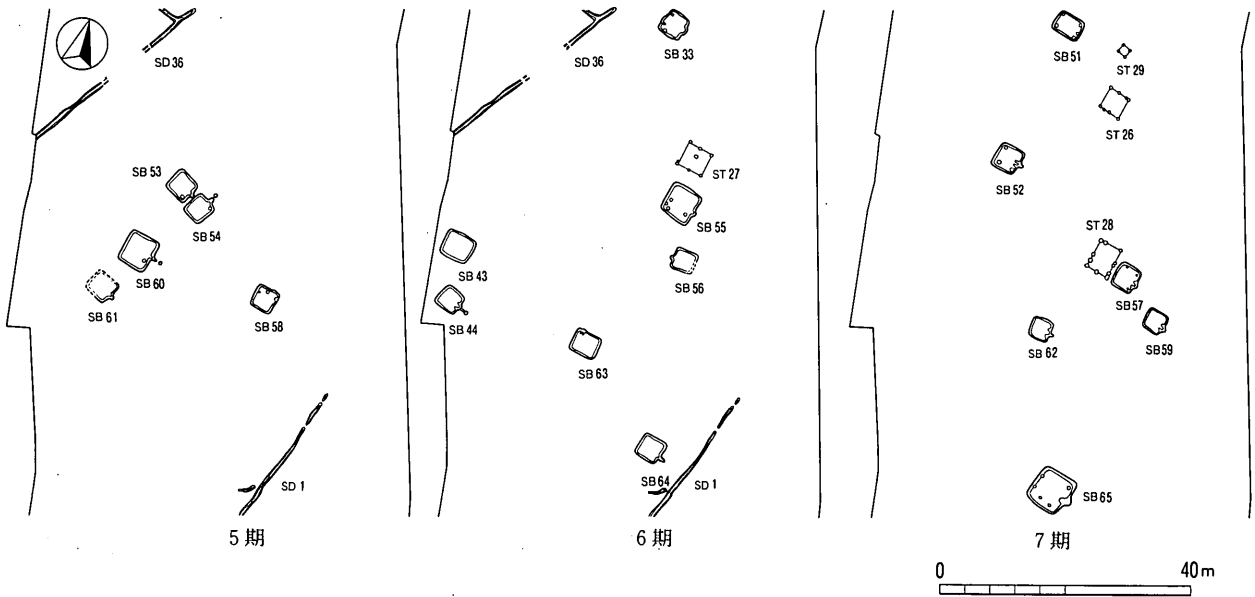


第168図 A・B群変遷図

は住居址数に比して掘立柱建物址が少なく基本的に竪穴住居址のみによって構成されている。掘立柱建物址も総柱建物址を伴わず1間×1間、2間×1間の簡易的な建物址である。土器量は他の群に比べて非常に少ない。これは貯蔵形態の土器の出土が極端に低いためであろう。これに対して墨書土器、鉄製品の点数は比較的多い。SB53から出土している墨書土器『井』は北部地区のSB72などからも出土しており、開発期の墨書土器として注目される。また、SB52出土の『風』は広範にわたって出土しておりその南限に位置する。集団内の中核的な住居址もあるがその規模も他と比較して小さく、等質な集団内の差としてとらえられる。

D群 (第170図)

竪穴住居址6軒と掘立柱建物址9棟から成る。本群の周囲には小規模な溝が三方に巡っており、柴垣の様な区画施設があった可能性がある。本群は5・6期の2時期に分けられる。5期ではSB27・31・32の3棟であるがSB27に建替えの痕跡があり、SB31・32についても同時期内の建替えと捉えることができ、基本的には2軒が同時に存在したことになる。掘立柱建物址は3棟以上が伴うと考えられる。確実に伴うと考えられるのはST12であるがST7・11・125・126も同時に存在した可能性が高い。ST11は次の総柱建物の前身であろうか。6期についてはSB26・29の2軒に、掘立柱建物址5棟が伴う。特にST6・8・9・13は軒先を揃え近接して建てられ、「コ」字状に配される。ただしST9はSB42と近接して建てられており、5期にさかのぼる可能性もある。南部地区の中では遺物の出土も多く、溝に区画された中心的なまと

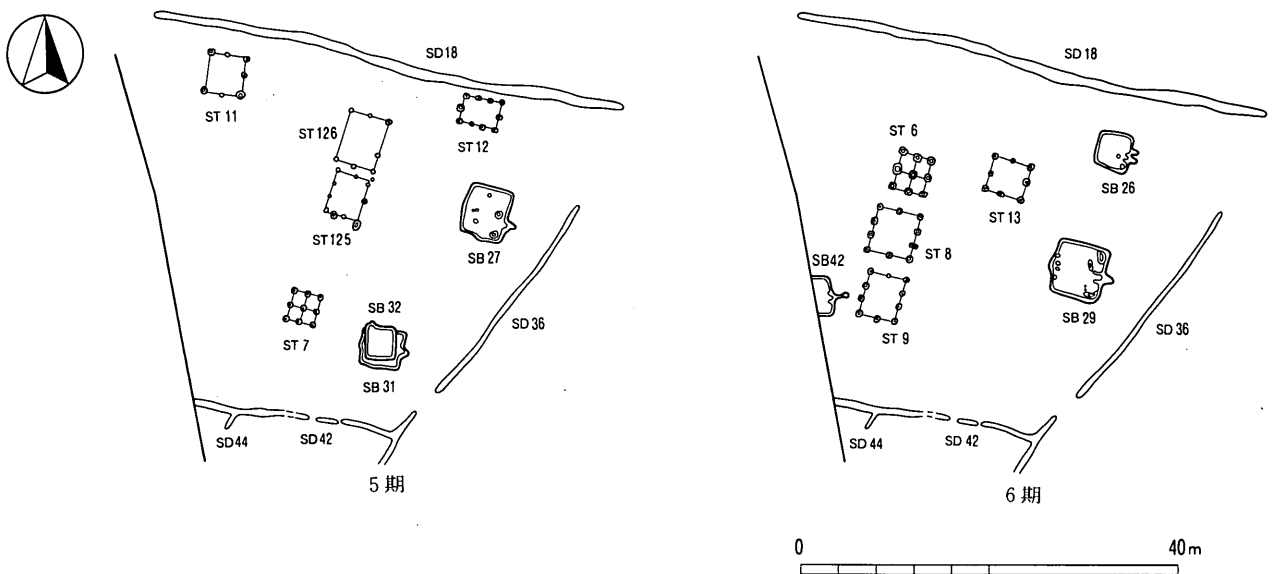


第169図 C群変遷図

まりの一つである。竪穴住居址の規模は特別大きなものはないが建物址の規模を合わせると大きな集団と見ることができる。C群は独自の軸規制を行っており、これに近い値を示す本群との関係が考えられ、遺構、遺物の内容からC群の上位に位置する集団と考えることができよう。SB42とSB28とに同一個体と思われる遺物の接合関係がある。

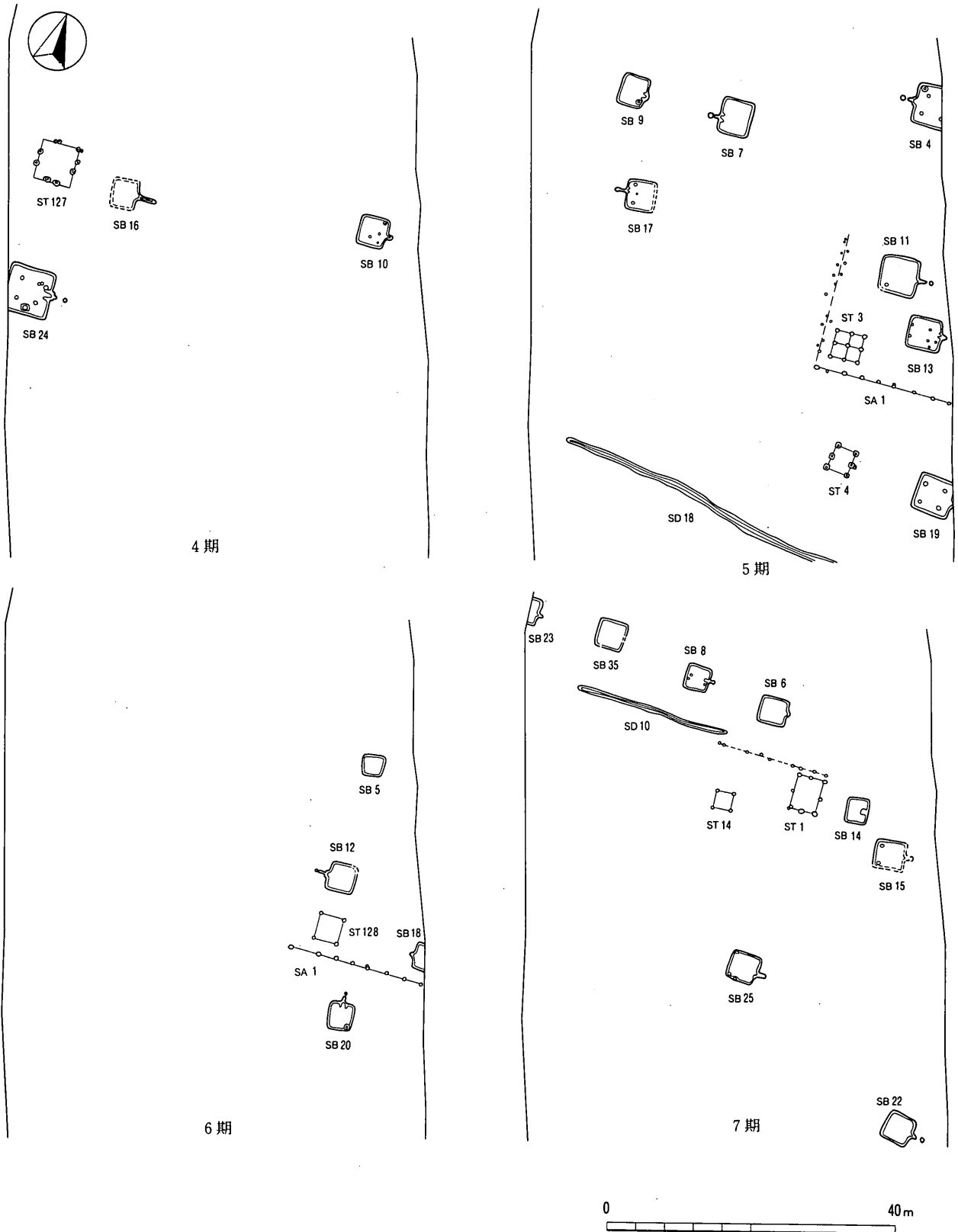
E群 (第171図)

調査区域外に遺構が伸び群が捉えにくい部分である。さらに東西の小単位に分けることも可能であるが、西側に展開する住居址は4～5期にかけての住居址で、非常に継続性の薄いまとまりとなるため1群として捉えることにする。本群は4～7期の4時期に分けることができる。4期の遺構はSB24の大型の住居址とSB16、掘立柱建物址1棟が存在する。SB7・9・17は5期に分類したが古い様相を示しておりSB24の段階から存在した可能性が強い。やや離れてSB10がある。5期の遺構は4期では西側部分において展開していたものが東側に移り、中心部分は調査区域外に延びる。比較的規模の大きなSB4・11を中心として、



第170図 D群変遷図

SB13・19などがある。柵を伴う区画が成立した時期と考えられ、軸方向が柵址と同一なSB11・13が存在し、総柱建物であるST3が区画の南西隅にくる。また柵址の外側にはSB19と2間×1間のST4が存在している。SB19・ST4については軸規制がD群と近くD群との関連が認められる。SB4は出土量も多く中心的な存在でカマド形態の共通性などからSB24の移動とも考えられる。6期の遺構は柵内部に住居址が集



第171図 E群変遷図

中する。SB12・15などがある。SA1が継続するかは不明であるが5期の主軸方向と変化が見られないため区画は存在したと考えたい。5期から6期への変化はカマド方向の変化と捉えられ、5期において東カマドであったものが西カマドへと変化している。ST3は簡易的な建物へと変化している。7期の遺構は区画が崩れ散漫な分布を示す。SB6・8・14・23・35などがカマドを東に向け直線的に並ぶ。これらの南には溝址や柱穴があり、柵施設があった可能性もある。これとは外れてSB22・25が存在する。規模などに差は認められず、中核となるような住居址は存在しないが、SB14が遺物量も多く、しっかりしたカマドをもっている。また、SB25からは銅製帯金具が出土しており注目される。3間×2間、1間×1間の掘立柱建物址が伴う。

F群

2期のSB21を除けば全て7期に属し、継続性のない集団である。SB1・2・3、ST5などがある。E群からの分かれであろうか。ST5は1間×1間ながらしっかりした掘り方をもっており、SB4に付属する可能性も考えられる。E群との関係において理解される群である。

G群 (第172図)

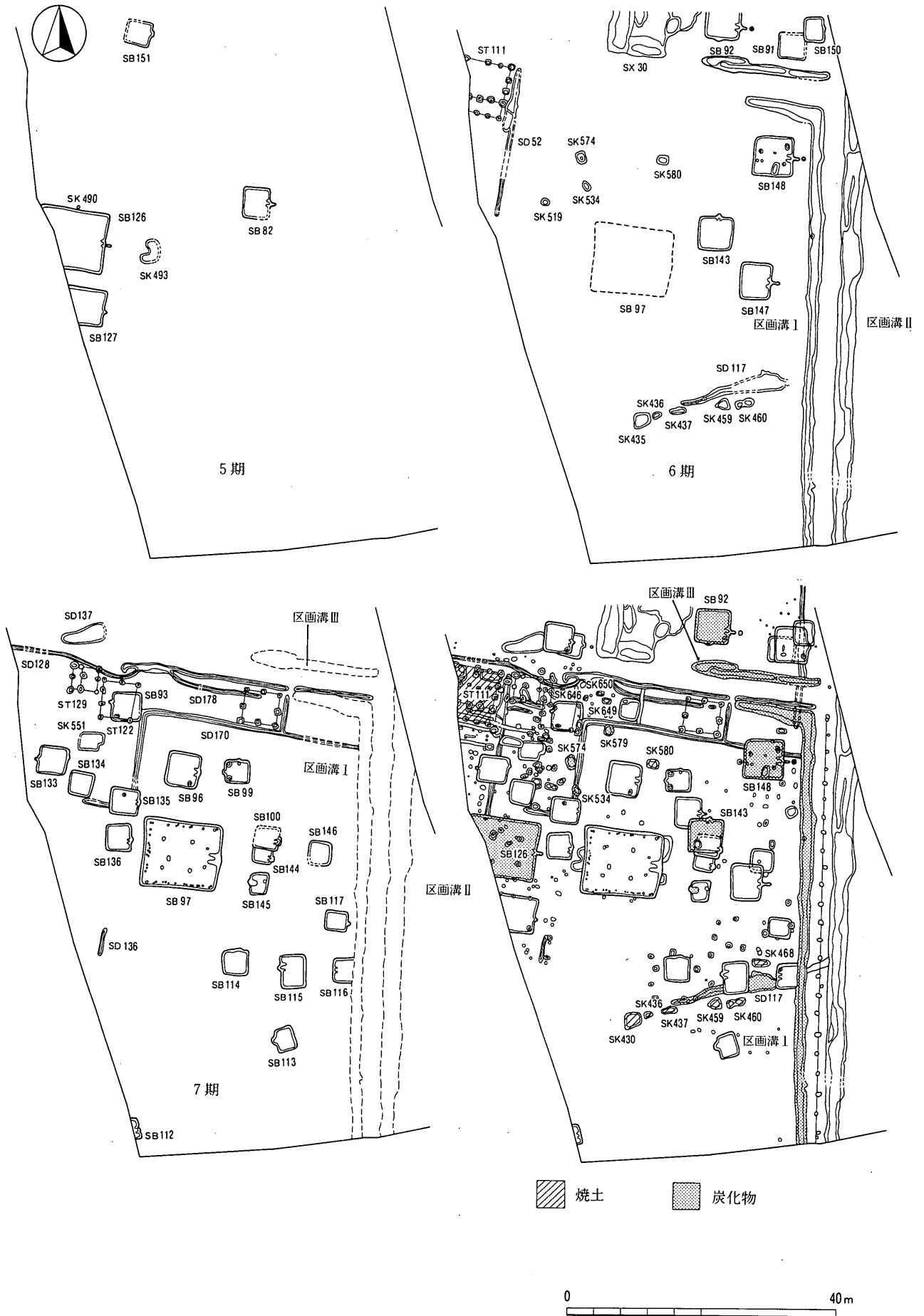
区画溝に囲まれSB97を中心とする群である。5期から7期の3時期に分けることができる。

4期の遺構はSK533のみであり調査区域内では住居址等はない。

5期の遺構はSB126・127の2軒が主軸を揃えて存在する。SB126は非常に大型の住居址で一辺9m以上あり、次のSB97の住居址に匹敵する規模である。またSB126とSB127の関係はSB97とSB96の関係、主軸を揃えた大型住居址と小型の住居址との組み合わせに類似している。このことはSB126とSB97の系譜性を表わすものと考えられる。鍛冶遺物の項でふれたように鍛冶施設の面でも共通性が認められ、機能の面でも同様であることもこの考えを支持する。区画溝の成立の時期であるが区画の東西溝部分の延長上に位置するSB132・151などの存在により、この段階では区画はまだ成立していないものと考えられる。しかしながらSB132・151は比較的古い様相を示しており5期中あるいは6期の古い段階には成立したことが推定できる。

6期の遺構はSB97・882・143・147・148などの竪穴住居址と、掘立柱建物址ST111が存在する。SB97・ST111については6期でも後半において出現したと考えられ、この段階には区画溝を伴う区画が確実に成立している。SB126とSB97との遺物にはやや時間的な経過が認められ調査区域外にさらに大型住居址が存在する可能性がある。SB92に廃棄された遺物はこの住居址からのものであろうか。区画の中心に位置するSB97は非常に大型の住居址であり、一辺10m以上で礎石を利用した特異な存在の住居址である。『甗』『甗』の墨書土器は本住居址を中心にして分布しており、6期段階においては両者を併用している。SB82については5期に属す可能性もある。また、SB143は早くに廃絶し、後半にはゴミ捨て穴として多量の土器が捨てられるようになる。SB97の石敷施設から出土している須恵器皿、赤彩土器皿などが出土していることからSB97から廃棄されたものとみて間違いのないであろう。掘立柱建物址が確認できたものはST111の1棟のみであるがST111付近、SB126・127の跡地部分にも存在した可能性がある。ST111は大型の南面庇付き建物址で須恵器大甕が収納されており貯蔵庫としての機能を果たしていたと考えられる。総柱建物址は確認できず区画外に存在したと考えられる。特に北部II地区では総柱建物址が占める割合が高く関連性であろう。SD117もこの時期に属す。

7期の遺構は6期に引続きSB97を中心とするが、小型の住居址が衛星のように取り囲むようになり、区画溝も埋め戻しを受ける。この埋め戻しの時期についての確定はむずかしいが、区画溝の土器の様相からみても6期あるいは7期でも早い時期であることは間違いのない。また焼土を伴う比較的大型の土坑SK459・460・466・580などはこの時期の所産と考えられ、区画溝内の多量の炭層の存在、ST111の柱痕跡



第172図 G群変遷図

内部の焼土など同一時期の遺構として捉えることができる(第172図)。区画溝を埋め立て竪穴住居址などの配置を大きく変えた原因を火災などに求めることができるのではないかと考えられる。この段階では区画溝は完全に埋め戻されておらず、これら焼土や炭化物は区画溝の3層の炭化物層と対応するものと考えられる。SB97もこれに際して建替えが行なわれ、区画内部において大規模な改変が行なわれた状況を読み取ることができる。遺物の遺構間の接合関係も2次的な移動を示している。6期から7期への変化の要因はこのような理由であったと考えられる。7期についてはSB97、あるいは区画溝の消滅を境として前後に2時期に分けることができる。古段階のものとしてはSB97・96・99・114・115・116・117・144・145・146・ST123などが存在する。新段階としてはSB93・100・112・134・135・136・ST129などがあり、北部II地区のSB131・152などに続く配置になり、全く区画の規制を受けなくなる。

H群 (第173図)

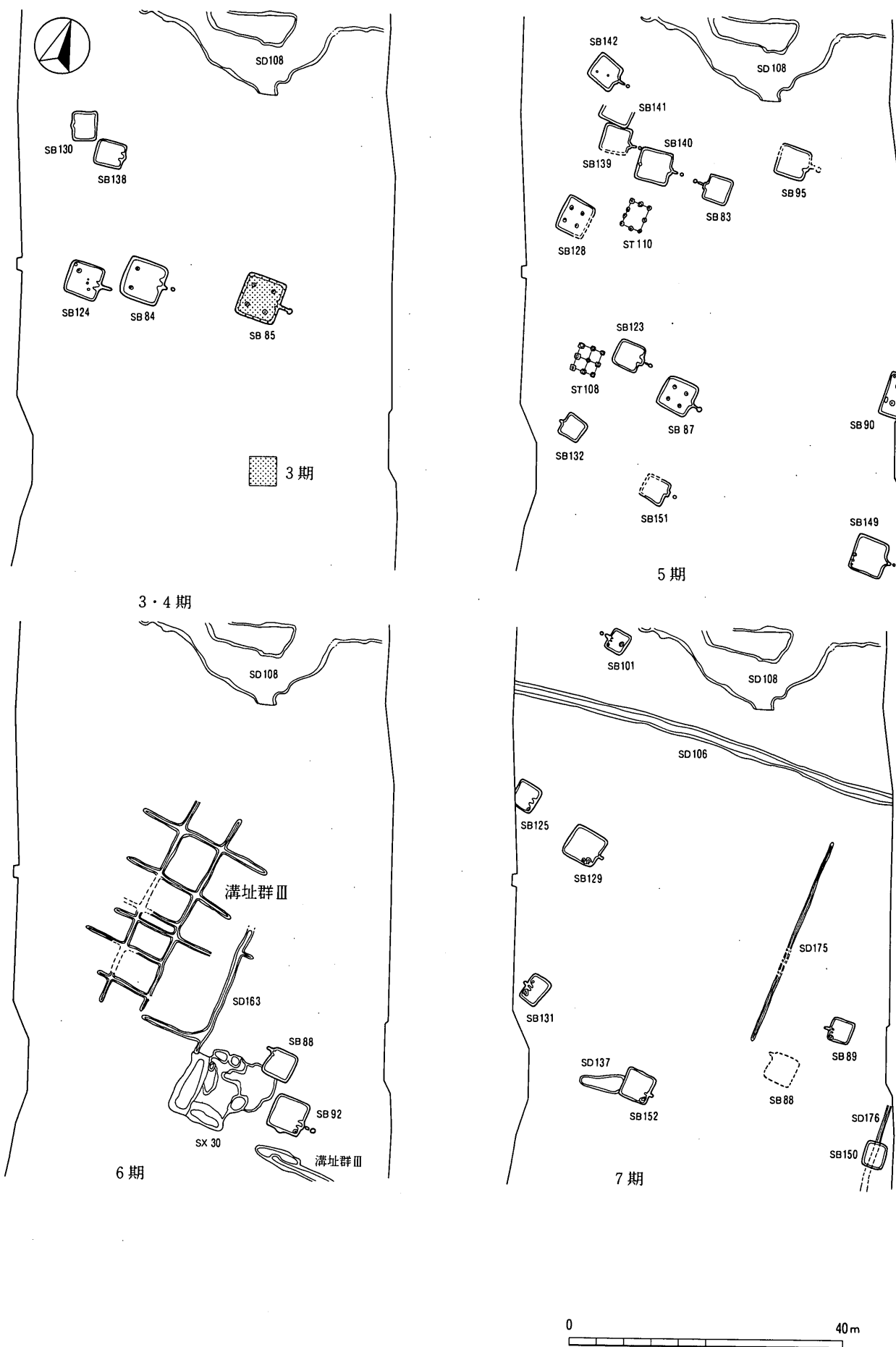
3時期にわたるがほとんどが調査区域外となり全容はつかめない。本群についてはI群との関係が強く群自体が成立するか疑問な点もあるが、遺構が東に延びることなどから独立させた。5期の遺構としてはSB90・149などがあり、SB92の成立は5期まで遡る可能性がある。SB92については墨書土器を含み多量の土器が出土しておりSB126・SX30・SD108などと接合関係をもつ。SB126との接合遺物はいずれも覆土中の出土であり、細片であることを考え合せるとどちらの遺構にも属しないと考えられる。出土している墨書土器は『而』『甬』などで墨書土器との関係を重視するならばSB97と関係が深いといえる。SB90からは『継』の墨書土器が出土しておりSB132との関連が考えられる。6期の遺構としてはSB88・91・150がある。SB91からは『草茂』の墨書土器、硯が出土しており注目されるが本址に直接伴うものとは考えられない。7期の遺構としてはSB89がある。

I群 (第173図)

5期に分けることができ、本遺跡において最も古い時期に成立したの群の一つである。3期の遺構はSB85が単独で存在する。SB84については3期に上る可能性もあり、時間的な開きはそれほど無い。4期の遺構としてはSB84・124・130・138と軒数も増える。SB128については遺物が少なく確定はできないがこの段階に付くと考えられる。SB130とSB138は近接しており同時存在は無理である。5期の遺構はSB83・87・95・123・132・139・140・142が2棟を単位として展開している。SB132とSB151、SB123とSB87、SB83とSB140、SB141とSB142、SB139とSB95の組み合わせが考えられる。このうちSB141・139・140の同時存在は無理であり、これら住居址も2時期に分けられる。やや古いものとしてSB132やSB141の小単位で主軸方向も振れが大きい。新しい段階の住居址は東西方向にほぼ軸線を揃える。SB123はさらに新しくなる可能性がある。掘立柱建物址については総柱建物址が3棟、その他の掘立柱建物址が2棟伴うが、溝址群IIIを切るST121は明らかに新しく、その他の掘立柱建物址が主軸方向などから5時期あるいは4期段階に伴う。ST108は出土遺物の様相から5期段階に確実に伴う。SB140の小単位にはST110が伴う。6期の遺構は竪穴住居址はなくなり溝址群IIIが短期間存在するが、その後は空白域となる。SB97の成立により、SD108との関係が重視された結果と捉えられる。遺構間の接合関係などからここに区画から土器を投棄する道の存在が予想される。7期の遺構としてはSB10・11・25・129・131・152などが5期よりも西側に移動して、散在的に分布する。SB101にはST112が伴う。SB152などはSB97の消滅にともなって新たに展開したものである。

J群 (第174図)

いくつかに分けられ、特にSD109を境に2群に大きく分布が分かれるが墨書土器の分布などによりSB72も含めて大きく捉えることにする。遺構は4時期に分けられるが、3期については継続的ではなく実質は5～7期の3時期の区分となる。

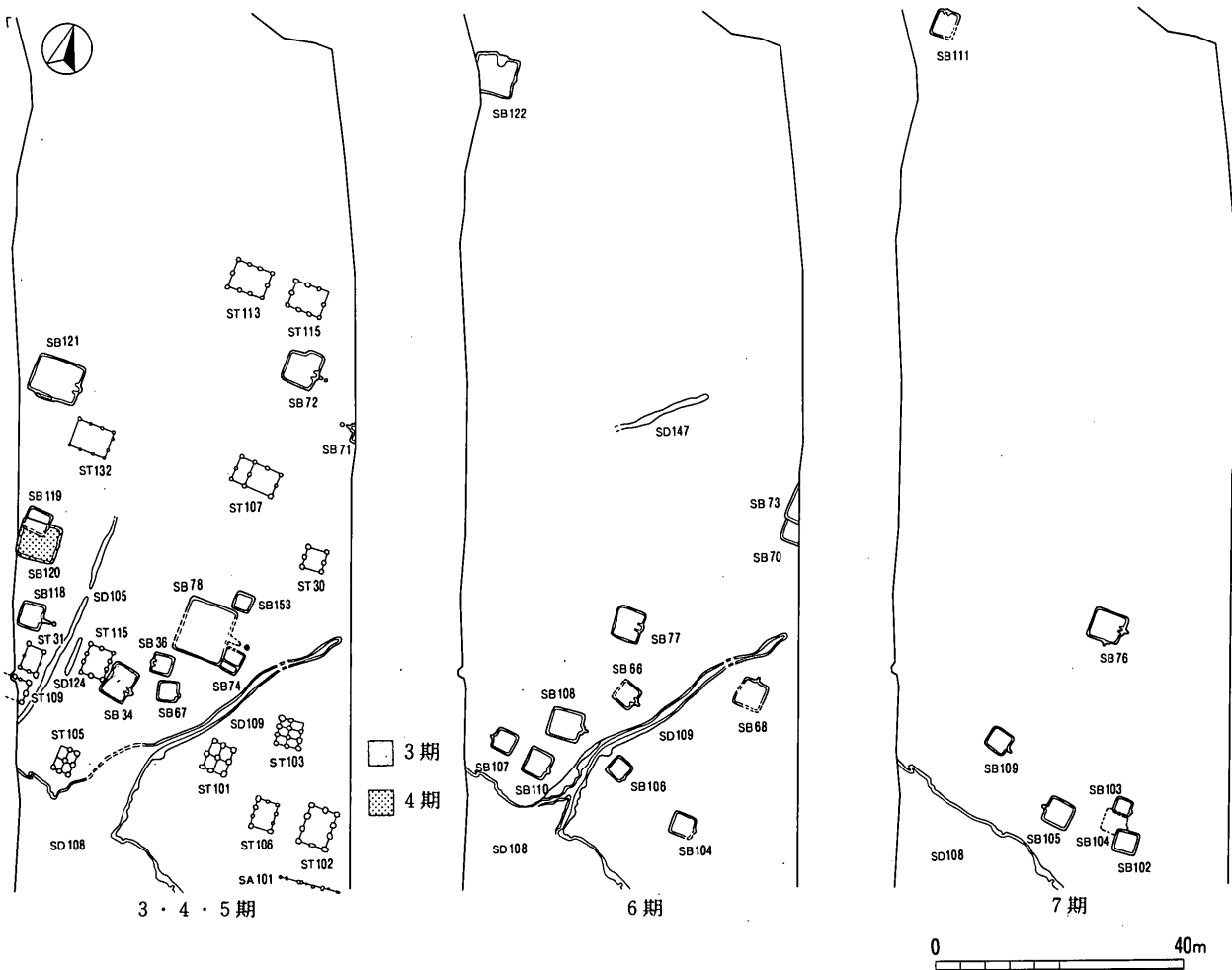


第173図 H・I群変遷図

3期、SB34が存在する。SB69については遺物が少なく時期が確定しないが4期あるいは5期の所産と考えられる。

5期の遺構はSB78(SB74を含む)の大型住居址を中心としてSB36・67・71・72などがある。SB78は非常に大型の住居址で一辺が約9mの規模をもち、部分的に礎石を使用している。住居址形態をみるとSKSの18号住居址と共通している。この住居址に伴う墨書として『人人』があり、SB72・108・SD105・108・109などからも出土している。SB108を除いて5期の遺構であり、この段階に特徴的な文字である。複数遺構にまたがって出土している墨書はSB97に伴う『夙』『而』のほかにはなく、この住居址の力を示している。またSD109からは銅製銚帯が出土しており、可能性の大きなものとしてはSB78との関係が考えられる。SB72についてはやや先行する。SB72の遺物出土状況を見ると住居址の南側に集中しており、土器の投棄場所になっており、共通する墨書土器などから、SB78から投棄された可能性が高い。ST113・114は軒を揃えSB72と主軸方向を揃え「L」字に配置されており同時存在と考えられる。ST30・107についてはSB78に伴うものであるかはっきりしないが、ほぼ同時に存在したと考えられる。SD109以南の掘立柱建物址は遺物から5期あるいは6期に伴うと考えられ、ST102・103・106などがSB78に伴う。ST105は6期の住居址に切られておりこの段階のものと考えられる。

6期の遺構はSB108を中心とするがSB78を継承するような建物は見当たらなくなる。この変化はちょうどSB97の成立する時期と同時期と考えられ興味深い事実である。このほかにSB66・68・70・73・77・104・106・110などが伴う。これらの住居址は主軸方向により2群に分けることができる。SB66・106などのグル



第174図 J・K群変遷図

ープ、SB68・107・108・110などのグループである。前者から後者への変化が考えられ、ちょうどI群の状況と同じである。この時期はSD108の水際近くまで住居址が作られており、SD108は非常に安定していたものと考えられる。

7期の遺構はさらに住居址数が減少し、SB76・102・103・105・109のみになる。SB76は遺物出土量が多い。ST101はこの段階につく可能性もある。なおSD108埋没は7期中と考えられ、本群の消滅はSD108と深く関係していることが予想される。

K群 (第174図)

SD105によりJ群と区画され、大型の住居址により構成されるが遺構の密度は高くない。松本市調査区SKKSの溝1(SD108)以東を含めたまとまりである。比較的古い時期にまとまっており、4時期に分けられる。4期の遺構はSB120が単独で存在するが、西に広がっている。調査区域外に延びるST109が伴う。5期の遺構はSB121を中心とし、SB118・119・ST133が伴う。6期の遺構はSB122が単独で存在する。SB122については住居址周囲に平石が存在し礎石建ちの可能性もある。7期はSB111が単独で存在する。本群はSB120→SB121→SB122と大型の住居址が位置を北に変えながら継続するが、7期になりSB111を最後に消滅する。

2 各群の関係

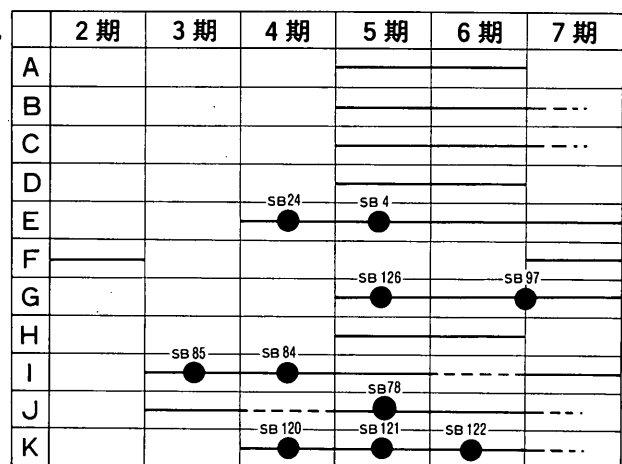
本遺跡がG群を中心に展開していることは遺構、遺物の面から間違いのないことである。G群を軸として各群との関係についてみることにする。

G群との関係が最も深いのはH・I群である。H群は開発の古い群であり、5期に有力な竪穴住居址(SB84か)がG群に移行したのと考えられる。また墨書土器や遺構間の遺物接合関係によりSD108までが生活領域と捉えられるため、G群内部の小型住居址よりもやや独立した一つの経営単位として捉えることができる。

G群に次ぐ有力群はJ群である。これは複数遺構にまたがって出土する墨書土器『人人』をもつことや大型住居址を伴うことによってわかる。5期段階ではSB126に並列する勢力であったが、以後G群の勢力の伸長にともなって勢力を失って行く。J群と同様な関係にあるのが松本市教育委員会が調査したSKKS10号住居址、SKSの18号住居址を含む各群である。これらの群内には『甬』の墨書を出土する住居址がありG群との関係が指摘できる。南部地区においてはJ群のような核になる竪穴住居址をもつ群はない。そのなかで有力なものがD・E群である。D群では出土していないがE群からは『甬』『而』の墨書土器が出土している。また、D群と関係があるC群からも出土しておりG群との関係を指摘することができる。

A・B群については不明である。

以上、G群との関係を整理すると3段階の関係が存在することがわかる。D・E・J群や松本市教育委員会の調査した笹賀地区(SKS)や、熊坂地区(SKKS)にみられるような緩やかな関係で、遺物的には豊かで、帯金具や、三彩小壺をもつが、最終的には『甬』の墨書を受容している。H・I群のような直接的な関係、つまりSB92のように遺物の廃棄場所となったり、溝址群IIIをつくるためSB97によって居住の場所を変えられるような、G



第175図 各群の消長図

群に直接指導されるような関係である。次にC・F群のような上位の群を媒介とする関係である。この関係もG群と離れているが、『厩』を受容するなど比較的緩やかな関係であったと考えられる。これらの関係がどのようなレベルの関係であるかは明らかにし得ないが、遺構や遺物、特に墨書土器に表われたこのような関係は集落の動きをみるうえで重要な視点と考える。

3 各群の変遷と消長

群別に変遷とその構造についてふれてきたが、ここでは各群の消長と集落全体の動きについてみることにする。

2期 南部III地区NR1付近のF群のみに存在する。2期の住居址はSB21のみ単独で存在するが調査区外に存在するかどうかは不明である。いずれにせよ大規模な集落は考えられず、自然発生的なあり方である。NR1の水利を頼りに開発に入ったものと考えられる。

3期 2期からの継続性は認められず北部地区のSD108を挟んでI群とJ群に新たに集落が成立する。それぞれ単独の竪穴住居址で存在し、2期同様自然流路沿いに竪穴住居址が営まれる。

4期 集落として定着し、3期からの継続が認められ、南部地区ではE群、北部地区ではI群とK群が存在する。単発的な住居址の在り方からある程度のまとまりをもって存在するようになる。E群では3軒、I群では4(5)軒存在し、E群ではSB24、K群ではSB120などの比較的大型の竪穴住居址が存在し、有力な2群があったと考えられる。またI群についても比較的大型の住居址からなり、集団としては有力であったと考えられる。南部地区ではE群が、北部地区ではSD108以南をI群が、SD108以北をK群が開発したと考えられる。特にI群はG群との関わりにおいて注目される。

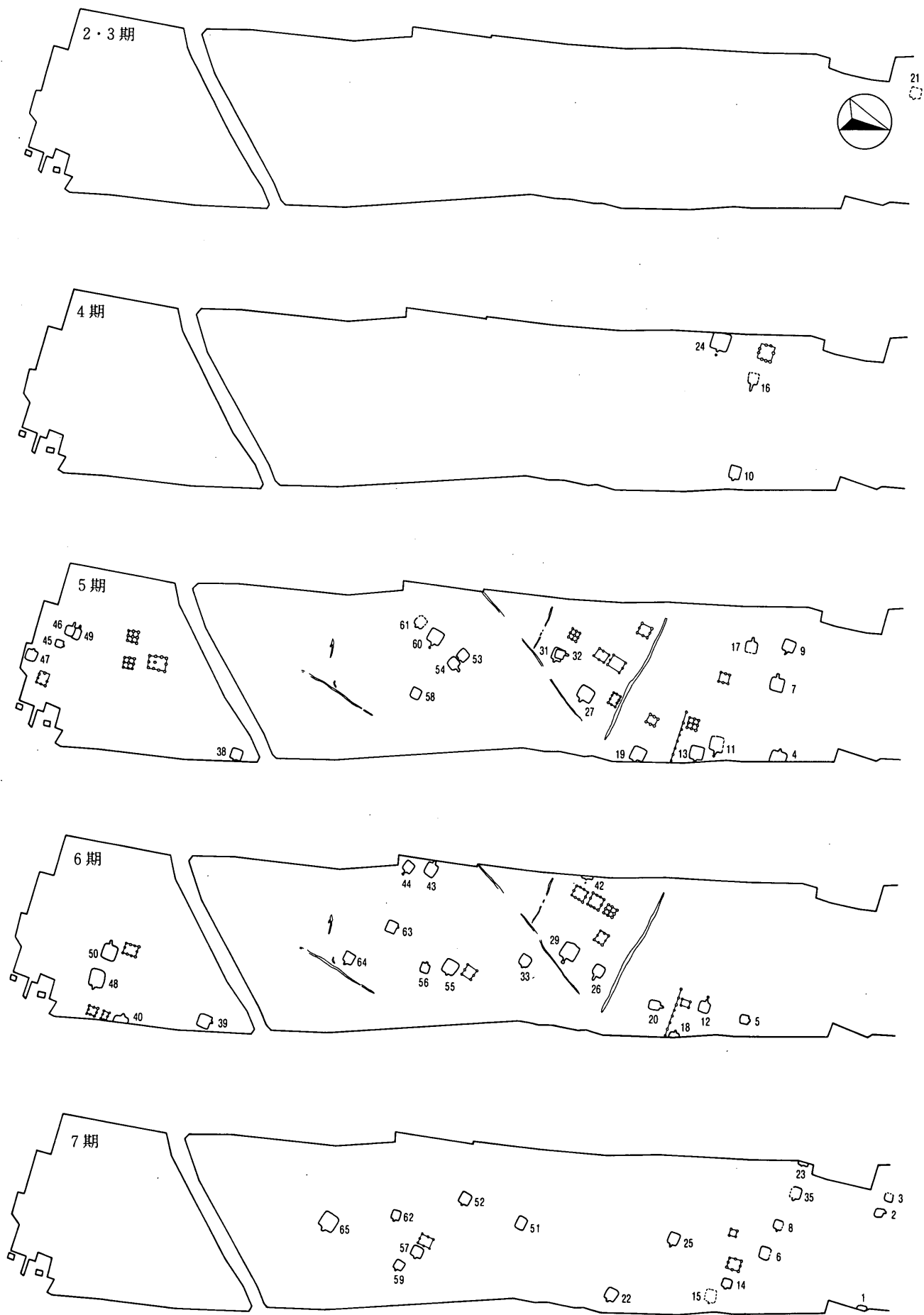
5期 南部地区ではA～E群、北部地区ではG～K群まで存在し、遺跡全体に遺構が広がる。4期から5期への変化は急激であり、下神遺跡の第一の画期としてとらえることができる。特に南部地区では4期に存在するのがE群のみであり、すべての群をE群からの分かれと考えることは到底不可能であり、新たな移動を考えざるをえない。また、北部地区におけるG群の成立も重要な要素である。

北部地区ではG群とJ群に非常に大型の竪穴住居址(SB126とSB78)が存在し有力な群と考えられる。これは集団独自の墨書土器を操ることからも肯定されよう。これに対して南部地区ではD群のように掘立柱建物址と竪穴住居址が整然と並ぶものもみられるが、おしなべて等質な集団の集合である。

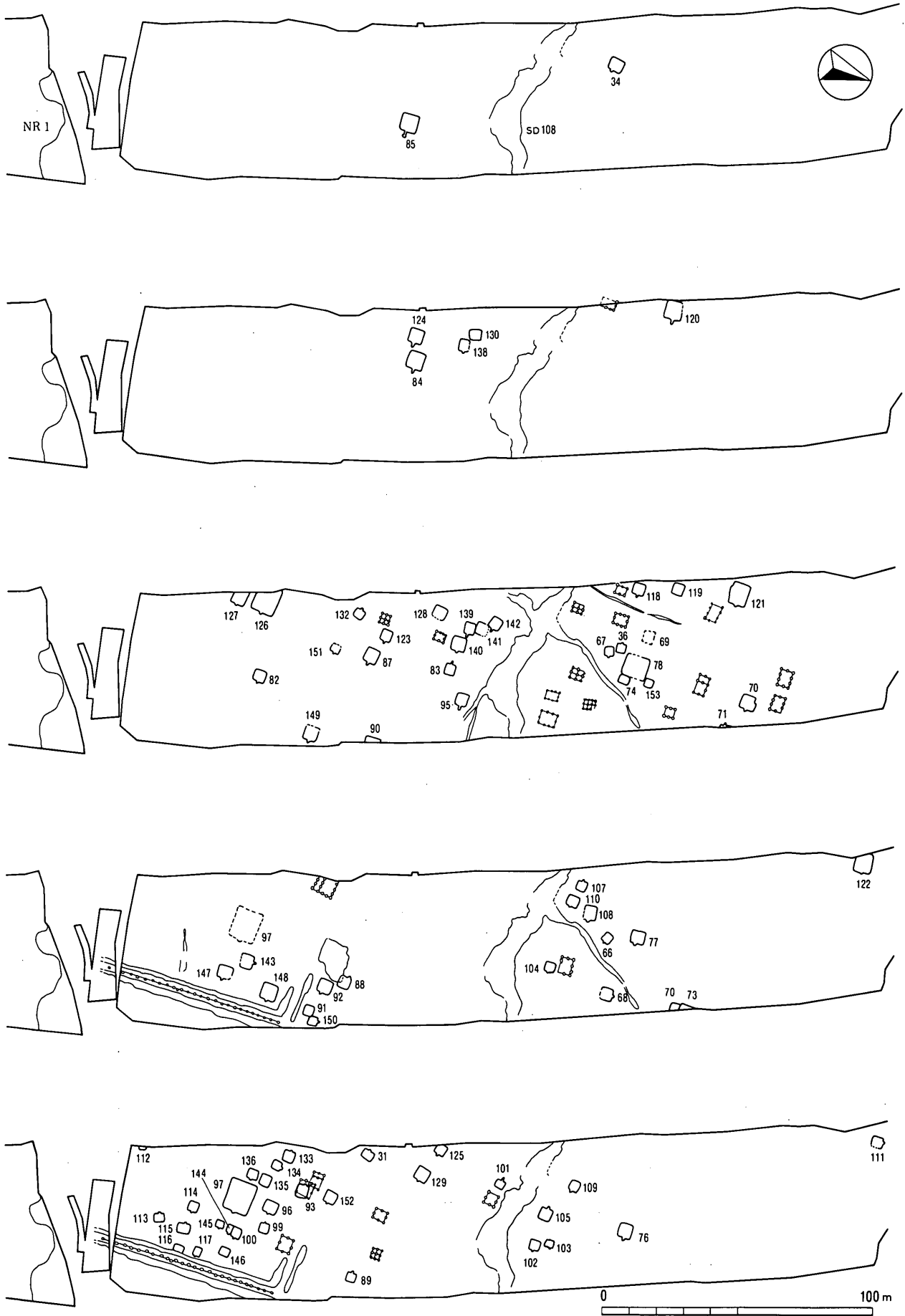
6期 5期の様相が継続され、南部地区ではA～E群、北部地区ではG～K群まで存在する。この前半段階では特に大型の住居址は存在せず、住居址数もわずかに減少する。G群のSB97は6期中の成立と考えられるが、SB126からSB97への変化は土器型式においてはやや飛躍するため、SB97クラスの竪穴住居址が調査区域外に存在する可能性もある。ただし遺物の接合関係ではほぼスムーズな移行と考えられる。6期後半段階において各群がG群に集約されるようになり、5期に見られた複数の有力な竪穴住居址は無くなる。SB97の成立をもって集落景観の様相が大きく変化しており第2の画期として捉えられよう。

7期 群の構成などに大きな変化が見られる。南部地区ではA・B・D群が消滅し、F群が成立する。北部地区ではG～K群があり各群とも継承されている。住居址の配置にも変化が見られ、直線的な配置に変化している。大きく南部地区のE群と北部地区のG群に再編成されることに特徴が認められる。

7期以降継続する住居址等はなく、突然の終末を迎える。この断絶と呼ぶにふさわしいような終焉のしかたも下神遺跡の大きな特徴である。



第176図 集落変遷図1



第177図 集落変遷図2

第4節 下神遺跡の諸問題

前項まで考古学的な分析を加えてきたが、ここでは文献に見られる「草茂庄」と下神遺跡との係りを遺構・遺物の面から検討することにする。

1 文献にみる「草茂庄」

古代の信濃の荘園に関する文献・文字資料は乏しく、特に初期荘園に関する記載は草茂庄・大野庄のみである。「草茂庄」についてみるまえに若干歴史的環境について触れておくことにする。

『和名抄』に記載された古代の信濃の郡は伊那、諏訪、筑摩、安曇、高井、水内、埴科、更級、小県、佐久の10郡があり、筑摩郡は南を諏訪郡、北を安曇郡、更級郡、東を小県郡と境を接している。郡内は宗賀、良田、大井、山家、辛犬、錦部の6郷より成る(麻績郷が更科郡から編入されており実質には7郷から成る。なお編入の時期については不明である)。「草茂庄」が属す宗賀郷は筑摩郡の南部地域に位置し、由田、大井郷と接していたと考えられ、吉蘇路の松本平への入口として重要な位置にあったと考えられる。

信濃の国府は小県郡から筑摩郡に移転しており(もともと筑摩郡にあったとする説もある)、その年代には諸説がある。741年(天平13年)の諏訪国の併合とする見解と、国司の同時補任のみえる8世紀末の延暦年間とする見解に大きく分れる。松本平の開発を考える場合、国府の存否により大きく左右される。逆に言えば開発の様子から国府移転の時期を類推することができるのであろう。また国府の場所についても、大村、惣社、筑摩などの比定地があり確定はみない。いずれにせよ国府の移転により律令期の後半段階に筑摩郡は重要な位置を占めるに至ったことには変わりはないであろう。

さて、「草茂庄」が文献に現われるのは仁和3年(887年)4月13日の『多武峯略記』である。右大臣藤原冬緒が所領を多武峯の妙楽寺に施入した記事である。

「信濃國筑摩郡蘇我郷字草茂庄一處(田數等/在施入状)

右大納言藤原冬緒卿(濱成卿/之曾孫)、所奉施入也、彼冬緒卿所領十市郡椋橋郷山林治田、與當寺相論、而問彼卿身受病患、久不平癒、令卜筮之處、聖廟御崇云々、仍以彼林田永施入當寺、依為乏少彼信濃國所領相添奉施入之、委見于彼施入状、其時座主延安、上座聖澄、都維那寶叔也、聖廟靈德以之可知、仍為向後粗注子細、自餘田園等煩故不記之、委見于前後兩記、」(信濃史料第2巻)

とあり、「草茂庄」が筑摩郡蘇我郷にあり藤原氏の所領であったことが分かる。施入した内容については不明である。藤原冬緒は自分の所領である十市郡椋橋郷の山林治田について妙楽寺との間に争いが起きており、その後、病気にかかってしまい、占ったところ聖廟(藤原鎌足)の崇とでた。そこで十市郡椋橋郷の所領を施入したが、少なかったので信濃の「草茂庄」も添えて施入したという内容である。藤原冬緒は京家藤原氏に属す。施入の内容については明らかでない。

また、時期は前後するが「貞観寺田地目録帳事」(仁和寺文書)に波田・山形方面に比定されている「大野庄」の記載(867年貞観9年)が見られ施入の内容もわかり参考となる。

「信濃國庄一処/大野地百二町二段(在筑摩郡)/熟田十町三段百五十六歩/荒十一町二段五十四歩/未開八十町六段百五十歩」

とあり、他の所領とともに貞観寺に施入している。藤原良相は良房の弟で北家藤原氏に属しており、これも藤原氏の荘園であったことが分かる。また水田の半分は荒廃していたことがわかり、生産性が低かったことが窺える。

文献資料ではないが、考古遺物として銅印「長良私印」が出土した三間沢川左岸遺跡が、下神遺跡の西

約4kmにある。銅印は9世紀の後半に比定される22号住居址の覆土中より出土している(松本市教委 1988)。銅印の内容から長良とは藤原長良(802~856)の可能性が指摘されており、藤原氏の荘園遺跡であった可能性がある。藤原長良は北家藤原氏に属す。銅印がこの遺跡に付くかは慎重を帰さなければならないが、いずれにせよこの近辺に荘園の存在を考えてよいであろう。

これらわずかな史・資料から窺い知ること、(1)草茂庄が宗賀郷に属していたこと、(2)国府の対岸域にいくつかの荘園が広がっていたこと、(3)荘園内の様子は開発された水田のうち半数が荒廃田であったこと、多くの未開地を抱えていたこと、(4)9世紀の後半段階に領主の変更があること、(5)都から離れた信濃において予想以上に中央との結び付きが強いことなどが挙げられる。

(1)については、本遺跡から『草茂』の墨書土器が出土したことから宗賀郷の範囲をある程度限定することができると思われる。「草茂庄」の位置については古くから論及が行なわれており、『平出』(一志他 1955)、それに続く『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』(同郷土資料編纂会 1973)によると宗賀郷を奈良井川流域に比定しており、草茂庄を野辺の沢出土の毛抜き形太刀とむすび付けて洗馬方面に比定している。倉科明正氏(1981、1983)も宗賀郷を奈良井川流域に比定しているが、その範囲は塩尻市西半分、松本市芳川、笹賀、神林及び東筑摩郡山形村の一部にあてている。「草茂庄」もさらに北に考えている様であるが具体的には触れていない。これらの研究は古地名を基本とした考察であり、具体的な根拠の薄いものであった。今回の『草茂』の墨書の出土は宗賀の郷の範囲、「草茂庄」について具体的な資料を提供したことになる。

宗賀郷の北端がほぼ下神遺跡に当たり、鎖川を境界として大井郷と接していたと考えられる。下神遺跡は宗賀郷の中心(塩尻市平出遺跡を中心と考えれば)から離れており、しかも国府に遠くない位置に当たり、これは荘園としてこの地点を選定することは国司や旧来の有力者との関係において意味のあったことと考えられる。

(2)については、奈良井川の右岸域と左岸域では開発の事情が全く異なり、右岸地域が古くから開発が進んでいたのに対し、左岸域は開発が浅く8世紀代になる。これは古墳の分布にもはっきりと表われている。右岸域では中山古墳群のような古墳群が形成されるのに対し、左岸域では小規模な古墳群が形成されるのみで、時期的にみても最終末の古墳である。743年の墾田永年私財法などの土地私有を認める勸農政策以降開発が進むなかで、こうした未開発あるいは荒廃の状態のなかで、「大野庄」のように広大な山野が有力者により占有されていったものと考えられる。

(3)については当時の生産力を反映したものといえる。連作不能の地力しか持ちえないことを意味している。また、9世紀代には自然災害も多発しておりこれに拍車をかけたと考えられる。816・817年には連続して凶作に襲われており、838年には降灰、841年には地震の災害に見舞われている。887年には地震と洪水に見舞われている。これらの自然災害や農業技術の不安定さが階層分化に大きな役割を果たしたと考えられる。SB97のような所謂「富豪層」を生み出す一因となったのであろう。

(4)についてはこの時期は全国的に中央貴族が在地有力農民と結んで私領形成をした時期と一致した動きである。

(5)の藤原氏との関係であるが全く不明と言わざるをえない。8~9世紀代の国司などと関連するのであろうか。いずれにしても想像以上に中央との結び付きが強かったことが窺える。これは辛犬甘秋子の愁訴事件(885年仁和元年)で直接太政官に訴えていることからもうなずける。また、別項で述べたように遺物の面でも裏付けられる。

2 SB97と下神遺跡をめぐる諸問題

SB97を中心とする区画の内部は遺物の分布、遺物の特殊性、また遺構の特殊性などあらゆる部分で他地

区を圧倒していることを述べてきたが、ここで今一度整理しSB97という県内でも最大級の竪穴住居址を構築した指導者の一側面に迫ってみたい。

本址は前項において触れたように「草茂庄」の中核部分に位置する建物であると考えられる。この建物の特徴を挙げると隔絶した規模をもち、礎石を使用しているということ、また、竪穴住居址であることなどである。属性から見るとカマド、および石敷施設が存在し、厨房施設を持ち、羽口および炭化物、鉄滓の存在から鍛冶施設、工房としての性格をもつ。SB126の系譜から漆の消費にも係っていたことが予想される。庄家建物に付いては『東大寺領横江庄遺跡』(吉岡 1983)に詳しくまとめられているためこれを参考にしながらSB97の性格についてみることにする。

吉岡氏は庄家建物および庄家域についての構造的特質を郡衙と対比しながら3点に要約している。1、庄家域は3～5段を標準規模とし、柵、柴垣など簡略な施設で区画される。2、庄家建物の構成・配置は主屋と脇屋、付属屋舎をコの字形、あるいは逆L字形に配す定型的なものとは非定型的なものがある。3、庄家建物は5～6間2面の平面形式を最上位とする有力村落首長ないし土豪層の造作技術と労働力編成を指標とし、基本的には村落的建物と同質の側面が濃厚であり、経営面において在地への依存度がきわめて強い生産管理事務所であるとしている。また規格的に配置された庄家建物の機能について主屋を公的な管理業務の場、脇屋のうち有床建物を主屋の補助的業務ないし厨房、宿泊施設、無床建物を生活用具を格納する「厨屋」の可能性を指摘している。成立事情の異なる北陸地方の所謂初期荘園との比較は危険な面もあるが、ほぼ8～9世紀という同時期の遺跡で、ある程度参考とすることができる。

本遺跡の区画の規模は2分の1町以上あり、柵をとまなう溝によって区画されており、官衙などに共通する構造をもっており、これはかなりの労働力を必要とするもので1の条件に合致する。次に2の庄家建物であるが、規模の上からはSB97は床面積95.98㎡で十分な規模である。また、SB126についても79.78㎡で高瀬遺跡の主屋の規模に匹敵する。しかし、先にも触れたように、一方では礎石という先進的な側面をもちながら他方では竪穴住居址という非常に保守的な形態であること、あるいは厨房施設、工房施設を合わせもつことから庄家の主屋建物とみなすことはできないであろう。ただ、伏慮的なイメージの竪穴住居址ではなく掘立柱建物址に近い構造をもっていったことは間違いない。特にSB97新段階ではその様相が強い。SB97が主屋建物となる可能性は低く、別に存在したことになる。掘立柱建物址で主屋級の建物をさがしてみると、ST111が規模の面でも構造の面でも抜きん出ている。この建物は南面庇付きの大型の建物であるが、規模については明らかにすることはできないが、3間以上×4間の東西棟建物で、機能は建物内部に大甕遺構を伴い、倉庫あるいは厨屋と推定されることから否定的な見解とならざるをえない。ただしこの付近には柱痕跡をもつ土坑が集中しており、さらに建物が立つ可能性があり、ST111が主屋となりうる可能性も全く無いわけではなく、この仮説が成り立つとすればSB97が脇屋的機能を担っていたとも考えられる。いずれにせよ区画周辺からは陶硯5点が検出されており、区画内で荘園の管理業務が行なわれていたことは明らかであり、定型的な庄家ではなく、庄家が居住域に抱擁された未分化な状態にあったことが予想される。遺構の面からは庄家の構造を明らかにしえないが、SB97は実質的に庄経営を進める指導者の工房を兼ね備えた居宅と捉えることが妥当であろう。

次に出土遺物の面からみることにする。他遺跡にはみられない遺物の特殊性がある。灰釉陶器は初期段階(黒笹14号窯式期)としては量的にも多く見られ、独自の入手ルートあるいは経済的基盤をもっていったことを窺わせている。また、緑釉陶器は京都産に比定されており、直接的に結び付くかは疑問であるが、都とのつながりが考えられる。在地産の土師器・須恵器についても他遺跡においては確認されない一群が見られる。黒色土器Bの手法であるが赤色塗彩される皿、これとは別の赤色塗彩される一群、須恵器では県内では類例の少ない皿、大型の高杯や特大の杯BI・同蓋などの存在があげられる。これらの土器はオーダーメ

イドと考えられ量産品と区別して注目したい。土器の生産体制がどのようになっているかは現時点では不明であるが、これらの土器生産を把握している層との関係を示すものであろう。

これら遺物のなかで、本遺跡を特徴づけるのは豊富な文字関係資料である。墨書土器は総点数で500個体近く出土しており、量、質ともに充実している。特に『風』はSB97の象徴となる墨書である。SB97と関係の深い遺構であるSD108やSX30からは多様な文字が出土しており、一般集落以上の内容を含んでいる。そのなかにあつて『草茂』の墨書はSB97の指導者の性格を決定づけている。このほかにも人名、建物を表わす墨書も出土している。SB97から出土している『西戸舎』、SX30出土の『南殿』などは具体的に建物、人物像を提供してくれる。

また、本住居址の周辺からは3点の漆紙が出土しており注目される。現在のところ漆紙が確認されている遺跡は多賀城、胆沢城などの城柵、鹿の子、下野国府などの官衙関連遺跡などが圧倒的に多く、一般の集落遺跡などからはほとんど出土していない。これは紙の入手が国府及びその関連遺跡に限られていたことを示しており、下神遺跡を統括した人物は国府とも関連があつたと考えられる。漆紙は文字の存在は確認できたが遺存状態が悪くその内容については確認できないのが残念である。漆紙のもう一つの側面として漆の蓋紙として使用されたことが明かとなつており漆消費との係わりを指摘できる。事実SB126では生漆が出土しており、SB97でも継承されたと考えられる。

遺物の量の問題がある。SB97の周辺に投棄された土器の量は非常に多く、また、その器種は食器類、特に杯類の割合が高い。これは荘園経営のための田夫を組織するための供給に使われたのではないかと予想される。また、多量に出土した墨書土器とともに集落の祭祀権の把握とも関連するものと考えられる。

以上、遺構・遺物の特徴をまとめてみたが下神遺跡の指導者はどのような人物であつたのであろうか。ここで再構成してみると、開発の様子から古代の有力氏族とは考えられず、885年に国司、太政官をまきこむ事件を起こした辛犬甘秋子のような新興の勢力の像をだぶらせて考えることができる。いわゆる区画を伴う居宅SB97を構え、周辺に小型の住居址SB144・145など多数の人々が従属していた。これらの直接従属する人々は鍛冶などの工人であつた可能性がある。また墨書土器が示すようにこれらの従属した人々とは別に、ある程度の独立を保ちながら従属する集団が複数存在している。鍛冶集団の把握を通して鉄製農具などの支配や漆生産などを通して動産を蓄財し、墨書土器などを通して集落の祭祀権を把握したと考えられる。また、中央、国府とも密接なつながりをもつていた人物であつたことが予想できる。

第5章 結 語

今回の調査によって、古代を中心として縄文時代、中世・近世の遺構・遺物が検出されており、断続的ながらその足跡をたどることができた。特に古代においては『草茂』の墨書土器が示すように荘園として活発に活動した様子がわかる。遺構・遺物の分析は前段までに行なってきたが、ここでは歴史的な流れをたどり結語としたい。

下神遺跡に始めて足跡が残されるのは古く縄文時代まで遡るが、遺構等はなくその痕跡をわずかに残すのみである。本格的に歴史上に姿を現わすのは8世紀まで待たなければならない。8世紀前半に出現するのがSB21で単独で出現する。この成立に関しては隣接する中二子遺跡(松本市内その2)の動向と深く関わっていると考えられる。中二子遺跡は2～7期にかけての集落である。2期を頂点としてかなりの集落を築くが、3期以降急激に衰退してしまう。この段階で何らかの移動が考えられ、直接結び付くような遺物もなく推測の域を出ないが本遺跡に移動した可能性も全く無いわけではない。この時期の遺物として重要な鍵を握るのがSB21出土の墨書土器である。

集落としての様相を整えるのは4期であり、等質な集団から成っている。しかし、この段階では庄家に相当するような建物はなく荘園としては成立していないと考えられる(松本市調査分の中道地籍の内容・時期がわからないためわずかな可能性は残る)。

5期になると集落は遺跡全体へと展開し、大型の住居址であるSB126が成立する。この飛躍的な増加は自然増以上の力が働いた可能性があり、この段階を「草茂庄」の成立時期として捉えたい。SB126はSB97へと系譜のたどれる住居址であり中心的な役割を果たしたと考えられる。この段階ではSB78・121・SKS18号住居址などの大型住居址や区画を伴う集団があり、複数の有力な経営単位があったと考えられる。遺物の面でもSKKS10号住居址から三彩小壺が出土するなど質的に変化が見られる。多彩陶は県下では4点出土しているが、その中の一点が下神遺跡から出土している。

6・7期になるとSB97が成立し、複数あった経営主体がSB97に集約され、荘園経営も安定していたと考えられる。6期における『草茂』の墨書の存在や区画溝の成立は確実に「草茂庄」の存在を裏付けている。区画溝の開削にはかなりの労働力を必要とするものであり、この労働力を組織できる力を蓄えたことが分かる。7期になると区画内部の様相が大きく変化し、SB97と小型の住居址群との関係から一層階層分化が進んだ様相を捉えることができる。

下神遺跡の終末は9世紀の後半代に比定できる。「草茂庄」の施入は仁和3年(887年)であり、施入とほぼ前後する時期に終末を迎えるに至っている。これは一体どのような理由によるのであろうか。仁和3年の頃は大災害が多発した時期にあたり、仁和4年の大洪水は千曲川水系に大被害をもたらしたが、筑摩郡にも何らかの被害をもたらしたことが予想され、大地震などの被害と合わせて非常に疲弊した時期にあたる。下神遺跡の終末がこの時期に重なるのは偶然のことではなく、SD108の埋没が示すように流路の変化などにより耕地に変動があったと考えられる。つまり自然的要因により新しい可耕地をもとめて庄域内を移動したのではないかと考えられる。「大野庄」同様に未開地を多く抱えていたことは想像に難くない。鎖川を挟んで対岸に位置する三間沢川左岸遺跡は成立時期、遺構・遺物の内容などからも注目される遺跡である。

9世紀後半以降平安時代の遺構・遺物は確認されておらず、これ以降集落を形成することはない。

中世の遺物は非常に少なく、わずかに14世紀代の遺物が確認されているが、遺構は確認されていない。本遺跡の西方500mでは14～15世紀の土坑が確認されており、再び活動の痕跡が確認されるが集落の中心は

今回の調査地点より西側にあったことが予想される。中世の神林は神林郷として記録に残り、14世紀の半ばに下村と上村に分かれて分離する。この下村は現在の下神の集落へと続くものである。近世の遺構は畠址のみであり、生産域として機能し現在に至ったのであろう。

今回の調査によって文献で知るだけであった「草茂庄」についてより具体的な姿を明らかにすることができたと思えるが、確認された遺構は、庄家域の一部と集落の一部に留まっており今後の調査で明らかにされることが多いと思われる。また墨書土器を始めとする遺物についても新たな知見をもたらすことが予想される。今回の報告が今後の研究の一助となれば幸いである。

最後に発掘作業や整理作業に従事された方々や、終始御指導、御協力いただいた関係各位、諸団体の方々に対して心から謝意を表わす次第である。

参考文献一覧

- 秋田県教育委員会 1985 『払田柵跡Ⅰ』
- 石川県教育委員会 1969 『北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書(Ⅰ)』
- 伊野 近富 1982 「「葉椀」「葉皿」考」『京都府埋蔵文化財情報』第5号
- 王滝村教育委員会 1982 『崩越 崩越遺跡発掘調査報告書』
- 小笠原好彦 1984 「古代豪族の居宅の類型」『帝塚山考古学』4
- 各務原市教育委員会 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 神奈川県教育委員 1986 『三ツ俣遺跡』
- 岐阜県教育委員会 1975 『美濃不破関Ⅰ第1次・第2次発掘調査概報』
- 岐阜市教育委員会 1981 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 群馬県教育委員会 1988 「群馬県における古墳時代の居館跡」『三ツ寺Ⅰ遺跡』
- 国分寺市教育委員会 1980 「奈良時代の遺構と遺物」『多摩欄坂遺跡』
- 小諸市教育委員会 1988 『鋳物師屋ー長野県鋳物師屋遺跡発掘調査報告書ー』
- 斎藤 孝正 1981 「猿投・尾北・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』
1988 「中世猿投窯の研究 ー編年に関する一考察ー」『名古屋大学文学部研究論集』CI 史学34
- 笹沢 浩 1986 「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会誌』51
- 滋賀県教育委員会 1979 『弘川遺跡発掘調査報告書ー古代郷倉跡ー』
- 自然観察資料集作成委員会編 1983 『松本市盆地のおいたちをさぐる』松本市教育委員会ほか
- 信濃史料刊行会 1952 『信濃史料』第二巻
- 正倉院事務局 1976 『正倉院の金工』
- 田口 昭二 1982 「美濃の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211
1983 「美濃窯における白瓷と山茶椀」『美濃陶磁歴史館報』II
- 千葉市教育委員会 1980 『千葉市芳賀輪遺跡ー第7次発掘調査略報ー』
- 長野県教育委員会 1974 「山本田代遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書ー伊那市旧その2ー』
1974 「足場遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書ー諏訪郡富士見町内その1ー』
1989 「吉田川西遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物
- 入善町教育委員会 1975 『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』
- 奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告VI』
1983 「陶硯の分類」『埋蔵文化財ニュース』41
1984 「平城京における地鎮」『平城京左京三条二坊三坪発掘報告書』
- 奈良地区遺跡調査団 1986 『奈良地区遺跡群Ⅰ』下巻
- 浜松市教育委員会 1980 『伊場遺跡遺物編2』
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』III39-4
- 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上
- 平出遺跡調査会 1955 『平出』
- 平川 南 1989 「則天文字を追う」『歴博』34号 国立歴史民俗博物館
- 藤澤 良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号
1984 「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』III
1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要V』
- 藤原 健蔵 1967 「山形盆地の地形発達」『地理学評論』40-10
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III
- 松田 正昭 1984 「和歌山における地鎮・鎮壇の遺構」『古代研究』28・29 元興寺文化財研究所
- 松任市教育委員会 1983 『東大寺領横江庄遺跡』
- 松本市教育委員会 1981 『松本市新村島立条里的遺構』
1983 『推定信濃国府』

- 1984 『松本市下神・町神遺跡』
1988 『松本市島内遺跡群 北方遺跡II・北中遺跡』
1988 『三間沢川左岸遺跡(I)平安時代集落址の緊急発掘調査概報』
1989 『松本市下神遺跡』
向坂 綱二 1986 「考古料にみる水辺のまつり」 『日本考古学論集3』 吉川弘文館
森 郁夫 1984 「古代の地鎮・鎮壇」 『古代研究』 28・29 元興寺文化財研究所
山形村教育委員会 1987 『殿村遺跡』
横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について -型式分類と編年を中心として-」 『九州歴史資料館研究論集』 4
若尾 正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」 『美濃の古陶』

発掘調査及び執筆等の一覧(五十音順)

1 発掘調査担当者及び発掘調査記録の整理担当者

昭和60年度 調査第一部長 樋口昇一 第二部長 丸山徹一郎 第三部長 春原正毅
調査研究員 石上周蔵 市村勝巳 伊藤友久 上田典男 岡沢秀樹 小菅敏男 小平和夫
中野亮一 中村千尋 平林 彰 松田青樹 和田文人
調査員 百瀬陽三

昭和61年度 調査第一・第三部長 樋口昇一 第二部長 丸山徹一郎
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 伊藤友久 上田典男 岡沢秀樹 小平和夫 竹内 稔
豊田伸一 松田青樹 和田文人

昭和62年度 調査部長 宮沢恒之
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 小口 徹 小平和夫
小林俊一 小林 上 野村一寿 望月 映 百瀬新治

昭和63年度 調査部長 宮沢恒之
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 岡沢秀紀 小平和夫
野村一寿 望月 映 百瀬新治

平成元年度 調査課長 青沼博之
調査研究員 石上周蔵 小平和夫 野村一寿 望月 映

2 執筆者担当者

石上周蔵 第1章 第1節、第2節
第2章 第1節、第2節、第3節
第3章 第2節2～5、第3節2
第4章 第1節、第2節2～4 第3節、第4節
第5章

小口 徹 第1章 第3節

小平和夫 第3章 第2節1
第4章 第2節1

野村一寿 第3章 第1節、第3節1

3 その他

遺物実測 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 小平和夫 小林俊一 野村一寿 望月 映
百瀬新治

遺構写真焼き付け、遺物写真撮影・現像・焼き付け 青沼博之 岡沢秀樹 西山 克己

土層総括 小口 徹

金属製品保存処理 大竹憲昭 小林 上

編集 青沼博之 石上周蔵

付 表

付表1 竪穴住居址一覧表(1)

NO	位置	平面形	主軸方向	規 模				カ マ ド										諸 施 設			類 型	時 期	図版 No							
				規模の類型	主軸×直交軸 cm	床面積 m ²	深さ cm	床標高 m	位 置	構築	壁への掘込		煙 道			煙道の高さ cm	そ の 他	柱穴	柱間隔 cm	そ の 他										
											形	大きさ	主軸	長さ cm	傾き															
1	南部Ⅲ	隅方か	N85°E	-	-×320	-	40	610.70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	A	7	46			
2	南部Ⅲ	隅方か	N0°	中1	310×280	8.68	30	609.35	北壁西	粘土	-	-	N0°	115	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	D	7	45
3	南部Ⅲ	隅方か	N86°W	-	-×310	-	10	609.45	西壁か	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	45
4	南部Ⅲ	隅方か	N90°W	大2か	-×525	-	65	609.20	西壁中央	粘土	方	½	N90°W	160	10°	30	-	-	-	-	-	-	4+0	220	220	灰溜め貼床	B1	5	43	
5	南部Ⅲ	隅方	N0°	小	260×260	6.76	45	609.55	北壁中央	粘土	-	-	N0°	30	14°	25	-	-	-	-	-	-	-	-	P1	D	6	43		
6	南部Ⅲ	隅方	N91°E	中1	360×330	11.88	65	609.50	東壁中央	粘土	方	½か	N91°E	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	D	7	43	
7	南部Ⅲ	隅長2	N88°E	中2	380×470	17.86	55	609.60	西壁やや南	石組	-	-	N88°W	115	15°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	C2	5	42	
8	南部Ⅲ	隅方	N92°E	中1	310×305	9.45	45	609.55	東壁中央	粘土	-	-	N92°E	90	20°	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P2	D	7	42		
9	南部Ⅲ	隅長2	N96°E	中1	350×410	14.35	50	609.55	東壁やや南	石組	方	½	N96°E	150	27°	15	-	-	-	-	-	-	-	-	灰溜め床下土坑	C2	5	42		
10	南部Ⅲ	隅長1	N90°E	中1	350×390	13.65	45	609.70	東壁やや南	粘土	円	½	N90°E	60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P5貼床	D	4	41		
11	南部Ⅲ	隅方	N89°E	中2	450×480	21.60	45	609.65	東壁中央	粘土	-	-	N89°E	215	5°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床	D	5	41		
12	南部Ⅲ	隅方	N85°W	中1	350×370	12.95	50	609.62	西壁やや南	粘土	方	½	N85°W	150	18°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	D	6	41	
13	南部Ⅲ	隅方	N87°E	中2	405×410	16.60	45	609.55	東壁中央	粘土	方	½	N87°E	85	14°	10	-	-	-	-	-	-	4+0	250	160	灰溜めP1	B2	5	41	
14	南部Ⅲ	隅長1	N88°E	中1	290×320	9.28	30	609.70	東壁中央	石組	-	-	N88°E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	床下土坑	D	7	41		
15	南部Ⅲ	隅長2	N90°E	中1	400×360	14.40	45	609.65	東壁中央	粘土	-	-	N90°E	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P4	D	7	41		
16	南部Ⅲ	隅方か	N90°E	-	-×370	-	55	609.60	東壁中央	粘土	方	-	W90°E	230	5°	35	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床	-	4	40		
17	南部Ⅲ	隅長2	N93°W	中1か	-×370	-	50	609.60	西壁中央	粘土	-	-	N90°W	20°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰溜め貼床	D	5	40		
18	南部Ⅲ	隅方か	N86°W	中1か	-×325	-	60	609.50	西壁中央	粘土	-	-	N86°W	70	26°	15	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床	D	6	39		
19	南部Ⅲ	隅方	N95°E	中2	425×475	20.18	55	609.65	東壁中央	粘土	方	½	N95°E	-	-	15°	-	-	-	-	-	-	4+0	270	280	P4灰溜め	B2	5	37	
20	南部Ⅲ	隅長1	N1°W	中1	350×300	10.50	45	609.65	北壁中央	石組	-	¼	N1°W	120	15°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	P1	D	6	39		
21	南部Ⅲ	-	-	-	-×-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	45	
22	南部Ⅲ	隅方	N108°E	中1	370×370	13.69	50	610.30	東壁中央	粘土	-	-	N96°E	180	20°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煙道先P	D	7	37	
23	南部Ⅲ	隅方か	N96°E	中1か	-×340	-	25	609.65	東壁中央	粘土石	円	½	N96°E	35	15°	20	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床	D	7	44		
24	南部Ⅲ	方	N90°E	大1	610×605	36.91	45	609.75	東壁ほぼ中央	粘土	方	½	N90°E	210	20°	25	-	-	-	-	-	-	4+0	280	280	P3	B1	4	38	
25	南部Ⅲ	隅方	N100°E	中1	370×360	13.32	55	609.70	東壁ほぼ中央	粘土	-	-	N100°E	190	10°	30	-	-	-	-	-	-	-	-	灰溜めP2・平石	B5か	7	39		
26(新)	南部Ⅱ	隅方	N104°E	中1	335×350	11.70	60	609.20	東壁やや南	粘土	-	-	N104°E	160	25°	10	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床	D	6	35		
(古)	南部Ⅱ	-	N-	-	-×-	-	-	-	東壁ほぼ中央	-	-	-	N114°E	175	13°	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煙道先P遺物多量	A	6	35		
27(古)	南部Ⅱ	隅長2	N107°E	中1	420×350	14.70	50	610.30	東壁中央	粘土	-	-	N107°E	140	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床	D	5	35		
27(新)	南部Ⅱ	隅長2	N107°E	中2	420×500	21.00	50	610.30	東壁南	粘土	方	½	N107°E	120	12°	10	-	-	-	-	-	-	-	-	灰溜めP3	D	5	35		
29(新)	南部Ⅱ	隅長	N102°E	大1	510×515	25.75	50	610.30	東壁やや南	粘土	方	-	N102°E	215	19°	10	-	-	-	-	-	-	4+2	270	185	P13頭骨・貼床	B2	6	33	

竪穴住居址一覧表(2)

NO	位置	平面形	主軸方向	規 模				カ マ ド							諸 施 設			類 型	時 期	図版 No								
				規模の類型	主軸×直交軸 cm	床面積 m ²	深さ cm	床欄高 cm	位 置	構築	壁への掘込	煙 道			煙道口の高さ cm	そ の 他	柱穴				柱間隔 cm	そ の 他						
										形	大きさ	主軸	長さ cm	傾き														
29 (古)	南部 II	-	-	-	- × -	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	33			
31	南部 II	隅方	N107°E	中 2	425×395	16.79	30	610.65	東壁中央	石組	方	-	N107°E	30	25°	10	函形カマド						D	5	32			
32	南部 II	隅方	N4°E	中 1	330×320	10.56	30	610.65	北壁西	粘土	方	1/4	N4°E	140	28°	25	函形カマド						貼床	D	5	32		
33	南部 II	隅方	N107°E	中 1	345×330	11.38	30	610.50	東壁やや南	粘土	方	1/4	N107°E	-	-	-	函形カマド						P4	D	6	31		
34	北部 III	隅長 2	N103°E	中 1	410×545	22.35	30	608.85	東壁やや南	粘土	方	-	N103°E	-	-	-	函形カマド						灰溜め周溝・貼床	C2	3	70		
35	南部 III	隅長 1	N92°E	中 1	375×330	12.38	25	609.60	東壁中央	粘土	-	-	N92°E	-	-	-	函形カマド							D	7	42		
36	北部 III	隅方	N91°W	中 1	315×310	9.77	15	607.95	西壁中央	粘土	円	1/4	N91°W	-	-	-	煙道先 P						灰溜め	D	5	70		
37	南部 III	-	-	-	- × -	-	-	609.65	北壁中央か	粘土か	-	-	N4°E	185	20°	20	煙道先 P							-	6	41		
38	南部 I	隅方	N89°E	中 1	350×350	12.25	30	611.25	東壁中央	粘土	-	-	N89°E	70	12°	15							灰溜め2周溝・P1	D	5	21		
39	南部 I	隅方	N4°E	中 1	380×400	15.20	55	611.25	北壁やや西	粘土	方	1/4	N4°E	190	15°	30	煙道先 P 函形カマド								D	6 (7)	21	
40	南部 I	-	N92°W	中 2 か	- × 490	-	50	611.60	西壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-							石組施設貼床	D	6	18		
42	南部 II	-	N92°E	中 1 か	- × 375	-	55	610.10	東壁ほぼ中央	粘土	方	1/4	N92°E	150	30°	15	函形カマド 煙道先 P								D	6	32	
43	南部 II	隅長 2	N85°W	中 1	420×345	14.49	50	610.65	西壁中央	粘土	-	-	N85°W	50	40°	15							貼床	D	6	26		
44	南部 II	隅方	N110°E	小	300×290	8.70	35	610.80	東壁中央	粘土	方	1/4	N110°E	150	20°	15	煙道先須恵器甕 D・石 函形カマド							灰溜め貼床	D	6	26	
45	南部 I	隅長 1	N4°E	小	245×200	4.90	40	612.30	北壁やや東	粘土	-	1/4	N4°E	30	-	-							貼床	D	5	14		
46	南部 I	隅長 2 か	N85°W	中 1	300×(380)	(11.4)	30	612.15	西壁やや北	粘土	-	-	N85°W	170	20°	15	煙道先 P						貼床	D	5	14		
47	南部 I	隅方	N86°W	中 1	350×355	12.42	45	612.25	西壁中央か	-	-	-	-	-	-	-							灰溜め貼床	D	5	14		
48	南部 I	隅方	N90°E	大 1	510×510	26.01	70	611.70	東壁中央か	-	-	-	-	-	-	-							4 + 0 240 250	P3	B1	6	16	
49	南部 I	-	N85°W	-	300 × -	-	20	612.15	東壁中央か	粘土	方	-	N85°W	150	30°	10	函形カマド 煙道先 P								D	5	14	
50	南部 I	隅方	N86°W	中 2	440×465	20.46	65	612.80	西壁やや南	粘土	-	-	N86°W	120	30°	100	煙道先 P 石 3 函形カマド							2 + 2 か	P 7 集石・貼床	B8	6	17
51	南部 II	隅長 2	N103°E	中 1	420×295	12.39	30	610.00	東壁やや北	粘土か	-	-	N103°E	-	-	-							4 + 0 か	365 220	P4	C1	7	31
52	南部 II	隅方	N101°E	中 1	375×350	13.13	35	610.55	東壁中央	石組	-	-	N101°E	65	30°	15								灰溜め P4・周溝	D	7	28	
53	南部 II	隅方	N119°E	中 1	355×340	12.07	45	610.50	東壁中央	粘土	方	1/4	N119°E	60	5°	20	函形カマド							灰溜め貼床	D	5	28	
54	南部 II	隅方	N28°E	中 1	320×300	9.60	55	610.45	北壁やや東	粘土	方	1/4	N28°E	140	18°	20	煙道先 P 石 2 函形カマド							灰溜め貼床	D	5	29	
55	南部 II	隅方	N103°E	中 2	440×450	19.80	60	610.45	東壁中央	粘土	方	1/4	-	-	-	-							周溝 P 4・貼床	D	6	29		
56	南部 II	隅方	N86°W	中 1	320×315	10.08	30	610.70	西壁やや南	粘土	方	1/4	N86°W	15	5°	20	函形カマド								D	6	27	
57	南部 II	隅方	N103°E	中 1	325×335	10.88	45	610.70	東壁やや南	粘土	方	1/4	N103°E	-	-	-	函形カマド								D	7	27	
58	南部 II	隅方	N11°E	中 1	325×320	10.40	20	611.05	北壁東	粘土か	-	-	-	-	-	-							灰溜め小 P10	D	5	27		
59	南部 II	隅方	N103°E	中 1	300×300	9.00	30	610.90	東壁やや南	石組	円か	1/4	N103°E	50	20°	10										D	7	27
60	南部 II	隅方	N102°E	中 2	455×495	22.52	40	610.75	東壁中央	粘土	方	1/4	N102°E	160	15°	20	函形カマド 煙道先 P							灰溜め	D	5	26	
61	南部 II	隅方	N118°E	中 1	(360)×350	-	40	610.80	東壁	粘土	方	1/4	N118°E	-	-	-	函形カマド							P1 貼床	D	5	26	
62	南部 II	隅方	N97°E	中 1	300×290	8.70	40	610.85	東壁	粘土	方	1/4	N97°E	55	5°	30								周溝貼床	D	7	27	

竪穴住居址一覧表(3)

NO	位置	平面 形状	主軸 方向	規 模				カ マ ド							諸 施 設			類 型	時 期	図版 No			
				規模 の 類型	主軸×直交軸 cm	床面積 m ²	深さ cm	床標高 cm	位 置	構築 材	壁への掘込 形 大きさ	煙 道			煙道 口の 高さ cm	そ の 他	柱穴				柱間 間隔 cm	そ の 他	
												主軸 長さ cm	傾き	傾き									
63	南部II	隅長2	N7°E	中1	320×395	12.64	15	611.15	北壁西	石組	-	-	N7°E	-	-	-				C2	5	25	
64	南部II	隅方	N104°E	中1	345×320	11.04	50	610.90	東壁やや南	粘土	方	-	N104°E	65	23°	25	函形カマド 煙道先P			貼床	D	6	25
65	南部II	隅方	N108°E	大1	510×525	26.78	55	610.95	東壁中央	粘土	-	1/4	N108°E	70	26°	10		4+2か	-	P4 貼床	B4か	7	23
66	北部III	隅方	N109°E	中1	330×340	11.22	40	607.30	東壁ほぼ中央	粘土	方	1/2	N109°E	60	22°	20	函形カマド			貼床	D	6	71
67	北部III	隅方	N81°E	中1	300×305	9.15	40	607.70	東壁やや南	粘土	方	1/2	-	-	-	-	函形カマド			貼床	D	5	70
68	北部III	隅方	N3°E	中2	430×440	18.92	35	607.70	北壁中央	粘土	-	-	N3°E	60	13°	15				P4 貼床	D	6	71
69	北部III	隅方	N90°?	中2	420×385	16.17	50	607.70	ナシ	-	-	-	-	-	-	-				A	4~5	72	
70	北部III	隅方か	N90°(E)	-	-×-	-	60	607.35	-	-	-	-	-	-	-	-				貼床	D	6	75
71	北部III	隅方か	N91°W	-	-×-	-	45	607.10	西壁	粘土	方	1/2か	N91°W	160	22°	25	函形カマド 煙道先P				D	5	77
72	北部III	隅方か	N93°E	大1	480×495 (565)	24.35	70	606.80	東壁	粘土	方	1/2	N93°E	145	30°	40	函形カマド 煙道先P			灰溜め P3	D	5	77
73	北部III	隅方か	N95°(E)	-	-×-	-	25	607.25	-	-	-	-	-	-	-	-				A	6	75	
74	北部III	-	N96°(E)	中1	355×275	9.75	50	607.55	ナシ	-	-	-	-	-	-	-				焼土	A	5	73
76	北部III	隅方	N92°E	中2	465×465	21.62	80	607.35	東壁中央	石組	-	-	N92°E	55	36°	30					D	7	73
77	北部III	隅方	N89°E	中2	445×455	20.95	75	607.40	東壁中央	石組か	-	-	N89°E	170	22°	20	煙道先P	4+0か	330 210	灰溜め P3	B6	6~7	73
78	北部III	方	N90°E	超大	930×880	81.84	45	607.60	東壁	-	-	-	-	-	-	-	煙道先P四耳壺	4+10か	380 370	周溝・礎石	F	5	73
82	北部I	隅方	N93°E	中1	350×410	14.35	35	608.55	東壁中央	石組	方	1/2	N93°E	65	22°	15	函形カマド			貼床	D	6	55
83	北部II	方	N88°W	中1	340×360	12.24	55	608.00	西壁中央	粘土	方	1/2	N88°W	160	28°	15	函形カマド 煙道先P				D	5	63
84	北部II	隅方	N91°E	大1	585×550	32.17	50	608.15	東壁中央	粘土	-	-	N91°E	180	20°	10	煙道先P	4+0	300 300	周溝 P1・貼床	B1	4	60
85	北部II	方	N92°E	大1	555×580	32.19	65	608.00	東壁中央	粘土	-	-	N92°E	210	8°	10	左袖に石組	4+0	286 294	周溝 P4・貼床	B1	3	61
87	北部II	隅方	N98°E	中1	345×340	11.70	50	608.15	東壁中央	粘土	方	1/2	N98°E	100	23°	10	函形カマド	4+0	200 195	P1 貼床	B1	5	58
88	北部II	隅長1	N78°W	中1	335×380	12.73	45	608.00	西壁北	石組	円	1/2	N78°W	55	25°	30					D	6~7	59
89	北部II	方	N90°W	中1	295×315	9.20	35	608.05	西壁やや南	石組か	方	1/2	N90°W	80	25°	20	カマド石抜き痕			灰溜め	D	7	61
90	北部II	方か	N90°(E)	大1か	-×595	-	45	607.75	-	-	-	-	-	-	-	-		4か		P4 貼床	B1	5	61
91	北部II	隅方か	N90°W	中1か	-×355	-	30	608.05	西壁やや南	石組	-	-	-	-	-	-				灰溜め P2	D	6	57
92	北部II	隅方	N97°W	中2	460×450	20.70	60	907.85	東壁南	石組	方	1/2	N97°E	185	23°	20	煙道先P			灰溜め 貼床	D	6	59
93	北部I	隅方	N95°(E)	中2	415×410	17.01	25	908.50	ナシ	-	-	-	-	-	-	-		6+2		火処 貼床	B4	7	54
95	北部II	方	N92°E	中2	390×410	15.99	50	607.90	東壁中央	粘土	方	1/2	N92°E	160	25°	15	函形カマド 煙道先P				D	5	65
96	北部I	隅方	N99°E	中2	430×450	19.35	55	608.20	東壁中央	石組	-	-	-	-	-	-				灰溜め	D	7	54
97	北部I	隅方	N95°E	超大	1005×955	95.98	55	608.35	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	袖先端に石組	4+14	420 420	石敷き施設 礎石	F	7	52
99	北部I	隅方	N92°W	中1	335×305	10.22	35	608.40	西壁中央	粘土	方	1/2	N92°W	25	13°	30	函形カマド			灰溜め	D	7	55
100	北部I	隅方	N99°E	中1	355×(350)	12.42	40	608.45	東壁南	石組	方	1/2	-	-	-	-				灰溜め	D	7	55
101	北部I	隅長1	N77°W	小	240×290	6.96	35	608.15	西壁やや南	石組	-	-	N77°W	140	8°	20	煙道先P			灰溜め P1	D	7	64

竪穴住居址一覧表(4)

NO	位置	平面形	主軸方向	規 模				カ マ ド							諸 施 設			類 型	時 期	図版 No				
				規模の類型	主軸×直交軸 cm	床面積 m ²	深さ cm	床標高 cm	位 置	構築	壁への掘込		煙 道			煙道口の高さ cm	そ の 他				柱穴	柱間隔 cm	そ の 他	
											形	大きさ	主軸	長さ	傾き									
102	北部 III	隅方	N86°E	中 1	335×335	11.22	40	607.90	東壁やや南	粘土か	-	-	-	-	-			貼床	D	7	69			
103	北部 III	隅方	N91°E	小	265×265	7.02	20	608.10	東壁ほぼ中央	石組	-	-	N91°E	30	12°	20				D	7	69		
104	北部 III	方	N91°E	中 1	330×360	11.88	40	607.90	東壁中央	粘土	方	1/4	N91°E	30	28°	20		函形カマド		D	6	69		
105	北部 III	隅方	N97°E	中 2	390×385	15.02	45	608.00	西壁中央	粘土	円	1/4	N97°W	40	30°	10		函形カマド		小礫集石	D	7	69	
106	北部 III	隅方	N112°E	小	300×300	9.00	35	608.00	東壁南	粘土	-	-	-	-	-			灰溜め	D	6	69			
107	北部 III	隅方	N85°W	中 1	335×335	11.22	45	607.80	西壁ほぼ中央	粘土	方	1/4	N85°W	45	18°	25		函形カマド		灰溜め貼床・P1	D	6	68	
108	北部 III	隅方	N85°E	中 2	485×440	21.34	65	607.60	東壁中央	粘土	方	1/2	N85°E	210	21°	25		煙道先 P 石		灰溜め段状施設	D	6	68	
109	北部 III	隅長 1	N105°E	中 1	325×320	10.40	55	607.70	東壁中央	粘土か	-	-	N105°E	100	18°	20			灰溜め貼床	D	7	68		
110	北部 III	隅方	N97°E	中 1	345×405	13.97	45	607.80	東壁やや南	粘土	-	-	N97°E	45	13°	30			貼床	D	6	68		
111	北部 III	隅方	N2°W	中 1	365×370	13.51	25	607.50	北壁やや西	石組	円	1/4	-	-	-	-		カマド石接合		周溝・貼床 灰溜め	D	7	80	
112	北部 I	-	N76°E	小か	-×260	-	20	608.50	東壁中央	石組	-	-	-	-	-			貼床	D	7	49			
113	北部 I	隅長 2	N108°W	小	240×320	7.68	20	608.70	西壁やや北	粘土か	円か	-	-	-	-				C2	7か	51			
114	北部 I	隅方	N91°E	中 1	335×315	10.55	25	608.55	東壁やや南	石組か	-	-	N91°E	20	45°	10				D	7	51		
115	北部 I	隅長 2か	N96°W	中 2	350×430	15.05	40	608.45	西壁やや北	石組	-	-	N96°W	30	17°	25		カマド石接合			C2	7	51	
116	北部 I	-	N89°W	中 1か	-×320	-	30	608.50	西壁中央	石組	-	-	-	-	-			カマド石接合		灰溜め P1	D	7	51	
117	北部 I	隅長 1	N96°E	小	300×260	7.80	25	608.55	東壁中央	粘土か	-	-	N96°E	20	-	-			床下土坑	D	7	53		
118	北部 III	隅方	N85°E	中 1	335×360	12.06	40	607.85	東壁やや南	粘土	方	1/4	N85°E	220	12°	30		煙道先 P 石 函形カマド		灰溜め P3	D	5	70	
119	北部 III	方	N94°E	中 1	365×350	12.78	25	608.10	東壁中央	粘土	円	1/4	-	-	-			貼床	D	5	72			
120古	北部 III	隅方	N83°E	大 1	600×570	34.20	45	607.85	東壁ほぼ中央	粘土	-	-	N83°E	180	17°	20		煙道先 P	4 + 0	325 300	P1 貼床	B1	4	72
120新	北部 III	隅方	N7°W	大 1	570×600	34.20	45	607.85	北壁中央	粘土	-	-	N7°W	-	-	-			4	360 325	周溝 貼床	B1	4	72
121	北部 III	隅長 2	N90°E	大 2	745×585	43.58	75	607.55	東壁ほぼ中央	粘土	方	1/4	N90°E	275	18°	15		函形カマド	4 + 1	385 360	P2 貼床	B1	5	74
122	北部 III	隅長 1	N81°E	大 2	640×550	32.20	20	607.20	東壁ほぼ中央	石組か	円	1/4	-	-	-			6 + 3	210	礎石か 貼床	Fか	6	80	
123	北部 II	隅方	N96°E	中 1	360×360	12.96	55	608.10	東壁中央	粘土	方	1/4	N96°E	135	20°	20		カマド石抜き取り痕 函形カマド・煙道先 P		P1 貼床	D	5	58	
124	北部 II	隅方	N91°E	中 1	460×460	21.16	45	608.25	東壁中央	粘土	-	-	N91°E	200	5°	25		煙道先 P	4 + 0	220か 220か	P3	B1 か	4	60
125	北部 II	隅方	N102°E	中 1	320×335	10.72	50	608.10	東壁やや南	粘土	-	-	N102°E	170	10°	30		煙道先 P		灰溜め	D	7	62	
126	北部 I	隅長 1	N98°E	超大	985×810	79.78	45	608.40	東壁中央	粘土か	-	-	N98°E	195	20°	30		煙道先 P 石組	4 + 0	410 365	火処 1 P6 貼床	B1	5	52
127	北部 I	隅方	N98°E	大 1	500×490	24.50	45	608.40	東壁やや南	粘土か	-	-	N98°E	200	18°	30		煙道先 P		P3	D	5	52	
128	北部 II	隅方	N98°E	中 2	410×450	18.45	55	608.20	東壁	-	-	-	-	-	-			4 + 0	190 195		B1	5か	62	
129	北部 II	隅方	N105°E	中 2	450×460	20.70	50	608.20	東壁やや南	石組	-	-	N105°E	60	33°	30		カマド石接合		灰溜め	D	7	60	
130	北部 II	隅長 2	N104°W	中 1	300×385	11.55	50	608.25	西壁ほぼ中央	粘土	-	-	N104°W	20	40°	15				C2	4	62		

竪穴住居址一覧表(5)

NO	位置	平面形	主軸方向	規 模				カ マ ド							諸 施 設			類 型	時 期	図版 No			
				規模の 種類	主軸×直交軸 cm	床 面 積 m ²	深 さ cm	床 欄 高 cm	位 置	構 築	壁への掘込		煙 道			煙道 口の 高さ cm	そ の 他				柱穴	柱間 間隔 cm	そ の 他
											形	大 小	主 軸	長 さ cm	傾 き								
131	北部II	隅長2	N71°W	中1	255×385	9.82	45	608.20	西壁中央	石組	-	-	-	-	-	40			灰溜めP2	C2	7	58	
132	北部II	方	N75°W	中1	290×325	9.42	30	608.20	西壁中央	粘土	方	1/2	N75°W	30	15°	25	函形カマド				D	5	58
133	北部I	隅方	N79°W	中1	380×350	13.30	35	608.40	西壁中央	粘土	方	1/2	N79°W	130	34°	10	函形カマド			カマド石集	D	7	54
134	北部I	隅方	N7°E	中1	315×305	9.61	45	608.35	北壁東	粘土	-	-	N7°E	30	38°	10			貼床	D	7	54	
135	北部I	隅長2	N96°E	中1	395×340	13.43	40	608.50	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-				D	7	54	
136	北部I	隅長1	N85°E	中1	320×370	11.84	30	608.70	東壁やや南	石組	-	-	-	-	-	-			カマド石集	D	7	54	
138	北部II	隅長2	N90°E	中1	405×350	14.17	45	608.20	東壁中央	粘土	円	1/4	N90°E (130)	2°	15				床面焼土 周溝	D	4	62	
139	北部II	隅方	N91°E	中1	370×360	13.32	50	608.15	東壁やや南	粘土	方	1/2	N91°E	185	12°	25	函形カマド 煙道先P			灰溜め	D	5	62
140	北部II	方	N90°E	中2	450×450	20.25	50	608.20	東壁中央	粘土	方	1/2	N90°E	170	27°	20	貼床 函形カマド			P2	D	5	62
141	北部II	-	N96°W	中2か	415×-	-	40	608.20	-	粘土か	方か	-	N96°W	-	-	-	函形カマドか				D	5	64
142	北部II	隅方	N101°E	中1	370×360	13.32	50	608.00	東壁中央	粘土 石組	方	1/2	N101°E	140	15°	20	カマド石接合 函形カマド 煙道先P			P2 周溝	D	5	64
143	北部I	方	N2°E	中2	450×450	20.25	55	608.15	北壁やや東	石組	方	1/4	N2°E	170	29°	15	函形カマド			P1 貼床	D	6	55
144	北部I	-	N99°E	小か	265×-	-	25	608.60	東壁	石組	-	-	-	-	-	-				C2	7	53	
145	北部I	隅長2	N93°E	小	220×275	6.05	30	608.60	東壁北	石組	-	-	-	-	-	-				D	7	53	
146	北部I	隅方	N84°W	中1	310×320	9.92	30	608.50	西壁中央	石組か	-	-	-	-	-	-			P1	D	7	53	
147	北部I	隅方1	N93°E	中2	410×480	19.68	60	608.20	東壁中央	粘土	-	-	N93°E	190	20°	20	函形カマド 煙道先P				D	6	53
148	北部I	隅方	N92°E	大1	550×540	29.70	40	608.20	東壁中央	石組	-	-	N92°E	200	20°	30			4+ 0か	P8 貼床	B1か	6	55
149	北部II	隅方	N92°E	中2	450×480	21.60	45	608.20	東壁中央	粘土	方	1/2	N92°E	170	22°	10	煙道先P 函形カマド 煙道先P			周溝・灰溜め P5	D	5	57
150	北部II	隅方	N1°E	中1	330×300	9.90	30	908.20	北壁やや西	石組	-	-	N1°E	100	15°	20	抜取り痕			灰溜め	D	6	57
151	北部II	-	N105°E	中1か	-×320	-	40	608.25	東壁やや北	粘土	方	1/2	N105°E	110	-	15	函形カマド				D	5	56
152	北部II	隅方	N97°E	中2	400×400	16.00	45	608.15	東壁中央	石組	-	-	N97°E	45	19°	30			灰溜め	D	7	56	
153	北部III	隅方	N93°E	小	290×260	7.54	35	607.90	東壁中央	粘土か	-	-	-	-	-	-				D	5	73	

付表2 掘立柱建物址一覧表(1)

遺溝 番号	位置	主軸方向	規 模				柱 間 間 隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	図版 番号
			桁行×梁間 (間) (間)	桁行×梁間 (cm) (cm)	面積 (m ²)	桁行 (cm)	梁間 (cm)	形	規模 (cm)			
1	南III	N1°E	2×2	460	375	17.25	225-240	170-180	円	48-70		41
2	〃	N2°W	2×1	342	340	11.63	160-180	330-340	円方	62-68		40
3	〃	N0°EW	2×2	363	360	13.07	180-195	170-190	方	53-67	総柱建物 須恵器杯B・土師器甕	39
4	〃	N9°E	2×1	340	290	9.86	160-175	280-310	方	60-80		37
5	〃	N6°W	1×1	280	260	7.28	270-280	250-265	円	50-60		46
6	南II	N14°E	2×2	375	330	12.38	175-190	160-175	方	65-90	総柱建物、根石あり 須恵器杯A、蓋、鉢	34
7	〃	N16°E	2×2	300	290	8.70	150	135-165	方	42-60	総柱建物	32
8	〃	N14°E	3×2	465	435	20.23	150-170	215-240	円方	50-60		32・34
9	〃	N14°E	3×2	470	380	17.86	150-170	190-205	方	48-65		32
11	〃	N12°E	2×2	400	390	15.60	180-400	180-200	方	25-70		36
12	〃	N12°E	2×2	385	290	11.17	120-140	140-150	円方	45-62		35
13	南III	N16°E	2×2	400	390	15.60	180-200	190-200	円	30-65		34
14	〃	N3°W	1×1	235	235	5.25	235-240	235-240	円	20-30		40
15	南I	N7°E	2×1(2)	320	240	7.68	240	300-320	方	30-60		18
16	〃	N3°E	2×2	335	325	10.89	160-180	150-170	方	42-52		16
17	〃	N5°E	2(3)×2	280 (420)	365	10.22 (15.33)	135-150	175	円	40-40		14
18	南III	N94(4)°E	2×1	400	300	12.00	180-220	300	円方	40-70		41・43
19	南I	N6°E	2×2	415 (535)	420 (550)	17.43 (-)	195-210	205-220	円	35-45	北側張り出しあり 東側庇か 近世か	15
20	〃	N6°E	3×2	655	450	29.48	210-230	205-235	円	40-55	南面庇付	19
21	〃	N96(6)°W	2×2	375	365	13.69	160-200	180-205	方	45-50	総柱建物	17
22	〃	N94(4)°W	2×2	385	335	12.90	180-200	165-180	円	80-94	総柱建物	17
23	〃	N1°E	3×2	500	390	19.50	160-200	170-200	円	47-69		17
24	〃	N6°E	2×1	315	300	9.45	310-325	145-155	円	30-39		24
25	〃	N5°E	2×2	445	370	16.47	220-225	180	円	47-64		24
26	南II	N15°E	2×1	350	330	11.55	160-190	335	円	25-36		31
27	〃	N14°E	2×1	375	405	15.18	360-380	190-220	円	25-48		29
28	〃	N9°E	2×2(1)	475	370	17.57	205-270	115-200	円	53-80		27
29	〃	N66°W	1×1	150	130	1.95	150	125-130	円	37-40		31
30	北III	N4°W	2×1	310	305	9.45	150-160	305	方	60-75		75

掘立柱建物址一覧表(2)

遺溝 番号	位置	主軸方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方		備 考		図版 番号	
			桁行×梁間 (間) (間)	桁行×梁間 (cm) (cm)	面積 (m ²)	桁間 (cm)	梁間 (cm)	形	規模 (cm)	付属施設・遺物など			
101	北III	N3°E	2×2	435	350	15.23	215-225	170-180	方	65-85	総柱建物	69	
102	〃	N0°EW	3×2	607	440	26.71	190-220	205-235	方 円	70-95		69	
103	〃	N7°W	3×2	418	380	15.88	125-155	180-200	方	60-85	総柱建物	71	
105	〃	N8°E	2×2	370	270	9.99	180-185	125-140	方	75-90	総柱建物	68	
106	〃	N2°W	2×2	450	332	14.94	150-170	160	円 方	55-85		69	
107	〃	N95°E	3×2	685 (452)	400	27.40	210-235	185-220	方	40-77	西面庇付	75	
108	北II	N2°E	2×2	335	330	11.05	160-175	165	方	35-80	総柱建物	58	
109	北III	N92°E	2以上×2	-	350	-	270	180	方	80-90		68	
110	北II	N7°E	2(3)×2	359	292	10.48	105-181	140-160	方	50-60		62	
111	北I	N102°E	3以上×4	-	738 (525)	-	170-175	170-220	方 円	50-95	南面庇付 大壘埋設	遺物多	56
112	北II	N100°E	2×2(1)	405	395	16.00	200-210	190-260	円	42-80		64	
113	北III	N92°E	3×2	540	445	24.03	185-215	200-255	方	52-89		79	
114	〃	N92°E	3×2	535	405	21.67	180-190	205	方	60-72		79	
115	〃	N3°E	3×2	490	395	18.17	150-175	180-200	方	65-75		70	
116	〃	N0°E	2×1	315	400	12.60	145-170	395-415	円	30-40		76	
120	北II	N3°W	2×2	435	350	15.23	210-220	175	方	60-85	総柱建物	63	
121	北II	N5°E	2×2	455	375	17.06	195-235	170-200	円	50-65		60	
122	北I	N102°E	3×2?	560	510	28.56	175-160	240-260	方	90-60		54・56	
123	〃	N6°E	2×2	505	460	23.23	220-245	235-255	方	55-95		57	
124	北II	N5°E	2×2	335	340	11.39	165-170	160-185	方	77-100	総柱建物	61	
125	南II	N16°E	3×2	450	385	17.32	150-160	190-200	円	25-70		34	
126	〃	N19°E	3?×2	525	430	22.75	160	200-230	円	35-55		34	
127	南III	N4°E	3?×3?	520	530	27.56	160-180	160-180	円	60-85		40	
128	南III	N2°E	1×1(2)	360	325	11.90	360	160-325	方	40-55		39	
129	北I	N96°E	2×2	570	370	21.09	180-370	180-200	円 方	55-90		56	
130	北III	N90°E	3×2	610	420	25.62	200-210	210	方 円	60-		69	
131	北III	N6°E	2×1	410	285	11.68	200-210	280-290	円	30-80		68・70	
132	北III	N1°E	3×1?	590	430	25.37	180-220	430	円	35-60		74	
133	北I	N90°E	1×1	545	485	26.43	545	480	方	65-80		50	

附表3 遺構別古代土器一覽表 (1)

・数量は、個体識別によって数えた個体数で表した。
 ・溝址については、重量によって、表示した。

遺構番号	土器器										煮炊具										貯蔵具										個体総数									
	土器器A					黒彩色B					須急器					陶器器					須急器					陶器器														
	杯C	杯A	碗	皿A・耳皿	盤A	高杯	鉢・鉢A	他	杯A	碗	皿A・B	鉢A	鉢A	鉢A・B	鉢A・B・C	高杯	他	杯A	碗	皿	陶器器	陶器器	須急器	須急器	陶器器	陶器器	須急器	須急器	陶器器	陶器器		陶器器	陶器器							
	杯D・E・F	杯A	碗	皿A・B	鉢A	高杯	鉢・鉢A	他	杯A	碗	皿A・B	鉢A	鉢A	鉢A・B	鉢A・B・C	高杯	他	杯A	碗	皿	碗	皿	陶器器	陶器器	須急器	須急器	陶器器	陶器器	須急器	須急器		陶器器	陶器器							
SB1		5							2	1								2								5	1					2								
SB2			1	2					6	2									2							3													21	
SB3		4	2						2										1						5	3													42	
SB4	6					1			30	10	12									(1)					5	5													19	
SB5						1			4																2	1													93	
SB6									23	6	1	1													8	2													18	
SB7	2								4	2														1	4	2													69	
SB8									3																1	4	2												26	
SB9									7	3	1														5	1													28	
SB10	1								4	2														6	1														28	
SB11									1															1	1														21	
SB12									9	1	3													1	1														6	
SB13	1								8															4	1														38	
SB14									6	5															4														25	
SB15									5																9														40	
SB16									6																5														37	
SB17									1																5														7	
SB18									5	1	1														13	1													50	
SB19	1								3		3														3	1													23	
SB20									5																3														18	
SB21									8	1	2														4														29	
SB22									4																1	6													12	
SB23									8		1														5	3													40	
SB24	1								2																10	2													26	
SB25									2																1	1													27	
SB26									3																5														48	
SB27									15	8	5													8	4														69	
SB29	1								20	12	15													9	5														86	
SB31									22	4	9													7	2														101	
SB32									4																1	1													10	
SB33									7	3	3													2	1														10	
SB34									7	2	2													4															26	
SB35									4		3													6															24	
SB36									1															3															28	
									5	2	1													2	1														4	
																																								2
																																								19

遺構別古代土器一覽表 (3)

遺構番号	食器												煮炊具											貯蔵具			個体総数										
	土器 A						須恵器						陶灰細器			陶器細器			須恵器			陶灰細器			土器 B												
	杯 D・E・F	杯 C	杯 A	鉢 A	鉢 B	鉢 A	高杯	鉢・鉢 A	他	杯・碗・皿	杯 A	杯 B	杯 A・C	杯 A・B	鉢 A・B	鉢 A・B・C	高杯	他	杯 A	碗	皿	碗・皿・他	碗	皿	碗・皿・他	須恵器		瓶類	小瓶	広口瓶	他瓶類	壺類	壺類	壺類	黒彩色 B		
SB72	2		10							55	22	17																								125	
SB73			2							3	2																									12	
SB74	1		6							32	11	18																								89	
SB76			21	1	6					16	13	13	1																							93	
SB77			26	1						19	11	9																								90	
SB78	1		7		2					38	7	18	1																							95	
SB82			6							6	4	4																								31	
SB83										2	3																										14
SB84	1		4							14	4	5																								58	
SB85			1							7	2	2																								27	
SB87	2		3	1						10	4	4																								41	
SB88			4							8	2	2																								29	
SB89			16	3	4					6	2																									53	
SB90			2							7	1	1	1																							19	
SB91			4							10																										23	
SB92			45	1	3	1				103	24	14																								242	
SB93			14	4						8	3																										57
SB95										1	1	1																								12	
SB96										1	19	8	5	1	1	1																				96	
SB97			61	2	4	3				45	15	22																								231	
SB99			65	2	12	4				62	6	17																								237	
SB100			31		2	6				18	6	6																								105	
SB101			10	3	5	1				13	2	4	2																							71	
SB102			13	2	2	2				3	1																									34	
SB103			14		2	2				10		2																								46	
SB104			1							3																										22	
SB105			22	1	1	1				6	2																									25	
SB106	1		8							15	1	1																								58	
SB107			8							13	1	5																								48	
SB108			3							9	5	2																								26	
SB109			6							12	1	4																								41	
SB110			6							2		1																								26	
SB111			5							12	3	4																								47	
			13	3	2					5	1	1																								39	

遺構別古代土器一覽表 (5)

遺構番号	食器											煮炊具										貯蔵具			個体総数								
	土器 A					赤黒彩色 B					須臾器					陶灰器細					陶線器細					陶灰器細			黒土器 B				
	杯 D・E・F	杯 C	杯 A	碗	皿 A・耳皿	盤 B	盤 A	高杯	鉢・鉢 A	他	杯 D	杯 A・C	杯 B	杯 A・B	皿 A・B	鉢	鉢 A・B・C	高杯	他	杯 A	碗	皿	碗・皿	碗・皿・他		須臾器	瓶類	小瓶	広口瓶	他瓶類	壺類	壺類	壺類
SB147			4								2	3	1																				20
SB148			15	1	1						34	13	9																				99
SB149			8			1					24	6	10																				65
SB150			6			1	1				9	2	2																				28
SB151			1								2																						10
SB152		2	1			16	5	2			18	4	1																			103	
SB153										6	1	3																					13
ST03										1																							2
ST06										1																							3
ST07										1																							1
ST09			1																														1
ST12										1																							1
ST17										1																							1
ST21											1																						1
ST30											1																						1
ST101										1																							1
ST102										1	1	1																					3
ST105			1							2																							3
ST108											1																						1
ST111			12							9	5	3																					93
ST113			1							1	1																						3
ST123										1																							3
SK110			1																														1
SK170																																	3
SK398																																	1
SK435			2							2	1																						12
SK436			1							1	1																						3
SK460																																	6
SK466			3							5	1																						14
SK491			2							6	1	1																					13
SK530			3							2																							17
SK533										1																							1
SK534			2	1						5	2																						13
SK540			2							1																							7

遺構別古代土器一覽表 (7)

遺構番号	食器											煮炊具										貯蔵具				個体総数								
	土器 A					赤黒彩色 B					須恵器					陶灰器 細					須恵器				陶灰器 細									
	杯 D・E・F	杯 C	杯 A	碗	皿 A・B	鉢 A	鉢 A	鉢 A・B	鉢 A・B	鉢 A・B・C	高杯	他	杯 A	杯 D・A・C	杯 B	杯 A・B	皿 A・B	鉢 A・B・C	鉢 A・B・C	鉢 A・D・E・G	鉢 C	鉢 F	小型甕 A	小型甕 B	小型甕 C		小型甕 D	羽釜・足釜	他	甕類	瓶類	小瓶	広口瓶 他瓶類	甕類
// 2区	1		22					57 6 10	1 1			3赤							5				4					2 8						120
// 3区			8				43 10 18	1 1				2赤							6				5					8 6						107
// 5区			6				8	1				1赤							1				4					1 2						23
// 6区			11				19 3 6	1											4				4					2						50
// 7区			7				9 4																7				3 7							31
// その他	1		25				66 8 15	3 4											8				7				3 7						147	
区別不明(赤黒1層)			1915260	160	775		1500990	416	30									923 20				466				22906875	40						17107	
// (// 2層)			465 20				680 90 15	70										175				12				25 1925	95						3572	
// (// 3層)			795				1095300	180	180									215				280				25 2100							5470	
// (// 7層)			10				80 170											10							32 35								352	
// (// その他)			925				2000365	323	75									270 30				310				9008240							8613	
区別不明(赤黒1層)			280 150				792 130 123	40	45									144				110				10 1002445							4384	
// (// 2層)			420				895 210 240		90 10									40				80				80 875							2940	
// (// 3層)			760				1200 443 670		55									375				111				255 2520							6534	
// (// 4層)			2				60																				35						167	
区別不明(赤黒1層)			117				200 60											30				35				105 15 130							702	
// (// 2層)							55																				30						85	
// (// 3層)			257				370	45										5															60	
// (// その他)			1240 15 7	480			2245 475 950	210	10									215				230				245 550							1477	
区別不明(赤黒1層)			324				1380 129 378	35 160										117				205				399 2085							8613	
// (// 2層)	20						65											460							175 1590								4598	
SD01			80				35 20											80				45											525	
SD 7			105				150 120 125											135				5											260	
SD 18			400				880 160 160											435				30											3010	
SD100-104							240	30																										3865
SD105			18				130	15										20 10																270
SD106			35				173 107 55											63 2																1828
SD108区1層			120				3920 135 15 25 5 31	522 2790 1617	20 10 18								2050					160 620											1775	
// 2層			1478 45				7305 1200 575	116 140										310				60											4280	
// 3層			905				1560 75 265											315 20				70											1578	
// その他			625				1160 265 150											279 15				45											5062	
// 2区1層			795 30				2056 1058 78											662 42				142											6237	
// 2区2層			55				380 300 60											245																10455
// 3区1層			20																			60												1603

遺構別古代土器一覽表 (8)

遺構番号	土師器					食器						貯蔵具												個体総数										
	杯C D・E・F	杯A	碗	皿A・耳皿	盤B A	高杯	鉢・鉢A	他	須臾器						灰釉陶器			陶器細		土器														
									杯A	杯B	杯D	杯A・C	杯A・B	鉢	皿A・B	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢		鉢	鉢	鉢	鉢						
Ⅱ2層	176		6481	295	1465	867	6		1461	3122	1691	602	45	135		2	5	202	89			1559	22		40	2564	16643	74						51637
Ⅱ4区1層	15		325						1050	455	275			30								355	25				310	970						3825
Ⅱ2層	70		3800	305	169	10		赤	1890	1950	2085	5	60	25				10				1085	42		90	1697	8307	5					31937	
Ⅱその他	20		1000		25				1882	410	210											445	20				480	1645						6212
S D109	20		1080		150				2985	520	475	10	10	20								570					585	3525						10315
S D110			40		25				280	160	5											10					220	360	10					1110
S D117			2170						3000	455	680		70									260					540	2330						10865
S D118			70						40													170					15	45						340
S D119			40		15																	150					2200							2405
S D124									20													105					40							175
S D128	5		245	55					500	155	175			10								80	1				545	700						2476
S D130			2						2	5		20		20								5												59
S D132					15				20	165																	400							600
S D135			230						60	30			5														220							545
S D137			1700	180	65	820			赤20	1735	465	565	395					180	10	10		220				1490	6650				145		14920	
S D139			240						370	50	130											80					90							1125
S D147									30													10					170							210
S D151									10	30																								40
S D163	5		140	5	55				70	80	60		25									60					30	1200						1820
S D170	45		550		260				赤10	1560	240	580	20	15						45	2	90					230	1360			10			5262
S D171			105						595	80	10											55					25	750						1635
S D173			30		10				45													5					5	240						335
S D176			90																															90
S D181			167						160	40												80	5				120	885						1542
溝址群Ⅲ																																		

付表4 遺構別墨書土器出土一覧表

遺構名	時期	再	人	人	人	而	井	足	中	草茂	その他・不明	出土
SB4	5										不明1	1
5	6				1							1
6	7										全	1
12	6	1										1
15	7	1										1
20	6										全	1
21	2										不明1	1
26	6										備	1
27	5										宗・口人	2
33	6				1							1
40	6										不明1	1
51	7										秋 不明1	2
52	7	1									不明2	3
53	5						1				カ	2
55	6				1							1
58	5										不明1	1
64	6										不明1	1
65	7										仲	1
67	5										不明1	1
69	4~5										不明1	1
70	6	1		1								2
72	5		2	1		3					秋 不明1	8
74	5		3									3
76	7			1							不明1	2
77	6~7			2								2
78	5		2	2								4
89	7										不明1	1
90	5										継2	2
91	6	1			1			1			不明2	5
92	6	23			3						不明7	33
96	7	1									禾 不明1	3
97	7	19			3						西戸舎 不明1	24
99	7	4										4
100	7	3									禾	4
102	7	1										1
104	6	1									南 不明1	3
105	7						1					1
106	6						2					2
108	6		1								不明1	1
111	7										不明2	1
115	7	2			2							6
116	7	1										1
122	6											1
126	5						1				メ3 不明1	5
127	5										不明1	1
131	7				1							1
132	5										不明1	1

遺構名	時期	里	人	人	人	而	井	足	中	草茂	その他・不明	出土	
SB135	7	4										4	
136	7										不明1	1	
143	6	32	1								不明1	34	
144	7	1										1	
148	6					3					不明2	5	
149	5	1									宣 不明1	3	
151	5										不明1	1	
152	11	1										1	
ST111	6	1										1	
区 画 溝	I	6~	8			6					有・大 不明8	24	
	II	6~				3						3	
	III	6~	5			2			1	3	不明7	18	
	小計		13			11			1	3	その他2 不明15	45	
SD105	5~		1									1	
S D 1 0 8	1	4~	7	10	1		1		1	1	福 不明7	29	
	2	4~	1								大 不明1	3	
	3	4~	47			1		2	3	1	岳、西、禾、小長	71	
	4	4~	13			1		1			力、南殿、家、2	20	
	小計		68	10	1	2	1	3	4	2	その他9、不明23	123	
SD109	5~		1	1							本 不明3	6	
110	5~	1				3						1	
117	6	3				3						6	
128	7	1										1	
137	6~	5										5	
139	6~	8									不明2	10	
147	5				1							1	
163	6	1										1	
170	1	1										1	
171	7					1						1	
溝址群III	6					2						2	
SK435	6			1								1	
436	6					1						1	
466	6					1						1	
491	5~										不明1	1	
534	6	4								1	不明1	6	
628	6	1										1	
910	6										備	1	
S X 3 0	1	6	7			3				4	不明3	17	
	2	6	5			4				6	仁通 不明1	17	
	3	6				1					不明2	3	
	5	6				2						2	
	6	6	2									不明2	4
	他	6	6			2						南殿 不明1	10
小計		20			12				10		その他2 不明9	53	
遺構外		8	2		4						矣 不明8	23	
合計		234	24	10	53	8	4	5	17		135	490	

付表5 墨書土器一覽表(1)

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
1	SB4	/	須恵器	杯A	底		外	□	覆	口底 — 30	べか
2	SB5	1	黒色土器A	杯A I	//		//	而		40 100	
3	SB6	3	//	杯A II	体	正位	//	全	床	— 100	
4	SB12	1	//	//	//	//	//	厶	覆	6 20	
5	SB15	/	//	杯A	//	//	//	厶	//	2 —	
6	SB20	/	須恵器	//	底		//	全	床	— 100	
7	SB21	2	//	//	//		//	□	//	47 100	□□□真□
8	SB26	3	黒色土器A	杯A I	//		//	備	覆	15 75	満か
9	SB27	1	須恵器	杯A	//		//	宗	床	88 100	
10	//	8	//	蓋			//	□・人	//		廣か
11	SB33	2	//	杯A	体	右横	//	而	//	20 45	
12	SB40	3	//	//	//	//	//	□□	//	97 100	浄主か
13	SB51	1	黒色土器A	皿B	底		//	□		55 90	習書か
14	//	2	須恵器	杯A	//		//	秋	覆	56 100	
15	SB52	/	黒色土器A	//	//		//	厶	床	— 40	
16	//	1	//	杯A II	体	逆位	//	□	//	12 —	宇か
17	//	/	須恵器	杯B III	底		//	□□	覆	— 20	
18	SB53	1	//	杯A	//		//	井	//	30 100	
19	//	2	//	//	//		//	力	床	55 100	
20	SB58	3	//	//	体	逆位	//	□	//	40 75	巾か
21	SB64	3	//	//	底		//	□	カマド	50 100	道, 資か
22	SB65	2	黒色土器A	杯A II	体	正位	//	仲		10 —	
23	SB67	1	須恵器	杯A	底		//	□	カマド	68 100	茜か
24	SB69	2	//	//	//		//	□	覆	— 20	
25	SB70	/	//	//	//		//	厶	//	— 50	
26	//	/	//	//	体	正位	//	人	//	20 —	
27	SB72	/	黒色土器A	//	底		//	人	//	— 50	
28	//	5	須恵器	//	//		//	井	//	47 100	
29	//	8	//	//	//		//	人人	床	80 80	
30	//	9	//	//	//		//	井	覆	70 100	
31	//	11	//	//	//		//	秋	//	24 40	
32	//	17	//	//	//		//	井	//	— 55	
33	//	/	//	//	//		//	□	//	— 15	
34	//	27	//	杯B	//		//	人人	//	52 70	
35	SB74	3	//	杯A	//		//	人人	//	60 100	
36	//	4	//	//	//		//	人人	//	7 45	
37	//	6	//	//	//		//	人人	//	15 95	
38	SB76	/	//	//	//		//	□	//	— —	
39	//	23	//	杯B II	//		//	人	//		
40	SB77	/	//	杯A	//		//	人	//	— 50	

墨書土器一覽表(2)

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
41	SB77	/	須恵器	杯A	底		外	人	//	□底 - 20	
42	SB78	5	//	//	//		//	人人	//	40 100	
43	//	/	//	//	//		//	人人	床	30 80	
44	//	/	//	//	//		//	人	覆	- 30	
45	//	/	//	//	//		外	人	//	- 15	
46	SB89	3	黒色土器A	杯A II	体	左横	//	□□	床	18 30	□食か
47	SB90	2	須恵器	杯A	底		//	継	//	90 100	
48	//	3	//	//	//		//	継	覆	6 80	
49	SB91	5	//	//	//		//	厷	床	64 100	
50	//	/	//	//	//		//	草茂	覆	- 32	
51	//	/	//	//	//		//	□	床	- 25	
52	//	/	//	//	//		//	而	覆	- 19	
53	//	/	//	//	//		//	□	//	- 19	
54	SB92	/	黒色土器A	鉢	体	正位	//	厷	//	- -	
55	//	26	須恵器	杯A	底		//	厷	//	60 100	
56	//	33	//	//	//		//	厷	//	52 100	
57	//	37	//	//	//		//	厷	//	43 50	
58	//	40	//	//	//		//	厷	//	12 55	
59	//	30	//	//	//		//	厷	//	2 100	
60	//	/	//	//	//		//	厷	//	23 45	
61	//	/	//	//	//		//	厷	//	2 45	
62	//	/	//	//	//		//	厷	//	2 100	
63	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 53	
64	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 60	
65	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 80	
66	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 30	
67	//	/	//	//	//		//	而	//	- 80	
68	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 100	
69	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 14	
70	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 22	
71	//	/	//	//	//		//	而	//	- 40	
72	//	/	//	//	//		//	而	//	- 6	
73	//	/	//	//	体	正位	//	□	//	- 100	
74	//	/	//	//	底		//	厷	//	- 60	
75	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 60	
76	//	/	//	//	//		//	厷	//	17 35	
77	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 30	
78	//	/	//	//	//		//	厷	//	- 30	
79	//	/	//	//	//		//	□	//	- 20	
80	//	/	//	//	//		//	□	//	- 30	

墨書土器一覽表(3)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
81	SB92	/	須恵器	杯A	底		外	□	//	□底 - 32	鼠か
82	//	/	//	//	//		//	□	//	- 25	
83	//	/	//	//	体	正位	//	□	//	- -	
84	//	/	//	杯B II	底		//	鼠	床	- 100	
85	//	72	//	鉢	体	不明	//	□	//	47 100	不鮮明
86	//	/	//	蓋			//	鼠	覆		
87	SB96	3	黒色土器A	杯A II	体	右横	//	□	床	90 100	栄の異体文字
88	//	/	//	//	//	正位	//	鼠	覆	90 100	
89	//	18	灰釉陶器	椀	底		//	禾	//	- 100	
90	SB97	10	黒色土器A	杯A I	体	正位	//	鼠	//	11 -	
91	//	/	須恵器	杯A	底		//	鼠	//	- -	
92	//	/	//	//	//		//	鼠	//	- 10	
93	//	/	//	//	体	正位	//	鼠	//	- -	
94	//	37	黒色土器A	杯A II	//	//	//	而	//	1 20	
95	//	/	//	//	//	右横	//	鼠	//	5 -	
96	//	/	//	杯A	底		//	鼠		- 5	
97	//	38	//	杯A II	体	正位	//	鼠	覆	15 40	
98	//	/	//	杯A	底		//	鼠	床	- -	
99	//	49	//	皿B	//		//	鼠	覆	18 20	
100	//	61	須恵器	杯A	//		//	鼠	//	- 100	
101	//	65	//	//	体	逆位	//	鼠	床	40 100	
102	//	72	//	//	//	//	//	鼠	カマド	50 100	
103	//	/	//	//	//	左横	//	西戸舎	覆	10 -	
104	//	/	//	//	底		//	而	//	- 100	
105	//	/	//	//	//		//	鼠	//	- 100	
106	//	/	//	//	//		//	鼠	//	- 20	
107	//	/	//	//	//		//	鼠	床	- 70	
108	//	83	//	杯B III	//		//	鼠	覆	- 100	
109	//	81	//	蓋			内・外	□/□	床		足か
110	//	85	//	鉢A	体	正位	外	鼠	//	45 -	
111	//	27	黒色土器A	杯A II	//	//	//	鼠・鼠	//	50 100	
112	//	28	//	//	底		//	鼠		80 100	
113	//	42	//	杯A I	体	正位	//	而	覆	10 -	
114	SB99	8	須恵器	杯A	//	//	//	鼠	//	37 50	
115	//	/	//	//	底		//	鼠	カマド	- 55	
116	//	/	//	//	//		//	鼠	覆	- -	
117	//	/	//	//	//		//	鼠	床	- -	
118	SB100	/	//	//	//		//	鼠	覆	- 100	
119	//	/	//	//	//		//	鼠	//	- 90	
120	//	/	//	//	//		//	鼠	//	- 28	

墨書土器一覽表(4)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
121	SB100	16	灰釉陶器	椀	底		外	禾	カマド	口底 23 60	
122	SB102	/	須恵器	杯A	//		//	厶	覆	0 100	
123	SB104	6	//	//	体	正位	//	口	//	45 100	
124	//	/	//	//	底		//	南	//	- -	
125	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 45	
126	SB105	10	//	//	体	正位	//	井	//	75 100	
127	SB106	4	黒色土器A	杯A I	//	逆位	//	井	床	40 30	
128	//	/	須恵器	杯A	//	正位	//	井	覆	- 15	
129	SB108	2	黒色土器A	杯A II	底		//	人人	//	18 100	
130	SB111	/	//	杯A	体	不明	//	口	//	- -	
131	SB115	9	須恵器	//	底		//	口	//	40 50	厶か
132	//	14	//	//	//		//	而	//	- 60	
133	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 55	
134	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 55	
135	//	/	//	//	//		//	而	//	- 15	
136	//	/	//	//	//		//	口	床	- -	
137	SB116	/	//	//	//		//	厶	覆	- 10	
138	SB122	/	//	//	//		//	木		- 30	
139	SB126	/	黒色土器A	//	//		//	厶	覆	- 70	
140	//	31	須恵器	//	//		//	厶	//	35 100	
141	//	/	//	//	//		//	足	//	- 45	
142	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 20	
143	//	42	//	杯B V	//		//	口	//	10 60	足か
144	SB127	/	土師器	杯C	//		//	口		- -	
145	SB131	9	須恵器	杯A	体	左横	//	而	覆	15 30	
146	SB132	3	//	//	底		//	口	床	45 50	継か
147	SB135	/	黒色土器A	皿B	//		//	厶	覆	- 75	
148	//	/	須恵器	杯A	//		//	厶	//	- 37	
149	//	/	//	//	//		//	厶		- 12	
150	//	/	//	//	//		//	厶	覆	- 18	
151	SB136	9	軟質須恵器	杯A	体	不明	//	口	覆	50 100	十か
152	SB143	4	黒色土器A	杯A II	//	正位	//	厶	//	15 35	
153	//	13	//	杯A I	//	//	//	厶	//	21 51	
154	//	/	//	//	//	//	//	厶	//	10 -	
155	//	8	//	杯A II	//	//	//	厶	//	10 10	
156	//	/	//	杯A	底		//	厶	//	- 60	
157	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 50	
158	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 45	
159	//	/	//	//	体	正位	//	厶	//	8 -	
160	//	/	//	//	底		//	厶	//	- 15	

墨書土器一覽表(5)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
161	SB143	/	黒色土器 A	杯 A	底		外	厶	覆	- 40	
162	//	/	//	//	//		//	厶	//	- -	
163	//	/	//	杯 A II	体	正位	//	厶	//	5 -	
164	//	/	//	杯 A	底		//	厶	//	- 15	
165	//	/	//	蓋			//	厶	//		
166	//	/	赤彩土器	皿 B	底		//	厶	//	- 10	
167	//	20	須恵器	杯 A	//		//	厶	覆	95 100	
168	//	27	//	//	//		//	厶	//	35 90	
169	//	29	//	//	//		//	厶	//	32 100	
170	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 100	
171	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 100	
172	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 100	
173	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 100	
174	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 90	
175	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 100	
176	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 40	
177	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 45	
178	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 20	
179	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 47	
180	//	/	//	//	//		//	厶	//	- 35	
181	//	/	//	//	体	逆位	//	厶	//	5 -	
182	//	47	//	杯 B III	底		//	人人	//	7 100	
183	//	/	//	蓋			//	□	//		
184	//	39	//	皿 B	底		//	厶	//	5 -	
185	//	41	//	蓋			//	厶	//		
186	SB144	7	//	杯 A	底		//	厶	//	- 60	
187	SB148	1	黒色土器 A	杯 A II	体	正位	//	而	//	25 100	
188	//	9	須恵器	杯 A	//	右横	//	而	床	26 100	
189	//	12	//	//	//	左横	//	而	//	53 75	
190	//	13	//	//	//	右横	//	□	//	17 100	宜か真か
191	//	/	//	//	//	不明	//	□	//	40 40	
192	SB149	/	//	//	底		//	厶	覆	- 50	
193	//	/	//	//	//		//	□	//	- 10	
194	//	/	//	杯 B III	//		//	宣	//	- 50	
195	SB151	1	黒色土器 A	杯 A II	体	不明	//	□	床	46 100	2 字句
196	SB152	/	//	皿 B	底		//	厶	覆	- -	
197	ST111	7	須恵器	杯 A	//		//	厶		- 50	
198	区画溝 I	4	黒色土器 A	鉢	//		//	□		50 95	
199	//	8	須恵器	杯 A	//		//	□		- 35	
200	//	/	//	杯 B III	//		//	厶		- 100	

墨書土器一覽表(6)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
201	区画溝 I	32	黒色土器 A	杯 A I	体	左横	外	□		□底 45 100	
202	//	42	須恵器	杯 A	底		//	而		25 100	
203	//	/	黒色土器 A	//	//		//	厶		- 100	
204	//	/	//	杯 A II	体	逆位	//	厶		10 -	
205	//	63	//	椀	底		//	厶		- 70	
206	//	75	須恵器	杯 A	//		//	而		- 70	
207	//	/	//	//	//		//	而		- 50	
208	//	74	//	//	//		//	□		- 40	厶か
209	//	/	//	//	//		//	厶		- 25	
210	//	/	//	//	//		//	厶		- 60	
211	//	/	//	//	//		//	大		- 70	
212	//	/	黒色土器 A	//	体	不明	//	□		- 5	
213	//	/	須恵器	//	//	//	//	□		- 30	厶か
214	//	/	//	//	底		//	厶		- 20	
215	//	/	//	//	//		//	厶		- 5	
216	//	/	//	//	//		//	而		- -	
217	//	111	//	//	//		//	而		70 100	
218	//	/	//	//	体	逆位	//	有		14 -	
219	//	/	//	//	底		//	□		- 10	而か
220	//	/	//	//	体	不明	//	□		- 70	
221	//	/	//	//	//	正位	//	而		8 -	
222	区画溝 II	4	//	//	底		//	而		50 100	
223	//	5	//	//	//		//	而		30 70	
224	//	/	//	//	体	正位	//	而		10 15	
225	区画溝 III	14	//	//	//	右横	//	中		14 48	
226	//	/	//	//	底		//	草茂		- 50	
227	//	/	//	//	//		//	草茂		- 48	
228	//	/	//	//	体	正位	//	□		- 45	
229	//	/	//	//	底		//	□		- 45	厶か
230	//	/	//	//	//		//	□		- 15	厶か
231	//	/	//	//	体	正位	//	厶		- -	
232	//	29	黒色土器 A	杯 A I	底		//	□		- 25	
233	//	/	//	杯 A	体	右横	//	□		- -	
234	//	/	須恵器	//	底		//	草茂		- 30	
235	//	33	//	//	//		//	厶		40 100	
236	//	34	//	//	//		//	□		40 55	
237	//	/	//	//	体	正位	//	厶		15 40	
238	//	/	//	//	//	//	//	厶		12 -	
239	//	/	//	//	底		//	□		- 40	人人か
240	//	/	//	//	//		//	而		- 60	

墨書土器一覽表(7)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
241	区画溝III	/	須恵器	杯A	底		外	而		□ 底 - 3	
242	//	45	//	杯B I	体	正位	//	厷/□		- 90	底の字は判読 不能
243	SD105	1	//	杯A	底		//	人人		38 50	
244	SD108-1	4	黒色土器A	杯A II	体	正位	//	井		15 100	
245	//	11	//	//	底		//	人人		15 100	
246	//	/	//	杯A	//		//	□		- 18	
247	//	/	//	//	体	正位	//	□		- -	
248	//	/	//	//	//	左横	//	□		- -	豊か
249	//	31	須恵器	//	底		//	厷		12 100	
250	//	/	//	//	//		//	人人		- 60	
251	//	/	//	//	//		//	人人		- 50	
252	//	/	//	//	//		//	厷		- 20	
253	//	/	//	//	//		//	人人		- 30	
254	//	/	//	//	体	正位	//	厷		- 10	
255	//	17	黒色土器A	杯A I	底		//	□		25 30	
256	//	/	//	//	体	不明	//	□		5 -	
257	//	/	//	杯A	//	左横	//	厷		10 -	
258	//	/	//	//	//	正位	//	厷		- 40	
259	//	/	//	//	//	//	//	□		- 20	井か
260	//	52	須恵器	//	底		//	□		20 50	中か
261	//	33	//	//	//		//	人人		20 50	
262	//	/	//	//	//		//	人		- 30	
263	//	/	//	//	//		//	厷		- 100	
264	//	87	黒色土器A	杯A II	//		//	人人		5 55	
265	//	/	//	杯A	//		//	福		- 10	
266	//	101	須恵器	//	//		//	人人		85 100	
267	//	97	//	//	体	逆位	//	人人		35 100	
268	//	100	//	//	底		//	人人		45 100	
269	//	110	//	//	体	右横	//	□		55 100	南または厷か
270	//	/	//	//	底		//	草茂		- 25	
271	//	/	//	//	体	正位	//	厷		- -	
272	//	95	//	//	底		//	人人		75 100	
273	SD108-2	/	//	//	//		//	大		- 90	
274	//	/	黒色土器A	//	//		//	厷		- 20	
275	//	152	須恵器	//	//		//	□		12 38	而か
276	SD108-3	/	黒色土器A	//	//		//	厷		- 20	
277	//	/	//	//	体	逆位	//	厷		- -	
278	//	221	//	皿B	//	正位	//	厷		- -	
279	//	/	//	//	//	//	//	厷		- -	
280	//	268	須恵器	杯A	底		//	厷		70 100	

墨書土器一覽表(8)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
281	SD108-3	154	須恵器	杯A	底		外	厶		□底 1 36	
282	//	273	//	//	//		//	厶		21 30	
283	//	280	//	//	体	正位	//	中		12 -	
284	//	/	//	//	//	不明	//	□		- -	
285	//	282	//	//	底		//	厶		- 100	
286	//	/	//	//	//		//	厶		- 42	
287	//	/	//	//	//		//	□		- 29	草茂か
288	//	/	//	//	//		//	厶		- 35	
289	//	281	//	//	//		//	□		- 48	而か
290	//	/	//	//	//		//	厶		- 100	
291	//	/	//	//	//		//	厶		- 30	
292	//	/	//	//	//		//	厶		- 45	
293	//	/	//	//	//		//	□		- 30	而か
294	//	298	//	皿B	//		//	厶		38 100	
295	//	202	黒色土器A	杯A II	//		//	厶		10 100	則天文字か
296	//	201	//	//	//		//	厶		32 40	
297	//	/	//	//	体	逆位	//	□		28 -	
298	//	/	//	//	//	//	//	厶		7 -	
299	//	165	//	杯A	底		//	厶		- 70	
300	//	/	//	//	体	正位	//	厶		- 21	
301	//	/	//	//	底		//	厶		- 25	
302	//	/	//	//	//		//	厶		- 40	
303	//	/	//	//	//		//	□		- 40	大か
304	//	211	//	椀	体	正位	//	厶		75 -	
305	//	182	//	皿B	底		//	厶		84 100	
306	//	181	//	//	//		//	厶		100 -	
307	//	/	//	//	//		//	厶		- -	
308	//	186	赤彩土器	//	//		//	厶		88 100	
309	//	184	//	//	//		//	厶		82 -	
310	//	176	須恵器	杯C	//		内・外	足/足		98 100	
311	//	177	//	//	//		外	足		60 100	
312	//	166	//	杯A	//		//	厶		100 100	
313	//	167	//	//	体	正位	//	厶		100 100	
314	//	249	//	//	//	//	//	中		100 100	
315	//	168	//	//	底		//	厶		100 100	
316	//	169	//	//	//		//	西		60 100	
317	//	171	//	//	//		//	厶		35 50	
318	//	255	//	//	//		//	厶		35 50	
319	//	235	//	//	体	正位	//	厶		48 50	
320	//	261	//	//	底		//	厶		35 100	

墨書土器一覽表(9)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
321	//	259	須恵器	杯A	底		外	厶		口底 18 25	
322	//	256	//	//	//		//	厶		19 25	
323	//	239	//	//	体	不明	//	□		1 30	
324	//	262	//	//	底		//	□		18 25	不鮮明
325	//	260	//	//	//		//	厶		1 30	
326	//	278	//	//	体	正位	//	厶		8 -	
327	//	/	//	//	//	不明	//	□		3 -	
328	//	279	//	//	//	逆位	//	厶		- 50	
329	//	/	//	//	底		//	禾		- 25	
330	//	/	//	//	//		//	草茂		- 40	
331	SD108-3	/	//	//	//		//	厶		- 40	
332	//	/	//	//	//		//	□		- 10	人または人人
333	//	291	//	杯B III	//		//	厶		- 100	
334	//	178	//	杯B IV	//		//	□		- 45	厶か
335	//	189	//	皿B	//		//	厶		70 100	
336	//	188	//	//	//		//	厶		98 100	
337	//	187	//	//	//		//	厶		100 98	
338	//	299	灰釉陶器	//	//		//	中		50 100	
339	//	321	須恵器	杯A	//		//	而		- 30	
340	//	/	//	//	//		//	□		- 25	人または人人
341	//	328	//	杯B III	//		//	厶		- 100	
342	//	325	//	杯B IV	//		//	小長		23 100	
343	//	314	//	杯A	体	正位	//	厶		30 100	
344	//	/	黒色土器A	杯A II	//	//	//	厶		16 25	
345	//	/	須恵器	杯A	底		//	厶		- 60	
346	//	/	//	//	体	正位	//	□		5 -	厶か
347	SD108-4	/	//	//	//	//	//	厶		5 -	
348	//	338	黒色土器A	杯A II	底		//	厶		95 100	
349	//	/	//	杯A	//		//	厶		- 100	
350	//	/	//	//	//		//	草□		- 28	草茂か
351	//	/	//	//	//		//	厶		- 50	
352	//	/	//	//	//		//	厶		- 12	
353	//	/	//	//	//		//	厶			
354	//	/	//	//	//		//	□		- 30	
355	//	/	//	//	//		//	厶		- -	
356	//	/	//	杯A II	体	正位	//	厶		10 -	
357	//	341	須恵器	杯C	底		内・外	足/足		11 55	
358	//	356	//	杯A	//		外	力		75 100	
359	//	370	//	//	体	正位	//	厶		13 27	
360	//	/	//	//	底		//	厶		- 100	

墨書土器一覽表(10)

図版 番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
361	SD108-4	/	須恵器	杯A	底		外	南殿		□底 - 45	
362	//	/	//	//	//		//	厶		- 20	
363	//	/	//	//	//		//	厶		- -	
364	//	/	//	//	体	正位	//	厶		8 -	
365	//	/	//	//	//	右横	//	而		2 -	
366	//	382	//	杯B III	底		//	家		60 100	
367	SD109	6	//	杯A	//		//	□		45 40	
368	//	12	//	//	//		//	□		- 42	
369	//	/	//	//	//		//	□		- 30	人または人人
370	//	/	//	//	体	右横	//	本		20 -	本
371	//	/	//	//	底		//	人人		- 100	
372	//	/	//	//	//		//	人		- 30	
373	SD110	/	//	//	体	正位	//	厶		- 40	
374	SD117	15	//	//	//	//	//	厶		41 100	
375	//	13	//	//	//	逆位	//	而		28 100	
376	//	12	//	//	//	左横	//	而		24 45	
377	//	14	//	//	底		//	而		- 30	
378	//	/	//	//	//		//	厶		- 97	
379	//	/	//	//	体	正位	//	厶		3 -	
380	SD128	7	//	//	//	//	//	厶		70 100	
381	SD137	11	黒色土器A	杯A II	//	//	//	厶		10 48	
382	//	12	//	杯A I	底		//	厶		12 100	
383	//	/	須恵器	杯A	//		//	厶		- 95	
384	//	/	//	//	//		//	厶		- 25	
385	//	26	//	//	//		//	厶		60 100	
386	SD139	1	黒色土器A	杯A II	体	正位	//	□		68 100	井か
387	//	2	//	杯A	底		//	厶		- 50	
388	//	/	//	//	体	正位	//	厶		2 -	
389	//	6	須恵器	//	体・底	//	//	厶/厶		14 70	
390	//	8	//	//	体	逆位	//	厶		30 80	
391	//	/	//	杯A	//	不明	//	□		1 -	
392	//	/	//	//	//	逆位	//	厶		10 -	
393	//	7	//	//	底		//	厶		45 100	
394	//	10	//	蓋			//	厶			
395	SD147	1	//	杯A	底		//	人		- 40	
396	SD163	/	//	//	//		//	厶		- 20	
397	SD170	/	//	//	体	正位	//	厶		- -	
398	SD171	/	黒色土器A	//	//	逆位	//	而		- -	
399	溝址群III	5	須恵器	//	底		//	而		- 30	
400	//	6	//	//	//		//	而		- 52	

墨書土器一覽表(11)

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
401	SK435	2	須恵器	杯A	//		外	人人		□底 12 55	
402	SK436	1	//	//	体	逆位	//	而		10 -	
403	SK466	/	黒色土器A	//	//	左横	//	而		- -	
404	SK491	5	須恵器	//	底		//	□		- 50	か
405	SK534	/	黒色土器A	//	//		//	厶		- -	
406	//	3	須恵器	//	//		//	厶		77 100	
407	//	5	//	//	//		//	□		20 25	
408	//	/	//	//	//		//	厶		- 30	
409	//	/	//	//	//		//	厶		- 25	
410	//	7	//	杯BIV	//		//	草茂		- 50	
411	SK628	1	//	杯A	//		//	厶		-40	
412	SK910	1	//	//	//			備		- 100	満か
413	SX30-1	/	黒色土器A	杯A I	//		//	厶		- 45	
414	//	/	//	鉢	体	正位	//	□		35 100	小さな文字
415	//	15	須恵器	杯A	底		//	草茂		35 100	
416	//	18	//	//	//		//	草茂		20 50	
417	//	/	//	//	//		//	厶		- 55	
418	//	28	//	//	//		//	厶		- 80	
419	//	25	//	//	//		//	草茂		- 60	
420	//	29	//	//	//		//	厶		- 60	
421	//	/	//	//	体	正位	//	厶		- -	
422	//	/	//	//	底		//	□		- 30	草茂か
423	//	/	//	//	//		//	厶		- 20	
424	//	/	//	//	//		//	□		- 30	而か
425	//	/	//	//	//		//	厶		- 20	
426	//	/	//	//	//		//	而		- 20	
427	//	40	//	杯B II	//		//	而		48 45	
428	//	39	//	杯B III	//		//	而		8 60	
429	//	36	//	杯B V	//		//	草茂		- 45	
430	SX30-2	56	黒色土器A	杯A I	//		//	而而		58 80	
431	//	/	//	杯A	//		//	厶		- 45	
432	//	64	須恵器	//	体	右横	//	而		80 100	
433	//	70	//	//	底		//	草茂		48 100	
434	//	61	//	//	体	右横	//	而		85 100	
435	//	59	//	//	//	//	//	而		46 60	
436	//	71	//	//	底		//	草茂		28 100	
437	//	69	//	//	//		//	厶		4 77	
438	//	63	//	//	//			草茂		80 80	
439	//	75	//	//	//		//	草茂		15 45	
440	//	79	//	//	//		//	草茂		- 85	

墨書土器一覽表(12)

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
441	SX30-2	/	須恵器	杯A	底		//	厶		□底 - 10	
442	//	/	//	//	//		//	草茂		- 25	
443	//	/	//	//	//		//	厶		- 32	
444	//	/	//	//	//		//	□		- 20	
445	//	/	//	//	//		//	厶		- 25	
446	//	83	//	杯B V	//		//	仁通		- 80	
447	SX30-3	92	//	杯A	//		//	□		10 25	
448	//	/	//	//	//		//	而		- 45	
449	//	99	//	//	//		//	□		- 45	厶か不鮮明
450	SX30-5	116	黒色土器A	//	体	右横	//	而		6 30	
451	SX30-5	117	須恵器	杯A	底		//	而		- 100	
452	SX30-6	121	//	//	//		//	厶		- 60	
453	//	120	//	//	//		//	厶		- 50	
454	//	/	//	//	//		//	□		- 15	
455	//	/	//	//	//		//	□		- 3	
456	SX30-不明	132	//	//	//		//	厶		5 70	
457	//	140	//	//	//		//	厶		17 50	
458	//	134	//	//	//		//	南殿		22 100	
459	//	139	//	//	//		//	厶		25 50	
460	//	128	//	//	体	不明	//	□		48 100	
461	//	143	//	//	底		//	而		- 55	
462	//	141	//	//	体	正位	//	厶		15 -	
463	//	/	//	//	底		//	厶		- 10	
464	//	/	//	//	//		//	厶		- 25	
465	//	/	//	//	体	左横	//	而		- -	
466	遺構外	/	//	//	底		//	人人		- 100	
467	//	/	//	//	//		//	而		- 30	
468	//	/	//	//	//		//	□		- 20	8と同一か
469	//	11	//	//	//		//	厶		20 100	
470	//	/	//	//	//		//	□		- 60	
471	//	/	//	//	//		//	□		- 90	人または人人
472	//	2	黒色土器A	杯A II	//		//	□		18 20	
473	//	4	//	杯A	//		//	厶		- 47	
474	//	6	//	椀	//		//	尖		- 75	
475	//	7	//	//	//		//	□		- 80	
476	//	8	//	皿B	//		//	厶		- 100	
477	//	9	須恵器	杯A	//		//	而		85 100	
478	//	14	//	//	//		//	人人		65 100	
479	//	13	//	//	//		//	厶		55 60	
480	//	/	//	//	//		//	厶		- 100	

墨書土器一覽表(13)

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
481	遺構外	/	須恵器	杯A	底		外	厶		口底 —	
482	//	/	//	//	//		//	而		— 55	
483	//	/	//	//	//		//	而		— 35	
484	//	24	灰釉陶器	皿B	//		//	□		8 20	
486	//	/	//	//	//		//	□		— —	而か
487	//	/	須恵器	杯A	体	正位	//	厶		— —	
488	//	/	//	//	//	不明	//	□		5 —	
489	SB55	/	須恵器	杯A	底		//	而		— 5	
490	SD139	4	黒色土器A	蓋			//	厶		20 —	

付表6 刻書土器一覽表

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)	備考
491	SK551	2	黒色・土器A	杯A II	体		内・外	×		45 100	刻書
492	SB133	2	//	//			内	×		40 100	//

付表7 陶硯類一覽表

図版番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	転用部位	調整痕	層位	遺存状態(%)	備考
493	SB127		陶硯	円面硯					搬入品
494	区画溝I		//	//					在地産
495	区画溝III ・SB91		//	//					//
496	区画溝III		//	//					//
497	溝址群III		//	//					//
498	遺構外		//	//					SNI
499	SB23	6	灰釉陶器	椀	底部外			— 95	墨痕
500	SB92	/	須恵器	杯A	底部内			— 80	朱痕
501	SB92	60	//	杯B	底部内			— 50	朱磨面あり
502	SB123	/	//	杯A	体底部内			— 2	朱磨面あり
503	SB126	11	//	//	//			30 90	朱
504	SD117	25	//	//	底部内外			— 75	朱
505	SX30-3	98	//	//	底部内			30 40	朱

付表8 鉄製品・鉄滓出土遺構一覧(1)

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鍬	金 具	紡 錘 車	棒 状				板 状				鉄 滓 (g)	その他	図版番号
			普 通	大 形					方 形	円 形	長 形	不 明	鍛 造	鑄 造	素 材	不 明			
SB1	7										1								
2	7		1				1											17	
4	5															140			
6	7		2															25	
11	5	1か					1											42	
12	6		1							2		1か				22			
17	5		1									1							
24	4																	20	
29	6		2			1					1					220	不明1	33・46	
32	5															5			
33	6								1										
36	5															20			
38	5															20			
42	6		1																
43	6		1																
44	6															510			
51	7		1																
52	7		1																
55	6																	鑿1 31	
56	6		1																
61	5		1															19	
62	7													1					
64	6																	苧引鉄1 36	
65	7																	75	
66	6		2															11・18	
69	4																	斧1 26	
72	5															715			
74	5															195			
76	7		3						2		1					460	鉄片1	6.27	
77	6~7		1																
78	5		1									1							
82	6											1							
85	3					1				1								35	
88	6~7															180			
89	7		1		1													13・30	
92	6		2													240			
93	7				1	1			1									馬具か 39	
95	5															105			
96	7		2					1								400			
97	7	1	2		1											505	鋤・鍬先1	2・4	
99	7															820			
100	7		1																
101	7															125			
109	7								1										
110	6				1													28	
114	7		1								2					70	鉄片1		
115	7		1															8	
118	5																	鉄片1	

鉄製品・鉄滓出土遺構一覧表(2)

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鏃	金 具	紡 錘 車	棒 状				板 状				鉄 滓 (g)	その他	図版番号
			普通	大形					方 形	円 形	長 形	不 明	鍛 造	鑄 造	素 材	不 明			
SB119	5		1												40		5		
121	5		1																
125	7														210				
126	5		1																
127	5																鉄片 1		
129	7		1								1						馬具か 16・47		
130	4														25				
131	7				1										15				
133	7														57				
134	7								1										
135	7		1							1					20		14		
136	7		4								1				100				
139	5														10				
140	5		1																
143	6		6		3		1	2	1						105		7・12・15・21・29・40・41		
144	7														65				
148	6								1										
152	7								1	1					5840				
区画溝 I	6~7	1	4		1				2				1				塊状 1 23		
II	6~7									1									
SD 2	6		1																
7	7~																鑿 1 32		
106	7~														5				
108	4~7	1	6		1			1		2		2		1	20		20・43		
110	4~7								1										
128	7																		
129	7									1									
137	7		1												1450		24		
160	6														160				
163	6														870				
溝址群 III	6		1				1										44		
SK323	不明																鉄片 1		
440	不明				1														
468	6~7				1														
519	6														60				
531	5~7	1															3		
609	6	1	1		1												1		
610	6~														20				
623	5~														140				
626	不明																馬具 1 37		
628	6~7														10				
652	5													5					
677	7																		
684	5														4460				
1348	19													240					
SN 1	30																燧鉄(近世)		
SX30	6		2									1	1	1	1	5280	鉄片、環状1、 9・10		
計		6			17	5	6	2	16	9	12	11	7	1	1	26042			

字形の点でも、さきの推測を裏付ける格好の資料であるといえる。

さらに、『厷』と共伴する『而』についても、字体からは問題なく「而」(じ/こうして)と釈読してよいが、若干検討の余地があると思われる。それはまずこれまでの各地の墨書土器のなかに『而』の類例をあまり聞かないこと、字体としては「厷」かまえとはいいいがたいが、『厷』との共伴する点を考慮するならば、則天文字「厷」(天)の可能性も残しておかなければならない点である(図一の①②参照)。

いずれにしても、これらの資料は、古代の文字研究にとってきわめて重要な価値を有することは間違いない。特に『厷』は一般的にも同一文字が一遺跡から総数二三四点も出土した例は稀有であり、今回はなしえなかったが、今後、書体の比較をはじめ出土地点や年代の変遷などについて詳細に検討する必要があることを銘記しておきたい。

〈参考文献〉

一、東野治之「発掘された則天文字―古代の文字資料から―(2)」「出版ダイジェスト」

一一八七号 一九八六年

一、拙稿「則天文字を追う」「歴博」三四号 国立歴史民俗博物館編集・発行一九八九年四月

一、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団「太田東部遺跡群」一九八五年

一、群馬県境町教育委員会「下淵名遺跡発掘調査概報」一九八七年

一、山形県川西町教育委員会「道伝遺跡発掘調査報告書」一九八一年、同教育委員会「道伝遺跡発掘調査報告書―置賜郡銜推定地―」一九八四年

一、福島県教育委員会「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 VI―御山千軒遺跡―」一九八三年

2 須恵器杯底部墨書(図版一六六―七 PL八五)

『厷』のほかにも注目すべき墨書土器がある。SB二一出土で、口径8.8センチ、底径8.4センチのヘラ切りの須恵器杯Aに墨書されたものである。

釈文 □□小長谷部真□

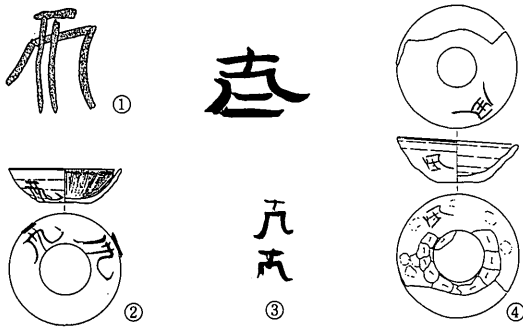
〈参考資料〉信濃国筑摩郡の小長谷部の例

正倉院調庸関係銘文(松島順正編「正倉院寶物銘文集」一九七八年)

「信濃国筑摩郡山家郷戸主物部東人戸口小長谷部尼麻呂調井庸壹端長四丈二尺……(略)……天平勝寶四年十月」

る。一つは、当時の基本法典の「律」を通して「圜」が普及したように、地方行政のルートが想定できる。出雲国府跡の「基」(地)、下野国府跡の「正」(正)の例がある。もう一つのルートは、金沢市三小牛ハバ遺跡の「正」(人)のようにおそらく仏典を通じて僧侶が会得したものである。これらの例でも明らかなように則天文字は、山十水十土で「地」、一十生で「人」のように、その大部分は語意の合成で表現している。

ところで、近年、各地の調査で「厶」のような一見すると風のような文字とみてしまいそうな墨書土器が数多く出土している(図1)。この文字群を一見すると、則天文字十七文字のなかの四文字―而(天)・廡(載)・廡(君)・廡(初)―と共通するのではないかという印象をもつであろう。そして則天文字の「厶」かまえが人々に強烈な印象を与え、我が国において「厶」のなかに別の漢字を入れ、一種の吉祥または呪術的な意味を含めた特殊な字形を考案し、使用していたのではないかと推測することができる。この則天文字の「厶」に強い影響を与えたのはおそらく中国における道教の呪符にみえる図2に示したような符籙である。



①山形県川西町道伝遺跡 ③群馬県境町 下淵名遺跡
②福島県福島市御山千軒遺跡 ④群馬県太田市 清水田遺跡

図1 類似の墨書土器

したがって、我が国における最近の「厶」およびそのなかに様々な文字を入れた字形は、おそらく、則天文字や道教の呪符の符籙の影響と考えておくことが現状では最も妥当であろう。これまでの各地の単発的な出土例に対して、本遺跡の「厶」は数量的にも総数二三四点と圧倒的に多く、しかも

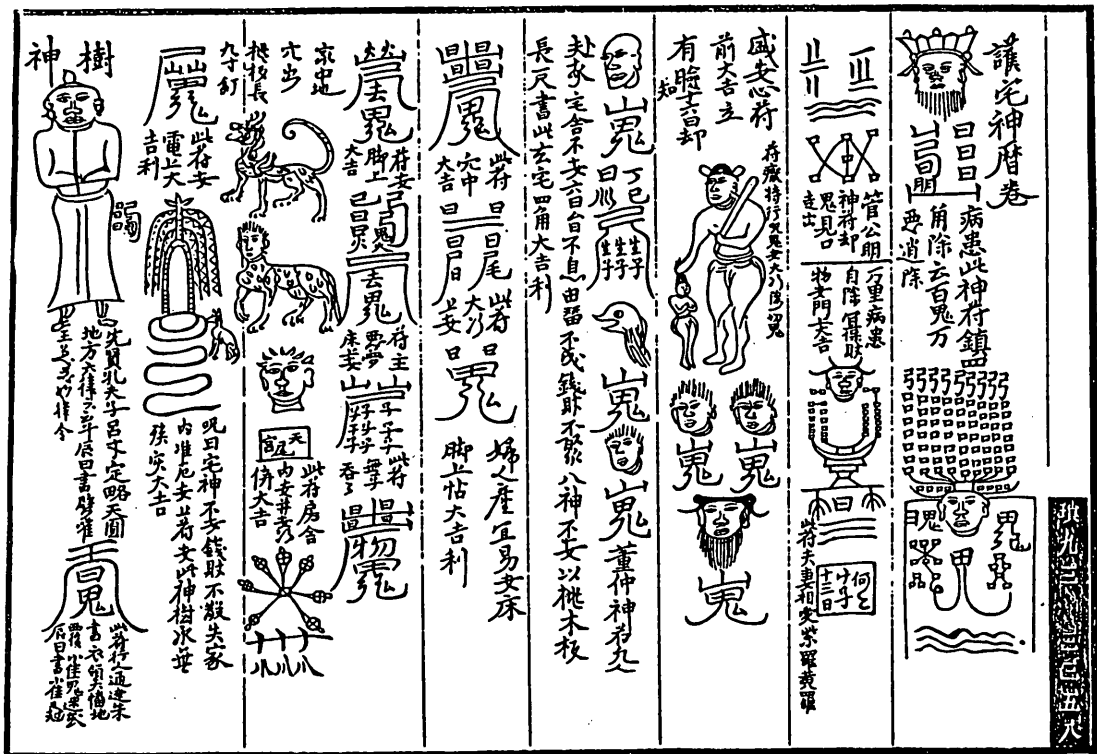


図2 符籙の例―「敦煌括瑣」の録文―

〔東野治之氏「木簡雜識」(『長岡京古文化論叢』1986年)に所載のものを引用〕

し、そうした小破片についても上記のような作業手順をふむことによって
ほぼ原状復原が可能となる点を強調しておきたい。

本資料の整理にあたり国学院大学日本文化研究所 平野卓治氏に御助力
頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

註一 拙著『漆紙文書の研究』 総論第一章 註6 吉川弘文館 一九八九年

付編 二

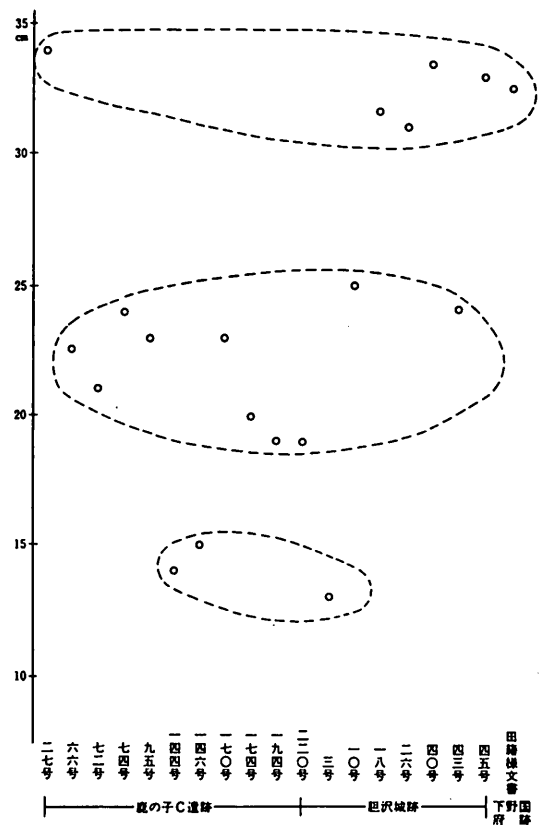
下神遺跡の墨書土器について

1 『厩』の墨書と則天文字

本遺跡の墨書土器で圧倒的な数(総数三四点)を誇る『厩』に注目してみ
たい。

『厩』の墨書土器はSB九七を中心として半径約二〇〇メートルの範囲
にわたって複数の遺構から出土している。最も古いものは第五期の遺構で
あるSB一四九からの出土であるが混入と考えられ、このほかは第六・七
期(九世紀中から後半)の遺構からの出土である。

この『厩』は通常の漢字とは理解できない。そこで、まず則天文字との
関連を考えてみたい。



漆液を入れた容器(曲物)の推定経

国立歴史民俗博物館教授 平川 南

周知のとおり、則天文字は唐の高宗の後であった則天武后(六二四〜七〇五)
が載初元年(六九〇)に独特の文字・十七文字を考案し、その使用を全国に
命じたものである。七〇五年の武后の没とともに中国ではその使用が禁ぜ
られた。我が国では正倉院にある慶雲4年(七〇七)書写の『王勃詩序』に
すでに使われているので、大宝の遣唐使(七〇四年帰国)によってもたらされ
たと考えられている。

こうした特殊な文字が地方にどのように広まってゆくのかを追い求める
ことは興味深い。それを探る格好の素材は、近年、膨大な出土量を誇る墨
書土器しかない。則天文字の地方への普及には、二つのルートが考えられ

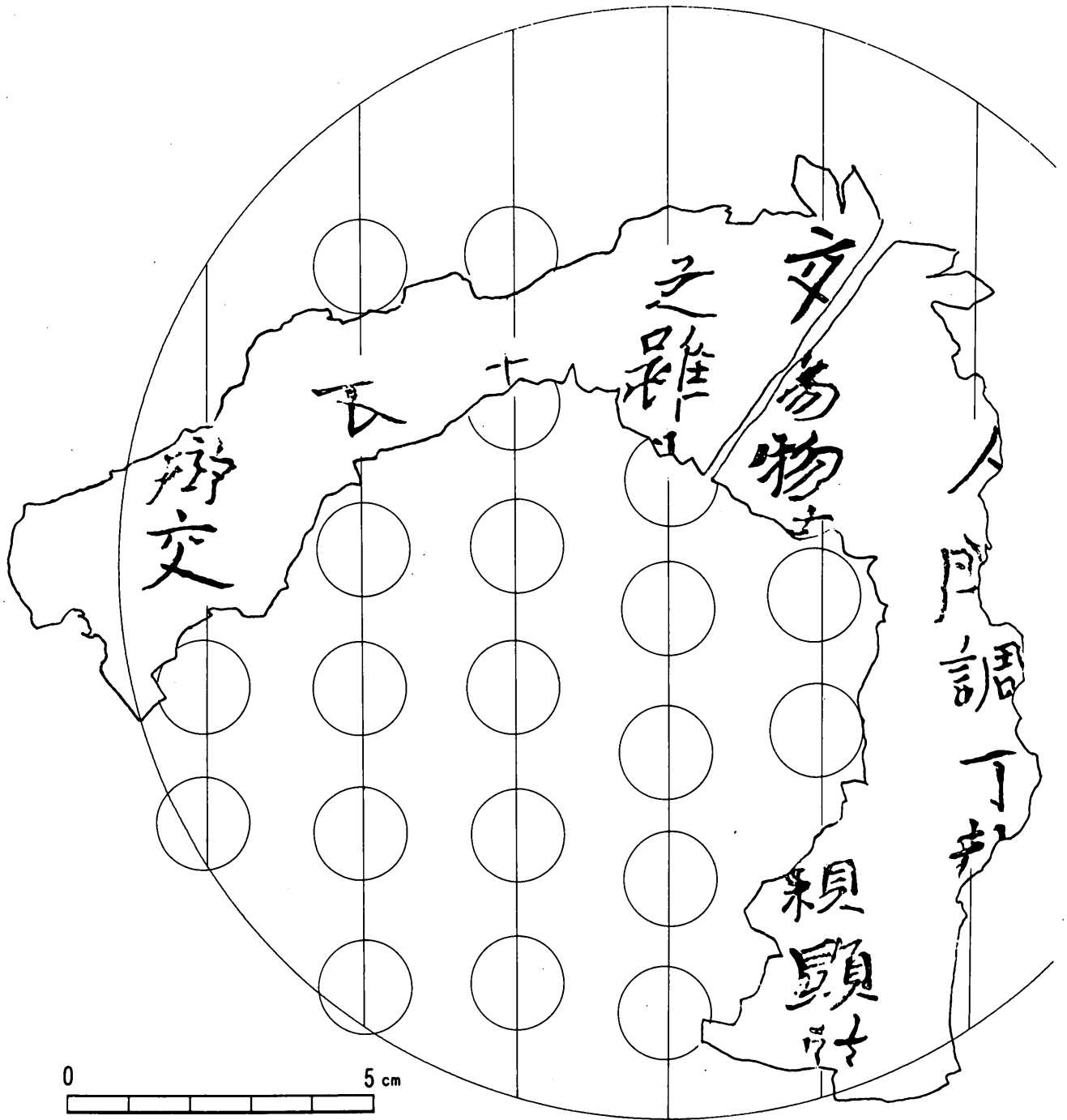


図1 SX30出漆紙文書実測図

×足雖□×

×□□×

×長□×

×□交□×

×□□×

四 内容

現状では文字すべて左文字で確認される。残存部分は文書のほぼ中央部十数字と考えられ、文書の書式および内容を掌握するまでにはいられない。

ただ、「調丁」および「交易物」という語の存在から推して、調の交易に関する文書とみなすことができよう。交易制は奈良時代末〜平安時代初期ころからしだいに顕著となった調庸の麿^カ悪・違期・未進という事態に対処するために積極的に実施されているのである。

いずれにしても本文書断簡については、あまりにも小破片のために文書内容を把握するまでにいたらない。しか

下神遺跡の漆紙文書について

国立歴史民俗博物館教授 平川 南

下神遺跡では三点の漆紙が出土している。出土遺構は区画溝Ⅰ・Ⅱ、S X三〇からの出土で、いずれもS B九七を中心とする建物群を区画する施設からの出土である。区画溝Ⅰ・Ⅱ出土の漆紙はいずれも細片でその痕跡をわずかにとどめる程度である。出土層位は第一層下部からの出土で、第七期の埋没に対応する。S X三〇（第六期）出土の漆紙は遺構のほぼ中央の第一層下部からの出土である。S X三〇は不整形な落ち込みであり園池的な遺構と考えられる。以下、三点の中で文字の確認されたS X三〇出土の漆紙について述べることにする。

一 現状と復原作業過程

現状ではほとんど粉々という表現がふさわしいくらいに破損している。したがって完全な復原は困難であるが、以下のような手順で復原を試みてみた。

- ① 破片のなかに折りたたんだ状態のものが数片認められることから、二つに折りたたんで投棄され、半円状に遺存したものと推定できる。
- ② これまで各地で出土した漆紙の推定径すなわち漆液を入れた容器の径はおおよそ、約一四センチ前後、二二センチ前後、三三センチ前後の小・中・大の三グループに大別されることが判明している（註一）。この点を参考に、本断簡の径を推定するならば、二つ折りの破片をもとにした直径の数値と全点から予測される大きさ（面積）は、おおよ

そ径約一八センチ（六寸）に相当すると判断できる。

- ③ 推定径約一八センチの円形の型紙を作り、さらにそれを二つ折りの状態にした半円としておく。その半円の直径部分に二つ折り状態の破片を並べ、半円内の余白部分においてその他の破片との接合を試みる。破片のなかには桶の周辺部に接していたと考えられる形状を呈しているものがあり、それは半円の縁辺部に置くことができる。

- ④ ③の作業の際、次の点を念頭に置きながら復原を進めた。

行間および各文字間隔を測定し、その想定のうちで文字および行の確認を行なう。また、正倉院文書を参考として、一紙の文書と径約一八センチの漆桶との関連を想定した。

- ⑤ 最後に半円を展開すると円形の蓋紙の現状と、その欠損部分が明らかとなる。

二 復原図（図1、PL九二）

本漆紙文書は現状ではすべて左文字で確認している。

三 釈文

人か
X □ □ □ 調丁 □ □ X

X 交易物 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ X

付
編

一 下神遺跡の漆紙文書について

国立歴史民俗博物館教授

平 川 南

二 下神遺跡の墨書土器について

〃

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 6

中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 6

—松本市内 その3—

下神遺跡

本文編

発行 平成2年3月31日発行

発行者 日本道路公団名古屋建設局

長野県教育委員会

(財)長野県埋蔵文化財センター

印刷 藤原印刷株式会社

